まんじ

No. 99

2006.2.1

まんじ第九十九号　目次

わたしたちは、スタインベルク三姉妹―よみがえった七十年まえの音色―……伊治哲…4
丹波栗……太田和貞…16
湯漕ぎのうた―アインシュタイン・照る日曇る日―…大和禎人…28
空風（一）……太田精一…30
是非に及ばぬ（二）……千坂精一…37
暗殺の叙事詩　二……島津隆子…51
地に堕ちた韓国の偶像……新井宏…63
「韓のくに紀行」をゆく……山田嘉久…69
報徳仕法と企業経営（一）……堀内永代…78
うどんげの花（その二）……三戸岡道夫…86
短歌二十首　アウトサイダー……曽根竣作…95
短歌　行雲流水（十二）……石黒修身…98
連詩「記念写真」より（十四行詩三題）……松下壽男…101
ハート・トウ・ハート第四話ア・ラブ・シュプリーム（前編）…松下壽男…102
古い物・遠い夢　第十一章　茶道具三昧……忠内正之…111
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…118
還暦からの考古学（五）玉の話（その4）……中山喬央…122
漢詩潮騒録（四十六）……鯨游海…133
撞木……編集子…137
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
……鈴木國男
……清水トム

わたしたちは、スタインベルク三姉妹

――よみがえった七十年まえの音色――

伊治　哲

一、わたしたちは、ドイツ生まれ

わたしが生まれてからもう八十年近くも経ってしまいました。

わたしは、一九二八年、ドイツ生まれのスタインベルク・ピアノ。人間でいえば今年七十七の喜寿を祝う歳です。しかし、わたしのように音を出すだけがとりえの楽器は、古ぼけてしまうと無用の長物になり果てて、誰からも見向きもされなくなってしまいます。わたしも例にもれず、一時は廃棄の運命を辿る寸前のところまでいきました。ところが、どういう巡り合わせか、わたしは今すっかり若返って昔の音色を取り戻したばかりか、華やかな舞台に立つことができるまでに復活させてもらうことができました。

そして、ここしばらく見向きもしてくれなかった音楽好きの人たちが、びっくりするほどわたしを褒めそやし、可愛がってくれるようになりました。わたしは今無上の喜びに浸っています。

ただひとつ、わたしに深い悲しみがあります。わたしには同じ頃ドイツで生まれた二人の姉妹がいるはずです。わたしたちは、昭和四年（一九二九年）、日本という遠い異国にはるばる渡ってきた三人姉妹なのです。

たしか神戸という日本の港に着いてから、三人がそれぞれ別の方角に別れてしまいました。姉は西へ、妹は東へと、離ればなれに連れ去られたことだけは覚えていますが、どこへ連れていかれたのかは今までずっと分りませんでした。わたしはといえば、港からピアノ搬送用の大きなトラックに乗せられて、山を越え谷を越え、ここ丹波の山並みの続く小さな田舎町に運ばれてきました。

それ以来八十年近くもの間、お互いになんの音沙汰もなく、三人姉妹それぞれに孤独な月日を過してきたのです。

七十余年もの昔にさかのぼって、まずはわたしのお話からお聞きください。

二、スタインベルクの祖先

わたしは、一九二八年（昭和三年）、ドイツ・ベルリンのスタインベルク社で生まれました。スタインベルク有限会社は、一九〇八年にベルリンに創設されたピアノ製造会社です。当時ドイツには百社を超えるピアノメーカーがありました。職人芸に秀でたドイツは、ピアノ製造の分野でもその品質は世界的に優れていたようで、スタインベルクはその中でもトップクラスと評され、ドイツ音楽の殿堂ともいわれるベルリン・フィルハーモニーにも納められました。しかし、ナチスの台頭を逃れて一九三六年イギリス・ロンドンに渡りましたが、一九四〇年に会社は清算を余儀なくされました。それまでの三十年余りの短い間に、アップライト・ピアノ、グランド・ピアノをそれぞれ三百台近く生み出しています。

いま、外国製ピアノといえば「スタインウエイ」といわれるくらい「スタインベルク」の名はすっかり影が薄くなってしまいました。しかしその「スタインウエイ」自体ももともとはドイツ人のピアノ製作家「スタインヴェーク」（英語名はスタインウエイ）が、一八五〇年にニューヨークに移住してピアノ製作を続け現在につながっているといわれます。同じドイツが発祥の地で、名前もよく似ていますから、ルーツは同根で、「ウエイ」から「ベルク」が枝分かれしたのではないかとも考えられます。なにぶん二〇世紀前半の両大戦の結果、工房や職人が焼失離散して史料が乏しいために、わたしたちの先祖はもちろん、今現在わたしたちの姉妹が世界でどれほど現存しているのかも確かめることができないのが残念です。

三、わたしが育った丹波の山々

さてわたし自身の行き先ですが、神戸の港から丹波の山道をゴトゴトと、何時間も車に揺られてやって来たのが、当時の京都府何鹿郡綾部町です。人口一万人をちょっと上回るくらいの、鄙びた田舎町でした。その町の最高学府、府立綾部高等女学校が、わたしが生涯を送ることになる職場となったのです。時は昭和四年（一九二九年）十月十日だったと記憶しています。

当時の綾部といえば、小高い山並みに囲まれたそれほど広くもない丹波盆地に、小さく区切られた田んぼがひしめくように山の裾までつながっています。今年は豊作だったのでしょうか。刈り取られたばかりの稲の束が稲木にかけられて、幾重にも重なりあって金色に波打っていました。その田畑の間に無数の桑の木が青々とした枝

を張っています。聞けばこのあたりでは養蚕が盛んで、この時期、蚕が秋繭を結ぶ頃でした。十月の十日前後は、ちょうど収獲を祝う秋祭りで賑わい、一年のうちで一番心の浮き立つ季節です。

しかし、農業と養蚕のこの町は決して裕福ではありません。農閑期の冬には近辺の寒天工場などに出稼ぎに出る家もたくさんあります。集落の家々も瓦葺きの家は数えるほどで、ほとんどの家は茅か藁で屋根を覆っていました。わたしが生まれてからほんのわずかのあいだ垣間見た、色とりどりの瓦屋根が散在する、広々としたドイツの風景からは想像もできないほどの世界でした。

そのうえ、わたしがこの町にやって来た一九二九年は、ニューヨーク・ウオール街の株式市場で株が大暴落し、世界大恐慌の波が日本にも押し寄せてきた年です。

そんな時代に、この片田舎で、しかもドイツから、わたしのようなこんな大きな買い物をよくもしてくれたものだと驚いてしまいます。

実は前年の昭和三年（一九二八年）十一月に、昭和天皇の即位大礼式が行われました。その御大典を記念して、女学校の校友会、同窓会、父兄会や有志たちが挙って寄付金を拠出し、購入寄贈してくれたのだそうです。わたしの前屋根（ピアノの蓋）内側に「寄贈・昭和三年御大典記念・綾部高女校友会・同窓会・有志」と、金文字で刻字されていたので間違いありません。

同校の創立百周年記念誌によれば、募金の他に購買部の利益金を合わせ約三千円をわたしのために支出してくれたそうです。お金のことはよく分りませんが、当時の三千円は今のお金で一千万円以上にもなるでしょうか。前にお話したように当時の厳しい世の中、しかもこの貧しい田舎町で、在校生や卒業生それに父兄や有志までもが、これだけの大金を寄付するのは容易なことではなかったと思います。当時、幼い子供たちがお祭りなどにもらえるお小遣いは、せいぜい五銭か多くても十銭くらいだったのですから。本当に嬉しくまたもったいなく思います。心から感謝しています。

四、女学校に納まった花嫁

さて、わたしの住みかとなる女学校は、街並みが一望に見渡せる高台にありました。音楽を学ぶには絶好の環境です。わたしは本校舎二階の大講堂のステージの上に鎮座することになりました。

当時のことを覚えている人はもう見当りません。おぼろげながらわたしの記憶を辿りますと、わたしがこの学校に納められたあと、早速、ピアノ・松村静子、チェロ・伊達三郎、ソプラノ・小堀千代子など有名な先生を招いてピアノ開きが盛大に催されました。わたしの購入に奔走した音楽担当の先生も、わたしの音色に合わせてすばらしいソプラノ独唱をしてくれました。

わたしが外国からこの田舎町の学校に〝輿入れ〟したことは、学校はもちろん町全体にとっても、美しい花嫁を迎えたように大きな喜びであり、また誇りでもあったようです。なにぶんその頃の田舎の小学校では、国産のアップライト・ピアノでさえ備えつけることは至難の業でした。ほとんどの学校はオルガンの音色に親しんでいたのです。そんな中で、グランド・ピアノ、しかも世界有数のドイツ製なのですから、その喜びようは尋常ではなかったようです。こんなことをわたしの口からいうのは、ちょっと面映ゆいのですが……。

その後音楽の先生は何代も交替されましたが、先生方はみんなわたしをとても丁寧に扱ってくれました。いつも黒いカバーをすっぽりとかぶせ、鍵盤蓋に鍵をかけて、まるで宝物のように大切にしてくれました。

いつもの音楽の授業はもちろん音楽室で、これまでの古いアップライト・ピアノを使っていました。わたしに手を触れることができるのは通常は音楽担当の先生だけ。生徒たちは特別の日を除いてそっと触ることさえ禁じられていました。したがって、わたしの出番は、学校の創立記念日や入学式、卒業式、そして正月元旦、紀元節、天長節や明治節など毎年の祝日式典の折に限られます。

「蛍のひかり窓の雪、書よむつき日かさねつつ……」

「仰げば尊しわが師の恩、教えの庭にもはや幾とせ…

…」

の歌には、みんなが涙ぐみました。

「年のはじめのためしとて、終りなき世のめでたさを……」（一月一日）

「雲にそびゆる高千穂の、高峰おろしに草も木も……」（紀元節）

「今日の吉き日は大君の、生まれたまいし吉き日なり……」（天長節）

など、戦前生まれの皆さまにはきっと耳の奥に残っていることでしょう。わたしもその頃のメロディーを思いだすたびに、涙が出るほどの懐かしさを覚えます。

五、心に残る音楽会

いや、わたしにとってもっと大切な日があります。それは毎年三月六日、地久節の日に開かれる全校音楽会です。この日ばかりは、出演の生徒は大手をふってわたしの音色を奏でてくれます。

音楽会で、どんな先生や女生徒たちが、どんな曲を弾いてくれたか、遠い昔のことですからすっかり忘れてしまいましたが、ひとつだけうっすらと思い出が残っています。

それは、昭和十六年（一九四一年）三月六日、大講堂での地久節奉祝・全校音楽会の時のことです。

当時音楽を担当されていたのは、I先生という女の先

生でした。この女学校から東京音楽学校に進み、卒業後音楽担当の教師として母校に奉職された方です。面長で色白、銀縁のめがねをかけ、いつも着物に紺の袴を胸高にしめて、楽譜を小脇にかかえ颯爽と歩く先生でした。理知的でしかも心根のやさしい先生でした。しかし授業になると厳しい眼差しがめがねの奥からキラッと光る怖い先生でもありました。生徒たちは一瞬キリッと身を引き締めたものです。

この日の音楽会の運営を取り仕切ったのもI先生です。音楽会の演目は、独唱あり、二部・三部の合唱あり、そしてもちろんピアノ、オルガンの独奏や連弾も組まれていました。

当時は日中戦争の真っ只中、アメリカとの雲行きも急を告げていた頃です。合唱曲の中には「海ゆかば」「露営の夢」などの戦時歌曲も歌われました。しかし大半は女学生らしく「この道」「サンタ・ルチア」「ラ・パロマ」「叱られて」「からたちの花」「早春賦」など、今から思うと昔の懐かしい歌声が会場いっぱいにこだましたことを思い出します。

客演として地元の小学校や幼稚園児による斉唱や唱歌遊戯の出演もありましたが、とりわけわたしの胸に響いたのは、町はずれのI小学校・尋常科五年生、A君のピアノ独奏でした。女子生徒ばかりのなかでただ一人、男子小学生がヨセフロウ作曲「庭の千草」、ベートーヴェン作曲「メヌエット」の二曲を弾いたのです。

女生徒のピアノは、例えば四年生のTさんが弾いた「乙女の祈り」や五年生のMさんの「アルプスの鐘」のように、年長だけあってとても優雅に情感こめてきれいに弾きこなしましたが、彼のピアノはちょっとしたミスはありましたが、しっかりしたタッチで力強く、わたしのもっている音色を充分に弾き出してくれました。幼くてもやはり男の子だなあと、たのもしく嬉しく思った印象が残っています。

しかしなにゆえか彼はその後わたしの前へ登壇することはありませんでした。ひょっとして、日に日に戦時色の濃くなった時代、「男の子がピアノなんて」という世間の声に、ピアノへのA君の情熱がかき消されていったのではないかと思います。折角わたしの音色に親しんでくれたのに、とても残念でなりません。でもいつかはきっと、この時の思い出がよみがえって、再びピアノに向かう日がくるのではないかと、ひそかに期待していました。

六、忘れられていくわたし

その年の暮れに、日本はアメリカとの戦争に踏み込んでしまいました。なぜこんな恐ろしい戦争をはじめたのか、わたしにはさっぱり分りませんでした。この地方では、しばらくはこの世のどこで鉄砲の打ち合いが始まっているのか、想像もできないくらいいつもと変らない穏やかな日々が続いていました。しかし敵の飛行機が日本本土を爆撃するようになってから、急に周囲が慌ただしく変っていきました。女学生の姿が、セーラー服からモンペ姿になりました。学校へもってくるお弁当も、サツマイモや菜っ葉の入った弁当に変りました。運動場では長い棒を抱えて竹槍訓練です。女の子が男の真似をするなんてと、わたしは苦々しく垣間見ていました。音楽の授業は最小限に絞られ、わたしの出番はほとんどありません。わたしは大変淋しい時期を過しましたが、それよりもこの頃の女学生は本当にかわいそうだったと思います。

こうして楽しかった思い出、苦しかった思い出を毎年胸に刻み込みながら、わたしは一年一年歳を重ねてきました。

わたしが十七歳の昭和二十年（一九四五年）の夏、やっと戦争が終わり、昔の平穏を取り戻せるかにみえたのですがそれも束の間、思いもかけず学校が大きな変化に見舞われました。昭和二十三、四年頃に吹き荒れた学制改革です。これまでの高等女学校がなくなって、新制の高等学校になるというのです。

〝女の園〟として多くの淑女を育ててきた綾部高女が、一瞬にして新制綾部高等学校に生まれ変わったうえ、あろうことか、男女共学になってしまいました。わたしがかって接したことのない荒くれた男子生徒たちが、しとやかだった学び舎を蹂躙するところとなったのです。

校内の雰囲気もこれを機にすっかり変ってしまいました。これまでのように全校生徒が音楽の授業を受け、音楽会で全員が出演するようなこともなくなり、音楽を選択するわずかな生徒以外は、ピアノの音色に触れる機会はほとんどなくなりました。

わたしの存在感もすっかり薄れて、ひとり孤独をかこつ身の上となってしまいました。ピアノを開いて鍵盤をたたいてくれればくれるほど、わたしも懸命に美しい音色でそれに応えるのですが、滅多に開けてももらえず弾いてもくれないのでは、足腰が痛み、張りつめた弦も弛んだり錆がついたりしてしまいます。本当に淋しく悲しい思いのなかで、瞬く間に二十年近い月日が過ぎ去っていきました。

昭和四十年頃でしたか、山の上の校舎から新築された校舎に移転することになりました。古くなって廊下や階段の床板も磨り減った昔風の木造校舎ではありましたが、懐かしい思い出がいっぱい詰まった校舎を去るのは忍び難いことでした。とりわけ、田んぼのなかの新校舎は眺望もきかず、学校という風格も地に落ちたようにさえ感じられました。しかし仕方ありません。わたしも一緒に移り住むことになりました。

ところがどういうことでしょう。それから十五、六年も経ったころ、このピアノも相当に歳をとったのでそろそろ引退させてはどうかということになったのです。早いものでこの学校に迎えられてから五十年近くにもなりますが、わたし自身はまだまだ現役で頑張るつもりでした。それにもかかわらずわたしは音楽準備室とかいう薄暗い小さな部屋に押し込められてしまったのです。これまでの華やかな講堂の檜舞台から、一転して奈落の底への転落です。落魄の身とはこういうことをいうのでしょうか。わたしはもう息の根を絶たれるほどの苦しみに喘ぎました。

それ以来ずっと外に出されることもなく、まして誰かの手に触れられることもなく、賑やかな生徒たちの歓声をよそに、小さな部屋で埃をかぶったまま、静かに眠り続けてきました。

それにつけても、静かな眠りのなかで夢に浮かぶのはもうなん十年も会っていない姉や妹のことです。どこでどうしているのか、お互いに歳をとって、わたしのように誰からも相手にされなくなったのではないか、暗い部屋に閉じ込められているのではないかと、哀れと寂しさが胸に迫ってなかなか寝つかれないことが多くなりました。

ところで、このわたしというピアノを再度復活させるために、かなりの修復作業が必要となります。寄る年波には勝てぬうえに、長い間埃をかぶって放置されてきたのですから、からだの至るところに綻びが目立っています。

まず外観は、鍵盤蓋も大屋根も塗装が剥がれ、ところどころ下地の白い木地が露出しています。内部の鉄骨自体はさすがにしっかりした鋳上がりが保持されていますが、弦に錆が浮き上がり低音部の弛みが目立ちます。ピアノの音色を印象づけるハンマー部分は、フェルトのヘッドが磨耗し、色もくすんだ白色に変色しています。また、鍵盤は白鍵の象牙板が黄色く変色し、爪が反り上がっていますし、ペダルも一部作動しにくくなっています。これらの損傷疲労のほかにも、取付け金具や飾りモールなど、ほとんどの部材を修理するか取り替えなければなりません。

修復費用の調達もからんで、事は容易には進捗しません。空しく時間を空費している間に、かれこれ六年近く経ってしまいましたが、ようやく修復に着手する時がきました。平成十二年（二〇〇〇年）の学校創立百周年を前にして、先ほど触れました昭和十六年の音楽会で「乙女の祈り」を弾いた当時女学校四年生だったTさんやその同級生たちが「この貴重なピアノをこのまま眠らせておくのはもったいない」と声を上げたのです。

その声をきっかけに修復計画は具体的に実行に移されました。わたしは腫れ物にさわるような慎重さで、大切に浜松のピアノ工場に運ばれました。バラバラに解体されて一時はどうなることか心配しましたが、そのあと錆び抜き、研磨、部品の取り替え、弦の張り替え、塗装直し、組み立てなど、半年間の入念な工程を経て、平成十二年六月晴れて再生復元されました。われながら見まがうばかりに、ワイン色のマホガニー材に包まれた優雅な姿に生まれ変ったのです。わたしは遂に嬉しい晴れの日を迎えました。

生まれ変ったわたしが晴れて母校に帰ったとき、音楽担当のY先生は「まろやかで伸びがあり、小さな音は繊細、強い音には深みがある。弾いていて実に心地よい」と絶賛してくれました。わたしはまるでお色直しをした花嫁のような初々しい気持で、再び全校生徒の前に華やいだ姿を見せました。わたしのピアノ人生、最良の日とでもいいましょうか。

わたしが母校に戻ってほどなく、Tさんたちが呼びかけて修復完成記念ミニ・ピアノコンサートが催されました。みなさんそれぞれに歳をとられてもう八十歳近くになりますが、ピアノに打ち込んだだけあって背筋がピンと伸び、顔もつややかで、元気で小柄なおばあちゃんたちです。もちろんTさんは「乙女の祈り」を弾きました。Yさんの「ソナチネ第一番」、Mさんの「アルプスの鐘」、Aさんの「紡ぎ歌」など、まるで六十年前の音楽会の再

七、奇跡の復活へ

それはそれは長い眠りでした。とあるとき、突然わたしを覆っているカバーを上げて、鍵盤蓋を開けてくれる人が現れたのです。この学校の校歌を作曲した老H先生でした。先生がなん十年ぶりかで来校され、昔、新校歌の発表会で伴奏された折のことを思い出して、準備室のわたしを見つけ出し、そっと鍵盤に指を触れられたのです。わたしはいっぺんに目を醒まし、思わずボーンという深い音色を出しました。先生はちょっと驚いた様子で、数小節の試し弾きをしました。わたしは、たまりたまった寂しさを吐き出すようにボーン、ボーンと精一杯昔の音色で応えました。わたしは、わたしの存在をなんとしても先生に訴えたかったのです。

しばらくして、先生は静かに鍵盤蓋を閉めながら「これは良いピアノだ。今なら元の音になる。大切にしてください」とおっしゃったのです。わたしは飛び上がらんばかりの嬉しさを隠せませんでした。平成五年（一九九三年）のことです。

H先生の一言で、わたしは再生復活の絶好のチャンスを掴めそうになったのです。「わたしはスタインベルクです！」と大声で叫びたいくらい嬉しくて嬉しくて夜も眠れないほど興奮しました。

現です。みんな恥かしそうにしながらも、満面に笑みを浮かべての熱演でした。わたしも身も心も昔に帰って、力いっぱい新しい音色を膨らませました。一期一会の喜びにこれほど浸ったことはありません。華やかで晴れやかで楽しいコンサートでした。

八、もうひとつの一期一会

その後、思いもしない巡り合わせがやってきました。しばらくあとの話になりますが、あの六十年前の音楽会で、ただひとり男の子がピアノ独奏をしたA君とのめぐり合いが果たせそうなのです。こんないきさつです。

平成十六年（二〇〇四年）夏のお盆の頃です。地元の新聞が「ふるさとを想う」というテーマで特集を組んだのですが、そのなかに、今は横浜に住むA君が「ピアノに辿る思い出」という一文を寄稿しました。彼は次のように往時を懐かしんでいます。

「今は昔、私が小学校五年生、昭和十六年ごろの話である。本町から上野町へ急な登り坂を上り詰めたところに、昔の府立綾部高等女学校があった。週にいちど土曜日の放課後に女学校のI先生のもとへピアノレッスンに通った。音楽室でのレッスン、まわりにはいつも姉のような女生徒たちが集まってきた。いつもはやさしいI先生も、ピアノの指導は厳しかった。冬の寒い日など、指先のあかぎれから血が滲んで鍵盤を赤く染めたこともあった。そのうちに、恒例の音楽祭で私ひとり、異分子が客演する機会を与えられた。たしか「庭の千草」と他一曲を弾いたが、緊張のあまり最初の出だしで失敗した。すぐに気を取り戻しはしたが……。今にして思えば、わたしにとっては珠玉の思い出だ。……しかしその後戦争があった。戦後の混乱と苦難もあった。六十年が瞬く間に過ぎ去って、既にI先生は亡い。懐かしくもまた楽しかった思い出を辿りながら、今ふたたびピアノに向き合っているのだが……」

たまたまこれを読んだTさんが、六十余年前の記憶をよみがえらせたのです。Tさんの手許には当時の音楽会のプログラムが大切に保存されていました。まぎれもなくA君の名前と演奏した曲目がはっきりと載っていました。それをきっかけにTさんとA君との間で手紙のやりとりが始まりました。当時十六歳だったTさんは八十歳、十一歳だったA君ももう七十五歳、二人の老男女が昔の記憶を辿って青春を取り戻した瞬間でした。

もちろん、わたしスタインベルクの修復がかなえられたこともA君に知らされました。彼は、そんな立派なピアノで演奏させてもらったことに今さらながら驚き、感激していたそうです。六十歳になって再びピアノを再開したというA君に、生まれかわったわたしの鍵盤に触れてもらえる日がいつやってくるかと、首を長くして待っています。

九、見つかった！姉と妹

さてわたしの思い出話ばかりになってしまいました。話は前後しますが、わたしの心からいつも拭うことができなかったのは、姉妹二人の消息です。

昭和四年に神戸の港から西へ東へ生き別れになったわたしたち三人姉妹も、今や優に七十歳をこえていいおばあさんです。わたしはこれまでお話したように、幸いにも周囲の人々に助けられてすっかり若返りましたが、姉と妹は変わりなく元気で生き長らえているのでしょうか。七十年のあいだわたしの小さな胸を痛めつづけてきたのは、実はそのことでした。

ところが、わたしの修復が終ったあとの平成十三年の頃、二人の姉妹が時を同じくして見つかったのです。

姉は岡山の政田小学校で、妹は長野の八千穂中学校で健在でした。三姉妹とも、ピアノの本体正面に「STEINBERG・BERLIN」、そして同じように「昭和三年・御大典記念」の文字が残っていました。なんという奇遇でしょう。これでわたしたち三人のDNAが完全に一致したのです。

姉妹というのは奇しくも同じ運命を辿るものなのでしょうか。偶然というにはあまりにも不思議な人生航路、いや〝ピアノ航路〟でした。

姉はわたしと同じように、老朽化のため昭和五十七年に廃棄処分となり、政田地区の民俗資料館に収納されたまま埃をかぶっていたそうです。資料館の新築のため収納品を調査するなかで古いピアノの存在が浮かび上がり、スタインベルク・ピアノについて調査を始めた政田小学校が、綾部高校のホームページに同種同型のピアノがあることを発見しました。早速校長先生たちが、ひと足先に修復したわたしを視察するためわざわざ綾部を訪ねてくれました。「昭和三年御大典記念」という文字、「STEINBERG」という金文字に目は釘づけになりました。さらにすっかり新しくなったピアノを見て先生たちは二度びっくり。政田も綾部に続こうと思い立ったばかりではなく、両方の学校と地域が交流を深めようというところまで話が弾みました。

その後、政田小学校をはじめ民族資料館、連合町内会、PTAなど、地域ぐるみの修復活用委員会を立ち上げ、綿密な修復計画のもとに平成十三年の夏から八ヶ月かけての入念な修復作業を経て、新生スタインベルクに生まれ変わったそうです。もちろん修復記念演奏会を開き、地元出身のピアニスト・岩崎淑、チェリスト・岩崎洸の姉弟の両先生が熱演されたそうです。先生は「それぞれの音が鍵盤の上で囁きあい、ピアノから天上へ天使が舞い上がっていくようだ」と絶賛されたと聞きました。

一方、長野の妹のいきさつは次のとおりです。「最近村誌の編纂作業を進めるなかでこのスタインベルク・ピアノの素性が分りました。七十年余り前に地元の篤志家によって小学校に寄贈されたものだったのです。この地方は土地が少なく雪の多い村で、小学校を卒業すると次男、三男は外へでていくしかなかった。そのため『頭に耕地を作れ』といって地域ぐるみで教育に力を入れた。ピアノもその証しだった。しかしそのピアノも、今では茶色のボディはくすみ、内部は錆が進んで、引っ張り出そうとするとかっての名器も悲鳴のようなきしみ声を上げる。しかし鍵盤をたたくとさすがに優しい音が響いて驚いた」と村誌編纂担当の方が語ったそうです。

八千穂中学校の体育館の片隅にひっそりと置かれたままになっていたピアノが、綾部、政田と同じであることが政田小学校の問いかけで分りました。二人の姉に倣って、できるだけ早く修復に踏み切ると言っています。そしていつの日か三姉妹で競演できることを夢みているそうです。

なかにはこんな話も伝わってきました。岡山の姉の話です。

修復費用の募金を始めたころ、岡山の地方新聞が「よみがえれ！スタインベルク」という特集記事を掲載しました。そのなかに、昭和十八年頃から約一年間、政田小学校の代用教員として音楽の授業を受け持ち、こよなくスタインベルクを愛しながら徴兵されて戦地に赴き、終戦まぎわに戦死されたY先生の思い出を、歳老いた教え子たちが口々に語っています。「憧れの先生でした」「ピアノを弾いていない時でも、自然に指が動いていた」「合唱団を組んで陸軍病院へ慰問にいった」「全校生徒のお別れ会の最後に、先生がひとりでピアノを弾きながら、涙も見せず朗々と『荒城の月』を歌われた」など、昨日のことのようにY先生を偲ぶ声が綴られていました。「六十年近くも昔の思い出がよみがえり、悲しくもまた懐かしい想いに涙しています」という姉の声が聞こえてくるようです。

十、邂逅への夢

長野の妹も、はるかに耳に入ってくる二人の姉の物語を風の便りに聞いて、きっと胸を震わせているのではないでしょうか。一日も早く修復を終えて、新しい装いをわたしたちに見せてください。

そのあかつきには、新生スタインベルク三姉妹がともに手を取り合って積もる思い出話を語り合いましょう。そして、七十余年ぶりに、三人のピアニストの手とわたしたち三つの音色で、懐かしい曲を奏でましょう。

「うさぎ追いしかの山、こぶなつりしかの川……」にしましょうか、「この道はいつかきた道……」にしましょうか、いや、「夕焼け小焼けの赤とんぼ……」もいいですね。

昭和の初めにドイツに生まれ、はるばる海をこえて渡ってきた、日本にたった三台しかないわたしたちスタインベルク・ピアノ。政田、綾部、八千穂と遠く離ればなれに、七十余年の風雪に耐えて生き抜いてきました。

それぞれに異なる自然と世の中の変化のなかで、楽しいことも悲しいこともありました。しかし地域の人々が次代を担う子供たちに注いだ熱いまなざしを、三姉妹ともに同じ思いで強く受けとめてきたといえましょう。わたしたちがそのために少しでもお役に立つことができたとしたら、これほど嬉しいことはありません。

八十年近い歳月を経て、期せずして三人とも新しく生まれ変わり、これから再び真新しい音の響きで人々の心を共鳴させることができれば、この上もない幸せと思っています。

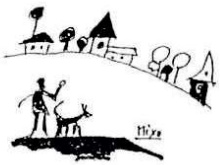
なにはともあれ、わたしたちをここまで育んでくださった方々に導かれて、再び三人揃って美しい音色をよみがえらせる……夢のようなその日がくるのを、一日千秋の思いで待ちわびながら、ひとまずこの物語の筆を擱くことといたします。

（２００５．12．10．記）

参考図書

「スタインベルク・ピアノ修復の記録」
岡山県政田小学校修復活用委員会編
（05．3．11刊）

「スタインウエイ戦争」
高木　裕・大山真人共著
（洋泉社　04．8．2．刊）



丹波栗

太田和貞

弥兵衛は力のない咳をした。微熱が続き、顔がほてっていた。

丁稚たちに聞えないように、布団を頭から被って息をつめた。喉の奥からせりあがってくる咳を無理に押し込めようとした。息が苦しくなって布団から顔を出した途端に、コンコンと軽い咳が続けて出てきた。

「番頭さん、おかぜはいかがですか？　今からお店に出させていただきます」

丁稚頭（でっちがしら）の紋蔵の声がした。

「ありがとう。大分よくなったので、あしたはお店に出られると思います。わたしも旦那様にご挨拶しますが、お前からもよろしく申しあげておいてください」

「承知しました。それでは、お店に出ます」

丁稚たち七人が紋蔵にならって廊下に両手をついて辞儀をしたあと、足音を忍ばせて階段を降りていった。

番頭の弥兵衛は二階の六畳に部屋を貰い、その隣りの六畳の二部屋に八人の丁稚が寝起きしていた。

（いずれわたしのあとをつぐのはあの紋蔵だろうな）

弥兵衛はぼんやりと天井を見上げながら、そう思った。

紋蔵を丁稚頭に推薦したのは弥兵衛だった。呉服店丹波屋の主人弥左衛門に、

「新しい丁稚頭は誰にしようか？」

と尋ねられたとき、弥兵衛は即座に、

「紋蔵がよろしいかと思います」と答えた。

「紋蔵ねえ。ちょっと線がほそい所がありますが、番頭さんの推薦もあることだし、紋蔵に決めましょう」

弥左衛門は弥兵衛の顔を見ながら笑った。

（旦那様も紋蔵と内心ではお決めになっていたのだ）

と弥兵衛は納得した。

その紋蔵が手代になり、番頭になることを想像するこ

とは、今の弥兵衛にとって心おだやかではなかった。

（番頭になり暖簾分けして貰って、江戸で店を持つ）

弥兵衛が十才で丹波屋に奉公に上がった日からの望みだった。

奉公に上がった日、弥兵衛は主人の弥左衛門から、

「きょうからお前の名前は源蔵です。源蔵と呼ばれたらへーいとはっきりと返事をしなさい」ときびしく申し渡された。

（おれの名前は茂七と言うのだけれど……）と不満に思ったが、弥左衛門に言われた通り、「源蔵！」と呼ばれる度に、「へーい！」と元気よく返事をした。

「源蔵の返事は元気がよくて、気持ちがいい」と手代や番頭から褒められていた。

「番頭さん、お加減はいかがですか？」

廊下でお内儀さんの声がして、弥兵衛は慌てた。

「へい、へい。ちょっとお待ちください」

弥兵衛は布団と寝巻きを押入に放り込み、手早く着物を着て、帯を締め、紺の前掛けを掛けた。

「へい、部屋は散らかっておりますので、廊下でご挨拶申しあげますのをお赦しください」

弥兵衛は素早く廊下に出て、後ろ手で障子を閉めた。

「お早うございます。かぜのため勝手をいたしまして申し訳ありません」

弥兵衛は廊下に平伏した。

「丁稚頭から番頭さんはあすからお店に出られると聞いて安堵しました。お店の忙しさにかまけて、一回も見舞にこなかったのでお詫びかたがた番頭さんの顔を見にきました。顔色もいいし、安心しました。旦那様からひごろの疲れが出たのであろうから、きょうはゆっくり休んでおくれと言いつかってきました」

おりくは自分も廊下に座って弥兵衛の顔を真正面から見て言った。

「お内儀さんにこのようにお見舞をいただいた上に、旦那様からお言葉をいただいて、弥兵衛はありがたさに体が震えてきました」

「では、お大事にね。あしたは元気な顔を見せておくれ。弥兵衛はこの丹波屋にとって大事なお人ですからね。俄雨のとき、弥兵衛が屋号入りの傘の貸し出しを考えつかなかったら丹波屋は潰れていたでしょうよ」

おりくはそう言って階段を降りていった。弥兵衛はお内儀さんの足音が聞こえなくなってから顔を上げた。

「顔色もいいし、安心しました」というお内儀さんのやさしい言葉が弥兵衛の心を突き刺した。顔が赤味を帯びているのは微熱のためだった。

「あしたはお店に出られると思います」と言ったもののお店に出られる自信は無かった。

軽い咳と微熱、それに寝汗をかくことが弥兵衛の心を

暗くしていた。
二日前に、懐紙に拭き取った痰に真赤な血が混じっていた。咳が出る度に、痰を拭き取った懐紙を広げて見ると真赤な血があった。
（この俺も到頭、労咳になったか……）
そんな諦めに似た思いが弥兵衛をいっそうみじめにした。
父は三十二才のとき、労咳で死んだ。父が亡くなったとき、茂七は十才で、妹は八才だった。母と兄妹三人家族の口べらしのため、茂七は江戸に奉公に出てきた。
「茂七！　体には気を付けるんだよ」
江戸にいく朝、母親はくどくどと茂七に言い聞かせた。それが何を意味しているのか茂七にも分かっていた。
村はずれの篠崎街道まで送っていくという母親を振り切って、茂七は駈け出した。
「茂七！　茂七！」と呼ぶ母親の声も角の林を曲がると聞こえなくなった。
茂七は息を整えるために、ゆっくり歩いた。奉公にはゆきたくなかった。自分がいなくなれば母と妹がどんなに心細いか、茂七には分かっていた。これまで茂七がこなしてきた力仕事が全部、母親と幼い妹のふたりに掛かっていくのだ。
「あんちゃ～ん！」妹の声に茂七は振り返った。顔を真赤にして妹の七重が駈けてくるのが見えた。
「あんちゃん！」七重は茂七の胸に飛び込んできた。
「おっかぁを頼んだぞ」と七重の耳元で茂七は囁いた。
七重は体全体で返事をした。
「林まで送ってやりてえが、みなで江戸に奉公にでかけるから、それはできねえ。ここで見送ってやるから早くおっかあのところへ帰れ！」
茂七の言葉に、七重はこくんとうなづいた。
「あんちゃん、これあげる」
七重は右手を開いて茂七に見せた。右手の掌に、握りしめられて汗をかいた山栗がテラテラと暗茶褐色に輝いて一つ乗っていた。
「ありがとう！」茂七は七重の小さな体を抱いた。
「さあ、早く帰れ！」と七重の背中を押した。七重は弾むように駈けていった。
角の林を曲がるとき、七重は振り返って手を振った。茂七も手を振った。
仲間と江戸に向って歩きだした茂七は七重の山栗をぎゅっと握り締めていた。その目は、（番頭さんになって、この村に帰ってくる）との決意をみなぎらせていた。
その年、丹波屋に入った丁稚は五人だった。しかし、十五日間の見習期間が終ったときには茂七と長作の二人に減っていた。三人は奉公のつらさに負けて、何時の間にか、姿を消していた。

見習期間が終った十六日目の朝、丹波屋の主人弥左衛門は台所に奉公人を集めて茂七たちの名前を披露した。
「茂七はきょうから源蔵、長作は平蔵とわしが名付けました。それでは、ふたりの名前を呼びますから、元気に返事をしなさい」
ここで弥左衛門は一呼吸置いて、「源蔵！」と大きな声で呼んだ。
「へーい！」茂七は弥左衛門の声よりさらに大きな声で返事をしたが、（おれの名前は茂七なんだ）とちょっと不満だった。
「平蔵！」「へーい！」長作は源蔵の声よりも大きな声で返事をした。
「いや、結構、結構。番頭さんや手代さんたちの指導がゆき届いていて気持ちがいい。では、うちの大黒柱の、番頭さんからみなを紹介して貰いましょう」
佐兵衛から改めて二人の手代、十二人の丁稚の紹介があったあと、下男二人と台所女中と奥女中三人の紹介があった。
（番頭さんの佐兵衛さん、手代の勘七さんと惣助さん。丁稚頭の伝蔵さん）と心の中で覚えようと努力したが、数が多すぎて覚え切れなかった。しかし、女中のおつぎさん、おこまさん、およねさんの名前はすぐ頭に入った。
この「名改之事（なあらためのこと）」が終ろうとしたとき、奥から誰かが台所に入ってきた。大きな頭に角を伸ばし、顔は真っ白で真赤な口の奥は真黒だった。源蔵は思わず顔を伏せた。
「うちの弁天さまを引き合わせるのを忘れていました。お内儀さんのおりくです。みんなに見られるので、きっとお化粧に手間取ったのでしょう。そんな訳だから、遅れたことは赦して欲しい」
弥左衛門は笑いながらお内儀さんのおりくを紹介した。
（あの方がお内儀さんなのか？）源蔵はまじまじとお内儀さんの顔を見詰めた。台所に入ってきたお内儀さんを源蔵が化物と思ったのも無理は無かった。
丸髷に結った髪に差したかんざしは角に見えた。眉を剃り落した顔に白粉をつけ、紅を差した口の奥が黒かったので、源蔵は怖かった。
（お内儀さんはおはぐろを付けていたんだ）
訳が分かればなんでもなかった。（化物が出た！）と体をすくめた馬鹿さ加減に源蔵の顔に笑いが浮んだ。
「新しい丁稚さんはどちらでしょうか？」
お内儀さんが弥左衛門に聞いた。
「その二人だ。お前たちお内儀さんに挨拶しなさい」
「へい。わたしは源蔵です。よろしくお願い申し上げます」
そう言って、源蔵は両手をついて辞儀をした。
「わたしは平蔵です。十才です」
「はい。よくご挨拶ができました。わたしには八才に

なる娘がおります。遊び相手になってくれたら娘がどんなに喜ぶことでしょう。ここで旦那様とみなにお断りを言って置きましょう。ときどき、源蔵と平蔵に娘の遊び相手になって貰います」

「お前が望むなら」と弥左衛門は小さな声で言い、番頭の佐兵衛は、「承知しました」と頭を下げた。

「今、見た通り旦那様と番頭さんのお許しをいただきました。奥女中のおよねを迎えによこしますので奥に遊びにいらっしゃい」

源蔵と平蔵の前にかがんだお内儀さんから白粉のいい香りがしてきて、源蔵は鼻の奥がこそばゆかった。

その夜、弥左衛門はおりくに言った。

「お前は本当に丁稚を見る目があるなあ。わしも源蔵と平蔵の働き振りを見ていて、お玉の遊び相手にいいと思っていた。しかし、先輩たちのねたみもあることなので迷っていた。それをふたりの挨拶を聞いただけで、お玉の遊び相手にいいと決めたのは、さすがだ。お玉の遊び相手だけではなく、あの子たちは今に丹波屋を背負ってくれると思います」

弥左衛門は機嫌がよかった。

「わたしはあのふたりの立派な挨拶に感心したのではありません。可愛いい顔をしているので、お玉の遊び相手にいいと思っただけですよ。お玉はわたしに似て、結構面喰いなんですよ。あした源蔵か、平蔵を呼んだらお玉がどんな顔をするか楽しみです」

「先輩たちからふたりがねたみを買わないように気を付けておくれ」

弥左衛門はちょっと眉をしかめた。

翌日、四つ時（午前十時）頃、帳場に座っていた番頭の佐兵衛の脇に奥女中のおよねが座った。何事か小声で話していたが、佐兵衛が「分かりました」と頭を下げた。

およねが奥に入ると佐兵衛は手代の勘助を呼んだ。

「お内儀さんがお呼びだから源蔵と平蔵を奥にやっておくれ」

「きのうのあれですな。お嬢さんをだしに使って、お内儀さんの悪い癖が出ましたね」

「これ、ありもしないことを言うもんじゃありません。お前はどうも口が軽くていけない。口は患いの本だというでしょう。言ってしまったことは取り消しができません。番頭になりたいと思うなら口を慎しむことです」

「へい、へーい。へいこらしなければ番頭になれないとは、へーい、こら参ったね」

「駄洒落を言っている場合じゃありません。早く呼んできなさい」

佐兵衛に叱られて勘助は物置き部屋にいった。薄暗い物置き部屋で源蔵と平蔵は店中から集めてきた火鉢と煙草盆の掃除が終って、元の場所に戻そうとしていた。

部屋に入ってきた勘助に気付いて、ふたりはなんですかという顔をした。

「お内儀さんがお呼びだ。早く奥にいきなさい。思い出すなあ。おれも丁稚のときは、火鉢と煙草盆の掃除をやらせられた。汚れが残っていると火箸でよく殴られたもんだ。商人は商いと言って、飽きないことが大切なんだ。よく覚えて置きなさい。それから奥に入る前に番頭さんに挨拶するのを忘れないこと」

先程の軽口の勘助と人が違ったように、ふたりには親切だった。

ふたりは佐兵衛に挨拶してから、恐る恐る奥に入った。廊下の曲り角で待っていたおよねが早くと手招きした。

「源蔵と平蔵です」およねが開けてくれた部屋の廊下で辞儀をして挨拶をした。

「早く部屋にお入り。冷たい風が部屋に入って、お玉がかぜをひきます」

敷居の前でぐずぐずしていたふたりはお内儀さんにせかされて、部屋に入った。およねが障子をしめてくれた。

お玉にふたりをひきあわせて、（どうお？）とお内儀さんはお玉の顔を見た。

「源蔵はクリクリした目が可愛いわね。平蔵は眉がキリリとして、男らしいわ」

お玉はふたりの品定めをした。

「お店が忙しいからどちらかひとりにして……」

「それならわたしはクリクリ目を選ぶわ。だって、わたしの店の屋号が丹波屋でしょ。栗に縁があるもの」

「そうね。平蔵はお店に戻ってちょうだい。このつぎは平蔵ですからね。気を悪くしないで……」

お内儀さんのことばで、平蔵は辞儀をしてお店に戻っていった。

ひとり残された源蔵は女二人に囲まれて、目のやり場に困り顔を伏せていた。

（七重も八つ。お嬢さんも八つ、同じ八つだというのに、どうしてこんなにも違うのだろう。おっかあと七重は今頃なにをしているだろうか？）

と思っていた。

「わたしはお玉。猫みたいな名前でしょう。おとっさんとおっかさんが玉の輿に乗るようにと付けてくれたの。源蔵の本当の名前はなんというの？」

「茂七といいます」

「可哀相に、茂七という立派な名前がありながら源蔵と呼ばれたら、淋しいでしょう」

「……」

「あら、この部屋では遠慮しなくていいのよ。そうだ。ここでは茂七という本名で呼ぶことにしましょう」

思い掛けないお玉の言葉に、茂七は涙ぐんだ。

「わたし茂七を泣かせるようなことを言ったかしら」
「いいえ、嬉しいんです。これまで、こんなに優しいことばを掛けて貰ったことがありませんでした。わたしはこれまで世の中を恨んできました。父親の七兵衛が亡くなり、残された母親とわたしたち兄妹の三人の家族が苦労するのは、なぜだろう。母親が苦労して働いても、生活が楽にならないのは、なぜだろう。妹の七重と別れなければならなくなったのは、なぜだろう。世の中のどこかで、誰かがわたしたち三人の運命を操っている奴がいるんだとわたしは恨んでいました」
「こわいことを言うのね。七重さんはいくつ？」
「はい、八才です」
「わたしと同い年ね。七兵衛、茂七、七重と名前に七が揃っているのね」
茂七は懐を探って小さな布袋を取り出した。その布袋から栗をつまんで、掌に乗せてお玉に見せた。
「なーに。栗じゃないの」
「そうです。わたしが江戸に出てくるときに、七重が追い掛けてきてわたしに呉れたんです。七重に握りしめられて、この栗は汗で濡れていました。毎朝、毎晩わたしはこの栗を見て七重や母親の無事を祈っています」
「わたしにも見せて……。番頭さんになって、この栗といっしょに帰れるといいわね」
「そのつもりです。この栗のお守りがあるから、わたしは挫けません。さっき、お嬢さんがわたしの目がクリクリしているから選ぶわと言われたとき、わたしはびっくりしました」
「おとっさんは丹波の出身なの。苦労してやっと呉服屋を開いたので、屋号を丹波屋としたと聞いているわ。七重さんの栗とおんなじね」
二人の会話を聞いていたお内儀さんとおよねはそっと目の下を指で拭った。

その夜、源蔵と平蔵は先輩たちからいじめられた。
翌朝、源蔵の目の下にできた青黒い痣に気付いた番頭の佐兵衛が「どうしたんだい」と聞いても、「転んで柱の角にぶつけました」と言うだけだった。
その後、奥からのお呼びは無くなった。

丁稚を十年間、務め上げて源蔵と平蔵は手代に昇格して、名前も源助と平助になった。
その二年前に、お玉は旗本二千石の橋本清左衛門の嫡男に見染められて、名前の通り玉の輿に乗って輿入れした。
婚礼の前の晩、お玉は茂七を部屋に呼んだ。
「わたし、茂七の村の百姓の娘に生まれたかったわ」
お玉は茂七の手に大きな丹波栗を乗せた。
「七重さんと姉妹になりたかったの……。せめて、わたしの栗を茂七の胸に抱いてちょうだい」
お玉は泣かなかった。なにか言い出しそうな茂七をお玉は制して、その背中を押して部屋から廊下に出した。茂七はお玉の呉れた丹波栗をしっかり握りしめていた。
「茂七に会わなければよかった」
お玉のつぶやきは茂七には届かないほど、小さな声であった。

手代になって一年後、平助が急死した。
その朝、源助が起きても寝ている平助に、（珍しいこともあるもんだ）と足音を忍ばせて階段を降りた。
平助がお店に降りてこないので、源助が様子を見にいくと、平助は床の中で死んでいた。
お玉がいなくなり、平助も亡くなり気落ちした源助だったが、七重とお玉の栗を見詰めて、（負けるもんか）と心の中で叫び続けた。
お玉が輿入れしたあと、丹波屋はさびれていった。
二千石のお旗本に似合う婚礼と弥左衛門が気張ったため、婚礼のあとに莫大な借金が残った。
そのお旗本の口利きでお旗本の諸家に販路を広げようとしたが、お玉が反対した。
「それでなくても呉服屋の娘だと肩身を狭くしているのに、お殿様に呉服屋の番頭みたいな事を頼めません」
お玉の反対にあって弥左衛門は渋々と引き下がったが、借金だけが残った。
三人いた手代も源助だけになり、二人の番頭も佐兵衛だけになった。十五人いた丁稚も八人になって丹波屋の店が急に広く感じられるようになった。

その日は朝からどんより曇っていた。弥左衛門と佐兵衛は呉服問屋の寄り合いに出掛けて留守だった。源助が帳場を預っていた。お店には誰も入ってこなかった。
（寂れたお店には一種独特な匂いがあって、お客さまはその匂いを敏感にかぎわけるのかも知れない）
と源助は思ったりした。
珍しく人が入ってきた。「いらっしゃいませ」と源助は帳場から立ってその客を迎えた。
「丹波から弥左衛門さんに荷物が届きました」
荷物を運んできた人足は大声で言った。
「それは、それは。ご苦労さまです。友蔵、煙草盆を持ってきておくれ」
源助は荷物の受け取りを書きながら丁稚に声を掛けた。
「莨を吸っているひまはねえ。それにしても、こちらさんは閑古鳥が鳴いていますねえ」
人足は憎まれ口を叩きながら出ていった。
「ことしも旦那様の実家から栗が届きました。友蔵、

辰蔵、荷物をほどいて栗が蒸れないようにしておくれ！」

源助の声が広いお店に響いた。一瞬、青白い稲光が光って、ド、ド、ドーッと雷鳴が轟いた。荷物を開けていた丁稚たちが、「キャーッ」と両手で頭をかくした。

丹波屋の前を歩いていた通行人が五、六人あわててお店に入ってきた。

「いらっしゃいませ。まあ、まあ。こんなに濡れておかぜをひくといけませんので、丁稚に手拭いを持ってこさせますからどうぞご遠慮なくお使いください」

源助は丁稚が持ってきた手拭いをみなに渡した。

男たちは源助から渡された手拭いをしばらく眺めていたが、ひとりが濡れた着物を拭き始めると、みながそれにならったが無言だった。

「雨に濡れて体が冷えたでしょう。どうぞ熱いお茶を召しあがってください」

源助は男たちに熱いお茶を配った。

「手代さん、たいへんです。お客さまがお店にいっぱいになりました」

蔵の中で在庫を調べていた源助を友蔵が呼びにきた。

「お客さまがおいでになった。結構な事じゃないですか……。お客さまあっての丹波屋です」

「番頭さんが呼んでいます。わたしはあんなにお客さまがお店に入ったのを見るのは初めてです」

友蔵に、「早く」とせっかれて源助は小走りに走った。

「番頭さん。きのうはありがたかった。おれたちが礼も言わずに黙って店を出ていったから、さぞかし気を悪くしたんじゃねえかと案じていた。『江戸は生き馬の目を抜くこわいところだ』とおれたちはおどされてきた。この番頭も親切そうに見えるけど、どこかでおれたちの目玉を引き抜くかも知れねえと思って用心していたんだ。番頭さん、あなたの親切は人をだますためのものではねぇと、おれたちは分かった。だからきのうの詫びと栗の礼を言いながら借りた傘を返しにきたんだ。江戸に丹波屋ありと、けさ廻状をまわしたから、これから毎月江戸見物にのぼってくるおれたちの在の客が入ってくるだろう。これがおれたちの番頭さんへのお礼だ。いい江戸みやげ話ができたとおれたちは喜んでいる」

「わたしは番頭ではなくて手代です。きのうのわずかばかりの事を心にかけてくださって、お客さまをお連れいただきましてありがとうございます」

「江戸見物講の連中に朝飯のときに話したら、こんなに来てくれた。練馬の在のどん百姓だからそんなに高い物には手が出ねぇが、数でこなすと言うこともあるわ」

「商人にとってお店に入っていただいたお客さまは救いの神様です。せいぜい勉強させていただきます」

「そうして貰えれば、おれたちも鼻が高い。在に帰ったら丹波屋を吹聴して置くよ」

「そうしていただければ、丹波屋も助かります」

「きのうはいい雨宿りをさせて貰った。江戸見物よりも、きのうの雨宿りがおれには一生の思い出だ」

事実この丹波屋が俄雨に番傘を貸したことが、きっかけとなってほとんどの呉服屋が俄雨に傘の貸し出しをするようになった。

丹波屋は傘貸し出しの元祖ということで人気を博した。

降り出すと　江戸へひろがる　丹波傘

俄雨に「丹波屋」という屋号の入った貸し傘を差して江戸の街にひろがっていく人々を詠んではいるが、丹波屋で買い物をしたという虚栄心をも詠み込んでいる。

この源助の機転で、借財に苦しんでいた丹波屋は財力をみるみる持ち直した。

源助も一番番頭となり、弥左衛門の弥の字を許されて、弥兵衛となった。

（とうとう、俺も一番番頭になった）という喜びを弥兵衛は実家に書き送った。丹波屋に丁稚に入って十五年が経っていた。

便りに一両小判を添えて飛脚に頼んだ。翌日、飛脚屋は受取と便りを届けにきた。

よかったね　とうちゃんにほうこくした　うまれてはじめて一両こばんをみた　やまぶきいろというのがわかった　きもちだけいただいた　茂七がのれんわけさせていただくときやくにたててくださいね　茂七のおみせでたんものをかうのがわしと七重ののぞみ　からだにきをつけて　はは　七重

便りと一緒に届いた小さな巾着に一両小判と栗が五つ入っていた。生活が苦しいはずなのに、茂七のために一両小判を送り返してきた母親の気持ちを知って弥兵衛は泣いた。

母親のためにも、七重のためにも、がんばりたいと弥兵衛は思った。

五つの山栗は七重の思いだろうと弥兵衛は思った。五つの山栗を五文字にすれば、「おめでとう」と解けた。ことし二十三才になった七重はきれいな娘になっただろうと想像した。

弥兵衛は眠れないままにあれこれ考えているうちに、一番鶏が鳴き始めて、（ああ、もうすぐ夜が明ける）と思った。その途端にことんと眠ったらしく、隣りの部屋の丁稚たちが起き出した気配に弥兵衛は目が覚めた。体がだるく、熱っぽかった。

丁稚頭が、「お早うございます」と廊下で挨拶をしたとき、「はい、おはよう」と部屋から廊下に出て挨拶を

返した。丁稚たちを見送ったあと、弥兵衛は部屋に戻り、鏡の中の自分の顔を見た。熱のため顔全体がほてっていた。目のまわりに隈が出来て、目の力が弱々しかった。

「七重、お玉お嬢さん、どうしましょう」

弥兵衛がひろげた掌にしなびて小さくなった七重とお玉お嬢さんの栗が乗っていた。弥兵衛はこれまで困ったとき、この二つの栗を眺めて元気を取り戻してきたが、労咳という病には無力だった。

「おはようございます。弥兵衛です」

弥兵衛は廊下から部屋の中の弥左衛門に声を掛けた。

「おう。番頭さん、中にお入りなさい」

弥左衛門が立ってきて障子を開けてくれた。

「お店に番頭さんがいないと淋しいねぇといま、おりくと話していたところです。番頭さんのかぜが治ってわしも嬉しい」

「勝手をいたしまして申し訳ありませんでした。きょうはお願いがありまして……」

「ほおう。番頭さんにお願いされるなんて初めてです。さて、なんでしょう」

「……」

弥兵衛はしばらく言い淀んでいたが、キッと顔を弥左衛門に向けて、

「おいとまをいただきます」と一気に言った。

「お・い・と・ま……」と弥左衛門は一語一語をつなぎあわせて、その意味の重大さに気付いた。

「この店を辞めたいと言うのですか？」

「はい。いろいろと事情がありまして……」

「なんですか、その事情というのは？」

「それは申し上げられません」

「事情が分からなければ暇は出せません。おりくたいへんだ。こちらにきて番頭さんをとめておくれ！」

「番頭さん。この店が嫌いになったのですか？」

と早くもおりくは涙声になっていた。

「お店が嫌いになったなんて、滅相もございません」

「それでは、なんだね」弥左衛門の声に怒りが込められていた。

「……」

「黙っていては分かりません」

「……」

「まさか引き抜き？」そう言った弥左衛門の表情がこわばった。

「いいえ。違います」弥兵衛は慌てて否定した。

「後生だから言っておくれ」

「……」

弥左衛門がしばらく何も言わなかったので、不安になった弥兵衛は上目遣いに弥左衛門を盗み見た。

弥左衛門は声を出さずに泣いていた。

「へ、へーッ」と弥兵衛は平伏した。

「わしは、これまで二つの間違いをしてきました。その一つがお玉のことです。生まれたときから玉の輿に乗るようにと、大事に育ててきました。運よくお旗本のご嫡男に見染められて玉の輿に乗りました。ところがどうでしょう。男の孫が産まれたというのに、わしらはたまにしか会えません。わしは玉の輿の玉を願ったのに、たまにしかのたまを摑んでしまった。玉の輿だ。豪勢な婚礼だと問屋仲間から褒められて、わしはいい気になっていました。少し位の借財が残っても、みんなお玉のためだと思っていましたが、算盤を弾いてみると膨大な借金が残りました。その借金を返すために、京都から大量の反物を仕入れて、一気に劣勢を挽回しようとして、さらに大きな借金を背負い込んでしまいました。これが二つ目の間違いでした。この二つ目の間違いを救ってくれたのが、番頭さん、あなたでした。わしが築き上げてきた丹波屋の暖簾をおろさなければならないかと覚悟を決めたとき、番頭さんの機転で、俄雨に貸した番傘で救われました。わしが番頭さんにどんなに感謝しているか、番頭さんは分かっていると思っていました。その番頭さんがお店を辞めたい訳は言えないでは、番頭さんに感謝してきたわしはどうなるのですか？」

弥左衛門の前で平伏していた弥兵衛が両の拳で畳を叩いた。弥兵衛も泣いていた。

弥兵衛の背中が小刻みに震えていた。やがて顔をあげた弥兵衛が「旦那さま」と言ったが、その後が続かなかった。

「旦那さま……。わたしは労咳を患っております。二日前に血を吐きましたし、けさも熱がありますので、お店に出られる体ではありません。働けない体ならば、お暇をいただこうと思いまして、こうしてお願いにあがりました。父は三十二才で労咳で亡くなりました。死病と言われている労咳ということばを口にしたくなかったので、わたしは黙っていたのです」

「わかりました。わしの丹波屋を番頭さんが救ってくれました。今度はわしが番頭さんに手を貸す番です。向島にわしの隠居所があります。あそこで、一年でも、二年でも元気になるまで療養してください。労咳は死病といっても、いいお医者さまといい食べ物といい療養所があれば必ず治ります。番頭さんが戻ってきたとき、わしは隠居します。番頭さんが二代目弥左衛門を継いで丹波屋を守ってください。これがお玉との約束です」

思い掛けない弥左衛門のことばに、弥兵衛は弥左衛門の口元を見ているだけだった。

湯漕ぎのうた

—アインシュタイン・照る日曇る日—

大和禎人

さて、アインシュタイン・照る日曇る日というサブタイトルにふれる挿話におよばねばならぬ。昔懐かしい銭湯健在の頃の昔話である。

初湯の営業は午後の一時ごろであった。入口の戸の開くのを待ちかねていた客がその時を待ち雪崩れこむ、といっても特定の常連にきまっている。

昼、日中よほどの暇人たちにきまっている。

大正の末、父は勤めを切り上げ、退職金をあててある事業に手を染め、昼湯贅沢を楽しむ意気軒昂の時代があった。私もお供をする一時期があったのだ。

当時の本郷区神明町の「神明湯」がその銭湯である。近く三業地帯があって女湯のほうは芸者衆の艶めかしい銭湯であった。時には母に伴って女湯にも小学生の私は親しんでいたが、芸者衆はたいてい特別の足高の桶を使う洗い髪に特別料金を払って、めかす風情とともに、三助の流しをとる大姉御も見かけた。

やはり昼湯の光景である。

銭湯が巷から大方姿を消し、変わって都市の町中に温泉が鑿井され、送迎バス、広い駐車スペースを備える大娯楽センターが現出する一方、温泉脈を掘り当てる作業過程でメタンガス火災を引き起こし、地域に大迷惑を及ぼした例もあった。私の住所地近辺にもその例にもれず、温泉施設開業間近かの現実があり、もはやブーム。庶民に愛され、家庭に風呂を持たない大方、そして例え備えがあっても、銭湯の大湯漕には及ぶべくもなく、温浴効果を考えれば、銭湯は広く庶民の必需を長く満たしてくれた保養施設して愛すべき長い歴史があった。

かつての銭湯経営者は罐焚き、薪集めの苦労その他、骨折り多い事業に見切りをつけ、廃業してマンションを建て、駐車場を設け、自動販売機をコーナーに置くなど、今や左団扇の時代に成り果せた。サービス産業の職種から銭湯という二文字が全く消える日は残念ながら近い。

男湯の方は開場しても万端の用意は後まわし、浴槽を覆う揚げ板を取り除く手が及んでいない。父はここで揚げ板を取り除き、その一枚で湯漕ぎを楽しんだものだ。

「アインシュタイン・アインシュタイン」

と唱えながらである。当の博士の来朝は大正十一年であるから、四年ほど前になる。博士の業績に父は文系にかかわらず余程の感銘を刻んでいたものらしい。しばらくして、その唱えが、「照る日曇る日、照る日曇る日」に変わった。揚げ板の一枚に誰が書いたものか、書かれた文字そのままであった。父はこの題名の由来を知っていたものではない。まして私はなおさら知らないのだが湯漕ぎには格好の語呂で、よくマッチしていた。

後に調べてそれは大仏次郎さんが大正十五年の八月から大阪朝日新聞に初めての連載をはじめ、翌昭和二年六月までで完結した長編の題名で、大変好評を得た由、映画化もされたものであったろう。照る日、曇る日の唱えは大衆に題名だけでも語呂うけをする性格を持っていたように思う。昭和改元はこの年の年末。まだ戦争の予感など全くなかった。草津の湯漕ぎショーのあれと同じの湯漕ぎに奮闘した父のこれは壮気に満ちた昔日の印象である。昼湯を日課にできた余裕と衒気のなせる業であった。やがて事業の破綻で長い逼塞時代を迎えるのだが、この時期の父は元気一杯、まだ四十代であった。

初湯の仲間に柳屋三梧楼がいた。角刈り頭、ギョロ目の人物で、もの静かであった。たいがい流しをとった。三助の流す間も一切無言であった。寄席で話芸を売るこの人はおしゃべり嫌いの側面があった。熱湯好きで、この人が先客になると湯漕ぎは遠慮された。

女湯の方は手の混んだ作法があって、湯を満たした湯桶の贈答やりとりがあり、届けられたらそのお返しをするのである。夜の混み合いの中でもそれは実行された。脱衣の板の間では目笊籠が重宝されて、混雑の中知り人を見たら譲りあいもする。小女が雇われていて夜の混雑の中、甲斐甲斐しく働いていたものだが、盆暮れのチップを忘れてはいけなかった。赤いホッペの雪国から雇われて働く娘さんたちが多かった。番頭さんと呼んだ三助くんも越後出身が多かったらしい。後の横綱羽黒山はそうした仲間の出世頭であった。

下足番までいて、下足札が利用された。今は嘘のような賑いであった。

男湯、女湯を振り分けて番台があった。大抵は営業者の内儀が座った。このお女将さんの愛敬次第でその銭湯繁栄が左右される傾向もあった。

五月の菖蒲湯、冬至の柚子湯、正月の朝湯などの節目の銭湯行事もあり、銭湯は庶民社交の歴史を刻み、大衆に多く愛され、保健効果と慰安をもたらした大切なゾーンであった。

（H一七・一二・一五）

空風（からっかぜ）（一）

太田精一

（一）

強司が逝ってもうすぐ一年になる。

浜松の三方原の台地にある浜松医科大学附属病院の病室で、二月の寒い日に六十二歳で去った。

呼吸困難を訴えて検査した結果、肺癌と診断され、即刻入院となったのは六月の蒸し暑い頃だった。

木本強司は、二、三年前からリューマチを患い、この浜松医大の病院に通院して月に一度治療を受けていた。毎月医師に診て貰っているのだから、健康診断を受けているようなものだという思い込みが、他の器官の異常を見付ける検診をつい怠ってしまったのであろう。それが盲点となり、癌が発見された時には、すでに手遅れとなっていたのだ。

伸一が弟の強司を最後に見舞ったのは、十二月の冷たい北風の吹く日であった。遠州名物の乾いた空風が衿の中から胸に浸み込んで来る。

鎌倉に住んでいる木本伸一は、予め浜松にいる三男の恒三に連絡し浜松駅で待合わせ、一緒に強司を見舞うことにしていた。

恒三は、伸一を車に乗せ病院へと向った。

「もう、強ちやも駄目かもしれない。このところめっきりやせて骨と皮ばかりになってしまった。可哀相で見舞に行っても何と言って慰めたらいいのか言葉に詰まってしまう」

毎週次兄の見舞に立寄る木本恒三は、車を運転しながら、助手席にいる長兄の伸一に沈痛な声で病状を説明した。

伸一は、恒三の話を聞き、深い溜め息をついた。車の窓に流れる三方原の冬枯の景色が、伸一の空ろな気持を映し出すようであった。

三方原は、武田信玄と徳川家康が今川家滅亡後、駿河、遠江の覇権を巡って戦史に残る合戦が行われたところである。家康が生涯に唯一度、大敗北を喫した戦いとして後世に知られ、数々の逸話や伝説が伝えられている。

伸一は、恒三に案内され病室に入った。強司は遠くを見つめるような目で天井を眺めている。二人が近ずくとベッドに寝ていた体をやっと起こし、かすれた声で言った。

「よく来てくれたなあ。抗癌剤を打っているのだが、さっぱり効果がなくて、もうやめて貰おうと思っている。とにかく食欲がない。食えないものだからこんなに痩せてしまった。腰の骨がベッドに当って痛くてしようがない。子供の頃大工町にいた時には、いつも腹が減っていてよく食べたなあ」

「そうだった。あの頃は、俺たち兄弟食い盛りで、スキヤキなんかやると肉がたちどころになくなってしまったもんな。強司が、コッペパンを買ってきて、ふとんの中で隠れて食っていたことがあったっけ」

伸一は、終戦直後の困難な時代に、必死になって生きてきたことを話題にして、少こしでも強司の気持を病気から解き離そうとした。しばらく雑談が続いた後、強司が伸一に聞いた。

「ところで、兄貴！　兄貴に万一のことがあった場合、家族が経済的に困るようなことはないだろうな。俺は、女房にはぜいたくさえしなければ、年金と貯金でなんとか生活できるくらいの金は残してある。二人の子供たちもすでに結婚し、孫まであるから、親父としての役目は果たしたのではないかと思っている。地道に生きてきて、思い残すことはないよ」

「まあ十分とはいえないが、女房だけは何んとか普通の暮しができる準備はしてあるつもりだ。娘はすでに結婚して独立した所帯を持っている。子供も二人あり心配はない。気がかりといえば、息子が三十過ぎてまだ大学院の学生でいることぐらいかな。いずれにしても、子供たちには美田を残さないほうがいい。なまじ遺産なんかあると兄弟争いのもとになるからな。その点俺たち兄弟は財産らしいものは親から何も残して貰わなかったから、こうしてお前とも、恒三とも、妹のますよとも仲良くしていられるわけだ」

伸一は、強司の「思い残すことはない」という言葉に万感の思いが込められていると感じた。癌を告知され悩み、苦しみ、心の葛藤を経て発せられた重い言葉として受け止めた。

（強司は、〝思い残すことがない〟わけではなく、〝思い残すことはない〟と自分自身に言い聞かせることによってこの世への未練を断ち切ろうとしているのだ）

そう思いながら、伸一は強司の顔を見た。強司の瞳の奥に伸一への決別の意味が込められている。伸一は、その瞳をじっと見詰めた。すると幼き日、強司と過した時

間が蘇えって来た。

（二）

伸一の家は、浜松の中央部大工町の西の端にあった。浜松駅前の大通りを西に進み、新川の橋を渡ると大きな商店の立並ぶ鍛冶町通りとなる。その通りをさらに西へ行くと伝馬町の交差点に出る。交差点を真直ぐ渡った道路が鴨江観音通りで、その観音通りを両脇に挟んで三百メートルほどが大工町である。大工町は観音通りの北に狭く、南に広がった戸数百戸程度の小さな町である。

徳川家康が岡崎から浜松に城を移した時に連れてきた大工たちを集めて住まわせたところから、この町名がつけられた。強司はそこで生まれた。

真夏のような日差しを浴びて伸一は、玄関前の小さな空地で、近所の子供たちと遊んでいた。

すると生まれたばかりの赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。伸一は咄嗟に遊び道具のペッタン（メンコ）を放り出し、家に駆け込んだ。

昭和十七年五月二十七日、太平洋戦争が始まって半年、連戦連勝に日本中が沸き返っていた時であった。

「今、生まれたの。外にいたら泣き声が聞こえてきたよ。元気な声だね」

伸一は、顔の汗を汚れた手で拭って母の部屋に入ろうとした。

「だめ、だめ、伸ちゃん今入ってはいけません。お母さんの落ち着くまで待ちなさい」

産婆のうめの声が襖の奥から聞こえて来る。伸一は、不服そうな顔をして、襖越しに母に聞こえるように大声をあげた。

「男の子だね。お母さん。声で分かるよ」

そう言って、家を飛び出し、近所の子供たちに赤ん坊が生まれたことを触れ回った。

六日後、伸一は、父の吉雄に呼ばれて、祖父のいる部屋に入った。そこには祖父の厳次郎と父の吉雄と母のさきが真剣な目差しで座っていた。

祖父の厳次郎は、明治六年生れの満七十歳である。だが、家計の担い手で、木本家の家督はまだ父の吉雄に譲ってはいなかった。

「伸一、今度生れた男の子の名前を付けようと思っているので、ちょっと手伝って貰いたい」

伸一は、きょとんとした顔で、三人の大人たちを見回した。まだ国民学校（昭和十六年四月に小学校から名称変更）にも入学していない伸一には、とても名前などつけることはできない。

「ここに、名前を書いた五本の籤があるから、その中から一本引いてくれ」

籤を引くことぐらい伸一にもできる。

「わかった」

伸一は、箱の中に入っている紙縒を一本引き抜いた。そこには「強司」と書いてあった。

「強司か。何かちょっと変った名前だな。もう少しなじみ易い名前はないのかな。もう一度引いてみようか」

吉雄はそう言って紙縒を小机の上に置いた。

「強司も悪くないんではないか。強さを司どるという意味だろう。男の子はただ強ければいいというわけではない。強さを治め、支配することができなければだめだ。今、日本はイギリス、アメリカと戦って強さが必要な時だ。その時生れてきたのだから、この名前は時局にも合っている」

厳次郎は色白で目鼻立ちの整った赤ん坊を見て、この困難な時代に強く逞しく育って欲しいとの思いを込めて言った。

「そうだな。おじいちゃん。それし、伸一が折角籤を引いて当った名前だから、神様の意志が入っているわけだ。それじゃ〝強司〟とするか」

吉雄は厳次郎とともに紙縒を神棚に上げ、手を合わせ拍手を打った。

「この子は立派な子になるぞ。今日は海軍記念日だし、体重も一貫目以上ある。顔付きもしっかりしていて頭も良さそうだ」

厳次郎は、嫁のさきを労った。

「おさき、でかしたな。こんな目出度い日に、立派な男の子を産んでくれて有難うよ」

さきは、お産の苦しみから開放され、無事丈夫そうな男子を生んだ満足感に浸っていた。舅のいたわりの言葉を聞いて、にっこりうなずいた。

伸一は、自分が籤を引いた名前が、そのまま弟の名前になったことで、少こしばかり大人になったような気がしている。彼は、皺だらけの赤ん坊の顔を覗き込んで、手を取って言った。

「寒い時ではないから、今度はきっと大丈夫だね」

伸一は、去年の一月に起きた悲しい出来事を思い出していた。

伸一に弟が生まれたのは、これが初めてではない。木本家には、去年の寒の最中に二男が生まれた。可愛いい色白の男の子である。名前は、家長の厳次郎がつけた。知人の河合楽器の社長河合小市の名にあやかって、将来出世するようにとの願いを込め、小一と名付けたのだ。

河合小市は、日本楽器（現ヤマハ）の創立者山葉寅楠の片腕として技師長を務めていた。だが、昭和二年社長が寅楠から川上嘉市に交替した時に小市は独立して寺島町に河合楽器研究所を設立した。

昭和四年六月には、河合楽器製作所と改称し日本楽器に次ぐ楽器製造会社に成長させている。

厳次郎の願いも空しく、木本家の小一は、一月十二日に生まれると間もなく肺炎を患い、一月三十一日にこの世を去った。わずか二十日足らずの儚い生命であった。

「どうせ名前を貰うんなら、河合楽器の社長の小市の名をそっくり貰えばよかったかも知れない。なまじ少こし遠慮して市の字を一に変えたのがいけなかったようだ。わが家にはすでに長男の伸一がいるわけだから一の字では長男が二人いることになる。兄弟が争うことになってはいけないと神様が判断したのかも知れないなあ」

厳次郎と吉雄とが話していたことを伸一は幼な心にも憶えていたのだ。

そんなことがあって、厳次郎は、姓名判断を得意とする易者に相談した。易者は、候補を五つほど挙げるからその中から籤を引いて選ぶことを勧めた。その籤引き人に長男である伸一が選ばれたというわけである。

伸一は、大役を終えて、家の前の敷地に飛び出した。

「ぼく、弟ができたんだ。強司って言うんだ。つよいという字と行司の司という字を書くんだってさ。きっと強くて立派な子になるとおじいちゃんが言ってたよ」

「それじゃ、大きくなってその子が伸ちゃんと喧嘩したら伸ちゃんはその子に負けてしまうぞ。それでもいいか」

「喧嘩なんかしないさ。だって、ぼくのほうがずっと大きいんだもの。ぼくが六年生になっても、まだ一年生にもならないんだぜ」

伸一は、自分がひと回り大きくなったように感じ、夕陽に向って大きく背伸びをした。

一ヶ月後の六月、ミッドウェー海戦での日本海軍の敗北によって戦局が転換し、二年後には浜松が焦土と化すことをこの時には誰れも予想する者はいなかった。

ましてや、まだ国民学校入学前の伸一には、たび重なる空襲の中を逃げまどい、戦中戦後の苦難の時代を生きることになろうとは知る由もなかった。

(三)

「欲しがりません勝つまでは」をスローガンに生活を犠牲にし、戦争遂行に邁進してきた国民も、昭和十八年になると疲れが見え始めた。

戦争も長期化するにつれ、戦場に送り出した若者に加えて一家の荷い手までもが白木の英霊となって帰って来た。厭戦気分がじわじわと浸透し始めたのだ。

捷報ばかりの大本営発表に国民は疑念を抱くようになった。南方の島々からの転進（撤退）や玉砕が報じられ戦線が縮少し、十九年七月にはサイパン島が占領された。米軍は、この島を基地として長距離爆撃機B29による日本本土爆撃を開始した。学徒動員も本格化し、三年以上の中学生、女学生の多くが軍事工場に駆り出されるほど事態は深刻になっていたのだ。

木本家でも、空襲を想定した避難訓練を行った。大規模な空爆に備えて、予め避難先も決めていた。

突然、地鳴りがした。地の底が割れるような凄じい地響きとともに地面がぐらっと揺れた。伸一は、慌てて表に飛び出した。昭和十九年十二月七日午後一時半を少こし回った頃である。玄関先の空地に出てみたもののとても立っていられる状態ではない。目の前の家がまるで波に翻弄される舟のように揺れている。伸一は、思わずその場にうずくまって身動きできなくなってしまった。

母のさきが強司を抱いて家から転げるように飛び出してきた。さきと伸一と強司の三人は、ひと固まりになって座り込み、ひたすら地震の収まるのを震えながら、祈るだけであった。隣家の人たちも、このわずかな空地に身を寄せて、地震の止むのを待っている。

「こういう時にお父さんがいたらいいのにね」

伸一は不安を隠し切れず思わず呟いた。

吉雄は、日本楽器に出勤していて、家にはいなかった。

厳次郎は、佐鳴湖に魚釣りに行っている。

満三才にも達しない強司は、何が起っているのか理解できないまま恐怖に怯えて母にしがみついている。

しばらくすると揺れも収まった。

「やっと収まったようだね。でも余震があるといけないからもうちょっとここにいましょう」

さきは、子供たちと一緒に一時間ほど隣家の人たちとこれまで体験したことのない恐ろしさを語り合っていた。

三十分もすると次々と被害の情報が人伝に伝わってきた。あちこちで道路に亀裂が入り、倒壊した家屋も少なくないという噂だ。また、浜松の近在でも、村によっては大きな被害が出ている。可美村では、遠州織機（現遠州製作所）、鈴木織機（現鈴木自動車）に大きな被害が出て、建物が倒壊し、圧死した人もあるという。

厳次郎は、釣を終えて佐鳴湖から家に帰ってきた。帰る途中で、この地震に遭い、林の中に逃げ込み難を逃れている。彼は今見てきたばかりの悲惨な光景を次のように語った。

「入野を通って帰ってきたのだが、壊れてペシャンコになった家、屋根瓦が落ち土壁が崩れている家があちこちにあった。道もところどころひび割れがあって、浜松全体では相当な被害になりそうだ」

吉雄は、被害を受けた日本楽器の復旧に当っていたため、すぐには家に帰ることはできなかった。その日は遅く帰ってきたが、被害状況をほとんど語らなかった。飛行機のプロペラを製造していた日本楽器の被害状況は

秘匿され、家族にも知らせることができないほど厳しい緘口令がしかれていたのだ。この地震は後に東南海地震と名付けられた。

軍需都市としての浜松は、この地震によって大打撃を受け、生産力が低下した。しかし、その報道は大本営発表と同様、損害は軽微と伝えられ、詳細は戦後になるまで明らかにされなかった。

戦後、この地震の深度は五。マグニチュード八。強震で、住居の全壊二二八戸、半壊四六七戸、死者二二名と公表されている。

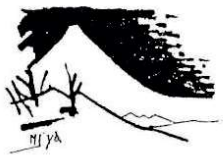
この東南海地震後、軍需都市浜松は、米軍の爆弾、焼夷弾、艦載機による機銃掃射、艦砲射撃の相次ぐ攻撃を受け、全市内の九二パーセントが灰燼に帰している。

伸一は、強司とともにその戦火の中を逃げ惑うことになるのである。

（つづく）

是非に及ばぬ（二）

千坂精一



六

禅秀は、満隆からの突然の呼び出しに駭き、

（無官になった儂になんの相談か）

と訝しんだ。

（持氏に頼まれ、管領への復帰を断念させるのか）

そう思うと気乗りしなかったが、たとえ隠棲しているとはいえ、先代公方の弟君の要請を無下に断るわけにもいかなかったので、日暮れてから重い腰を上げた。

供は近習秋山小五郎、大町彌太郎だけの微行であった。

月の出が遅い闇の道は、人眼につく心配がなかった。

新御堂に着いた禅秀は、小五郎と彌太郎を玄関脇の小部屋に待たせて貰って、奥座敷へとおった。

人払いして、禅秀と面接した満隆は、まず、

「こんな隠居にも鎌倉府の様子を逐一報らせる変わり者がおってな、このたびの騒動はいちいち耳にいたしておるが、持氏の横暴な振る舞いには困ったものよのう」

と同情を示した。

禅秀は、

（やはり諦念させられるのか）

と思いつつ、

「恐れながら、公方様の道に外れた政治は諸人眉を顰めるところであります。それがしもたびたびお諫め申し上げて参りましたが、忠言耳に逆らうの譬えどおり追従する憲基たちの甘言に掠められ、却ってご不興を蒙るところとなり、ついに管領職を罷免されましてござりまする」

そう事情説明した。

「図に乗りおって、公方にあるまじき所行じゃ」

「たびたびのことゆえ、悔いあらためて罷免を撤回さえしていただければ、遺恨になど思いませぬ」

禅秀は、鷹揚に構えた。

「世はただ恩のために仕え命は義によって軽しと申すが、しかし、道に外れた政治を繰り返す持氏の有様では、遠からずして何処かより世直しが蜂起するであろう」

満隆は、そう水を向けて、禅秀の出方を窺った。

事実、最近の東国情勢は不穏な空気に包まれていた。

二年前には、陸奥の伊達持宗や出羽の村岡國世が叛旗を翻していたし、常陸の佐竹は当主義盛病歿後、持氏の後押しで上杉憲定が二男の義人（憲基の弟）を無理矢理養子に入れたことに対して、一族の憤懣が高まっていた。

確かに憲定の遣り口は強引で、養子にこと寄せて佐竹家を乗っ取ろうとする魂胆が露骨に見えていた。

そのほか、満隆の兄満直も反持氏側の一人だった。

満直は、鎌倉府の出先機関陸奥篠川館（福島県郡山市）に駐在し、満隆の弟稲村御所（福島県須賀川市）満貞に補佐させて南陸奥を支配していた。

禅秀は、満隆に、

「たとえ誰が世直しに立ち上がろうとも、公方様を支持して現体制を守ろうとする者は多寡が知れておりまするゆえ、われらで鎌倉府を守り抜かねばなりませぬ」

「じゃが、ひとたび世直しが起これば、公方打倒が正義となって、鎌倉府は容易に占拠されてしまうであろう。誰ぞに世を覆されて鎌倉府を奪い取られ、由緒ある足利家の滅亡を見るのは如何にも嘆わしいことである」

「わが上杉にとりましても、代々仕置して参りましたこの関東を、喪うわけには参りませぬ」

「そうよのう。このまま拱手傍観して誰ぞに関東を奪われてしまうよりは、おなじことならわれらが蹶起して、足利公方と犬懸上杉両家の安泰を図ろうではないか」

満隆は、言葉巧みに熱っぽく説いて、禅秀を誘った。

「しかし、われらが如何に義のためと申しても、幕府が果たして正当と認めてくれましょうか」

「案ずることはない。その幕府も間もなく転覆して新しい体制になり、われらのよき理解者となる。これは将軍の弟君大納言義嗣卿からの密書じゃ」

満隆は、ここぞとばかり徐ろに文箱から義嗣の書状を取り出して、禅秀のまえに差し出した。

「大納言様からの密書ですと―」

禅秀は、満隆から受け取った書状を開いて読みはじめたが、やがて食い入るようにして読み終えると、将軍の膝許で徒ならぬ謀略がすすめられていることに駭いた。

「これは無謀です。公方様を除くのとはわけが違います」

「京の事情は知らぬが、大納言様にしても、お起ちになるからには充分成算がおありのうえでのことに違いない」

「それにしても、ことが大き過ぎます」

禅秀は、義嗣からの書状を満隆に戻しながら一笑に付したが、またとない好機に奮い立つ満隆は、

「返事はいたさずとも、われらが起てば、大納言様は同盟したものと思われるであろう。また、万一大納言様がこと成らずとも、われらは連判いたしたわけではなく、国人たちが専横の持氏を廃して叔父の儂を立て、鎌倉府と公方家の安泰を図ったとすれば咎め立てはあるまい」

なんとしても日の目を見たい一心で、禅秀を説得した。

禅秀は、ながいあいだ沈思黙考のあと、なおひと呼吸おく慎重さで即答を避けると、いったん新御堂を辞した。

いっぽう、満隆のほうは、禅秀とともに起って持氏を斃し、関東公方になることだけを考えていて、敗れたときのことなどは念頭になかった。

かりにそうなったときは、どこか僻地へ落ち延びて遁世すればいい、ぐらいの気楽さだったのだろう。

持氏は懲らしめるだけにしておいて、憲基だけを斃すことで迷いをふっ切った禅秀は、あらためて新御堂を訪ねると、胸を張って満隆に荷担する決意を告げた。

満隆を抱き込むことで大義名分を得た禅秀は、自信を持って持氏、憲基打倒に乗り出した。

舟は岸を離れた。

あとは、どうやって上手く流れに乗せるかであった。

七

満隆との密議を終えた禅秀は、さっそく胸中に秘めた構想を具体化して、〈義戦〉の計画にとりかかった。

その内容は大規模で、かつ綿密であった。

禅秀は、

『岳父見舞い』

を鎌倉府に届けると、石和へ行かず持氏に不満を抱く主だった国人たちのあいだを密かに廻り歩き、幕府から、

―公方持氏と管領憲基を討て。

の密命を受けたという満隆の親書を披瀝して、膝詰めで精力的に語り合い、ときの経つのも忘れて説得しつづけ、遠隔の国人たちには檄を飛ばして、一人また一人と辛抱づよく確実に計画の中へ引き入れていった。

禅秀が挙兵を呼びかけたのは、親族関係者の他に、常陸の大掾満幹、佐竹一族、小田一族、下野の宇都宮持綱、陸奥の篠川御所足利満直、蘆名盛久、白川の結城、石川、葛西ら東国屈指の国人たちと、鎌倉在国の木戸、二階堂、佐々木らの一族をはじめとする百余人であった。

秋山丹波は、そんな禅秀の不穏な行動を見咎めて、

「お屋形様。ことの次第はどうあれ、公方様に弓引くは謀叛人でござりまする。由緒ある上杉の家名を汚してはなりませぬ。なにとぞお留り下さいますように」

と繰り返し諫めたが、

「諄いぞ丹波。義のため起つのじゃ。捨ておけ」
と撥ね付けられた。
途方に暮れた丹波は、思い詰めて密かに意を決し、倅小五郎の留守を窺い、仏間で屠腹して諫死した。
報らせで駆けつけた禅秀は、丹波の亡骸を前にして、
「早まったぞ丹波。其方の心底を知りながら突き放した儂が迂闊であった。とり返しのつかぬことをしてしもうた。丹波よ赦せ。ことここに至ってはもはや引き返す道はないのじゃ。無益であったぞ丹波」
そう呼び掛け落涙したあと、徐ろに倅小五郎に向かい、
「儂は、掛け替えのない忠義者を喪ったばかりでなく、其方の敵ともなってしもうた。いまよりは儂を狙うも犬懸の家を去るも気儘にいたせ」
と告げた。
愕いた小五郎は、
「なにを仰せられまする。私はお屋形様のなされようを信じて従いて参りまする。決してお恨みは申しませぬ」
そうきっぱりと言い切った。
「小五郎、嬉しく思うぞ」
禅秀は、思わず小五郎の手を取った。
それから一年後の秋が深まる頃には、呼び掛けに応じた国人たちが兵を率いて三々五々鎌倉の近辺に集まり、ようやく合戦の気運が高まってきた。

禅秀は、妻の萩乃を然り気なく実家へ戻すべく、
「舅殿が風気（感冒）を拗らせて臥っておられるとの報らせが参ったゆえ、いそぎ見舞うてくれ」
そう偽って、甲斐の石和館へ旅立たせた。
そして、自身病気と称して屋敷に引き籠もると、目立たぬよう武器を米俵に詰めて、密かに運び込ませた。
蹶起の準備は万端整った。

八

応永二十三年（一四一六）十月二日。
この日、鎌倉御所で内祝いがあり、酒宴が催された。
満隆と持仲も列席していたが、宴酣になって座が乱れた戌の刻（午後八時）頃、持仲はそっと御所を抜け出すと、鶴岡八幡宮裏の西御門にある保壽院へ駆け付けた。
そこには、禅秀と一族郎党、鎌倉在国の一団がいた。
持仲を認めると禅秀は、
「屋敷の様子は―」
と性急に尋ねた。
「一座はすっかり酔い痴れております」
「して、公方は確かに居られるな」
「兄者は、酔い潰れて寝所へ移されました」
「よし。好機じゃ。屋部と岡谷は予ての手筈どおり別働隊を塔の辻へ誘導して堀を切り、鹿垣を結び、走矢倉をあげ、持楯を突き立ててそれぞれに家紋の幕を張り、一

揆の旗を掲げて山内の軍勢に備えよ。よいな。急げッ」
そう下知して邀撃隊の移動を確かめると、禅秀は、
「よいか。御所は囲むだけで攻め入ってはならぬぞ」
そう馬上で念を押しておいて、
「いざ出陣じゃ。ものどもつづけッ」
大音声で命ずると、雄々しく采配を打ち振った。
面目躍如のときを迎えた禅秀は、得意満面であった。
禅秀率いる本隊は、雪の下へ駆け降り、杉本寺下の金澤街道を走り抜けて、いっきに鎌倉御所へ殺到した。
このとき、御所内でときならぬ馬蹄の音が近付いてくるのを聞きつけた木戸將監満範は、咄嗟に、
（犬懸入道殿の謀叛だ）
と察知した。
ただちに持氏の寝所へ駆け込んで前後不覚の持氏に、
「上様、謀叛でござりまする」
そう大声で怒鳴った。
「何事じゃ」
不意に起こされ、夢現の持氏は不機嫌に質した。
「叛乱軍が押し寄せて参りまする」
「叛乱軍だと。誰の謀叛なのじゃ」
「犬懸殿と思われまする」
「なに、禅秀じゃと」
持氏は信じられなかった。
泥酔のためではなく、今朝がた禅秀の嫡子憲方から、

「父の病は重くなるばかりで、もはや本復の希みはありませぬゆえ、ふたたびのご奉公は叶わぬでありましょう」
そう聴いたばかりであったから、
―禅秀謀叛。
の報らせが信じられなかったのだ。
「まことか。まことに禅秀の謀叛なのか」
「相違ござりませぬ」
木戸満範は、確信を持って答えた。
叛旗を翻せる実力者は、禅秀のほかにはいなかった。
持氏は、馬蹄の響きでわれにかえり、恐怖に戦いた。
「禅秀め、謀りおったな」
見縊ったことが悔やまれたが、後の祭りであった。
「一刻も早く管領様のお屋敷へお立ち退き下さい」
追い立てられた持氏は、身仕度する暇もなく、寝乱れ姿のまま警固の武士たちに護られてすぐ裏の十二所の山に入り、尾根伝いに間道を抜けて久木の岩殿寺へ出た。
ここまでくれば、追手は及ばない。
ひと息ついたあと、さらに名越切通しを小坪へおりて、飯島崎から由比が浜へつづく松林（現在の材木座あたり）を早足で抜け、遠路の夜道を辿り辿りして、ようやく佐介が谷の憲基の屋敷へ逃げ込んだ。
こうして、持氏は危機一髪のところで難を逃れたの

で、禪秀軍が御所を囲んだときにはすでに蜕の殻であった。

「失敗った。取り逃がしたか」

禪秀は、持氏を威嚇する機会を逸して臍を噛んだ。

しかし、すぐに、

（持氏を憲基の屋敷へ逃げ込ませてはならぬ）

そう判断して踵を返すと、塔の辻の別働隊と合流して佐介が谷へ向かった。

この夜は、憲基も屋敷で酒宴を張っていた。

そこへ、上杉氏定が三十騎ほどを率いて駆け込み、

「犬懸入道殿が新御堂様と持仲様を唆して叛き、只今御所が襲撃されました。すぐさまお屋敷を固められよ」

と注進した。

憲基は、思わず身を乗り出して、

「なにッ、この夜更けにか」

半信半疑だったが、まもなく持氏の一行が逃げ込んでくるに及んで事態を知ると、ただちに応戦を下知した。

憲基は、先頃の対立以来警備を厳重にしていたので、素早く臨戦態勢が整った。

禪秀は、持氏が憲基の屋敷へ逃げ込んだので、弓引くことが躊躇われ、佐介が谷を遠巻いて一夜を明かした。

翌日は、悪日なので双方仕掛けず、終日を過ごした。

そのあいだに、両軍へ助勢する近国の武将たちが続々と集まってきて、鎌倉は人馬で膨れ上がった。

甲斐の武田信満も、老骨に鞭打って長駆着陣したが、禪秀が蹶起したことの是非については一言も触れなかった。もはや取り返しがつかぬと諦めたのであろう。

禪秀は、憲基だけを討ち取る方法はないかと、ずっと思案しつづけたが、これといった策略は浮かばなかった。

禪秀が迷っているうちに、悪日明けの四日未明に合戦の火蓋が切られてしまった。

断崖と幽谷を分ける急勾配の気粧坂を押し上げて葛原が岡を制圧すれば、逆落としに佐介が谷を攻略出来る、と判断した岩松満純と澁川左馬助が先鋒になって、入れ替わり立ち替わりして攻め上げていった。

山内家に与する扇谷家の上杉氏定が、急遽気粧坂に向かい防戦しているうちに、霜台を守っていた上田上野介と疋田右京進が討ち死にしてしまった。

それを契機に、岩松軍はいっきに気粧坂を突破して押し登り、六本松辺りで上杉氏定に深傷を負わせた。

――気粧坂の形勢危うし。

の報に憲基は、馬廻りの梶原但馬守、海上筑後守、同信濃守、椎津出羽守、飯田小次郎以下三十騎を防戦に向かわせたが、梶原と椎津は討ち死にし、海上、飯田らは深傷を負って無量寺の陣へ逃げ帰ってきた。

勢いに乗った岩松、澁川両軍は、敗兵を追って佐介が谷に雪崩れ込み、國清寺に火をかけた。

炎は忽ち燃え拡がって憲基の屋敷にも及んだので、邸内は大混乱に陥り、守備兵たちは俄かに戦意を喪失した。

持氏と憲基は裏山へ脱出して大仏坂切通し、極楽寺坂切通しを抜け、稲村が崎、七里が浜を伝い、腰越、片瀬を経て黄昏どきには小田原まで逃げ延びたが、そのあいだに警固の兵は悉く討ち取られ、途中上杉氏定も深傷に耐えられず、藤澤道場（遊行寺）に入り自刃した。

しかし、小田原も安穏の地ではなく、禪秀に心を寄せる土肥、土屋の手勢に宿へ火をかけられたので、ふたたび逃れて箱根の山中で夜を明かした。

持氏は、混乱の中で憲基を見失ってしまったが、さいわい翌七日午の刻ごろに箱根別当証實と出会い、その案内で駿河の大森館（裾野市）に入った。

だが、ここもまた禪秀方の甲斐に近く危険と思われたので、結局藤澤で自刃した上杉氏定の婿で駿河守護の今川上總介範政を頼り、瀬名屋敷（静岡市）に落ち着いた。

いっぽう、持氏と逸れた憲基は、伊豆の國清寺に案内されたが、禪秀の追手に怯えて落ち着かず、北へ奔って叔父の越後守護上杉房方の許へ身を潜めた。

討ち漏らした悔いは残るが、持氏と憲基を追放したことで、禪秀の蹶起はいちおう成功した。

鎌倉府は、滿隆が関東公方に坐り、禪秀が管領に返り咲く手筈になっていたが、義嗣のほうはどうなったのか、蹶起の報らせはまだ届いていなかった。

幕府に変化がないとすれば、果たして将軍義持が鎌倉府の新体制を認証するかどうか、禪秀は不安だった。

その頃、今川範政が禪秀の暴挙を京へ注進していた。

九

今川の急使が京へ着いたのは、十三日の夕刻であった。

幕府では将軍義持が高辻烏丸の因幡堂参籠で不在だったので、主な守護大名たちが集まって鳩首協議した。

だが、彼らは東国の複雑な政治情勢に疎く、まだ義嗣の叛意にも気付いていなかったので、事態をどう収拾したらよいか対策の立てようがないまま、拱手傍観した。

ほどなく巷間では、東国の争乱について、

「禪秀が公方の母を犯したので、激怒した公方が禪秀を討とうとしたのが事件の起こりだ」

という卑俗な噂がまことしやかに流れはじめた。

では、義嗣のほうはいったいどうなったのか。

こちらは、またしても挙兵に失敗してしまった。

義嗣は、拗ね者になってしまっていたので、幕府の宿将たちから見放されていたし、手勢も持っていなかったので、謀叛を企てること自体所詮無理な話であった。

僅かに、義嗣に好意を寄せる反義持派の守護大名や、比叡山と興福寺の僧兵などを当てにしてみたのだが、彼

らは慎重で、容易に起とうとはしなかった。
万策尽きて、断念せざるを得なくなり、謀叛の計画が泡沫と消え去ると、熱病から醒めた義嗣は、急に自分の行動が空恐ろしくなってきて、密かに屋敷を出ると、高雄山神護寺へ逃れ、髻を切って出家し、遁世を装った。
幕府は、義嗣の逃亡で謀叛計画を知り、驚愕した。
将軍義持は、ただちに神護寺へ追手を差し向けて義嗣の身柄を拘束すると、父義満が建立し夢窓國師を開山とした臨済宗相國寺に監禁しておき、近臣の日野持光、山科教高らを捕えて背後関係の調査を急がせた。
調査がすすむにつれて、事件の重大さに気付いた。
それまで、近畿以西や東海、北陸に本拠を持つ幕府の守護大名たちは、東国で起こった満隆、禅秀の騒動を、
—対岸の火事。
と安易にみていたのである。
ところが、未然に発覚した義嗣の謀叛計画が鎌倉を乗っ取った満隆との密約によるものであったことが明らかになると、火の手はすでに幕府の膝許にまで及んでいたわけで、その意外な事実に吃驚仰天し、大いに慌てた。
激怒した将軍義持は、今川範政と上杉房方に満隆、禅秀討伐を命じたのにつづき、山名時熙にも幕府をあげて持氏を救援するよう下知した。
その頃、関東では禅秀軍が東に西に目紛しく駆け廻って、持氏、憲基の残党鎮圧に躍起になっていたが、しかし、残り火の燻りは容易に消えなかった。
いかに持氏が高慢横暴であろうとも、公方を排斥した禅秀を非難する保守派の国人たちが意外に多かった。
禅秀が、それら国人たちの掃討に手古摺っているあいだに、江戸、豊島、二階堂、宍戸の国人たちと南一揆が入間川（埼玉県狭山市）で禅秀打倒の旗幟を掲げた。
禅秀は、ただちに持仲に憲方を副えて小机島（横浜市港北区）まで兵をすすめさせた。
両軍は、十一月二十三日に世谷原（横浜市瀬谷区）で衝突し、終日の合戦となったが、憲方軍は敗れて鎌倉へ逃げ帰り、持仲軍も苦戦をつづけながら二十五日になって辛うじて虎口を脱し、敗走してきた。
禅秀軍の思わぬ敗北であった。
そのことが関東一円に伝わると、それまで態度を曖昧にしていた国人たちも一斉に禅秀打倒に立ち上がった。
ことに上野では、蹶起のときに先鋒をつとめての大功を鼻にかけ、高慢な振る舞いの多い岩松満純を苦々しく思う新田一族の里見、鳥山、額田、大島、堀口らの国人たちは、かつて持氏の祖父二代公方氏満が将軍家と不仲になったとき、自分の所領を分与して与党にと頼られた恩義を感じて、持氏に荷担することに決した。
そして、出家していた新田義貞の孫六郎を還俗させて総大将にいただくと、館林のあたりに打って出て上野の大半を従えたので、由良、横瀬の一族や長尾らの国人た

ちも同調して十二月十八日に岩松軍と合戦になり、家老の金井新左衛門を討ち取った。
怒った岩松満純は、大軍を率いて新田総軍と二十二日に合戦を挑んだが、逆に追い散らされてしまった。
蹶起に成功して、いちどは鎌倉府を掌握した禅秀だったが、その後の形勢は次第に不利に転じていった。

十

年が明けた。
正月早々、将軍義持の命を受けた上杉房方が、憲基とともに越後守護家の総力を挙げ、信濃守護小笠原政康と連合して攻めてくるとの報を受けた禅秀は、ただちに軍議を開くにあたり並居る国人たちに所信を披瀝した。
「あらためて申すまでもないが、このたび儂が山内憲基を追放したのは怨みに因るものではない。公方に取り入り鎌倉府を私しようと謀っている憲基を斥けるために起ったのじゃ。公方の身勝手を糺そうとしてきた儂が正義であったことは各々がたが多数馳せ参じてくれたことで証明された。儂は断じて謀叛人ではないゆえ、公方に弓引く心算は毛頭ないが、仕掛けられたからには受けて立つより仕方がない。儂はこの関東の地を王道楽土にするために、死力を尽くして鎌倉府を守り通す覚悟である」
それは、心ならずも幕府軍を迎え撃たねばならぬ禅秀の悲壮な決意であった。
「われらとてもおなじでござる」
列座の国人たちは、あらためて禅秀に同調した。
「なんとしても勝たねばならぬ。儂は、各々がたの助勢を頼もしく思っておる。ご一同、存分に働かれよ」
それから一刻余りの軍議を終え、合戦の準備を急いだ。
禅秀は、小五郎と彌太郎に軍仕度を手伝わせながら、
「こたびの合戦は手強いぞ。心してかかれよ」
と諭した。
「われらはもとよりお屋形様と生死をともにいたす覚悟でござりますれば、ご案じ召されるな。近習として恥じぬ働きをしてご覧に入れまする。彌太郎、後れまいぞ」
「おお」
二人は、眼と眼で奮闘を誓い合った。
「両人とも殊勝じや。満足に思うぞ」
禅秀は、大きく頷きながら、二人に微笑をおくった。
そして、
「なれど、小五郎も彌太郎も逸って犬死にするでないぞ」
と親代わりの情けをかけた。
大町彌太郎は、嬰児のときに両親を喪い、禅秀の許で育てられた。秋山小五郎とともに天涯孤独であった。
その日のうちに鎌倉を発向した禅秀軍は、途中各地で南関東の土豪たちの支援を得て世谷原まですすみ、そこ

を合戦の地に選んで、遠征してくる越後、信濃連合軍を迎え撃つ準備にとりかかった。

禅秀は、陣備えを具に見て廻りながら、

（この布陣でかならず勝てる）

そう確信した。

やがて、この世谷原を舞台にして、禅秀軍と山内軍同族同士の血で血を洗う死闘が展開されようとしていた。

緒戦は、南一揆と江戸、豊島両軍が相手だったが、半刻ほどの合戦で退散させると、追撃を武田軍に任せた。

禅秀軍には、さして損耗はなかった。

禅秀は、陣容を立て直すと越後、信濃連合軍を待った。

遠征軍が到着したのは、八日の午の刻近くであった。

満を持していた禅秀軍が、すぐに戦端を開いた。

合戦は、両軍一進一退の激闘が二刻余りにも及んだ。

越後、信濃連合軍は精鋭揃いで、遠征の疲れも見せず攻め掛かってくるので、禅秀軍は思いのほか手古摺った。

日暮れ近くになって、地の利を得た禅秀軍が一瞬の隙を衝き、ここぞと一気呵成に総攻撃をかけたのが効を奏して、漸く連合軍を撃退することが出来た。

激戦のあとの世谷原は、両軍将兵の屍が累々と横たわり、眼を覆う惨状を呈した。

予想外の兵力を損耗した苦しい合戦だっただけに、禅秀の勝利の喜びは格別だった。

今川の動きが気になったが、明日鎌倉へ帰還し、幕府に恭順の意を表することにして、疲労困憊した将兵たちを野営させると、調達した酒肴を振る舞い、労を犒った。

そして、禅秀自身も本陣に寛ぎ、満隆、持仲とともに勝利の美酒を酌み交わしたが、疲労のあとのまわりは早く、ほどなくして前後不覚に酔い潰れてしまった。

その頃、今川範政は禅秀の留守を狙って鎌倉を占拠すべく、箱根を越えて小田原の近くまで迫ってきていたのであるが、その報らせはまだ禅秀の許に届かなかった。

月光に蒼白く照らし出された世谷原は、不気味な静寂に包まれていた。

夜明け近くなって、ときならぬ馬蹄の響きが禅秀の深い眠りを破った。

（すわ、なにごと）

跳ね起きたところへ、小五郎と彌太郎が遅れた報らせを受けて駆け込んできた。

「今川軍が、小田原を過ぎて鎌倉へ向かっているそうにござりまする」

「なに、今川がもうそこまできておるのか。失敗った。小五郎、一刻も猶予はならぬ。陣触れを急げ」

「はい」

返事もそこそこに小五郎は駆け去った。

「お屋形様、急ぎお仕度を――」

彌太郎が禅秀を急き立てた。

やがて、出陣を報らせる法螺貝が静寂を破って鳴り渡ると、世谷原は一変して喧騒の坩堝と化した。

禅秀は、軍仕度を急ぎながら、昨日の合戦のあと、ただちに鎌倉へとって返して衣服をあらため、今川範政を迎えるのを怠ったことがひどく悔やまれたが、すぐに、

（いまさら悔やんでみても、あの長い激戦のあと、疲労困憊した将兵たちを鎌倉へ引き揚げさせることは到底無理であったのだから、致し方ないわ）

と打ち消して、気持を切り替えた。

そして、

（まだ後れ馳せとは限らぬ。先んじて鎌倉へ入れば、幕府に恭順の意を表して誤解を払拭することが出来る）

そう自分自身を鼓舞した。

（墳墓の地関東を王道楽土にするためにも、今川殿に真意を訴え、幕府へよしなに執り成して貰わねばならぬ）

禅秀は、兜の緒を締めると床几を蹴って立ち上がった。

昨夜は冴え渡っていた空が、今暁はすっかり暗雲に蓋われてしまっていることが、不吉な予感を抱かせた。

世谷原を陣払いした禅秀軍は、一路鎌倉へ急いだ。

しかし、禅秀の希いも虚しく、鎌倉の北方へ戻ったときには、すでに今川軍が手薬煉引いて待ち構えていた。

一歩後れた禅秀は、迎え撃たれる恰好になってしまい、殺気立つ今川軍に恭順談合の手懸かりなどなかった。

禅秀は、ひと息入れる暇もなく、もはや立ち塞がる今川軍目掛けて遮二無二突入せざるを得なくなった。

「是非に及ばぬ。一戦交えるもやむなし。勝敗はときの運じゃ。死力を尽くせばかならず道はひらけようぞ」

禅秀は、そう全軍を叱咤激励した。

ただちに合戦の幕は切って落とされた。

緒戦は互角の小競り合いがつづいて、一進一退が繰り返されたが、ほどなく、連戦を強いられた禅秀軍と新手の今川軍とのあいだに戦力の差が歴然としはじめて、禅秀軍は押し捲られ、後退を余儀なくされた。

合戦は、どんな場合も攻め込んでいるときは勢いに乗って弾みがつくが、いったん受け身にまわると途端に士気が低下して、戦力が半減してしまうものである。

劣勢に立って戦況が捗々しくなくなり、そのうえ、いつ背後から越後、信濃連合軍が盛り返してくるかも知れぬという不安な状態に陥ると、与党の国人たちのなかから禅秀を見限って今川方に内応する者が出はじめた。

戦況次第で離合集散するのは当然のことであった。

忠誠より利に走る脆さが表面化したのである。

〈武士は二君に仕えず〉

〈裏切りは破廉恥な行為として蔑む〉

などというのは、江戸時代以降のことである。

前にも述べた〈一所懸命〉という慣用語が生まれたよ

うに、国人たちは土地に執着し、領地を命懸けで守っていたから、武功を立てれば恩賞に新地を貰える好機が到来すれば、そのために生命を賭けたし、逆に領地を失いそうな羽目に陥れば、形振り構わず裏切ったのである。

与党の国人たちの離叛が続出して、陣形が崩れた。

禅秀は、陣容立て直しに躍起になり、降りはじめた雪の中を駆け廻って全軍を叱咤激励し、自ら陣頭に立った。

だが、今川軍の攻撃は凄まじく、押し返せなかった。

「怯むなッ、怯むなッ」

禅秀は、軍団の後方へ廻り、退くのを押し留めようと懸命になったが、いったん守勢に立った戦闘隊形は抑えようがなく、浮き足立った敗走者の群れは立ちはだかる禅秀を無視して、後方へ雲を霞と逃げ散って行った。

昨日、南一揆や江戸、豊島軍を深追いしていった武田軍の不在が、この期に及んで致命的になった。

「止まれッ、留まれッ」

禅秀の絶叫は喧噪に掻き消され、采配は空を切った。

禅秀軍は、今川軍に完膚なきまでに打ちのめされた。

やがて今川軍は、踏み留まる禅秀軍を遠巻きにした。

禅秀は、眼の前で起こった敗戦に呆然となったが、

(運に見放されては、足掻いても詮ない)

と覚り、潔く、

(もはやこれまで)

と諦めた。

いかに禅秀と雖も、精鋭の今川軍には勝てなかった。

手負いの小五郎と彌太郎らが確りと両脇を固めている禅秀、満隆、持仲の周りに、郎党たちが馬を寄せてきた。

禅秀は、集まってきた郎党たちを見廻して、

「かくなるうえは、囲みを突き破って鎌倉へ戻ろうぞ」

そう叫ぶと、雄々しく馬腹を蹴った。

ひと塊りの馬群が、おりから降り頻る雪の中を疾風の如く今川軍目掛けて突進した。

正面の敵が間近に迫り、全員が斬り込み態勢に入った。

そのとき、幸運にも抜刀隊の鬼気迫る気配に恐れをなした今川軍の将兵たちが、たじろいで囲みを解いた。

禅秀の一団は、その隙を衝いて敵中を脱出した。

十一

漸く鎌倉へ辿り着いた禅秀だったが、孤立した現在はかつて関東管領として権勢を誇ったこの地にも身の置きどころがなく、辛うじて出家させた六子鶴岡若宮別当宝性院快尊法印の神宮寺雪ノ下御坊に立て籠もった。

しかし、こうなってしまってはさすがの禅秀も為す術がなく、ただ今川軍の総攻撃を待つばかりであった。

禅秀は、生き残った郎党たちを境内に集めると、

「命運尽きたいまとなっては、僅か三月とはいえ鎌倉府を掌握したことが一期の思い出となった。叛逆者の汚名を着せられ追討軍に敗れたからには生き恥は晒せぬ。この儂を信じて従いてきてくれた其方たちにあらためて礼を申すとともに、期待を裏切ったことを済まなく思う」

とその労を犒い、謝罪した。

郎党たちは翻意を迫ったが、禅秀の意志は固かった。

禅秀は、小五郎と彌太郎を傍へ呼ぶと、

「其方たちは春秋に富む身なれば、死に急ぐことはない。今川軍に囲まれぬうちに一刻も早くこの場を落ちよ」

と命じた。

小五郎は、憮然として、

「慮外なことを仰せられます。先人は、死すべきときに死せざれば死にまさる恥あり。と教えておりまする」

そう反駁した。

彌太郎も、小五郎のあとを受けて、

「われら両人は、お屋形様と生死をともにいたすべく今日までお側にお仕えして参りました。お屋形様の亡きあと、なにゆえわれらだけが生き長らえられましょうぞ」

と覚悟のほどを披瀝した。

「其方たちの殊勝な心掛け、儂は嬉しく思うぞ」

禅秀は、眼を潤ませた。

雪は夕刻近くになって歇み、西の空が茜色に染まった。

その夕焼空を背にして、充分休養をとった今川軍が、禅秀の息の根を止めるべく南下してきて鎌倉を囲んだ。

報らせを受けた禅秀は、命旦日に迫ったことを覚った。

(不覚をとっては恥を晒す)

禅秀は、ふたたび郎党たちを集めると、

「いよいよ別離のときが参った。来世でまた会おうぞ」

そう訣別の辞を述べた。

そして、

「重ねて申す。義理立て無用。其方たちは儂の自裁を見届けたのちは、新しい天地を求めて今川の軍門に降れ」

そう言い遺すと、郎党たちが泣き叫ぶ声を後にして、憲方、憲春、快尊僧都、禅瑾の子等を従え、満隆、持仲に供奉して伽藍の中へ入って行った。

小五郎と彌太郎が、急いで後を追った。

禅秀ら七人は、薄暗い内部の中央で車座になった。

禅秀は、しばらく瞑目したのち、静かに眼をあけると、

「幕府に容れられず無念であったが、憲基を追放して正義の筋目をとおし、溜飲を下げた」

そう呟いて、述懐した。

不運を嘆いていた満隆も、漸く諦めの境地に達して、

「禅秀、すまなんだな」

と頭を下げると、

「かくなるうえは手を携えて、黄泉の国へ参ろうのう」
そう言うと、感極まって禅秀の掌を固く握りしめた。
禅秀は、首肯き返すと、正面を屹度見据えて、
「小五郎、彌太郎。よいか。儂の最期を確と見届けよ」
と言い放った。
「お屋形様ッ」
二人は、涙ながらに確と禅秀の自裁を見届けた。
小五郎と彌太郎が、伽藍に火を放ち、蹌踉とした足取りで戸外へ出ると、境内は宛ら地獄と化していた。
一族の男女四十二人と郎党五十五人が、全員打ち揃って禅秀のあとを追いはじめていたのである。
「彌太郎、後れまいぞ」
「おお、小五郎急げ」
二人は、すでに亡骸になりつつある者たちを跨いで、広い境内の一隅に聳える欅の大木の下へ向かった。
そして、そこに対座して互いに相手を見詰め合った。
周囲の断末魔の呻きが、読経のように聞こえた。
「この鎌倉で同じ年に産声を上げた者同士が、最期もまた連れ立つことになろうとは、よくよく深い縁じゃな」
「七たび生まれ変わって、ともに生きようぞ」
二人は短い別離の言葉を交わすと、徐ろに刀を抜いた。
「彌太郎、仕損じまいぞ」
「心得た。いざ、参るぞ」
小五郎と彌太郎は、どちらからともなく擦り寄って、たがいに相手の胸倉を確り掴むと、しずかに刀を引いた。
「行くぞッ」
睨み合ってそう叫んだあと、刃が肉を突き通す鈍い音とともに二人はその場にどうと斃れた。
殉死者の亡骸で埋まった神宮寺雪ノ下御坊の境内は、伽藍を焼く紅蓮の炎に映えて凄惨をきわめた。
この日、応永二十四年正月十日――。
雪雲が去ったあとの暗い空に、昨夜世谷原を照らしていたあの白い月が、ひっそりと浮かんでいた。
（了）

暗殺の叙事詩　二

島津隆子

六　義時の裏切り

義時と、その弟時房が父の時政邸を訪れたのは、それから一ヶ月後のある夜のことであった。
行燈の灯が揺らぐ中で、義時は言った。
「稲毛重成の一件は、まこと冷や汗ものにございましたなぁ」
「重成に直接手を下した者は誰じゃ」
と時政が聞いた。
「三浦義村にございます」
と時房。
「おのれ三浦めが……」
と時房は怒気をこめたが、いつもの迫力には欠けていた。そして、つづける。
「重成は三浦にすべてを白状したと申すのか？」
「そのようにございます。三浦義村殿は何もかも存じておるということでござる」
と時房が言う。
「おのれ、三浦……」
ともう一度時政が怒りをこめて言うと、
「今は鎌倉中の同情が、故重忠殿に集まっております。ここで三浦義村を攻めれば、御家人の半数以上は三浦に付きまするぞ」
と義時は時政を諫めるように言った。義時は「半数以上」のところの語気を強めた。それは時政に着く御家人は、今や半数以下ということを意味している。それほど「執権」といっても力が無く、人気がないことを、暗に言ったのである。
時政には何となく、わが子ながら義時が薄気味悪い存在に見えてくるのだった。そして思った。
（この男は、何を考えているのか……）
「北条家がより強く幕府の実権を握るためには、新し

い感覚が必要でございましょうなぁ」
と義時は言い残して帰って行ったが、時政は心穏やかでないものを実感していた。
そんな折も折、時政とお牧の方は、また大きなミスを犯した。二人で、
「あなたが執権でいる内に、今の将軍家・実朝殿を廃して、その跡に京の守護職である朝雅を……」
などと話し合っているのを、政子の間者である時政邸の女中に聞かれてしまったのだ。
政子はすぐに弟の義時と時房を呼びつけた。
「父上殿はもはや牧殿の思うがままに繰られておられる。わが父上ながら、あの呆けぶりは異常じゃ。父上を伊豆へ隠退させてくだされ」
姉政子の言いぶんに、義時と時房はわが意を得たりと頷き合ったことはいうまでもない。すかさず時房が問う。
「で、姉上、どのような形で？」
「出家させるのです……」
政子はにべもなく、きっぱりと答えた。
「で、段取りは」
時房の執拗な聞き方に、義時はしたり顔で言った。
「まぁよい、あとの方法はこのわしに任せよ」
七月十九日、義時は自邸に招いた三浦義村にもちかけた。
「尼御台がそう申すのじゃ。頼まれてくれるか」
義時の申し出を、義村は二つ返事で承諾した。やはりいざとなれば〝尼将軍〟と呼ばれる政子の鶴の一声は強いとみえる。ここでも義時は自分を安全圏に置いた。
こうして、名越の時政邸にいた将軍実朝は、政子の邸へ移ることになった。
時政は実朝を迎えにきた三浦義村に向かい、
「お前は謀叛をする気か！」
と一喝した。義村は、
「いや、いや、謀叛など、とんでもございませぬ。これは尼御台さまのご命令でございますれば……」
と柳に風と受け流し、巧みに時政を言いくるめると、実朝を時政邸から連れ出すことに成功したのである。
「おのれ！　今に必ずや糾弾してくれようぞ！」
時政は地団駄を踏んで口惜しがったが、相手が政子では一目置かざるを得なかった。
三浦義村が実朝のお供をして、名越の邸から去った後へ、今度は数百騎の軍勢を率いた北条義時が乗り込んで来た。
「おお、よいところへ。すぐに三浦を追ってくれい」
とわめき立てる時政に、義時は冷たく言った。
「父上殿、何も言わずに伊豆の生地である北条へご隠

退くだされ。執権職は本日ただ今、私が引き継ぎ申す。それが北条家のため、幕府のためでござる。このことは姉上もご承知であり、和田、三浦その他大多数の御家人の意志でもござる。畠山殿の冥福のためにも、是非ご承認くだされ……」
義時の言葉に時政はすべてを悟った。謀られていたのは自分であること。自分がこの息子に繰られていたことを。
（何とわしはバカ者だったことか。重忠と抱き合わせで葬られようとは……）
恨めしく思うと同時に、いまさらながら義時という人間が怪物のように感じられて恐れおののいた。
翌七月二十日、頭を丸め〝げさがけ〟の出家姿で、わずかな供を連れて鎌倉を去った時政が、再びこの地を踏むことはなかった。これは皆、宿敵政子の差しがねであった。
時にわずか十四歳の実朝は思う。
（怖ろしい魔手はとうとうわが身に及ぼうとしたのか。こんな幼い自分に一体どんな罪咎があるというのか）
畠山重忠が滅ぼされた元久二年（一二〇五）七月、時政は女婿の朝雅を将軍に立てようとしたことは前に記した。そして、朝雅と計り実朝殺害を企てたことは運命のいたずらか、失敗に帰したのだった。
将軍暗殺の露呈は重大なことである。政子は父時政を失脚、隠退させて朝雅を斬首した。あの老獪な時政すら、政子の奸計の前にはものの数ではなかったのだ。
（人生において生きるとは、生き残ることだ）
実朝は改めてこの思いを噛みしめるのだった。
それにしても、この忌まわしい鎌倉幕府内部の累々たる屍の山。その屍の上には、さらに留まるところを知らずに屍が重ねられてゆく。
その頃、将軍実朝は妻とともに和歌や蹴鞠など、貴族的な趣味や遊びに没頭していた。
これ以前に実朝は、下野の豪族足利義兼の娘を結婚の相手に薦められたが、拒絶して、公卿坊門信清の娘を望んで妻に迎えていた。
もとより源平の合戦も知らず、父頼朝が名実ともに天下人となった建久二年（一一九一）に生まれた実朝は、生まれながらの〝天下人の子〟であった。
しかも、兄頼家が比企能員という武門の人の手で育てられたのに対し、生まれるとすぐ、母政子の妹である阿波局と、その夫・阿野会成（頼朝の弟で僧侶）の手によって、
「兄頼家のように武骨者にならないように……」
と京風の貴族的な教養を身につけるべく、大事に育て

七　和田一族の滅亡

建暦二年（一二一二）には義時五十歳、時房三十八歳、泰時は二十九歳であった。そして、機会は間もなく訪れようとしていた。

十二月半ば、信濃国で泉親衡という豪族が、亡き頼家の遺児、千手を擁して、幕府というより北条家に対し、反乱を企てた。鎌倉在住の反北条派の御家人たち二百余人を抱き込んでの大陰謀であった。だが、これが発覚したのである。

翌年二月、泉親衡と鎌倉の御家人たちとの間の連絡に当っていた阿静房安念という僧が捕えられ、義時の許に連行された。

義時がじかに取り調べに当った。巧みな懐柔と誘導尋問にかかった安念は、一味の名前をはじめ、すべてをペラペラと白状してしまったのだ。

三月二日、この日鎌倉には朝から霙まじりの雪が降っていた。その雪の中で、謀叛人の大検挙が行われた。

義時は手際よく奇襲をかけて、抵抗する間を与えず、一網打尽にしてしまった。その数二百余人。この中に侍所別当和田義盛の四男義直、五男義重が連座していた。

だが、ここで不思議なことが起こる。検挙された御家人たちは、連日、峻烈な取調べを受けたことは言うまでもないが、首謀者の千手と泉親片衡が何の科も問われず

られた。言ってみれば、実朝は武勇一辺倒の鎌倉武士とは、どこか肌が合わない将軍貴族であった。

執権義時も、

「将軍はそれでよいのじゃ。政治はわしが執る！」

とますます政権から実朝を遠ざけたのである。

こうして義時は、執権と同時に自ら相模守を任じ、重忠に変わって弟時房を武蔵守として、膝元の相模・武蔵を兄弟でがっちりと固めた。

さらに長男泰時を二十歳の若さで伊豆守にするなど、冷徹な計算の上に立って、幕政を思うがままに動かしていった。

だが、北条一族にとって、まだ穏やかでない存在があった。和田義盛と三浦義村の両強豪である。

「和田、三浦をいずれ何とかせねばなるまいな……」

冷徹非情な辣腕政治家の義時は、長男泰時と弟時房に向かっていった。

「和田と三浦は固く握手をしておりますが、このままくっつけて置くのは危険でござる。とにかく、お互いを離反させねばなりませぬなぁ」

と時房。

「和田義盛殿は旧い型の武将で情熱家にございますれば、和田殿の方が扱い易いと思われます」

泰時がずばりと言ってのけた。

に捕えられなかったのだ。

しかもこんな大事件の折も折、和田義盛は鎌倉を離れていた。二男義氏、三男義秀、六男義信らを連れて、領地の上総国（千葉県）に行っていた。

だが、事変を聞くや、馬を跳ばして鎌倉に帰ってきた。

「父上、一大事が起こりました！」

事件のあらましを報告しようとする長男常盛に向かって、苛立たしげに、

「そんなことはわかっておる。それで義直や義重はどうなったのじゃ。牢にでも入っておるのか……」

義盛は常盛に聞くというよりも、ひとり憤慨していた。それからわずかな供を連れ、将軍家実朝の御所に駆けつけた。実朝の傍には執権義時がいる。義盛は実朝に向かい、恭しくお辞儀をしてから、義時の方に向き直って目礼をしただけで、かなり居丈高に言う。

「執権殿、この騒ぎは一体何ごとでござる。ご説明願おう」

「左衛門尉、そう慌てなさるな。今、説明させるわ」

磊落な表情をつくった義時は側近を呼び、事の次第を説明させた。一通りの説明を聞き終わった義盛は、吐き出すように言い放つ。

「そんなバカなことがあるはずはござらぬ。この義盛の一門が将軍家に対して謀叛じゃと。何たる戯けごとを……そんなことがあってなるものか！」

「しかし、確かに謀叛の企みはあったのでござる」

冷ややかに申し立てる側近に、義盛はなおも、

「企み、企みと言うが、その安念とかいう坊主の作り事かもしれぬではないか」

「作り事ではありませぬ。事実を認めた御家人が何人かおりまする」

側近の声は依然として冷静である。

「ふん、畠山殿の時と同じく、でっち上げの事件ではないのか。あの時の二の舞はごめんでござるわ」

この義盛の言葉は義時にとって痛かった。古傷に触れたようなものだ。だが、義時は何食わぬ顔で、

「左衛門尉、そちは先ほど、将軍家に対して、謀叛など決して無いと言われたのぅ？」

「ああ、言いましたとも。義盛、命にかえても絶対そのようなことはござらぬと信じておる」

「なるほど、相当な確信よな。ところが、将軍家に対しては謀叛の意志なくも、北条家に対してあるとしたら、左衛門尉、何とする」

冷厳な義時の言葉に、瞬間、ハッと胸をつかれた義盛は言葉に窮した。

（まさか！　しかし、あり得ないことではない……何としたことか）

先刻までの勢いはどこへやら、困惑の表情を浮かべた義盛は、将軍と執権を前にして憮然としたが、気を取り

直すと、
「して、私の息子どもは、その罪を認めたのでござるか」
と詰め寄った。義時が何か言おうとするのを、手で制して、実朝が静かに首を横に振った。喜んだのは義盛である。この時とばかり、
「さもあろう。ならば即刻息子どもを釈放されたい」
と義盛に矛先を向けて迫った。そして、さらに実朝に向かい、
「三代様、恐れながら、この和田左衛門尉義盛は……」
と、頼朝公の平氏打倒の挙から、幾多の源平の合戦、鎌倉幕府創業に至る自分の功績、武勇、忠勤を述べた。
「……義盛、よくわかった。このたびの謀叛の疑い、完全に晴れたわけではないが、その方の将軍家に対する忠節と勲功に免じて、この実朝が、そちの息子たちを許そうぞ」
ときっぱりと判決を下した。
「ははっ……」
その場に平伏した義盛は、思わず涙を落とした。
義時は、将軍実朝と忠臣義盛のやりとりの一部始終を、曇りない眼で、しかと見て取ったが、心中には炎のような憎悪が渦巻くのを覚えた。そして、温和とばかり思っていた実朝の、意外な意志表示にあって、うろたえていた。同時に義時は、自分の水も洩らさぬ冷徹な計算が音を立てて崩れてゆくのを感じとってもいた。
（何とか崩壊は食い止めねばなるまい。だが、意外のことよのう）
義時は、そこに恐るべき強敵を見ていた。かつて一度も遭ったことのない敵―自分のライバルの実像を、一見弱々しい実朝の貴族的な容貌のうちに見出していた。
建保元年（一二一三）五月、義盛は一族で義時を襲ったのである。
しかし、全国の武将を統率する軍事警察の別当、つまり長官として、北条一族と肩を並べる存在の和田義盛だったが、三浦義村などの裏切りに遭い、鎌倉由比ケ浜に一族諸共滅亡していった。
こうして頼朝以来の重臣、武将のことごとくは北条一族によって粛清され、名実ともに義時が幕府の実権を握ったのである。もちろんその陰に、義時の姉政子の存在があることは言うまでもない。

八　実朝孤影

何という華麗なる殺戮の叙事詩であろうか。
実朝はただ独り北条一族の圏外にいる自分を思った。源氏が最後の支柱と頼む老臣義盛と実朝とは、互いに心の通い合う主従であった。その義盛までもが討たれてしまった今となっては、将軍とは名ばかりの裸同然の姿で、北条一族の前に曝されているようなものである。実朝は、

萩の花くれぐれまでもありつるが
　月出でて見るになきが悲しき

と詠んで、亡き義盛に哀悼を捧げ、冥福を祈る。
だが、どこからか六十七歳の老臣義盛の悲嘆の慟哭が聞こえてくるようである。そして、一人取り残されてしまった孤独のうちに、実朝は不吉な夢をみる……。
時に灯消え、人定まりて、悄然として音無し……。夢の如く青女一人、前庭を奔り隔る、頻りに問はしめ給ふと雖も、遂に以って名謁らず、而して漸く門外に至るの程、俄かに光物有り、頗る松明の光の如し、
実朝が見たものは確かに一人の青女であった。あるいは松明のように光るものであったような。幻なのか現実なのか。この世のものなのか、あの世のものなのか。青女は母政子の青い鬼火のような姿であったろうか。
実朝は孤独だった。
（だが、今さら自分の孤独を思い煩うこともない。それは物心ついた頃から自分が味わいつくした人生そのものなのだから。自分はこれからどうすべきなのか。将軍として、源氏の直系として、その片鱗でも見せるべきか。策には策を以って対抗すべきなのか。だが、北条一族の持つあの底知れぬ圧倒的な権謀術策に、どう対抗できるというのだろう。自分は将軍であるにしては余りに歌人的でありはしないか。
懊悩するわが心を慰め得る唯一のものは、やはり歌以外にはあるまい。吹けば一瞬にして消し飛んでしまうばかりのこの儚い命を、歴史に留めることこそ自分に残されたせめてもの生きた証ではないか。歴史を愛する者にしか歴史は美しくないのと同様に、歌を愛する者にしか歌は美しくない）
実朝は苛立たしい思いにじっと耐えながら、和歌の道を奥へと入ってゆく。

夕されば汐風寒し波間より
　みゆる小島に雪は降りつつ

夕闇が迫り、冷たい汐風が吹きつのる。そんな中で冬の荒涼とした海は波立ち、見え隠れする遥かな小島に雪が降りしきっている。
鮮やかすぎるほどの孤独な実朝の心の叙景である。また、そんな侘しい心を一気に払拭するかのように詠う。

大海の磯もとどろに寄する波
われて砕けてさけて散るかも

大海の磯に怒涛のように寄せる大波に、木端微塵に砕け散るわが身を、ある被虐的壮快さをもって詠ってはみても、荒磯に独り置き去られた己の姿を見るばかりの実朝である。

うば玉や闇の暗きに雨雲の
八重雲がくれ雁ぞ鳴くなる

「黒」と題するこの歌には実に暗鬱な心理が滲む。題名にも、もはや歴史をこえて、現代にまで通じる抽象性さえ感じられる。

また、欲望とかすかな生命の灯火のなかで、ひとたびは信仰に救いを求めたのだろうか。

神といひ仏といふも世の中の
人の心のほのかのものかは

「心の心をよめる」と題するこの歌からは、人に博愛を施すどころか、自身が背負う暗黒の宿命の渦中で、神や仏に頼るなどという生易しい甘さは、とうに眼底を払って消え失せている。

実朝の今ある現実はもっとも陰惨な、ほとんど百鬼夜行の集団のただ中である。実朝はまさしく実感する。人生において生きるということは、生き残ることだと。

しかし、生き残ることが、これほどの苦痛をもって実朝に迫ってこようとは、何という生きざまであろうか。

義仲、義経、範頼、景時、全成、能員、若狭局、一幡、頼雅、重忠、義盛と、皆まるで殺されるために順番を待っていたようなものだ。

彼らの多くは鎌倉幕府を起し、その支柱となるために生死を分け合った、史上稀にみる名将、忠臣であった。

その天晴れな人たちの亡き列に加わることは、名誉でこそあれ、どうして死を惜しむことがあろう。

だが、ただ一人生き残ることが、これほどの残酷さを実感することなら、これこそ生きながらの地獄ではないだろうか。

炎のみ虚空に満てる阿鼻地獄
行方もなしと言うもはかなし

実朝がそこに見たものは、単なる空想でも比喩でもない。正真正銘生きながらの地獄を見ていたのだ。無残にも親が子を殺す事実をである。

そのようなことができる母政子とはどのような人間なのかと、考えれば考えるほど、実朝の心は死にまさる寂しさを味わうのだ。

いとほしや見るに涙もとどまらず
親もなき子の母をたずぬる

これは「道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを、そのあたりの人に尋ねしかば、父母なむ身をまかりしに云々」と題されている。

道の辺に母を尋ねてさ迷い泣く童こそ、実朝自身ではなかったか。あるいは童の手をとって共に泣きたかったのではあるまいか。

実朝はあの杳い先祖、源氏に起った悲劇の発端が、今こそ自身に迫ってきたことを予感する。

為義が義朝に斬られるとき、地獄に堕ちるであろうわが子のために「子の親を思わざりけるよ」と言いながら「助けさせ給え」と叫び祈ったことを想った。

物いわぬ四方の獣すらだにも
哀れなるかなや親の子を思ふ

これは「慈悲の心を」と題したものだが、悪鬼とまがえる哀れなわが母であっても、やはり母には違いない政子に、慈悲の心がさしのべられることを祈ったのである。

寒々とした風が、はだけた実朝の純白の胸を吹きぬけて通る感がある。実朝にとってはもうどんな術策も武装も必要ではなかった。寒々とした風にすら犯され難い、純潔の美を示している。

吹く風の涼しくもあるか自から
山の蝉鳴きて秋は来にけり

九　夢みた逃亡

澄み渡るような気持ですべてを諦観したと思えた実朝に、生き残ることへの人間的な野心を目覚めさせる事態が起きた。

建保四年（一二一六）六月のことである。

奈良東大寺の大仏殿建立の儀式に参列のため、宋から来ていた陳和卿という高僧に、実朝は面会を申し入れた。だが、多くの人々、なかんずく兄弟を殺しているという理由で、実朝の申し入れは断わられるのであった。

しかし、願いが叶って和卿との面会が実現する。

その場面を簡単に言うと、

陳和卿は将軍実朝に拝謁すると、しきりに号泣して、

「貴方は前世、中国育王山の長老であり、私はその門下にいたのでございます」

と話した。実朝は、

「実は私も六年前の建暦元年六月、夢の中に一人の高僧が出てきて、やはり同じような話をしたことがございます。今、陳和卿の話を聞いて、非常に感激しました。これはひとえに信仰の力としか思えません」

と言うのだ。

そして、陳和卿の勧めによって、ここに有名な実朝の宋渡計画が成ったのである。

実朝は和卿に由比ヶ浜での航海用の大型船の急造を命じた。もとよりこの宋渡計画を聞いた義時や広元など、周囲の諫言はあった。だが実朝が聞く耳を持つはずもなかった。

夢か、狂気か、幻なのか。実朝にとっては宋渡の動機などどうでもよかった。自身を取巻く多くの惨状から、どこへでもいい、脱出できさえすればそれでよかった。例え夢を見ているのだと言われようが、狂気の沙汰だと笑われようが。しかし、心底では仏教、とりわけ禅宗を修得したいという信仰心が実朝を支えていたのだ。しかし、運命はあくまで実朝に味方をしなかった。

宋人和卿が唐船を造り終わり、建保五年四月十七日の今日、数百隻の足夫を諸家人より召し出して、この船を由比浦に浮べようとした。諸人が筋力を尽して午の刻から申の刻に至るまで船を曳くことに尽力したのだ。けれどもこの為体で、唐船を海浦に浮べ出すことができなかったのである。

唐船は空しく朽ち損じてしまった。

望みの唐船が完成し、いよいよ海上に浮かべようとしたが、その船は大きすぎて、どうしても砂浜から引き出すことが出来ず、進水に失敗してしまったのだ。ここで宋渡の計画は挫折してしまい、実朝は宋渡を諦めざるを得なかった。

船を海へ引こうとするより、もっと大きな力が実朝を引き戻していたのかもしれなかった。実朝はどんな想いでその日の夕日を眺めたことだろう。

紅のちしほのまふり山の端に
　日の入るときの空にぞありける

（もしも、船が海にさえ浮かんでくれたなら……）

遠い異国への憧憬と、それが潰えてしまった狂おしいまでの哀しみの眼を夕陽に注ぎ、じっと立ち尽くす実朝の姿があった。

諦観からひとたびは生きる希望に甦った者が、再び悟りの境地へなど戻れるものではない。

しかし、しばらくすると実朝は、これまでの幕府内部に起きた血腥い一連の闘争を巧みに利用しようと、機会を窺っている後鳥羽上皇など朝廷側の動きに、ふと想い当った。そこで実朝は、異様とも思える心の昂ぶりを感じはじめていた。

策には策を以って対抗すること、例え叶わぬまでも最後の一戦を試みることへと、心が動きはじめた。

実朝は〝屈辱に生きるよりは報復に生きる〟ことを選んだのである。

実朝は母政子を中心とする北条一族について改めて考える。

（何が一族をしてこのような狂気に駆り立てるのか。これほどまでして、どうして親子が憎悪し、殺し合わねばならないのか。まるで悪魔に取り憑かれたように、執拗なまでに源氏の血を絶やし、北条一門の天下にしようと、彼らを掻き立てる根本の原因は何なのか……）

実朝は先祖の家系を調べる。そしてそこに、慄然とする事実を見出すのだ。

北条一族の先祖は平家ではないか！

それは紛れも無い事実である。実朝の背筋にぞっとする悪寒が走る。北条家は平貞盛の子維将から続く歴然たる平家一門の家系である。

だが、維将の子維時、そしてその子時家のとき、誰知れず「北条」と名が改まっているのだ。

その明白な事実！　それにしても何という歴史の皮肉であろうか、何という悲劇な歴史の巡りあわせであろうか。

実朝は気も動転するばかりに驚愕した。

その反面、笑いがこみ上げてきた。まさにこれは、悲劇の舞台裏に秘められた茶番劇ではないか。しかし、時の経過とともに、現実に目の前で展開される冷厳な事実に立ち返っていった実朝は、今こそ「源氏」である自身の立場を強く意識した。

（急がねばならない。目前には恐ろしい死の十字架が描かれている）

実朝の脈は早まり、鼓動は高鳴った。

実朝は朝廷側の官位のことごとくを欲して、矢継ぎ早に官位を昇りつめてゆく。

正月に権大納言、二月に近衛大将、十月に内大臣、十二月には右大臣にと、狂気のように栄進していったのである。

山は裂け海はあせなむ世なりとも
　君にふた心わがあらめやも

と詠んで、君、即ち朝廷に対して二心のないことを誓うのであった。実朝の遺したただ一書の「金塊和歌集」は、この歌をもって終っている。それとともに実朝の生

きた証もここまでである。後は「吾妻鏡」「愚管抄」「増鏡」などの史料による他はない。

さて、実朝の朝廷に対するこの異常な行為を、北条一族が指をくわえて黙って見過ごすはずがない。

政子に相談した執権・義時は実朝抹殺に取りかかるのだ。義時は頼家の遺子公暁十九歳を呼んで言った。

「そなたの父を暗殺したのは実朝である」と。

承久元年（一二一九）正月、実朝は右大臣になった。鎌倉八幡宮で拝賀の儀式を執り行った実朝は、夕刻、その長い石段を下りてきた。そして、大銀杏の横を通りかかる。その時、大木の陰から、そっと実朝に近づいてくる女装の人影があった。

その人影が実朝の前を素早く通り去ると、実朝は崩れるようにその場にひれ伏したのである。

実朝は脇腹に焼けつくような激痛を感じた。

倒れ伏したその場の白雪が鮮血に染まる。色鮮やかな紅がぱぁっと雪に滲みてひろがった。

いつか夢にみた一人の青女の姿が実朝の脳裏に浮んだ。そして、その青女こそ、あるいは母の政子ではあるまいかと、混濁する意識の中で思っていた。

実朝、二十八歳の死であった。

薨御の哀傷に耐えず

と「吾妻鏡」は実朝の死を記しているが、もちろん通り一遍の世辞にすぎまい。

女装して実朝を襲った公暁もそれから間もなく義時に討たれて死んだ。いわば風に似ている運命に弄ばれた男たちの叙景である。

完

地に堕ちた韓国の偶像

新井宏

先般の韓国滞在中（平成十七年十一月二十日から十二月七日）、最大のトピックスはソウル大の黄禹錫教授のＥＳ細胞疑惑であった。

なにしろ人クローン胚からＥＳ細胞を作り出すのに世界で初めて成功し、いまや国民的な英雄で、もう既にノーベル賞を受賞したかのように取り扱われ、国家からも莫大な研究費が与えられ、韓国の未来は生命科学にあると持てはやされてきた人物である。その黄教授の研究に疑惑が満ちているというのだから大騒ぎである。

ことの発端は民間テレビ局ＭＢＣ「ＰＤ手帳」による二十二日付け報道であった。黄教授チームの研究に用いられた卵子が、女性研究員から強制的に提供されたものや売買によるものあったという生命倫理上の告発である。

もちろん黄教授側はこれを強く否認し、韓国世論はこれを認めようとした。しかし生命倫理を振りかざす国際世論の前には早期の収拾が必要であった。二日後の二十四日には一転して黄教授は事実関係を認め国民に謝罪し、一切の公職から退くことを表明した。

ここからが韓国らしい反応である。翌二十五日にはＭＢＣ「ＦＤ手帳」のスポンサー十二社の内、十一社が放送に抗議し降板を表明する。これに呼応してＭＢＣに対する抗議デモが起り、不視聴運動がはじまる。

ＭＢＣというテレビ局は有力民放ではあるが、低視聴率に喘いでいた。だからこの反応に経営陣が震え上がる。

しかし現場は既に走っていた。「ＰＤ手帳」はサイエンスに発表された黄教授チームの論文自体に疑惑があることを次回に放送すると予告する。本来なら一致すべき患者のＤＮＡとＥＳ細胞のＤＮＡが一致しない上に、黄教授チーム員からも重大証言を得ているというので

ある。

ここで韓国世論は国民的な英雄、黄教授の擁護のために大合唱を始め、情報提供者を国家犯罪人であるかのように難詰する。その結果、重大証言者と目される金研究員は「強圧下の取材」だとその内容を否定してしまう。これを伝えたのがＭＢＣのライバル局でニュース専門のＹＴＮだったので、ＭＢＣはますます窮地に追い込まれる。もっとも、この報道も後に黄教授の指示によって仕組まれたことが発覚するのだが。

ＭＢＣの経営陣はもはや猶予できなかった。十二月四日には「人権侵害取材」について社告で大々的に国民に謝罪し、「ＰＤ手帳」の主担当を無期待機とし、放送そのものを中止してしまう。

この頃の韓国世論は、疑惑があるなら検証すれば良いと考える者は三十パーセントに過ぎず、疑惑などで騒ぎ立てずに、韓国の名誉を維持しようというのが大多数で、与党も各野党もこぞって世論に迎合した。政府も公式見解として「消耗的な議論の中断を促す」とし、盧武鉉大統領も「研究を引き続き支援する」と懸命に幕引きを図る。ここに政治がでてくるのが韓国らしいところである。

だから韓国の国民は放送中止によって、ほっとしたに違いない。しかしこれが世間知らずの韓国人らしいところである。これで済むはずがなかった。

結局この時、韓国の国民は最悪の選択をしてしまった。黄教授たちの個人犯罪を国家の共犯に格上げしてしまったのである。

おそらく「ＰＤ手帳」の関係者によるリークであろう。重大証言の内容が克明に流れはじめる。もはや止められない。卵子事件で既に共同研究者からの離脱を表明していた米国ピッツバーク大シャッテン教授に続き、十五日には責任ある共同研究者の地位にある盧聖一ミズメディ病院理事長が、十一件の実施例の内、九件は水増しであり、残りの二件さえも疑惑が残ると発表したのである。

それまで一貫して疑惑を強く否定していた盧理事長の発言は、瞬く間に世界中に報道される。捏造疑惑に関してはもうこれで完全に勝負がついてしまった。ＭＢＣもその夜おそく急遽「ＰＤ手帳」を一放送する。

そればかりではない。韓国の国民は、二件だけでも正しければ、世界的な業績ではないかと主張したかったであろうが、百八十五件の実施例の内、一、二件の成功では臨床学的な意味がなく、論文の価値が全くなくなってしまう。なぜなら、それは既に二〇〇四年にサイエンスに発表済みのことだからである。しかも盧理事長によれば、提供した卵子は総計千二百個にも及ぶというのであるからなにをかいわんやである。

こうなると疑惑はとどまるところを知らない。その二〇〇四年の論文さえも、疑惑まみれだというのである。良く見ればその証拠写真として掲載されたものが、その前年のステム・セルという学術誌に他の発表者名で発表された写真と同一だというではないか。英誌ネイチャーの犬のクローン複製についての論文も疑惑があるという。

その他にも、疑惑検証のために提供すべきＥＳ細胞が五件もカビの感染で使えないのは、国家プロジェクト水準の環境ではありえないとか、黄教授が製薬開発会社の株主だったとか、毎日のように暴露が続く。

かくしてＥＳ細胞疑惑は既に韓国の今年の最大ニュースに決定してしまった。韓国の偶像は地に堕ち、韓国の国民全員がうつ病にかかってしまった。

韓国の大学にいると研究現場で何が起こっているか良く判る。それは日本でも起きつつある問題でもあるが、大きな違いは変化のスピードである。歴史の浅い韓国大学の研究現場に対し、慌しく「役に立つ研究」を導入したことで、ひどい混乱状況を招来してしまったのである。

研究開発と一言でいうが、研究と開発ほど性格の異なるものはない。

研究は好奇心がベースで一番重要なことは独創性である。新規性のない論文など何の意味もない世界である。だから遊びの精神を必要とし、一直線に進展することとは最も縁遠い分野である。

しかし開発は異なる。機能的にもコスト的にも時間的にも目標があり、既存の技術や知識を総動員して、システム的に最短距離をつっ走らなければならない。大学のもっとも不得意とするところである。

ところが「役に立つ研究」という言葉がいったん発せられると、それを「開発」と理解してしまうのが大勢である。しかも政府が「役に立つ研究」に重点配分するあおりで、一般の研究費をかえって絞ってしまうと、猫も杓子も「開発」をテーマにして予算を申請する。

ここに大きな問題が生ずる。夢を描いた開発テーマといえば格好が良いが、詐欺的なテーマで、とにかく予算獲得してしまおうとする動きが起こる。韓国の社会や機構は、まだそれを充分に防止できるほど成熟していないので、まじめに研究申請する者が損をする。

文官優位の構造がはびこる韓国では、荒唐無稽のテーマでさえまともに評価しえない。もちろん大真面目なテーマもあるが、先進国の実状をちょっと調べれば、大学の研究室などの手に負えるものでないことなどすぐ判るのに、これが通ってしまう。

しかし、このような非現実的なテーマでは、成果が上がるはずがない。しかも、これをスピード感もコスト意

識もない教育現場でやるのだから、すぐさま行き詰まってしまう。見込みが無ければ即刻中止するのが開発であるが、それも出来ない。研究費の大半が飲み食いや大学院生の生活費に費やされ、あとはガラクタ化する開発ミニチュア機械が残るだけの惨状となってしまうのである。

そこで多少先の見える教授たちは論文書きに精を出す。そうでもしないと次回の予算は絶望的になるからである。しかし開発を意識した実験と研究的な実験では質が異なる。大学院生たちは継ぎはぎだらけのデータで低水準の論文を書かざるを得なくなる。

それも韓国の学会誌は相手にできず、商業的な国際英文ジャーナルに投稿しなければならない。さもないと得点にならない評価システムがあるからであるが、そこでも二重投稿はもとより分割や再組み合わせによって異なる論文を装う水増しが常套的に行われる。論文共著者も名義の貸し借りで、黄教授の論文のように二十名以上に達することも稀ではない。得点稼ぎをしなければ生きて行けない仕組みなのである。研究分野でこれほど腐敗の温床を完備している国もないと皮肉ってみたくもなる。

状況は日本でも似ているが、それでも日本は従来の伝統が根付いていて、暴走に歯止めをかけている。しかし韓国では壮大な浪費が進み、真の研究水準を高めるために資金が回っていない。そのため優秀な学生は韓国の大学院を相手にせず、外国へと外国へと流れ出る。

だから韓国の大学研究を見ていると、黄教授のＥＳ細胞疑惑などまったく例外的なこととは思えない。野心的な先陣争いにルール違反があることなどむしろ当然のことだと映るのである。成果が上がり、韓国の国民が熱狂すればするほど、それに応えるためにむしろルール違反が加速する構造なのである。

意外なことであるが、バイオや生命科学など先端研究分野ほど若手研究者は劣悪な環境に置かれている。研究志望者が多い反面、成果がでるのは、はるかに先の話だからである。救いは国からの支援である。これに成功したのが黄教授である。手品をして見せては、資金を得て、研究員を抱え込む。そして業績を積み重ねる。要するに、研究を宣伝する術に長け、研究予算をガッポリ取ってきて、研究員という兵士を多数雇ったところが有利な労働集約型の分野なのである。テレビに現れる黄教授の研究室が、あたかも養鶏場のようであり、せまい場所に顕微鏡を覗く研究員が犇いているのを見ると頷けるであろう。まさに研究ではなく開発なのである。

だから、その自転車操業に打ち勝たねば研究は続けられない。いわば中小企業の社長の資金繰りであり、ＥＳ細胞のサイエンス論文の一番乗りは、でっち上げてもぜひ達成せねばならない経営目標だった。多少のごまかしなど眼中になかったのが実状だろう。その結果、韓国政府は世界のＥＳ細胞バンク「世界幹細胞ハブ」を韓国に立ち上げることに成功し、その所長に黄教授を就任させる。国民はノーベル賞を超える業績だと熱狂した。

だから、もともと韓国国民と黄教授チームは共犯関係にあったとも言える。それは韓国政府が人クローン胚に関する倫理問題を軽視して規制を緩和し研究を走らせたからである。

話題のＥＳ細胞とは、未受精卵の核を抜き、そこに患者の皮膚細胞の核を入れて、いわゆるクローン胚を経て作った細胞で、多細胞に分化する能力があるため、患者に必要な臓器の細胞を拒絶反応なしに作りだすことができる。ただしこのクローン胚は、胎盤に入れればクローン人間の誕生につながる。そのため、キリスト教国を中心として厳しい研究の制限が設けられいる。日本も例外ではない。

したがって、黄教授の研究成果が報道された時、全世界の研究者の反応はやっかみの感情を持った賞賛であり、韓国の国民が絶賛するほどではなかった。ノーベル賞以上と言うよりは底流には倫理面の疑惑があり、その問題がある限り当面ノーベル賞とは無縁のものであった。

しかし韓国は国家の威信にかけてノーベル賞を必要としていた。金大中元大統領が平和賞を受賞してはいるが、これも北朝鮮との金銭疑惑まみれのものであり、科学分野でのノーベル賞は国家政策の中心課題とさえなっていた。おそらくノーベル賞を政策課題とした国など韓国以外にはないであろう。それほどまでに渇望していたノーベル賞なので、これに水をかけたＭＢＣ「ＰＤ手帳」を韓国の国民は許すことが出来なかったのである。

ＭＢＣはどこに行くのであろうか。本来ならば韓国のジャーナリズムの健全さを証明し気をはいたはずのＭＢＣなのに、世論の前に屈してしまい、醜態をさらした。もっともＭＢＣは捏造報道の常習犯で、日本関連の七三一部隊の特集でも社告を出して捏造をわびている。ＥＳ疑惑報道もその次元で捉えられたところに、韓国の未成熟さがある。

一方のＭＢＣ批判の先頭に立ったＹＴＮも大きく傷ついた。黄教授の仕組んだ「人権侵害取材」にまんまと乗ってしまった。新聞も同罪でジャーナリズムの健全さを示す機会を失った。政府も政党も学界も全てが傷ついた。かくして黄教授チームの個人的な論文捏造が、国家犯罪に格上げされてしまったのである。その結果、韓国国民が全員うつ病に罹ったと揶揄される始末で十二月十五日を韓国科学界の国恥の日とする発想もその延長線にある。

しかし韓国もこんどのことで学ぶであろう。小さな隠蔽が大きな自動車会社を破綻に追い込むこともあるということを。内輪で庇い合う論理が国際的には通用しないことを。そして、国連の北朝鮮人権侵害決議にどうしても加わらない韓国も、ここで内輪の論理を捨てなければならないということを。

もっとも、米国のピッツバーグ大ソル・デウ教授は「韓国科学界の国恥の日ではなく、むしろ祝祭日」とすべきだと述べている。韓国の自浄作用を称えた形をとってはいるが、この皮肉が韓国にはたしてどこまで通じるであろうか。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇一〇一六四五九二

加入者名　まんじ

（司馬雑感　六）

「韓のくに紀行」をゆく

山田嘉久

「韓のくに紀行」は釜山―倭館、慕夏堂―慶州―扶余の紀行となっている。

司馬が始めて韓国の地を踏んだのは戦争末期の昭和二十年早春。赴任地であった旧満州牡丹江の戦車第一連隊から本土決戦に備えて内地帰還を命ぜられ、戦車七十輌を貨車に積んで釜山まで朝鮮半島を縦断したときのことだった。

ソウル（当時は京城）を通過するとき、司馬はこの李朝の旧王都をあるいはひょっとすると今生の思い出になってしまうかもしれないと、貨車のトビラを細めにあけて懸命になって見たそうだ。

また釜山は司馬にとってほろにがい思い出の地でもある。前記本土帰還の途中、此処釜山で指揮下の中戦車四輌とともに迷子になってしまったのである。原因は指揮官司馬の方向オンチによるものだが、ようやく目的地

司馬遼太郎が韓国に寄せる関心は異常なほど強い。「私の朝鮮への関心のつよさは、私のうまれて住んでいる町が大阪であるということに多少の関係があるかもしれない」と司馬は書いている。

そのため彼の周りには妾在彦、金達寿といった在日知識人が多く、一時期「日本のなかの朝鮮文化」といった季刊紙の発行にも関与していたほどであった。

従って「街道をゆく」でも韓国は早々と登場する。第二巻「韓のくに紀行」（昭和四十六年）がそれである。もっとも第一巻「湖西のみち」でも（日本人の祖形）として朝鮮からの帰化人に触れているので、「韓のくに紀行」はこの続編といっていいかもしれない。

「かって倭人は、九州北部から朝鮮南部に広く住み、自由に往来していた」と考える司馬は日本人のもうひとつの故郷を求めてごく自然に韓の国へと旅立つのである。

にたどりついた彼は「防諜ということを知らん」と上官から絞られる。アメリカに暗号まで解読されていて、なにが防諜だと、司馬はやや八つ当たり気味に、得意の道草論を展開するこのあたりの文章は微苦笑ものである。

私もかれこれ海外旅行は二十回近くを数えるのに、日本から最も近い国、飛行機で二時間足らずで沖縄よりも近い国「韓国」に一度も行ったことがなかった。それが平成十五年秋、ようやく長年の夢を叶えることができた。

釜山―慶州―ソウルの旅だった。

○釜山にて

釜山空港で若い韓国女性のガイドの出迎えを受けた。驚いたことに今回のツアーは我々夫婦だけで、それにガイドと運転手がついた「大名旅行」だった。マイクロバスのなかではガイドの自己紹介から始まった。

ソウル生まれでソウルの大学で日本語を習ったが日本には京都に一回行ったきり、三十歳で未婚、姓は朴。なお朴名は韓国では金、李、崔に次いで四番目に多いとのことだったので、私から

「韓国では同姓同士は結婚できないですね」と余分なことを云ってしまった。

「韓のくに紀行」のなかでも―同姓ハ娶ラズ―の儒教体制の朝鮮人からみれば日本のイトコ夫婦などはじつに気味が悪いと書かれている。

観光客が我々夫婦二人だけという気安さから更に余分なことをガイドに話かけてしまった。

「そんなに本貫（本籍）を大事にする韓国人に対して日本人は「創氏改名」という馬鹿げた政策を押し付けてしまった」と。

「怨」の強い韓国人の機先を制したつもりだったが、ガイドは僅かに微笑んだだけだった。

「韓のくに紀行」では「日本海」と表示された日本の地図を広げる司馬に対して、同じくソウルの大学を出た若い女性のガイドが「日本海ではなく東海だ」となじる風景がある。

司馬が訪れてから三十年、最近の韓国は変ったと思った。日本文化も少しずつ開放されてきたようだし、現に泊まったホテルでもどこでもＮＨＫを放映していた。

釜山ではまず市内の高台にある「龍頭山公園」に案内された。

公園の中央に銅像が建っていたので「あ、李舜臣だ」と呟いたらガイドが「ホンとに韓国は初めてですか」と驚いていた。

司馬も同様に一番最初に李舜臣の像に案内されている。秀吉の朝鮮ノ役（韓国では壬申倭乱）で日本軍を撃退したこの韓国の英雄については李朝五百年の間、ロクな大官しか出なかったなかで例外的な高潔な士と絶賛している。

そして明治後の日本海軍でも李舜臣を研究した。韓国人よりも日本人のほうが李舜臣につよい敬愛と関心を持っているのではないかと司馬はいう。

私は李舜臣の像を見ながら、ついでに「白村江の戦い」をこの若いガイドに聞いてみたら、驚いたことに全く知らなかった。

「白村江とはどんな字を書くのか、何処にあるのか」と逆に質問されてしまった。七世紀に百済、日本の連合軍が新羅と戦って大敗、それによって滅びた百済から日本に多くの人が（勝った新羅からも）渡来してきたことを逆に教えてやる結果になってしまった。

韓国の歴史教育では「白村江の戦い」は教えないのだろうかと帰国後、小学六年の韓国歴史教科書（日本語訳）をめくってみたがなるほど載っていなかった。

日本に来た新羅人と百済人は、あまり仲がよくなかったらしい。そこで日本では両者の棲み分けが行われたと司馬は考えている。

「日本の奈良朝以前の文化は、百済人と新羅人の力によるところが大きい。さらに土地開拓という点でも、大和の飛鳥や、近江は百済人の力で開かれたといってよく、関東の開拓は新羅人の存在を無視しては語れない」と書いている。

そして別のエッセイではこうも書く。「同じ朝鮮からの帰化人が近江に住まわせれば近江商人となり、関東に住まわせれば坂東武者になる」（「歴史を紀行する」）

今晩の泊まりの釜山のホテルのロビーは日本人の観光客で溢れていた。

あちこちに関西弁が飛び交っている。聞けば全員が大阪港から釜山港までの夜行船で来たという。殆どが大阪生野区に住んでいる在日韓国人だそうな。あるいは観光ではなく里帰りかもしれない。

そういえば生野区は日本で一番、在日韓国人や在日朝鮮人の多いところ、「百済」という地名まである。なお司馬はこの近く鶴橋にある薬局の長男として生まれている。なるほど司馬のいうとおり大阪と韓国は関係深いと実感した次第だ。

○慶州にて

慶州は千年の古都である。このことは京都と同じだが時代が違う。

京都が平安京となった頃には既に慶州は都としての役目を終っている。慶州が新羅の首都となったのは紀元前、ローマのシーザーの時代というから実に古い。

その後、新羅は百済を亡ぼして朝鮮にはじめて統一王朝を開き、十世紀に高麗朝がおこるまで朝鮮半島を支配

した。

慶州市内は例えば京都タワーのような邪魔な建造物がないのでまことに美しい。

「慶州ニ青山多シ」の青山とは古墳のことだと司馬も書いているが市内には古墳が多い。いずれもが青い芝生で綺麗に整理され塵ひとつ落ちていない。

司馬は書く。日本が古代の天皇陵を大切にし出したのは精々明治以降百年のことで、朝鮮のように千年以上前から王陵を大切してきた歴史はないと。

「古墳公園」のなかで最近発掘されたという天馬塚内を見学した後、「国立慶州博物館」を見学したが当然、新羅文化財が多かった。

司馬自身は新羅よりも亡国の百済の文物が好みであったらしく、黄金に輝く新羅の文物はあでやかではあるが「どうも愁いというか、人の心を打つような粘液がにじみでていないような気がする。」と書いている。そこで博物館よりも松林の中や古墳の周りで人々が歌い、踊る素朴な「野遊び」に心惹かれている。

上代の日本で「歌垣」と呼ばれた習俗が、朝鮮の農村ではいまでも新鮮な娯楽としていき続けていることに注目している。そして終には踊っている白い韓服を着た七人の老農夫の仲間入りまでするのである。

「日本（イルボン）からあそびにきたのか」しみとおるような笑顔で、ひとりが云った。私がうなずくと、そうかそうか、といったふうに、握手をしてくれた」以降の文章はなんともさわやかな名文で心を打つ。

この七人の老爺にはかって三十六年間にわたって「併合」支配した日本に対する無限の不快さも怨恨も全く感じとれなかったと司馬は書いている。

私が慶州国立博物館を見学した際には先生に引率された小学生や幼稚園児を多く見かけたが、いずれも礼儀正しく何よりも清潔感溢れているのには感心した。まさか全員が「両班」の出ではなかろうに疑うほどだった。

博物館を出た庭園に国宝の「エミレーの鐘」が置かれていた。韓国で最古かつ最大の鐘で新羅時代の七七一年に完成されたという。よくみると表面に天女が刻まれていた。

見学後、近くのレストランで昼食をとったが、喉が渇いたのでビールを注文したらガイドにヘンな顔をされた。韓国では昼間に酒を飲む習慣はないそうな。日本と同じように「花見」は盛んだが日本のように酒を飲んでドンちゃん騒ぎをするようなことはないとのこと。いかにも儒教の国らしい。

午後はいずれも世界遺産の石窟庵と仏国寺を見学する。

山上にそびえる石窟庵に至る山道は塵ひとつ落ちていない。（至る所に塵箱が設置されていた。）それに緑が美しい。此処に限らず緑の山が多いのは予想外だった。司馬は他の紀行文（たとえば「砂鉄のみち」など）でも高温多湿の日本と違って朝鮮半島では例外なく禿げ山が多いと書かれていたのでそれを信じて旅行前にも家内に話しておいたが、おかげで全く面目を失した結果になってしまった。

山頂から遠く東海（日本海）の海底にも鎮座して倭寇からの侵略を守っているとの伝説があるとのガイドの説明だったので「倭寇とは日本人なのかそれとも中国人か」と意地悪な質問をしたら、なぜそんなことを聞くの？というような顔をされてしまった。

司馬は「肥前の諸道」で十四世紀半ばの「前期倭寇」はともかく十六世紀の「後期倭寇」は殆どが日本人を装った中国人であると断定しているのを思い出したからだ。

また司馬は「壱岐、対馬の道」では「倭寇が出現するのは元寇の恨みを報じるためであったという」説を取り上げている。「元寇のあと、九州沿岸の水軍は朝鮮にうらみを抱いた」からだというのだが。

思えば遠い神功皇后の三韓征伐から秀吉の朝鮮ノ役、そして明治の日清日露、日韓併合と日韓の関係は深い。特に今回まわった古跡の多くが秀吉（あるいは手先の加藤清正）によって破壊されたというガイドの説明には日本人として肩身も狭くそれに実に後味が悪かった。

しかし考えてみれば、秀吉が朝鮮を攻めた頃には既に李王朝は成立している。儒教を国教とした李朝は多くの仏寺や仏像を破壊したが、仏国寺だけは例外だったようだ。それを秀吉が焼いたのは確かなようだが、それを以ってすべてを秀吉日本軍のせいにするのはどういうものだろうか。

日本人として多少の言い訳もしたくなる気持ちで仏国寺を見学した。

「仏国寺の朝鮮における重要さは、わが国でいえば法隆寺とか唐招提寺とかいう存在にあたる」と司馬は書いているが、創建は法隆寺よりも一世紀古い。回廊などは奈良の寺々とそっくりだが、当然奈良が真似たことになる。

今日の泊まりは仏国寺の近くのホテルだったが、司馬も「仏国寺近くのホテル」と記しているので、あるいは同じホテルではないかと想像しながら早めに眠りについた。

（しかし後で知ったが司馬の泊まったホテルはその後、廃業になってしまったとのこと。また司馬の見学した国立博物館も現在の場所とは違った所にあったらしい。）

○沙也可のこと

「韓のくに紀行」では司馬はこの後、倭館と友鹿洞に行きたいといってガイドを慌てさせている。「私の目的からいえば（中略）この民族の原型のようなものに触れることができれば」の願望だったが、韓国人でもこんな場所は知らないという。

勿論、日本の観光地図などには載っていないが、私はたまたま慶州からソウルまでの特急セマウル号の車中で見た鉄道地図にテク東方に「倭館」Wae-gwanの小さい文字を見つけた。

倭館は朝鮮ノ役で日本軍の兵站地となっていた場所であり、友鹿洞はその戦いで降参した日本人達（降倭）が住み着いた町。司馬はこれらの村を訪ねて「降倭」の親玉「沙也可」（号は慕夏堂）なる人物にかなりのページを割いて迫っている。この本の圧巻といっていい。

秀吉の朝鮮ノ役のとき三千人の部下を率いて朝鮮に降った日本の武将沙也可の足跡を訪ねるくだりである。司馬が読んだ朝鮮の古記録「慕夏堂記」によると、降伏した沙也可は武将として大臣に列するほどの官位を得て、土地もたまわり一門の子孫は慕夏堂という村で平和に暮らしているというのである。

慕夏堂はその後「友鹿洞（ウロクトン）という名に変わったが今でも戸数七十、全員が金姓を賜り、しかも両班（ヤンパン、郷村貴族）であるという。

勿論、私は友鹿洞を訪れることはできなかったが、帰国後ひょんなことから知人の紹介で現在、この友鹿洞に住む金在徳という人が主宰する「韓日歴史研究会」に入会することになった。金氏は沙也可の（十四代目）子孫である。

「韓のくに紀行」を再読すると金氏は司馬がこの日本人の子孫たちが住む友鹿洞を訪ねたときに、司馬の案内役を買って出ている。このとき五十二歳とあるから現在は九十歳近い。

司馬が「韓国には、この村を本貫とする家が何軒ありますか」と聞くと、金氏は「約五百戸、四千人です」と答えている。そして毎年、春にはこの四千人が故郷の祠堂をお詣りするため里帰りをするという。

これを聞いた司馬はこう書いている。

「沙也可は儒教の国を慕って化したのは賢明であったかもしれない。かれはいまなお、かれの子孫という四千人から、儒礼をもって斉（いつ）かれているのである。日本の場合なら、戦国末期の無名の武士など、とっくに無縁仏になりはてているだろう。」

今夏、金氏から三十ページにわたる長文の手紙を頂戴した。

内容は殆どが先祖に当たる「沙也可」に関する韓日両

国の学者による研究結果の報告書となっている。

当然、戦前の日本では「反逆の国賊」として歴史上抹殺されたが、韓国でも一九〇六年、伊藤博文が初代朝鮮総監に赴任したときの第一声が「慶尚道友鹿洞に国賊の子孫が住んでいるのは統治の邪魔になる」であったことを紹介している。

それが最近では日本の一部高校教科書でも沙也可が登場しているのは子孫として大いなる喜びであると金氏は記していた。

勿論、金氏は手紙の中でも「韓のくに紀行」にも触れているが「文聖と呼ばれる司馬遼太郎さん」と表現しているのはほほえましかった。

「強いもの勝ち」という倭の社会風習を激しく嫌悪したのは中世末期の学者藤原惺窩だが、惺窩はこの競争社会から脱して絶対原理が人間を支配する国（韓国、中国）へゆこうとしたが果たせず、「慕夏堂記」の沙也可がこれをやってのけたというのである。加藤清正の軍（もしくは小西行長の軍）に属し、釜山に上陸するとただちに「自分は礼教（儒教）の文明にあこがれていた」として、朝鮮王に降伏したくだりを金氏は引用している。

金氏から手紙をもらってから、念のため司馬が亡くなって数年後にNHKで放映された「街道をゆく（韓のくに紀行）」のビデオを再生して見ると、ここにも金氏らしい人が登場していた。

この金氏のことをNHK文化センターのK先生（「手掘り司馬遼太郎」の著者）に話したら「その金さんのDNAは私と限りなく近いはずですよ」といわれたときは驚いた。熊本生まれで先祖は加藤清正の武将であるK先生は、自分も沙也可の血を引いていると信じているのである。なにか因縁めいたものを感じた。

では沙也可とは何者か。

加藤清正の武将阿蘇宮越後守という人物ではないか、或いは小西行長の先鋒をつとめた武将ではないか等の諸説があるが司馬は対馬の国主宋対馬守義智の家臣説をとっている。（「壱岐、対馬のみち」）

そして彼は当時日本軍だけの武器であった鉄砲（倭銃）の製法と使用法を李朝軍に伝授して、朝鮮軍のなかで重きをなしたのではないかと推理するのである。

○ソウルにて

韓国の新幹線セマウル号で四時間半をかけて我々はソウルに到着。

首都らしく高層ビルも林立し目抜き通りも必要以上に幅員が広いが、（北の攻撃など）いざ緊急時の際には軍用機の滑走路に早変わりすると聞いて驚いた。更に驚いたことは今でも月の決まった日には防空演習が行われていることだった。そのときには観光客も協力してほしいとのガイドの説明だった。

いるが、この戦いの結果「百済ノ男女二千余人以ツテ東国ニ居ク」と日本の古書に載っていると司馬は書く。

その一人が百済の高官だった鬼室集斯でその墓が近江にあることを知った司馬はこの本のエピローグに近江の鬼室神社の話を持ってきている。本書が本シリーズ第一作「湖西のみち」の続編といわれる由縁だろう。

朝鮮半島にあって、倭人以来日本人と最も深い関係にあった百済のひとびとは、こうしてその後我々日本人の血液のなかに溶解していったというのである。

(付記)

司馬はその後、昭和六十一年には「街道をゆく二十八(耽羅紀行)」を書いている。「耽羅」とは現在の済州島の古称である。古代から中世にかけて独立国だった「耽羅」を司馬は二回にわたって歩いている。いかにも「辺境好み」の司馬らしい。

なお私は恥ずかしいことながら「韓のくに紀行」を長い間「カンのくに紀行」と読んでいた。正確には「カラのくに紀行」であると知ったのは大分経ってからのことだった。この本でも「カラ」の由来を書いている。

それによると韓国は昔からいろいろの名でよばれていたが「加羅国」「駕洛国」もその一つ。したがってその後、朝鮮半島(特に南朝鮮一帯)を指すようになり「韓」という漢字をカラと訓んだ。しかしその後、中国大陸に

すっかり平和ボケしている日本人には耳の痛い話。

ソウルに着いた日は丁度、数千年前に韓国の神話の神檀君が建国したという建国記念日に当っていた。「檀君とはさしずめ日本でいえば神武天皇ですね。」とガイドに話かけたが、当然、彼女は神武天皇を知らなかった。

いつもよりは多いという人出のなかを景福宮など李朝時代の古跡を回った。現在の大統領府や青瓦台などもかつては王宮の一部だったというから往事の繁栄が偲ばれる。

王宮のなかの最大の建物勤政殿は目下改装中だったが、附近の景色は北京の紫禁城に実に似ている。当然、模倣して作られたものだろう。

「宋廟」は李朝歴代の王と王妃の位牌を祀った霊廟だというので日本軍によって殺されたという「閔姫」のことをガイドに聞いてみたが興味なさそうだった。

またこの日泊まった都心のホテルの近くに伊藤博文を暗殺した安重根の記念館があったので翌朝、早速ガイドに聞いたらこちらの方は饒舌に説明していた。

多分、安重根は韓国の英雄として韓国教科書に載っているのだろう。

「韓のくに紀行」では司馬はソウルに回らずに、百済の古都扶余を訪ねている。

そして、ここでは前記の「白村江の戦い」を詳述して

隋、唐という巨大国家が出現するようになると中国のことをカラと呼ぶようになり「唐」の字を当てた。しかし東南アジアに出かけた日本女性のことも「カラユキさん」というのを見ると日本人は外国すべて(海外)をカラと呼んだのではないだろうか。

いずれにせよモトは「駕洛国」から出たことは間違いなさそうである。

また「韓のくに紀行」では司馬は「朝鮮」または「朝鮮人」という言葉をしばしば使っているが、これはあくまで「民族の名称」として用いているもので、むろん「韓国」Koreaまたは「韓国人」Koreanと同義語であり「政治的な塩っ気を抜いた言葉」だとことわっている。

「まんじ」季刊発行内規

(発行日)　(原稿締切日注)

春季号……二月一日……十二月三十一日

夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月　三十日

冬季号……十一月一日……九月　三十日

注)円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

報徳仕法と企業経営（一）

堀内永代

［はじめに］

〈本論を書いた意図〉

バブル経済が崩壊し、かつてない長期不況に悩まされた日本企業は、金融・貿易の自由化による外圧から脱却せんとして、総力を挙げて戦ってきた。さらに、価格破壊を惹起した東アジア諸国からの輸入品や逆輸入の低価格製品に対抗するため、日本企業はコストダウンを連発し、生き残りをかけて奮闘努力を重ねてきた。

しかし、日本国内の物価高、賃金高は如何ともし難く、平成の大不況により、大手金融機関を始め、大企業、中小企業の倒産が続発するなど、日本産業界はかつてない試練に立たされた。これらバブル景気の反動をもろに受けた各企業は、弱肉強食の戦いを繰り返し、なりふり構わぬ企業活動を続けた結果、不祥事が相次いで発生し、国内外から強い批判を受けるに至った。あたかも企業倫理、商業道徳を無視した無法地帯のような様相を呈してきた。

筆者は、金融機関に三十年、中小企業に二十年勤務し、さまざまな中小企業の栄枯盛衰を見聞し、また、自らも中小企業の経営に携わり、経営の厳しさ、恐さを経験した。特に、悲惨な中小零細企業の破綻を目の当たりにして、企業倒産を防止する方法を模索する日々が続いた。

そうした中で出会ったのが、二宮金次郎が創始した「報徳」であった。筆者が始めて報徳を知ったのは、小学校の玄関前に建てられていた金次郎少年の「負薪読書像」であり、小学校三年の修身教科書に書かれていた「孝行、仕事にはげめ、学問」の三項目十二頁の金次郎美談であった。当時、小学生であった筆者の二宮金次郎観は、学問の好きな親孝行の少年という程度でしかなかった。

わが国は、第二次世界大戦に敗北して、欧米式の民主主義、自由主義が教育の場に取り入れられ、かつての思想教育は一掃された。小学校では、一九五八年（昭和三三）に道徳教育が復活するまで、義理や人情、躾の問題は、学校教育としてタブーの観さえあった。一方、家庭では日々の生活問題の解決が急務で、子弟の道徳教育まで気配りする余裕もなかった。

そのような時代であったにもかかわらず、一九四五年に日本に駐留したGHQ（連合国軍総司令部）総司令官マッカーサー元帥は、実践思想家二宮金次郎を、日本最初の優れた民主主義者、リンカーンに匹敵する偉大な政治家、道徳家と称賛し、「二宮尊徳に対する正しい認識と適切な占領政策の実施」を通達して、報徳思想の普及活動を支援した。

当時の文教の府・文科省が、道徳教科を教育現場から遠ざけたことが影響したためか、今日、報徳を話題に供しても、「報徳ってなに」、「報徳をやればメリットがあるの」という言葉が返ってくるのみで、まことに残念でならない。

筆者は、二〇〇二年（平成一四）、三戸岡道夫著「二宮金次郎の一生」を手にし、深遠な報徳思想、強力な経営再建手法、頑固一徹な実践行動、見事なまでの商才を知り、報徳こそ、日々筆者が求めていた「企業の倒産防止と社会貢献」の道であると痛感した。

さらに筆者は、報徳に関する文献類を読み進め、報徳思想を理解するにしたがって、『尊徳は巨人なり』の思いが一層深まっていった。

本論は、現代企業の経営に携わる方々に読んでいただくことを念頭に置き、『自身の富は一切求めず、王道政治（道徳を基本とする政治）を説いて、関東を始め、東海、奥州など六百余ケ町村に及ぶ農村の貧困を救済し、財政再建に生涯を掲げた二宮金次郎の報徳仕法』を紹介するとともに、企業活動の第一線から遠ざけられつつある『道徳』『倫理』を企業経営に復権したいと思い執筆した。本論をお読みいただき、報徳思想が現代の経済社会に相通ずるところを感じとっていただければ幸いである。

〈本論の構成〉

本論は、筆者がかつて資金の供給者側と、需要者側の両方に身を置いた体験から得た企業経営、特に内部留保の充実、経営破綻回避のノウハウ（破綻を回避するためにやらなくてはならないこと）などを、報徳や道徳の解説とともに記述したいと考えている。

第一章では、「報徳と道徳」のかかわりを、至誠・勤労・分度・推譲の報徳四大綱領と、現代企業で必要とされている、①信頼性　②生産性　③キャッシュフロー会計　④企業の社会的責任（社会貢献）の概要と関連して記述する。

第二章では、「われに至誠と実行あるのみ」と理論より実践を重視した報徳生活の原理と企業倫理、企業不祥

事の関連を記述する。

第三章では、自己の経済的能力を自覚して経費の支出限度を定める「分度」の理論と、新企業会計原則における第三の財務諸表・キャッシュフロー計算書、特に「分度外財産」（余剰資金）とフリーキャッシュフロー（自由に使える資金）を記述する。

第四章では、「社会貢献」を目的とする報徳思想の「推譲」と、ＩＳＯ（国際標準化機構）にも組み入れられた「企業の社会的責任論（ＣＳＲ）」との関連を記述し、企業の社会貢献と経営改善のつながりを述べたいと考えている。

本論は、まことに拙い道徳論、企業経営論であるが、経営の舵取りが大変難しい今日、厳しい中小企業の第一線で経営実務に携わっている方々に、少しでもご参考になれば、筆者として無上の喜びである。

第一章　報徳と道徳の関係

第一節　報徳仕法とは

①報徳仕法

報徳仕法とは、江戸時代末期の思想家・財政家であった農民・二宮金次郎（尊徳）（のち幕臣となる）（一七八七～一八五六）（以下通称にしたがって「尊徳」という）が、創始した「報徳思想」を実践するためのマニュアル（実施要領・手引）である。

報徳とは、貧困救済・財政再建など「社会貢献」を目的として、かつ、道徳と経済を同列・一元的に論ずる実践思想をいう。

尊徳は、関東各地の天領（幕府直轄領）や大名旗本の領地の貧困救済、財政再建を数多く成功させたが、その土地特有の事情に合せたマニュアルをその都度作るより、どの地方にも共通の事柄を抽出して、①いつ、どこで、誰がやっても同じ結果が出るように、標準マニュアルを作成し、②併せて指導組織形態を整備して、いつ、どの部署の、誰が欠けても、そこを補充すれば支障なく運営される制度を考えた。

この精密な計画書と秩序のとれた執行機関の二つの制度ができたため、財政復興事業は遅滞なく、かつ、万全に行われるようになった。

報徳事業に携わる人たちは、この社会的事業の標準マニュアルを「報徳仕法書」として、後世に伝えた。

尊徳は晩年（一八五三）、幕府から天領である日光神領四千町歩（四〇〇〇ヘクタール）の復興三〇年計画を命ぜられたが、志半ばで他界（一八五六）したため、事業は嗣子や弟子たちが承継した。

その後、復興事業は明治元年（一八六八）、新政府樹立により中止となるまでの一五年間（計画期間の半分）に五〇〇町歩（復興計画の五〇％）の開墾実績を挙げることができた。このことは、報徳仕法書が完備し、尊徳没後も計画が微動だにせず実行されたことの証明でもある。

通常、天才型の人物が興した事業の多くは、天才の閃きと強烈なリーダーシップにより主観的に進められ、起業者の死とともに事業も終焉するのが通例であるが、報徳仕法書は、客観的、科学的な方法で作成され、かつ、組織的な執行機関により運営される仕組みになっていたので、尊徳亡き後も順調に事業は進展した。

尊徳は、決して自身の独裁制を現さず、庶民的、一般的、普遍的、かつ、凡庸な知性を求めた仕法書を目指していたので、普通の能力をもった人ならば、誰にでも十分実行可能な仕組みになっていた。

筆者は、今日の企業経営においても、報徳仕法は充分適用できるマニュアルであり、現に報徳を実践している人たちの中で、経済的に困窮している人は、筆者の知る限りでは見当たらない。

報徳仕法により、六〇〇余ケ町村に実施された貧困救済、借財償還、荒田開発、道路橋梁・用排水路の修理などに関する尊徳自筆の報徳仕法関連資料（一部に子女の筆あり）は、実に九千十四巻の膨大な数にのぼり（現在、国立国会図書館に保管）、明治四一年（一九〇八）に、報徳運動推進者鈴木藤三郎により、二〇人の筆生と三年の歳月を要して筆写され、二五〇〇冊に合綴された。筆写された仕法書は現在「報徳全書」として栃木県今市報徳二宮神社に奉納保管されている。

また、報徳全書とは別に、昭和前期における報徳研究の第一人者、佐々井信太郎博士（元大日本報徳社副社長）らにより編纂出版された「二宮尊徳全集」全三六巻があるが、これらの全書・全集は、共に漢文と文章体で書かれているため、解読に大変な努力がいる。

②道徳と倫理

報徳は、社会貢献を目的とした道徳経済一元の思想であるが、私たちの日常会話の中で経済といえば、一般的にはお金のやり繰りのことを指すので、ここでは、経済のことは難しく考えないことにしたい。

報徳は、道徳をベースにした考えであるから、報徳を理解するためには、道徳を理解する必要がある。

皆さんは、人に刃物を手渡すときに、「刃先」をどちらに向けますか？　勿論、自分の方に向けますね。それは何故ですか？　刃先を相手の方に向けるのは失礼だからですね。そうです、刃先を自分の方に向けるのが、人としての礼儀であり、常識です。

刃先を自分の方に向けるのは、自分は傷ついても、相手に傷を負わせないという気配りからです。

刃先を自分に向けていれば、相手はこちらに敵意のないことを感じて安心する。そうなれば、双方に信頼関係が生じて、人間関係は大変良好となり、ものごとに道理

や筋道がきちんとつき、両者間には衝突の心配がなくなり、平和的な場となって、争いは起らない。

このように、私たちの日常生活の中には、当然行わなければならないルール（規則や暗黙の了解事項）、あるいは行ってはいけないルールがたくさんある。このルールを多くの人たちが守ることによって、社会の秩序と調和が保たれ、世の中は平和となる。

したがって、「道徳」とは、地域社会の「秩序」と「調和」を守るための「社会のルール」であるといえる。

第二次世界大戦敗戦前は、小学校に「修身」という教科があって、校長が道徳を教えたので、当時の小学生には「道徳は大切な学問」だという認識があった。

道徳を当世風な言葉で言えば、①公共の秩序や普遍的な社会規範を意味する「公の秩序」、②社会に広く行われているさまざまな良い慣わしを意味する「善良の風俗」、③相手方の信頼や期待を裏切らないように誠意をもって行動することを求める「信義誠実」と同じような意味をもっている。

私たちの日常生活では、「倫理の欠如」、あるいは「道徳の頽廃」という言葉が多く使われ、倫理と道徳は同じ意味に考えられている。

一般的には、①倫理は習慣の積み重ねから生れた共同体のルールという意味を持ち、②道徳はそのルールを身につける個人的な態度をあらわしている。

倫理も道徳も、いずれも人の内面の問題であって、発せられた言葉や行動などによって識別されるのが普通である。

古来から、道徳についていろいろな考え方があって、その考え方が報徳の「無利息金貸付制度（五常講貸金）」や「推譲（他愛）」などに影響している。

③道徳に対する考え方

道徳の淵源（みなもと）ともいうべき思想は、古代中国（BC六世紀以降）においていくつかの学派に別れて論議され、政治にも大きな影響を与えた。その主なものは次の三つに大別される。

古代中国の三代道徳思想

1自然主義思想……道家思想

2徳治主義思想……儒家思想→礼治主義思想
（法家思想）

3博愛主義思想……墨家思想

イ、自然主義思想　―無為自然の生活を是とする思想―

倫理・道徳を論ずる人たちの中に、「もともと人は善良なのだ。それにも拘わらず世の中が乱れ、争いが起こるのは、人々が知識を求めたり、いろいろな欲望を持ち過ぎるからだ。自我を捨て生まれたまま、あるがままの姿が一番よい。無為自然、自給自足の生活をしていれば、

争いもなく、社会は平和となり、人々は幸福で長生きできる」と人の道・不老長寿・小国寡民を説いた人たちがいた。

この自然主義思想を主張したのが、老子・荘子を中心とする老荘思想学派の人たちで、人の道を説いたので、これらの人々は「道家」と呼ばれた。

ロ、徳治主義思想　―秩序と調和の政治・王道政治―

「人は本来みんな善良なのだ。それにも拘わらず争いが起きるのは、その人たちの道徳が廃れるからだ。そのような人にはもう一度、道徳を教えなければならない。教えても道徳を守らない人には相応な刑罰を与えるべきだ」と主張した思想がある。

この思想は中国に生まれ、ヴェトナム、南・北朝鮮、日本、台湾、香港、シンガポールなどの東アジア諸国に広まって、政治・経済・倫理道徳・行動規範に大きな影響力をもたらした。この大きなうねりのような思想が、「万世の師」と崇拝された孔子（BC五五一～BC四七九）が体系付けた学問（哲学）「儒学（儒教）」である。

孔子は、儒学（儒教）の始祖として尊敬され、一説によれば、三千人ともいわれている弟子たちが、その思想を「論語」にまとめて後世に伝えた。この思想を学んだ人たちを「儒家」と呼ぶ。

日本では、応神天皇の御代（二八五年）に、百済の王仁によって論語がもたらされたとされているが定でない。その後、継体天皇の御代（五一三年）に百済から経書が伝来し、我が国の政治・文教に大きな影響を与えた。特に聖徳太子が摂政であったときに（五九三～六二二）、日本の新しい理念形成に活かされ、我が国で最初の成文法『憲法一七条』が制定された。『一に曰く、和を以て貴しとなし、さからうことなきを宗とせよ。〔意味〕調和することを貴い目標とし、道理に逆らわないことを主義としなさい』と規定された第一条は特に有名で、日本の道徳の基となっている。

A．儒学（儒教）が説く道徳

孔子は、「仁」（人倫愛）と「礼」（人の守るべき秩序）によって自分自身を鍛練し、家を治め、家族愛＝家族道徳を社会に推し進めてこれを政治に応用すれば国家は平和になると主張し、戦国時代の国王たちに「仁の政治」（思いやりの政治、国民の幸せを優先する政治）＝「徳治主義」を説いて、自分の生まれた国、魯を始め、周、斉、鄭、陳、蔡、楚などの諸国を廻国した。

孔子は、倫理、人間性、愛情にもとづく幸福追求（道徳的行為）の道を教えた。即ち、孔子の説く仁（恕）とは「思いやり」のことで、思いやりとは、「自分でやるのは厭だと思うこと（自分の望まないこと）は、他人に押しつけない（しむけない）こと」であり、また、人

の上に立つ者は「まず、命令しようとするときは、自分でそのことを実行してから、そのあとで命令することだ」と教えた。

B．儒家の説く「仁」とは何か

1仁は人を愛すること（ヒューマニズム）
（特に自身を捨てて、人を助ける他愛）
2仁は利己心や私心を克服して秩序や調和を保つこと（道徳）
3仁は五つの徳を身に付けること（五徳）
慎み深さ（恭）、大らかさ（寛）、信頼（信）、俊敏さ（敏）、恵み深さ（恵）
4仁は真心が重要であること（忠）
5自分の望まないことは人にもさせない思いやりが必要であること（恕）
6親子、兄弟の情愛は仁の本であること（悌）

C．「礼」の思想とは

「礼」は一般的には礼儀作法のことをいうが、儒学では、人が一生の間に経験する誕生・成人・就職・結婚・死亡などの「通過儀礼」という狭い意味に用いるだけでなく、人々が日常社会生活のあらゆる場面で一番適切な行動をとることが、秩序と調和を保つ第一歩であるという考えの上に礼は形づけられ、目上の人を尊敬する思想を礼の基本とし、政治・経済・社会生活全般にわたる諸制度、およびこれら諸制度から生じたすべての習慣・先例をふくめて「礼」とした。

D．王道政治　—性善説—

幼い子供が井戸の周りで遊んでいたらどうするか？人なら、誰でも、子供が井戸に落ちる、危ないと、救いの手を差し延べる。これを「赤子井戸に落ちるの譬え」というが、人は、誰でも私心や打算が働く前に、他人の不孝を見過ごせない気持が瞬時に起るものである。これは「人間は生まれながらして『性は善』である」と主張した思想で、これを孟子の『性善説』という（これに対するのが「性悪説」）。

この思想は、孔子の思想を受け継いで、さらに発展させた孟子（BC三七二?—BC二八九）が唱え、性善説、仁・義・礼・智の四徳（四端説）、別愛（後述）を主張して儒学（儒教）を援護し、家族愛を信じて道徳を本とする政道＝「王道」を推進した（武力権謀を用いる政治を「覇道」という）。

報徳においても、道徳（徳治）を基本とする「王道政治」を思想の中に取り入れ、民を慈しむことによって「国が栄える」と教えている。

王道政治は、後世、日本において大いに取り入れられ、これにより経世済民の実をあげた奥州米澤主上杉鷹山や備中松山藩執政山田方谷など、幾多の名君、名宰相が輩出している。

E．礼治主義思想　—性悪説—

人間の本性は、みな貪欲で、邪悪になる傾向を帯びて生まれてくる。その欠点を補うのは、①善を見たら受け入れるように道徳教育をすることだ。②堕落した人にはそれぞれ適応した賞罰を与えて矯正し、社会復帰させるべきだと主張する思想がある。

この思想は、中国の戦国時代に活躍した荀子（BC二九八?—BC二三八）によって広められ、その弟子（韓非子）たちは、荀子の思想のうち②の部分を発展させて「法律至上主義」の「法家学派」を形成した。法家思想は、人情や仁・義などの道徳を排し、行為の形式によって法律を適用することが法治国の最上の道だと考えて徳治主義と対立した。また、この思想は、国の安泰が国民の幸福より優先すると主張して国力増強を第一とした。この思想を採用して中国を征服し、北ヴェトナムまで領土を延ばしたのが、「万里の長城」の築城で有名な秦の始皇帝である。しかし、道徳を軽んずる秦朝が長続きする筈がなく、僅か二代一五年で滅んでしまった。

道徳がいかに重要かを示す適例である。

ハ、博愛主義思想　—平等無差別な愛（兼愛）—

「争いは人がお互いに愛し合わないことに起因する。我が子も他人の子も区別せず等しく愛し、人を自分のことのように愛すれば、親不孝もないし、親が子を慈しまないということもない（不孝不慈）。人を等しく愛すれば社会は平和になる」と親疎の別なく平等無差別な博愛主義（兼愛）を説いた墨子（BC四六八?—BC三七六?）は、儒教の「儀礼」を否定し、儒家を離れて独自の学派「墨家」を形成した。

墨子の思想は、「愛は親近なものから徐々に疎遠なものへ区別して押し及ぼす別愛が自然の道理に叶う」と説いた家族愛中心の儒家道徳論に対抗して打ち立てられ、「親疎の区別をしない兼愛」と「勤労節約」を主張し、貴族中心の身分制度を否定して能力者の登用を説き、侵略戦争を反対した。

墨家は庶民を中心に結束し、宗教的な信仰をもって一時大いに流行したが、墨子の死後急速に衰退した。墨子の道徳思想は、後年、トルストイなどキリスト教文化圏から高い評価を受けている。

つづく

うどんげの花（その二）

三戸岡道夫

一　右から左へ

私の友人のFさんは健康管理に熱心で、これまでストレッチジムに通ったり、万歩計を腰にぶら下げて毎日一万歩歩いたりしていたが、最近また新しいことをやりはじめた。

それはこれまで右手でやっていたことを、左手でやるようにしたのである。最初は不便だったが、最近は慣れてきた。すると不思議なことが起きてきた。なにか身体の中に、これまでにない新しい感性のようなものが生まれてきたというのである。

人間の身体は、右手は左脳が司り、左手は右脳が司る。左脳は理性を担当し、右脳は感情を担当する。すなわちFさんの脳の中で、理性から感情への移行が始まったということであろう。

これを聞いて私は、ゆくりなくも友人の作家Bさんのことを思い出した。Bさんは長編小説を一つ書き終えて次の作品に移るときに、きまって大幅な書斎の模様がえをするのである。書棚や机の位置から、壁や天井の装飾までが一変し、時には洋間があっという間に和室になってしまうこともあった。すると自分の感性まで変ってくると、Bさんは言うのである。新しい作品を書くためには、自分の感性を新しく作り変えなくてはならないからである。

私もこれにならって最近、書斎の机の位置を東向きから西向きへ変えてみた。さて、私の感性は果してどう変わるであろうか。

（平成十七年）

二　歴史教科書

私の友人に、すでに会社をリタイヤしたが、バイタリティにあふれ、何事にも好奇心旺盛な人がいる。その彼が、いま問題になっている歴史教科書についても情熱を燃やし、その結果を手紙で送ってくれた。

それは扶桑社をはじめとする、大阪書籍、教育出版、清水書院、帝国書院、東京書籍、日本書籍、日本文教の八種類の教科書に登場する、歴史上の人物四百二十三人をリストアップし、一覧表にしたものである。

これを見ると、どんな人物がどの教科書に載っているかが一目瞭然にわかり便利であるが、ちなみに扶桑社の歴史教科書には載っているが、他の七つの教科書にはまったく載っていない人物が四十八人いる。その人名を記すと次のようであるが、さて皆さんはこれを見て、どのようにお思いになるであろうか（アイウエオ順）。

阿部正弘　会沢正志斉　安徳天皇
イザナギの命　イザナミの命　大国主神
弟橘媛　和宮　加藤清正　狩野芳崖
韓非子　金玉均　グルー　黒沢明
孝明天皇　小西行長　近藤重蔵　斉藤隆夫
佐藤栄作　式亭三馬　神武天皇　菅原道真
スサノオの命　鈴木貫太郎　大正天皇
伊達政宗　東郷平八郎　徳川家斉
徳川斉昭　徳川光圀　徳富蘇峰　豊臣秀頼
二宮尊徳　パール　支倉常長　樋口季一郎
フェリペ二世　細川忠利　細川綱利
松岡洋右　山県有朋　山田長政　日本武尊
煬帝　頼山陽　ルーズベルト（フランクリン）　レーガン

私はまだそれらの歴史教科書を読んだことはないが、神武天皇や大正天皇を除いて、歴史教科書なるものがどうやって書けるのか、不思議でならない。（平成十三年）

三　日韓友好

日韓友好がいろいろな波風を立てながら進んでいるようであるが、最近私の身辺にも、二、三、それに類する動きがあった。

私はある歴史の研究会に入っているが、その会員の一人に韓国の歴史にくわしいAという人がいて、最近韓国の大学の教授として招かれており、日韓の間を往復して活躍している。

そのA氏の大学にSという教授がいて、昨年の暮、S教授が東京へ来た。S教授は日本文化研究所の顧問にもなっているので、時々来日するのだが、A氏が中心になってS教授の歓迎パーティが開かれた。A氏の紹介によって私もS教授と話すことができ、日本のマスコミだけでは知り得ないいろいろな話が聞けたので、一段と韓国への親近感を強めることができた。

そんな折も折、またさる知人から、有名な韓国の女流歌人の伝記と歌集をいただいた。彼女は日本で生まれ、日本と韓国の両方で育ち、生活し、戦前戦後を通して日本の和歌をよみつづけ、数多くの名作を残した。が、それは戦前戦後の複雑な日韓の歴史を背景にしたものが多いので、読む人の心を打つ。

ともあれ日本と韓国とは、海峡をひとつ隔てた隣国である。隣国同志が仲良くなり、そうした仲良しの輪が世界にいくつも出来て、それが連なって拡がっていくと、そこに本当の地球の上の平和が訪れるのではあるまいか。

（平成十四年）

四　七つの徳目

もし次の七つの徳目が、学校の教科書に載っているとしたら、どの国でしょうか。

親に感謝しましょう
親孝行しましょう
兄弟仲よくしましょう
仕事は一生懸命やりましょう
親戚は仲よくしましょう
よく勉強しましょう
お金を大切にしましょう

これは古代でも、中世でも、現代でも、古今東西どの国にも通用する徳目で、民主主義の国でも、独裁主義の国でも、キリスト教でも、イスラム教でも、どのような国の教科書に載っていてもおかしくない、立派な人間の道としての徳目です。

実はこの七つの徳目は、日本の戦前の国定修身教科書に、二宮金次郎を主人公にして載っていた徳目なのです。

しかし薪を背負って読書する少年金次郎の像は、戦後、日本が民主主義になったとたんに消え失せてしまいました。すると民主主義というのは、

親に感謝する必要はない
親孝行をしなくてもいい
兄弟はけんかしろ
仕事はだらだらと怠けろ
親戚は仲悪くなれ
お金はむだ使いせよ

ということなのでしょうか。日本って変な国ですね。

しかし、戦後やっと五十年たって、そのおかしいことがわかってきたようです。

といっても、すぐ少年金次郎の像を昔のように学校の校庭に立てる必要などありませんが。

（平成十三年）

五　人口増加

国の人口というものは、戦争がある時は兵士が死ぬので減り、平和な時代は増加するものとばかり漠然と思っていたが、実はそうでないのを知って驚いた。

ここに日本の人口推移を、古代から現在まで描いた簡単なグラフがある。それによると大雑把に言って、古代から鎌倉時代まではゆるやかな上昇カーブ、鎌倉時代から室町時代へかけてカーブの上昇率は高まり、戦国時代から江戸時代前期までは急上昇している。

江戸時代の後期は横ばいで、明治から昭和にかけて再び急上昇である。

ちなみにそれを数字で表すと、大和時代の初期は五百万人、鎌倉時代の初期が一千万人、江戸時代の初期が一千八百万人、江戸時代の中期が三千二百万人、江戸時代の末期は三千二百万人と増減なし。それから昭和六十年末では、一億二千万人になり、百年間では約四倍になっている。

こう見てくると、唯一、人口の横這い現象（年によっては減少）が見られるのは、戦争もなく、もっとも平和な江戸時代の後半である。しかし、それは表面は平和でも、その裏に、都市の文化の爛熟と、農村が衰退して子供もたくさん生めなかった事情が横たわってり、人口を増やす力が国になかったのである。

すなわち人口は、国に勢いのある時は増えて、勢いのない時には増えないのである。

平成の日本は子供を生まず、やがて人口は減少に転ずるというが、これは女性の意識の変化というよりも、国の勢いの衰微を示しているのではなかろうか。

（平成十三年）

六　五常のこと

最近、銀行が担保を取って金を貸すのが馬鹿に軽蔑されている。担保を取るのは金融の常道なのに、おかしなことである。そうかといって、担保を取らないなら、どうやって債権保全を図るのかを教えるわけでもない。困ったことである。

二宮尊徳の教えの中に、五常講というのがある。五常とは、人間の行うべき五つの道のことで、仁、義、礼、智、信の、五つの徳目である。

二宮尊徳は若い頃、小田原藩家老の服部家に仕えていたが、その時、助け合いのための相互扶助金融制度を作った。その名前が「五常講貸金」である。この五つの徳目を守ることができる人間ならば、金を貸しても間違いないという考えである。

金の貸借には確実に約束を守ることが大切で、これが「信」である。

金融には、金の余裕のある人が、ない人へ、金を差し出すことが必要で、これを「仁」という。

借りた人は約束を守って確実に返済する、これが「義」である。

また、貸してもらったことに対する感謝、これが「礼」である。

金を借りたら一生懸命働いて、いかに早く返済するかを努力工夫する、これが「智」である。

したがって五常講のメンバーになれるのは、この五つの徳目を守れる人に限るわけで、要は物を担保に金を貸すのではなくて、人の心を担保に金を貸すのである。

担保軽蔑からの脱却は、案外この「五常講」にヒントがありそうな気がするのである。

（平成十三年）

七　食堂街の変化

あるオフィス街にある大きなビルの地下が飲食街になっていて、昼休みや夜は、近くのサラリーマンでにぎわっている。

が、ここにも不況の波は押し寄せ、この一、二年、この地下街も変化した。その変化を列挙すると、次のような点である。

まず高級飲食店が撤退して、大衆的な店に入れ替わった。そして昼食も七百円か八百円のランチとなった。すなわち高価なものは売れず、値段が下がったのである。

第二の変化は、どの店も照明が明るくなった。これまでは高級感を出そうと店内がうす暗かったが、うす暗い店へは気軽に入りにくい。明るい店の方が客が入る。となると、隣に負けまいと、どの店も明るくなった。

第三の変化は昼食時になると、店の前へ棚を置き、弁当の販売を始めたことである。高級感を誇っていた食堂街としては考えられないことであったが、背に腹は変えられぬというところか。ところが、これがまたよく売れるのである。

第四は、外から店の内部がよく見えるようになった。ガラスの壁面に縞模様の隙間をあけたり、ガラス一枚置きに素通しにしたり、いろいろな工夫をして内部が見えるようになった。客は内部の様子がよくわかって、安心して入りやすい。来店客が増えてくる。

第五に店員の仕事振りがす早くなり、サービスが良くなった。注文すると、すぐ持ってくる。

ビッグバンの中にある銀行も、この変化を見習ってほしいものである。

（平成十二年）

八　バナナの種

今年の夏の異常な暑さのためか、わが家の庭に突然異様な草が芽生えてきた。

それはあっというスピードで芭蕉のような巨大な葉に成長し、中心に美しい花をつけた。

花は純白で、百合の花と蘭の花をまぜたようで、ことのほか美しい。日本の花ではない。どこか南方の国の花にちがいない。

「どうしてこんな花が咲いたのだろう」

「きっとバナナの花ですわよ」

「えっ、バナナの花……？」

私は妻の説明に頓狂な声をあげたが、そう言われれば心当りがないこともない。

半年ほど前のことである。バンコックへ行った友人が、お土産にバナナを山ほど持ってきてくれた。モンキーバナナと台湾バナナの中間ぐらいの、ちょっと小ぶりなバナナである。とろりと甘くて、大変おいしい。

だが、食べているうちに、ガチッと何かを噛みくだいた。

入れ歯でも欠けたかと心配して、見ると、それはバナナの種だった。

「えっ、バナナに種があるなんて、うそ……」

バナナに種があるなどと、思ってもみなかった。しかしそのバナナにも、その中心に種があったのである。

バナナの進化が遅れて種が残ったのか、それとも種のある独特のバナナなのか、それは分からないが、とにかく種があったのである。その種が庭にこぼれて、白い花を咲かせたのに違いない。

皆さん、バナナにも種のあるバナナがあるのですよ。これが異常に暑かった今年の夏の私の報告である。

（平成十二年）

九　あなたは天才だ

言論の自由ということは、他人の欠点、弱点をほじくり出し、非難攻撃することではない。そんなことばかりしている社会からは、何の進歩も、幸せも生まれてこない。

作家のWは、いまは錚々たる売れっ子であるが、その駆け出しの頃は厳しかった。

作家を父に持つWは、文才もあり、親の七光りということもあって、そのスタートは順調に見えた。しかし小説の世界は、平成の日本の政治の世界のように甘くはなかった。親の七光りなど通用しない。持ちこむ原稿のほとんどが、突き返され、戻ってきてしまった。Wは絶望

した。
すると推薦人のNが、
「Wさん、あなたは天才ですよ。あなたはお父さん以上の大天才です。書いて、書いて、書きまくりなさい」
とはげましてくれた。
その言葉にはげまされて、Wはころんでも、ころんでも起き上がり、ついに文壇に駆け上ることができた。Wは往時を振り返って、
「あの時のNさんのはげましがなければ、今日の私はなかったでしょう。私はNさんの『Wは天才だ』という言葉を馬鹿のように信じて、ただひたすらに書いたのです」
と、時々話すことがある。
このように人間に必要なのは、批判や非難ではない。はげましである。
最近の政治の無策も、行政の衰弱も、企業経営の停滞も、家庭の崩壊も、青少年の非行犯罪も、この、
(はげまし)
によって立ち直るのではあるまいか。非難によってでは、ない。
(平成十二年)

十　演歌「孫」

「孫」という演歌が大ヒットしていると聞いて、わが意を得たりと思った。
テレビ埼玉に「午後の歌謡曲」という番組がある。これはちょっとユニークな番組で、演歌を中心に、有名歌手、無名歌手かまわず、新曲を中心に放映しているので、普通あまり聞けない演歌が聞けて、ちょっと新鮮である。
この午後の歌謡曲でたしか二、三カ月前に「孫」を聞いたとき、わたしは、
(これはきっと売れるな)
と直感的に思った。
今や日本は世界一の老人大国である。老人にとって孫は、目に入れても痛くないほどかわいい。その孫をかわいがっている老人、また孫をかわいがりたいと思っても孫のいない老人が、全国に何百万人といるわけである。その老人たちの心を打たないはずがない。
「孫」はその後めきめき売上げを伸ばして、今やCD百万枚を超える大ヒットになった。歌手本人やレコード会社の努力もさることながら、要は人の心を打ったからである。
あなた無しでは生きていけないとか、抱いて抱いてもっと抱いて、などという不倫まがいのものだけが演歌で

ないことを、「孫」は立派に証明したのである。
これからも、「ひ孫の歌」とか、「おじいちゃんを讃える歌」とか、「親子孫三代の歌」とか、「おいらの先祖は偉かった」とか、「小学生元気はつらつ音頭」とか、「中学生いきいきマーチ」とか、人の心にひびき、人の心を元気づけるような歌を作ってほしいものである。
(平成十二年)

十一　皇室の宝物

上野の東京国立博物館で皇室の名宝展が開かれているが、この皇室の宝物については、あまり人に知られていない感動的な物語がある。
今から五十年ほど前の、昭和二十年十二月のことである。敗戦後の日本は食料難にあえいでいた。そのまま推移すれば多数の餓死者が出る危険があった。
政府は占領国のアメリカに食料の援助を要請していたが、すぐにはなかなか実現しなかった。
するとある日、松村謙三農林大臣のところへ宮中からお召しがあった。何事ならんと急ぎ参内すると、天皇は一通の書類を見せて、
「戦争で塗炭の苦しみを受けた国民が、さらに食料事情の悪化で餓死者が出るようなことがあってはならない。考えてみると、皇室の御物の中には国際的価値のあるものが相当あるが、帝室博物館の館長に命じて作らせたのが、この目録である。この宝物をアメリカに渡して食料にかえ、国民の飢餓を一日でもしのぐように、とりはからうように」
とのことであった。
天皇の御仁慈に感涙にむせんで、幣原首相と松村農林大臣がただちにマッカーサーを訪ねて宝物の目録を差し出すと、マッカーサーも非常に感激して、
「皇室の御物を頂くわけにはいきませんので、これはお返しいたしますが、天皇の御心はよくわかりました」
これによって、アメリカの食料援助が本格化し、日本国民は食料危機を乗り切ることが出来たのであった。
(平成十二年)

十二　銀幕の美女

無声映画鑑賞会という会があって、毎月一回、深川にある小ホールで開かれている。澤登翠という女性活弁士つきというのも、うれしい。
そこで先月「ほととぎす」という無声映画を見た。徳富蘆花原作「不如帰」の映画化で、大正十一年松竹蒲田作品である。川島武男には岩田祐吉、浪子には栗島すみ

子という豪華顔ぶれで、日本映画の銀幕の第一号女王である栗島すみ子の輝くような美しさに、しばし時の経つのを忘れる思いだった。

無声映画がトーキーになり、白黒映画がカラーになり、日本映画も七十年近い歴史を持ち、その間に無数の美男美女がスクリーンを飾ったが、その中で代表的な美女は果たして誰であろうか。

美の基準は人によってさまざまであり、また好みもさまざまであろうが、私の三大美女は、入江たか子、山田五十鈴、原節子の三人である。

とくに入江たか子の凄艶な美しさは空前絶後といってよく、代表作「瀧の白糸」「白鷺」などの美しさは、美の極致、神々しいほどだといっていい。

では、世界での美女はどうかというと、ビビアンリー、イングリッド・バーグマン、ダニエルダリュー、ということになろうか。

もっともダニエルダリューは美女といっても、その美はいわゆる白痴美とでもいうべきもので、スタンダードな美の基準からいえば、エリザベステーラーあたりであろうか。しかしエリザベステーラーには美の魔力のようなものがない。

「うたかたの恋」のダニエルダリューには、日本の白痴美女優嵯峨美智子のような美の魔力、美の頽廃があって、男の心を虜にするのである。（平成十一年）

短歌二十首

アウトサイダー

曽根竣作

敗戦後、転学生らどっと入り教室はまさに廃校の縮図

グループに海兵卒ら五人ゐきネービーブルーのコート纏ひて

Sといふ兵学校出のいごっそう遂に逝きたり一昨年（をととし）の秋

がやがやと転学生ら相連れて休講の合ひ間銀座に遊びき

無頼派の潜水艦乗りのK少尉つねに闇屋と対等なりき

答案を書きなづむとき図嚢（ずのう）下げし長靴のをとこわが横にゐき

衣食乏しそれでも何かに縋らんと階段教室いっぱいなりき

丘のうへ山食の粗飯食(たう)べつつ未来の望み捨てざりし頃

まとひつきしばし離れぬ黒揚羽思へこの春身罷りし旧友(とも)

貴様おれと呼び合ふ仲間地上より消えてひとりの歌遊びする

× × ×

晩夏光しゅくしゅくとして幾千の瞳のごとき向日葵に降る

秋蝉のむくろまろびし塚の下淡きひかりに土湿(しと)りゐつ

弧を描き闇をはしれる螢火の刹那の燦もこの世のいのち

鵠沼とふ名は残れども蓮池に鵠(くぐひ)かげなく葦残るのみ

ほったりと泰山木の花驕るあす凋落のさだめも知らず

鈴虫の音色すずしも院長のこころくばりか秋の病廊

テナントの募集れいれい灯らざる窓窓ありて都心昏れ落つ

揉まれつつ渓流い行く沙羅いちりん誰が入滅のときの暗示か

風紋に半ば埋もれし麦藁帽一夏(いちげ)の微笑ここにとどめて

濃く淡く藍ふた分けて夕凪ぎし海峡バシーに魂鎮めせむ

短歌

行雲流水（十二）

石黒修身

世田谷の文学館で「周平の世界展」見き晩秋の午後

以下「藤沢周平」八首

庄内の訛咄々周平はしみじみ語る自（し）が故郷を

「海坂（うなさか）」は庄内なりき周平は自（し）が故郷を時代に写す

馴染みたる周平の作映画では脚色ありて香気うすれる

映画では如何に描くか自（し）が作を周平思うや彼岸にありて

「漆の実のみのる国」の完結は絶筆となる六枚という

ひたすらに市井を描く周平の想いは常に凛として優し

無聊なる宵は籠りて好みたる周平の作読みて安らぐ

六甲の山峡に揺れゴンドラは神戸を望む鞦韆となる

万葉の歌に詠まれし有馬の温泉（ゆ）時代（とき）を経ていま観光盛（さか）る

代を古りし赤き温泉（ゆ）に染み癒されりこゝ有馬なる旧き宿にて

不随なる友の宰するチャリティは七里ヶ浜の潮騒のなか

冬陽差す渚を見つゝオペラ聴く七里ヶ浜のチャリティの会

「文明」が望郷の念焦がせしは榛名山麓上郊(かみさと)の邑

（土屋文明）

流行歌「湖畔の宿」の所縁(ゆかり)とう榛名湖辺は紅葉盛りて

石段(いしきだ)が続く温泉(ゆ)の街伊香保には「万葉」を尋(と)う歴史ありとぞ

中高年多く座りて噺家もあわせて語る午後の寄席では

食べ頃を知らせる文が挿まれてラ・フランス香る山形の便

降嫁せし笑ましの皇姫(ひめ)はすこやかに優しき歌を詠みたまうとぞ

「歌切」の言われを知りて茶と歌のゆかしき縁に思い致せり

連詩「記念写真」より（十四行詩三題）

松下壽男

強情

複雑な私の心はときどき
簡単なことができない
おまえとの約束を
一日延ばしにしたままだ

「ずるいのね
だから信じられないの」
おまえの不信の訳を聞き
私はむしろほっとする

おまえらしい
頑なな横顔の
単純な激しい心は

その日私の母の前で
とりとめなかったおまえが今夜
私の前で強情だ

しわ

素顔のままの
まゆの間の二本のしわを
指でそっと撫ぜながら
おまえがむやみにいとおしい

負けず嫌いの小さな心
子供のような小さな顔を
しかめ耐えて生きてきた
三十年を私は知らない

私と出会った後でさえ
おまえはななめにうつむいて
なにもいわないときがある

瞳を開けて見つめるおまえ
未来の闇を力まかせに抱くほかに
私になにができるというのか

花

新しい二人が住むための
ひなびた町は
はやばや戸を締めはじめる
私は花屋を捜して走った

最後の夜をむかえるまえに
私は灯りをたどって走った
花は八百屋の軒下の
バケツに埋もれて咲いていた

おまえは家で家族と共に
わがもの顔で過ごしていた
明日はおまえの家にこそ
特別な日だといいたげに

そしておまえのために花しか買えない
無能な男を嘲るようにもてなすがいい

ハート・トウ・ハート

第四話　ア・ラブ・シュプリーム（前編）

松下壽男

♥

「ミスター・エルヴィン・ジョーンズ、七月に来日したジョン・コルトレーン・クインテットの東京公演の実況録音盤がありますよ。聴きますか」

日本人特有の、固く、抑揚のない英語も、大分理解ができるようになってきた。何よりまだ若い店のマスターの誠実そうな表情をとらえることで、大方の意味が掴めるようになっていた。

「サンキュー、聞かしてくれ」

まだテーブルの上に椅子が逆さに載せてある、開店前の店内に、ジミー・ギャリソンの野太いベース・ソロが響き始めた。

（そうさ、他の誰にも真似ができないこの音と一緒に、おれは、ドラムを叩いてきたんだ。でもジミーのソロに絡んでいく太鼓の音は俺ではない。俺とマッコイは、ジョンのバンドを抜けたんだ。でも、俺たちは決してジョンを見限った訳じゃない）

確かに、アルバム「ア・ラヴ・シュプリーム」は素晴らしかった。白人の評論家が、ベートーベンの交響曲第九番と肩を並べる精神性を持っていると絶賛するほどだった。

かつてテクニックにおいてテイタムがルービンシュタインと比べられたり、オーケストレーションにおいてエリントンがストラヴィンスキーと比べられたりしたことはあったが、ジャズの精神性がクラッシクの楽聖の作品と比べられたことはなかった。

エルヴィン自身も、あの時ほど高揚した気持ちでドラムスの終局を、タムやシンバルの音色を、力の限り響かせたことはなかった。それは一つの完成だった。

しかし、翌日ジョンは「ア・ラヴ・シュプリーム」をクインテットで録り直すと言ってきた。再びスタジオに

出かけると、そこには五人目のメンバーとして、若いフアラオ・サンダースが待っていた。

演奏が始まると、スタジオにファラオの無機質な不協和音が鳴り響いた。前日の演奏を完成というならば、その日の演奏は破壊以外の何物でもなかった。エルヴィンにはジョンの真意がつかみかねた。

（ジョンは、完成とは破壊の一過程に過ぎないという自らの哲学を俺たちに示しているのだろうか。それとも俺たちがファラオの音を取り込んで新たなコルトレーン・ミュージックを育てていく可能性を持っているかを試そうとしているのだろうか）

アルバムには一日目の録音が採用されたが、二日目のテープをお蔵入りにしたボブ・シールのプロデューサーとしての耳を、この時ばかりは確かだとエルヴィンは思った。

半年後ジョン・コルトレーンは、カルテットにファラオほか六人のニューシングの若者を交えて、集団即興に挑んだ。若者たちは、コルトレーンというカリスマの周りに集まっていた。そして彼に認められようと個性を際立たせて力の限り演奏をした。彼らはカリスマの前で互いにライバルだった。それがフリージャズだと信じていた。彼らはアメリカという国から、自由とはそういうものだと教えられてきたのだった。ジョンが厳かにテーマを示すと、一斉に思い思いに即興演奏を繰り出す若者たちを見て、ジョンは大きな可能性を感じているようだった。しかしエルヴィンには、心を持たない野獣の叫びのように聞こえるのだった。

（奴らは互いに殺し合っている。なのにそれに気付かない。奴らには何かが欠けているのだ。そうだ、ソウル（黒人魂）だ。それともフリーっていうのは、ソウルからも自由になれっていうことなのかい）

マッコイ・タイナーは、端から演奏を導く努力を抛棄していた。まるで効果音のように気怠い和音を響かせて調子を合わせていた。

エルヴィンは、演奏にうねりを生み出そうと躍起になってドラムを叩いた。ポリリズムを繰り出した。しかし、若者たちは、わざとうねりに逆らおうとしているかのようだった。それが自由だと主張しているかのようだった。しかしそんな彼らが、演奏の途中でジョンが提示する新しいテーマに向かって一斉に個性を発揮し始めるのだった。エルヴィンは自分の努力の空しさを味わい始めた。

（ジョン、バンドはカリスマ性だけで足りるのかい。メンバーが支え合って成り立つものじゃないのかい）

それでもエルヴィンは力いっぱいドラムを叩き続けた。その演奏で最初から最後まで一番大きく鳴り響くのは自分のドラムスだとわかっていた。そしてドラムスという、たがが外れてしまったら、演奏自体がばらばらに

解体してしまうだろうということも。

演奏が終わったあと、エルヴィンはへとへとに疲れていた。誰とも話をする気はなかった。

そのレコードは、「アセンション」という題名で発売された。エルヴィンにしてみればコルトレーンの元で自ら進んで主役を張った唯一のアルバムであり、張らざるを得なかったことに堪え難い悔いを残す一枚であった。

ほどなく彼とマッコイは、コルトレーンの元を立ち去った。彼らは、破壊の前の完成の域に達したコルトレーン・ミュージックを普遍的なものにするために、ジョンの元を離れて、独自の音楽活動を始めようとしていた。

♥♡

「ピット・イン」という名のその店は、改装や建て増しの跡が随所に見られ、客席の真ん中にぶっきらぼうに柱が立っていたりするのであった。初めに音が音が鳴った、そして人が集まり店ができた、いかにもそういう感じがするのであった。

そんな印象は、店ばかりではなかった。シンジュクと呼ばれる街全体が、夜にはネオンサインが明滅し、音楽と喧騒とに満ちあふれていた。

ニューヨークの盛り場に似た居心地のよさを感じさせるこの界隈で、エルヴィンは手持ちぶさたな日々を送るほかはなかった。初めて楽旅にやってきた日本の首都トキオで、この異邦人は、出国差し止め処分を受けてしまったのである。

一九六六年一一月、「三大ドラマー激突！夢のドラム合戦」と銘打った日本のプロモーターの企画に乗ったエルヴィンは、アート・ブレイキーやアンソニー・ウィリアムズと共に観光気分で日本ツアーを過ごしていた。しかし彼は、ツアーの途中で、アンソニーと共に突然東京に連れ戻された。アンソニーがマリファナ不法所持で逮捕されてしまったのだ。そして麻薬の前歴のあるエルヴィンにも嫌疑がかけられた。もちろん彼の所持品のどこからも麻薬は発見できなかった。アンソニーが麻薬を持っていることすら知らなかったのである。しかし日本の当局は、アンソニーの取り調べの過程でエルヴィンが共犯者として上がってくると睨んでいた。ゆえに取り調べが完了するまでエルヴィンを帰国させてはならない。彼は名前が上がった時点で容疑者になるのだ。こうしてエルヴィンの行動の自由は、出頭命令に即座に応じられる範囲に制限されてしまったのである。

実際のところ、エルヴィンは麻薬に関しては、嫌疑をかけられても仕方がない生活を送っていた。コルトレーンの勧めにもかかわらず完全に麻薬を断つことはできなかった。とはいえ二度と中毒症状に陥ることもなかった。よく言えば、彼は依存僻をコントロールしながら麻

薬を嗜んでいたのだった。

コルトレーンをボスと頼んで以来、あの忌まわしいムーチはエルヴィンの周囲に姿を見せなくなった。代わりに彼の配下の若者が遠慮がちに声を掛けてくるのだった。

「ミスター・エルヴィン、お元気ですか」

「おおボーイ、この頃ムーチ先生はどうしたい。いよいよ足腰が立たなくなってきたのかい」

「いいえ、ドクターは元気です。近ごろはロックファンのティーンエイジャーに爆発的な需要がありまして、販路拡大に走り回っておいでです」

「ダニの世界も大衆化かい。質より量で勝負っていうわけだな。せいぜいダニの親父によろしくつたえといてくれ。それから今度は、もっとじわーと効くのをもってこいよ。試してやるから」

「全く、エルヴィンさんに会ってはかないません」

そんな具合だったから、今回の一件では肝を冷やした。麻薬にはもう二度と手を出すまいと決心するエルヴィンだった。

極東のこの地でもジャズメンやファンが彼を親身になって支えてくれた。それはエルヴィンが思う以上に当然のことであった。黄金のカルテットにいたドラマーが全くオフの状態で日本の首都を離れられずに居るのだ。日本のジャズ界には麻薬取締官の石頭に思わず拍手を送った者もいたことだろう。エルヴィンは、周囲の支えと店主の勧めに応じて、このピット・インにハウスドラマーとして身を置くことにしたのであった。

そして今日も、まだ明るいうちから、カウンターに陣取って、開店の準備に忙しいマスターを相手に時折片言の会話を交わしながら、とりとめのない時間を過ごすのだった。

新宿の街一帯に飲食店が犇めいていたが、通りを歩けば店から漏れてくる音楽で店の客筋が分かった。

リズムを極限まで押さえこんだ咽ぶようなマイナー・キーの音楽が流れていれば、そこは中年や老人が屯す店であった。店先には、決まってノレンというカーテンが下がっていた。その曲の哀愁をおびたメロディーラインは、異邦人の彼にさえ懐かしさを感じさせる何かがあった。しかしドラマーの彼には接点を見出しづらい音楽だった。

一方若者向けの店の主流はダンスホールを兼ねていて、絶え間なく大音量でロックンロールのエレクトリックサウンドが流れていた。ロックの流行はもはや世界的であったのだ。

「コルトレーンの来日は、その一か月まえのビートルズの来日以上の価値があったと思っています。世間の騒ぎの大きさは、比べ物にはならなかったけれど」

ピット・インのマスターが溜め息まじりに語るのも無

理はない。半年近くも経っているというのに、ビートルズ来日の熱気はまだ冷めてはいなかった。巷の拡声器からは彼らの演奏が繰り返し流され、テレビからは日本公演の録画が度々放映されていた。万を越える聴衆に囲まれた彼らの演奏が若者たちの絶叫にかき消され、会場から多数の失神者が運び出されていくその映像を見ながら、彼はつぶやいていた。

（今時のロックンロール、あんなのは音楽じゃない、少なくともソウルの響く音楽じゃあない）

この言葉は、実はアルバート・アイラーの受け売りだった。デンマーク公演のオフの夜に、コペンハーゲンのカフェ・モンマルトルで、エルヴィンは、コルトレーンと連れ立ってアルバート・アイラーのテナーサックスを聴いたのだった。

コルトレーンは、去って行ったドルフィーに代わる存在を探し求めていた。その気持ちを知っていたエルヴィンには、アイラーの調子の外れた、しかし情念が迸るような最初の一音に出会った時のコルトレーンの表情を忘れることができなかった。彼がメンバーに引き入れたかったのはファラオ・サンダースではなくアルバート・アイラーだったのかも知れない。そしてそれが実現していれば、エルヴィンももっと長くメンバーに留まっていたかも知れないと思わせるほど、アイラーのサウンドからは満ちあふれるソウルを感じ取ることができたのだった。アイラーは曲目の紹介で度々スピリッツという言葉を口にしたが、その言葉までも予定調和のようにコルトレーンと重なっていた。

休憩時間に、店の隅のテーブルで、年下の礼儀正しいその青年にビールをおごりながら、エルヴィンは尋ねたのだった。

「アルバート、お前は、いつからそんなにソウルフルでへんてこりんな音を鳴らすようになったんだい」

「僕は、最初はリズムアンドブルースのバンドに居たんです。その手のバンドのテナーサックスの役割とは、客を煽ることでした。客にまず腰を振らせることでした。足踏みをさせ手拍子を打たせたらこっちのもの、あとは限りなく同じフレーズを繰り返したり、わざとリードミスを起こしたりして客に叫び声をあげさせるんです。するとボーカルが、シャウト！なんてさりげなく聴衆に指示を出します。そこからはもう群集心理の世界ですね。僕は、子供の頃から黒人教会に連れて行かれて、説教師がゴスペルとシャウトで信徒をさんざん煽り立て、失神させたあと神の啓示とかといって寄付を巻き上げる手口を勉強していましたからね。よし、客席のあの子を落としてみようと、その子が失神するまで煽りもしました。正直随分もてました。今よりもずっとね」

「そうやって、女の子を泣かせた罪滅ぼしに、今の演奏をしてるってわけか」

「よしてくださいよ。でも僕の心の中でソウルが悲しく泣いているのは感じていました。ブルースにもゴスペルにもソウルが溢れているのに、リズムばかりで聴衆を煽って失神させて、それが一体何なのさって。ソウルは心にあるものなのに、今の音楽は体に伝えているだけじゃないかって。そう思い立って、僕は、心から心へ伝えるスピリチュアルな音を探し求めるようになったのです。このごろの世界の音楽の流行を見ると、僕の考えこそ間違っていないと一層強く感じるのです。白人がリズムアンドブルースの真似をしてロックンロールに仕立て上げたときから、とうとう音楽は、大衆を踊らせて金を巻き上げる商売になってしまったんです。今のロックンロール、あんなのは音楽じゃあ、少なくともソウルに響く音楽じゃありません」

「わかったぜ、アルバート。お前のフリージャズは、ジャズの伝統から自由になろうなんてちっぽけなもんじゃない。ジャズの伝統で世界のソウルを解放しようというわけだ。もういっぱいおごるぜ」

その夜のエルヴィンは本当に愉快であった。

「こいつのフリー・ジャズなら大歓迎だぜ」

と、コルトレーンに語ったほどであった。

エルヴィンとアルバートが北欧でそんな会話を交わしていたのだから、すでに音楽の流行は世界規模で動いていた。それを動かしているのがミュージシャンの力ではないことは彼らにはわかりきっていた。彼ら自身が、もはや地球の罫線緯線のます目の上をチェスの駒のように動かされていたのだ。楽器一つでさえ、金が動かずに他国へは動かせないのだ。そして金を動かす理由はただ一つ、金の動きが新たな金を吸い上げるからにちがいなかった。しかしそんなことを（自分たちはミュージシャンの音楽を聴きに集まっているのだ）と信じている聴衆が知らされるはずもなかった。日頃から音楽産業のからくりを身に沁みて知っている彼らミュージシャンであってさえ、今のエルヴィンのように突然の長いオフでも来なければ、考えることなどなかったのであった。

ロックばかりではなかった。新宿には、アメリカ西部のカントリーミュージックに似た楽器編制で歌を聞かせる店もあった。フォークシンガーと呼ばれる彼らは、弾き語りの歌詞を聴かせる歌いっぷりが、リズムこそ違え、ボサノヴァに似ているとエルヴィンは思った。異邦人の彼にも、いや異邦人だからこそ郷愁をそそられるものを感じるのだった。そしてアマチュアバンドが街のいたるところで歌声を聞かせていた。しかしその歌詞が何を訴えているのかは、彼には全くわからなかった。

「マスター、彼らは何を歌ってるんだい」

「自分の身の回りの出来事を歌にしているので、様々ですが、共通しているのは戦争反対ですね」

新宿はまた、ベトナム戦争反対運動の支持者の溜まり

場でもあったのだった。

ピット・インにも、時折、黒人や白人の姿が見受けられたが、彼らの中には、知らぬ間にやって来て、貪るようにジャズを聴き、いつの間にか姿を消していく若者がいた。決まっておどおどした目つきをしていた。エルヴィンは、新宿にはベトナム戦争からの脱走兵をかくまう裏組織があるという噂も耳にしていた。

エルヴィンの兄のサドは、兵站部隊の一員として日本と戦った。エルヴィン自身が軍楽隊に属していたときは、前線部隊が朝鮮で戦っていた。そして今度はアメリカ軍はベトナム戦争を戦っていた。勝利して占領した日本を基地にした彼らは、そこを足がかりにしてアジアの国の同胞同士の殺し合いに、自らも命がけで、首を突っ込んでいた。雄々しいといえば雄々しく、愚かといえば愚かであった。

脅えた目をした兵士らが戦っていた相手は、コミュニストと呼ばれるベトナム人だった。彼らが守らなければならないベトナム人と彼らが戦わなければならないベトナム人とはただ心の中が違うだけだった。兵士らはその違いをどう見分けて戦えと教えられてきたのだろうか。若く逞しい体つきをした脱走兵の脅えきった目つきから、人間を、世界を信じることができなくなった者の不安を感じ取るエルヴィンだった。彼らのことを、真実を知る者として支持するべきか、ただの負け犬として捕獲して再び最前線に送り込むべきか、エルヴィンは答えを出せる立場ではなかった。ただ脱走兵や解放組織が蠢いているようなこの街に居心地のよさを感じるのだった。自らのソウルの居場所を感じるのだった。いつでもどこでも抵抗や反対の中でソウルは姿を現すのだろうか。エルヴィンは新宿の若者たちに親近感を覚えていた。

そんな新宿の街に、当然、ジャズはしっかりと根づいていた。

「エルヴィン、日本には、コーヒーを飲ませてレコードを聴かせるだけのジャズ・クラブがあるんだぜ」

「なんだい、それじゃあぼったくりじゃないか」

「まあ、一度行ってみろよ」

日本ではおそらく「サッチモ」の次に名前の売れているジャズメン、アート・ブレイキーからこんな話を聞かされていたが、実際に行ってみると、そこは、まるでジャズのレコードディスクを揃えた図書室のようなところであった。十人も座れば満席になる薄暗い店内を、大抵一人か二人で切り盛りしているマスターと呼ばれる店主は、さしずめ図書館の司書であった。囁くような声で客からコーヒーの注文とジャズのリクエストを聞き、その一枚のレコード盤を、壁一面の棚にぎっしり詰まったおよそ万は下らないコレクションの中からいともたやすく抜き出して来る。そして軽業のような手つきでタ

ーンテーブルの上に載せ、ノイズ一つ立てずに、目の前で生の演奏を聴いているかのように再生して聴かせるのである。しかも入れ立てのコーヒーが旨いのだ。

客の中にはスティックを手にして、再生音のドラマーに合わせて空中で打ち振る若者もいて、エルヴィンは愉快であった。確かにアートの言った通りだが、そこは歴史に刻まれたとびきりのジャズを、コーヒーと共に味わう教室だったのである。

初めて入ったその手の店で、エルヴィンはマスターに尋ねてみたのだった。

「ここは、なんていう教室だい」

「ジャズキッサといいますよ。地理的にも文化的にもアメリカから遠く離れた日本で、ジャズを学ぶために作り上げられたカリキュラムです」

店主の英語は、ゴツゴツとした発音ながら、選び抜かれた単語から深い教養を窺うことができるのだった。

「そして物事の記録と再生の技術に関しては、その必要に迫られてきた日本の右に出る国はないでしょう。この店でフレーズを覚えて、家に帰って真似ができるまでくり返しくり返し練習するうちにジャズイディオムをすっかり身につけ、プロの世界に巣立っていった若者が何人もいるのです。中には、アメリカにジャズの留学に行く者まで」

自慢気に話す中年の店長に、エルヴィンは、「儲かるかい」とは聞けなかった。金儲けをあてにした図書館なんてアメリカにだってありやしないのだ。自分が食客を決め込んでいるこのライヴハウス＝ピット・インでさえ、マスターのやりくりの苦労は傍目にもわかるのだった。

エルヴィンは、ジャズ喫茶との出会いを振り返るうちに、このピット・インのようなジャズ・クラブが、日本では「ライヴハウス」という奇妙な英語で呼ばれている謎が解けてきた。

(ここは、レコードから学ぶ「ジャズキッサ」の課程の卒業生が集う店なのだ)

エルヴィンらアメリカのジャズメンにとってジャズとは空気のようなものだった。ひょっとすると産声からがジャズイディオムだったかもしれない。しかし日本の若者にとってジャズとは聞き耳を立てて覚えなければならない音楽だった。アメリカの、しかも黒人の音楽を学ぶとなれば、彼らは社会に対して身構えなければなならなかった。

実際、エルヴィンが旅したヨーロッパの国々よりも、日本では強い偏見を感じた。満員の電車の中でさえ、彼の周りにはいつも空間があった。手を差し出しても握手を断られることすらあったのだった。

(透けるような肌と髪を持った北欧の人々と比べれば、明らかに有色人種である日本人の方が、黒人の肌の

色に敏感なのはなぜだろう。敗戦国の憤りをぶつける丁度手ごろな相手として、占領国のアメリカの中でも差別を受けている黒人に向けて、偏見の目が注がれているのだろうか。それとも単純に黒い肌が物珍しいだけなのか）

それは来日以来のエルヴィンの一つの大きな謎だった。

しかしレコードを聴いてジャズの虜になり、やがてライヴハウスで生息を始めた若者たちは、共に偏見を被る覚悟をしているかのように思えた。多様な音楽がある中で自らの才能をアメリカの黒人音楽に注ぐことを選んだジャズマンたち、本場のレコードにはまだ足元にも及ばないその演奏を金をはらって聞きに来る聴衆たちが、ジャズに対して持っている並々ならぬ情熱を、このピット・インのステージでひしひしと感じてきたエルヴィンだった。彼らはジャズと共に生きる覚悟を決めていたのだ。ジャズという生き方を生きはじめているのだ。

（奴らのジャズを求める心の熱気は、ジャズを空気のように感じているおれたちより熱いのだ。そして熱の中心には、奴らのソウルがあるはずだ。俺は、そのソウルを引き出すために今ここにいるのかもしれないぜ）

もとより教師という柄ではなかった。教えようとしても言葉は通じなかった。しかし、これまでピット・インで見せてきた、相手の力量に合わせるだけの手すさびのドラミングでは、日本のジャズメンからソウルを引き出すことはできっこない、それはわかりきっていた。エルヴィンは自らのソウルが、オフからオンへと切り替わり、熱を帯びていくの感じた。

古い物・遠い夢

忠内正之

第十一章　茶道具三昧

（四）萩茶碗

一　一楽、二萩、三唐津

「一楽二萩三唐津」というが、いつ誰が言い始めたのか定かではない。だが意味するところは、はっきりしている。茶の湯の道具として陶器、特に茶碗のベスト・スリーは一に楽焼、二に萩焼、三に唐津焼だということである。なぜ楽と萩と唐津が秀れているかというと姿、形、土味（つちあじ）、由緒、そして手どりや使い勝手の良さなど、鑑賞的、機能的、歴史的な価値を総合的に判定したのであろう。

抹茶を喫する慣（ならわし）はすでに鎌倉時代に禅林に伝わり、南北朝、室町、東山時代には宮廷、将軍、武将等特権階級に拡がって、闘茶から茶会へと発展し、紹鷗・利休の時代となって侘びの茶の湯となった。更に利休以降、織部、遠州等秀れた指導者たちの出現によって、武士から町人に至る迄の茶の湯の発展を見たのである。

民間における喫茶の流行につれて、東山時代の末期では京都、奈良、堺の富裕な町衆の間にも茶会が催されるようになった。しかしこれ迄の中国一辺倒の唐様茶会とは著るしく趣を異にした。この傾向はことに堺の町衆の茶会で積極的であった。彼等は唐様的な好みから脱した、純粋な日本人としての好みに傾到した。かくて生れたのが新しい侘びの茶の湯であった。

紹鷗は、この私様の好みを指向する堺の町衆茶人の指導者であった。床に歌切が使われだしたのも紹鷗からで、また信楽、備前、南蛮（唐物以外の外国もの）などの侘びの焼物を進んでとり上げたのも紹鷗であった。

井戸などの高麗茶碗が登場してくるのも同じ事情によるもので、天目や青磁茶碗の唐様的な感覚には所詮なじまない堺の茶人にとって、朝鮮貿易によって知った、朝鮮の茶碗の侘びた趣はその好みに向いており、かくて高麗茶碗がとくに堺の茶人の間でとり上げられ、流行をみる様になった。

紹鴎の弟子利休によって、侘びの茶の湯は大成されたが、記録によると、「物テ茶碗ハ唐茶碗（天目・青磁）スタリ、当世ハ高麗茶碗、瀬戸茶碗（志野・瀬戸黒）、今焼（楽焼）ノ茶碗迄也」という趨勢は、また利休時代における茶道具すべてにわたっての好みの傾向でもあった。

紹鴎以来の備前、信楽の花入、水指に続いて、利休時代になって始めて茶碗にも、志野、瀬戸黒などの和物が出現したのである。そして利休好みの長次郎（楽初代）の楽焼茶碗の登場によって侘びの好みはもっとも典型的に具現化されたのである。

利休に次いで弟子織部の時代となる。

織部の特色はいわゆる織部好みである。利休の沈静、抑制的なのに対して織部好みは動的であり、力感的である。

その基調をなしているのは、ひょうげた物といわれるヒズミの感覚であり、デフォルムやそれを強調するヘラ目が美しい。

沓形茶碗という従来見なかった形もその一つである。織部好みの影響は、志野、織部、備前、伊賀、唐津などにひろく窺われ、桃山時代の茶陶の味わいとなっている。

織部の後を次ぐのが遠州である。遠州によって近代に繋ぐ茶の湯は完成したと言っても過言ではない。遠州の特色はきれい寂びである。華やかなうちにも寂びた風情を好んだ。遠州七窯の諸窯や伊賀、信楽、丹波などに影響が見られる。

さて結論的に言うと茶会の唐様から和様への転換につれて、茶碗の好みの流れの上にも、唐物茶碗から高麗茶碗へ、更に和物茶碗への変転が見られるのであるが、一楽二萩三唐津の言い慣わしがいつとはなしに伝承された訳で、永年の茶人の間における言わず語らずの感触が、その最大公約数的な好みを示すものとして、この言葉をもたらしたものと思われる。

註一　武野紹鴎（一五〇二―五五）室町時代の茶匠、千利休の師。村田珠光のあとをうけて侘茶を完成に近づけた。

註二　遠州七窯　小堀遠州が自分の好みで指導注文したといわれる国焼の七つの窯。志戸呂、膳所、上野、高取、朝日、赤膚、古曽部。

二　萩の七化

萩の特色を表現した言葉に昔から「萩の七化」ということがよく使われる。茶碗や花入等萩焼に使用される土の滲透性と低火度焼成による軟陶度合によって釉調の微妙な変化を風情と見る言葉であるが更にその作陶技術が朝鮮の陶工によってもたらされ、あらゆる高麗茶碗を模写しているところから、とくに初期の萩焼が井戸茶碗等の朝鮮茶碗になり澄ましている事実があることへの比喩的な意味にも用いられて来たものである。

この様に、萩焼は江戸初期に珍重された、「高麗茶碗」をそのまま萩藩で再現したようなものであったから、近世以来高麗茶碗の系譜をひく茶陶として楽、唐津と並んで茶の世界で賞賛されて来た。しかし萩の場合、楽、唐津と違って、江戸時代は藩主の「御用窯」として閉鎖されて来た。広く一般的に使用される様になったのは明治以降の茶の湯の復興に相俟ったのである。因みに、大正名器鑑に記載されている萩茶碗は僅か二点に留まっている。井戸茶碗になり澄ました萩茶碗の名品がかなり埋れているのではなかろうか？

三　萩焼の起源と消長
――文禄、慶長の拉致――

文禄、慶長の役（一五九二―九八）の時、日本に連れて来られた、朝鮮陶工たちは九州各地の大名によって庇護され、強制され各地に夫々開窯し多大の影響をもたらした。

既に中国の指導により唐物風の作品を作り上げていた瀬戸、美濃は別として、唐津、高取、平戸、上野、薩摩等を領する大名達によって、優秀な朝鮮陶工達が招聘された。否、拉致されたと言った方が適当であろう。

拉致されて来た当初は押し込み同様の扱いでかなり苦労したが、優秀な技術を発揮するに至り、つまり当時日本人があこがれていた高麗陶磁を和物で写すという技能が発揮されるに至り、保護されたり或は被官となって重用され、御用窯の発展に寄与し藩に多大の利益をもたらす結果となった。また先に述べた主要な茶人たちと藩主たちとの交流の中で、茶陶の作風にその指向を受けて近世の和物茶陶が完成したと言っても過言ではない。

萩焼は藩主毛利家の御用窯として、萩市の城下「松本」と長門市の「深川」に帰化陶工季勾光らによって近世初頭に開かれた。高麗茶碗にもっとも近い土味と作風、そして茶碗専一の窯の侘びた茶情が、評価されひいては今日の隆盛につながる。

十六世紀末の文禄・慶長の役で、日本に連れて来られた朝鮮陶工季勾光は、高麗のやきものの技法を熟知した優秀な陶工であった。豊臣秀吉の命によって大阪に留められ、のち毛利輝元に預けられた。当時毛利藩は広島にあったので広島で作陶を開始した様で、その後の萩焼の陶土の特性を現わす大道土を発見したのである。

毛利家の萩への転封に従った季勾光は、城下の松本に窯を開いた。背後の唐人山を薪山として下賜され、土地と俸禄を与えられた。その時点で弟の季敬を朝鮮から夫婦ともども呼び寄せた。また季勾光には数人の帰化陶工の弟子たちがあり、ともに士分に取り立てられ職人として藩主に召し抱えられた。

季勾光は弟の季敬や弟子たちと松本中之倉で作陶しているうち、藩主から領内の古窯跡や陶土の調査、および窯の復興を命ぜられる。のち長門の「深川三之瀬」に窯を興し、ここで没した。藩の庇護下にあったとは言え、異郷の下、捕らわれの身に近い存在とあっては余程の辛酸を嘗めたものの様である。また毛利藩そのものが、徳川政権下では苦難の連続であった。苦労をした点では各地各藩に散って夫々作陶の基礎を固めた、朝鮮陶工達も同じ苦しみを味わったことであろう。

季勾光は日本人妻をめとり、男子が一人あった。これが山村新兵衛光政で父の没後は叔父の季敬に育てられ、御用窯の頭領として藩主秀就に仕えた。季敬も坂助八と名乗っていたが、のちに坂高麗左衛門に任ぜられ、子孫は今日に及んでいる。

山村新兵衛は不祥事をおこし、子孫は「深川」へ移住し、その後は季敬の坂家が御用窯のまとめ役となる。また山村家の帰化陶工の弟子たちはすべて深川窯に移り藩の御用品と自分焼の両方を作る窯を起こした。山村家は五代で絶え坂倉新兵衛がその地位を継いで今日に至っている。深川萩は、坂倉、坂田、田原、新庄、窯の四つが今も栄えている。

一方松本萩では二代藩主綱広の時代、三輪窯が御用窯に加わったので坂家と三輪家の一者となって今日に及んでいる。三輪家の初代休雪は矢張り帰化陶工の子供と言われ（異説もあるが）名工であり、後に藩命により京都の楽家で学び、高麗茶碗そのままの萩焼に和風の寂びた趣を加味させた。いらい萩焼の作風に休雪が与えた影響は最も大きく作用し萩焼の代表的存在となっている。御用窯は松本萩の坂家、三輪家、深川萩の坂倉家となり江戸期を経て今日につづいている。左記の通り。

- 深川萩（季勾光系）
  - 坂倉家
  - 坂田家
  - 田原家
  - 新庄家
- 松本萩（季敬系）
  - 坂家
  - 三輪家

萩焼は御用窯として藩の行き届いた保護を受けてきただけに、明治維新に際して受けた打撃は深刻であった。「深川萩」は開窯当初から半官半民のような自分焼もあったが、「松本焼」の坂、三輪の両家は格式があるだけに民間に器物を売って生計を建てることは困難をきわめた。その苦境の中で家訓とする「不走時流」の信念のもとに茶陶の伝統を守り抜いた。明治末年からの茶の湯の復興、大正・昭和、ことに戦後の茶の湯人口の増加、大寄せ茶会の隆盛は茶情の豊かな萩茶碗を見逃すことは無かった。ここに漸やく主役となってクローズアップされるに至ったのである。

四　古萩井戸形茶碗

写真の萩茶碗は、今わが家が所有している。この茶碗と出合ったのは昭和五十四年夏頃であった。懇意な美術商のすすめで購入した。

今では不感症に近い性となっているが、その当時では、吃驚する程高いなあと感じた。普通の食器の茶碗ならば2、3千円が妥当である。

だが茶道具に眼醒めつつあった身としてはこの茶碗の持つ妖しい魅力のとりことなってしまったのである。単なる骨董好きの自分が古くて寂びた優美さを保つ、茶道具に眼を開かされてしまったのである。之が茶道具へ傾倒する第一歩であった。愉しみと苦労を抱える病気の始まりであった。

古萩井戸茶碗と黒田氏書付

私見であるが、道具とは古くて美しい事が第一要件である。更に欲を言えば「伝来」があれば申分ない。しかしそこ迄は望めない。物さへ良ければと言うのが私の考え方である。

私は気に入った、この茶碗をいろいろと観察してみた。先づ茶碗の箱は百年くらいたった古い漆塗りの出来で、表面は唯「古萩茶碗」とだけある。茶碗は「仕覆」に包まれており、仕覆の裂地は能衣裳を思わせる黄色の

緞子の出来である。以前の所有者に大切に扱われていたものと思われる。茶碗は井戸茶碗の写で、両手で抱くと吸いつく様にしっとりと治まる。淡黄色も落ちついて上品な感じで、井戸の本歌と違って荒々しさには欠けるが、温かさと香気に満ちている。茶の湯にもって来いの茶碗である。

黒田領治氏（初代陶々庵、識者）はこの茶碗を鑑定して「古萩茶碗　高麗左衛門　助八作と言ふ」の書付を下さった。これを是として調べると。

初代坂高麗左衛門は、既述の如く旧名を季敬という帰化朝鮮人である。兄季匀光の招きに応じて来日したもので、毛利候の命により姓を坂、通称を助八、名を道忠と改め、更に寛永二年高麗左衛門の改称を賜り、禄五十石余りを得て以降代々高麗左衛門と称している。「萩市松本中の倉」に良土を発見して窯を開き、井戸、割高台など朝鮮風の茶碗を主としておよそ四十年間焼き続け寛永二十年五十八才で没したという。

二代助八忠孝、元和三年生れで寛文八年五十二才で没している。作柄は初代に比べて小振りでやさしく、やや淡黄色の強い釉薬を見せる。矢張り井戸写しや割高台、俵形の茶碗、等朝鮮風の作陶を行なった。初代と二代の作品を普通「松本古萩」と言うのである。

以上から類推するとこの茶碗は、初代か二代作の古萩と言って過言でなかろう。私が何故これ程こだわるかと言う理由は、もう一方で、驚ろいた事に岡田宗叡氏（古陶磁研究家）がその著書「茶陶見どころ勘どころ」の中でこの茶碗そのものを写真入りでとりあげて、秀作と認めながらも江戸中期時代の作と定めて紹介しているからである。江戸の中期だと古萩とは言えないので重要なポイントである。但し岡田氏は既に故人であるから今更質す訳にはいかない。

良い情報もある。「淡交社」発行の茶道美術鑑賞辞典の茶碗の部に「萩井戸形茶碗」が写真入りで載っている。紹介すると、

「萩焼は藩主毛利輝元が連れ帰った朝鮮の陶工季敬が、慶長九年に萩の松本で開窯したのが創始とされている。伝世しているものは井戸・熊川・粉引きなど高麗茶碗を模したものが多い。古唐津との関連も考えられるが、茶陶専門の窯として数多くの名品を生んだ。

この茶碗は井戸茶碗を写したもので、素直な造形、枇杷色の釉、竹の節風の高台など本歌に迫る名碗である。初代高麗左衛門（季敬）の作と伝えられる。（中略）所蔵は逸翁美術館。」

図録の茶碗の写真と比較して見ると、当方の茶碗の口径が稍小さいだけで形状、感じは殆ど変らない。逸翁美術館を訪ねるチャンスは未だ無いが、意を強くした次第である。

なおこの辞典で茶碗の部を監修したのは、陶磁研究家

村山武氏である。（故人）

以上長々と述べて来たが、自分の持物を喧伝するためと思われるのは辛く、本意でない。しかし伝来の無い逸品の存在を明らかにすることは、必要なことと思う。

まとめて見ると、この茶碗は古萩の井戸形茶碗であって、坂高麗左衛門の初代か二代の作であろう。古萩茶碗の流通が少ないのは、井戸茶碗の本物とされて有力者に所蔵されてしまった。また唐津茶碗等に擬されてしまったからとも思われる。御用窯の色濃かった宿命でもあったのか。従ってこの茶碗は稀少価値のある存在に違いない。

今この茶碗に接すると、四百年昔、異邦に渡った鮮人の苦労が伝わる。日本と朝鮮の文化を結んだ努力の結晶とも言える。茶を点てゆっくり啜りながら考えさせられるところである。識者によれば、日本人ほど良質の陶磁器を大量に日常使用している国は世界中でどこにも無いと言われる。焼物の歴史は縄文土器から須恵器に移るが、その過程で鎌倉時代に瀬戸の陶祖と仰がれる、藤四郎が中国に渡って作陶技術を学んで瀬戸もの隆昌の基礎を作った。従って瀬戸は和物として最も古くから本格的な作陶を行なったが、いわば中国系であった。

一方繰返すが、西日本の大名達が拉致して来たとも云える帰化陶工達によって開窯された諸窯（唐津焼、上野焼、八代焼、平戸焼、薩摩焼、萩焼等）がいっせいに朝鮮風の名陶の花を咲かせて今日の陶磁器（茶陶）の隆盛をもたらしたのである。

帰化陶工達の救いは、妻子眷属の帯同を許されたことであり、また藩士としても重用されるなど、好待遇を受けたことであろうか？　しかし長年に亙っての苦労と望郷の念は否めない。曰く「故郷忘じがたく候」と沈寿官は言っている。

今日、一楽二萩三唐津と気楽に口にしているが、萩、唐津の茶陶の花を咲かせた帰化陶工たちへの謝恩の念を忘却してはならない。

尚蛇足なから千家十職の「楽家」の先祖もまた帰化人であったと言われるが、それに関する記述はまたの機会に譲りたい。

終

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生

松下魏三

二、父の薫育と母の慈愛

父秀雄は明治元年（一八六八年）二月四日に赤堀清吉の長男として成行村で生れた。天保時代の記録によれば秀雄の家は村の鍛冶屋で、土地の人は西鍛冶屋と呼んでいた。父清吉の時代には鍛冶屋をやめて半農半漁の生活であった。秀雄は幼名を弥太郎といい、幼い時から頭脳明晰で周囲の人々から秀才として注目されていた。

当時はまだ学制が確立されていない時代であったので隣村（現菊川市河東（藤井））の幕府時代の漢学者であった中島秀清氏の私塾に学び、明治十年に成行村砂走に薫成学校が創立されると弥太郎はこの学校に通った。明治十四年に薫成学校が廃止され、千濱村成行に遠南学校が設立されると弥太郎は在学中に一時遠南学校の助教を勤めたことがある。

その後明治十六年に静岡師範学校（現静岡大学教育部）に入学し、村民から大きな期待が寄せられたといわれている。明治十九年（一八八六年）に卒業すると、日頃から敬慕している恩師の中島秀清を訪ね、先生の秀の一字を貰い受けたいと申し出で秀雄と改名し、教育者としての道に進むことになった。

秀雄は最初磐田郡見付（現磐田市見付）の見付小学校に赴任したが、その後小笠郡佐倉村（現御前市佐倉）の佐倉小学校（現浜岡東小学校）に転出し、明治二十六年（一八九三年）には同校の校長に就任し、成行の自宅から佐倉小学校へ通勤した。

日頃から新らしがり屋で好奇心の旺盛な秀雄は、当時まだゴムタイヤのついた自転車は大都会にしか見られない時代であったが、ガタガタと音のする鉄製の輪がついている自転車に乗って砂利の田舎道を通勤したので村の人々の噂にった。

また当時は誰も食べたことがなかった赤ナス（現在のトマト）を栽培し、人にも奨めたといわれている。

その後四郎が十歳になった明治四十三年の春の夕方、秀雄が「明日の夜明け前にハレー彗星が一番地球に近づいて、大きく見えるそうだから一緒に早起きして見よう」といったので、何時もより早く寝たが、翌朝午前四時頃にたたき起された。眠い目をこすりながら家の外に出てみると、空はもうかなり明るくなっている。すると東の方の地平線すれすれに懸っている火の球から上空に向かって黄色く輝いた帯が見えた。上に行くにしたがって幅が広くなり、次第に色が淡くなって、ほぼ中央に達している。それを見て肝をつぶし、唖然とし空を見上げていた。」と四郎は述懐している。

その後長い歳月が流れて再びこの星が巡ってきた昭和六十年には、四郎は世界に知られた大科学者となり、すでに現役を退き八十六歳の高齢になっていたので兵庫県芦屋市の自宅ではこの星を見ることが出来なかった。しかし、この星を観測するために紀伊半島の潮岬まで出かけていった娘や孫たちから「土産話を聞いて感動した。」といっている。

当時は千濱村には新聞が配達されていなかった。秀雄は新しい知識に強い興味と関心を持っており、折に触れキュリー夫妻のラジウムの発見や池田菊苗博士の味の素（グルタミン酸ソーダ）の発見、さらには郷土の出身で高名な鈴木梅太郎博士のオリザニン（ビタミンB1）の発見など、興味深い自然科学に関する話を子どもたちにわかりやすく話してくれたので、後に四郎が生化学への道に進む土台になったと語っている。

その後秀雄は、三十四歳で千濱小学校の校長に就任し、郷里の教育に専念することになった。そして大正六年（一九一七年）に退職するまで栄転は固く辞退して地元の小学生の教育と青年の教育に献身的な努力を傾けた。そのため千濱村の教え子はもとより佐倉村の教え子は赤堀秀雄の人徳を慕い、千濱小学校の校地に「赤堀秀雄先生頌徳碑」を建て顕彰している。その篆額には文部大臣従三位勲二等岡田良平（現掛川市出身）。碑文は静岡中学校（現静岡県立静岡高等学校）教諭加茂喜次郎（現菊川市棚草出身）が刻まれている。そして碑文の最後には「家嗣遠遊於米州費府大学次子京都医学専門学校三子東京中学餘猶幼皆在家他日学成名揚之時立斯碑下諸子之感其奈何也」と記されている。

この碑のように赤堀秀雄の子女はそれぞれ成長されたのである。秀雄は郷里において子女の大成を楽しみながら余生を送り、特に四郎が大阪大学教授となり世界各国の学者から注目される優れた業績を残し、活躍していることを誇りに思っていたが、終戦も近い昭和二十年一月七十七歳で永眠された。

母しのは聡明で強健な身体をもち、人のために労を惜しまず一所懸命に働いたので多くの人々から尊敬され

た。そして郷土の千濱小学校の校長として教育の充実発展のために走り回っていた夫秀雄のよき伴侶として家計を切り盛りし、自ら農業に従事し一家を支える太陽のような明るい存在であった。

四郎は後年「わが青春」と題する自伝のなかで「母は夭逝した者もあるが七人の子供を産み育て決して豊かではない小学校教師の家計の切り盛りを引き受け、自らも農業に従事して、さぞ苦労したことであろう。母のことを思うと感謝の念でいっぱいである。」と述べている。

父秀雄は職務に熱中し、多忙な毎日を送っていたので農作業は母しのが中心となり、地味で温厚な四郎は母の手助けをするのが常であった。

明治から大正にかけてわが国の最大輸出品は生糸で外貨を獲得する手段として生糸を生産する養蚕は農村の有力な現金収入源であった。四郎の家でも副業として養蚕を導入し、母方の祖父が村に養蚕を推奨した功労者であったので、祖父の指導と援助により母が一人で養蚕に懸命の努力を傾けたのである。

赤堀家では長男と二男は家を離れて進学しており、三男は早く亡くなっていたので母を助け、農作業を手伝うのは四郎少年ひとりであった。

養蚕は春と秋の二回で、春の蚕は桑を鎌で刈って、ドイツ鋏で切り、葉のついた木を与えるのであるが、蚕がおおきくなるとだんだんの台が高くなるので母と四郎の作業は大変であった。

五月になると新緑の桑の若葉を一枚ずつ右の人指し指に二センチメートルぐらい刃のついた鉄の指輪のようなものをはめ、葉の柄には少し葉を残して摘むのが桑の葉を摘む大切な要領であった。この摘み方はビタミンB1の発見者で有名な郷土の農芸化学者鈴木梅太郎先生の指導によるもので、〃桑の萎縮病〃を予防することが出来るようになって養蚕業の振興に大きな貢献をした。

蚕は次第に成長し食欲も旺盛になるので、桑の葉の量が増えるとともに蚕棚を増設しなければならなくなる。田の字型の住宅の農家では台所と寝室以外の部屋はすべて養蚕室に変わり、各部屋は十段ぐらいに仕切った蚕棚で一メートル四方の床に網を敷いて、蚕と一緒に広げ、蚕の糞を捨て、新しい葉を与える所謂〃床がえ〃を何回となく繰り返さなければならず、雨天の時には水分が残っている葉は乾かしてから〃床がえ〃をするという大変な重労働であった。

五月は、このよう多忙な毎日が続くのであったが、母はほとんど一睡もしないで働いた。ある日四郎は母が忙しい毎日であることはわかっていたので恐る恐る「明日は遠足の日だから弁当をつくってほしい」と頼んだところ、当日朝早く出発する日の夜明け頃には温かい弁当を作って送り出してくれた。後に四郎は「遠足に出かける朝、母が作ってくれた温かい弁当のうれしさは今でも忘

れられない」と語っている。

六月になると蚕は体が透き通ったようになるので床を一枚ずつつくってやる。この床は筵(むしろ)を敷いてその上に藁を折ったものをのせる〃山あげ〃という作業であるが、蚕はこの藁を折ったなかに繭(まゆ)をつくるのである。この藁を折り曲げる細かい作業は母が中心になっていた。蚕は日に日に成長し、成虫になる前には口から絹糸を出して繭をつくり、繭が出来上がる頃には繭の中で蛹(さなぎ)となる蚕の一生は生命の不可思議としか思われなかった。

四郎は何時も母と一緒に作業をし、蚕の成長を楽しみながらその一生を観察していた。特に興味をもったのは、蚕が桑の葉を食べ、やがてその一生を終るが、蛹になる前に絹糸という天然の蛋白質を生成する不思議な働きをもっていることであった。何時も母とともに互いに助け合い励まし合って汗を流す勤労の喜びとともに蚕の一生の驚くべき現象についてもっと深く解明してみたいと思う意欲は高まるばかりであった。

小学校の高学年に進むにつれて、父が教育者としてひたむきな情熱と強い信念をもって誠実に行動していることがわかってきた。何時も新しい知識や情報をいち早く知り、更に深く探究しようと努力する姿勢は無言のうちに父から子に伝わっていた。

そして互いに助け合い励まし合って農作業に従事してきた母の生きざまが一家を支える太陽のような存在であり、四郎の心の大きな支えになっていた。

父は照り　母は涙の露となり
同じ恵に　育つ撫子

という歌を想い出し、父と母から受けた限りない薫育と慈愛は四郎の人生の大きな基盤となったのである。

（つづく）

還暦からの考古学（五）

玉の話（その4）

中山喬央

エジプト文明と玉

王朝時代の幕開け

五千五百年前頃からの先王朝時代後期に入りますと、農耕集落は、ナイル川上流の上エジプトにあるヒエラコンポリス、ゲベレイン、ナカーダ、アビュドスなどの人口密集地で、より大きく強い集団に統一されていきます。これは首長とか呪術師のような特権階級の出現という、社会的な不平等が発生したということを意味します。彼等は原料の産地である北東のシリア・パレスティナ地域と南のヌビア及び亜熱帯アフリカからの交易ルートの経路を支配し力を強めます。

その様子は目立って大きくなったお墓や副葬品でわかります。特権階級は贅沢な副葬品を持ち、立派な墓に埋葬されるようになります。

今から五千百年前頃の上エジプト、アビュドスの墳墓のいくつかは、これら支配者のものであったと考えられています。そして五千年前頃のナルメル王の時に、北エジプトを含めた全エジプトに王家の図像と結びつく遺物が見られるようになり、全国支配が完成したことが分かります。

しかしこの時代、墓標のある墓に副葬品と共に被葬者を埋葬するということは、社会のあらゆる階層に共通したものでした。

また古代エジプト人は、男女を問わず、目の周囲に黒や緑のアイシャドーをしていました。アイシャドーは、孔雀石（マラカイト）や方鉛鉱などの原料を、石製のパレット（化粧板）の上で砕いて粉末にし、ゴム糊などをまぜて作られました。今から五千五百年前頃のカバの形をした、縦九・五cm、横十八・六cm、厚さ一・〇cmの粘板岩製パレットがルクソール付近のナガ・アル＝デイルで出土しています。

先王朝時代のナカーダ一期から二期にかけて魚や鳥、ガゼル（羚羊の一種）など動物の形をした石製のパレットが数多く製作されましたが、これは当時ナイル川に生息していたカバを表現したものです。

初期王朝時代

ナルメル王や彼の後継者であるアハ王の時代（前二九七二年～前二九三九年）カイロの南西メンフィスに王宮が作られ、初期王朝時代と呼ばれる、歴史時代あるいはファラオ（古代エジプト王の称号）の王朝時代が始まります。

初期の国家行政は単純でしたが、支配階級は大きな力と富を持ち、その地位を維持する為の宮廷美術が発達すると共に、工芸家の後援者に対する依存度が絶対的なものとなっていきます。

しかし王朝時代の初めは、地方神の祠堂（祖先の霊を祭るところ）は王家のものとは異なり、石やファイアンス、木あるいは象牙で作られた動物の小像や人物像が納められていました。

死後の生活と関係する事柄も王権に代表される中央集権制度により発達します。

上エジプト初期の支配者達はもともとルクソールの北約一〇〇kmのアビュドス付近に住み、そこには既に特権階級用の巨大墓が築かれていましたが、王の宮殿のみがヒエラコンポリス、メンフィスへと移動します。これらの墓は現代のエジプトの村にある日乾レンガ製のベンチに形が似ていますので、そのアラビア語をとって「マスタバ墓」と呼ばれています。

これら初期のマスタバ墓は王宮によく似ていたといわれ、墓が被葬者のカー（精霊）の住居として用意されたという考えがあります。第一王朝（前二九七二年～前二七九三年）のマスタバの外壁には複雑な形の壁龕（西洋建築で壁面の一部を窪めた龕状の部分。ニッチとも云う）があり「王宮ファサード（建物の正面）」として知られていました。これは王宮の周壁に見られる凹凸の形をした壁を模倣していたものだと考えられていたのです。このような壁はメソポタミアにもあり、その起源がメソポタミアである可能性があります。

マスタバ墓の外壁は、石膏プラスターで塗られ色がついていました。恐らく大半が白で、黒、赤、黄、青、緑などの幾何学模様が壁龕の中に描かれていたものと考えられます。これらはエジプトの住居内の壁に掛けられていたマットの模様を真似したものと考えられ、当時の一般家庭の装飾や好みを現代に伝えてくれるものだといわれています。

墓に装飾がないことから質素な埋葬を考えがちですが、副葬品を見るとそれが間違いである事が分かります。

墓で発見された品々の多くは、葬送の目的で作られたものだと思われますが、それらは王宮や貴族の家庭の様子を反映するものであったことは間違いないと思われます。家具の残骸、宝飾品、石製容器、そして多様な細々とした品々に見られる工芸品の水準は驚くほど高く、それらはエジプト社会における支配階級の人々の美しい物を愛する心や、ゆとりのある生活、そして精錬された贅沢を映し出しています。木製の家具には、細かな装飾が施され、ファイアンスや象牙などの材料も使用しています。木材と異なりこれらのものは現在まで残り、その中には、家の召使や外国の捕虜とか動物の彫刻などが含まれています。

そして黄金、ファイアンス、および様々な貴石が指輪、腕輪、胸飾りや首飾りの材料に用いられています。

ジェル王（第一王朝二代目の王・前二九三九年～前二八九二年）の腕輪は、トルコ石と黄金の板が交互に繋がり、それぞれの板には鷹のホルス（太陽神ラーの息子、ホルス神）が止まっているセレク（王名枠）の形をしており、見事なものです。

様々な硬い石（花崗岩、緑泥片岩、玄武岩、アラバスター、斑岩など）で作られた容器も、この時代に著しい進歩を遂げます。北サッカーラ（カイロの西南）で出土した四千八百年前頃の片岩製で長さ二二・七㎝、籠を模倣した石製容器は代表的なものです。

一方ゲームの駒も作られています。盤上遊戯用の伏せたライオンの形のものが多く見られますが、円形のメヘン（蛇ゲーム）盤も知られています。その中には黒曜石や碧玉を象嵌したアラバスター製のものもありました。これらは娯楽用であると共に、死後の世界の概念とも結びついていました。サッカーラにあるデン王（第一王朝四代目の王・前二八七九年～前二八三二年）の高官ヘマカのマスタバ墓からは、いくつもゲーム用の円形の盤が出土していますが、その一つには、猟犬がガゼルを狩りしている場面が描かれており、四八五〇年前頃のもので、凍石とアラバスターで作られた、直径八・七㎝のものです。

シリウス星の出現による年代測定

考古学で文字による記録がない場合、対象とする遺物や遺蹟の実年代を定める事は大変です。

日本では縄文時代以降は、土器の型式編年が中心となりますが、最近では放射性炭素等による年代測定法も利用されています。

エジプトではシリウス星（大犬座の首星。光輝全天第一の白色星）が、ピラミッドの内部の二つの大きな部屋から外に伸びる小さな竪坑の延長線上に、オリオン座のアルニタクと共にあることからも考えられるように、非常に注目され、セペデトと呼ばれて、イシス女神（オシリス神の妹であり妻でもある女神で、夫を魔術を使って復活させたとされています。死者を守る保護女神です）の化身とみなされ、崇拝されていました。

一方古代エジプトでは、ナイル川流域での農業活動にあわせて、一年を四ヵ月ずつ、アケト（増水季）、ペレト（播種季または冬）、シェムウ（収穫季または夏）に分け、一ヵ月は三十日、一年は十二ヵ月で三百六十日とし、更に神を祀る特別な祭日として使用する五日間をエパゴメン（付加日）としていました。

しかし古代エジプト人は閏年を採用せず一平均太陽年三六五・二四二一日との差で約四年間に一日の割合で実際の季節と民衆暦との間にズレが生じました。これはプトレマイオス朝（前三〇五年～前三〇年）になると、改善の動きが見られ、ローマのジュリアス・シーザーが、エジプト暦を導入する際に、四年に一度の閏年を置くユリウス暦を採用します。

この古代エジプトにおける長い歴史の中で、実際の季節と、民衆暦との間のずれが三六五年の四倍、一四六〇年で元の季節に戻るのを利用したのが、ソティス周期による年代決定法です。

ナイル川流域で農業を営んで生活していた古代エジプト人にとって、最大の関心事は定期的な川の洪水でした。

このナイル川の増水に先立ち、シリウス星のヘリアカル・ライジング（夏の薄明の東天にはじめて姿を現す現象）が見られたため、エジプト人はこれをペレト・セペデト（シリウス星の出現）と呼び、それを祝うと共に、それが民衆暦の何月何日に起こったのか、古くから観測し記録を残しました。更にこの現象が民衆暦のアケトの季節の第一月の一日に見られる年は、実際の季節と民衆暦が一致する為特別な日とされ、この日を古代ギリシャ人は「アポカスタシス」と呼んでいました。

十九世紀末ファイユーム地方のアル・ラフーン（カイロの南約八〇ｋｍ、エル・ラフンともいう）にあった中王国第十二王朝の神殿址からドイツ人考古学者ルートヴィヒ・ボルヒアルトがシリウス星のヘリアカル・ライジングの記録があるパピルス文書を発見しました。

その他、テーベ、アスワーンのエレファンティネ島、等でもそれを記録したものが見つかっていますが、何と言っても「カノポス勅令」の名で知られているものが、実年代と民衆暦が互いに確認しあえますので貴重です。

これは紀元前二三八年にカノポス（アレクサンドリアの北東）で、エジプト全土から集まった神官の会議で決議された宣言（これをカノポス勅令といいます）に、シリウス星の出現を祝う祭礼が、シェムウの季節の第二月の一日に行われた事が記録されているものを指します。

一方、紀元後三世紀、ローマの作家ケンソリヌスは、紀元後二三八年に著した書物の中に、エジプトの民衆暦

とシリウス星の出現について記した記事を発表し、その中でアポカスタシスについて触れていますが、そこに記されたローマ帝国執政官達の名前から、紀元後百三十九年であることが分かりました。

一ソティス年は、約三六五・二五日ですから、エジプトの民衆暦とは四年で一日のずれが生じます。この違いが一年になるのには、三六五×四の一四六〇年かかります。

しかしこれに更に天文学的影響を考えないと、実年代がでてきません。

先ず地球の自転軸が、黄道面（太陽の視軌道の面。すなわち地球から見て太陽が地球を中心に運行するように見える天球上の大円の面。）に対して二三・四度の傾きを持っているため春分点が移動し、それを基準とする一太陽年は毎年短くなっていくという地球の歳差運動があります。

更にシリウス星は、太陽からの距離が八・七光年と非常に近い恒星（天球上で相互の位置をほとんど変えず、太陽と同じく自ら発光する天体）ですから、毎年の固有運動が極めて大きく、そのためにシリウス星の赤緯（天球上の星の位置をあらわす座標の一つで、赤道から北或いは南に測った角距離）は、紀元前四千年頃には現在よりも一〇度も南にあったものが、紀元前六三〇年頃には、現在とほぼ同じ赤緯になっています。

このような歳差運動とか固有運動といった天文学的影響も考慮に入れてインガムが推定値を算出し、それに基づいて計算しますと、ローマの作家ケンソリヌスの著した書物から判明した紀元後一三九年の、一四五三年前の紀元前一三一四年にアポカスタシスが起こり、その前は更に一四五四年前の紀元前二七六八年に、それが発生したことになります。

一方年代が判明しているカノポス勅令の年は紀元前二三八年です。そしてシリウス星がシェムウの季節の第二月の一日に出現したと記録しているのですから、この日はアケトの季節の第一月の一日から二七〇日たっています。

そうしますと一日ずれるのに四年かかるわけですから、四×二七〇で一〇八〇年という数字が出てきます。

実際には紀元前一三一四年から紀元後一三九年までの一恒星年の平均は、三六五・二五一二六日ですから、一日ずれるのには、三・九七九九年かかり、この数値に二七〇をかけますと一〇七五年となります。

これによりカノポス勅令の年は紀元前一三一四年の一〇七五年後である紀元前二三九年と計算できます。

実際の年代とは一年の違いですが、連続する四年間はほぼ同じ動きをしますので、関係する全ての算出の根拠が信頼できるものであるという事になります。

このようにしてシリウス星観測の記録は、現在史料が

検出されている、古代エジプトの中王国と新王国の年代を決定する根拠となっており、若しその他の時代でも史料が見つかれば年代決定に活用可能です。

古王国時代

王朝時代に入って三五〇年ほどたちますと、農業は繁栄し、技術は進歩して、外国に対する優越した地位を確立します。中央集権化された政府は、層の厚い有能な支配者のもとにあり、エジプト社会のあらゆる階層から集められた優秀な行政官吏の存在もあって、国中から集めた資源を活用して、古代世界が注目する業績をあげました。

王権や宗教、来世に対する概念は、野心的な建築プロジェクトや美術作品の制作に寄与します。この中で特に記念建造物の造営は、エジプトの経済・行政・社会に大きな影響をもたらします。

巨大な構造物を造営する為には、沢山の労働力が必要となりますが、それに携わる者の大半は農民でした。その結果農業生産にも、より効率的な方法を考えなければなりませんでした。おそらくそれは王様の支配権強化による共業化とか、新しい農耕具の考案というようなものがなかったら実現しなかったと思います。

エジプトで最初の巨大石製建造物は、サッカーラのラーネブ王（前二七六五年～前二七五〇年）とニネチェル王（前二七五〇年～前二七〇七年）の墓の西方に位置するキスル・アル＝ムディールと呼ばれる構造物で、第二王朝のカセケム王（前二六七四年～前二六四七年）か、第三王朝のネブカ王（前二六四七年～前二六二八年）の治世に開始されたと思われます。

これは巨大な石製マスタバ墓として計画されましたが、王の死が早すぎた為完成をみなかったものと考えられています。

そして世界で最初の石造記念物を完成したと思われるのは、ジェセル王（第三王朝、前二六二八年～前二六〇九年）の指示により宰相イムヘテプが作った、サッカーラにある階段ピラミッドであります。

ジェセル王のピラミッドは地表より上に内部の部屋や窪みを持っていません。王の遺体は、ピラミッドの下の地下埋葬室に安置され、王の葬祭のための神殿が、ピラミッド北側に隣接して建てられていて、初期王朝時代の南北方向の主軸線の伝統が護られています。東側には祠堂を石で模倣して建てた建物群が存在し、南側には天に向かって開かれた広大な中庭があります。これらの建物は来世にも王が、その身体能力の再生と王権の更新を行う王位更新祭ができるようにと設計されたものだと考えられています。

階段ピラミッドも隣接する建物も五五四×二七七mの「宮殿の正面」を模した高い石の巨大な周壁によって

囲まれています。

階段ピラミッドの形は、初期のマウンドによって覆われたマスタバ墓の埋葬室に当り、周壁はマスタバ墓の壁に相当します。このように王墓としての主要な構成概念に変化はありませんが、石の材料を使った事に大きな意義があります。この時を境にして、王墓は、王の親族や同時代の他の人々の墓とは完全に異なるものとなります。

階段ピラミッドの南墓の地下には、前二六一〇年頃の石灰岩製で大きさが縦約一一〇㎝、横五九㎝の王位更新祭を祝って走るジュセル王の浮き彫りがあり、又アラビア語で地下貯蔵室を意味するセルダブと呼ばれる礼拝神殿の南壁付近の彫像の間に安置されていたジェセル王の最古であり最も大型の像からも、同王の墓であることをうかがう事が出来ます。この像は王位更新祭の外套を纏って座っています。象嵌された眼は抉り出されていますが、ふっくらとした顔、大きな鼻と厚い唇は、浮彫に描かれたものと共通点があります。

古王国時代の玉類について

古王国時代は、宝石・貴金属類の加工技術の向上と使用の拡大が著しかったと考えられていますが、只今述べましたジェセル王の象嵌された眼が無くなっているように、この時代に属している墓はほとんど盗掘を受けており、その為に、現物というよりは様々な事柄を組み合わせて考えてみるという事になります。

先ず同じジェセル王の階段ピラミッド複合体から出土したアラバスター（雪花石膏）製の見事な二頭の雌ライオンの姿をした、緩やかな傾斜のあるベッドの形をした長さ八九㎝・高さ二七・五㎝、幅四〇・七㎝の浄め台があります。これは生贄の動物を解体した浄め台を模したもので、実際に使われたものではありませんが、台の後ろには血を流す円形の孔もあり、当時の石製品、加工水準の高さを示すものです。

第三王朝ジェセル王の次ぎのセケムケト王（前二六〇九年～前二六〇三年）の未完成の階段ピラミッドでは、地下の通廊があることが分かりましたが、そこからセケムケト王の名が押印された壺の封泥と、二十一個の金製腕輪や貝形の金製容器なども見つかりました。そして入口から七十二m進んだところに埋葬室があり、中央に長さ二・三七m、幅一・一四m、高さ一・〇八mの装飾がないアラバスター製石棺が置かれてありました。そして石棺の横にあるスライド式扉を引き上げて内部を確認しましたが棺の中に遺体が埋葬された形跡はありませんでした。

古王国時代、エジプト人はほとんど一夫一婦制ですが、カイロの南約五〇kmにあるマイドゥーム（メイドゥムともいいます）で、ラーヘテプ王子の墓から発見されたスネフェル王（第四王朝、初代の王・前二五七三年～前二五四九年）の治世の時代の、同王子とその妻ネフェルトの彫像がそれを物語る代表的な例です。石灰岩製で見事に彩色され、彼女は図紋のある冠を巡らして大きな鬘を抑え、ペンダントのついたビーズの束でできた首飾りを身に付けています。

この王女の冠のように、金と紅玉髄で象嵌され、ロータスの花やパピルスの繖形花序（主軸の先端から多数の花柄が散出して、傘骨状に拡がって咲く花序）と、その上に止まる鳥のモティーフ（繰り返し現れる図柄）で装飾されている、良く似た銅製の冠が幾つかの墓から出土しています。

淀んだ深い水の上に突然咲くロータスの花は再生の象徴でしたから、これらの冠は葬送目的の為に作られたことが分かります。

第五王朝時代は前二四九〇年頃ヘリオポリス（カイロの北）出身のウセルカフ王が開きます。この頃太陽神ラーが最高神となり、王の称号に太陽神の息子の名前が加わるようになります。

この時代、サッカーラで出土した高さ一〇三・二㎝の当時の中年男性の典型的な面影を残す立像は、幅広の襟飾りを着けています。

次いで第五王朝三代目の王ネフェルイルカラー（前二四三五年～前二四二五年）の「太陽神殿の神官」で「書記の監督」をしていたウル・イルニ・プタハの座像は、重量感のある大きな鬘を被り背もたれのない椅子に座っていますが、幅のある襟飾りをしています。

又第四王朝のカフラー王（前二五一八年～前二四九三年）と、メンカウラー王（前二四八八年～二四六〇年）の「葬祭神官」で「ウアブ神官」（神殿に関連する日常の神事に携わる下級神官）でもあったネフェル・ヘル・エン・プタハ、別名フェフィの妻サト・メレトの立像が、第五王朝時代に作られ、ギザにあるネフェルの墓から出土しています。彼女は「王の知己」という称号を持っていますが、体にぴったりとしたドレスを身に着け、足を揃えて台座の上に真直ぐに立っています。首の周りと胸には、鮮やかな色の幅広襟飾りと、四角い形の胸飾りが描かれています。

文書を管理する役職の高官であった書記セケド・カウと彼の家族像が同時代のサッカーラで出土しています。向かって右に座っているのが本人で、襞のある腰布を身に付け鬘を被り幅の広い襟飾りを懸けています。中央にいるのが彼の妻で彼女は幅広の肩紐が付いた長い衣裳を身に纏い、首の周りと胸元に襟飾りをつけ、足首にも足輪をつけていました。向かって左側には彼等の息子が、首の周りに襟飾りを着け、左足を一歩踏み出して立っていました。このように墓に家族の像が副葬されることも良く見られました。

その他の像も首に襟飾りをしているものが多く、この時代、宝石・貴石・貴金属の使用がかなり行われていた事を物語ります。

最後にアル＝ギーザ（ギザ）で発見されたスネフェル王の妃で、クフ王の母であったヘテプヘレス王妃に関する副葬品について説明します。

墓は盗掘を受けていませんでした。しかしミイラ作りの際に、摘出された王妃の内臓を入れたアラバスター製のカノポス櫃はありましたが、ミイラにされた王妃の遺体は見つかりませんでした。

今復原された家具は、王妃の寝室のものですが、象嵌された足板を持つベッド、ベッドの天蓋、枕、二つの肱掛椅子、輿、幕で覆われた箱、王妃の腕輪を入れた箱などがあります。

すべてが木製で金・銀・ファイアンスなどを象嵌してありました。ベッドや肱掛椅子の脚部は、初期王朝時代からよく用いられていたライオンの脚になっており、椅子の肘掛は、一つが結び付けられた三本のロータスの花を模倣したデザインの透かし彫りになっていますが、他の椅子の肘掛けは、まるで飛び立とうとしているような翼を広げて椰子の柱頭の上に止まるホルス神（王権の守護神、天空の神でもあり両眼が太陽と月にされています。）である鷹の装飾がされていました。椅子の背の部分はネイト女神（サイス「デルタ地帯の都市」で祀られた女神、赤冠をつけ弓と矢を持っています。）と関連する紋章の列で装飾されています。

輿の背は黒檀に金製のヒエログリフをはめ込んで、王妃の名前と王の配偶者としての彼女の地位を表す称号が記されています。

王妃の重い銀製腕輪は、トルコ石、ラピスラズリ、紅玉髄で作られた蝶のデザインで飾られています。

日常生活で身に着けた品は、貴石で飾った織物とか、革で作られていたものだと思われています。

独創的な形の石製容器は、日常生活より、儀礼や葬送のために使われたと考えられます。

古王国時代、宝石・貴石・貴金属類の製作加工技術が大きく発展したことは以上の事柄からも立証されると判断します。

ピラミッドとスフィンクス

ここで古王国時代を代表する出来事と考えられる、ピラミッドとそれを作ることを可能にした当時の社会情勢、技術水準等について考えて見たいと思います。

紀元前二五六〇年頃ギザの南、ダハシュールで第四王朝初代のスネフェル王（前二五七三年～前二五四九年）の屈折ピラミッドが完成します。

屈折した理由は、建造者の経験不足から建設の途中で側面の傾斜角を減らした為だと考えられています。その

ためスネフェル王の第二ピラミッドで桃色をした石灰岩ブロックを使用したためにその名前が付けられた赤ピラミッドが最初の真正ピラミッドになります。

では何故真正ピラミッドを作ろうとしたのでしょうか。様々なことが考えられていますが、ここではメンフィスの北東にある神殿の太陽神ラーのオベリスク（先端部がピラミッド形をした一本石の柱）の頂部を意識したのだという説を、ラー神の影響力がこの時期、増大している事や、王都と太陽神殿が近接している事などから、ご紹介しておきます。

古代エジプトの石造記念建築は直線と直角、そして平面の幾何学が基本でした。そして真正ピラミッドはこの定義に基づいて作られました。スネフェル王の赤ピラミッドの傾斜角は四三度でしたが、設計技術の進歩等により、それは五〇度～五七度の間に納まるようになります。

新しいピラミッドはそのなめらかな化粧石の上に何も装飾をせず文字を書かない幾何学的な建物でした。そして真正ピラミッドへの変化は、関連する建物の主軸線を南北方向から東西方向に変えます。一方スネフェル王の赤ピラミッドは、関連する付属建物の小ささと装飾の未発達であることからも、それが最古のものであることが分かります。

そしてスネフェル王の息子クフ王（前二五四九年～前二五二六年）が、メンフィスの北西に位置するアル＝ギーザ（ギザ）に平均二・五トンの重量がある石を二三〇万個使用して基底部二三〇m四方、高さ一四六mの完璧なピラミッドを作ります。

これは国家の中央で制御され繁栄していた経済と、王の強力な統制力によって初めて可能になったのだと思います。

アル＝ギーザでは引き続きカフラー王（前二五一八年～前二四九三年）、メンカウラー王（前二四八八年～前二四六〇年）という第四王朝の王達のピラミッドが作られます。これらの間には何等かの関係があったのでしょうが未だ解明されたおりません。

又アル＝ギーザにあるクフ王の息子カフラー王の下（河岸）神殿の北西に、人頭ライオンの、長さ七三・五m、高さ二〇mの巨像が、自然の石灰岩台地に彫られ、大スフィンクスとして知られています。その頭部は頭巾をつけた王そのものです。

これは神話上の創造物を表すものと考えられる最古の芸術品の一つであり、それから約三〇〇〇年間にわたって作りつづけられたものと比較しても形式的に完璧であり最大の彫像であります。名前の語源については古代エジプト語の「生きるイメージ」を意味するシェセプ・アンクに由来すると思われますが、定かではありません。

しかし古代エジプトでは長期にわたる安定と顕著な達成の後には崩壊と混乱の時期が短期間存在します。前二一二三年になりますと、無秩序な力が増大していきます。

（続く）

参考文献

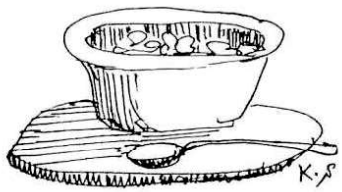
岩出まゆみ「エジプト発掘史」『世界四大文明・エジプト文明展』東京国立博物館、二〇〇〇年。

ギーメット・アンドル「エジプト人」『古代エジプト展』名古屋市博物館、二〇〇五年。

近藤二郎『エジプトの考古学』同成社、一九九七年。

原田淑人『古代人の化粧と装身具』東京創元新社、一九六三年。

ヤロミール・マレク著・近藤二郎訳『エジプト美術』岩波書店、二〇〇四年。



漢詩

潮騒録（四十六）

鯨游海

賀丙戌春　　丙戌・元旦

甚多取月落池人
不寡懸羊賣狗民
雖愧迎春猶伏櫪
爲知己士奉微身

押韻・人民身

〈丙戌（狗）の春を賀す〉

甚だ多かる　月を取らんと池に落つる人
寡なからず　羊を懸げて狗を売る民
春を迎え猶櫪に伏すを　愧ずと雖も
己を知る士の為に　微身を奉げん

〔注　解〕

月を取り池に落つ＝欲の為に失敗する喩え「猿猴月を取る」・僧祇律（仏）僧の戒律集」。羊を懸げ狗を売る＝看板に偽り有ること「懸羊頭賣狗肉・無門關」。伏櫪＝「老驥伏櫪　志在千里・曹操」櫪はうまや。老いてもなお志だけは高い事を歌う。微身＝つまらない我が一身。

☆月取りて溺るる人の多かりき
　月てふものは見るぞ楽しき

被贈銘菓　　平成十七年七月

纖纖梅雨倦書横
細細荊妻夢裏聲
淡綠抹茶相合碗
濃藍銘菓不乖名

押韻・横聲名

〈銘菓を贈らる〉

纖纖たる梅雨　書に倦みて横になれば
細細たる荊妻の　夢裏の声
淡緑の抹茶は　碗に相合い
濃藍の銘菓は　名に乖かず

〔注　解〕

纖纖＝こまかく、かぼそく弱々しいさま。荊妻＝いばら（つまらぬものの喩え）の如き妻、愚妻。抹＝粉。

☆なが梅雨に冷えし銘菓の凛として

足球世界選手權（三）　對波斯戰

平成十七年八月

門隙無人殺氣流
夢疑足下直來球
渾身一閃飛右脚
今霽土巴悲戲仇

押韻・流球仇

〈足球世界選手権（三）　対波斯戦〉

門隙人無くも　殺気流る
夢かと疑ごう足下に　ま直ぐに来たる球
渾身の一閃　右脚を飛ばし
今霽らす　「土巴の悲劇」の仇を

〔注　解〕

「土巴の悲劇」とは、過年やはり同じワールドカップアジア最終予選でイランと対戦した日本が、勝か引分けかればワールドカップアジア代表の一員として出場出来る所迄こぎつけていた。

イランのドーハのサッカー場で熱戦が展開され、日本は健闘して0対0のままタイムアップ寸前迄来た。誰もが、引分けを確信していた。あと数秒、いや三秒もなかったであろう。栄光は九分九厘掌中に在った。

この一瞬の隙を突いてイランの最後の一蹴が何と日本側ゴールに突きささったのである。日本は敗れ、結果として決勝進出を阻まれたのであった。悪魔の仕業、悲劇の一瞬であった。日本のイレブン（選手）はへなへなと倒れ込み起き上れなかった。以後メディアはこの一瞬を「ドーハの悲劇」と呼んだ。

この時の悔しさをバネに精進した結果、今日の強い日本――今次予選ではその宿敵イランを敗って堂々アジア第一位の高得点で突破しドイツ本大会で行われる決勝戦に進出したのである。

波斯＝ペルシア＝イランの古名（第二次大戦後、ペルシアはイランとイラクに分割された）。仇＝讎＝かたき。

☆語り継ぎ言い継ぎゆかむとこしえに
ドーハの悲劇漢詩に刻みて

孔子之一生（一）　出　生

平成十七年戊月

太古堯風舜雨秋
樵蘇鼓腹鹿呦呦
然今國亂人無道
天憫使巫生孔丘

押韻・秋呦丘

〈孔子の一生（一）　出　生〉

太古「堯風舜雨」の秋
樵蘇は腹づつみを鼓ち　鹿は呦々たり
然るに今や国乱れて　人に道なし
天憫え巫をして　孔丘を生ましむ

〔注　解〕

堯風舜雨＝風雨の恵みのように、堯、舜の仁徳があまねく人民にゆきわたり、理想の政治が行われていたさま。樵蘇＝①木樵と草刈る人。庶民、百姓。②日常の生活。鼓腹＝鼓腹撃壌＝腹づつみを打ち、足拍子をとる。腹づつみを打ち、大地をたたいて拍子をとり歌うこと。即ち、人民が太平を楽しむさま。曾先之・十八史略「有老人含哺鼓腹撃壌而歌」。壌は土、大地をいう。呦呦＝鹿の鳴き声（擬声語）。憫＝憐。巫＝女祈禱師。

☆鹿鳴かず鼓腹の老父今何処
天あわれみて孔子生ましむ

〈漢詩の流れ36〉南宋の巨星たち①陸游

陸游（一一二五～一二一〇）、字は務観、号は放翁。越州山陰（浙江省紹興市）の人。神童といわれ育った。

生涯、金に対する抗戦派で、和平派が主流であった政官界では不遇で終る。宰相秦檜にも睨まれ進士に及第しなかった硬骨漢（秦檜の孫と試験で首位を争い妨害されたという）。愛国的抗戦思想を貫ぬき、金への軟弱外交を攻撃、その能力の割には地方官、副知事、中央でも史料編纂官で終えた。（秦檜の死後進士に合格した）。

だが生涯で作った詩は二万首を越え、中国歴代詩人中最も多作な人である。自選詩集「剣南詩稿」八十五巻には九千二百首が収められている。また散文にも長じ「渭南文集」五十巻、随筆「老学庵筆記」十巻、紀行「入蜀記」六巻、史書「南唐書」十八巻等をものした多才な文豪であった。

繊細を特長とする宋風に、骨格の太い唐風が加わり、本来の彼の特徴であった「閑適細膩」の叙情性に「悲憤激昂」の情熱を併せ持つ大型詩人として大成した。

二十歳で唐琬という女性を妻にしたが、嫁姑の間がこじれて離縁した。彼は彼女を心から愛していたが時代の「家」は若い彼にはどうする事も出来なかった。二人とも再婚したが、彼が三十一歳の時、紹興の沈園で偶然再会した。この再会の感激が忘れられず七十五歳になって四十年前の日を追憶「沈園」と題する詩を作った。

沈園二首其一

夢斷香消四十年　夢は断たれ香は消えて　四十年
沈園柳老不吹綿　沈園　柳老いて綿を吹かず
此身行作稽山土　此の身は行きて　稽山の土と作らんも
猶弔遺蹤一泫然　なお遺蹤を弔いて　一たび泫然たり

(注)泫然はさめざめと泣くさま。

其二

城上斜陽畫角哀　城上の斜陽　画角哀し
沈園非復舊池臺　沈園は復た　旧池台に非ず
傷心橋下春波綠　心を傷ましむ　橋下春波の緑
曾是驚鴻照影來　かつて是れ驚鴻の影を照して　来たる

(注)画角は紋様の画かれた豪華な角笛
驚鴻は昔の妻、唐碗の美しい姿の表現。
魏の曹植・洛神賦「其形翩也若驚鴻」

この詩にみられる如く、四十年前の再会が忘れられなかった純情を八十六歳で亡くなる迄持ち続けたロマンチストでもあった。なお唐碗は再会の二年後に亡くなったという。

金軍の侵入によって国が危殆に瀕した時に生を受けた陸游は、後年次の詩を詠んだ。

我生學步逢喪亂　我れ生まれて歩を学びし時喪乱に逢う
家在中原厭奔竄　家は中原に在りて奔竄に厭く
淮邊夜聞賊馬嘶　淮辺に夜聞く賊馬のいななくを
跳去不待鷄號旦　跳去す鶏の旦を号ぐるを待たず
父は和平派とはいえ軍人であったので一家は南へ西へと逃亡流転の生活を余儀なくされた。

陸游は一一五八年三十四歳の時、始めて官途につき福州寧徳の主簿に任ぜられた。二年後中央に招換され、大理司直になったが、官僚の派閥争いを批判した為職を免ぜられ、鎮江の通判に左遷され更に降興に移される。その赴任の途中望江に立ち寄った時の作がある。

吾道非邪來曠野　吾が道は非なるか曠野に来れり
江濤如此去何之　江涛此の如くなるに何くに之かんとす
起隋鳥鵲初翻後　起つは烏鵲の初めて翻ぶ後に随がい
宿及牛羊欲下時　宿るは牛羊の下らんと欲する時に及ぶ
風力漸添帆力健　風力漸やく添いて帆力健く
艫聲常雜雁聲悲　艫声常に雑りて雁声悲し
晚來又入淮南路　晩来また入る　淮南の路
江樹青山合有詩　江樹青山まさに詩有るべし

この起句「吾道非邪」は孔子が楚へ行こうとした時、それを阻もうとした陳蔡の大夫が一行を包囲して糧食の道を断った。その時弟子が孔子に問いかけた「吾が道は非なるか」。孔子の答は「いや間違ってはいない」であった。その故事を引いていよう。辞世の句は次の通り。

死去元知萬事空　死し去れば元より知る万事空しきを
但悲不見九州同　ただ悲しむ九州の同じきを見ざるを
王師北定中原日　王師北のかた中原を定むるの日
家祭無忘告乃翁　家祭忘るる無かれ乃翁に告ぐるを

お知らせ

「まんじ100号記念特別号」

――発刊迫る――

小説、詩歌、ノンフィクション、評論、論考、
随筆など多彩な内容の総合文芸記念号
四六版ハードカバー　全26篇
全篇読切りの傑作揃い。
2006年５月１日刊行

出版記念パーティー

５月27日午後５時より学士会館にて開催
同人会員、総持会員の皆様の多数の参加を期待しています。
（別途書面にてご案内申し上げます）

撞木

☆少子化が予想を上回るスピードで進んでいる。二〇〇五年は明治以来初めて日本の人口が自然減となった。平和で安定した時代になると少子化問題が起きる。古代ギリシア、ローマも安定期を迎えた途端少子化に悩まされた。日本も平安、江戸時代の後期には、人口が停滞した。平和で安定した時代には、女性の社会的関心が出産や子育てに向かわなくなるようだ。

☆「人口は国に勢いがある時は増え、ない時は衰える」と三戸岡道夫氏は本号の随筆うどんげの花で述べ、勢いのなくなる原因は都市の爛熟と農村の衰退であるとしている。確かに平和と安定の時代には、洋の東西を問わず女性の社会的関心は、都市では文化と消費と娯楽、農村ではゆとりある暮しを求めての生産と娯楽、人口の抑制に向った。

☆だが、一九八〇年代になって都市の女性も社会的関心を生産活動へと向けるようになった。それが活力となって国が勢いを取り戻しつつある。これまでの歴史ではみられなかった現象である。女性の社会的関心が都市、農村を問わず文化や消費だけでなく生産活動にも向けられてきたのだ。そうした女性のエネルギーを出産や育児に向かわせようと行政が動きだした。

☆国や地方自治体は仕事と育児の両立支援や子育て家族への経済的支援を行っている。それはそれで一定の効果はある。が、それだけでは少子化問題の抜本的解決とはならない。子供を産み育てることはかけがえのない喜びであり人生を豊かにするという思想や宗教が社会的意志とならなければ少子化は解決できる問題ではないのだ。（O・S）

まんじ 第99号

平成18年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　太　田　精　一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

田寺怜葦　画

まんじ

100号記念

栄光出版社

大樹を渡り歩いて戦国を生き抜いた男　千坂精一　7
断腕太后　森下征二　27
小町逍遥　島津隆子　45
いづれか秋にあはで果つべき　相原精次　63
六十年目の伝言　鈴木昭三　71
まんじゅう奉公　瀧澤　中　89
俳句　不屈の闘志　ほか十四句　大澤鷹雪　111
浦上事件　鍋屋次郎　113
韓国の歌人（うたびと）　石黒修身　131
毛鳳忠さんと私　吉田忠雄　143
多率寺（たそるさ）にて　新井　宏　157
まぼろしの女帝　隆　恵　171
考古学で判る社会の動き　中山喬央　189
わたしたちは、スタインベルク三姉妹　伊治　哲　207
「南蛮のみち」をゆく　山田嘉久　227
現代詩　この町・他　青木昭成　245
短歌　湘々湖南　六十首　曽根竣作　261
聖徳銀行秘書室　鯨　游海　283
霧の彼方に　太田精一　303
歯医者さん　森実与子　323
楽茶碗の怪　忠内正之　337
都市銀行「爆発物処理班」　宅見勝弘　351

天城の鬼火異聞　堀内永代　369
新美先生のこと　松下壽男　389
文化勲章に輝く　赤堀四郎博士の揺籃期　松下魏三　409
極楽楽園　三戸岡道夫　427
あとがき　447

まんじ100号記念

大樹を渡り歩いて
戦国を生き抜いた男

千坂　精一

一

その名を、藤田能登守信吉という。

武藏七黨のなかの猪俣黨の流れに藤田の姓がある。

信吉は、その藤田康邦の二子で、永祿元年（一五五八）武藏鉢形城で生まれた。

鉢形城は、埼玉県大里郡寄居町鉢形にあった。

現在は秩父市に合併になったが、三峰山麓の旧荒川村あたりを水源とする荒川が秩父の山間を縫って関東平野に流れ出たところが寄居町になる。

八高線、東武東上線、秩父鉄道が交叉する寄居駅で下車、駅前の大通りを直進して荒川に架かる正喜橋を渡った右手断崖の上が城跡である。

この城は、関東管領山内上杉氏の家老長尾景信（号昌賢）の嫡子景春（号伊玄）が文明五年

（一四七三）に築いたといわれている。

南と西を山で囲まれ、背後は荒川の絶壁、前面は深澤川の峡谷を天然の堀とした平山城で、ここは秩父口と上州口を固める要衝の地であった。

関東には管領の山内上杉氏と同族の扇谷上杉氏とが君臨していたが、この両家がたがいに一歩抽ん出ようと鎬を削り、抗争を繰り返して衰退したところを、新興勢力の小田原北條氏に漁夫の利を占められて侵蝕されていった。

これではならじと眼覚めた山内家の上杉憲政と扇谷家の上杉朝定は、連合して挽回をはかり、天文十五年（一五四六）四月古河公方足利晴氏を擁して河越城奪回戦に打って出たが、北條氏康の援軍に敗れて朝定は戦死、晴氏は古河に、憲政は平井に退いて、ついに関東は北條氏康に奪取されてしまった。

信吉の父藤田康邦は、これまで山内上杉氏の重鎮であったが、北條氏康の軍門に降るとその麾下に入った。

そして、永禄三年（一五六〇）信吉三歳のとき、父康邦は氏康の三子氏邦を娘婿に迎えて城主の座を譲り、隠居した。

このほか、瀧山城（八王子市）の大石定久には氏康の二子氏照が、唐澤山城（佐野市）の佐野宗綱には氏康の五子氏忠が、岩槻城（岩槻市）の太田資正には氏康の孫（氏政の二男）の氏房がそれぞれ養子に入っている。

つまり、氏康の関東制覇政策は、上杉の主立った部将の家に子や孫を養子に入れて、実権を握ることによって完全に北條一門に組み込ませていったのである。

父康邦が北條氏邦に家督を譲ったことで、身の置きどころがなくなった信吉は、僅かの家臣に護られて上野沼田の金剛院に身を潜めた。

上越国境の三國峠に近い沼田は、関東といっても越後の勢力圏で、北條氏康に遂われた関東管領上杉憲政を庇護してその名跡を継いだ上杉謙信が、関東遠征のおりにはこの沼田や厩橋（前橋市）を拠点にしていた。

信吉は、長ずるに及んでいつか北條方から上杉方になり、謙信の将上野家成、河田重親とともに沼田城在番になっていた。

沼田城は、上野から新潟へ行く上越線の列車が沼田駅を出て間もなく右手の高い崖の上に標識が見えるあたりにあった。

駅舎を出て急坂を上り、崖上に出ると、そこが櫓台で石垣が遺っている。

現在は一帯が公園になっているが、そこが本丸、二の丸の跡だという。

天正六年（一五七八）、信吉二十一歳の春三月十三日に謙信が四十九歳で急逝した。

すると、二人の養子甥の景勝と北條氏康の七子景虎（前名氏秀）のあいだで継嗣争いが起こった。世にいう〈御館の乱〉である。

このとき、家臣団は景勝支持派と景虎支持派に分裂した。

沼田城在番の将も、上野家成が景勝方に立って河田重親らを追い出そうとしたが、逆に敗れて越後へ去っていった。

信吉は、上杉譜代の臣ではないのでどっちにつくか決めかねているうちに、沼田城が景虎派になって取り込まれてしまったのである。

つまり、信吉は好むと好まざるとにかかわらず、結果において上杉方から北條方に寝返ったことになるのだった。

このとき信吉は、乱世を生き抜く要領は武力より頭脳で、素早く優劣を判断する眼力を備えておいて有利な方に身を寄せることだ、ということをなんとなく感じ取ったのかも知れない。

景虎から急使を受けた兄の北條氏政は、猪俣能登守邦憲に先鋒隊を預けて沼田城を確保させると、城代に据えた。

そして、妹婿の武田勝頼に景虎救援を依頼して、景勝攻めの準備を急いだ。

ところが勝頼は、景勝が提案した、

〈東上野と黄金一万両、それに勝頼の妹菊を娶る〉

条件を承諾して兵を退いてしまった。

景勝にしてみれば、背に腹はかえられなかったし、勝頼も三年まえの長篠大敗の恢復に苦慮しているところだったので、この土地も金も貫える棚から牡丹餅のような垂涎の好条件に否やはなく、双方の利害が一致したのである。

怒った氏政は、勝頼との同盟を絶った。

この勝頼の撤兵と、三國峠を越えた北條軍が丈余の積雪に阻まれて動けぬ幸運が転がり込んだ景勝は、翌天正七年（一五七九）三月景虎の御館城（上越市）を陥として養父謙信が庇護していた前関東管領上杉憲政を斃すと、その余勢を駆って景虎を鮫尾城（妙高市新井）に追い詰めて自害させ、後継者の座を摑んだ。

景虎が敗死したことで救援の目的を喪った北條軍は、三國峠を越えて関東へ退去したので、前線基地確保の使命を終えた猪俣邦憲も守備兵とともに沼田城を撤退した。

景勝から東上野の経営を譲り受けた勝頼は、眞田昌幸に沼田城略取工作を命じた。

城に残っていた景虎派の河田重親は、身の危険を感じて北條方に落ちていったので、沼田城の部将は信吉一人になってしまった。

勝頼は、武藏、上野の北條与党を攻めて厩橋城に入った。

翌年三月、北條氏政は名胡桃城（群馬県利根郡月夜野町）攻略を目差して、まず眞田の与党小川可遊齋の小川城を攻めさせた。

このとき、沼田城に残っていた信吉も動員されたが、北條勢は名胡桃城からの援軍北能登守の手勢に敗れて後退し、信吉は殿をつとめていったん沼田城に戻った。

氏政は、小田原から増援部隊を送り、信吉の姉婿になって鉢形城に入っていた弟氏邦を総大将にして沼田城に送り、軍団を立て直させた。

氏邦は一計を案じ、白井城（群馬県北群馬郡子持村）にいる山内上杉氏の家老長尾憲景と協同して名胡桃城と小川城攻略を目差した。

ところが、出撃前夜の大雨で雪解水が利根川に溢れて沼田の北條勢は渡河出来ず、長尾勢の単独攻撃になってしまった。

こうなっては長尾憲景に利はなく、鈴木主水を留守将にして名胡桃城を出陣した眞田昌幸軍に恐れをなして、一戦も交えずに白井城へ引き揚げてしまった。

遠征の疲労を抱えている北條軍と、地元の精鋭眞田軍とでは戦力の差が歴然としているうえに、北條氏邦の采配は眞田昌幸に遠く及ばぬと看て取った信吉は、北條を見限ることにした。

そして、小川城に北能登守を据えて越後口の抑えにしておいて、いよいよ沼田城略取工作をすすめてきた眞田昌幸に、信吉は内通した。

いよいよ戦端が開かれると、信吉は先鋒を承る風をして、近くの薄根川まで押し出しておいてさっと退き、眞田軍を付け入らせて城内に引き入れると、混乱する北條軍に鉄砲を撃ちかけて眞田軍を援けた。

この敗戦で北條軍は城を捨てて小田原へ去り、沼田城は眞田軍の手に陥ちた。

信吉は、沼田城略取の功により勝頼から利根郡の東部に三百貫文の知行を与えられて武田の臣になり、金剛院に館を構えた。

二

それから二年後の天正十年（一五八二）三月、武田勝頼は侵攻してきた織田軍に敗れ、瀧川一益隊に天目山麓の田野（山梨県東山梨郡大和村）に追い詰められ、自刃して果てた。

武田氏の滅亡によって東上野も織田方のものになり、論功行賞によって上野一国と信濃の佐久、小縣二郡を与えられた瀧川一益が厩橋城に入り、沼田城には弟益氏を据えた。

信吉は、城代の地位を遂われて浪々の身となり、旧主上杉を頼って越後へ落ちていった。

だが、瀧川一益の上野支配は僅か三箇月で終わった。

六月二日に信長が明智光秀の謀叛で非業の死を遂げた報らせが届くと、北を上杉南を北條に挟まれている上野駐在の家臣団に動揺が起こり、厩橋城も沼田城も浮き足立った。

信吉は、混乱に乗じて沼田城を奪い返そうと上杉景勝の支援を得て奮い立ったが、再三の攻撃が功を奏さず手古摺っているうちに、一益らは帰国の途次に信濃を通る安全と引き換えに沼田城を眞田昌幸に返してしまった。

信吉は地団駄踏んだが、後の祭りであった。

しかし、信吉は、事成らずともその適確な情況判断と機敏な行動を賞されて、景勝から米千俵、黄金百両、乗馬三匹、衣服を頂戴して家中に面目を施した。

それから三年後の天正十三年（一五八五）七月、眞田昌幸は家康と絶って上杉景勝に支援を要請してきた。

景勝に眞田軍の援将を命ぜられた信吉は、家康軍との初対決に意気軒昂たるものがあった。

果たして一箇月後、徳川の将平岩親吉らの上田城攻撃に呼応して家康の女婿北條氏直が小田原軍を率いて沼田城を攻めてきた。

報を受けた景勝から出陣を命ぜられた信吉は、三國峠を越えて沼田に着くと、昌幸の叔父の城代矢澤頼綱を支援して北條軍を撃退した。

信吉は、父藤田康邦の主家である関東管領山内上杉氏を倒した仇を討ったことになり、溜飲を

下げた。

このとき上田城も、昌幸父子の一箇月にわたる健闘でついに徳川軍を敗退させた。

翌天正十四年（一五八六）、天下の形勢は秀吉から家康に動きはじめた。

二年まえの小牧、長久手の合戦で、秀吉軍が家康軍に敗れたのが切っ掛けであった。

家康と和を講じた秀吉は、妹旭姫を家康に嫁がせると、さらに母大政所を人質として岡崎城に送った。

これらの経緯が越後に伝わってくると、信吉は主君景勝が秀吉と同盟していることに一抹の不安を抱いた。

信長亡きあと秀吉と柴田勝家の対決となり、勝家の近江出陣の気配に秀吉は素早く景勝に同盟の手を差し延べて越中への出兵を依頼してきた。

このとき即座に応じて行動を起こした景勝を、信吉は先見の明ある人と感服したのだが、このごろの家康の大胆な行動が案じられた。

信吉の不安は次第に現実味を帯びてきて、あの眞田昌幸までもが家康と講和して、嫡子信之を人質に差し出したのである。

その年、天正十七年（一五八九）六月、景勝は謙信時代間接統治だった佐渡を平定して直轄領にした。

戦い上手の信吉は、この佐渡攻めで譜代を凌ぐ大活躍で抜群の手柄を立てたので、その戦功を知った景勝に注目されるようになった。

翌天正十八年、秀吉から小田原北條攻めに参戦するよう命ぜられた景勝は、八千の兵を率いて春日山城を発向した。

信吉もその軍団のなかにいた。

上杉軍は、川中島で毛利、眞田、依田、小笠原らの信濃勢を併合すると、碓氷峠を越え、松井田、箕輪、厩橋、倉賀野の諸城を帰順させて武蔵へ攻め入り、金澤から美濃、木曽路、下仁田を経て西上野へ攻め入った前田軍と合流した。

北国、信濃の連合軍は、武蔵に点在する支城を虱潰しにして戦功をあげながら小田原へ参陣すべく、まず鉢形城へ向かった。

信吉は攻守ところをかえて父祖伝来の城攻めに向かう乱世の無常を思い知らされた。

だが、上杉管領家が北條氏康に敗れたとき、逸早く軍門に降って氏康の三子氏邦を養子に迎え、家名の存続を図った父康邦の希いも虚しく、養子氏邦は北條姓に戻ってしまって藤田本家は絶え、結局鉢形城も乗っ取られてしまった経緯を考えれば、未練より復讐心に燃えて躊躇いは吹っ切れた。

鉢形城攻めは、多少の抵抗はあったものの威嚇で開城させた。城主北條氏邦は小田原城に出向いていて不在だった。

そのあと、連合軍は松山、河越の両城を帰順させておいて小田原に到着した。

ところが、景勝と利家が秀吉に謁した二日後に、両軍は八王子城攻略に向かった。

信吉たちは、秀吉の命令と思い込んでいたのだが、実はそうではなかった。

上杉景勝と前田利家は、小田原へ到着すると戦塵も拭わず直ちに秀吉に謁したのだが、秀吉はなぜか両将に素っ気なく、ただ参陣の労を犒っただけで上野、武蔵の北條方諸城を帰順させた戦勝を賞讃してはくれなかった。

なににつけても大仰で煽て上手な秀吉とも思えぬ態度に、景勝も利家も首を傾げた。

あとで判ったことだが、秀吉が、

「北国、信濃の諸将の働きはまことに見事であり、その功績も大きいが、しかし、戦というものは一城を帰順させても一城は攻め殺してこそ一張一弛の法に叶うというものである。それをみな戦わずして降服させてしまったのでは、関東の諸将への見せしめにならぬ。だから儂は敢えて褒めそやさなかったのじゃ」

そう近習に漏らしていたということを聞いた景勝と利家は、相談して無疵のままでいる八王子城を名誉挽回の標的にした。

信吉は、そんな深い事情は知らなかったが、小田原攻めのまえにもうひとつ宿敵北條の城を攻略することになったことを天与の機会と欣び、勢い込んだ。

六月二十四日未明、八王子城に迫った上杉、前田の両軍は、朝霧を衝いて総攻撃を開始した。

八王子城は、氏康の二子氏照がまだ近くの滝山城にいたころ、謙信と信玄とに攻められて苦戦した経験を生かして、難攻不落の天然の要塞を選んでこの地に居城を移したのであるが、このとき堅城はまだ完成していなかったし、城主氏照もやはり小田原城に出向いていて不在だった。そのため、上杉、前田両軍の猛攻を受けて容易に攻め込まれ、午後には本丸が陥ちて僅か一日で落城してしまった。

この攻防戦で北條方の将兵は全滅し、敵味方あわせて千三百人の戦死者を出したというから、いかに激戦であったかが判る。

戦いすんで、上杉軍は二百七十三、前田軍は二百八十の首級を挙げ、桶に入れて小田原へ運んだので秀吉は大いに歓喜し、景勝、利家の両将は面目を施したという。

信吉は、この戦いで獅子奮迅の活躍をしてまたも景勝に認められた。

三

小田原攻めを最後に天下が平定されてから八年後の慶長三年（一五九八）正月、年賀の挨拶に上洛した上杉景勝は、秀吉から會津への転封を命ぜられた。

會津は奥羽を睨む要衝の地なので、秀吉は強将蒲生氏郷に九十二万石を与えて若松城に据えた。

その氏郷が、三年まえに四十歳の若さで歿してしまい、現在は嫡子秀行が継いでいた。

秀吉は、伊達政宗や最上義光の抑えに若輩の秀行では心許なく思ったのか、宇都宮十八万石に移封しておいて、越後の上杉景勝に白羽の矢を立てたのである。

景勝の所領は、蒲生氏郷の旧領のほかに出羽三郡と佐渡三郡を安堵されたので、百二十万石の大身になった。

ただし、そのうち米澤三十万石を景勝の重臣直江山城守兼續に与えよという。

直江兼續は、景勝の生家上田長尾氏の直臣樋口伊豫守兼豊の養子で、景勝が謙信の養子になっ

たときに随従してきて以来の股肱の臣であった。
その後、景勝の代になって直江家を継いだのである。
これによって直江兼続は、景勝の重臣でありながら無理矢理秀吉の直臣にもさせられたのである。
それにしても、直臣の加藤清正が二十五万石、石田三成、福島正則、小西行長、増田長盛が二十万石、黒田長政が十八万石であったから、陪臣直江兼続に与えられた三十万石がいかに破格であったかが判る。
景勝、直江主従は、秀吉の厚遇に感謝して、いっそうの忠誠を誓った。
景勝は急いで越後へ帰国すると、春日山を引き払って會津へ移った。
そして、まず新領国のかために各城の城将を割り振った。
このとき信吉は、景勝から譜代同様の扱いを受けて、福島市の西南にある會津街道に面した要衝の地大森山の大森城将に抜擢された。
信吉は、筋目を通して公平に扱う律義な景勝の人柄に好感を持った。
景勝が、ようやく落ち着いて直江とともに国造りに取り掛かった四月、突然伏見留守居役千坂對馬守景親から、
（秀吉が伏見城で俄かに発病した）
報らせが届いた。
景勝は、秀吉の病状を気遣いながら国造りを急がせた。

だが、景勝の祈りも虚しく、天下人秀吉はその年八月十八日に六十三歳の生涯を閉じてしまった。
千坂景親からの飛札を受けた景勝は、国造りを直江に委せてただちに上洛した。
信吉は、これで豊臣の時代は終わり、つぎは徳川の天下になるだろうことを予感した。
翌年閏三月三日、秀吉につづいて前田利家が六十二歳で病歿すると、家康の遠慮会釈ない専横が目立っていった。
正義の筋目を通す律義な景勝は、天下を我が物顔に振る舞う家康とやがて対決するときがくるのを想定して、會津の軍備を急がねばならぬと思い立った。
八月上旬、秀頼と家康に謁して新領會津の国造りを理由に暇乞いして許されると、留守居役の千坂景親に家康の動向を監視するよう命じておいて、帰国の途に就いた。
九月上旬に會津へ帰国した景勝は、ただちに直江兼続と防衛態勢にとりかかった。
まず、會津へ入る南山、背炙越、信夫、米澤、仙道、津川、越後の七口を修理して、まさかのときの重要な軍用路を確保することからはじめ、橋普請をおこない、牢人たちや武具、兵糧を集めた。
ついで景勝は、現在の若松城では籠城するには狭すぎると考えて、若松の北西にあたる神指原にあらたに築城することを計画し、直江の監督のもとで工事を急がせた。
こうした會津の動きを見咎めた越前北ノ荘（福井市）から越後へ転封された堀秀治と、家康の家臣鳥居元忠の女婿で角館（秋田県仙北郡角館町）の戸澤政盛は、

（會津中納言に謀叛の兆しあり）

と看て取って、家康に注進した。

それらのことは、おなじ伏見在住で親交のある徳川家の家臣たちからすぐに留守居役の千坂景親に報らされた。

千坂は、徳川の重臣たちに、

「わが主人に限って謀叛の心など誓ってござらぬ。道や橋を修理し、牢人を雇い入れ、新城を築いて軍備を整えているのは、越後から会津へ国替えのおりに亡き太閤殿下より奥羽の地を監視するよう仰せつかったからでござる。このこと誤解なきよう内府様へ宜敷くお執り成し下され。くれぐれもお願い申す」

そう熱っぽく釈明して、懇願した。

同時に千坂は、上杉が謀叛の嫌疑をかけられていることを、會津の景勝に宛てて遂一詳細に報告した。

律義な景勝が、秀吉の嫡子秀頼を蔑ろにしている家康の専横を赦せぬのはもっともであったが、政治の中枢にいて天下の動向を直接肌で感じとっている千坂には、遠い會津の景勝や直江よりも時代が移り替わってゆこうとしている様子がよく見えていた。

四

年があらたまって慶長五年（一六〇〇）を迎えた。

信吉は、景勝から秀頼と家康への年賀の使者を命ぜられて上洛した。

伏見屋敷に入った信吉は、留守居役の千坂景親から會津の事情を詰問されたときの模範回答を言い含められた。

信吉は、主君の庇護に懸命な千坂の釈明を聴いて、自分はこの忠臣の心情には遠く及ばないと思った。

あらためて大坂城に伺候した信吉は、秀頼と家康に年賀の挨拶を述べたが、家康の態度は素っ気なかった。

いかに国造りを急いでいるとはいえ、景勝自身が上坂しないことで機嫌を損ねているようであった。

だが、側近の本多正信の扱いは、家康の非礼を補ってあまりあるものがあった。

信吉を別間に請じ入れると、長旅の疲れを癒す歓待をしてくれた。

盃を酌み交わしながら正信は、時の流れは徳川に向いていることを然り気なく口にしながら、

「臣下の命運は主君しだいで決まるもの。寄らば大樹でござるよのう」

その物言いは、信吉に上杉離叛をすすめているようにも受け取られた。

信吉は、辞去するおりに正信から時服と金銀まで贈られ、丁重にその労を犒われたことにいたく感激した。

使者の役目を終えて帰国した信吉は、景勝と直江兼續に、

「都では會津謀叛の噂が高まっております。お屋形様が上洛して直々に申し開きをなされば、内

府様のご疑念も晴れましょう」

とすすめた。

景勝は生来寡黙な人であったが、ここでも直江が景勝に代わって、

「われらに疚しいことなど微塵もない。徳川も大老なら、上杉もまたおなじ大老である。同格同士でなにゆえ徳川に頭を下げねばならぬのじゃ。たとえ家康がどう勘繰ろうとも、申し開きなど は断じていたさぬ」

そう言って信吉の進言を一蹴した。

直江にそうきっぱりと拒絶されてしまっては、話の接ぎ穂がなく、信吉は口を鎖してその場を引き退がったが、景勝が全幅の信頼をおいている執政の世情知らずには呆れ返った。

いかに都の事情に疎いとはいえ、本気で現在の家康と対決して勝てると思っているのだろうか。

信吉には、どう上杉を贔屓目に見ても勝ちが読めないのだった。

上杉は百二十万石の大々名だといっても、徳川はその倍以上の二百五十万石である。長期戦になればこの身代の差が物を言ってくる。

そのうえさらに諸大名の助勢がつく。

上杉方は佐竹義宣とせいぜい石田三成、浅野長政、増田長盛、長束正家、前田玄以の五奉行ぐらいだが、家康の許には雲霞の如く集まってくるであろう。

景勝と直江兼續がどう踏ん張ってみたところで、所詮勝ち目はないと信吉は判断していた。

景勝に進言して以来、信吉は家中の者から、

「藤田信吉は家康に通じている」

と陰口を叩かれ、白眼視された。

二月に入ってまもなく、伏見の千坂景親から、

（越後の堀秀治の家老堀監物直政が、徳川の出頭人榊原康政を頼って、公式に上杉を告訴した）

旨の飛札が届いた。

城将たちは、家康との抗争が間もなく表面化することを覚悟した。

景勝は、三月十三日に不識院殿（謙信）の二十三回忌法要を執り行うことを諸将に布令た。

信吉は、

（年忌に事寄せて諸将を集め、そのあと軍議をひらくに違いない）

と看て取った。

（お屋形と直江は、家康と雌雄を決する覚悟を固めている）

その席に列座してしまっては、上杉と心中することになってしまう。

（これまで居心地よくさせて貰ってきたが、ここからさきはもはや従いては行けない）

信吉は、上杉家を離叛する決意を固めた。

法要が二日後に迫った十一日夜、信吉は家族と一族郎党を引き連れ、同行を申し出た栗田刑部らに護衛されて大森城を脱け出すと、南山口から江戸へ向かった。

翌日、夕刻になって信吉の出奔を知った直江兼續は、取り逃がしてはならじと七口を閉鎖して

探索を急がせた。

信吉は、岩井信能の騎馬隊に追い付かれたが、栗田刑部と郎党たちが防戦しているあいだに辛うじて国境を脱出することが出来た。

栗田らは、その場で斬り死にして犠牲になった。

信吉は、江戸に到着すると秀忠に謁して会津の事情を具さに説明したが、家康に正式告訴するよう勧められて上坂した。

信吉は、本多正信の計らいで徳川の傘下に入ると、正信の意を体して上杉家伏見留守居役の千坂景親と接触し、両家の和解に働いた。

五

関が原の合戦に勝利した家康が、慶長八年（一六〇三）二月征夷大将軍に任ぜられて江戸に幕府を開くと、信吉は、本多正信の推挙で西方藩（栃木県上都賀郡西方町）一万五千石を与えられて大名になった。

信吉は、感激して将軍家に忠誠を誓った。

慶長十九年（一六一四）一月に、小田原で異変が起こった。

それから十年後の小田原は、天正十八年（一五九〇）に北條氏が滅亡したあと、家康の関東入国にあたり三河以来の譜代で戦乱を生き抜いてきた武人大久保忠世に与えられた。

藩祖になった大久保忠世は、諸施策を講じて長年つづいた北條領を安泰に導いた。

文禄三年（一五九四）その忠世が病死すると、家康は羽生城主の嫡子忠隣を入封させた。

忠隣は、亡父の諸施策を継承して積極的に民政に取り組み、領民の生活を安定させた。

忠隣はまた幕府内でも実力を発揮して本多正信とともに老中として家康、秀忠を補佐し、創業期の幕政推進に活躍したが、なにしろ武断派の部将だったので智将と言われた本多正信とは反りが合わず、次第に確執を生じていった。

そこへもってきて、大久保長安の不正事件に連座したとの噂を立てられ、謀叛の密訴があったりして慶長十九年一月十九日に改易されてしまった。

主人を喪った小田原城は、元和五年（一六一九）に上総大多喜藩主の阿部正次が入封するまでの五年間幕府直轄となって番城時代がつづくのだが、その番将十三名の筆頭に藤田信吉の名がある。

信吉は、この時期まだ西方藩主であったから、一時小田原城在番を兼ねていたのであろう。

それもまた本多正信の引き立てによるものであったろうが、とにかく信吉は、上杉家の年賀使者として上坂したおりに偶々本多正信の知遇を得たことから、外様でありながら譜代並みの扱いを受けていたのであった。

だから信吉は、西方藩主に処遇されてからというもの、これまでの北條、長尾、武田、上杉に身を寄せていたときとは違う本腰を入れた心底からの忠誠心をもって将軍家に奉仕していた。

この年、十一月の大坂冬の陣にも出陣したし、半年後の夏の陣では奮戦して負傷した。

その傷が癒えぬままずっと病床にあったが、翌元和二年（一六一六）四月十七日に家康が七十

五歳で歿すると、二箇月後の六月七日には、幼時から家康の近侍として仕え、家康隠居後は二代将軍秀忠の執政にまでなった本多正信が七十九歳で歿した。

信吉は、戦乱の世を渡り歩いた最後に仕えたこの二人の死を病床で聴いて、感慨無量だったことであろう。

家康の死から三箇月後、正信の死から一箇月後の七月十四日、信吉は西方城でしずかに息を引き取った。享年五十九歳であった。

信吉には嗣子がなかったので、藤田家は改易となり、西方藩は廃藩になった。

断腕太后

森下　征二

（一）

乾いた風が砂を巻き上げる。天顕元年（西暦九百二十六年）十月下旬、契丹帝国の都、西楼の冬は早い。街外れの丘の寂れた道観（道教の寺院）の縁側に、黒い軍服を着た二人の男が坐っていた。何れもひとかどの武将だが頭髪が長いので契丹人ではない。

年上の男は漢人の亡命将軍で、盧龍軍節度使の盧文進である。彼は頻りに声を励まし、三十前後の若い男を説得していた。若者の名は趙思温。漢軍都団練使と言う要職にあり、男らしい顔をしているが左目がない。

「なあ……思温、良く考えろ」

文進が思温の顔を覗き込んだ。

「ここらがもう潮時ではないか？　太后陛下の世の中では幾らあっても命が足らない。俺と一緒に中国へ帰ろう」

太后陛下とは先帝耶律阿保機の妻で、ウイグル王家の血を引く述律氏のことである。髪が燃えるように赤く青い瞳をしている。

今年の一月、先帝は僅か半月で渤海国を滅ぼし東丹国を建国した。しかし、本国へ凱旋する途中あっけなく崩御したため、渤海人の叛乱が続発し東丹国は深刻な混乱に陥った。これを逸早く鎮圧したのが述律太后である。軍事・国政の大権を握った彼女は、皇太子の突欲と次子大元帥堯骨を従え威風堂々と凱旋して来た。

ところで、帝位を継ぐのは皇太子のはずである。しかし、実母である太后が皇太子をどうしても即位させない。却って大元帥の擁立を図り、皇太子の側近を大量に捕らえて処刑した。僅か一月の間に刑死した者は四百人を超え、都の人々は怯えきっていた。しかも、漢人の武将張希崇が出奔して、漢人への風当たりが一段と強くなっている。危険を感じた文進が帰国を企んだのも無理はない。

思温の右目がきらりと光った。

「何だと、中国へ帰る？　謀反を図る積りか？」

「うむ、謀反と言えば謀反だが……。俺は、後唐へ帰参しようと思っている。明宗皇帝とも連絡が取れたからな」

「明宗皇帝と？」

「そうだ。このままでは命が危ない。正直に言おう。俺は逃げる！　国へ帰って妻子に会いたい」

文進は五年前、中国の中原王朝である後唐の荘宗皇帝に仕えていたが、皇帝の弟、李存矩を殺して契丹へ亡命して来た経緯がある。娘の一人を召し上げられて、妾にされた怨みを晴らしたのである。その復讐に手を貸したのが弟分の思温であった。

しかし今年の四月、その後唐で革命が起きた。皇帝の一族である明宗が、荘宗を殺して即位したのである。彼らが帰国出来る条件が整っていた。

「俺はお前に借りがある。出来れば連れて帰りたい。だから……、お前の正直な気持を聞かせてくれ」

文進が思温の顔をじっと見る。思温は年老いた父母の顔を瞼に浮かべ、ためらいがちに呟いた。

「それは、私も……帰りたい」

文進が、思温の迷いを断ち切るように言った。

「よし！　それで決まった。ところで、思温。明宗皇帝の狙いが武力の強化にあるのは明らかだ。だから……、俺たちは盧龍軍を率いて帰参する。しかし、そのためには太后陛下を油断させなければならない。それで今日、俺は韓延徽と会って来たのだ」

「ほう？　左僕射（行政副長官）の延徽とか？」

「そうだ。彼は漢人の癖に、この国の将来に命を賭けている。太后陛下のためなら際どいことも平気でやるさ」

「それで？」

「明日、皇太子側近の大物が開興殿へ参上する」

「皇太子側近の？　では、猫か……」

猫と言うのは、先帝の弟耶律寅底石（やりついんていせき）の渾名である。彼は政事令（せいじれい）（宰相）の要職にあるが、時々見境なく暴れるので気違い猫とも呼ばれている。

「そうだ。猫は陛下に皇太子の即位を迫っている。勝負は決まっているのに、馬鹿なことを考えるものだ。延徽の話では、陛下は敢えて御前会議を開き気違い猫を仕留める積りだ」

「なるほど、政事令は却って墓穴を掘るのか」

「その通りだ。それを我々が加勢する。お前にも発言の機会を与えるから、陛下のために熱弁を振るってくれ」

「皇太子を排斥するのか？」

「そうだ。我々の力で大元帥を盛り立てる。上手くやれば、陛下の許可を貰って盧龍軍を動かすことも出来よう。軍を率いて逃げる途はこれしかない。良いか、延徽と話が出来ている。彼は黙って我らを見逃すはずだ」

「うむ。しかし、どうも気が進まない。なあ……文進。陛下を諫め、皇太子を即位させるのが臣下の道ではないか。長い目で見れば陛下のためになるはずだぞ」

ためらう思温に、苛立った文進が大声をあげた。

「何だと？　道を説く必要がどこにある？　要は陛下を誑かすことだ！」

「うむ」

「それともお前、やはり……？」

文進の目がきらりと光る。

「済まぬ。馬鹿なことを言った」

思温が慌てて文進を遮った。俺も張希崇（ちょうきすう）のように、やはり太后を裏切るのだろうか？　思温は秘かに溜息をついた。

（二）

開興殿（かいこうでん）の中は、重苦しい空気が漂っている。二人が向かい合って半刻が過ぎた。太后の前にいるのは、先帝の弟で政事令の耶律寅底石（やりついんていせき）である。二人は長い間睨み合いながら、殆んどしゃべらない。

寅底石は、先帝の弟の中でも変わり者で通っていた。敵の顔色を窺いながらひっそり近づき、隙を見つけると牙を剝いて襲い掛かる。それで何時しか、猫とか、気違い猫……と呼ばれてきたのである。太后の冷たい瞳が猫を見る。成熟した女の香りを漂わせ、如何にも汚らしそうに猫の顔を見つめている。今日も一人は確実に死ぬ……。末席にいた趙思温が、粛清された人々の顔に、猫の顔を重ねて呟いた。

気違い猫が仕掛けて来た。

「俺は、兄貴に頼まれたのだ……」

「だから、何を頼まれたのかと聞いている」

猫の口が微かに綻ぶ。

「解らないか？　皇太子を帝位につけることだ」
「皇太子を帝位に？　そうか、気違い猫が後見して、二人で国を混乱させるか？」
「相変わらずだな、お前は……。しかし、俺を怒らせようとしても無駄だ。俺は侮辱されるのは慣れている」
「そう、それは残念だわ。ほほほ」
太后は低い声で笑い飛ばした後、猫、気違い猫……と口をすぼめて呼びかけた。面と向って渾名を呼ばれ、猫の顔が怒りに歪む。太后が構わず続けた。
「良いか猫……、良くお聞き。先帝が私に黙って世継ぎを決めることはない！　それに、皇太子が帝位を継ぐとは限らないのだ」
猫の目が光る。そして、韓延徽に視線を移しながら低い声で笑った。
「ふふふ……、そいつはどうかな？　帝位を継ぐのが皇太子だ。ところで延徽、お前はなかなかの物知りだと聞いている。帝位の正しい継ぎ方を太后陛下に教えてやれ」
驚いた延徽に向って、太后はにっこり笑って頷いた。
「ほほほ……、猫どのはご親切なことだ。よろしい、お前の意見を聞かせておくれ」
そうか。ここで、掛かれとおっしゃるのか。太后の心を読み取った延徽は、身を乗り出して確りと答えた。
「仰せの通り、中国では長子が帝位を継ぐことが多いようでございます」
しかし彼は、それが結果論であると主張した。しかも、その結果が必ずしも良くないことを、

例を挙げて説明する。それにひきかえ、名君と謳われた皇帝でも長子でない者が多い。大事なことは歳の長幼ではなく、本人が持つ徳なのだと力説したのである。太后は、我が意を得たりと大きく頷いた。当てが外れた気違い猫が、毛を逆立てて怒鳴りつけた。
「漢児め！　何を抜かす……。こいつ、獅子身中の虫だったか！」
猫の目が爛々と光って延徽を睨む。しかし、彼は平然として太后を見上げた。
「そこに控える盧文進は、博識で有名な男でございます。ご下問頂ければ幸いですが……」
「良かろう。猫どのは延徽の答えが不満のようだ。文進、お前の考えを申せ」
「ははっ！」
拝礼した盧文進が頭を真っ直ぐ起こした。
「帝位の承継は、延徽が申し上げた通りだと思います。敢えてつけ加えれば、長子相続は、土地に縛られた漢人の考え方でございます。契丹人は、自由で勇敢な騎馬の民ではございませんか？　我が国の帝位を、百姓の理屈で決めることは出来ません」
文進の指摘に多くの者が頷いた。発言の効果に満足した文進は、思温に目を移して言った。
「趙思温、そなたも陛下のお許しを頂いて、意見を披露させて戴いたらどうか？」
うまくやれ！　兄とも仰ぐ友の目が思温を暖かく励ました。来たな……。俺もこれで、やっと太后の役に立てる。勢い込んで太后の顔を仰いだ思温は、彼女の冷たい瞳を見て水を浴びたように凍りついた。
（趙思温？　都団練使とは名だけの若輩ではないか。彼のような者に、一体、何が語れるという

のか？）

皮肉なことに思温は、太后の心を正確に読み取ってしまった。読み取った瞬間、彼は太后との力の差を改めて思い知らされ、必要以上に自信を失った。追い討ちをかけるように、太后の素っ気ない声が聞こえてくる。

「そうか……。では、手短に申せ」

まだ、十年早いと申されるか？　込みあげてくる悔しさが怒りに変わり、思温は我を忘れて立ち上がった。

「然らば、臣の存念を申し上げる」

声が掠れ他人の声のような気がする。彼は震える手を握り締めながら声を絞った。

「古来、帝位は宜しく嫡長を以って継ぐべし……と、申します。順逆誤れば、家が乱れるもとではございませんか。家が治まらずして、国が治まりましょうか？」

「思温、止めろ！　何を言うか……」

驚いた盧文進が思わず立ち上がって叫んだ。太后は不思議なものを見るように、思温の顔をじっと見つめた。思温は自分の仕出かしたことに今更ながら身体を震わせ、それでもはっきりと言い切った。

「皇太子、今、まさに朝廷に在り。宜しくこれを立てるべし！」

思温の発言は正論だけに迫力があった。不気味な沈黙が一気に広がる。その静寂を、狂ったような笑い声が破った。

「あっはっはっは……」

猫が笑った。天を仰いで猫が笑った。甲高い笑い声が壁に当って跳ね返る。

「よく言ったぞ、若造！　思温、でかした。ははは……」

「おのれ！」

鋭い気合に鞭が重なる。つんざくような悲鳴があがった！　音を立てて床に倒れた猫の悲鳴が、高く長く伸びて行く。

「無礼者め！　侮辱すると許さぬぞ」

夜叉のように狂った太后が唾を散らして猫を蹴る。武将たちが、それに合わせて嘲笑った。青い瞳を冷たく光らせ太后が叫んだ。

「華沙！　後はお前に任せる」

「はっ」

短く答えた侍従の華沙が気違い猫に飛びかかる。彼は無雑作に猫の襟を摑むと、騒然とした広間を尻目に猫を引き摺りながら出て行った。

（三）

華沙が出て行った後、広間の中は静まり返った。再び玉座に坐った太后が、改めて趙思温を見据えて言った。

「漢軍都団練使趙思温！　お前は帝位に口を挟み、私に逆らう積りだな？」

青い瞳が怒りに燃えている。震えあがった思温は辛うじて口を開いた。
「いえ！　滅相もございませぬ。臣は仰せによって存念を申し上げただけのこと。ですが……」
彼は思わず口を滑らせた。
「何だ？」
鋭い視線が思温を捕らえる。彼は震えながら懸命に声を振り絞った。
「皇太子が帝位を継ぐのに、何の不都合がございましょうか？」
「さすれば、先帝の遺志に背くからだ！」
「先帝のご遺志に？」
嘘だ……と、思温は奥歯をかんだ。先帝が皇太子を可愛がっていたことは誰でも知っている。太后は何故、見えすいた嘘を言うのだろうか？　青い瞳が、陽炎のように揺れている。懸命に覗き込んだ思温の目が、陽炎の向こうに理不尽なものを捉えた。もしかしたら……、皇太子は太后の子ではないのだろうか？
恐ろしい疑惑に気がついた思温は、思わず口に出して呻いていた。
「そうか……、それなら解る。皇太子が即位すれば、陛下の思うように政が出来ない。だから、権力を手放したくないのだ。陛下が大権を握ったのは、国のためでなく己の野心のためだったのか」
一瞬声を呑んだ武将たちが直ぐに大きくどよめいた。彼らは思温の声を、正確に聞き取ったのである。怒りのために頬を染めながら、太后がそれでも声を殺して言った。

「言ったな、思温……。下衆の分際で良く言った。そこに控えろ！」
太后は思温に、今まで猫が坐っていた場所を指差した。静かな声で却って凄みがある。思温は素直に立ち上がった。立ってしまうと、何故か足が勝手に動く。太后の前へ進んだ思温は震えながら跪いた。
「不敵な奴め！　私が嘘を言っていると申すのか？　良かろう、木葉山へ行け！　行って地下で先帝に見え、自分の耳で確かめるが良い」
先帝の陵がある木葉山へ行くことは、殉死することを意味する。先帝が崩御されてから三カ月の間に、太后に刃向って木葉山で殺された者は百人を超える。そうか、俺に殉死せよと仰せなのか……。彼は、掠れた声を振り絞った。
「臣に死ねと？」
「そうだ」
「臣は陛下の仰せに従い、理を述べ存念を申し上げました。国のために信念を持って、天下の大法を述べました。それで、死を賜るなら正義が立ちませぬ」
「何だと、正義が立たぬ？」
「はい」
不遜にも睨み返してくる思温を見て、太后が思わず唇を歪めた。
「ならば、聞こう……。お前は今日まで、何故木葉山へ行かなかった？」
「は？」

「過日の後唐征伐の折だったな、流れ矢に眼を射抜かれたお前が、少しも怯まず血だらけになって闘った。そのお前を自ら介抱された上、漢軍都団練使に抜擢したのは誰か？」
「は、畏れ多くも……」
「先帝だな？」
「はい」
頷く思温に、太后が嵩にかかって問いかける。
「お前が受けた恩は重い。殉死するのが正義ではないか？　それなのに、お前は何故木葉山へ行かなかった？　命欲しさに、先帝の恩を忘れたか！」
太后が玉座から身を乗り出して思温の顔を睨みすえた。
「いえ、決して……」
先帝の恩を殊更にあげて、殉死に追い込む……。これが何時もの太后の手だ。黙り込んだ思温を冷ややかに見つめながら、太后はいきなり立ち上がって腰の剣を抜いて叫んだ。
「臆したか、趙思温！　木葉山へ行くまでもない。私がお前を先帝の許へ送り届けてやる」
両刃の剣が冷たく光り、刃先が彼の喉元に当る。
「怖いか？　でも、直ぐに済む」
小さな唇がほころび、微かな笑い声が漏れた。細く反りあがった眉の下で、青い瞳が美しく燃えている。思温ははっきりと見た。細く高い鼻の下で、心持ち突き出した唇が、彼の血を求めて濡れているのを……。激しい恐怖に慄きながら、理不尽な権力に対する憤りが身体の中から湧き

上がる。彼は我を忘れて叫んだ。
「先帝の寵愛を受けたること、臣は陛下に及ばず！　陛下こそ、何故、木葉山へ行かれざるや？」
趙思温が必死の形相でまくしたてた。見守っていた武将たちが一斉に大きくどよめいた。
「無礼者め！　陛下に申し上げる言葉か？」
「若造のくせに、生意気な！」
怒りを含んだ声があちこちで上がる。しかし、騒ぎは一向に収まらない。それどころか、騒ぎに紛れて不穏な声が聞こえてくる。
「思温の言や良し！　一理あり」
「その通りだ。太后自ら、木葉山へ行くべし！」
太后の専権を憎み、皇太子を支持する武将がまだ何人も残っている。彼らは思温の発言をきっかけに、牙を剝いてきたのである。隙を見せると一気に襲ってくる……。太后は歯を食い縛って思温を睨んだ。彼の右目がきらりと光り、挑むように見つめて来る。彼女は剣を持ったまま大声で叫んだ。
「黙れ、思温！　私が殉死すれば国はどうなる？　たわけたことを申すな！」
太后の気迫を込めた一喝が、不穏な動きを辛うじて押さえた。彼女は、深い憎しみを込めて思温を睨み、剣を持つ左手に力を入れた。喉を被う薄い皮膚が少しずつ刻まれ、真っ赤な血が落ちて行く。

思温は苦痛に耐えながら、訴えるように太后を見つめた。思いがけなく、太后を追いつめてしまった。しかし、それは彼女に認めて貰いたかったからである。それで殺されるなら、本望ではないか！

思温が見つめた。青い瞳を懸命に見つめた。若い思温の激しい想いが彼女の上に一気に注ぐ。思わずうろたえた太后が、剣を離して身体を後へ引いた時、思温の潰れた左目から涙が一滴微かに落ちた。太后の胸に、思わず熱いものが込みあげる。潰れてしまった左目から、どうして涙が出るのだろうか？

思温は、涙で曇る目を懸命に開いて太后を見る。何とか体勢を立て直した太后が、再び左手で剣を握って青い瞳で冷酷に睨み返す。若い思温が秘かに覚悟を決めた時、太后の顔が一瞬歪んで、激しい気迫が思温を襲った。

「えい！」

太后が、鋭い気合とともに剣を振り下ろした。肉を断つ鈍い音が響き、凄まじい血飛沫が思温の上へ降りかかる。

「うわっ」

まともに血を被った思温が、思わず大きな悲鳴をあげた。夥しい血を噴き出した太后の右腕が目の前に転がっている！　彼女は自分の腕を断ち切ったのだ。騒然とした中で、太后の弟の蕭阿古只が慌てて駆けつけ身体を支える。

阿古只の腕の中で、太后が懸命に叫んだ。

「聞け！　私はもとより、地下へ行って先帝の柩に入りたい！　後継決まらず国事多難で、殉死することが出来なかった。命を捨てることは容易いが、国のためにそれは出来ない……。今、こうして一臂を断ち切った。これを、私の代わりに柩の中へ入れるべし！」

武将たちは、余りのことに棒立ちになった。恐れと尊敬が入り混じった眼差しで太后を見つめる。今迄、自分の四肢を断ち切った権力者がいただろうか？　武将たちは太后の行為を正当に評価し、彼女の勇気と潔さに感動した。それとともに彼らは、太后をそこまで追い込んだ思温に激しい怒りを感じてきた。

「思温を殺せ！」

「そうだ。八つ裂きにしてしまえ！」

数人の武将が、雄叫びを上げて思温の側へ駆け寄った。文進が剣の柄を握って思温を庇う。騒然とした中で、太后が懸命に叫んだ。

「待て！　思温に手を出してはならぬ。彼の命は私が預かる……」

「太后の仰せだ。構えて相違あるまいぞ！」

阿古只が後を引取って大声で叫び、太后を軽々と担ぎあげると急ぎ足で出て行った。

（四）

道観の軒下から西楼の街を見下ろしながら、軍袍を着た盧文進が趙思温の顔を覗き込んで言った。

「今朝、延徽から連絡があった。盧龍軍に出陣の許可が下りたそうだ」
「ほう、それは良かった」
「俺は明日、軍を率いて幽州へ向かう。勿論、そのままずらかる積りだ。それから……、お前も盧龍軍に加わることが認められたぞ」
文進が一緒に行くかと思温を見る。
「ありがとう」
思温が居住まいを正して、文進と向かい合いながら穏やかに答えた。
「私だって、出来れば一緒に帰りたい。しかし、私はやはり契丹を離れることは出来ない。陛下を裏切り国へ帰れば、それこそ人でなしになってしまう。解ってくれ文進。あの方は、私に片腕をくれたのだ……」
「そうか、やはり行かぬか……」
文進はあっさりと頷いた後、改めて顔を引き締めて言った。
「ところで、思温。お前が契丹へ残るなら教えておこう。太后陛下が、何故皇太子を即位させないか……」
「知っている。皇太子は、陛下の子ではないのだな？」
したり顔で遮った思温に、文進が強い口調で否定した。
「いや、違う！　皇太子は間違いなく陛下の子だ。しかし、先帝の子ではない。陛下が先帝に嫁いだ時には身ごもっておられたようだ」

驚いた思温が文進の顔を見つめ返した。文進は好い加減なことを言う男ではない。多分、裏を取っているはずだ。思温は思わず声を潜めて聞いた。
「ほう、すると……皇太子は誰の子だ？」
「そんなことは、陛下のほかに解るものか」
文進が決めつけるように言った後、それでも口調を緩めて付け加えた。
「何れにしても、陛下は先帝の血を引かない皇太子を、帝位につけることが出来なかったのさ。その上、理由を公表する訳にも行かない」
「そうか。私は何も知らないで陛下を追いつめたのか……」
思温は文進から顔を背け、自分に向って呟いた。文進が思温の肩を優しく叩きながら、慰めるように言った。
「しかし、それで良かった。追いつめられたからこそ、陛下は自分の腕を斬り落とすことが出来たのだろう。武将たちの不満を消すには、それしか他に方法がなかった。陛下はお前のお陰で、彼らを一つに纏めることが出来たのさ。お前の評価は高いようだぞ」
「そうだろうか？」
「間違いない。延徽の話だと、盧龍軍に出陣の許可が下りたのもお前のお陰だ。陛下は、お前が同行すると思っておられる」
「なるほど……」
思温は複雑な表情で頷いた後、改めて文進に問いかけた。

「それはともかく、陛下のご容態は如何だろうか？」
文進がにっこり笑った。
「心配ない。順調なようだぞ。しかし、太后が回復されると、契丹は間違いなく強国になる！中国にとっては、恐ろしいことだ……」
思温は文進の言葉に頷きながら、あの日の出来事に拘った。太后は確かに俺を斬らなかった。しかし、自分の腕を断ち斬って俺の未来を決められた。俺はこれからどんなことがあっても、太后を助けなければならない。彼女の失った右腕にならなければならないのだ……。趙思温は文進を見上げて目を光らせ、挑むように言った。
「そうとも、文進。契丹は太后の下で必ず強国になる。戦で見えれば容赦しないぞ」
盧文進は思温の激しい言葉に驚きながらも、彼を見つめ返して大声で叫んだ。
「望む所だ！　待っているぞ、思温」

この時から、趙思温と盧文進は袂を分かつことになった。契丹を出奔した文進は、中国・後唐の明宗に迎えられて滑州節度使・検校大尉に任命されたが、後に契丹が後唐を滅ぼすと、更に追われて南唐へ奔った。一方、契丹に残った趙思温は着実に出世を重ね、終には太師・魏国公に上りつめるが、これは又別の物語となる。

小町逍遥

島津　隆子

旅への誘い

もうかれこれ二十年も前になるだろうか。京都旅行の折り、ローカルな私鉄に乗り換えて洛北の左京区静市に、補陀洛寺を訪ねたことがある。俗に「小町寺」といわれるこのお寺には、その名称どおり小野小町と深草少将の供養塔が建ち、本堂の外を廻って、ガラス戸越しに小さな小町の老衰像を眺めたことを覚えている。
伝説によると源信・恵心僧都が、野ざらしになっていた小町の髑髏を哀れんで弔ったという。庭には小町姿見の井戸も残っていたが、千年の美女が眠るにしては田舎の鄙びたお寺であった。しかし、私がまだ若かったせいか、その何気なさにかえって風情があり、妙に懐かしく印象に残っている。
その後、小町にまつわるお寺も史跡も全国に数多く、行方知らずとなった小町伝説が残る土地も沢山あることを知った。

ところで、この秋、女友達三人で京都旅行に行くことが決り、何とはなしに、せっかくだから小町のお寺にも行ってみようと思いたった。

老いの心境からか、日本一の美女といわれる歌姫の痕跡を訪ね、その雰囲気に浸りたいという、センチメンタルな衝動に駆られたのだ。いささか少女趣味かもしれないが、晩秋にふさわしく感傷旅行（センチメンタルジャーニー）と洒落たつもりである。

三人はいつの頃からか、私が仲介のような形で知り合った、何故か気が合うトリオである。いままでにもグループでは何度か外国にもでかけているが、三人旅は今回がはじめてだ。

すこし膝が痛む私の遅い歩きに、

「急ぐことはないわ。ゆっくり行きましょう……」

と言ってくれる二人に、私はすっかり甘えてしまっている。しかし、脚力は劣る私だが、同年輩の二人に負けず劣らず口だけは達者で、三人で冗談や減らず口をたたき合っては楽しんでいる。

いつものパターンで京に来たので、思わず上げた大きな笑い声に、すれ違う人が怪訝な顔で振り向いていった。はたから見たら、まさに老いを知らない童心の道化師たちと映ったことだろう。

とある道すがら、どうしてそういう会話になったのかわからないが、話題が横道にそれた。

「私が死んだら、お棺の花は、平凡な菊じゃいや！　好きな花に埋もれたい。春ならフリージャ、秋はコスモス。カトレアもいいわ。バラなら一年中あるから安心ね。ウフッ」

ベランダを四季の花で埋めている、花造りの上手な風子が、夢みる夢子さんのような口ぶりで無邪気に言った。

「私なら、そんなに美しく死に際を飾ってくれなくていいわ。死ぬ時は独り、死ねばすべてが終りだもの」

仲子が相変わらず割り切った口調で言う。

「私は葬式はいらない。ひっそりと死んでゆくの。だからいつも別れ際に言う〝さよなら〟が、いつか、永遠の〝さよなら〟になるかもね。ある日突然、死亡通知が舞い込んで驚かせてあげる」

私もつい、日ごろ思っていることを言葉にした。

「うん、それもいいけど、親しい人だけで、偲ぶ会でもやらない？　でももう、縁起でもない話は、ここまでにしましょうね！」

笑いながらやんわりと、言い出しっぺの風子が寂しい話題にストップをかけた。

こうして、後になり、先になり、お互いの歩みを確かめ合いながら、どこまでもつづくアスファルトの路を歩く。急ぎもせずにぶらぶらと、だが、ひたすらに、小町の眠るお寺を探して。

随心院へ

山科区小野の里に尋ね当てた随心院は、整然として美しい寺域を持つ、堂々たる真言宗善通寺派の大本山である。寺の門をくぐり、小町の碑の前までくると、私たちはほっとして顔をみあわ

せた。

花の色はうつりにけりな　いたづらに
わが身世に　ふるながめせしまに

大きな石に刻まれたあまりにも有名な小町の歌に、先ずクレームをつけたのは伸子である。
「花の色は……というけど、小町は自分のことを花と言ったのかしら。そうとしたら、ずいぶん自信過剰な女(ひと)だと思わない」
「花のような自分の容色も、降る雨を眺めているうちに、いつの間にか衰えてしまった、という意味にとる人もいるし、盛りの花を眺めている間に、いたづらに花の時季が過ぎてしまった、と読み取る人もいるのよ」
と私は小町のために弁解をした。
「歌は、人それぞれ好きなように解釈すればいいということね」
と風子が仲をとった。
それから私たちはお寺の広い境内に入り、本堂の玄関で案内を請うた。
若い僧侶に通された祭壇にみたのは、小野小町白描画と、恋文を下張りにして小町が造ったという小町文張地蔵尊と、黒色の卒塔婆小町の百歳像であった。
二つの雪洞(ぼんぼり)の明かりに、片足を立膝にして古代坐りをした、もの言わぬ小さな小町坐像が黒く浮かぶ。
さっきまであれほど饒舌だった私たちは、息を呑むように沈黙して、像をみつめたままだ。
しばらくして、風子が口火をきる。
「色白なイメージの小町も、百歳だからといって、こんな黒い像に造られては、ちょっと迷惑でしょうね」
それを受けて、伸子が蘊蓄をかたむける。
「この像も鎌倉時代に彫られたものでしょう。仏像は皆、黒い色をしているものなのよ」
「そうかもしれないけど、古代の女人たちは白粉(おしろい)の中に鉛が入っていて、少し年がゆくと、化粧焼けで、顔の肌が黒くただれてしまったというのよ」
「だから紫式部はじめ有名な歌人も文人も、ある年齢から、消息が途切れているわけね。老いた醜い姿を人目に曝したくなくて、いずこともなく身を隠してしまったのね」
小町像を前にして女三人は銘々好き勝手なことを言っている。
だが、耳をすますと、皮肉に満ちた小町の言葉が聞こえる。
「私、年をとっても透き通るような白い肌をしていましたよ。この像は私自身の姿じゃないのよ。錯覚しないでよ、おバカさん。だけど、人のこと黒い黒いというけど、ご自分たちの顔はどうなの。化粧で隠しているけど、染(しみ)もあるじゃないの。ほら、歩き廻ってきたせいにしても、ファンデーションとやらが皺に入って、かえって老いが目立って汚いわよ」
坐ったままの小町が、今にも怒りに燃えて立ち上がってきそうな迫力でまくしたてた。

そのとき、畳を擦る足音がして、若い僧侶が部屋に入ってきた。手にしているのは給仕の器らしい。僧侶は慣れた手つきで夕べの供物を静かに小町の祭壇に供えると、密かな足音を残して去った。

手厚くもてなされていることに素直に驚いた私は感嘆する。

「朝に夕べに、お給仕されているなんて、幸せな女人ね、小町は……」

「死んで千年余りになるというのにね」

その言葉を引き取って伸子が言い放つ。

「小町を捨てた男たちが、今の坊さんに乗り移って、お詫びの給仕をしているのよ、きっと」

小町は冷笑を浮かべて言った。

「まぁ失礼ね。貴方たち、いくら気楽かどうかしらないけど、女だけの旅なんて、お色気も何もありゃしない。お気の毒さま。私なんか年とったといえども、お寺の若いご僧侶たちの、廊を歩く素足や、剃り跡も青い襟足や、初々しい首筋にだって、朝に夕に、お色気を感じているのですからね……」

どこまでも勝ち誇った小町である。

「所詮は、美しさと男にちやほやされるだけが売り物でしょ小町は。晩年は姿を隠さざるをえなかったなんて、みじめな女よ。顔は真っ黒で骨と皮の〝卒塔婆小町〟じゃない」

「伸子さん、それは一寸言いすぎかも。でも七十前後になった私たちでも、こんなに生き生きしているわよね」

長い年月人の目に曝されて、黒くなった小町像、黒さゆえのリアルさが、かえって見る者の胸を打つ。もちろん小町の実像でないにしても、目をこらしてよくみると、ふっくらとした頬がかわいらしくも見えてくる。

外に出ると、周囲の風景はすっかり日暮れの色を濃くしていた。

私たちは本堂をぐるりと廻って、ほのかに薄暗くなった道を裏庭に出た。木立の中に竹垣に囲われて、多くの貴公子から贈られた、千束もの文を埋めたと伝わる、小町の文塚がある。五個の石を重ねた塔である。

「それにしてもこの塔の下に千束もの文が埋っているというのは、さすが小町だわ」

と私。だが、伸子はどこまでもシビアーだ。

「本当かどうか、わかったものではないわ。はったりじゃないの」

風子の慨嘆の呟きは、

「もうとっくの昔に私の恋文はみんな焼いてしまって、紫色の煙になったわ」

「そして、幾つかの恋が昇天して消え失せたのね」

と伸子が笑い飛ばした。

「恋愛沙汰は起してみたものの、私たちには形見の歌も恋文も残ってないのだから、時とともに何もかも消滅してしまったのよ」

冗談ともとれる私の自嘲に、小町が留めを刺す。

「あなたたち奇麗ごと並べているけど、本当の恋などしたことがないのでしょう。戯れに恋はすまじ、というけど、きっとあなたたち恋にも臆病なのよ。顔にそう書いてある。真情を吐露して奔放に生きたところで、百年に満たない命よ。だけど所詮、女は美しくなければ駄目よ。色々言う前に、鏡を見て出直してくるといいわ」

「私だって若い頃は、落合小町と言われたのよ。バカにしないで！　今だって年相応にはもてているわ」

と思いきり見栄を張る。

私たちは落ち葉をかさこそと踏みならし、前庭に戻った。そして、庭木の間を縫う小道が尽きるあたりに残る井戸跡に向う。小町が朝に夕べに使ったと伝わる化粧井戸は、今に湧き水が枯れることがないという。

石組みのまま残る化粧井戸は、私に幻想を抱かせる。

もしかして、木の枝に止まったようにみえる、風にゆらぐ小町の姿を、この井戸が鏡面となって映したろうか。ナルシシスト小町の自己陶酔の極致か。

また、かつて京の公達（きんだち）が、苔むす小道を牛車に揺られ、小町のこの棲家（すみか）を訪れ、あるいは邪険に追い帰されたりしたのか。驕慢な田舎娘・小町の幻影。

ちなみに、この小野の里には、百夜通（ももやがよ）いの深草少将が日ごと小町の門口に木の実を置いたという、榧（かや）の大木がある。私たちはこの大木をやっと探し当て、わけもなく得意な気分になった。

月心院へ

旅の二日目。

京阪電鉄の無人駅・大谷に降り立った私たちは、国道を走るひきもきらない車の疾走に、肝を潰してしばし立ち尽くした。古都とは名ばかりで、現代の喧騒の中にひっそりと史跡が建つ。その裏腹が京都ならではの趣きで、雅だけでは人間の生活が成り立たない証左だ。

片側の斜面は林なのに、片側に並ぶ民家は、どの家も戸をしめきって、この文明の騒々しさにじっと耐えているように見える。

気をとり直した私たちは、大正から昭和にかけて活躍した橋本関雪画伯の別荘で、画伯の没後、寺に改めた月心院をめざした。

しばらく行くと、長くつづく月心院の土塀が見えてきた。

風雅な門には軒行燈（あんどん）がかかげられている。その門をくぐると玄関脇に、はるか記紀の時代の成務天皇の産湯に使われたという〝走り井〟がある。

風流な玄関を入り、庭に抜けると、大小の石と木々が配置された斜面の庭園が見渡せて、その見事さに思わず息を呑む。所々に点在する燈籠に、ぼぅっと灯が点っている。

見上げると、築山の上の方に、藁葺き屋根の小堂がみえる。小町の像を安置する「百歳堂」で

ある。そのそばに独り働く庭師の姿が小さくみえる。なるほど、手入れの行き届いた箱庭をみているようだ。

私たちのたっての願いが叶い、百歳堂に安置された小町像に逢えることになった。半間の床の間のお厨子の中に、片膝立ちの小町の黒い坐像が安置されている。額に深くきざまれた皺の下の眼はしっかりと見開かれているが、わずかな笑みを浮かべて動かない厚い唇は、百歳の老女そのものである。障子を通した弱い秋の光が、ひときわ不気味にみせているのかもしれない。

前日に見た小町像より、一層、妖気と霊気に満ち、見る者に迫ってくるようだ。

お厨子の前の狭い板の間に座った私たち。

「ここの小町も黒い小町さんね」

「だって百歳の小町ですもの、仕方ないわ」

「私の姑は九十八歳まで生きたけど、色は白かったわ。でも姑が生きていた頃、姑と言い争った後、鏡に写した私の顔色は、必ず黒ずんでいたものよ。そのたびに私は恐ろしくてぞーっとしたの」

「体を流れている血液が憤怒に淀んで、顔の色を変えたのね。私だってそうだったわ」

私と伸子のやり取りを黙って聞いていた風子が言う。

「だって今の二人は、少しも黒くないのだから、いいじゃありませんか」

小町がまるで呪文を口ずさむように呟いた。

「私は歌人。だから遺した十八首の歌にすべてがこめられている。それ以外、ものを言っても蛇足になるだけだわ。それでも……そうね、私の人生を振り返れば、長いようで短い生をかりそめに生きたような気がする。でも、嘆きや悔恨の呪いは永劫よ。だから、人は悪魔を笑うことなんかできない。昔話も言葉にすれば虚ろにひびくだけ……誰にもわかりっこないわ」

返す言葉もなく、

「……さようなら、小町さん」

と別れを告げる私たちに、小町は皮肉をこめた悲しい一瞥を投げかえした。

旅を終えて

随心院も月心寺も私たちの想像を超えて美しく魅力に満ちた寺院だった。二つのお寺にはそれぞれの小町像が祀られ、懇ろに供養されていることを知った。私たちは、何故かわからないが、ほっと胸を撫で下ろし満足していた。

といっても、貴族好みの小町にくらべ、私たちはお金も従者もない渡り者の似非遊閑夫人である。花の都の京にきて、何が面白いのか、笑い転げんばかりにご機嫌なのだ。

「箸が転んでもおかしい年代は、とうに過ぎているはずなのに……三人とも変だわ」

あきれるほどに私たちの笑いを誘う噂の主人公は、共通の知人である男たち。私たちにかかる

と、最後はみんな笑い飛ばされて、全く顔色なしである。
その昔、桓武天皇の血を引く高貴な生まれで、出世しながらも出家して、小町と恋歌の贈答をした、洒落っ気溢れる僧正遍昭という人物がいる。
大和国山辺郡石上布留村の石上寺に参詣した小町は、この寺に幽居する遍昭に歌で語りかけた。

いはの上に旅寝をすればいと寒し
苔の衣を我にかさなむ

遍昭が返歌をする。

世をそむく苔の衣はただひとへ
貸さねばうとしいざ二人寝む

石の上に旅寝をするのは寒くて耐え難いので、せめてあなた様の僧衣でも貸して欲しい。という小町に、世に背いて出家している僧にはただ一枚の衣しかありません。貸さなければ情無しのようだから、いっそのこと二人で一緒に寝ようではありませんか。
出家僧にむかって衣を貸して欲しいと、あくまでも諧謔をもてあそぶ小町に、遍昭も意表に出たのだろう。

ところで、私たちの共通の友人である今様遍昭氏は、飄々としながら、実に女性への配慮が細やかで行き届いている御仁である。昔の部下から聞いたところによると、厳しい上司時代には鬼軍曹とあだ名されていたとか。しかし、滅法、女性には優しいのである。
たまに皆で揃って出かける時は、時刻表を調べて、電話連絡やファックスを朝早くから送ってくれる。私たちより年上とは思えないほど労を厭わず精力的なのである。
「あれって天性のものかしら」
「いえいえ、長い女性遍歴の間に培われたものよ、きっと。かなり授業料払っているわね。遊び人ってことよ」
「じゃあ、昔とった杵柄というところね」
「でも今は、奥様だけには頭が上がらないのよ。やっぱり女は強いのね」
などと姦しいが、結局、遍昭氏の妙に憎めないぬくもりが、なぜか私たちを笑いの渦に巻き込んで、飽きさせないのだ。
「歳をとると女も寛大になるものね。殿方の鼻もちならない自惚れもすべて笑えてしまえるんだから」
「棘がなくなって、人間が丸くなったのかしら。余り嬉しくない現象だけど」
「でも私は、できるかぎりこれからは我慢なんかしたくない。わがままに生きたいの」
私は思わず、本音をもらした。

姑を見送ったのはつい三年前のこと。個性の強い姑には、ほとほと手を焼いた。家庭に波風を立てないためには、私が我慢するより仕方なかった。それは結局、私が弱いからだ。姑には完敗であった。

夫は私の訴えにも聞く耳を持たず、いつしか会話もなくなり、心も冷えて、孤独になっていった。そして、私は自分の結婚は失敗だったと後悔の臍をかんだ。

自信を失くしてひ弱になり、人にも裏切られた。そして、人生の終点間際になって、遅ればせながら、私はやっと、わがまま宣言ができるようになったのだ。

小町は冷たく言い切る。

「私なら、さっさとそんな姑追い出してやる。貴方の気弱は、精神が脆弱なのよ。何十年間夫とは向かい合わないで、姑と四つに組んで勝てない相撲をとり続けてきたのよ。愚か者！　今となったら夫とはボタンの掛け違いのまま、墓場までいくしかないわ。せいぜい短い時間を、お気がすむように我儘に振る舞いなさいな、おバカさん！」

私はグウの音も出ない。

私たちが知り合う以前から、三人にはそれぞれ過ごしてきた幾歳月がある。過去の出来事の顛末がいやでも日常に影を落し、三人三様、人知れず人生に疲れていることも確かである。

伸子は三十代後半で、二人の男の子を置いて郷里を出奔した。親類縁者が多い上、酒飲みで遊び人の夫との結婚生活にホトホト疲れ果てたという。

「幼い頃からの夢だったピアノを、慰みに習おうと思って、ピアノを買ったのよ。そしたらせっかく求めたそれを、元夫は無断でお店に返してしまったの。それで私の腹は決ったのね」

一見、他愛ないような離婚の動機だが、二人の子を置いて、婚家を去った伸子の辛かった心情は、わかるような気がする。

その後の伸子の苦労は、婚家に留まったと同じか、それ以上だったにちがいない。だが、努力家の伸子らしく、現在も翻訳の道で活躍している。

置いてきた息子も結婚し、その夫婦と交流しながら、独り者の自由を享受している。

それでも独り身は淋しくて、駅前留学のノヴァへ行って、若い外人と話をするのが楽しみらしい。

そうだ、いつか伸子とＪＲの電車に乗っていた時のこと。こんだ車内の一隅から〝伸子！〟という男の声がした。二人同時に気がついて、辺りを見廻した。すると背の高いハンサムな若い外人が、笑顔でこちらに手を振りながら、今開いた電車のドアから降りていった。

「ああ、驚いた。ノヴァの先生よ」

「いつも名前、呼び捨てなの」

「そりゃ外人ですもの、当たり前よ」

嬉しそうな伸子が、私はちょっぴり羨ましかった。

それでも伸子は、時々は「結婚しようかな」などと血迷うこともある。退屈を紛らわせるために、パソコンでゲームをしたり、独り酒を呑んだりもしているらしい。長電話も好きだ。

あれほど離婚に憧れながら、どうしても経済的に自立できなかった意気地なしの私にとれば、伸子は尊敬に値するというものだ。

伸子の同級生の彼、新田と私と三人で、時折、連れ立って音楽を聴きにゆく。青春が胸の奥に熱く甦る類の音楽を聴くのだ。シャンソンのこともあれば、ペレス・プラード楽団のこともある。つい最近はグレンミラー楽団の演奏に酔い痴れた。

音楽を聴いた後は、三人でお酒を飲み、食事をする。

伸子が席を外した隙に私は新田に聞いた。

「高校生の頃の伸子さんは、マドンナだったんでしょう。お互い独身なんだから、一緒になればお似合いなのに。私いつもお邪魔虫ではないのかな、って気になっているのよ」

「そうですね、確かにマドンナ的存在でしたよ。でも今の彼女は気が強くてね。結婚はごめんだな。争い事は沢山ですからね。それにくらべ、貴方は中和剤みたいな女ですね」

ほら、来た、来た。私は最近気に入らないことがある。他人は私を評して、良い人、正直な人、素直な人、人格者などと言う。この度は、中和剤と来たか。それではまるで個性のない、毒にも薬にもならない人ということではないか、

「その言い方は、褒めているの、けなしているの」

「もちろん褒め言葉ですよ」

笑って言う新田に、聞きようによれば、それって、失礼ではありません？　と言いたいところだが、私は笑ってごまかす。

この類の私の評には密かに腹を立てているが、喧嘩を売るわけにもゆかない。もう諦めているものの、内心では大いに反駁しているのだ。

小町の小気味よい声が聞こえる。

「貴方、人の良さを売り物にするの、みっともないわ。そういう女にかぎって腹黒でしたたかだったりするものよ。仲子さんは何ごとにもイチャモンつけなければいられないようだけど、気が強すぎるのよ。虚勢をはるのもいい加減にすると、もっと楽になるのにね」

風子は医者の息子を関西のお嫁さんに持っていかれたと嘆きながらも、好奇心旺盛。老いてなお魅力的な笑顔を絶やさない、趣味多彩な女である。

昔は少女のような淡い色使いの具象画を描いていたが、円熟の境地に入ってからは、深い思惟と秘めた情熱を伝える抽象画が専らとなっている。

先日風子は、四人展を〝みなとみらいギャラリー〟で開催した。その中の一点に私を描いたという人物画があった。

淡いベージュの色調に描かれた私が微かに笑っている。もしかしたら笑いながら泣いているようにもみえる。長い首はガラスの花瓶で、不思議な笑顔は花なのだという。

「あなたを知っている人はほとんど、これが貴方だって当てたのよ。私の先生は、これはアルカイックスマイルといって、謎の微笑みだね、と仰って、この絵を選んでくださったの」

「こんな不細工な私を、こんなに謎めいた美しさで表現してしまうなんて、何て進境著しい画家

になったの、風子という女は！」

私はこの友人の前で、完璧に言葉を失っていた。

でも、小町は歯に衣を着せぬ勢いで風子を評した。

「おしゃれ上手な風子さん、貴方いい線いってるわ。私レベルと言えば褒めすぎだけど……男とも遊んできたらしい分、硬軟併せ呑む器量も持ち合わせているようね」

小町に云われるまでもなく、豊かな個性に恵まれた友人たちに囲まれた今の私は、この安逸な老境が気に入っている。胸を焦がす異性への思いも、仕事への焦りもない。だが、まだ、好奇心と興味は尽きることがなく、時々はスリリングな緊張感をも味わっている。それは全く、われながら予想外な楽しみを見つけたためだ。だが、それは当分秘密にしておくことにする。

絶世の美女と謳われた小町も、歳をとればただの哀れな老女にすぎない。美人の代名詞も真っ黒な老女としてしか残っていない。日本一の美女といってもこの体たらくである。その二体もの、百歳の小町像に相まみえたからには、自分たちが世にも不幸な老女になりはてたなどと、もう、嘆きはしまい。

少なくとも私たちは今に生きて、自分を解放する術も楽しみ方も心得ている。そして、京が散策できるほどの適度な健康と、ほどほどの自由も手に入れている。その上、周囲には笑いを誘ってくれる男女の愛すべき友人たちもいる結構なご身分なのだから……。

いづれか秋にあはで果つべき

相原　精次

「そうだ　京都　行こう」

これはテレビでときどき耳にするキャッチコピーである。

不易流行とは芭蕉の言葉だが、これを「現代に生きつつ伝統をも大切にする」と解釈したとき、京都は、よくそれに当てはまる。たしかに、年に数度、季節季節になると京都へ行きたくなる。やっぱり、京都は奥深くて、かつ広いのだ。

時のうつろいを、はっきり示してくれるのは桜の時期、そして紅葉の頃。まさにこの頃こそ、改めて京都の奥深さ、広さを、最も強く実感する。

桜？　醍醐寺はたしかに。でも郊外へ行かなくてもいい。散策を楽しむなら哲学の小道は定番か。平安神宮の周辺。そして神宮の神苑、ここはしだれ桜、満開時は言葉を失う。しだれ桜といえば、城南宮の庭もいい。

紅葉……。これは三尾（さんび）。清滝川に沿った道を行く。高山寺、西明寺、そして神護寺の順に川筋

を行く。この時期、車であふれかえっているこの周辺の道だが、川筋に下るとその喧噪から多少逃れられる。また、嵐山周辺と嵯峨野。ここは桜もいいが、紅葉の時期がまたすばらしい。天龍寺の庭園。さらに足を延ばしてみると宝筐院あたりは、もの悲しいほどの色に染まっている。

諸行無常という言葉、ひょっとすると誤った意味で、理解され、あるいは方向付けられてきたという状況はないだろうか。「この世ははかない」という意味で。

「常なるものはない」ということが「はかなさ」の代名詞のように。これが、だから厭離穢土、という言葉につながっていった。はかなく、きらわしいこの世に対して「真実は西方浄土にあり」と、あの世ばかりをひたすら欣求させるのは為政者。そして、これは民衆掌握のための騙(かた)りごとなのだ。

諸行無常の本来の意味は、人の世の現実をありのままに、色眼鏡なしに、事実をあるとおり見よ、ということなのだ。きれいなものはきれい、汚いものは汚い。ありのままに認め、ありのままに語れ、と。他人に対しても、そしてそれは自分に問いかけるあり方としても。「不垢不浄・不増不減」これがその意味だろう。

それを民衆にわかりやすく浄土へ行きたければ、この世を大事に」と僧侶は説いた。一見これは「この世はあの世への通過点」かのように思わせた。だから、これが為政者に利用された。が、本来はこの世を意志的に生きる仕方を宗教家は「方便」として述べたにすぎない。つまり、厳しいまでの現実確認、存在認識。これこそが仏教での「祈り」の意味であり、「悟り」の本質だろう。

民衆は日々の現象の中で、かけねなくありのままに生きてきたし、今も生きている。この世に絶望してみたり、この世の命の真実は「今ある」この一点のみ……と、生き甲斐に目を輝かせてみたり。日々うつろう二極のはざまの中で、「うろたえ」「嘆き」、そして、ときには「力強く」。

京都嵯峨野では、四季のうつろいの、この地らしい独特な彩りの中に、悲喜こもごもに過しただろう人の生きざまを、歴史の中のエピソードとして、様々、かいま見ることができる。

嵯峨野の散策。妓王寺をそのコースに入れるのは定番で、まだ学生か、いや、会社勤めを始めて間もないか、いずれ女性ばかりの数名のグループをよく見かける。愁いを含んだ一人旅らしき人もある。若いカップルの姿もよく見る。男ばかり・男一人、という姿は、たまにあったとしても、どことなし周辺の風景から浮き上がった感じなのは、竹林の静かなたたずまいがあるからか……。伊勢の斎王の野の宮があるためか……。あるいは平家物語の伝える「小督(こごう)」や「妓王」の話が、ここの風情にとけ込んで、笛の音か、琴を弾く爪音か、風音の中に女性のあわれさを奏でているようで、今生きる我が身の人生もそんな歴史の一こまかのように、ロマンにひたれるからか……。

入道相国はこのように天下を掌(たなごころ)の内に握ってみると、世間のそしりなど、はばかる感覚もなく、人が陰口たたくのもいっこう気にもとめず、気ままの限りの所行をくり返すのだった。

たとえば、近頃京中に名の知れるようになった白拍子の名人に妓王、妓女があった。評判にた

がわぬ妓王を一目見て以来、入道相国は妓王を邸宅から離さぬようになった。

そのため妹の妓女さえ世間から一流の扱いを受け、もてはやされて休むいとまもないようすだった。母親は、立派な家に住まうことができたこと、さらにその上に、自分の身辺が何かにつけて華やかな空気に包まれるようになったのを、この上なく喜んでいたのだった。

同じ白拍子仲間では、そねむものも多い。一方、これにあやかろうと「妓」の字を名につけるのが京中にはやったほどだった。

そうした富貴も三年目の頃、加賀の「仏」という白拍子が現れて以来、急激に妓王の周辺からは光が消えていくことになった。

世間で近頃評判になっていた「仏」は本来の美貌の上に、瞳には輝きを加えて、

「同じ遊び女なら、天下の入道相国様に召されるほどになりたい」

と、無謀にも西八条殿へ自分から出向いたのであった。

「妓王のある中で、どうして今一人必要があろうか。追い返せ」

と入道相国はすげなかった。そのことを聞いて妓王は、

「年端もいかない遊び女が、そのようにすげなくされては、あまりに不憫にすぎます。せめても一度その芸を見てから……」

と進言した。

通された「仏」は入道相国の前で、

「……御前（おまえ）の池の亀岡に　鶴こそ群れて遊ぶめれ」

澄んだ声で歌い、間よく舞った。この今様は、この場で見聞していた人々の目を驚かせたばかりではなかった。

このとき以来入道相国は、仏御前を身近に置くようになり、妓王に対しては、この仏御前を慰めるための舞いを舞わせるほどになったのだった。

妓王は、あるべきことがやはり来た、という思いだった。驚きはなかったが、悲しかった。そして、これまで入道相国のもとにあったとき、常に自分の控えの部屋となっていたお局の障子戸の陰に、こっそり、

萌えいづるも枯るるも同じ野辺の草いずれか秋にあはではつべき

こんな歌を書き残して、西八条殿から去ったのだった。

その後も、しばらくの間、入道相国からは幾度となく、仏御前の退屈を慰めるために館に参上せよ、との召しもあった。妓王はとうてい行く気にもなれなかった。

生活が苦しくなった母は、「お召しを断るとは滅相もない」と、妓王を責めた。妓王は母への孝行のため、出かける決心を余儀なくされた。

通された控えは、思い出のお局からは遙かに下がった、そまつな一部屋だった。

入道相国は「仏御前のために歌い、舞え」と命じた。

仏も昔は凡夫なれ　われらもついには仏なり
いづれも仏性具せる身を　隔つるのみこそ悲しけれ

泣く泣く妓王は二度くり返した。仏御前は入道相国の横に侍り、時に盃に酒を注ぎながら、これを見ていた。

仏御前の心はなぜか重かった。西八条殿へ、強引にも押しかけた時には内側から輝いていたのに、しかし、この日の瞳は決して澄んではいなかった。

妓王が呼ばれたその夜のこと、

「これは、あまりにもひどい扱いです」

仏御前は相国に思わず、そう言っていた。入道相国には仏御前のそんな言葉の意味がわからなかった。

妓王が涙を抑えつつ下がったあの日、仏御前は改めて召されていた。そのとき初めて妓王が障子に残した「いづれは秋にあはでは つべき」の歌を局の中に見つけた。これを読んで仏御前は全身を打たれたような気がしたのだった。これは妓王から送った新参への伝言に違いなかった。仏御前は、今こそわれは遊び女の第一、と思えるようになってから間もない頃から、なぜか自分の心にわだかまる暗い思いがあった。その真実が、たった今、何であったか、この歌によって知らされた気持ちになったのである。

妓王はその日の屈辱に耐えられなかった。その後、いっそ我が身を投げて……、と思った。ところが、「共に身を投げる」との母の言葉に、親の命を奪う五逆罪か、と思いとどまり、嵯峨野の奥の山里に、尼の身となって竹の折り戸の庵を結んだ。妹の妓女、そして母親もそれに従った。妓王は二十一になっていた。

それから幾日もたたない秋、周辺の木々の葉はもの哀しい紅の色に染まり初めていた。妓王・妓女、そして母刀自（とじ）、三人の尼は来世の極楽のみを頼み、弥陀の来迎だけを念じて、数珠の音ばかりを響かせて、日々、祈りを重ねる時を過ごしていた。そんなある夜、風もないのに折り戸がコトコト鳴った。

このあたりを、平家物語は突然七五調の調べに変えて、

……たそがれ時も過ぎぬれば、竹の編戸をほとほとと、うち叩くもの出で来たり……

と調子を上げて語り進める。

まさか、こんな夜、人里離れた竹の折り戸をたたくのは夜盗か、それとも厭魔（えんま）かと、合掌した手を休めず、かすかに開けてみると、戸の外にいたのはあの仏御前なのだった。

仏御前は、「在所はどこ、と尋ねましたが、なかなか見つからず、ようやくこの地で念仏しているとの噂を聞いて、やって参りました」と言いつつ、かぶり物を取った。その姿はすでに尼となっていた。

妓王はあまりの驚きに、「絶頂のあなたがなぜ?」と仏御前に問うた。

仏御前は妓王の残した歌に心を動かされた旨を述べ、絶頂に浮かれることのもろさと、はかなさを強く強く感じた、と語った。

そのときの仏御前はまだ十七歳にしかなっていなかった。

萌えいづるも枯るるも同じ野辺の草いずれか秋にあはではつべき

「どこに秋（飽き）に合わないような草があるでしょう。

必ず、秋（飽き）はどの草にもやってくるのです」

六十年目の伝言

鈴木　昭三

先日昔の海軍航空隊の仲間が、久びさに比叡山に集まりました。この会は二十二分隊会と言って、ずっと以前には隔年毎に集まっていました。それが二十年前頃から出席の顔ぶれも、毎回同じになり、その内に、一人欠け二人欠けして、だんだん淋しくなるばかりでした。分隊会の中では最若手と自負していた昭和生れの天宮も早七十七歳となり、今回も比叡山境内の石段や坂道もかなり苦痛になりました。確か四年前の時に当番から、会の世話をする方も、遠路出席する会員も、お互いに大変だから、今回を以って最後にしようと、申し出があって、残念ではあるがと皆了承しました。

それが今年の夏、日本国中が総選挙で騒ぞうしい頃、一通の往復はがきが届きました。

この秋は懐しい比叡山の紅葉を愛でながら一献酌み交そうではないかとあったのです。差し出し人は、二十二分隊会の終焉を提言した前回の当番でした。

そんなわけで再び開かれた二十二分隊会に、一人の見馴れない小柄な老人が現われたのです。

その日、予定の出席者は全員揃い、乾杯もすみ、さあこれから大いに飲もうと、皆その気になった頃でした。

この会の初会からの常連である三班員、長野県出身の杉坂と二谷、それに静岡県出身の天宮の三人は、例によって同じテーブルに並んで坐りました。

その老人は、バスを降りて、この会場がわからなくてと、握っているハンカチでしきりに顔を拭いました。

「私は、山梨県立韮崎中学校出身。滋賀海軍航空隊、第二十二分隊、第三班員。特攻要員で川棚に転出した、海軍一等飛行兵曹、大村昭平です」

大村はゆっくり申告をすますと、右頬をこするような海軍式の挙手の礼をしたまま、会場の面めんに視線をゆっくり移していきました。

「おお」

会場からどよめきが湧きました。

「ぶちゃ、ぶちゃじゃないか」

杉坂も二谷も天宮も、同じ三班員だった大村をあだ名で呼んで立上りました。三人は左右から背後から大村に寄り添い、自分達のテーブルに倒れこむように坐らせました。

すかさず当番は更めて乾杯の音頭をとりました。立ち上った大村は、深ぶかと頭を下げたまま、ハンカチで目頭をおさえました。

大村は、昭和二十年五月、第一回の特攻要員に応募し、福知山郊外の山陰線石原(いさ)駅のホームで、この席にいる二十二分隊員の帽振レに見送られて以来、六十年ぶりの生還だったわけです。

大村の少年兵時代しか知らない会場では、どのテーブルでも彼は引っぱり凧で、天宮達のテーブルに戻った時には、かなり酔い、呂律もあやしくなっていました。

「杉坂、二谷、天宮、そしてこの俺、この四人は、昭和十九年三月二十九日、丹波市の仮分隊で初めて会い、二十年五月十日、俺が特攻要員で石原(いさ)駅で、お前らに送られる迄、一年何カ月、何度も編成替えもあったのに、不思議にずっと一緒だった。あの仮分隊でやっぱり一緒でさ、俺の韮崎中学での先輩だった古谷太郎を覚えているかなあ」

「勿論」

杉坂も二谷も天宮もうなずきました。

「俺、今日の二十二分隊会には、今迄一度も顔を出してないから、今回もいつも通り、返事もしないでいたのさ。きのう韮崎の実家へ行ったら、近所の古谷太郎の妹と久しぶりに会ったのさ。そしたら、太郎兄さんの年忌を夏にやったのよって、言ったんだ。古谷太郎は、八十三分隊から、操縦で土浦へ行き、そこから特攻要員で俺より早くから川棚に来ていて、そこで会って話したんだ。二十年七月の始め、古谷の隊の出撃の噂のあった頃、仮分隊で親しかった奴等、今どうしているだろうかと聞いたから、俺はお前ら三人の名を言って、今も多分同じ班で、福知山の滑走路で土方作業しているよって。古谷の奴、急にかしこまってさ、あの三人にゃ、話したい事があるんだけど、もう遅いよな。貴様も直き死ぬ身だが、万にひとつ、生き長らえたら、宜しく伝えてくれって。それから半月もたたぬ間に、訓練中に殉職してしまった。古谷の宜しくっていうあり

きたりの文言だけど、それを聞く、杉坂も二谷も天宮も、夫ぞれ別べつの意味あいが伝わるのかも知れない。川棚にいる間、古谷と時たま話しするうちに、彼の言った宜しくの意味は、俺なりに理解もできたんだ。まさかこの俺が生きて終戦をむかえるとは思わなかった。昭和から平成の御代まで六十年、俺に託された古谷からの伝言さ」

大村はテーブルに八の字に伸ばした両腕の中に、顔を埋めてしまいました。

そんな大村を見つめながら杉坂が、

「古谷太郎がアゴを貰った時、びっくりしてしまって、ああ嫌な所へ来てしまったなと、後悔したよ。お前ら、どうだった」

「全くあれは凄かったよ。古谷脳震盪をおこしたんだよ、多分。杉坂も腹のあたりを蹴られて、ひどい目にあったな」

二谷はちょっとワインのコップに口をつけて、

「俺、今でも古谷を許せない事があるんだ、俺の思い違いかも知れんが」

「俺も。古谷には色んな思いがあるんだ」

天宮は二谷のように、許すとか、そんな事柄ではないのですが。

昭和十九年三月二十九日、天宮達が中学生の制服制帽姿で仮入隊したのは、三重海軍航空隊奈良分遣隊といって、奈良県山辺郡丹波市町にありました。兵舎は天理教の信者の寮を借り上げた畳敷きの和室で、町の東端の山裾の高台にありました。南向きの窓を覗くと、眼下には、歴史で

習った秀吉の聚楽台を思わす広大な建物群の、天理教本部が見えました。

この兵舎での二日間は、合格採用の為の最終検査でした。朝から、夕方巡検が終って毛布に入る迄、下士官や兵に、怒鳴られっ放しで、天宮達中学生は、只おろおろするばかり、身も心もくたくたに疲れ果ててしまいました。

「畜生、二年も経って見ろ、いばりちらしているあいつらを、片っ端からぶんなぐってやるぜ。俺達の進級は早いから、奴らをすぐ追い越せるんだ」

有明だけの暗い部屋の、少し離れた毛布の中から、威勢のいい大声を発したのは、古谷太郎でした。これが下士官達に聞こえて、又怒鳴られるんじゃないかと、上半身を起こして、顔を見合わせたのが、大村、杉坂、二谷、天宮だったのです。古谷と大村は山梨県、杉坂と二谷は長野県、天宮は静岡県出身であることを互いに知り合ったのです。

ここにいた約二百人は、他には、東京、神奈川が多くて、いずれも当時の横須賀鎮守府管下の中学生だったのです。

三月三十一日、この兵舎にいた二百名の大半の者が採用試験に合格しました。天宮達十二名は、昨夜帝国海軍の空母、赤城も加賀もミッドウェイで沈んでしまったと、衝撃的な秘密を洩らしてくれた一機曹に引率され、正式に入隊する兵舎に向いました。奈良街道を当時の国鉄の桜井線に沿って南に歩いている時でした。天宮の前を歩いていた古谷太郎が、後を振り向くなりぽつんと天宮の故郷の町の名を言ったのです。

「はい、そうです」

天宮は大村から、古谷は中学五年生と聞かされていましたから、丁寧に答えました。
「まさか」
古谷はちょっと口ごもり、その後照れ臭さそうに言いました。
「お前の町にある天宮旅館と、関係はねえよなあ」
「天宮旅館はぼくの家です」
「ええ」
古谷はとたんに両目を大きく見開き、服の詰襟の上に見えたのどぼとけが、ごくんと音のしたように動きました。古谷は一瞬立ち止まりました。
「行進中、私語はやめろ」
先頭の一機曹が振り向き、怒鳴りました。
正式に入隊する第四十四兵舎は、九州の昔の国名のついた寮でした。瓦を乗せた隊門の前で、一機曹は首に掛けた号笛を鳴らし、
「歩調トレ、仮分隊十二名」
号令を掛け、衛兵詰所を通り過ぎ行進はとまりました。庭木の陰から白い事業服の二人の下士官が現れました。二人共小脇に黒い紙挟みをかかえていて、一機曹に向って、片手を肩のあたりで止めるとパット掌をひろげました。略式の敬礼で、三人は知り合いの様子でした。
下士官は一曹と二曹で、一機曹は、彼等に小声で言ったのです。
「手荒くいい女」

そんな風に、天宮には聞こえました。緊張していた中学生達も色気づく年頃でしたから、下士官達の会話の意味もおぼろ気ながらもわかりました。ごく自然に中学生達の気分も顔もほころんだと思います。
一機曹が不意に中学生達を振り向き、一番手近かにいた背の高い古谷太郎の顔を、背のびするように、のばした拳でなぐったのです。
「にたにたすんな、貴様ら」
古谷太郎は、真横に二米ぐらいよろけると、立ち木の倒れるように、地面に両手をつきました。
「古谷大丈夫か」
突然杉坂が列から飛び出ると、横たわっている古谷太郎の傍にかがみ、肩を両手で揺り動かしました。
「ばかもん。娑婆っ気出すな」
二曹が杉坂の太股のあたりを、片足で蹴り上げました。鈍い音がしました。
「いてえ」
悲鳴を上げた杉坂は、仰向けに古谷太郎の背中の上に倒れ込みました。
一機曹は中学生達には見向きもしないで無言で帰ってしまいました。二人の下士官が名簿の名を呼びました。大村、杉坂、二谷、天宮は八十四分隊、古谷太郎を含めて残り八名は八十三分隊に決まりました。
夫ぞれの下士官の後に従って別れる時、古谷太郎は天宮達に、片手を上げ照れくさそうに笑顔

をつくりましたが、腫れた下唇が切れていて、白い歯が赤く染まっていました。
翌四月一日、天宮達は憧れの七つ釦、つまり濃紺の一種軍装で、天理外語のすぐ近くの広場で、入隊式が行われました。
海軍第十四期甲種飛行予科練生ヲ命ズ
海軍二等飛行兵ヲ命ズ
ずっと後になって復員する時に渡された考課表に、この様に記されていました。
六月に入ると天宮達練習生は、搭乗員としての適性検査が始まりました。操縦員と偵察員の二つの専科に分かれるのです。全ての科目の試験が始まり、緊張の連続で心身共に、疲れきっていました。そんな練習生を、班長達は申し合わせたように、急に厳しくしごき始めました。それは、班長達の面白半分の遊びのような気もしました。他の班や分隊より成績が悪いと言う理由で通称アゴは日常茶飯事で、巡検後は毎夜のようにバッターを貰いました。下士官達の悪趣味と悪知恵の餌食にされたのです。
練習生達の毎日は、戦々恐々、疲労困憊、神経衰弱気味で、日中暇を盗んで居眠りする者も多く、異常な社会でした。夜の毛布の中だけが、唯一の自分だけの世界でした。
この試験の最終の仕上げは、易者の出番だったのです。名前を呼ばれて入った薄暗い部屋には、初老の男が一人机に向っていて、練習生は側の下士官の号令で、正面を見たり、掌を代る代る机の上に出して、終わりでした。易者は練習生の寿命をみるのだそうで、寿命の短い者が操縦に決まったそうです。大村、杉坂、二谷、天宮の四人は揃って希望通りの操縦員に決まりました。

所で海軍は、噂がよく飛ぶのです。如何にも誠しやかな話も、後になってデマだったといつもだまされてしまいました。尤も海軍では、予定ハ未定ニシテ屢シバ変更スル事アリと教えられていましたから、練習生達は、予定も余り信じなくなっていました。噂などはつまる所、希望的観測だったのです。
ある日当直訓練生が本部から戻ると、本部の黒板に、十四期操縦員土浦転勤と書いてあったと言いました。
その翌朝の課業整列の時に八十三、八十四分隊長兼任の特務大尉が、昨日の当直練習生の話を裏書きするような事を発表したのです。
「いつ何ん時、いや明日にでも転勤命令が出ても、あわてぬように、身辺整理をして置け」
天宮達はその日から、衣嚢と言う軍装や衣類の全てを入れてある黒い麻袋の中身を整理し始めました。軍から公に支給された衣類を官品と称し、その員数は常に過不足のないように、班長の点検を受けていましたが、今回は転勤で特別ですから、いつもより念入りに員数を当たりました。班長からは、員数の足りない品は、各自の責任で揃えるようにと命令されました。天宮は最近靴下を一足盗まれていました。隣の八十三分隊の奴の仕わざと目星をつけて、物干場へ取り戻しにいったのですが、向うもちゃんと警戒していて、目的を果たせませんでした。夕食の時班長が言いました。昔の話だがと前置きして靴下は、鋏で縦に切り裂いて上手に並べれば一足が二足に見えるかも知れない。それで検査がうまく通った奴もいたよ。
天宮は早速班長の話を真似てみました。

六月下旬の、外出を明日にひかえた土曜日、温習後の掃除を終えると、当直練習生が本部で見た情報を伝えました。十四期操縦員の土浦転勤は、来週の火曜日と書いてあったそうです。当直練習生が同じ三班員だったのでこれは確実だと天宮は思いました。

土曜日の夜、巡検を待っている時に天宮の隣の大村が、毛布の中で寝言を言ってしまったのです。

「天宮、そのゴミ早くぶちゃってくれ」

その部屋の三班員は、毛布で顔を隠して笑いをこらえました。ぶちゃるは、韮崎付近の言葉で、捨てると言う意味で、それ以来、大村はぶちゃと呼ばれるようになりました。

巡検後も天宮は、明日は奈良最後の外出だから、東大寺の山門あたりで写真をとり、それを写真屋に故郷に送って貰う時に、天宮の近況報告の手紙を同封して貰う事を思いつきました。操縦員に決まって、土浦に転出する事など文章を考えている中に眠ってしまいました。

天宮達のいる四十四兵舎は、真中の玄関を境にその半分ずつを八十三分隊と八十四分隊が居住していました。分隊は夫ぞれ二百人で構成されていましたから、この兵舎一棟で四百人が生活していたのです。

八十四分隊は左半分で、庭に面した窓際に広い廊下が走り、その突き当たりが厠、つまり便所でした。この廊下の右側が畳敷きの日本間で、玄関に近い方から、班長達の居住する教員室と呼ばれる部屋で、続いて一班から六班までの練習生達の居住する部屋が割当てられていました。

天宮達十人は教員室から四番目の部屋で生活していました。夜全ての課業が終ると、桜井線の

見える西側の窓から、廊下に向って部屋の真中に、脚を畳んだ食卓を一列に置き、その左右に肋骨のように、寝たのです。堅い食卓が枕がわりだったのです。部屋の入口の建具は全部取りはずしてありましたから、部屋の中はいつでも廊下から丸見えでした。天宮は廊下から見て、最も遠い窓際の、大村の次の二番目に寝ていました。

教員達の出入りする、たてつけの悪いガラス戸の音が時どき眠りを遮断しました。練習生の操縦、偵察の編成替えの書類の作成で、班長達は毎夜遅くまで仕事をしていたのです。班長達が厠へ往復するスリッパの音も耳につきました。天宮はふと彼の右半身が何かに押されているように思いました。隣の大村は寝相が悪くて、天宮の方に転ってくることがよくありましたから気にもなりませんでした。教員室のガラス戸の音がして、班長の非常にゆっくりしたスリッパの音が聞こえました。毎夜のことですが、班長達は懐中電灯で照らしながら、各部屋の練習生の数の確認に廻るのです。スリッパの音が二番目か三番目の部屋の前あたりに近づいたと思われた時でした。天宮の毛布の右側が跳ね上がって、誰かが抱きついたのです。大村の奴、寝ぼけやがって、天宮はまだそう思いました。

「たすけてくれ」

突然、天宮の胸あたりで男の声がして、右腕が持ち上げられ男の頭が脇の下に入り込みました。これはもう大村じゃない。異常なことだ。

天宮は眠気の混ざった朦朧とした意識の中で、近づいてくる班長に声を掛けようと考えました。

ううと出かかった声を、男の掌が押さえました。

「た、たすけてくれ」
生暖い息と共におし殺した男の声が首筋あたりにして、同時に油を吸った埃のようなにおいが鼻をつきました。
教員室のガラス戸の動く音が、又しました。スリッパの音が廊下に出て、隣の部屋の前あたりで止まりました。話し声が聞こえます。一人は先任班長の声です。
廊下に二人の班長の声がして、天宮の不安な心が、急に薄らぐのを感じました。
二人の立ち話は、ゆっくり歩くスリッパの音と共に、天宮の部屋の天井に懐中電灯の丸い光芒を二、三回動かしただけで、次の部屋に移動したようです。天宮に抱きついている男の鼓動がやや遅くなったようでしたが、それでもそのままじっとしていました。二人の班長の音は厠(かわや)で一旦消えましたが、再びこちらにゆっくり戻ってくるのには暫く時間はかかるからこのままの状態が続くに違いない、そんな事を考えました。天宮は両目を閉じたまま、油を吸った埃の臭いは男の体臭だと気付きました。はてな、この体臭は、どこかで嗅いだことがあるぞ。いつだったか、どこであったか。子供の頃であったか。誰であったか。天宮は今の異常事態を忘れて、この臭いの詮索を始めてしまいました。この詮索は、不思議なことに、楽しさを伴って徐じょに気分は安らかに、更に深い眠りに誘われてしまったのです。
天宮は夢をみました。
東海道線の駅のホームは、天宮の子科練入隊を見送る、親戚や、中学校の同級生でごった返していました。入隊者だけの特別列車に乗り窓をあけると、昔子供の頃天宮旅館にいた料理人の兼

さんが外から握手をしました。
「戦争で死んじゃいかんよ。どこかに隠れて眠っているのがええよ」
天宮はうなずき、列車が動き出しました。
兼さんは天宮の手を離さず、ホームを駆け出しました。列車はホームを過ぎ、もう三十分にもなり、天竜川の鉄橋の上なのに、兼さんは天宮の手を握ったままでいるのです。これはただ事ではないと、天宮は大声で兼さんの名を呼びました。
「天宮、おい天宮」
大村が天宮を揺り動かしていました。
「もう総員起し、五分前だぞ」
夜が明け、その日曜日の外出は、八十四分隊だけ中止となりました。同じ分隊の二谷一郎の軍帽が紛失したためです。朝食後分隊は全員で兵舎の内外、厠の便槽まで調べましたが見つからず、昼食も夕食も止められ、巡検後総員バッターを貰いました。
翌翌日の火曜日、隣の八十三分隊の操縦員が、土浦航空隊に転出しました。朝食後隊門前の練兵場で整列している八十三分隊の偵察員と八十四分隊の天宮達の前を、八十三分隊操縦員が行進して来ました。古谷太郎が笑顔で、
「やあ、お先に」
片手を上げました。
古谷太郎を除いてこの操縦員達は、一年後の二十年六月土浦の空襲でその大半がやられてしま

うのです。
その年の八月初旬に天宮達操縦員は、琵琶湖西岸で比叡山の麓に新設された滋賀航空隊に転出しました。今回も大村、杉坂、二谷、天宮の四人は二十二分隊で而も偶然としか言いようのない同じ三班員だったのです。
十二月七日、東南海地震で天宮の故郷静岡県西部は、甚大な被害を受け、天宮の父も亡くなったのです。父は、軍務に支障をきたしてはいけないから、知らせるなと、遺言したそうです。
翌二十年二月に入ると、分隊士から正式の予定が発表されました。それによりますと、三月末日、飛行予科練習生課定を終了し、転出地は目下未定だが、飛行練習生課定に移る。その間三月十五日から二泊三日の休暇を実施する。
処が海軍の予定はやっぱり未定でした。三月十一日の夕食が終ると、突然に、天宮達に、士官用の紺色のゲートルと地下足袋、それに真新しいスコップ一本が手渡されたのです。それからが大変でした。夜を徹して、天宮達は転出に備えて身辺整理を命令されました。翌朝まだ真暗な中を隊内を縦断している江若鉄道の引き込み線に、停車している客車と貨車に乗せられたのです。行き先も目的も明かされないままでした。天宮達の乗った客車の窓は、シャッターがおろされて、外を見てはいけないと命令されました。結局客車から降ろされたのは、山陰線の石原(いさ)駅でした。駅のホームも、点在する民家も、周囲の山やまも、みんな真っ白な雪景色でした。
三月十日は東京をはじめとして、日本各地の主要都市の大空襲で、天宮達の予科練教育課程は中止となり、二泊三日の休暇もおじゃんになったわけでした。天宮達がスコップを銃のように肩

にして、雪路を歩いて着いた所は、京都府天田郡西中筋村大字土師(はじ)で、松林の中のバラック兵舎でした。この日から八月三日まで、西中筋村を流れる由良川の河岸段丘を崩して、マカダム式という、砂利と金網の滑走路の土木作業が続くのです。
五月三日、天宮達の初めての特攻要員の募集に応じた大村を、石原(いさ)駅に送りました。大村は五月一日にさかのぼって、二等飛行兵曹に任官しました。大村の出発の前夜、甘い梅酒を飲み、大村を囲み、杉板と二谷と天宮も海軍へ入って初めて、人前で泣きました。国の為とは言え、死ぬ大村がかわいそうでした。
六月になって間もなく、天宮達の二十二分隊は切り込特攻要員になっていて、七月頃にここを転出するらしいと噂が立ちました。その頃は、第一回の大村達の特攻要員の募集に続いて三回もあり、練習生の乗ったトラックが由良川に転落して大勢の死傷者が出たりして、最初二百人だった二十二分隊員も百名ちょっとに減っていました。天宮達も遅かれ早かれ死ぬ時は必ず来るのだと、内心覚悟は決めておりました。ある日、分隊長から、家族との面会を許可すると突然話がありました。
一週間後、遠い静岡県から母と姉が来てくれ、福知山駅前通りの金物店の二階を借りて会いました。切符が買えなくて、家族が面会に来れなかった杉坂が一緒でした。
その時母の口から父親の死を初めて聞かされました。この春地震の後片づけも一段落し、父親の法事をした時に兼さんが顔を出したそうです。天宮は一年前の夢に出た兼さんを思い出しました。兼さんは天宮の幼児の頃を話したそうです。天宮は夜はいつも兼さんの蒲団で眠った記憶が

ありました。
母は言いました。
「お前が、朝の早い兼さんの蒲団から戻ってわたしんとこへもぐり込むと、そりゃ大変」
「なぜ」
天宮の初めて聞く話で、笑っていた姉が答えてくれました。
「あんたの全身から、兼さんのにおいがぷんぷん。兼さんはひどいわきがでね、家では有名だったのよ。でもさ、そんな事より、兼さんの息子さんも予科練で、丹波市へ入ったって言ってたわ」
兼さんは山梨県によくある名字で、古谷兼吉、大正の末、ハルさんと言う娘さんと天宮旅館に駈け落ちして来ましたが、ハルさんはすぐに連れ戻され、兼さんは一人で、料理人として天宮旅館に勤めたのです。昭和十年頃兼さんとハルさんの縒が戻り、甲州に帰りました。駈け落ちの時ハルさんは兼さんの子を宿していて、その子が予科練と言う話でした。兼さんの息子の予科練は、奈良街道で天宮旅館の名を口にした、古谷太郎に違いないと天宮はすぐに思いつきました。
天宮達の面会室から外に出た杉坂が、急いで戻り、二十二分隊員は面会が終り、福知山駅前に整列していると、告らせてくれました。
時計は面会時間終了の午後四時ちょっと前でした。天宮は用意してあった小さな紙包みを、そっと姉に渡しました。中身は天宮の切り取ってあった爪でした。

天宮は海軍での一年四カ月の中から、古谷太郎にまつわる事を思い浮べて見ました。
「今夜はこれを俺と思って飲んでやってくれ」
大村はワインの新しい瓶を食卓に置くと傍の布団の中に一人で寝てしまいました。
「俺が皆に迷惑をかけてしまった軍帽紛失事件の犯人も、その前の夜中、天宮の毛布に忍び込んだ奴も、古谷太郎に違いない」
二谷はテーブルの上の箸袋を縦に開くと、箸の先に醤油をつけ、二谷一郎と書きました。
「いいか、この二に縦棒一本と下の一を口にすれば古の字だ。一に人と点一つを加えれば、太郎の太だ。土曜日の夜中に、俺から盗んだ軍帽の天井の俺の名に、筆を加えて古谷太郎に書き変えてしまった。隊門の前の見送りで、天宮には声を掛けた古谷太郎が、俺と目が合うと、さっと横を向いたのさ。だから奴がくさいと六十年たった今でもさ」
「二谷のくさいとは違って、臭うくさいの話だけど」
杉坂は古谷太郎の体臭を思い出したと言いました。
「丹波市で分隊対抗の柔道大会の折、俺は古谷太郎の肩固めで負けたんだ。負けた原因の半分は古谷太郎の強烈なわきがだったんだ。昭和二十年六月、福知山で天宮のお袋さんとの面会の時の話、天宮お前は小さい時兼さんの臭いで眠っていたのさ。土曜日の夜中の男の臭いで、天宮は幼児の時の記憶を思い出して、眠ってしまい、その連想で兼さんの夢を見た。つまり兼さんのにおいを持った男は、兼さんの息子の予科練で、古谷太郎に間違いないと思う」
「俺も天宮の毛布に入った奴は古谷太郎だと断言できるよ」

二谷は自信ありげに言いました。
「あの夜、つまり土曜の夜、古谷太郎は、俺と杉坂、その隣の部屋に大村と天宮が寝ている事を知っていたのだ。俺の軍帽を盗んで廊下に出て、人に会ったら、隣の大村か天宮の毛布に隠れる。古谷太郎がどうして自分の軍帽をなくしたかはわからないが、計画通り、まんまと俺の軍帽を手に入れて、翌日土浦に転出した。その共犯と言うか、手引きをしたのは、ここにいるぶちやだと、そんな気がするのさ。古谷太郎は長崎の川棚で、ぶちやに懺悔の気持で軍帽事件を話したと思う。ぶちやにしてみれば、その事件に加担した良心の呵責で、俺達仮分隊以来の三人に会いたくなかった。だが、分隊会の通知には、これが最後の会だとある。川棚での古谷太郎の心境で、軍帽事件を俺にも、天宮にも告白するつもりだったんだ。伝言は、古谷太郎だけじゃなくて、ぶちや自身のでもあったんだ。もう俺達も八十歳近い、余命もいくばく。大村は全部吐き出して、二十二分隊の少年兵当時の清純な気持に戻りたかったんだよ」
杉坂も天宮も二谷の話にしんみりしてしまい、ワインのコップを口にしても余り飲めませんでした。
「古谷太郎はな、天宮は弟かも知れんって、言ってたぜ」
寝ていたぶちやが、大声でこう言いました。
天宮は、ぶちやの寝言かと思いました。
「今のも古谷太郎の伝言かい」
杉坂の問いに、ぶちやは何も答えませんでした。

まんじゅう奉公

瀧澤　中

一

尾張の桶狭間で、今川義元が織田信長に敗れて命を失ったのは、三年前のことであった。
それまで今川家に押さえつけられていた三河・松平家に、ようやく陽が当たりはじめた矢先のこと。
その三河で、一向一揆が起きた。
きっかけは何ということはない、松平（後の徳川）家康の部下が、寺の米を奪ったという、戦国時代にはどこにでも転がっている話である。
しかし奪ったのが、一向宗の寺の米、というのがまずかった。何と言っても一向宗は戦国最強の熱狂的宗教集団。
「寺の聖域を侵した」
と、信者たちがいきり立ったのである。

松平家康の家臣の多くが一向宗の信者であったために、松平家は真っ二つに分かれて、およそ五カ月間にわたって内戦を繰り広げた。

本編主人公の大久保藤五郎忠行は、この内戦で負傷する。負傷したために、江戸という町が世界に冠たる大都市になることができたのだが、それは遥か先の話。いまは、藤五郎とその妻、志保の出会いの話からはじめたい。

藤五郎は、ちょっと変わった男であった。

身の丈は、いまで言えば一八〇センチ近くあった。顔が馬のように長く、「お馬どの」というのが藤五郎のあだ名。出来合いの兜などをかぶると、まるで大人が五月の端午飾りを載せたように不釣り合いで、それゆえに既製の兜は使えず、いつもボロボロになった愛用の錆だらけの被りものをしていた。

気持ちの優しい男でもあった。

ひまが出来ると、近所の子どもたちを集めては、遊び相手になってやった。後に「天下のご意見番」となる大久保彦左衛門も、幼少の頃、藤五郎に随分と可愛がられていた。

妻は志保、と言った。

「なぜ志保さまが、あの『お馬』どのに」

と周りから不思議がられるほどの器量良し。瓜実顔で目は細いが温かみがある。肌は雪のように白い。聡明さと優しさを兼ね備えた美しい眉が、富士額を彩っていた。西三河の酒井家に連なる家の出である。

藤五郎の家柄も悪くない。「三河大久保党三十六騎」の一人として、松平家の支柱の一本を支える家に生まれ育った。

藤五郎と志保が所帯を持つ事になったのは、大方の見方と違って、志保の方が藤五郎を好きになったからである。

藤五郎は馬面をしているせいでもあるまいが、馬を操ることが実にうまかった。どんな暴れ馬も藤五郎の手にかかると、たちまちおとなしい名馬へと変身する。悪口を言う連中は「馬は藤五郎を人とは思わぬ」、つまり同じ馬どうしとして見るから、馬もおとなしく藤五郎を乗せるのだ、などと噂をしていた。

志保は一度、藤五郎が城の馬場で荒馬を手なずけている現場を見たことがあった。

他の武将たちが、鞭で叩いたり餌をやって馬の歓心を買おうとするのに対し、藤五郎はまずそっと馬の耳元で何事かをささやき、それから馬の周りをぐるり、と一周する。

続いて今度は、馬の正面に立って、じっと馬の目を見つめる。

動物はなんでもそうだが、目を合わせる行為は威嚇するのと同じである。だから、荒馬を調教する時に正面から馬の目を見るなどというのは、正気の沙汰ではない。

次の瞬間、馬が前足で藤五郎を踏みつぶす、と誰もが思った。が。馬はじっと、藤五郎のことをみつめ続けている。

志保のいる場所は馬の斜め後ろ側であったから、丁度藤五郎の顔が見えた。

（なんというお顔を……）

志保は、いっぺんで藤五郎の顔に見とれてしまった。

むろん、美男子ではない。否、醜美で言えば、醜いたぐいの顔である。が、藤五郎の目は、まるで馬の、あの吸い込まれるような漆黒の瞳と同じ目をしていた。そして、一点の曇りもない、藤五郎の心の中をそのまま現しているような、穏やかで美しい瞳であった。

志保は半ば押しかけ女房的に、藤五郎の妻になった。もちろん、藤五郎に異論はない。

結婚しても藤五郎の性格はまったく変わらなかった。穏やかで優しい夫であった。ただし、いくつか結婚前には知らなかった藤五郎の秘密を、志保は知る事になった。

と言っても、他に妾がいたとか、実は別人格であったとか、他国と通じた裏切り者とか、そういうことではない。一見大雑把に見えて実はきれい好きであったこと。そして、酒よりも甘いものに目がない、ということである。

いくさの時には、三河武士たちも厄落しの意味を込めて酒を呑む。が、藤五郎は呑む真似だけすると、

「志保、アレを頼む」

と言って、まんじゅうをにこにこしながら頬張った。

兵糧用に持っていく食糧にも、必ず甘味を携帯した。他の武将も、疲労回復のために甘味を持っていくが、せいぜいが甘酒と小麦粉を練った酒まんじゅう程度であった。が、藤五郎はちまきや有平糖、豆アメや胡麻餅など、その兵糧袋はまるで菓子屋の出前のような有り様であった。

二

冒頭で触れた三河の一向一揆。大久保党は家康方の主力として岡崎城を守るために、和田砦に籠もった。この時も藤五郎の兵糧袋には、甘味類があふれていた。

ある夜。一揆勢の動きを緊急で岡崎城に知らさなければならなくなった。

大久保党三十六騎の中で最も馬の扱いがうまく、家康の信頼も厚い藤五郎に、その役目が与えられた。

「ひとつ、ひっかけてゆくか」

長兄の大久保忠俊が、盃を渡そうとしたが、

「いいえ兄上、わたくしは」

と、ちょっと困ったような顔をして頭をかいた。

「おう、そうじゃった。すまぬ」

藤五郎は酒の代わりのまんじゅうを、兵糧袋から取り出して口に入れた。

「しからば、頼んだぞ」

長兄の大久保忠俊から伝言を託され、藤五郎は強くうなずくと「それッ」という掛け声と共に、夜陰に紛れて馬を砦の裏手から走らせた。

ほんの三町も行ったところだろうか。

もう岡崎城のかがり火も間近に見えてきた。岡崎城に難を逃れている妻の美しい顔がチラと思

い浮かんだ次の瞬間。

「あッ」

突然、馬がヒヒーンと絶叫に近い鳴き声を飛ばしながら、前足を畳み込んで倒れた。その勢いで藤五郎も地面に叩きつけられた。

「なにやつッ」

倒れながらもスラリ、と刀を抜いた。普段ののんびりとした藤五郎からは想像もつかない動きである。一方、襲ってきた連中はひるみもせずに、ジリジリと間合いを詰めてきた。

「恐れるな、相手は仏敵ぞッ」

敵の中のしわがれ声が藤五郎を「仏敵」と言った。明らかに一向一揆勢である。藤五郎は近寄る一揆勢の人数を目で数えた。

一人、二人、五人、十人。

実際には、二〇人近くが藤五郎を囲んでいたが、暗さも手伝ってそれ以上は見えない。

「やれ」

また、しわがれた、嫌な声がした。落ち着きはらった命令を聞いて、一揆勢の一人が「ざっ」と、袋から粉のようなものを藤五郎の顔面めがけて投げつけた。

「うわっ」

それは灰であった。暗闇で敵の動きを見据えていた藤五郎は、両の眼球にまともに灰を受けてしまった。思わず刀を離して両手で目を覆ったその時。

「それッ、今だっ」

しわがれ声が小さく早口で言うと、数人の者が藤五郎の両腕を押さえつけ、あとの数人が藤五郎の左足を抑えた。

奇妙な感じであった。殺すにしては手間をかけすぎている。秘密を吐かせる拷問ならば一揆勢の陣屋に運び込むはずである。

藤五郎は自由になる右足を蹴り上げて抵抗を続けた。と、その右足首を一人が押さえつけ、藤五郎の臑当てを外した。藤五郎の右足はまったく無防備なまま、肌を殺気立った夜風にさらした。完全に藤五郎が動けなくなると、ざざ、ざざ、とさらに大勢が近づいてくる。

「やれ」

またしわがれ声がした。そして命じると同時に、いまや盲目となった藤五郎の右膝の皿に、ぐしゃり、という音と共に、稲妻が落ちたような衝撃が走った。

「うわぁ」

声を上げたのは藤五郎ではなく、どうやら藤五郎の膝頭に大きな石を叩きつけた者の声であった。

藤五郎の膝頭は、まるで打ちつけられた粘土のように平らになり、血が飛び散った。

藤五郎はその一撃を、声を出さずに堪えたが、堪えたことで逆に血が頭に上り、つづいて意識が薄れていった。次の者が脛に斧を振り下ろそうとした時、藤五郎は気を失って体から力が抜けた。抜けた拍子に、腰に結わいていた兵糧袋が「どさり」、と地面に落ちた。

中から、胡麻餅や焼きまんじゅう、砂糖貝などがこぼれ落ちた。

藤五郎の足めがけて斧を振り上げた一揆勢の若い男は、それがわらべの食べる菓子類であるのを目にし、さらに藤五郎の特徴的な馬面を見て「あっ」と言い、斧を慌てて捨てた。

男は子どもの頃、藤五郎に遊んでもらった百姓のせがれで、小作農であった男は、めったに口にできなかった甘味を、いつも藤五郎から分けてもらっていた。

一揆勢は、男が斧を捨てたことで何となく拍子抜けしたようになり、やがて散らばるようにその場を立ち去った。去り際、男は周囲に仲間の一揆勢がいないことを確かめてから、手にしていた手拭いで気絶している藤五郎の太股を縛った。こうしておけば、これ以上の出血は抑えることができる。

宗教によって熱狂してはいても、男は幼い日に藤五郎からもらった菓子の味は忘れていなかった。

瀕死の藤五郎が発見されたのは、襲われた翌朝のこと。五日間は意識が戻らず、医者も見放したが、妻の志保だけは、

「藤五郎さまは絶対に死にませぬ」

と気丈にも言い放って、一睡もすることなく五日間看病をし続けた。

やはり、止血の処置が功を奏した。

藤五郎は何とか一命を取り留めることができたが、その右足は棒のようになって、二度と普通に歩く事は出来なくなった。

一揆勢が藤五郎の右足を狙った理由は、実に陰湿なものだった。

戦場で足を負傷した者を安全地帯まで運ぶのは、最低で一人、大柄な者であれば二人がかりでなければ移動できない。

一人の武将を負傷させることで、さらに一人の健康な戦力を奪い、ことによってはそれ以上の人数を戦闘から外すことができる。こうした指示を出したのは、家康の家臣でありながら一揆勢の首領の一人になっていた本多正信であったという。

三河の一向一揆は、発生から五カ月で終結した。

隣国・駿河の今川氏真が不穏な動きを見せ始めたからである。もはや、内戦をしている場合ではない。

余談だが、家康と一向一揆との和解条件の一つに、「一揆側についた家臣の罪は許し、本領を安堵する」という一文があった。しかし本多正信だけは許されず、そのまま正信はしばし歴史の闇の中に消えることになる。

三

あれから十年。

大久保藤五郎忠行は、棒のようになった右足を引きずりながら、桶に水を満たして、運んできた。

それはわたくしが、と志保がいくら頼んでも、
「なあに、これくらいは大丈夫」
と、無理に笑顔をつくって水を汲みに行く。
藤五郎は役立たずと思われたくない一心であった。むろん志保がそんなことを思うはずはないが、男としては、何も出来ないというのは辛いことである。
時折襲ってくる傷の痛みと同時に、藤五郎は、こうした心の傷も負っていた。それは日々強く厳しくなっていた。
藤五郎が負傷した三河一向一揆。これが終結した永禄七年というのは、後の世から見れば徳川家康が天下を取るために、まさにスタートラインに立ったその時と言ってよい。宿敵・今川氏真を討つために遠江へ侵攻したのは永禄十一年。織田信長と同盟を結び、越前征伐、姉川合戦を転戦し、三方ヶ原で武田信玄相手に惨敗するなどの出来事は、まさに一向一揆との戦いが終結してから十年以内に起きているのである。
その、徳川家康の天下取りのための戦い、いや、生き残りのための戦いに、藤五郎は参戦することが叶わない。
大久保党の人間は、十年前、一向一揆での藤五郎の勇姿を知っていて、決して藤五郎を見下しはしないが、時は残酷である。藤五郎の負傷の原因はいつの間にか忘れ去られ、藤五郎のことを「役立たずの米喰い虫」と蔑む者まで出てきた。
（無理もないのかもしれない）

と、志保は思っていた。
織田信長と同盟を結んだ徳川家康は、よく言えば信長の忠実なる盟友、であったが、実態は織田軍の先鋒として多量の血を流す立場であった。
つまり、多くの徳川の家臣が織田のために命を失っていった。
そんな中で、戦いもせずノウノウと生きて、まるで隠居料のように禄を受けている藤五郎を、快く思わない連中がいても当然だと思うのだ。
この十年、一度ならず二度も三度も、藤五郎は家康側近を通じて家康に家禄返上を申し出た。戦いに出られぬ身となって、何の役にも立たない自分を養うことは、自分が辛いだけではなく、家康にとっても不都合なことであると考えたからだ。
しかし家康はそのたびに、
「藤五郎の足が治るまで、わしは藤五郎の面倒を見る」
と言って聞かなかった。
家康には、若い頃から極端な二面性がある。時に冷酷に人を裏切るかと思えば、情にもろく、演技ではなしに家臣のために涙を流すこともある。どちらも家康の本性であって、藤五郎の場合は、家康の情の部分に触れたということであろう。
そういう家康の気持ちは、志保にとってもうれしいものだった。が、その反面では、
（なぜ藤五郎さまの苦しみをわかって下さらないのか）
という歯がゆさがあった。

禄を返せば、浪人生活か大久保本家の食客になるか、あるいは農民、商人になるしかない。いずれも、不自由な身ではつらいものだが、少なくとも、徳川家の同僚から冷たい視線を浴びせられることはない。

藤五郎が何より辛いのは、同僚からの視線であり、自分が忠義を励めず、きょうも戦いで死にゆく同僚たちを見送らねばならないことである。

禄を食み続けても、何も役に立たない。いったい自分の生きている意味とは何なのか、真面目な藤五郎のことゆえ、きっと毎日懊悩しているのであろうと思うと、志保は切なくて切なくて、仕方がないのだ。

思わず涙を流すと、

「すまんな、志保」

と、藤五郎は結婚した頃と変わらぬ優しい口調で、逆に志保を慰めてくれる。

こんな良い人が世の中にいるものだろうか。

志保は、たとえ他人から役立たずと罵られようと、自分だけはずっと藤五郎を尊敬し、藤五郎のために生きようと決心していた。

だが。そんな自分の心を思うにつけ、

（藤五郎さまは、何を生き甲斐に生きていかれるのか）

と、つい考えてしまう。もちろん藤五郎にとっての最大の生き甲斐は、家康公に忠義を尽くすことである。だが戦乱の世にいくさ働きの出来ぬ夫が、どうやって忠義を尽くしたら良いのか。

志保の面白いところは、問題を思い悩むというのではなく、解決するための方法を考えるという癖があることだった。寺子屋のまねごと、手先が器用であったから、武具の修繕など、いくつかの仕事を藤五郎にすすめてみたが、どれもそれなりにこなすものの、「禄を戴きながら小遣い稼ぎか」という陰口を叩かれ、藤五郎も志保もつい諦めてしまう。

お金が欲しいのではない。

やり甲斐、生き甲斐が欲しいのだ。いくさ場以外で主君に尽くす道を得たいのだ。

しかしそんなことは、毎日白刃の下をくぐっている連中にとって、ただの世迷い言にすぎなかった。

結局、藤五郎は好きな甘味を手慰みのようにつくっては、志保や近所の子どもに食べさせるような日々が続いた。

藤五郎は自分が甘味を大好きなだけに、工夫をしながら様々な菓子をつくる。料理はだめだったが、甘味だけは志保の及ばぬものであった。

（まさか、「まんじゅう屋になって」とは言えないし）

藤五郎のつくった、胡麻をまぶした飴を餅で包んだ菓子を頬張りながら、

「藤五郎さまの菓子は、京の菓子司がつくる甘味よりも、ずっと美味しゅうございます」

と志保は素直な感想を言った。好きこそモノの上手なれ、とはよく言ったものだが、禄を食んでいる以上、菓子屋になるわけにもいかない。

そんなある日のこと。

志保は面白い話を耳にした。

顔見知りの、城に出入りしている商家の妻が、世間話のついでに、「ご存知でいらっしゃいますか？」と、さも（あなただけにお教えします）というような勿体ぶった言い方で、家康の秘密を語った。

秘密、というにはあまりにもつまらないことで、他の人間が聞けば「なんだ、そんなことか」で終わる話だった。

その女の家は、乾物を主に城におさめている商家で、浜松城のお納戸役から聞いたという。殿様、つまり徳川家康は、甘味は口にされない、ということだが、実は甘いものに目がない。毒殺を恐れて口にされないだけだ、というのだ。

「殿様が甘味、」

聞きながら、なぜか志保はおかしさがこみ上げてきた。家康という人はわが殿でありながら、「憧れ」という存在にはなり得ない人であった。それは君主としてどうということではなく、一人の男としての魅力である。

一口で言えば、スキが無い。

幼少時から人質生活を強いられていたのだから、スキがある方がどうかしている。だから、それは無い物ねだりというものであろう。

その家康にいま初めて、好意を伴った親近感を志保は覚えた。

（殿様は甘味がお好き？）

あの堅物で真面目顔の家康公が、まんじゅうを美味そうに頬張る姿を想像しただけで、何だか楽しくなってしまった。

だが、次の瞬間。志保は挨拶もそこそこに駆け出していた。駆け出しながら、ただ一つのことを思った。

藤五郎が得意な甘味を家康公に献上する――。

その先どうなるかなど考えなかった。とにかく、何度縁を返上したいと言っても離さないほど藤五郎を信用しているのだから、その藤五郎のつくった菓子ならば、家康公も口にするのではないか。そうすれば、そこからまた何かが始まるような予感がした。

帰宅してすぐに藤五郎に話をした。

「それは、まことか？」

「はい。間違いござりませぬ」

もちろん志保も藤五郎も、家康が実は甘味に目がないというのが事実なのかどうかは知る術がない。しかし、志保も藤五郎も、それに賭けてみる気になった。

「志保ッ、釜に湯を満たせッ」

藤五郎は、砂糖、あずき、甘酒、小麦粉などを取り出して、手を念入りに洗うと、ただちに菓子をつくりはじめた。

くるみと胡麻と砂糖でつくる「あこた」、山芋と飴でつくる「芋巻」、粉と砂糖と柿でつくる「柿入りういろう」、赤米とこし餡の「茶巾包」などなど。どれも藤五郎の工夫によって生み出された甘味の数々であった。

四

翌朝。

「これを、殿に」

浜松城の台所に、志保に支えられながら藤五郎は不自由な足で出向いた。

「おお、藤五郎どのではないか」

見知った古い顔の御納戸役であった。

「どうした、なんじゃそれは」

藤五郎は包みを大事そうに渡した。

「これは、拙者がつくりました菓子でござる。殿に献上つかまつるために持参致した」

「菓子？」

古手の御納戸役は、包みと藤五郎の顔を交互に見ながら、（ややこしい話を持ち込みおって）という目で、

「殿に献上というからには、何か由緒があるのであろうな」

と尋ねてきた。志保が横から、

「わたくしの主人、大久保藤五郎忠行が、精根こめて殿さまのためにつくりました菓子でございます」

と言い添えた。御納戸役は困った顔で、

「いやぁ、それは大変でござったろうが、殿は甘味を食されん。京など由緒ある菓子は奥方様が食されることもあるが、それも特別な菓子じゃ。すまぬが、これは受け取れぬ」

と言って、古手の御納戸役は包みを志保に押し返した。

「お待ち下さい！」

志保は食い下がった。

ここで引いては、また藤五郎の生活は振り出しに戻る。何としても取り次いでもらいたいのだ。

押し問答がくり返された。

台所の騒々しさは、奥にまで聞こえていた。

「何事です」

ふくよかな顔をした女が台所に顔を出すと、そこにいた役人たちは一斉に腰をかがめた。藤五郎も志保も、貴人であろう女性の登場に辞を低くした。

「お万の方さま」

と呼ばれるこの婦人は、間もなく家康の次男で後に結城秀康と名乗る子を生む、家康の側室である。

家康の女性の好みは、豊満で人格円満、特に賢い女性を好んだ。最初の妻・築山殿とは好対照

である。お万の方はそういう意味で、家康の好みに最も近い女性の一人であった。
「これなる者が、殿に甘味を献上したいと、無理を申しまして」
見れば、右足を折ることができない藤五郎は志保に支えられながら、土間に座って頭を下げていた。
「ご姓名は」
藤五郎が名乗ると、やや間があって、
「大久保党の藤五郎どのか」
と合点がいった様子だった。
「事情を、お聞きしましょう」
お万の方は自ら手をとって、藤五郎と志保を板の間に上げた。
藤五郎は相手が家康の側室だとわかると、生来の生真面目さから緊張してうまく話ができない。
お万の方は、やさしく微笑みながら志保を見た。代りに話せますか、という意味であろう。
志保は意を決して語り始めた。藤五郎の傷のこと、禄返上を受けてもらえないこと、家康公が、実は甘味をお好きでありながら、毒の混入を恐れて口にされないという噂話を聞いたこと。
「忠義の者と家康公が信じてくださる夫・藤五郎忠行がつくりました菓子ならば、食して戴けるのではないか。いくさ場で働くこと叶わずとも、家康公の日々のお暮らしの中で、ほんのひととき、気を休められるお手伝いができるのではないか。そう考えて、精根を込めてつくりましてございます。お方さま、」

志保は、無礼を承知でお万の方をみつめながら続けた。
「主人・藤五郎忠行は、なるほど、まんじゅうをつくるしか能がないのかもしれませぬ。しかし、奉公の道に此れは良い、此れはだめ、などということがありましょうや。尽くす方法は違えども、忠義の者の心は一つでございまするッ」
志保は、涙を溜めながら訴えた。藤五郎は目を瞑りながら妻の言葉を噛みしめた。
お万の方は、おそらく周囲の冷たい視線にさらされながらも、十年もの間、足の痛みに堪えながら忠義を尽くす道を探していたこの夫婦のことを思い、目頭を熱くした。
そして、志保の必死の訴えも、心に響いた。
「子細、伺いました。その包み、わたくしがお預かりいたします。よろしいですね」
と言うと、お万の方は藤五郎と志保に再び微笑みかけた。
お城からの帰り道、志保は藤五郎の杖となって、来る時には気にもしなかった浜松の海風を感じながら、ゆっくりと歩いた。言葉はなかった。家康公が菓子を口にされるかどうかはわからない。しかし、何もせず、希望も持たずに日々を過ごしているよりは、何度失敗しても自分の生き甲斐、忠義の道を探し続けることの大切さを、感じた。そしてもちろん、藤五郎は志保との、志保は藤五郎との絆が、一層強まったことを感じていた。
その夜浜松城では、夕食の膳の後、家康の前に一対のまんじゅうが出された。
「ん？」

家康はまんじゅうを見ると、
「下げよ」
と不機嫌そうに言った。
「それは、なりませぬ」
お万の方が、静かだが強い調子で言った。
「これは、大久保藤五郎忠行が、殿のためにつくったまんじゅうでございまする」
「なに？　藤五郎が？」
久しぶりに耳にする名を聞いて、家康はじっとまんじゅうを見つめていた。そして何かを察したらしい。胡麻をまぶしたまんじゅうを、ひょい、とつまみ上げると、ゆっくりと、美味そうに、一口でたいらげた。
翌日、藤五郎の元に、家康からの使者が来た。用向きは、「今後、三日に一度、菓子をつくって自ら城に運ぶように」とのことであった。毒の混入を恐れ、藤五郎自身が家康に献上するようにとの達しである。
さらに一通、お万の方からの手紙も受け取った。中には、昨日受け取った包みを開け、一つつまんでみると、あまりのおいしさに、まんじゅう一対を残してすべて自分が食べてしまったことの詫びが書かれていた。しかし家康は残り物のまんじゅうを大層気に入った様子で、とりあえず暫くはまんじゅうを献上してはいかがか、との趣旨であった。
志保は、何より菓子をつくる藤五郎のうれしそうな顔を見て、お万の方、家康公、そして会う人ごとに感謝したい気持ちになった。

この後、大久保藤五郎忠行は、家康に直接菓子を献上し、そのたびに家康から様々な下問を受け、それに答えるという君臣の関係が続いた。やがて家康の江戸入府に伴い、江戸の生活用水を確保するために神田上水がつくられるが、その構想と指揮をとったのが大久保藤五郎忠行であった。
なお藤五郎は神田上水建設の功によって家康から「主水」の名を与えられた。この文字は通常「もんど」と濁って読むが、「水は濁りを嫌う故、『もんど』を清みて『もんと』と呼ぶべし」と家康から命ぜられ、以後、藤五郎は「もんと」と濁らずに名を名乗ったという。
藤五郎にはじまる大久保家は、幕府の菓子司として幕末まで将軍献上の菓子をつくりつづける。戦乱の世にただひたすら、まんじゅうを献上しつづけた夫婦の物語。まんじゅう奉公、まずは、一巻の終了でございます。

俳句　不屈の闘志　ほか十四句

大澤（おおさわ）　鷹雪（ようせつ）

球児らの不屈の闘志雲の峰

流れ星かけし願ひは燃え尽きず

幸若を舞ひたる腰に秋扇

洞深く響く谺や岩煙草

吹き抜ける風に調べや夏座敷

焼味噌も談論の種冷し酒
芭蕉葉の軒に逃れて雨やどり
樟脳も吊されている猪垣よ
路側線の途切れて怖き濃霧かな
手を抜きし朝のサラダや貝割菜
叫喚やジャズの聖地の秋出水
人身事故ゆゑの遅延や法師蟬
廢れたる吊橋飾る葛の花
台風の過ぎてなほ立つ波頭

浦上事件

——その発生原因と近代日本史的意義——

鍋屋　次郎

一　はじめに

一五四九年、フランシスコ・ザビエルにより日本に入ってきたキリスト教は、日本の在来宗教（主に仏教）との軋轢の中で、秀吉による「禁教令」（天正一五年・一五八七年）が発せられた後、その禁教の度合いは家康、秀忠、家光と次第に厳しくなり、キリスト教徒というだけで棄教するまで拷問に掛けられ、棄教しなければ「死罪」となっていた。また、江戸時代、その一族は「類族」と称して特別戸籍を作成、数代の間差別と監視が行われていた。したがって、日本のキリスト教徒は表面的には仏教徒を装って、いわゆる「隠れキリシタン」として社会から深く潜行して先祖伝来の信仰を守っていた。

キリスト教禁令が解けた明治六年（一八七三）二月二十四日迄、その「隠れキリシタン」として先祖伝来の信仰を守っていた人達は、長崎をはじめとしてその周辺、天草、島原、五島など西

海方面に多かった。

現在は、長崎をはじめ天草、島原、五島など各地に、当時幕吏の目につかないように密に信仰を続けるために使用した「祭祀用具」など数多くの品々が、各地の資料館や教会に歴史資料として陳列保管されている。

それらの品々は、一寸見た目は観音像であるが、その観音像の背中をくり貫き、その中に「マリヤ像」や「十字架」が嵌め込んであったり、観音像が幼子（イエス・キリストに見立てている）を抱いていたり、また、主に長崎では「踏絵」と称して、「聖母マリヤが幼子イエス・キリストを抱いた絵が描かれている厚手の板」を、キリスト教徒でない証として村民に踏ませる行事が、幕末、アメリカとの「日米修交通商条約」締結まで行われていた。

我国で何故キリスト教が、そのように厳しく禁止されていたのか。これについては多くの学説や見解があるが、端的に言ってしまえば、

① 秀吉が九州征伐の時に、キリスト教徒諸大名と宣教師との密接な関係に疑問をもち、自らの天下統一に邪魔になる勢力と考えたこと。具体的には、高山右近や九州を中心としたキリスト教徒大名の力と、当時のポルトガル船軍事力との結束を警戒した。

② 江戸幕府は島原の乱をキリスト教徒の反乱（注）と捉え、鎖国体制を徹底して維持、且つ、キリスト教の教えは政治体制に反すると考えていた。

ことにある。

そして、キリスト教への禁教弾圧が続くにしたがって、政治体制の中で寺請制度や五人組制度

などの徹底した相互監視制度によって、社会そのものが観念的に、キリスト教は絶対的悪であって、キリスト教徒は摩訶不思議な妖術を使うなどと信じられるにいたっていた。

そのような社会体制の中で、一六三〇年代末には国外追放令を逃れて潜伏していた宣教師、または密航して我国に潜入した宣教師は殆ど全て捉えられて拷問（穴の中に逆さ吊りなど）死をし、キリスト教徒は表面的には仏教徒を装い、密（ひそか）にキリスト教信仰を続けていた。

信仰指導者もいない中で、対世間には絶対に見つからないように（見つかったら場合によれば死罪）元治二年（一八六五）まで約二百三十年間、先祖代々約七～八代にわたって「隠れて」キリスト教信仰を続けてきていたのである。

（注）島原の乱（寛永一五年・一六三八年）の原因は、当時の島原領主松倉勝家が江戸幕府の築城賦役などで領地石高をはるかに上回る寄進を申し出たことなどにより藩内財政は逼迫し、そのため領民から過酷極まりない年貢を取り立てた。結果として耐えられなくなった農民などが反乱を起こしたものである。島原・天草は前領主がキリスト教大名であったため領民にキリスト教徒が多かったことから、前領主有馬氏に仕えていた一部武士階級が反乱軍の指導者として「天草四郎」を盛り立てて領民の反乱軍への参加と結束を訴えた。松倉家にしても、また江戸幕府にしても、「苛政なるが故の反乱」となると政治体制そのものが問われてくるので、島原の乱を「キリシタンの宗教的反乱」と位置付けたものと考える。

二　浦上事件

浦上事件の発端は、「隠れキリシタン」であった浦上村民が、家族の葬儀をキリスト教式で行ったことに端を発し、慶応四年（一八六八）から明治二年（一八六九）に掛けて、浦上地区「隠れキリシタン」村民三千四百十四名が、キリスト教を信仰しているがゆえに、故郷を追放され二十一大名家に預けられ（流罪）、配流先では言語に絶する苦難を味わい、明治六年（一八七三）三月、キリスト教解禁になって漸く配流先から戻ることが出来た（その間、配流先での死者六百六十四人）事件であり、日本史上類を見ない大規模配流事件であった。

では、その村民たちは二百三十年間も密に信仰していた、いわゆる「隠れ」状態から、何故死を覚悟して「自らキリスト教徒である」ことを表明したのか。これをその時代の動きから考察してみたい。

（一）鎖国から開国へ

我国はアメリカ、ロシア、イギリス、オランダ、フランスなどからの開国要求に対して、安政五年（一八五八）六月十九日にアメリカと日米修交通商条約を締結、その後同年九月二十一日まで、他の四カ国とも同様条約を締結し、日本（徳川幕府）は外交方針を二百三十年に亘る「鎖国」から「開国」へと大きく転換した。

この条約締結に伴い、「踏絵」を廃止し（条約に明記）、かつ、外国居留地内にキリスト教天主堂の建設を認めた。

その結果、元治二年（一八六五）一月に長崎浦上のフランス人居留地にキリスト教天主堂（大浦天主堂）が建設された。

その建設を最初から完成に至るまで見つめていた「隠れキリシタン」たちは、落成とともに天主堂の塔屋にまばゆいばかりに輝く十字架、献堂式に参列する外国船の艦長と正装した水兵たちの行列、天主堂の中から流れてくる妙なるオルガンの音の響き、礼典用の式服を着用した神父たちの姿などを見て、どのように感じたのだろうか。

長崎奉行所の警戒があるので、遠巻きにしか眺めることは出来なかったと思われる「隠れキリシタン」の人々は、ご先祖様から言い伝えられてきたパライソ（天国）を目の当たりにしたと思ったのではなかろうか。それと同時に、自分達が隠れてキリスト教信仰をすることに理不尽も感じたことであろうと想像できる。

（二）信仰表明と神父の驚嘆

神父たちも、日本でのフランシスコ・ザビエルによるキリスト教宣教とその後の弾圧の歴史は十分研究していたので、この日本に「キリスト教信仰が何処かにひっそりと残っていないか」と考え、道で見かけた村民の仕草などを「もしや十字を切っているのではないか」と思いながら見つめていた。

神父側もそのように注意を払っていた時、天主堂が落成した二カ月後の元治二年（一八六五）

三月、天主堂の中をのぞいていた村民数名を見かけたプチジャン神父は、全員を天主堂の中へ招きいれた。

招き入れられた村民は、天主堂内を見渡してから、

「マリア像はどこ？」

と聞いた後、

「イエス・キリストの誕生が二十五日であること、十字架上で昇天したこと、そして自分達も神父と同じ信仰をしている」

ことなどが村民の口から飛び出し、更に近郊の村に多くのキリスト教徒がいると言う。それを聞いたプチジャン神父の驚きはまさに驚愕そのものであった。

二百三十年間、信仰の指導者が全くなく、為政者による厳しいキリスト教禁教の中で、よくぞ伝承されていたものと感嘆した。興奮が冷めると、「隠れキリシタン」集落に早く行ってみたいと心は躍ったが、日本政府との条約の中で、

「キリスト教宗教儀式は居留地の中でのみ行い、それ以外では宗教行為一切を行ってはならない」

との定めがあり、躍動する神父の心はままならないものがあった。

しかし、村民が天主堂の中へ招き入れられ、直接見たり聞いたりしたことは、アッと言う間に長崎界隈はもとより、外海地区、平戸、生月、五島、島原、天草方面へと伝えられ、翌月四月十六日の復活祭前後には、大浦天主堂の周りに千五百人が集ったといわれている。

そこからの自然の成り行きと言うか、神父側は、「隠れキリシタン」の人達が、洗礼儀式をはじめ、本来のカトリック教徒としての儀式を、正しい祈りと正しい方法で行っているかを確認したかった。

神父達は、長崎奉行所役人の目を盗んで天主堂に入り込んだ村民に宗教儀式のあり方などを確かめたところ、祈りの言葉や宗教儀式が正確さが残っている所もあれば、大幅に崩れていると言うか、変形してしまった所も数多くあった。それを知った神父たちは、夜陰、村民に案内されて「隠れキリシタン」集落を訪ね、教義や新生児への洗礼の授け方や、祈りの言葉などを正しく教えて回った。

このような状況を薄々知った長崎奉行所は、村民の天主堂への出入りを厳重に見張っていたが、時は幕末、江戸幕府の衰えは長崎にも及んでいて、加えて長崎にある各国領事館への気遣いもあって、それら村民を「国法を犯すキリスト教徒」として一網打尽に捉えることも出来ず、「隠れキリシタン」村民と神父の動きを見て見ないふりをしていた。と言うのも「隠れキリシタン」集落でも、まだその段階では葬儀は指定された寺で仏式で行っていたので、長崎奉行所内部でも「村民はただもの珍しさから天主堂に出入りしている」と考えて安心していた一面もあった。

一方、それとは対照的に、「隠れキリシタン」の人達は神父から直接祈りや洗礼儀式の方法などの教えを受け、朝夕、フランス寺と呼ぶ大浦天主堂の塔屋に煌く十字架を仰ぎ、加えて、長崎奉行所に出入りしている（長崎奉行所役人へフランス語を教えるため）神父たちの姿を見て、生まれてこの方、ご先祖がキリスト教徒であったが故に謂われなき差別を受け、社会の水面下深く

潜行した中で、身を縮めて信仰を守りつづけてきたことの惨めさから、

「今こそ、天下晴れてキリスト教信仰ができる」

と、神父たちに教えていただいた朝夕の祈りをはじめ、信仰教義の学びと実践に心が弾んでいた。

したがって、葬式にあたって、

「寺も僧侶のお経も要らない。自分達でキリスト教式葬儀を行う」

と言う気持ちが強くなっていったのは自然の成り行きだった。

(三) キリスト教信仰を表明……寺との拒絶宣言

村民がはじめて天主堂内に入ってから二年後の慶応三年（一八六七）四月、ついに一村民が家族の葬儀に際し、仏式葬儀を拒否、僧侶を呼ぶことを拒絶してキリスト教による葬儀を行った。そしてその火の手は近在の村々に燃え広がり、各村の「隠れキリシタン」代表者が庄屋に出向き「寺との関係を絶つ」ことを宣言した。その戸数は四百戸とも八百戸とも伝えられている。

驚いた長崎奉行所は、一旦は事を納めようと、

「寺の僧侶が気に入らなければ僧侶を替える」

とまで譲歩を示したが、寺そのものとの断絶を要求している「隠れキリシタン」側には全く相手にされなかった。

長崎奉行所内部では、これら村民へどのように対応するか、意見が真っ二つに分かれていた。

穏健派の能勢大隈守と、徳川幕府開闢以来の国法「キリシタン禁制」を理屈抜きで遵守すべきと考えている断固処分派の徳永石見守とが対立していた。能勢大隈守は幕府の弱体化、開国を要請した列強各国の「キリスト教禁教解除要求」抗議などを考えて、長崎奉行所単独で島原の乱のような大掛かりな内乱になるような危険を冒すことは避けるべきと考えて、幕府の指令を仰ぐため自ら江戸へ向かった。

一方、徳永石見守派では内偵を進め、この二年間に山中に作られた「隠れ聖堂」四カ所をはじめ、主だった「隠れキリシタン」名簿も作成していた。

断固処分派は「隠れキリシタン」村民の「お上の絶対命令を無視した葬儀」などに我慢ならず、能勢大隈守の帰るのを待つことなく、ついに同年七月十五日夜半、強い風雨の中、二百名の捕吏を動員して四カ所の隠れ聖堂と主だった者の自宅を急襲した。その時一部の「隠れキリシタン」が徒党を組んで反抗したので、主だった者約八十人を捕らえ牢に入れた。

しかし、その後の長崎奉行所は、このキリスト教弾圧に対して各国長崎領事館から連日の激しい抗議があったことと、更に、惹き起こされるかも分らない天草、五島、外海方面の「隠れキリシタン」の蜂起を恐れて、捕らえた隠れキリシタン村民が「キリスト教信仰を棄教した」として釈放した（釈放後殆どがキリスト教信仰に戻っている）。

長崎奉行所のその後の取り締まりは、「隠れキリシタン」の大浦天主堂への出入りのみ監視するにとどめ、引き続き勝手に行われていたキリスト教式葬儀は黙って見過ごしていた。

三　明治新政府の動き……日本史上類を見ない三千四百十四人の流罪

（一）流罪決定

翌慶応四年（一八六八）三月、徳川幕府は瓦解、明治政府が発足した。明治政府は直ちに徳川幕府が条約を締結した各国に対して「条約継承」を通知したが、国内的には「キリシタン禁制」を継続、その旨新たに高札を掲げた。

ここから悲劇が始まった。明治政府は翌四月、浦上地区元「隠れキリシタン」約四千名の流罪を決定、中部以西の有力三十二藩に預けることとし、実際には、その年の六月から明治二年（一八六九）十二月末までに総員三千四百十四人を浦上地区から次の通り各地に配流した。

配流先別配流人員は下記のとおりである。

鹿児島　三百七十五人、萩　三百人、津和野　百五十三人、広島　百七十九人、福山　九十六人、岡山　百十七人、姫路　四十五人、松江　八十四人、鳥取　百六十三人、徳島　百十六人、高松　五十四人、松山　八十六人、土佐　百二十六人、和歌山　二百八十九人、郡山・古市　百十四人、伊賀　五十九人、伊勢　七十五人、尾張　三百七十五人、金沢（大聖寺を含む）五百六十六人、富山　四十二人　合計三千四百十四人

この配流を行うに当たり、明治政府は各藩に対して、「キリスト教を棄教させる様説得のこと」の指示に加えて、処遇について次のような基準（主要な事項のみ）を示した。

居住……十人以下一部屋とし、一家族一部屋とすること

食料……男女とも一日一人に付き玄米五合、味噌二十匁、菜代二十文、一日三食支給

衣類……蒲団を支給し、冬は綿入れ、夏は単衣物を支給すること

賃金……働きに応じて相当の貨銭を支給すること

病気……投薬・手当てをすること

（二）天国を仰いで……死刑覚悟で故郷を棄てる

慶応四年（一八六八）六月、戸主を中心に少数が配流され、大多数は翌明治二年（一八六九）十二月、厳寒の中をそれぞれの配流地に送られた。

特に明治二年（一八六九）十二月、厳寒の中で、行き先別に長崎奉行所の中庭に立たされた時は、全員死への旅立ちと覚悟した。そしていざ乗船となった時、家族とはぐれた子供、夫にはぐれた妻の声があちこちに叫び声となって響いた。奉行所も当初は家族毎に乗船させる方針でいたが、一度に三千人を超える乗船となると、もう行く先別に乗船人数さえ合っていれば、家族が揃っていようと、揃っていまいとどうでも良い、ということになってしまった。結果として親子、夫婦別々の地に流された者もあった。

全員、もう二度とこの浦上の地、長崎の地を踏むことはない、いずれ流された地で処刑されるものと覚悟していたので、家も畑も何もかもそのままにして、十字架、ロザリオ、メダイなどを確(しっか)りと懐に入れて、その他は当座の着替えと若干の金銭を持つのみであった。

乗船の時から、国法を犯した大罪人としての扱いで、船によっては五人ずつ腰縄で数珠繋ぎにして一匹二匹と数える船もあり、文字通り人間としての扱いではなかった。

日本海側の津和野、鳥取などは、広島近辺で下船後、雪の中、腰縄をつけられたまま徒歩で中国山脈を越えさせられた。

配流先では、前述した待遇基準は全く守られず、何処でも程度の差こそあれ衣食住全てにわたって人間が生きるぎりぎりの酷い扱いであった。食事は毎回茶碗に八分目程度のお粥、菜は梅干一個あれば上々、住まいはまさに「馬小屋」で、地面の上に筵を敷いただけのものから、よく板張りの上に筵を敷く程度、壁も隙間だらけで冷たい風は容赦なく入ってくる、しかも筵一枚の広さに四人程度押し込められて横になることもままならず、着るものは、着て来たままの状態であった。その上、日中は開墾や塩田での重労働、労働がないときは役人と神官による「キリスト教棄教の説諭」が、拷問を伴って行われた。

拷問は、絶食、三尺牢への入牢など、死に至る直前までの苦痛を与えていた。しかし、浦上で天主堂の十字架を仰ぎ、神父の教えを受けていた「隠れキリシタン」村民たちは「イエス・キリストの十字架上の苦難と同じ苦難に与かって、パライソ（天国）に迎えられるならばこれぞ本望」

と、役人や神官からどんな拷問を受けても頑張り通す者が多かった。

この間、アメリカをはじめ条約締結各国は、明治政府と長崎奉行所に対してキリスト教徒迫害

と浦上住民の即時釈放を求める抗議を続けていた。しかし、明治政府は長崎奉行所の摘発時に「隠れキリシタン」が徒党を組んで反抗したことを理由に、

「宗教弾圧ではない。国内的反乱事件の処分であり、列強各国の主張は内政干渉である」

と拒否しつづけていた。

しかし、内心は「キリスト教弾圧」そのものであることを承知していた明治政府は、配流先での状況を把握するために、明治四年（一八七一）二月～四月にかけて視察に回った。

各藩はこの視察に際して、処遇条件を当初の通達・指示に合わせる為、視察官到着前に住まいを整備し、食事を改善し、衣類を支給するなど大慌てに待遇全般を改めた。そしてそれから二年後の明治六年（一八七三）三月までは、キリスト教棄教の説諭と労働はあったが、飢えと寒さと拷問からは解放された。

四　岩倉使節団への各国政府・民衆からの抗議

明治政府は条約改定と西欧諸国の行政視察のため、明治四年（一八七一）十月八日、岩倉使節団をアメリカはじめ西欧諸国に派遣した。ところが行く先々で、「日本のキリスト教禁教への抗議」「浦上キリスト教徒の流罪撤回・即時釈放」の強烈な抗議に会い、条約改定どころの話ではなくなり、急遽留守政府に連絡して、

「キリシタン禁制高札の撤去」

「浦上キリシタンの即時釈放と送還」

を行った。

その結果、明治六年（一八七三）三月十四日、配流されていた人たちに釈放・帰還が通知された。

その段階で、流罪になった人達の状況は

当初配流人数	三千四百十四人	現地での出生者数	百七十五人
合計	三千五百八十九人		
流罪地での死亡者数	六百六十四人	逃亡者数	六人
現地残留者数	十四人	棄教者数	千二十二人
信仰を守り通した者	千八百八十三人	合計	三千五百八十九人

であったとされている。

五　帰還後の生活

二度と生きて戻ることはない、と覚悟して浦上を出た信徒たちを待ち受けていたものは、言語では表現できないほど廃墟と化した故郷であった。田畑は雑草が生え放題、あらかたの家は倒壊し、懐かしい我が家が建ってはいても、壁は落ち、軒は傾き、鼠さえ住めない程に破れ果て、僅かばかりの住める家には他人が住んでいて、キリスト教徒が帰郷すると聞いて狼籍の限りを尽くして立ち去ったという。

これに対して、長崎県庁は急造バラック……一人一坪程度の狭さで、三～四軒続きの長屋……

を立てて対応した。

帰郷したものの食物はなし、食器もなし、夜具はなし、金はなし、荒れた田畑を耕す鋤・鍬など農具もなし。生活上の必需品は皆無であった。

幸い帰郷したのが初夏であったので、夜具の心配はなかった。

先ずは食べなければならない。長崎県は食物までは心配してくれなかった。配流地を去るときに与えられた僅かなお金でカンカロ（切芋の干したもの）、それも新しいものは高くて買えないので、ただ同然の虫だらけの三年物を購入して、除けることの出来ないほどの多くの虫を一緒に飲み込んで飢えをしのいだという。このような苦しみに救いの手を差し伸べたのは、外海地区他近在に在住する元「隠れキリシタン」であったキリスト教徒と、自然の恵みであった。畑や土手に自生した芹や嫁菜が彼等の体を養ってくれた。

食器はまだ使えそうな欠けた食器を拾い、畑は陶器のかけらで耕し始め、こうして一年を経過する頃には、辛うじて僅かばかりの糊口の資を得ることが出来た。

そして、配流先でキリスト教信仰を一旦棄てた人々の多くが再び信仰に立ち帰った。

苦難は続くもので、その直後赤痢が蔓延し、食も満足でない状態の村民七百名が罹患した。しかし、配流先から戻った若い婦人たちの必死の看護と、ドロ神父の治療により死者は九十四名にとどめる事が出来た。（この看護活動が、その後のキリスト教奉仕団十字会に発展していった）

六　浦上事件と明治政府

（一）明治政府発足時、何故キリスト教を禁じたか。

明治政府が近代国家日本を一日も早く作り上げることを標榜しながらも、徳川体制を継続して「キリスト教禁制」を掲げたのは何故であったろうか。

これは私見であるが、秀吉が発した禁教令（一五八七年）と通ずるものがあるのではないかと考える。という理由は、まだこの時期、日本には「信教の自由」思想は社会の中になく、明治政府は、天皇を中心とする政治体制と、神道を前面に打ち出して国民全体の政治的・思想的統一を図ろうとしていたことに思いを馳せると、秀吉と同じく「外国の思想と宗教」は邪魔者としか考えなかったのではないかと思う。

（二）何故、大掛かりな流罪を決定したか

新しい国家体制造りのスタートであっただけに、甘い処分では各地にキリスト教信仰が拡大し、国家の思想的統一を図る上に不安が残る。更に、あまりにも人数が多すぎて一カ所に収容することは出来ない。しかし思い切って断固処分することが必要であったことから、

「処分方法として、配流地を分散して配流することにより分散収容が可能となり、且つ、受け入れ先の地においてもキリスト教禁令を徹底することが可能となる」

ことなどを考えたのではなかろうか。

加えて、まだ廃藩置県前の段階であり、出来たばかりの明治政府が、中部以西の有力各藩に対して新政府の力を見せつけるために利用した、と考えるのは穿ち過ぎであろうか。

七　「命がけキリスト教信仰表明」の日本史的意義

二百三十年以上続いたキリスト教禁教のための寺請制度により、死亡に際しては仏式葬儀を強いられていた「隠れキリシタン」達は、前述のように、大浦天主堂が出来てから二年後の慶応三年（一八六七）四月、家族死亡に伴ってキリスト教式葬儀を強行した。その時、その家族のみならず、集落あげてキリスト教徒であることを表明した。

この時点で、彼等は仏教徒を装う「隠れキリシタン」ではなくなった。幕末の長崎は、日本で最も早く西欧の空気を吸収している地域であったので、そこにこのような動きが出てきたことは地理的条件的必然性もあったと頷ける。

そして、結果は前述のように三千四百十四人の人達が流罪となり、家・財産の全てを失い、配流地で六百六十四人の人たちが命を落とした。

しかし、この事件があったからこそ、勇気をもってキリスト教信仰を表明してくれたからこそ、日本の近代化への夜明けであるこの時期に、日本がキリスト教を真正面から受け入れることが出来るようになって、横浜・東京などでのカナダ・北米を中心とするプロテスタント宣教などと相俟って、宗教史的にはもとより文化的な面でも、日本の近代化に大きく貢献したことを銘記すべきである。

そして最後になったが、信仰による殉教、これを覚悟した人達、また文字通り信仰を守り通して殉じた人達については、その時代に生きた人々の人生観、価値観、宗教観などを知り、その時

代の人々と共に生きなければ理解することは出来ない深くて重い問題と考える。したがって、現代の我々がその人達の信仰・精神世界に軽々に踏み込んで議論することは慎まなければならない。

参考文献
浦上切支丹史　浦川和三郎著　全国書房
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店

韓国の歌人（うたびと）
――孫戸妍（そんほよん）――

石黒　修身

(一)　歌集「無窮花（むくげ）」との出会い

平成十七年（二〇〇五）二月、筆者の参加している文芸同人誌「まんじ」を主宰し作家でもある、三戸岡道夫氏から、韓国の女流歌人の歌集「無窮花」が送られて来た。

多少短歌を嗜み、「まんじ」にも毎号寄稿している筆者に、この歌人と作品につき何らかの考えをまとめてみては如何かとのお勧めであった。

歌人の名は孫戸妍（そんほよん）。韓国唯一人の歌人で、その経歴は日本に深い関りがあり、短歌に生涯を捧げ、六十年余の歳月を歴史に翻弄され乍ら短歌を詠み続けて来た人物である。筆者は初めてその存在を知った。

筆者は、かつて台湾の歌人につき関心を持ち、中心的人物であり、「台湾万葉集」の編者である、呉建堂（孤蓬万里、故人）と同歌集につき、ささやかな論考を「まんじ」に載せたことがあ

る。

然し、韓国人で短歌を詠む人物が居たと言う認識はついぞ持たなかった。歌集「無窮花」から受けた感動は筆者の胸中にさざ波のように拡がり、逐次孫の著作、評伝等を読み進めることになった。

(二) 日本への紹介——北出明氏の著書等——

北出氏は、国際観光協会（ＪＮＴＯ）に在職中に韓国ソウル事務所に在勤（平成五年～八年）、その間に孫の知遇を得、その作品に大きな感銘を受けたと言う。

北出氏が、感動抑え難く、ある団体の機関紙に寄せた、「韓国唯一の歌人」と題した小文が機縁となって、日本の有志の尽力で青森県六カ所村に孫の歌碑が建立されることになる。この事については後述する。

北出氏は、帰国後、「台湾万葉集」の編者呉建堂（孤蓬万里）の死去を伝え、同人の台湾における短歌の普及への貢献を称える記事が、朝日新聞の「天声人語」に載せられたのを読んだ。

北出氏は、「韓国にもこの様な歌人が存在することを伝えたい気持の発露として、著書「風雪の歌人孫戸妍の半世紀」を上梓した。平成十三年（二〇〇一）四月のことである。

北出氏が最初に感動を受けたのは次の一首と言う。

「君よわが愛の深さをためさむとかりそめに目を閉じたまひしや」

十数年前に不慮の死を遂げた夫君への挽歌であり、先述の歌碑に刻まれたものである。

別に北出氏がこの著書の帯にあしらった一首を記そう。

「もう一つの祖国を胸に秘めながら日の丸振りし日のあり」

この著書の反響は大きく、孫、そして北出氏自身の人的関係の復活、短歌の作曲化等、多岐にわたったと言う。

(三) ドキュメンタリー試写会と偲ぶ会

平成十七年（二〇〇五）八月、日本経済新聞で「孫戸妍ドキュメンタリー試写会」の開催が報じられた。筆者も、事務局を務めた北出氏の配慮で出席することが出来た。

九月十三日夜、内幸町のプレスセンターで、日韓親善協会中央会（会長斉藤十朗、元参議院議長）の主催でドキュメンタリー映画の試写会が行われた。

映画は、一年七カ月前に故人となった孫の人生を描いたもので、韓国で制作され、日本語版の完成をまって当日の試写会となったものである。

会は、協会会長の斉藤十朗氏、孫が日本留学の折に師事した、万葉学者中西進氏（京都市立芸術大学学長）等の受入側と、孫の長男李承勲、長女李承信等の遺族側との交流のうちに進められた。参列者と参会者の醸し出す雰囲気は極めて文化的で静粛なもので、昨今の韓流ブームと称されている芸能界のフィーバー振りとは、全く異なる印象を筆者は受けた。映画は、日韓両国の時空を超えた映像を通して孫戸妍の短歌の世界を追った。

試写会に続く偲ぶ会で、筆者は北出氏に会い、孫とその短歌につき小文を作りたいとの意向を

伝えた。

北出氏は、来る十一月には、集大成として新しく著書を出版する事と、筆者の作品を楽しみにしている旨を談笑裡に語った。

(四) 孫戸妍の生涯と短歌歴

孫は、朝鮮半島が日本の統治下にあった、大正十二年（一九二三）十月十五日、当時東京に滞在中の両親の間に生まれた。

生後間もなくソウルに戻ったが、十七歳の時来日し、帝国女子専門学校（現相模女子大）に留学した。在学中歌誌「心の花」の主宰者であった佐佐木信綱に師事し短歌を詠み始めた。

卒業後朝鮮に戻り、京城舞鶴高女の教諭となり、二十一才の時処女歌集「戸妍歌集」を出版した。

昭和二十二年（一九四七）、李允模（イユンモ）と結婚、その間朝鮮動乱により三年余りの避難生活を釜山で経験した。

夫は特許部門で官民にわたり活躍した人物だったので、ソウルに戻ってからの生活は安定したものであったと言う。

孫は、子育てと教育が一段落した昭和五十年（一九七五）万葉集はじめ古典文学の研究のため再び来日し、成城大学大学院で中西進教授の指導を受けることになる。

歌集の出版も、在日期間を挟み第一から第五までの「無窮花」シリーズで続けている。

昭和五十八年（一九八三）夫李允模が急逝したが、その後も子供達に守られて、短歌を拠として試練に耐えた。

このように、日本の植民地支配が続く戦前、戦中、そして反日感情の渦巻く戦後の韓国で人知れず短歌を詠み続けた稀有の韓国女流歌人であった。

(五) 歌碑の建立

前述の「風雪の歌人」の筆者北出明氏が、日韓経済協会の会報に寄せた小文「韓国ただ独りの歌人」に目を止めた糠沢和夫氏（現経団連専務理事）らの尽力で青森県六カ所村に歌碑が建立されたのは、平成九年（一九九七）六月のことである。

歌碑には、亡き夫を悼む短歌が刻まれている。

「君よわが愛の深さをためさむとかりそめに目を閉じたまひしや」

そして、孫はこの時の感懐を日韓親善の思いを込めて次の短歌に託している。

「故国（くに）はるか吾が歌碑建ちぬ隣りあい肩を寄せ合い睦みあえよと」

「異国なる土に慣じみて歌碑よ建て見えぬ心の懸け橋となれ」

(六) 宮中歌会始の陪聴

孫は、かねてから宮中参内の夢を持ち、数度にわたり歌会始の詠進歌に応募したが、入選することは無かった。

恩師の中西進は、自らが平成六年（一九九四）の召人となったのを機に、孫を召人にすべく宮内庁の関係部門に働き掛けてきた。この事が日韓友好に貢献すると考えたのであろう。さきに歌碑建立の際世話人となった経団連の糠沢和夫参与（当時）の協力もあり、孫は最初の韓国人陪聴者として宮中に参内することが出来た。平成十年（一九九八）一月十四日のことである。

この日の感激をこめて、孫は次の短歌五首を残している。

「晴れの日に合わせて縫いしチマチョゴリ着て慎ましく歩きみるかな」

「こがね色絨毯は長く続きいて松の間に至る道はろかなり」

「松の間はしんと静まり歌会に召される吾はまこと現（うつ）つか」

「裳（チマ）の裾かすかに揺れて宮の前緊張感はゆるびゆかぬも」

「百済人の末裔として歌を詠み歌会始の列に連なる」

(七) 韓国文化勲章の受章

平成十二年（二〇〇〇）十月孫は、韓国の文化勲章を受章している。

先述の歌碑の建立が、韓国のマスコミに採り上げられ、孫は一躍有名になる。時あたかも金大中大統領の誕生で、日本文化に対する政策が緩和されたことが大きな転機になった。更に日本における歌碑の建立がこれを後押ししたと見て良いだろう。

勲章証には次のように記されている。

「国民文化向上と国家発展に寄与したことを評価し大韓民国憲法の規定に基き花冠文化勲章を授与する　大統領・金大中」

そして「日本の伝統詩の和歌を通して韓国国民の感情を日本に伝えた」と評価した。

反日感情が根強く、日本文化に対する警戒感が強いなかでのこの受章は、画期的なものと言って良いだろう。

(八) 昭和万葉集への採録

昭和万葉集は、昭和元年から五十年までの全国の歌人の短歌を巾広く集めたもので、同時期の日本歌壇の総集編ともいうべきものである。

全二十巻、別巻一の大部なもので、当代を代表する歌人等により編集され、最終巻は昭和五十五年（一九八〇）十二月に出されている。講談社刊。

同全集第九巻の「朝鮮動乱」の分類の中で、唯一の外国人として孫の歌が五首収録されている。

「もろともに同じ祖先をもちながら銃剣とれりここの境に」

「興亡の絶間なかりし歴史なり又も書き添へむ三八線と」

「壕の内坐りゐるままの屍（しかばね）を踏み越えふみこえ吾は出でゆく」

「足どりのもどかしきかな女装せし弟を囲み監視地区出づ」

「婚約の指輪なれども米となり空爆の日の命を保つ」

朝鮮動乱の渦中にあって、戦場での情況を活写した稀有の作品であろう。

(九) 日本文芸界との関わり

まず留学中に薫陶を受けた二人の恩師について触れなければなるまい。

孫が、帝国女専時代に学外で師事した、佐佐木信綱は、孫に「日本のことでない韓国の固有の美しさを歌いなさい。途中で止めるな」と教えたと言う。

孫が佐佐木の指導を受けたのは、昭和十八年（一九四三）十二月から僅か三カ月であったが、それは恐らく密度の高い師弟の交流の日々であったであろう。

戦後の日韓両国の情勢は、二人の再会を許さなかったが、初めに佐佐木から与えられたあの言葉は歌人孫戸妍の終生の座右の銘となったと思われる。

後年のことになるが、昭和三十三年（一九五八）孫が第二作となる歌集「第一無窮花」を出版したとき、佐佐木は序文を寄せている。

その文末に「ねがはくは、韓国の統一、日韓の和合なりて、戸妍君の慶祝の佳作生れ、国花の名におえる『無窮花』の第二集の世に出む時を待望す」と激励の言葉を送っている。

佐佐木は、昭和三十年（一九五五）に他界しているので、「第二無窮花」を見届けることは出来なかった。

その「第二無窮花」において、孫は恩師を偲び、数首を載せて恩愛の気持を捧げている。

「朱筆もてアンダーライン引き吾が歌を励ましし大人会い得ぬ永久に」

「パンはなきベーカリーのスープ取り寄せて戦時下の吾励ましししかも」

「差別への意識鋭き乙女子の吾には過ぐる愛情受けし」

中西進氏には、二回目の留学となる成城大学大学院で万葉学を習い、その後の創作活動に大きな感化を受けた。

中西氏は、孫が韓国に戻ってからも、歌集出版、歌碑建立の折などにしばしば交流し、励まし続けて来たと言う。

中でも前述のように、孫を宮中歌会始の陪聴者として参内させたことは、中西氏が孫の作歌活動を評価し、且つそれを日韓親善に役立てようとしたことが窺われる。

他にも、宮沢次郎氏（元トッパンムアー社長、サミエル・ウルマンに関する著作あり）は、孫の短歌に共感し、また夫の李充模とも親交があったことから、親友であった野間省一講談社社長に推轂し、第二無窮花以下第五無窮花までの出版を同社にまかせている。

(十) 日本の学友との交流

孫が帝国女専に在学中の同期生との交流は、二度目の留学のため来日した時期に復活し、同窓会組織である翠葉会を舞台にして行われた。

翠葉会の資料室には、孫の特設コーナーが設けられている。

先述のドキュメンタリー作成に当っても、同級生等が取材に応じ、孫の人柄、エピソード等を語っている。

なお、筆者がこの稿を書く契機となった、歌集「第五無窮花」は、同級生の一人で、親密な交

友関係にあった、勝山道子氏が、筆者の所属する文芸同人誌の主宰者三戸岡道夫氏に送ったものが、筆者の手許に齎された経緯がある。

勝山氏については、「争いのなき国と国なれ」の著者で先述した北出明氏が、著述に当り理解と支援を得た一人として、巻末にその名を記している。

㈠ 永訣

平成十五年（二〇〇三）十一月二十三日、孫戸妍は、ソウルに於て八十年の波乱に満ちた生涯を閉じた。

長い間患っていた腎不全から腎臓癌を併発し、癌は更に肺に転移していたが、子供達家族に見守られた安らかな最期であったと言う。

三女承哉に残した言葉に、「最後の願いは日本に行き、これまで世話になった人たちにお礼を言い、その方たちと楽しい時間を過ごすこと」とあった。

そして、家族を愛し、皆様とその家族を愛し、祖国を愛し、共に歩んだ日本を愛した母であった。と承哉は述懐している。

「吾が知らぬうちに病いは深くなり医師の診断に首うなだれる」

「何者かに追われているがのこの焦り痛まぬまえにけじめつけたし」

闘病から最期に至る二首である。

㈡ 日韓会談での披露

平成十七年（二〇〇五）六月、ソウルで行われた、日韓首脳会談後の共同発表の後に、小泉総理は、「会談の場で披露した」として、故孫戸妍の次の短歌を紹介した。

「切実な願いが吾に一つあり争いのなき国と国なれ」

総理は、「この歌は孫さんの気持だけではない。日韓両国民の願いであり、望みだと思う」と強調し、両国関係改善への期待を込めたようだ。（六月二十一日、日本経済新聞朝刊）

㈢ 結び

孫戸妍が、その生涯において、日本文化、就中短歌にこれほど親しみ得たのは、日本において師に恵まれたことや、夫君が日本贔屓であった等の境遇の面のみではないと思う。

その柔軟な感性と率直な心情、そして強靱な精神力が、日本文化を、師の教えを吸収し、反日感情の強い国情下にあり乍ら、日本に対する愛着と祖国愛とを両立させた上で、短歌の道を結実させたのであろう。

筆者は、孫の生涯をかけた短歌への情熱と、その真摯にして率直な歌い振りに強い感銘を受けこの拙文をまとめた次第である。

終りにその感動の発露として筆者が詠んだ誄歌一首を添えて本稿の結びとしたい。

「万葉の大和心を詠みつづけ日韓繋ぎし孫戸妍はや」

（文中一部敬称略）

参考

「風雪の歌人」北出明編著　講談社出版サービスセンター
「争いのなき国と国なれ」北出明著　英治出版
「第五無窮花」孫戸妍　講談社
「孫戸妍短歌集（戸妍恋歌）」孫戸妍　韓国の出版社
「日本人こころの風景」中西進　創元社
「孫戸妍ドキュメンタリー試写会」資料より
新井宏氏（まんじ同人、韓国慶尚大学客員教授）資料と情報の提供

毛鳳忠さんと私

吉田　忠雄

一　はじめに

毛鳳忠さんは西安近代研究所の日本語通訳でした。私は毛さんと一九八〇年九月にはじめて北京でお会いしました。それから何回か中国と日本でお会いしています。最近は、私が計画している「花火大学院」の学生募集で一緒に中国の瀏陽市に行き、お世話になりました。

毛さんは私のもっとも親しい中国の友人の一人です。過去の思い出はだんだん薄れてきます。今がチャンスですので、毛さんとの交遊録を書くことにしました。中国人の良き友の多い私にとっては、摩擦の多い現在の日中関係は悲しむべきことです。

二　出会い

一九八〇年九月、私は須藤秀治中央大学名誉教授夫妻（故人）と共に初めて北京空港に降り立

ちました。北京工業学院（現北京理工大学）のご招待です。これは須藤先生の書かれた「火薬学」の中国語版が中国で出版されたのを機に話が始まりました。須藤先生から「吉田君も一緒に行かないか」と誘われました。須藤先生の第一回目の訪中には私は都合がつかず、須藤先生の第二回の訪中にお供をさせていただきました。

空港には、干永忠、陳活生、黄瑞江、毛鳳忠、その他の先生方が迎えにきてくれました。車の中から見る一九八〇年の北京の町は一九五〇年頃の日本の町にタイムスリップしたような感じでした。

しかし、その後五年ごとに見る中国は着実に経済的な進歩を遂げていきました。町にあふれていた古い自転車は新しい自転車に代わり、自転車の洪水は自動車の洪水に変わってきました。服装も一九八〇年にはじめて行ったときは人民服が主流でしたが、五年ごとにおしゃれな服装に変わってきました。二〇〇〇年に上海に行ったときには高層ビルラッシュを見て驚きました。

その後杭州に行ったときは、上海で見られたビルラッシュが杭州にも及んだことを知りました。二〇〇五年に内陸部の瀏陽に行ったときは、中国の現在の都市の発展も場所によって異なることを知りました。

須藤先生は講義のため空港から直接大学に行き、私は、須藤夫人と毛さんと共に故宮博物館に観光に行きました。毛さんが観光通訳です。毛さんとの付き合いの始まりです。私たちが最初についたところは大きな赤壁でした。何と大きな建物だろうと肝をつぶしました。この赤壁に大きな楼門がついていて、これが故宮博物館、昔の紫禁城の入り口天安門の次の午門であることを後

で知りました。

午門を入ると大きな広場があり、石彫のある石橋をはさんで向こう側に大きな大和門があります。大和門を過ぎるとまた大きな大和殿の前庭がありました。大和殿を過ぎると中和殿。保和殿と続きます。それから、乾清門。坤寧門、神武門と大きな門が一直線に続きます。その距離約一km、城壁の高さ一〇m、面積七二万㎡におよぶこの広大な宮殿の中にはさまざまな部屋が九千余りあるといわれています。とても一日で見きれるものではありません。このようなことは後で調べてわかったことで、当日はただ大きさと広さに圧倒されました。このとき、毛さんからいろいろな説明を聞いたのでしょうが、あまり覚えていません。

故宮博物館の珍宝館で須藤夫人から玉杯を教えていただきました。須藤先生は旧制高校の出身ですので、「ああ玉杯に花受けて……」の玉杯に興味を持っていて、前回に来たときに興味をもたれたようです。私も興味を持ち、それ以来中国各地を訪れて珍しい玉杯があると買って帰りました。しかしそれから長い間に親しい皆さんにお裾分けして玉杯は殆ど手元に無くなってしまいました。

夕方、宿舎となる北京友誼賓館に行き、そこで一週間すごしました。友誼賓館はソ連によって広い敷地に立てられた大きなホテルです。たくさんの建物と庭園があります。私たちの泊ったのは、自炊のできる別館です。須藤先生は前回来たときもここに泊っておられるので、勝手を知っておられ、夕食や朝食は一緒に館内のレストランにつれていってもらい食べました。庭園が広く、圧巻です。それを横切ると次々にホテルの建物が現れます。

翌朝は黄瑞江先生と毛さんが迎えに来てくれました。この日は私が講義をする日で、須藤先生は観光日のようです。北京工業学院は友誼賓館に隣接しています。広い敷地を持った工業大学です。朝のお茶の折に旧知の二人の先生に会いました。一年前にスウェーデンの火薬の学会でお会いした張明南先生と助教授の先生です。スウェーデンでは張先生とは初対面でしたが毎日散歩しながら英語でいろいろなことを語り合いました。

張先生は中国国防兵器工業西安二〇四研究所（現西安近代化学研究所）所長と北京工業学院教授を兼ねておられました。張先生は毛さんの直属の最高の上司でした。

早速、中国全土から集まった火薬関係の先生方を前にして私の講義が始まりました。通訳は干永忠先生です。干先生は西安二〇四研究所にいたことがあり毛さんとは旧知の間柄です。若き毛さんは見習の形でついておりました。しかしその後これが縁で毛さんは私の書いた本を三冊中国語に翻訳することになります。

干先生はハルピン工人の卒業生で、学識豊かで、日本語が上手です。おかげで、私の講義は私がしゃべった日本語のものよりも干先生の翻訳した中国語のものの方がよかったのではないかと思います。講義は、ニトロ化反応理論、火薬学、大気環境論、化学安全工学と多岐にわたりました。当時私が学んだことを全て紹介しました。おかげで私は中国の火薬学者の間で有名になりました。

中国での講演はありがたいと思いました。私が二分間しゃべりますと、二分間翻訳してくれて、その間次の話を考えていられるからです。またこの講義のあとで、私は須藤先生と共に北京工業

学院の顧問教授にしていただきました。これはひとえに須藤先生のおかげです。

毛鳳忠さんには方々案内してもらいました。万里の長城と明の十三陵、天壇公園、天安門広場、頤和園、瑠璃廠の栄宝斎などです。栄宝斎では、当時の公明党の竹入委員長夫妻に会い、挨拶を交わしました。当時公明党は日中交流で重要な役目を果たしていました。栄宝斎では白石作の美しい花の版画を買い、日本への土産としました。その内の一枚は一二月の十六夜会の交換品として、袋田さんに差し上げました。

九月一二日には、頤和園のレストランで私たちのための招待宴が開かれました。有名な石舟のそばです。約二〇名がこの宴に参加しました。酒は最初ワインでした。とりあえず乾杯をしましたが、中国側で酒の飲める人は約半数でした。毛さんもあまり飲めないようでした。今は少し飲めるようになりました。

座が進むと「カンペイ」（乾杯）といって酒を相手に注ぐ人が出てきました。「カンペイ」を受けると、全部のみ干して杯の底を見せなければなりません。そのうちに強い酒に変わり、「カンペイ」は続きました。二、三人が特に強く、最後まで飲みつづけました。私もそれに付き合いましたので、酒飲みと見られるようになりました。

その日は、丁度私の五〇歳の誕生日にあたりました。工業化学科主任の陳活生先生が私の誕生日を祝って、詩を贈ってくださいました。毛さんが訳してくれました。こんなことは生涯初めてなので感激しました。

「好夢令」

鮮花、友誼、美酒、
歓慶五旬大寿。
欣逢華中遊、
意義更添一籌。
挙杯恭賀、
友誼天長地久。

吉田忠雄先生来我院講学期間、
適途五十寿長、特作〝好夢令〟
詞一首相贈以資慶賀。

北京工業学院化工系
陳活生
一九八〇年九月一二日
於北京

友誼賓館に滞在中二人の著名人に会いました。一人は国語学者の金田一春彦先生（故人）です。当時中国は日本語教師を養成するために、約一〇〇人の日本語教師を日本から招待しました。そ

の団長が金田一先生で、私たちと同じ友誼賓館の離れに宿泊していました。須藤先生ご夫妻と夕食の帰りに金田一先生とそのお弟子さんにお会いし、立ち話をし、写真を撮らしてもらいました。金田一先生とは帰国後神田の学士会館の前で再びお会いしました。

私は、一九七五年から東京消防庁の依頼で、大震災時の薬品出火の研究をはじめました。その研究が半ば終わった一九七八年六月一二日に宮城県沖地震が起き、東北大学や東北薬科大学で薬品出火が起こりました。ＴＢＳでは、薬品出火の様子を放映するために、私に実験を依頼しました。そのときのＴＢＳの担当ディレクターが小笠原紀利さんです。一九八〇年に私が北京に行ったとき小笠原さんはＴＢＳの北京特派員でした。そして、山本市朗夫妻（故人）を紹介してくれました。

山本さんは「北京三五年」（岩波文庫）を出版したばかりでした。山本さんは、戦争中に鉱山機械技術者として中国に渡り、戦後も中国に残って中国の復興に貢献しました。しかし文化革命中はスパイ容疑で監獄に収監されました。「北京三五年」はこのような山本さんの波乱万丈の三五年間の経験を活写しています。このような方と一夜楽しくお話をすることができたことを、お二方を紹介してくれた小笠原さんに感謝しています。

北京での楽しい一週間はあっという間に過ぎました。この間に黄瑞江先生と陳活生先生のお宅に招待され、家族ぐるみの歓迎を受けました。夢のようでした。最後は関係の深い方々が北京空港まで送ってくださいました。このときの記念撮影の写真は一生の思い出です。残念ながら毛さんは写っていません。多分このときはカメラマンだったのだと思います。

三　五年後の再会

帰国後千永忠先生との文通は続きました。そして、数年後に北京工業学院教授の千永忠、陳福梅先生、および西安近代化学研究所副所長の劉忠良先生のお三方が来日されました。私はお三方を関係各所にご案内しました。それから一九八五年に、東大の合成化学の先生を連れてくるようにという依頼が来ました。東大の合成化学科の内田安三教授を連れて行くことにしました。内田先生は、その後長岡科学技術大学学長及び新潟産業大学の学長を歴任しましたが、最近なくなられました。北京工業学院は、私のために通訳として毛鳳忠さんを選んでくれました。

私にとっては二回目の北京訪問なので、講義の印象はあまり強くありません。五年前に比べて町はきれいになり、人々の服装も画一的な人民服から個性的な洋服に変わりつつありました。自転車は依然として多く走っていましたが、新しい自転車が増えていました。毛さんと二人で北京のダウンタウンを散策しました。昼飯は街の人たちが食べるところで食べ、北京の庶民の味を楽しみました。

今回は張先生や毛さんの根拠地である西安近代化学研究所にも行きました。当時張先生はこの研究所の名誉所長でした。この研究所のX線技師をしている毛さんの奥さんにもお会いしました。毛さんは、私を三蔵法師ゆかりの西安大雁塔、秦の始皇帝ゆかりの兵馬俑、古代からの石碑が集められた碑林、楊貴妃ゆかりの華清池などの名所に案内してくれました。

張先生の御宅と毛さん宅に招待されました。夫々歓待されました。毛さんの二人のお子さんは

まだ小学生でした。一九八五年のことですから今から二〇年前です。この二人が今日本にいて二人とも大学を出て社会人として活躍しているのを見ると夢のようです。そしてこの二人がご両親を日本に招待しております。昔の日本の親孝行物語が現在の中国の人たちによって実行されています。

四　日本での再会

毛鳳忠さんは通訳の仕事で何回か日本に来ました。一九八三年に初めて日本に来たのは膀胱結石の微小発破の日中共同研究の通訳としてでした。この研究は火薬の利用研究ですので、私も興味があり関係者と会っております。毛さんとは東京のホテルでちょっと会いました。

一九八四年には、毛さんは四川省成都市の光明器材工場の研修生と共に来日し、研修先の田中貴金属（株）が世話をした伊勢原市の大きな日本家屋に合宿していました。私はこの家に招待され、四川の皆さんが作った本場の四川料理を堪能しました。この調理は辛いですが辛さを感じさせないまろやかな味でした。お酒もたくさん飲んで帰ったので、家内からくさいといわれました。

数日後に毛さん、成都から来た通訳、および田中貴金属（株）の勝野さんの三人を私の家に招待しました。家内は飛び切り辛いと自称する中華料理で接待しました。しかし毛さんと四川から来た友人はちっとも辛くないといいました。その折に私の家族とこの三人の客人と記念撮影をしました。

その前後かと思いますが、毛さんの娘さんの英さんが日本に留学してきました。私はその保証

人になりました。実質的なお世話は殆どできませんでしたが、毛英さんは健気に、独力で道を切り開き、駒沢女子大学を卒業し、現在会社に勤めています。

またその弟の偉さんも日本に留学してきました。毛偉さんは一年間日本語学校で日本語を身につけ、高級レストランでアルバイトをしながら、駒沢大学を日本政府の奨学金をもらえる優秀な成績で平成一四年三月に卒業しました。そして、お姉さんの英さんと同じ会社に勤め、日中両国をまたにかけて活躍しています。

この二人の姉弟の招待で毛さん夫妻は平成十三年の一二月十三日に来日し、二、三ケ月日本で過ごされました。一二月一六日が都合が良いということで、東京丸の内大丸の椿山荘へ招待しました。そこで十六夜会が開かれていたので、そのメンバーにも紹介しました。

その後、毛鳳忠さん夫妻を足利に招待し、ばんな寺、足利学校、足利短期大学、足利工業大学を案内しました。大変喜んでくれました。翌一月四日には毛一家が越ケ谷の拙宅を訪問してくれました。我が家も娘たちの家族を含めた全員で迎えました。歓談をして記念撮影をして両家の絆が深まりました。

私の家の和室には次の掛け軸がかかっています。

吉田忠雄先生、

近者悦遠者来

孔子七十七代嫡孫女　孔徳

二〇〇〇年八月

毛一家を迎えて、この軸の言葉をかみしめました。

五　交友の復活

平成一四年三月に毛偉さんが大学を卒業すると、毛英、偉の姉弟は私たち夫婦を大久保の韓国料理店に招待してくれました。彼らの味覚は確かで、私たちは旨い韓国料理を堪能しました。彼ら二人は時々拙宅に挨拶に訪れるようになりました。

平成一六年一一月に足利工業大学は通称「花火大学院」を立ち上げることを決めました。中国は現在世界最大の花火生産国です。中国からも「花火大学院」の学生募集をすることにしました。当時毛鳳忠さんと毛偉さんは偶然に蘇州の日系企業に勤め、又は出張していました。

先ず偉さんがインターネットで世界最大の花火生産地瀏陽市の花火会社を調べてくれました。私はそれをもとに瀏陽出張計画をまとめました。

結局、瀏陽には私と毛鳳忠さんと足利工業大学の丁大玉さんと三人で行くことになりました。毛鳳忠さんは出張目的にかなうような最大限の努力をしてくれました。これからも毛一家と私の交友は続くと思います。

六　毛鳳忠さんの経歴と人柄

毛鳳忠さんは一九四四年一二月二五日に中国遼寧省新民県に生れ、一九六七年に大連外国語学院を卒業しました。時あたかも中国文化大革命の時代で、学院卒業後すぐに南京軍区に属する解放軍農場に行かされ、解放軍の再教育を受けました。

一九七〇年に中国国防兵器工業西安二〇四研究所の情報室に配属され、日本語の本の翻訳を担当しました。一九九五年に通常の停年より十年早く依願退職しました。おそらく、外に通訳の仕事がいくらでもあったからだと思います。

一九七〇年代及び一九八〇年代には、日本語の科学技術資料の翻訳と日本語の教育に従事しました。この中には吉田忠雄編著及び監訳の「環境保全と汚染防止の技術」、「化学薬品の安全」及び「危険品輸送の応急措置指針」が含まれています。

一九八〇年代になると、中国の開放政策実施に伴い、日本語通訳の機会が増え、毛鳳忠さんは中国各地で通訳を担当するようになりました。日本の会社では、保谷ガラス（株）、田中貴金属（株）、松下電工（株）、キャノン（株）、ソニー（株）、ダイセル（株）、奈良日日新聞社（株）、旭ガラス（株）、東京コスモス電機（株）、日立製作所（株）、ダイキン（株）などの中国での合弁事業に毛さんは通訳として貢献しました。

毛さんは、三国志に登場する英雄が髭をそったような風貌をしていますが、誠実で親切な人です。

以上でこれまでの私と毛さんの交友の話は終わりです。参考までに毛さんの人柄を伝える東京コスモス電機社長吉田一郎氏から陝西宏星器材工場工場長趙賢栄氏当ての一九九五年六月七日付けの手紙の一節を紹介します。

――今回の技術指導が順調に進んだもう一つの功績は、毛先生をはじめ通訳の皆様の優れた通訳技術によるところが大きいと思います。特に、毛先生の生活面までの公私にわたるご配慮に厚く御礼申し上げます。――

多率寺（たそるさ）にて

新井　宏

四年半前の『まんじ』八十一号に書いたものを再掲するにはわけがある。

その日生まれた孫・富取泰治とその弟・新太が、今では我が家の話題の過半を占める。五年間うつ病に悩んだ弟も、奇跡的ともいえるほど回復し、活躍している。障害を持つ我が子・武もゆっくりではあるが自立心を高め、元気に働いている。

悲しいこともあったが、その間の韓国通いによって、私の趣味・歴史や考古学の研究も望外に進展した。

『まんじ』に小説を書くという課題はまだ実現していないが、一度も休むことなく書きつづけている。

学生たちとの交流が楽しい韓国慶尚大学には、もう少し通ってみようと思っているが、韓国生活を始めたころに書いたこの「多率寺」には、それらの起点となったような懐かしさを覚える。

韓国に来てからというもの、多少むきになって、海印寺、通度寺、松広寺、梵魚寺、隻谿寺など慶尚南道の有名な古寺を歩き回っている。いずれも渓谷の奥まった森林の中にあり、その薄暗さの中で、伽藍部だけがスポットライトをあびたかのように輝いていて、散策を兼ねた「古寺巡礼」には好適である。

もっとも、この地方の寺院は、たいてい壬辰倭乱（文禄慶長の役）の時に一たん廃墟と化しており、比較的に新しいものしか残っていない。しかも戦禍の疲弊を物語るかのように、建物には粗末な木材が使用されており、それらが青、赤、黄、緑などの原色で豪華に装われているのを見ると、多少の興ざめは否めない。かえって、荒廃と調和させてしまった方が、日本的な感覚では味わいがあるのではなかろうか。

しかし一般に、これらの古寺は今もしっかり生きているかのように思えた。売店では、約束事かのように読経のテープを流しており、本堂では多くの信者たちが立伏礼を繰返していた。たしかに観光化の流れが押し寄せてきてはいるが、それでも信仰の場や生活の場としての第一義的な意味は失っていないように見受ける。あるいはそのためにこそ、鮮やかな彩りが必要とされているのかも知れない。勝手な感想は慎まなければなるまい。

六月六日（水）は韓国の顕忠日。休日なので、晋州市から西三十キロのところにある多率寺に出かけることにした。隻谿寺とともに中国から初めて茶が入ってきたところで、般若茶の故郷とも言われている寺である。茶道を趣味としている妻と、共通の話題にできるかと思うと心が弾む。

異国に離れて生活していると、そんな工夫もふたりを近づける。

地図で調べると、列車なら行けそうである。列車の時間がわからないが、いつもの登山帽に古びたザックのスタイルでとにかく晋州駅に向う。

たまたま一時間位待てば八時半の列車があるという。多率寺駅に止まるのは、一日に三本しかないというのだから、全くついていたと言うべきであろうか。駅の周辺を散歩しながら時間をつぶす。もちろん列車で行くのは初めてである。料金はわずか千百ウォン（約百円）。

普通ならどこに行くのにもバスを使う。安いし、近郊都市間のバスでさえも大体は十分間隔で運行しているからである。自動車の普及と共に近代化が始まった韓国では、鉄道の近代化を完全に素通りしてしまった。いくら国策としてバスよりも安い料金を設定しても、一日数列車ではどうにもならない。ソウルと釜山の間に新幹線を建設中であるが、はたしてバスに対抗できるのであろうか。そんな議論が韓国でも持ち上がっているという。

三十分ほどで多率寺駅に到着したが、降りたのは三人だけ。もちろん無人駅である。帰りの列車を確かめると一時間後に一本あるが、それにはとうてい間に合わない。そうすると午後の六時過ぎまで全く列車はない。やはり帰りはバスになろう。

左に川、右に小丘陵の地形に細長い段々状の田圃が広がっている。その中をダンプカーの行き交う歩道のない道が通っている。ちょうど田植えの真っ盛りであった。九十年ぶりの早魃だと新聞は騒ぎたてているが、この辺には十分の水が供給されているようで、水面が輝いている。もっ

とも、この田植え時期になると、一挙に水がめが空になってしまうのが、米作地帯の宿命で、足りないとなると余計に確保するような現象も発生しているのかも知れない。

そういえば絶えて日本では田植えを見ていない。田植機とはこんなに簡単でこんなに威力のあるものだったのか。この農業革命によって韓国も大幅に労働人口を工業化に振り向けることができて、急速な先進国化に成功したのであろう。働き手がみんな都会に出ていったのも日本と変るまい。だから休日こそ稼ぎ時で、若者も多く混じっている。その中で、おばあさん達が手植えをしている。

そうなのである。韓国は先進国でもあり後進国でもあるのだ。道路にござを敷いて日ながら手作りの野菜を並べて売っているアジュモニたちの商売は、どう考えても人件費も商品もただでないと成立しない。それでも彼女たちはたいてい携帯電話をもっている。このアンバランスが韓国を象徴している。

道路沿いの山裾には巨岩が露出している。韓国では山や渓谷に入ると巨岩だらけで、山と言えば全て岩で出来ているかのようである。それがこの近辺では山裾まで広がっていて、まるで巨大な岩盤の上に表層だけ一皮土を被っている状態である。これでは大きな木が育つはずがない。すこし根を張れば、岩に突き当たってしまうからである。それでも根はたくましく伸びている。だから、韓国の寺院の木材が貧弱なのは、何も秀吉のせいばかりでもなさそうだ。このような地質地形では捩れた木でも大切に活用しないと建物を造ることができないのであろう。それにしても、これだけ豊富な石材があるのに、なぜヨーロッパのように石の文化が成立しなかったのであろうか。岩質に問題でもあるのであろうか。寡聞にしてこのようなことをまともに議論しているのを知らない。もっとも、古代韓国では城壁造りに素晴らしい築石文化をもっていたし、現代の韓国はコンクリートとレンガと石で町が成り立っている。

一時間ほど歩くと、多率寺の参道入り口に至る。ここから右折して多率寺入り口まで二十分ほどかかる。

途中、珍しく漢字で「鳳鳴山多率寺参道」と書かれた石柱があった。乙巳年とあるから、一九〇五年であろうか、あるいはもっと古いものかも知れない。ただ、多率寺の山号は他の本では方丈山となっている。何か事情があるのだろうが、ひとり歩きでは確かめようがない。

それにしても、韓国の漢字廃止は徹底している。ワールドカップを前に、英語と漢字で併記する動きはあるが、今はどこを歩いていても、ハングルしか見かけない。参道に入ってからも、ハングルでいろいろと書いてあるが、それが南妙法蓮華経であったり、南無阿弥陀仏だったりするので奇妙な感じがする。

多率寺の門から、伽藍までは六百米くらいある。他の寺院と同じく、渓谷沿いに木々のトンネルが続いている。見あげると、木の葉が光を通して柔らかな緑に輝き、それが風にそよいで、時に裏面を白く反射させている。

その光のゆらぎの中で、突然、精神を病んでいま病院にいる弟のことを思い出す。幼い彼を連れて、鎌倉の森を歩いた日にもこんな光を見たことがあった。

ひと回り以上も違う弟は、有名私大を出て、大手商社に入り、美人の妻を娶り、愛らしい息子にもめぐまれ、傍目には順調そのものであった。しかしそれが重荷になった。いつも人の目を意識して、仕事の上では上司や同僚から咎められることを極度に嫌った。だから、与えられた仕事は、必要以上に完璧に行って、自己満足していた。

しかしそれでは、仕事がさばけるはずがない。地位が上がれば上がるほど、毎日の雑事をさばくのが仕事になるのに、さばけなければ自然と置きざりにされてしまう。同僚たちから遅れはじめた。

それを本人は、学歴のせいだと勘違いしていた。有名私大出身とは言え、まわりにはもっと有力校出身者がうようよいた。劣等感に苛まれるようになり、野球をやめ、ゴルフをやめ、友達付きあいを絶ち、ひたすら仕事と妻と子供に心を集中し、将来に備えるため、異常なほどにお金に執着しはじめた。

やがてお金や妻や子供に対する過大な関心は、ひとり相撲となり、ちょっとしたことにでも怒りを爆発させるようになっていった。愛する妻や子との間に溝がひろがった。そしてリストラの季節を迎えた。

大手商社では、社員の一生を面倒みる仕組みが出来上がっていた。弟はその仕組みを信じようとしていた。しかし時代の流れはもっと速く激しかった。さすがに既得権をそのまま無にはしなかったが、時間を切って、それまでに退職すれば旧制度の恩恵を受けられると迫られた。力の有る者と力の無い者から去っていった。その中に弟もいた。

退職がきっかけであった。愛する妻が去っていった。最初はお金の威力で引きとめようとした。しかしそれが足かせになって、結局は退職金まで与えて別れることになってしまった。親からの遺産と会社からの年金程度は残ったが、再就職もままならず、孤独と将来への不安の中で、精神に異常をきたした。

弟にはしばしば海外旅行を勧めていた。異文化に触れると、いままで拘っていたことが小さく見えることがあるし、まして貨幣価値の異なる国に行けば、お金の心配も和らぐであろう。それには、ポルトガルやスペインが良い。いやタイの方が暮らし易いとも聞く。

ああ、そうだ。弟を韓国に連れてきて、一緒に生活してみたらどうだろうか。その時は「こうして、ああして」と思いが駆け巡る。

参道が行き止まりになったところに駐車場があり、そこから階段を上ると、傾斜地に伽藍が広がっていた。大雄殿（本堂）らしい位置に寂滅宝宮と額の掲げられたお堂がある。ハングルで「佛紀二五四五年」「舎利塔重修佛事百日祈禱道場」と垂れ幕が出ている。韓国ではどこでも垂れ幕の洪水であるが、寺院も例外ではない。参詣者には女性が多いようである。堂内でさかんに

立伏礼を行っている。

普通なら本尊の安置されるべき場所には何もなく、その後ろに大きな嵌め殺しのガラスがあり、それを通して裏にある舎利塔が望める。最初は巨大な鏡かと思ったが、ガラスを通してかすかに歪んだ舎利塔が、暗い堂内を額縁に見立てて浮き上がっている。平等院鳳凰堂や奈良浄瑠璃寺で、尊佛のお顔を小さな覗き穴を通して池に写して拝する趣向があるが、それに比べたら何と大らか趣向であろうか。説明によると、やはりここはもと大雄殿であったが、一九七八年に、弥勒菩薩画から舎利百八骨が発見されたため、それを舎利塔を作って安置して、こちらを拝礼殿に改称したものらしい。

寂滅宝宮のまわりには、応真殿（羅漢殿）や極楽殿がある。こちらの方が由緒ある建物らしくハングルと英文の案内板が立っている。いずれも似たようなことが書かれていて、新羅智詮王四年（五〇三）に縁起祖師がここに麗岳寺を創設したが、善徳女王五年（六三六）にこれらの二堂を建て多率寺と改称したという。ここも例にもれず、壬辰倭乱で完全に焼失し廃墟に化したとある。

そんな説明文を読んでいるところに携帯電話のベルが鳴った。一応「ヨボセヨ」と応えるが、妻からの電話であった。妙子のところに予定通り男の子が生まれたという。初孫である。気分が高まり息せき切って質問するが、どうもこちらの声が聞えていないらしい。そういえば、山地や人里を離れると、携帯電話が繋がらなくなるという。電波中継所が近くにないと、使えなくなるタイプらしい。そうこうしているうちに結局切れてしまった。こちらから架け直したり、向こうからの電話を待ったりしたが、状況はますます悪くなるばかり。とにかく、無事出産したらしいので、あわてることもあるまい。

しかし、もうゆっくり境内を見学している気にもなれない。新聞の切抜きによれば、多率寺は、日本の統治下にあって、反日抗争の拠点となっていた。一世を風靡した思想家や詩人、小説家、画家それに政治家たちが、三国史の憂国志士の如く、集まっていたという。そんな面影を探してみようと思ったがやはり落ち着かない。

売店に立ち寄って、茶器を見る。茶の歴史では由緒ある寺らしく、味わいあるものが無造作に置かれているが、買うのは妻と一緒の時にした方が無難である。資料を読んで見るが言葉が難しくてよく判らない。おおよその意味は、ここの茶は竹向茶といって、油っ気のないお寺の食事にあわせて、胃の負担にならないよう、竹を使用して作った香り高くソフトなものということらしい。後で思えば、初孫の誕生に合わせて何でも良いから買っておけば良かったと思う。

多率寺の門まで戻ると、休憩所があった。まだお昼にはちょっと早かったが、とりあえずひとりで乾杯をすることにした。電話はまだ通じない。

ビールと軽い食事をとって外にでると、心地よくふらつく。暑い日差しであった。

そういえば、妙子の生まれた日もこんな日差しであった。たまたま日曜日で子供達をふたり連れて妻の実家に出かけたところであった。実家に着くと、前置胎盤で異常出血があり、国立相模原病院に緊急入院したとの連絡が入っていた。

様子が全くわからない。とにかく病院に急行しなければならない。車よりも電車とタクシーの乗り継ぎが早いと考えて田園都市線で長津田に向った。そこまでは順調であったが、長津田には一台もタクシーがいなかった。子供は駄目かも知れない。妻はどうしているだろうか。

十分、十五分、二十分。まだ来ない。もし電車が来たら隣の町田駅まで行った方が早いだろうか。いや、もう少し待てば来るに違いない。三十分、四十分、まだ来ない。七月の初めだと言うのに、真夏の日差しであった。駅前は死んだように暑く静かであった。

やっとの思いで相模原病院に到着した。受付に駆けつけると白帽の看護婦さんがこちらを振り向いた。たまたま妻の帝王切開手術を終えて、いま休憩中の看護婦さんだという。帝王切開で生まれた胎児は、酸素が欠乏して蒼白だったそうだ。危ないところだったという。

美しい人であった。白い帽子が良く似合っていた。絶対にこの顔は忘れまい。

その妙子が男の子を産んだという。異常がなければそれで十分だ。いや異常があったって良いではないか。

参道入り口の国道までくると、あいかわらずダンプが往き来していた。やっと電話が通じた。今度は大丈夫だ。予定日よりも一週間近く早く生まれて、体重は二八五〇グラム。お父さんに似ていたらどうしようと心配していた妙子、相手側に似ていて一安心しているらしい。苦笑する。

さて、バス停を探そう。もっとも今日は歩くための外出だ。この前の土曜日には、登山好きの教授や学生達と智異山に登って来た。韓国ではもっとも険しい山で九時間かかった。日曜日には、慶州まで遠出して、主要な遺跡を歩きまわり、ついには念願の南山新城跡にも登ってきた。一日平均一万五千歩を目指しているが、今月に入ってからは、平均二万歩を超えるペースだ。今日もできるだけ歩こう。そのため、バス停のある駅の方とは逆の方向に向って歩き出す。

家並みが途絶えて久しくなったころ、突然、高層アパート群が目に入った。韓国はどこに行っても高層アパートばかりだ。こんな田舎にまで、高層住宅を建てるとは何たることか。

近づくと、それは韓国軍八二六五部隊の宿舎であった。顕忠日は、国のために命を捧げた人たちを偲ぶ日、軍隊に休日があるのかどうか知らないが、迷彩服の守衛兵が、不動の姿勢で立っている前で、私服の青年たちが何か談笑していた。垂れ幕には、天下無敵白虎隊とある。ここだけは漢字で書いてある。そうでないと感じがでないのかも知れない。白虎隊。どこかで聞いたような気もする。

道は、南海高速道路がすぐ近くに見えるところで町に入った。町といっても道路沿いにいくつか商店が連なっているだけである。バス停が町並みのはずれにあった。しかし、もう少し歩きた

い。

歩いていると車が止まってくれる。乗って行けと言う。もっとも、自動車道路を歩いているものなど皆無である。韓国ならヒッチハイクは容易であろう。まして、道路が山間部に入ると、次の停留所まで三十分以上もかかってしまい、当てにしていたバスも行過ぎてしまった。

また、弟のことを想った。彼はいつも「もし……」「もしも……」と仮定の心配ばかりするようになっていた。大手商社に勤めていることを誇り、美人の妻を勲章とし、いつも自分よりも上ばかり見て生活し、そうでない人達を見下している風さえあったことへの反動であろうか、とにかく脱落するのを恐れていた。

世の中には、恵まれない人たちの方がはるかに多いのだといくら言っても、けっして耳を貸さなかった。事実、今でも弟はまだ恵まれているし、これからの人生も閉ざされてはいない。そこから抜け出すには、早く落ちるところまで落ちなければだめだというのが、妻と私の意見であった。底を見たことのない弱さなのだ。

私たちには武という知的障害を背負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。

その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。とても他人との比較にはならないが、以前の彼と比較すれば、確実に一歩ずつ進んでいる。その進歩を見つける度に、私

たちふたりは喜び合ってきた。武のお陰で、私たちはより深く人生を味わえたとも思っている。将来に不安がないかといえば、そんなことはないが、弟などには、この気持が全く分らないのであろう。恵まれすぎていると人の心が分らず、恵まれないと人生を深く味わえる。人生とはそんなものであろうか。

だから、初孫に何かあっても、妙子は強く生きて行けるはずだ。

やっとバスに乗る気になった。田舎のバスに乗って、また思い出した。

日本語もおぼつかない武がなんとか公立の中学校に入れてもらえた時のことであった。英語の授業が始まった。せめて、読み方だけでもと思い、毎朝一時間、武と一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」という物語があった。

刑を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の樫の木に黄色いハンカチを掲げて欲しいと手紙を送った。ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、樫の木いっぱいに結ばれた黄色いハンカチの群であった。

毎朝、おなじところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒なみの成績を得たのが英語であった。

その武と離れていま韓国に来ている。大学の金属系招聘教授という立場は作ってもらっているが、いわば趣味の歴史と考古学のためである。武のために、こんなことをしていてはたして良い

のだろうか。

しかし、武がまた少し成長したという。それを知らせてくれる妻とは心が通う。そうだ。この次は、妻と一緒に多率寺に来よう。やはり茶器は買わなくて良かった。

結局この日は、二十五キロ近く歩いた。宿舎のアパートではまた乾杯が待っている。そして今日一日が終わる。

いつかきっと、これを読んでくれるかも知れない初孫を想いながら。

まぼろしの女帝

隆恵

近鉄南大阪線の奈良県大和高田市の尺土駅から御所市に向かう御所線に乗り、忍海駅の手前の車窓右手の線路沿いにこんもりした森が見えてくる。これが我が国最初の女帝なのだが、公には認知されていないまぼろしの女帝飯豊天皇の陵墓である。

この飯豊天皇とは、西暦四八三年頃にここ忍海を都として十一ヶ月間在位したと記紀に記録されている飯豊女王のことであり、十二世紀初頭に書かれた扶桑略記では第二四代天皇と記されている。

奈良時代以前の古代のロマンが集積するその都は、いっとき大阪湾周辺の河内国に都が作られた事も何回かあったが、そのほとんどが奈良盆地の東部に集中している。一番古くは三輪山の麓周辺現在の桜井市と天理市に置かれ、俗に崇神王朝及び応神王朝の時代と言われる。

その後の継体・欽明王朝になると、やや南下して大和三山周辺現在の橿原市に、そしてその後

は飛鳥現在の明日香村に都が置かれ、一般に飛鳥時代と総称される。更に時代が下って持統天皇の時代にやや北上して天香具山の麓に藤原京が築かれ、その後に奈良盆地最東北部現在の奈良市に平城京が築かれ、奈良時代を迎える。

数百年に及ぶこの時代に、飯豊女王と男の武烈のみがこの奈良盆地西部の葛城地方に都を置いたとされる。しかし皇統譜は彼女は天皇とみなしていない。

明治になって天皇位を追贈された人物として、壬申の乱で天武天皇に殺された大友皇子が弘文天皇を、また女帝称徳天皇により廃位されて淡路島で不遇の死を迎えた淳仁天皇等が存在するが、飯豊女王には追贈されなかった。

しかし、その陵墓は宮内庁により飯豊天皇陵として管理されている。

我が国の女帝は、認知されているのは後記のとおり八名十代のみであるが、これとは別にまぼろしの女帝が二名存在する。

本稿では主としてこの隠れたまぼろしの女帝について述べてみたい。

旧今議論されている女帝の復活となると、実に江戸中期の後花園天皇以来の約三百年振りの出来事となる。ましてや、女系天皇を認めるとなると、勿論本邦初の出来事となる。

そもそも、女帝が頻発されたのは飛鳥時代と奈良時代であり、その後皇位を巡る幾多の動乱があったが長年女帝は輩出されず、約八百五十年振りに復活するのは江戸時代初期の後水尾天皇と三代将軍徳川家光との確執によるものであった。家光が公家諸法度により朝廷と公家社会に直接的な介入をしたのに対して、後水尾が抗議して皇位を投げ出した形となり、天皇と二代将軍秀忠の息女和子との間に生まれた皇女の明正天皇が即位したのであった。

女帝は、俗に「中天皇」と称されるように、次期皇位を巡る争いがあるときに擁立されている。女帝たちの即位の事情はさまざまであるが、大別して次の四つのパターンに分類できる。

①前天皇の皇后として自らの直系子孫への譲位を目的とする中天皇

皇極天皇（復位後斉明天皇）は、舒明天皇の皇后として長男の中大兄皇子、後の天智天皇への譲位を目的とし、一方持統天皇は天武天皇の皇后として遺児の草壁皇子の忘れ形見である後の文武天皇への譲位が目的であった。

推古天皇の場合は、敏達天皇の皇后として竹田皇子を設けているが、竹田皇子が推古の即位前に亡くなったのか即位後なのかが不明であり、実子への譲位を目的としていたかどうかは全く分からない。

しかし、崩御に際する遺言どおり竹田皇子の墓へ合葬されている。この遺言は、推古が譲位を

果たしえなかった竹田皇子への母親としての愛情の深さがにじみ出ており、推古の人間らしさが珍しく表現された書紀の記録である。要するに推古は、蘇我馬子の傀儡政権だったのであろう。

②皇后ではないが自らの直系子孫への譲位を目的とする中天皇

元明天皇は、天武天皇と持統天皇の間の唯一の皇子であった草壁皇子の妃で、後の文武天皇を設けたが、その文武が幼い後の聖武天皇を残して早世したため、聖武即位までの中継ぎとして即位する。

しかし元明は、孫の聖武への譲位前に老衰のため長女の後の元正天皇に譲位し、念願の聖武の即位を見ずして崩御する。

③天皇の皇后でもないが、実の兄弟皇子への譲位を目的とする中天皇

元正天皇は、実弟の聖武天皇へのつなぎとして即位し、聖武に無事譲位する。

江戸時代中期の後桜町天皇も実弟の後桃園天皇に無事譲位する。

江戸時代初期の明正天皇も結果的に異母弟の後光明天皇に譲位するが、即位の事情からこのカテゴリーには当らない。

これに加えて、まぼろしの女帝の飯豊女王と間人皇后がこのカテゴリーに入る。この二人の女帝については、後で少し詳しく述べる。

④譲位すべき自らの直系子孫がいないのに即位する長期政権の天皇

推古天皇は、先に述べたように実子の竹田皇子への譲位目的というよりも、前天皇の崇峻天皇が大臣の蘇我馬子に殺害されたので、蘇我馬子の推戴で即位し、聖徳太子を摂政とした三十五年間の長期政権となる。

その推古は死を前にして、田村皇子（舒明天皇）と山背大兄皇子、（聖徳太子の皇子）の二人に意味深の言葉を残し明確な後継指名をしなかったので、大臣の蘇我蝦夷と同属の叔父の境部摩理勢と武力闘争となり、結局蝦夷が勝利して蝦夷らが推挙した舒明天皇が即位し、後々の天智天皇（舒明の皇子）誕生の端緒となる。

孝謙天皇は、聖武天皇の唯一人の子であり、次に譲位すべき近親の皇子はいなかったが、聖武から生前に譲位されて即位する。その後、天武天皇の皇子の舎人親王（日本書紀編纂の総裁）の皇子であった後の淳仁天皇を養子に迎えるが、謀反の罪で廃位させ自ら復位して称徳天皇となる。

この称徳時代には有名な僧道鏡への譲位問題が起きるが、結局叶わず通算十五年間在位して崩御する。我が国で女系天皇誕生の機会は、この称徳天皇のときが唯一の危機であった。

歴史に仮の話は禁句だが、道鏡に皇位を譲位していれば、称徳の年令からして子が生まれる事もなく、その後どんな歴史となったのか想像すらできない。

以上が女帝たちのパターン化の一例であるが、この女帝の背後には必ず陰の真の実力者が存在しており、推古には蘇我馬子がおり、皇極・斉明には中大兄皇子と中臣鎌足が、持統・元明・元

正には藤原不比等が、孝謙には藤原仲麻呂が、称徳には道鏡が、明正には徳川家光がいた。

しかし、一時ではあるが真の権力者振りを発揮したのは、持統天皇唯一人であったと言えよう。

即ち、夫の天武亡き後、持統の唯一の皇子であった故草壁皇子の幼子、持統にとっては唯一人の孫の皇子後の文武を抱え、並み居る大勢の天武の異腹の有力皇子たちを差し置いて、自分の血統への譲位をひたすら目論む。そのために、天武の異腹の有力皇子の即位を拒んで自ら即位し、智恵者の藤原不比等を抜擢・重用し、更にその娘の宮子を文武の妃に迎え、後事を不比等に任すようになる。

これまで女帝八名十代について簡単に触れてきたが、そもそも我が国に最初の大王が出現したのは、三世紀中頃の邪馬台国の女王卑弥呼である。魏志倭人伝によれば、

倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王となす、名づけて卑弥呼と言う、鬼道に事へ、能く衆を惑わす。夫婚なく、男弟あり、佐すけて国を治むとあり、その後の台与も邪馬台国の女王であったと記す。

その後の女帝は、三韓征伐で有名な神功皇后であり、夫の仲哀天皇が熊襲征伐の途次病死（一説には戦死）した後、身重の身ながら男装の身なりで三韓を征伐して、その帰路筑紫の国で後の応神天皇を生む。

書紀によれば、神宮皇后三年に後の応神を皇太子とし、同六十九年に百一才で崩御し、応神はその翌年即位となっている。この神功皇后は、記紀の記録どおりであれば中天皇というより真の天皇ともいうべき超長期政権であるが、この皇后にも陰の実力者として寿命二百何十年という武内宿禰という伝説的大臣がいる。この記録は、史実とは到底考えられないので、さすがに皇統譜では天皇とはしていない。

さて、次に登場する女帝が冒頭に掲げた飯豊女王である。記紀の僅かな記録によれば、話は大分複雑となるが要約するとおおよそ次の通りである。

五世紀後半は、応神天皇・仁徳天皇・仁徳の皇子達の兄弟である履中天皇・反正天皇・允恭天皇の五代は平穏無事に皇位が継承されるが、允恭天皇の皇子の安康天皇とその弟の雄略天皇の即位に際しては、後継争いのための血の粛清が相次ぐ。

安康は、皇位のライバルである兄の木梨軽皇子を殺戮し、更に即位後にも叔父の大草香皇子を謀反の罪で抹殺する。

ところが、安康は在位三年で、故大草香皇子の皇子であった眉輪王に暗殺されてしまう。

余談になるが、在位中の天皇が殺戮されるのはこの安康と、約二百年後に蘇我馬子に殺戮される崇峻天皇の二人の天皇のみの筈である。

さて、安康が暗殺されると、弟の幼武（ワカタケル）後の雄略天皇が、安康の暗殺に関与したと称して兄の坂合黒彦皇子と八釣白彦皇子を殺戮し、安康暗殺の首謀者の眉輪王を殺して、即位する。

この過程で、雄略の始祖である応神王朝の最大の後ろ盾の葛城氏、それも舅であった実力者の葛城円大臣を、この皇子たちを匿ったと称して焼き殺してしまう。更に即位した後も、先の履中天皇の皇子で伯父に当る市辺押羽皇子も謀殺してしまう。

雄略は、宋書の倭の五王の武に比定され、我が国の関東以西を初めて制覇した大大王とされるが、死を目前にして何故か吉備上道臣の姫との間に設けた星川皇子への皇位継承をしないように遺言をして崩御する。

雄略が崩御すると、星川皇子が武力で皇位を狙ったと称して、大臣の大伴室屋らが星川皇子を討伐し、雄略に粛清された葛城円大臣の娘の韓媛と雄略との間に生まれた清寧天皇が即位する。しかし、この天皇は生まれながら白髪で、次の皇位を託す皇子達に恵まれず嘆いたところ、父雄略が謀殺した市辺押羽皇子の遺児である億計王と弘計王兄弟、後の顕宗天皇と仁賢天皇を播磨国で発見し、兄を皇太子に弟を皇子に迎えて、在位五年で崩御する。

そこで、本稿の主人公の飯豊女王の登場となる。この女帝は、古事記では、

雄略天皇の皇子で後継天皇となった清寧天皇は、後継すべき皇子がいないので皇位を継ぐに相応しい皇子を群臣たちに探させたところ、父雄略に殺された市辺押羽皇子の妹で忍海飯豊が葛城の忍海の高木の角刺宮に座して、天下を収めた。

その後、兄の市辺押羽皇子の二人の皇子たちが播磨の縮見にいるのが発見されたので、弟の

方の顕宗天皇に譲位した。

とある。

日本書紀では、

清寧天皇は、後継の皇子がいないので悩んでいたところ、父の雄略が殺した市辺押羽皇子の遺児が播磨の縮見で発見されたので大いに喜び、兄の億計王（後の仁賢天皇）を皇太子とし、弟の弘計王（後の顕宗天皇）を皇子とした。

清寧三年、この兄弟の姉の飯豊皇女は角刺宮で男と交合されたが、人に語って「人並みに女の道を知ったが、別に変わったところもない。以後男と交わりたいとは思わない」と言われた。さて、清寧が崩御すると即位を巡って皇太子と皇子が互いに謙譲し固辞していたので、姉の飯豊皇女が忍海の角刺宮で仮の朝政をご覧になった。

自ら忍海飯豊青命と名乗られたが、僅か十一ケ月で崩御してしまった。

この角刺宮の立派さは歌にも読まれた。

とある。

この角刺宮跡は現在の角刺神社の場所と伝承されている。正にこれこそ中天皇である。

もう一人のまぼろしの中天皇とは、間人皇女である。

間人皇女の天皇即位のこの仮説は、文献上には一切その手掛かりもないので、大いに異論がありうるが、ご紹介してみる。

間人皇女は、舒明天皇を父に皇極天皇を母とし、兄天智天皇の実妹である。
中大兄皇子と中臣鎌足は、西暦六四五年にそれまで朝政を専ら欲しいままにしていた蘇我蝦夷・入鹿の親子を粛清し（乙巳の変）、事変の翌日皇極は在位僅か三年で退位してしまう。蘇我親子を抹殺するに際して、鎌足は中大兄の即位は時期尚早と諭して、取り敢えず叔父に当る皇極の実弟の軽皇子を即位させる。この天皇が孝徳天皇である。
孝徳は、即位すると孝徳妃となっていた間人皇女を皇后とする。孝徳の妃には、左大臣阿倍倉梯麻呂の娘の小足媛がおり、その間には後の悲劇の皇子の有馬皇子がおり、もう一人の妃に蘇我倉山田石川麻呂の娘の乳媛がいた。
孝徳は、宮を河内の難波に置き、俗に言う大化の改新や緊迫する半島政策の政治を行うが、六五三年に孝徳と中大兄が不和となり、中大兄は皇極皇太后と孝徳の皇后であった間人皇女も連れて、飛鳥に移ってしまう。
このときには、群臣たちも一斉に孝徳を難波に残して飛鳥に移動してしまう。
このため、孝徳は恨み嘆いて間人皇后に有名な歌を送る。
「私が大切にしていた貴方をどうして他人が親しく見るようになり連れ去ったのだろうか」
翌年孝徳は悲憤の中に病死する。
余談となるが、乙巳の変の黒幕として孝徳と鎌足及び蘇我氏宗家への反発から有力氏族の阿倍氏、及び分家の蘇我倉家が上がってくる。
また、その後の孝徳と中大兄の不和の原因として、孝徳が皇太子の中大兄を差し置いて実の子

の有馬皇子への譲位を目論んだからとの推論も出てくる。
その後皇極が復位して斉明天皇となり、斉明は在位六年間で崩御するが、このときも中大兄は皇太子のままで政治を行い、やっと斉明崩御七年後の六六八年に近江で即位する。
この七年間の天皇の空位を天智称制と言い、天智は皇太子のままで即位はせずに政治を行ったとされている。この時期は友好国の百済救済のために大軍団を派遣するが唐と新羅の連合軍に大敗し（白村江の役）、その後唐の軍隊が筑紫に長期駐留するなど、我が国初の国家存亡の時期でもあった。
こうした難局にも拘らず天皇不在は長過ぎるという事で、斉明崩御の後に中天皇として間人皇后が即位していたのではと解釈する人がいる。
即ち、六六一年から間人皇后が崩御する六六五年まで中天皇であったとする訳である。
天智の間人皇后への想いは、実妹以上のものがあり兄妹ながら愛人関係であったのではとか、間人皇后が崩御すると三百余名の人を出家させ、死後母親の斉明天皇陵に合葬している。これらの処遇は実妹以上のものであり、実は天皇だったからだと即位論の根拠に上げているようだ。
そもそも、今日の女性天皇の復活及び女系天皇の容認問題は、戦後の民主制度下の象徴天皇制に伴う宮家の絞込みに問題がある。

皇室の約千五百年に亘る長い歴史において、数多くの女性を妃とする制度があっても、記紀等の帝記の記録には皇統の断絶の危機が何回もあった。

記紀の記録によれば六世紀初頭、仁賢天皇の後継者の武烈天皇で世継ぎが絶えて皇位継承者がいないので、五世先祖の仲哀天皇の子孫を丹波に発見するが、捕縛に来たと勘違いされて逃げられ、今度は五世先祖の応神天皇の子孫である継体天皇を越前三国から迎えて、皇位を継いでもらったとなっている。

この傍流の継体が正当な皇后を迎えて以後の皇統が継続されて行くのである。

即ち、飯豊女王の弟の仁賢天皇の二人の皇女、一人の皇女は継体天皇の手白香皇后となり欽明天皇を生み、もう一人の皇女の橘仲皇女は継体の次々期の宣化天皇の皇后となって石姫を生み、この石姫が欽明の皇后となり敏達天皇を生んでいる。

先に述べたように清寧天皇が、父雄略天皇により謀殺された市辺押羽皇子の遺児を播磨国に潜んでいたのを発見、飯豊女王が皇位をその兄弟に中継ぎをしたので、今日まで皇統が続いている訳で、正に飯豊女王こそ皇室約千五百年の重要な中天皇であったと言えよう。

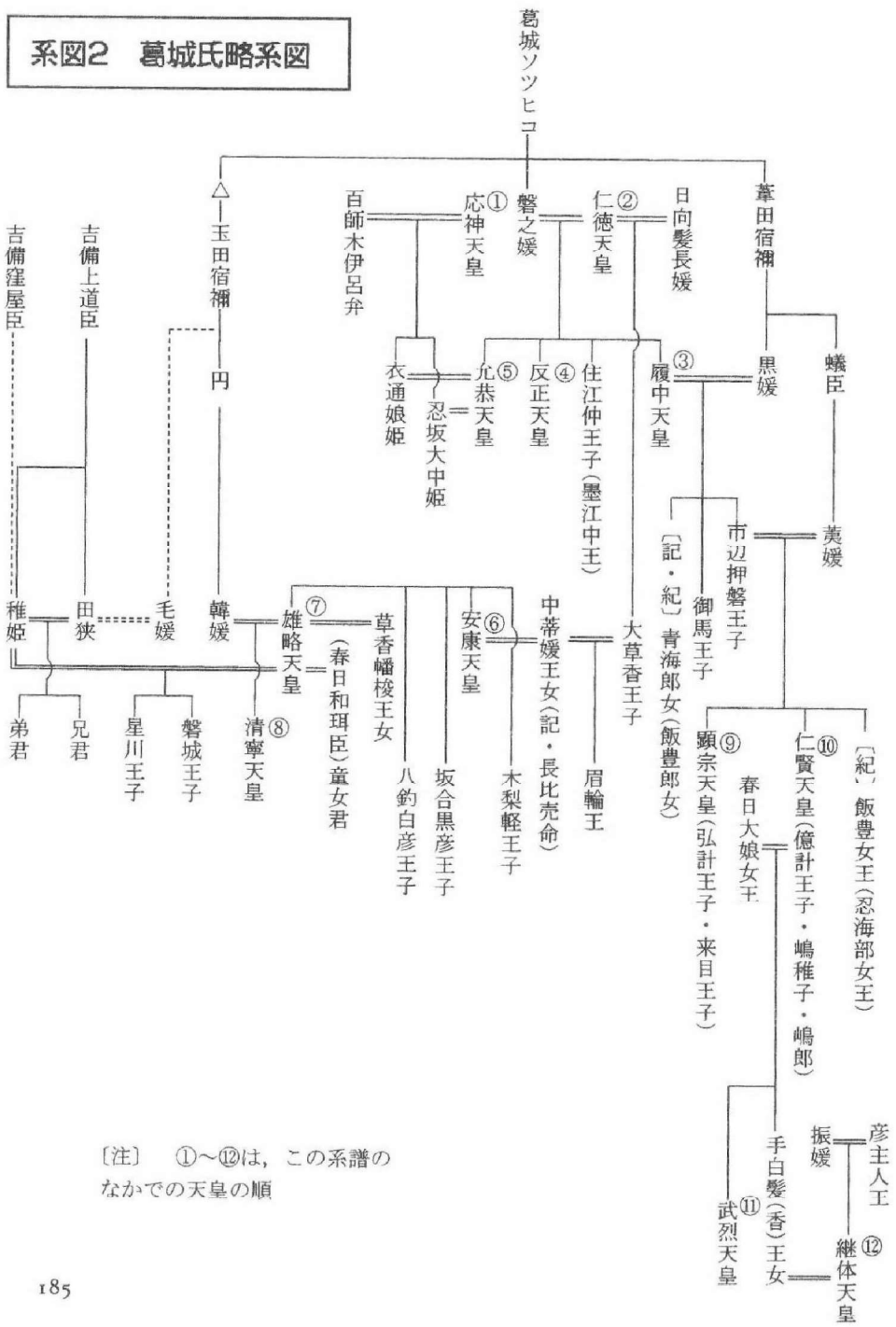
注記

本稿は、記紀の記録を中心として話を進め、史実はどうであったかは論外としており、参考資料の系図は先人たちの資料を拝借させて頂いた。

わが国の女帝一覧

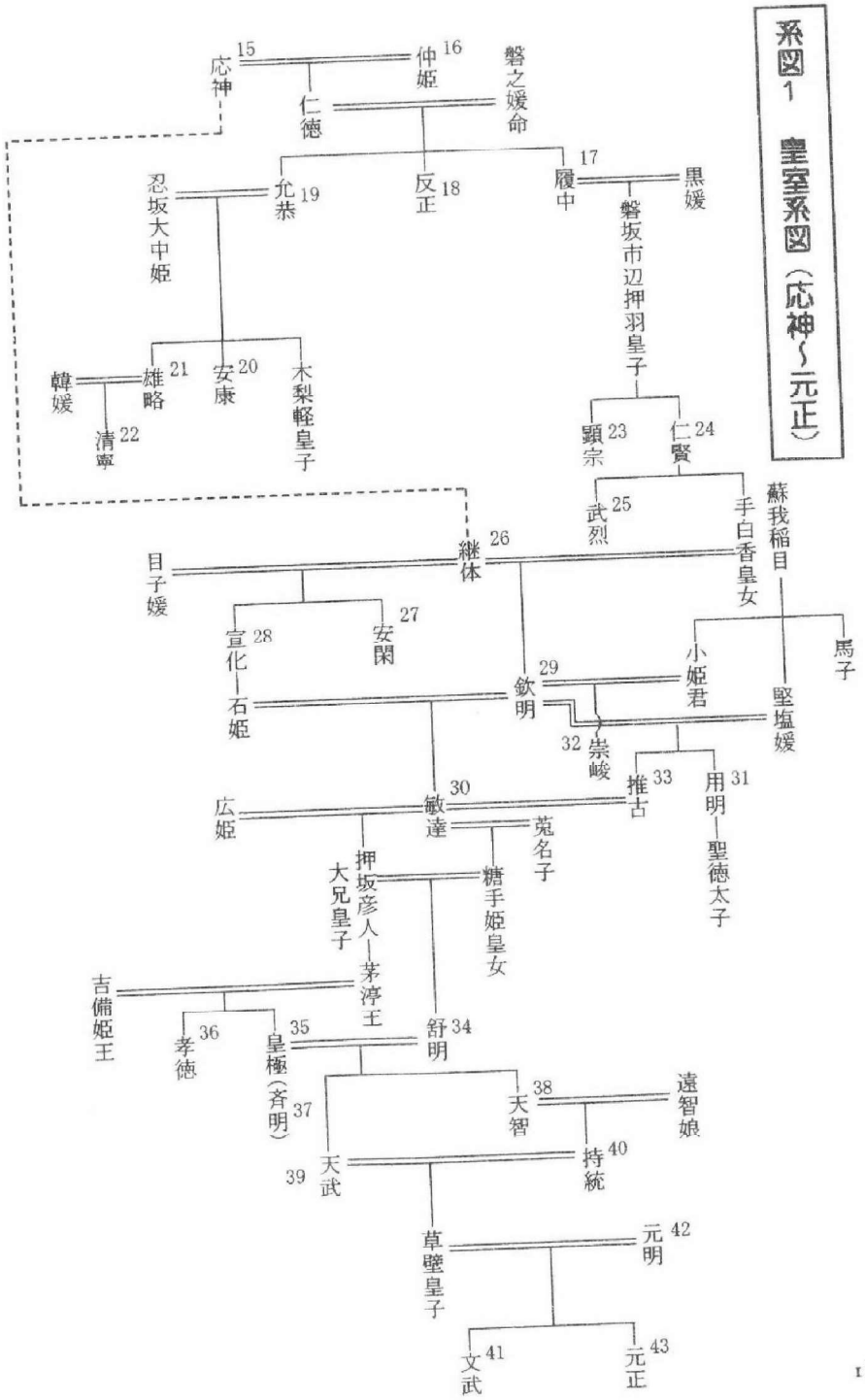
	女性天皇	在位期間	先の天皇	後の天皇	備　考
	神功皇后	4世紀後半	仲哀天皇	応神天皇	仲哀の皇后
	飯豊女王	483？	清寧天皇	顕宗天皇	市辺押羽皇子の娘
第33代	堆古天皇	593－628	崇峻天皇	舒明天皇	敏達の皇后
第35代	皇極天皇	642－645	舒明天皇	孝徳天皇	舒明の皇后
第37代	斉明天皇	655－661	孝徳天皇	天智天皇	復　位
	間人皇女	661－665？	斉明天皇	天智天皇	孝徳天皇
第41代	持統天皇	686－697	天武天皇	文武天皇	天武の皇后
第43代	元明天皇	707－715	文武天皇	元正天皇	文武の母
第44代	元正天皇	715－724	元明天皇	聖武天皇	文武の姉
第46代	孝謙天皇	749－758	聖武天皇	淳仁天皇	聖武の皇女
第48代	称徳天皇	764－770	淳仁天皇	光仁天皇	復　位
第109代	明正天皇	1629－1643	後水尾天皇	後光明天皇	徳川秀忠の孫
第117代	後桜町天皇	1762－1770	桃園天皇	後桃園天皇	桃園の皇女

系図2　葛城氏略系図

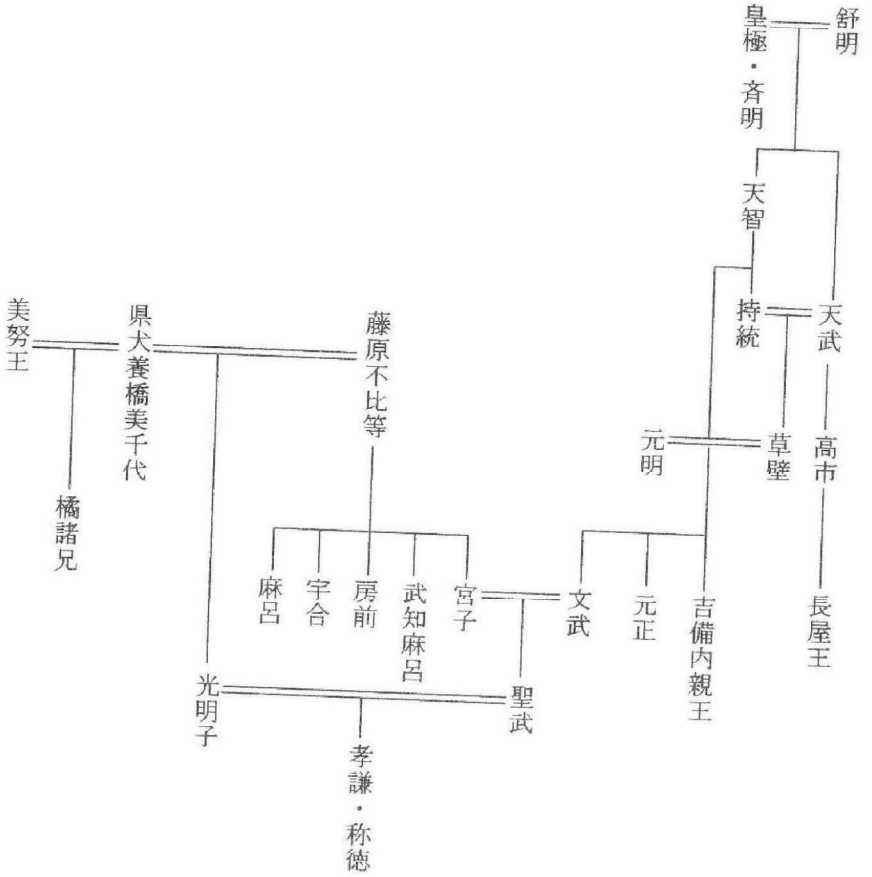


〔注〕　①～⑫は，この系譜のなかでの天皇の順

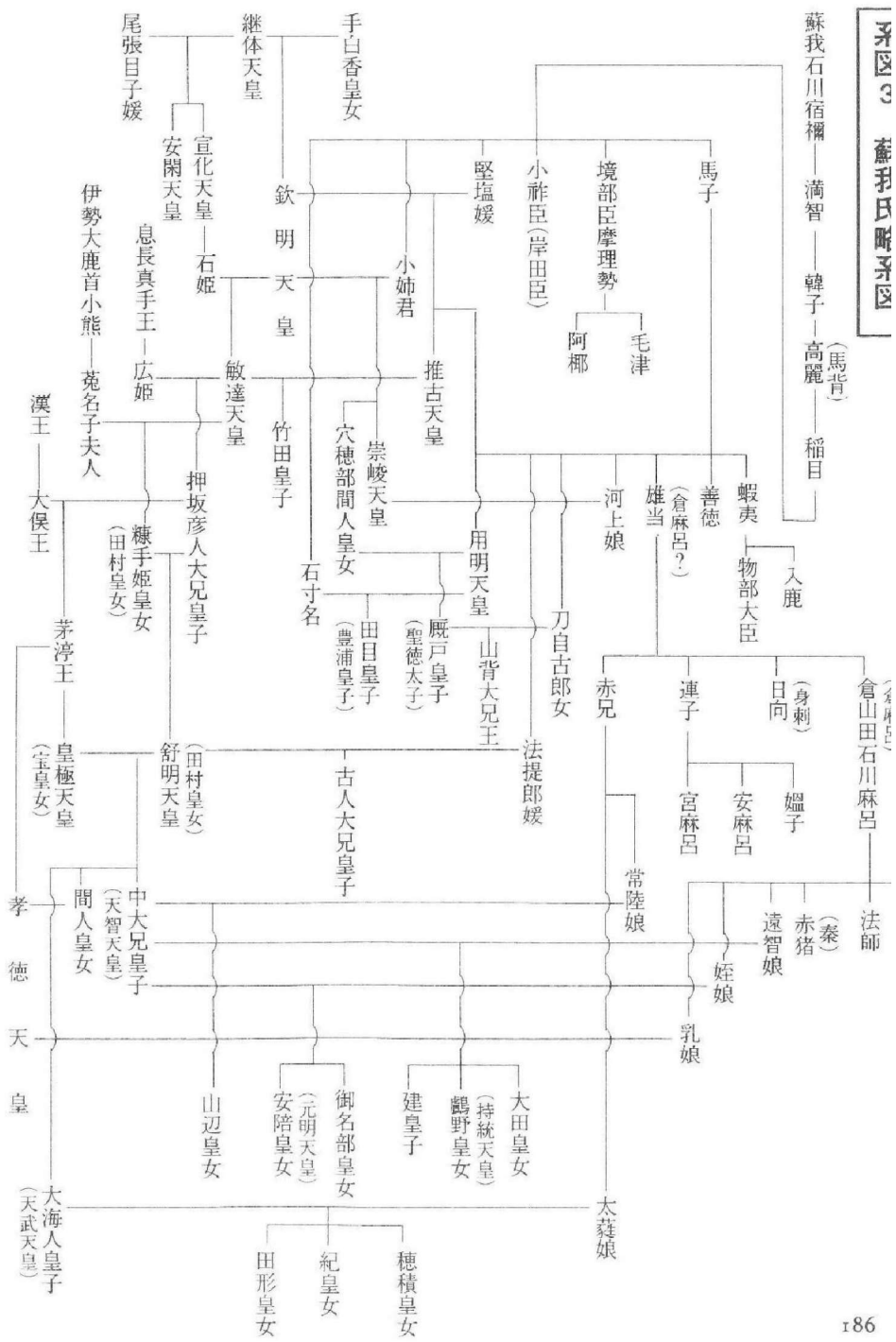
系図1　皇室系図（応神～元正）



系図4　天武・持統・藤原不比等の系図



系図3　蘇我氏略系図



考古学で判る社会の動き

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての相模の社会

中山　喬央（たかひろ）

まえおき

弥生時代後期から古墳時代前期というのは、今からおよそ一九〇〇年前から一六〇〇年前の三百年間のことをいいます。当時の世界の様子はどうだったのでしょうか。

宗教の方から見てみますと、インドで釈迦が広めた仏教から大乗仏教が興り、イスラエルでイエス・キリストが生まれたのが二〇〇〇年前頃のことです。

政治の方では、ローマでカエサルが暗殺されたのが紀元前四十四年、アントニウスとクレオパトラがアレクサンドリアで自殺したのが紀元前三〇年のことです。インドでは前一世紀から、シャータヴァーハナ朝がデカン・南インドを支配していました。

中国は前漢の武帝の時に衛氏（えいし）朝鮮を滅ぼし、楽浪（らくろう）・真番（しんばん）・臨屯（りんとん）・玄菟（げんと）の四郡を朝鮮半島に設けます。これが紀元前一〇八年のことです。そして紀元後八年には王莽（おうもう）が皇帝となり、国号を

「新」と改めます。

後漢の光武帝が後漢王朝を建てたのは紀元後二十五年のことです。

このようにローマ帝国とか、漢のような強大な国がすでに成立していましたが、朝鮮半島・日本列島にあった国というのは、今の一つの地方自治体位の大きさで、全く意味が違います。例えば今の朝鮮半島の馬韓は全部で五十余国、辰韓は十二カ国、弁辰も十二カ国に分かれていました。

一方日本列島のことについては、紀元前後に百余国あった倭人の一部の国が、楽浪郡に朝貢（外国人が来て貢物を出すこと）したと言う記事が『漢書』地理志に記載されています。又、『三国志』魏書東夷伝倭人条には、倭人は、帯方郡東南の大海の中にあり、山がちな島の上にそれぞれの国邑（「くに」のこと）を定め、もともと百余国があり、漢の時代に中国へ朝見（臣下が参内して天子に拝謁すること）に来た者があった。現在、使者や通訳の往来のある国が三十国あると冒頭に書かれています。

土器による年代測定

以上述べてきた事は、殆どが文字記録に基づくものです。しかし当時の日本列島では、中国との外交に文字が使われていた事は考えられますが、実際に見つかったものは無く、社会の動きを知る為には、全て遺跡・遺構・遺物を分析して考える考古学的手法に頼る事となります。

考古学という学問は、先ず出土した遺物のどちらが古いのか新しいのかを考えなければなりません。幸い日本列島は世界中で、最も古くから土器を使用する文化がありました。土器はご承知のとおり、有機物（生物に由来する炭素原子を含む物質の総称）ではなく、無機物で元の形を残しやすいので、これを利用して年代を考えようとする方法がとられるようになりました。一番最初に考えた人は、浜田耕作氏と松本彦七郎氏です。

先ず浜田耕作氏は、一九一七年に国府遺蹟（大阪府藤井寺市国府）を層位（地層の重なり）毎に発掘して、それぞれの地層から、縄文土器と弥生土器さらに斎瓮土器（須恵器）が出土することを見つけ、これは同一民族が時代によって様々な土器を作ったのだと考えて、土器の相違を年代差と考えました。

これと相前後して松本彦七郎氏は、古生物学者として「地層累重の法則」（地層は下になるほど古い）と、「標準化石の概念」（示準化石ともいいます。その化石を産出する地層が、どの地質時代に属すものであるかを示す化石です。そのためには、その種の生存期間が明確に判っていること、生存期間が短いこと、分布の範囲が広いことなどが条件になります。古生代の三葉虫、中生代のアンモナイト、恐竜などがあります。）を考古学に応用して、里浜・獺沢・宝ケ峯貝塚など宮城県内の遺蹟の発掘を行い、一九一九年に土器の文様が口縁部から底部にかけて四段階あるものが、時間が経つと共にだんだん上の方から収縮して消滅し、その後に下からの文様が移動していくことを発見、その文様の移動状態により土器を六期に編年（考古資料を型式分類して年代別に配列し、これに時期区分とか時代区分を行ったもの）して発表しました。これを更に縄文土器全体に広げて文様帯系統論を発表したのが山内清男氏です。このようにして日本国中のあらゆる時代の土器の年代が解明されて行くこととなります。

今ではこれに加えまして、中国大陸から来た鏡をはじめ、石器、玉類等、様々な遺物について、年代の研究が進められております。更に年輪年代法（一年刻みの樹木の年輪を用いることによって年代を決定する方法）、放射性炭素法（有機質遺物に残る、放射性炭素一四Cを測定して年代を決定する方法）等理化学的な年代測定法も進歩しつつあります。そして土器の年代測定の結果とも照合しながら実際の年代が考えられています。

相模の情勢

その頃の相模はどんな様子だったのでしょうか。当時の事を記した文書は全くありませんから、出土した土器を中心に年代を考え、そこから様々な事柄を推察して行くこととなります。

考古学の目的は、その当時の人間の歴史とか社会を明らかにして、これから人類が進んで行く道の研究に寄与する学問になることです。

そのために相模川流域にある主要な集落の住居址とお墓について、それが重なっている場合は、その重なり具合を見ながら、遺構から出てきた土器により大体一九〇〇年前ごろから、一六〇〇年前ごろまでの約三〇〇年間を七期に分類して、その推移を調べてみました。

相模川東岸地域

●海老名本郷遺蹟

相模川の東岸、相模原段丘の標高二〇m前後の台地にある環濠（集落などを囲んでいる堀のことです。堀には水の無い場合があります。）がある集落です。該当する時期の竪穴住居址（地表から数十cm垂直に掘って、床面を設けてある住居址）四二八軒、方形周溝墓（正方形・長方形で周囲に溝がある墓）五〇基のうち、竪穴住居址三二九軒と方形周溝墓四二基（内二一基は二期にまたがります）の時期を分類しました。なお六期に小銅鐸が竪穴住居址に棄てられ、七期には玉作りが行われています。

同集落の地域別・時期別の土器出土状態は、当初、西遠江と駿河が非常に強く、だんだんとその影響は弱まっていきますが、東三河・東遠江・東京湾岸の土器も見られ、五期以降は濃尾平野、七期には畿内系の土器と共に、北陸系の土器まで出土するようになります。

一期―環濠があり、遺跡の北の地区で竪穴住居址のみ二四軒を検出しました。

二期―環濠を埋めたところに住まいが建てられました。遺蹟全体に竪穴住居址が広がり、九七軒を数える事ができました。方形周溝墓は北西地区に二一基出現します。

三期―竪穴住居址六二軒と、南東地区にも現れた方形周溝墓が二三基を数えます。

四期―竪穴住居址六七軒、一方、方形周溝墓は北西地区で殆ど無くなり九基となります。

五期―竪穴住居址は全体にまばらとなり三〇軒になります。方形周溝墓は七基です。

六期―竪穴住居址は、小銅鐸の出土した地区でのみ増加しますが、他は激減して一九軒となります。方形周溝墓も北と南で一基ずつ合計二基だけとなります。

七期―竪穴住居址は玉作が開始された地区で増加したり、南東地区の先端でも増えて三〇軒

になります。方形周溝墓は南端の一基だけです。

竪穴住居址と方形周溝墓の割合は、方形周溝墓一基に対し、平均住居址数は五・二軒ですが、二期四・六軒、三期二・七軒、四期七・四軒、五期四・三軒、六期九・五軒、七期三〇・〇軒と、全体としては時代が進むと共に一基当りの軒数が増加する傾向が見られます。

これからは方形周溝墓を作ることができた人が、当初は血縁関係のある家族集団の長であった人から、一緒に生活している集団の長にかわり、最後に集落全体のリーダーとなった事がうかがわれます。

●神崎遺蹟

この遺蹟は目久尻川という相模川の支流と小さな谷にはさまれた台地の南の端にあります。谷をはさんで目久尻川の下流約一・三kmのところに、海老名本郷遺蹟があり、更にその下流〇・八kmのところに倉見才戸遺蹟があります。

遺蹟の特色は、出土土器の構成比率です。七割以上が東三河、四分の一が西遠江で、両者あわせて九五%を占めている事です。この結果間違いなくこの集落は東三河の人たちが移り住んだのだということになりました。

竪穴住居址六軒が見つかっていますが、一期二軒、二期四軒の構成です。

●倉見才戸遺跡

弥生時代の集落は、中期後半の住居址二〇軒と、後期の住居址三五軒及び環濠が見つかっています。出土遺物は弥生中期の大型住居址から、高坏、蝪壷、磨製石斧（磨かれている石製の斧）、鉄斧、鉄剣が出土し、その他の住居址からは勾玉一点と管玉六七点、石製穂摘具、有孔磨製石鏃（穴が開けられている磨かれた石製のやじり）、紡錘車などが出土しています。

時期の判った住居址は一期、二期、三期それぞれ一軒ずつだけです。

●大蔵東原遺跡

目久尻川と、同じく相模川の支流になる小出川にはさまれた台地の東のはずれにあります。同じ台地の南側には高田遺跡があります。

この遺跡の特色は、環濠から出てきた土器は東三河系であるのに、住居址、方形周溝墓から出てきた土器の大半は西遠江系であったり、方形周溝墓でお棺として使われた土器が、あるものは東三河系であったり、あるものは西遠江系の土器に、東京湾岸系の土器の蓋がしてあったりする事です。時期の判っているものは次のように分類されました。

一期―竪穴住居址一軒、方形周溝墓二基。
二期―竪穴住居址二軒、方形周溝墓八基。
三期―竪穴住居址一軒、方形周溝墓六基。
四期―竪穴住居址二軒、方形周溝墓二基。
六期―竪穴住居址一軒。

●高田遺跡

小出川に臨む台地の中央部にあります。環濠、竪穴住居址五一軒、方形周溝墓二基が見つかっていますが、時期の判ったのは次の通りです。

二期―竪穴住居址一軒。
四期―方形周溝墓一基。
五期―方形周溝墓一基。

●宮山遺跡

高田遺跡の西方約五〇〇m、目久尻川と小出川に挟まれた台地の西側にあります。見つかった方形周溝墓は八基で、その他に土坑三基があります。

ここの特色は、方形周溝墓遺跡として、土器が東三河系ということです。この時期の相模川流域、方形周溝墓出土土器として東三河系が全体として見つかったのは、今のところここだけです。時期の判ったものは次の通りです。

三期―方形周溝墓三基。
四期―方形周溝墓一基。

相模川西岸地域

●子ノ神（ねのかみ）遺跡

台地の東の縁にあり標高は四五m、小鮎川との間にある水田より二〇m高いところにあります。弥生時代中期中葉から古墳時代前期にかけて住居址が一九一軒見つかっていますが、そのうちで、今回の調査対象時期に該当するものが一五三軒あります。

特筆すべき事としては、全国で八例しかない家形土器が四期の住居址から、長野盆地南部の流れを持っている高坏と一緒に出てきた事です。そしてこの遺跡の出土土器の約半分は西遠江系の土器なのですが、その西遠江でも、鳥居松遺跡からほぼ同じ時期の家形土器が出てまいりました。この子ノ神遺跡は弥生中期に始まり弥生後期、古墳前・中・後期、奈良・平安と大変長期間継続する稀なところです。これは当遺跡の立地が、当地方の中心的な集落として大変適しており、二〇〇〇年位昔には、静岡県西部地方とか長野県北部地方とも交流があって、様々な交易が行われ、一部には人の交流もあったことを偲ばせます。

時期別の区分は次の通りです。

一期―遺跡の北西地区で二軒、北東地区で一軒、合計三軒の竪穴住居址。
二期―北西・北東地区に加えて、中央地区でも出現し竪穴住居址は一三軒となりました。
三期―合計二〇軒の竪穴住居址。北西と中央地区で大型住居址が現れ、中には黒曜石で作った鏃の出てきた住居址もありました。
四期―二二軒の竪穴住居址。

五期―北部地区の住居址が無くなり、南部地区に住居址が出てきます。総数は二〇軒です。なお方形と思われる住居址から、水晶製の勾玉が出土しています。

六期―南部地区の住居址が増加し、竪穴住居址数は一七軒になります。

七期―南部地区六軒、中央地区一軒で合計七軒の竪穴住居址数です。そのなかに川原石がまとまって出て来た大型住居址があります。

この遺跡ではただいまのところ、方形周溝墓が見つかっておりません。

●砂田台遺跡

大磯丘陵の北を流れる金目川と、丹沢山地東南部の弘法山の南を流れる大根川に挟まれた半島状の台地の一番先にあります。

台地の標高は西で八〇m、東で四五mあります。台地と谷底の間は二〇mの急な崖になっています。

出土した遺構は、弥生時代中期から、古墳時代前期にかけての竪穴住居址一六九軒と方形周溝墓七基、環濠二条です。この遺跡は弥生時代中期後半には九三軒の竪穴住居址と四基の方形周溝墓を有する相模地方最大の集落でしたが、弥生時代後期前半で一旦途絶え又復活しています。環濠は途絶える前の弥生中期後半のもので、この時期の住居址から板状鉄斧（鉄製斧のうち、長さ十五～二〇cm、幅六～八cmほどの鉄板の短辺片側に刃をつけたものです。日本では弥生中期前半に出現し古墳時代以降も引き続き使用されます。磨製石斧を鉄に置き換えたものと言われてい

ます。）五点、鉄斧一点、鉄鑿（金属加工用の鉄製の鑿）四点、槍鉋（古代の鉋。槍の穂先の反った形の身に、柄をつけたものです。）一点、刀子（ナイフ、「こがたな」のことです。）一点等、鉄製品が多数見つかっています。

又復活した五期には住居址から鉄製槍鉋一点、六期に住居址から管玉未製品が検出されて、小規模な玉作りが行われていた可能性がある他、別の住居址からも青銅製銅鏃（青銅製のやじり）とか鉄鏃茎部（鉄製やじりの「なかご」の部分）破片一点が出土しています。

時期別の状況は次の通りです。

三期―西北の端に一軒の竪穴住居址が復活します。

四期―西北の地区を中心に竪穴住居址が九軒となります。方形周溝墓が一基現れます。

五期―竪穴住居址は全域に広がり二四軒となります。方形周溝墓は一基です。

六期―竪穴住居址は二六軒と一番多くなり、地区毎に周辺に複数の小型住居址があり、遠隔地の土器とか、砥石が出土する大型住居址が現れます。

七期――竪穴住居址七軒となります。比較的大型の住居址から畿内系の土器が出土します。大型住居址が存在し、その全てから、西遠江系・濃尾平野系・畿内系の土器が出土する一方、方形周溝墓は住居址数が最も多くなる六期に遺跡内から姿を消しております。

●王子ノ台遺跡

標高約四〇mの金目川北部台地上にあります。

ここは旧石器時代から平安時代にかけての様々な遺跡があったところです。この時期として、竪穴住居址は弥生時代中期九軒、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて一四七軒が見つかっており、あわせて弥生時代後期の方形周溝墓一九基が検出されています。中部高地系高坏の出た三期～四期の方形周溝墓からは、鉄剣が見つかっています。

この遺跡の特徴は先ず二期に出現する方形周溝墓が何れも大型で長期間継続使用されていることと、五期に入りますと、方形周溝墓が全く姿を消してしまう一方で、大型住居址が現れることです。

時期別の状況は次の通りです。

一期―竪穴住居址、遺跡の東側に三軒出現。

二期―遺跡の東側に十七軒の竪穴住居址が見られます。この中で一軒がベッド状遺構を持つ大型住居址です。方形周溝墓は三基です。

三期―遺跡の北半分に竪穴住居址十五軒が存在します。方形周溝墓は七基となりますが、新たに出現した四基は何れも小型です。

四期―竪穴住居址は北側に十七軒存在します。方形周溝墓は十二基です。比較的大型の住居址で、西遠江と東京湾岸の土器が出たところがあります。

五期―竪穴住居址は西側にも現れて、十三軒です。大型住居址からは鉄製品が見つかっています。

六期―竪穴住居址十七軒が見つかっています。大型住居址では、濃尾平野と畿内系の高坏が出土したところとか、同じく濃尾平野や畿内の祭祀に関係のある土器が出たところがあります。

七期―竪穴住居址が東側に二軒存在するだけとなります。

●真田（さなだ）・北金目（きたかなめ）遺跡群

秦野市方面から張り出した北金目台地の先端にあり、西側は王子ノ台遺跡と隣接しています。竪穴住居址一三二軒と方形周溝墓一三五基が見つかっていますが、時期区分のできたのは、竪穴住居址九〇軒と方形周溝墓は、僅かに二基でした。

遺跡群の北東地区にある三期～五期の竪穴住居址から各竪穴住居址ごとに一点位ずつ銅釧（どうくしろ）（弥生・古墳時代に見られる青銅製の腕輪）、銅鏃（どうぞく）、小銅環といった青銅製品が合計二〇点ほど出土しています。これらの住居址からは、S字甕（伊勢で発生し、濃尾平野に拡がった、口縁部（こうえんぶ）「上器の物を入れる口にあたる部分の縁（ふち）」がSの字形になっている土器。弥生時代の後期後半にはじまり、古墳時代の前期から中期にかけて、関東平野の北部まで、広く東日本全体で使用された。）とか東遠江系の土器が出土しています。

以下時期別の出土状況を説明します。

一期―竪穴住居址一軒。

二期―竪穴住居址十五軒。

三期―竪穴住居址九軒、方形周溝墓一基。

四期―竪穴住居址二五軒、方形周溝墓一基。

五期―竪穴住居址二五軒、方形周溝墓一基。
六期―竪穴住居址十二軒、方形周溝墓一基。
七期―竪穴住居址三軒。
なお方形周溝墓からは、東遠江系の土器が出土したり、北陸系壺が管玉三点や人骨と共に見つかったり、銅釧三点が重なって検出されたりしております。

●原口遺跡

大磯丘陵北東先端の台地上にあります。標高が七三～七五mの台地の平坦部から約十五m下の谷に向かって広がっています。
竪穴住居址は七二軒、方形周溝墓は九七基ありますが、弥生中期のものもそれぞれ少しあり、土器が全く見つからないものが多くて、時期が確定できたのは、竪穴住居址五三軒と方形周溝墓三八基となっております。

一期―竪穴住居址一軒、方形周溝墓七基。
二期―竪穴住居址六軒、方形周溝墓十三基。
三期―竪穴住居址十一軒、方形周溝墓十三基。
四期―竪穴住居址二一軒、方形周溝墓八基。
五期―竪穴住居址十一軒、方形周溝墓五基。
六期―竪穴住居址二軒。
七期―竪穴住居址一軒。

この遺跡では、竪穴住居址から、中部高地系高坏と銅釧が三点出土していますが、方形周溝墓からは、北関東系の甕棺とか、中部高地系の高坏が出土しています。

ここで簡単に、玉作・家形土器・小銅鐸について説明します。
玉は人類によって文明発生以前から装身具とか呪術具（超自然的な存在や、神秘的な力に働きかけて様々な目的を達成しようとする道具）として使われてきました。日本列島でも旧石器時代の北海道で、遺物が発見されておりますし、縄文時代にも盛んに作られていました。中でも糸魚川産の翡翠で作った大珠は有名です。又『三国志』魏志東夷伝倭人条の中にも「その土地は真珠や青玉を産する」とか「白珠五千孔、青大句珠二個を貢物としておさめた」という記事がのっています。地元の相模では大山が緑色凝灰岩で形成されており、玉川が大山の麓を水源地として下流に原石を流しましたので、その川原石を利用した玉作が行われるようになったと考えられています。幾つかの玉作遺跡が見つかっていますが、そのなかで最も著名なのが海老名本郷遺跡です。
家形土器は今のところ土製品を含めて全国で八例しかありません。一番古いものは浜松の鳥居松遺跡で田んぼの畦道の縁から見つかったものです。これは粘土紐で柱が現わされた弥生時代の掘立柱建物（地面に柱穴を掘って柱を立てた掘立柱式の建物。高床式のものは、稲等の貯蔵用に用いられました。）の形をしています。子ノ神遺跡のものは、ほぼ同時代で同じ切妻式（棟を

界として両方に流れを持つ、書物を半ば開いた形の屋根）の建物ですが、柱の表示がない大壁式のものです。その他鳥取県・藤津遺跡や、時代は新しくなりますが和歌山市六十谷出土のものは、何れも切妻式で、屋上に口縁部を持っています。これは稲作の祭祀（神を祭ること）に関係のあったものと考えられています。

小銅鐸は弥生中期後半に北九州で発生し、最盛期は銅鐸よりも遅い弥生後期で、銅鐸が見つかっていない関東地方を中心に古墳時代の前期まで続きます。また出土する場所も墳墓、住居址、井戸、溝状遺構、表採（特別な遺構のない地面の上）等様々です。現在管見（自分の見たかぎり）したところでは、全国で四八例あり、うち六例が静岡県出土です。これには浜松の伊場遺跡でこの時期の土器と一緒に出たといって最近届出があったものを含みます。一方相模でも海老名本郷遺跡と内沢遺跡で出土しています。これは銅鐸と違って、個人所有の祭祀関係のものだと考えられています。

最後に古墳について一言ふれます。

従来相模では、京都府椿井大塚山古墳、岡山県湯迫車塚古墳と同笵鏡（同じ鋳型で鋳造した鏡）の三角縁神獣鏡（神獣鏡のうち、縁が三角形をなすもので、前期古墳から出土する特徴があります。）を出土した平塚市の真土大塚山古墳が有名でしたが、最近海老名市の秋葉山古墳群の三号墳が、出土土器から三世紀代のものであると考えられ注目されています。

結び

社会というものは、人間が集まって共同生活をする、その集団の事をいいます。これには自然に発生したものと利害とか目的などに基づいて作られたものがあります。

社会の動きと、考古学を研究して実際に判った事とを結びつける為には両方の仲立ちをする理論が必要になります。この時代、相模のことを記録している文書はありませんので、民俗学と民族学からということになります。民俗学とは一つの民族の伝統的な生活文化・伝承文化を、文献以外の伝承を有力な手がかりとして研究する学問であり、民族学は民族文化の特質を歴史的に又は他の文化との比較によって探究する学問ですが、これらの研究成果から次のような事柄を参考にして考えてみました。

「スペンサーは経済と政治権力における不平等な制度化の増大は、リーダーと彼に属するグループの結びつきと、遠隔地におけるリーダー同士の個人としての交流が実現すると説明した。」

「レンフューの個人に権力が集中した政治形態を包含するネットワーク（網状の連結組織・キー局を中心にして組織している番組供給網のようなもの）様式は、個人の威信、富の蓄積、リーダー間のつながり、遠距離交易、外来の富の交換、地位に関係した工芸品の独占的製作に最重要性を置いている。」

「非農業経済の特殊化は、より階層化が進んだポリネシア社会においてのみ発生する。手工業の特殊化が発生した時、その専門工人の数はとても少なく、彼等はしばしば実利的な物を作る傾向がある。ただ最大・最新・最高の階層をなすポリネシアの政治形態だけが、エリートの為の富の

品物を生産する少数の専門工人を配下に従える。」フェインマン。

そしてヘイデンは、団結と通過儀礼（誕生・成年・結婚・死亡など人が一生のうちに経験する時の儀礼習俗）だけを重要視した平等社会から、奉仕するエリート層を持ち、世襲によりその権力的地位が占有される首長制に向かう社会をトランスエガリタリアン社会とし、戦争、婚資（結婚する事の支払い）、子供成長の支払い、投資・祭祀、交換、信仰・先祖によって、デスポット・レシプロケイター・エンタープレニュアーという各共同体に区分しました。

これを当てはめて考えて見ますと、トランスエガリタリアン社会であった当時の相模は、一見遅れていたかのように見える相模川東岸地域の方が、海老名本郷遺跡を中心に一歩先んじて首長制社会に入り、秋葉山三号墳を作り上げたのに対し、相模川西岸地域では、各集落が独自の動きを示しながらもお互いに関係を保ち、少し遅れましたが、畿内とか遠く中国地方とより密接な関係を保ちながら首長制社会になって、真土大塚山古墳を作り上げたと見る事ができます。

参考文献

GARY M・FEINMN『FOUNDATIONS OF SOCIAL INEQUALITY』・PLENUM
高橋龍三郎『村落と社会の考古学』二〇〇一年・朝倉書店
中山喬央『相模川流域における東海系土器の影響』一九九九年・明治大学第二文学部卒業論文
中山喬央『相模川流域弥生・古墳画期研究』二〇〇二年・早稲田大学大学院文学研究科修士論文
中山喬央「還暦からの考古学（1）」『まんじ』九五、二〇〇四年

わたしたちは、スタインベルク三姉妹
――よみがえった七十年まえの音色――

伊治　哲

一、わたしたちは、ドイツ生まれ

わたしが生まれてからもう八十年近くも経ってしまいました。

わたしは、一九二八年、ドイツ生まれのスタインベルク・ピアノ。人間でいえば今年七十七の喜寿を祝う歳です。しかし、わたしのように音を出すだけがとりえの楽器は、古ぼけてしまうと無用の長物になり果てて、誰からも見向きもされなくなってしまいます。わたしも例にもれず、一時は廃棄の運命を辿る寸前のところまでいきました。ところが、どういう巡り合わせか、わたしは今すっかり若返って昔の音色を取り戻したばかりか、華やかな舞台に立つことができるまでに復活させてもらうことができました。

そして、ここしばらく見向きもしてくれなかった音楽好きの人たちが、びっくりするほどわたしを褒めそやし、可愛がってくれるようになりました。わたしは今無上の喜びに浸っています。

ただひとつ、わたしに深い悲しみがあります。わたしには同じ頃ドイツで生まれた二人の姉妹がいるはずです。わたしたちは、昭和四年（一九二九年）、日本という遠い異国にはるばる渡ってきた三人姉妹なのです。

たしか神戸という日本の港に着いてから、三人がそれぞれ別の方角に別れてしまいました。姉は西へ、妹は東へと、離ればなれに連れ去られたことだけは覚えていますが、どこへ連れていかれたのかは今までずっと分りませんでした。わたしはといえば、港からピアノ搬送用の大きなトラックに乗せられて、山を越え谷を越え、ここ丹波の山並みの続く小さな田舎町に運ばれてきました。

それ以来八十年近くもの間、お互いになんの音沙汰もなく、三人姉妹それぞれに孤独な月日を過してきたのです。

七十余年もの昔にさかのぼって、まずはわたしのお話からお聞きください。

二、スタインベルクの祖先

わたしは、一九二八年（昭和三年）、ドイツ・ベルリンのスタインベルク社で生まれました。スタインベルク有限会社は、一九〇八年にベルリンに創設されたピアノ製造会社です。当時ドイツには百社を超えるピアノメーカーがありました。職人芸に秀でたドイツは、ピアノ製造の分野でもその品質は世界的に優れていたようで、スタインベルクはその中でもトップクラスと評され、ドイツ音楽の殿堂ともいわれるベルリン・フィルハーモニーにも納められました。しかし、ナチ

スの台頭を逃れて一九三六年イギリス・ロンドンに渡りましたが、一九四〇年に会社は清算を余儀なくされました。それまでの三十年余りの短い間に、アップライト・ピアノ、グランド・ピアノをそれぞれ三百台近く生み出しています。

いま、外国製ピアノといえば「スタインウエイ」といわれるくらい「スタインベルク」の名はすっかり影が薄くなってしまいました。しかしその「スタインウエイ」自体ももともとはドイツ人のピアノ製作家「スタインヴェーク」（英語名はスタインウエイ）が、一八五〇年にニューヨークに移住してピアノ製作を続け現在につながっているといわれます。同じドイツが発祥の地で、名前もよく似ていますから、ルーツは同根で、「ウエイ」から「ベルク」が枝分かれしたのではないかとも考えられます。なにぶん二〇世紀前半の両大戦の結果、工房や職人が焼失離散して史料が乏しいために、わたしたちの先祖はもちろん、今現在わたしたちの姉妹が世界でどれほど現存しているのかも確かめることができないのが残念です。

三、わたしが育った丹波の山々

さてわたし自身の行き先ですが、神戸の港から丹波の山道をゴトゴトと、何時間も車に揺られてやって来たのが、当時の京都府何鹿郡綾部町です。人口一万人をちょっと上回るくらいの、鄙びた田舎町でした。その町の最高学府、府立綾部高等女学校が、わたしが生涯を送ることになる職場となったのです。時は昭和四年（一九二九年）十月十日だったと記憶しています。

当時の綾部といえば、小高い山並みに囲まれたそれほど広くもない丹波盆地に、小さく区切ら

れた田んぼがひしめくように山の裾までつながっています。今年は豊作だったのでしょうか。刈り取られたばかりの稲の束が稲木にかけられて、幾重にも重なりあって金色に波打っていました。その田畑の間に無数の桑の木が青々とした枝を張っています。聞けばこのあたりでは養蚕が盛んで、この時期、蚕が秋繭を結ぶ頃でした。十月の十日前後は、ちょうど収穫を祝う秋祭りで賑わい、一年のうちで一番心の浮き立つ季節です。

しかし、農業と養蚕のこの町は決して裕福ではありません。農閑期の冬には近辺の寒天工場などに出稼ぎに出る家もたくさんあります。集落の家々も瓦葺きの家は数えるほどで、ほとんどの家は茅か藁で屋根を覆っていました。わたしが生まれてからほんのわずかのあいだ垣間見た、色とりどりの瓦屋根が散在する、広々としたドイツの風景からは想像もできないほどの世界でした。

そのうえ、わたしがこの町にやって来た一九二九年は、ニューヨーク・ウオール街の株式市場で株が大暴落し、世界大恐慌の波が日本にも押し寄せてきた年です。

そんな時代に、この片田舎で、しかもドイツから、わたしのようなこんな大きな買い物をよくもしてくれたものだと驚いてしまいます。

実は前年の昭和三年（一九二八年）十一月に、昭和天皇の即位大礼式が行われました。その御大典を記念して、女学校の校友会、同窓会、父兄会や有志たちが挙って寄付金を拠出し、購入寄贈してくれたのだそうです。わたしの前屋根（ピアノの蓋）内側に「寄贈・昭和三年御大典記念・綾部高女校友会・同窓会・有志」と、金文字で刻字されていたので間違いありません。

同校の創立百周年記念誌によれば、募金の他に購買部の利益金を合わせ約三千円をわたしのために支出してくれたそうです。お金のことはよく分りませんが、当時の三千円は今のお金で一千万円以上にもなるでしょうか。前にお話したように当時の厳しい世の中、しかもこの貧しい田舎町で、在校生や卒業生それに父兄や有志までもが、これだけの大金を寄付するのは容易なことではなかったと思います。当時、幼い子供たちがお祭りなどにもらえるお小遣いは、せいぜい五銭か多くても十銭くらいだったのですから。本当に嬉しくまたもったいなく思います。心から感謝しています。

四、女学校に納まった花嫁

さて、わたしの住みかとなる女学校は、街並みが一望に見渡せる高台にありました。音楽を学ぶには絶好の環境です。わたしは本校舎二階の大講堂のステージの上に鎮座することになりました。

当時のことを覚えている人はもう見当りません。おぼろげながらわたしの記憶を辿りますと、わたしがこの学校に納められたあと、早速、ピアノ・松村静子、チェロ・伊達三郎、ソプラノ・小堀千代子など有名な先生を招いてピアノ開きが盛大に催されました。わたしの購入に奔走した音楽担当の先生も、わたしの音色に合わせてすばらしいソプラノ独唱をしてくれました。

わたしが外国からこの田舎町の学校に〝輿入れ〟したことは、学校はもちろん町全体にとっても、美しい花嫁を迎えたように大きな喜びであり、また誇りでもあったようです。なにぶんその頃の田舎の小学校では、国産のアップライト・ピアノでさえ備えつけることは至難の業でした。

ほとんどの学校はオルガンの音色に親しんでいたのです。そんな中で、グランド・ピアノ、しかも世界有数のドイツ製なのですから、その喜びようは尋常ではなかったようです。こんなことをわたしの口からいうのは、ちょっと面映ゆいのですが……。

その後音楽の先生は何代も交替されましたが、先生方はみんなわたしをとても丁寧に扱ってくれました。いつも黒いカバーをすっぽりとかぶせ、鍵盤蓋に鍵をかけて、まるで宝物のように大切にしてくれました。

いつもの音楽の授業はもちろん音楽室で、これまでの古いアップライト・ピアノを使っていました。わたしに手を触れることができるのは通常は音楽担当の先生だけ。生徒たちは特別の日を除いてそっと触ることさえ禁じられていました。したがって、わたしの出番は、学校の創立記念日や入学式、卒業式、そして正月元旦、紀元節、天長節や明治節など毎年の祝日式典の折に限られます。

「蛍のひかり窓の雪、書よむつき日かさねつつ……」
「仰げば尊しわが師の恩、教えの庭にもはや幾とせ……」
の歌には、みんなが涙ぐみました。
「年のはじめのためしとて、終りなき世のめでたさを……」（一月一日）
「雲にそびゆる高千穂の、高峰おろしに草も木も……」（紀元節）
「今日の吉き日は大君の、生まれたまいし吉き日なり……」（天長節）
など、戦前生まれの皆さまにはきっと耳の奥に残っていることでしょう。わたしもその頃のメロディーを思いだすたびに、涙が出るほどの懐かしさを覚えます。

五、心に残る音楽会

いや、わたしにとってもっと大切な日があります。それは毎年三月六日、地久節の日に開かれる全校音楽会です。この日ばかりは、出演の生徒は大手をふってわたしの音色を奏でてくれます。音楽会で、どんな先生や女生徒たちが、どんな曲を弾いてくれたか、遠い昔のことですからすっかり忘れてしまいましたが、ひとつだけうっすらと思い出が残っています。

それは、昭和十六年（一九四一年）三月六日、大講堂での地久節奉祝・全校音楽会の時のことです。

当時音楽を担当されていたのは、I先生という女の先生でした。この女学校から東京音楽学校に進み、卒業後音楽担当の教師として母校に奉職された方です。面長で色白、銀縁のめがねをかけ、いつも着物に紺の袴を胸高にしめて、楽譜を小脇にかかえ颯爽と歩く先生でした。理知的でしかも心根のやさしい先生でした。しかし授業になると厳しい眼差しがめがねの奥からキラッと光る怖い先生でもありました。生徒たちは一瞬キリッと身を引き締めたものです。

この日の音楽会の運営を取り仕切ったのもI先生です。音楽会の演目は、独唱あり、二部・三部の合唱あり、そしてもちろんピアノ、オルガンの独奏や連弾も組まれていました。

当時は日中戦争の真っ只中、アメリカとの雲行きも急を告げていた頃です。合唱曲の中には「海ゆかば」「露営の夢」などの戦時歌曲も歌われました。しかし大半は女学生らしく「この道」

「サンタ・ルチア」「ラ・パロマ」「叱られて」「からたちの花」「早春賦」など、今から思うと昔の懐かしい歌声が会場いっぱいにこだましたことを思い出します。

客演として地元の小学校や幼稚園児による斉唱や唱歌遊戯の出演もありましたが、とりわけわたしの胸に響いたのは、町はずれのI小学校・尋常科五年生、A君のピアノ独奏でした。女子生徒ばかりのなかでただ一人、男子小学生がヨセフロウ作曲「庭の千草」、ベートーヴェン作曲「メヌエット」の二曲を弾いたのです。

女生徒のピアノは、例えば四年生のTさんが弾いた「乙女の祈り」や五年生のMさんの「アルプスの鐘」のように、年長だけあってとても優雅に情感こめてきれいに弾きこなしましたが、彼のピアノはちょっとしたミスはありましたが、しっかりしたタッチで力強く、わたしのもっている音色を充分に弾き出してくれました。幼くてもやはり男の子だなあと、たのもしく嬉しく思った印象が残っています。

しかしなにゆえか彼はその後わたしの前へ登壇することはありませんでした。ひょっとして、日に日に戦時色の濃くなった時代、「男の子がピアノなんて」という世間の声に、ピアノへのA君の情熱がかき消されていったのではないかと思います。折角わたしの音色に親しんでくれたのに、とても残念でなりません。でもいつかはきっと、この時の思い出がよみがえって、再びピアノに向かう日がくるのではないかと、ひそかに期待していました。

六、忘れられていくわたし

その年の暮れに、日本はアメリカとの戦争に踏み込んでしまいました。なぜこんな恐ろしい戦争をはじめたのか、わたしにはさっぱり分りませんでした。この地方では、しばらくはこの世のどこで鉄砲の打ち合いが始まっているのか、想像もできないくらいいつもと変らない穏やかな日々が続いていました。しかし敵の飛行機が日本本土を爆撃するようになってから、急に周囲が慌ただしく変っていきました。女学生の姿が、セーラー服からモンペ姿になりました。学校へもってくるお弁当も、サツマイモや菜っ葉の入った弁当に変りました。運動場では長い棒を抱えて竹槍訓練です。女の子が男の真似をするなんてと、わたしは苦々しく垣間見ていました。音楽の授業は最小限に絞られ、わたしの出番はほとんどありません。わたしは大変淋しい時期を過しましたが、それよりもこの頃の女学生は本当にかわいそうだったと思います。

こうして楽しかった思い出、苦しかった思い出を毎年胸に刻み込みながら、わたしは一年一年歳を重ねていきました。

わたしが十七歳の昭和二十年（一九四五年）の夏、やっと戦争が終わり、昔の平穏を取り戻せるかにみえたのですがそれも束の間、思いもかけず学校が大きな変化に見舞われました。昭和二十三、四年頃に吹き荒れた学制改革です。これまでの高等女学校がなくなって、新制の高等学校になるというのです。

〝女の園〟として多くの淑女を育ててきた綾部高女が、一瞬にして新制綾部高等学校に生まれ変ったうえ、あろうことか、男女共学になってしまいました。わたしがかつて接したことのない荒くれた男子生徒たちが、しとやかだった学び舎を蹂躙するところとなったのです。

校内の雰囲気もこれを機にすっかり変ってしまいました。これまでのように全校生徒が音楽の授業を受け、音楽会で全員が出演するようなこともなくなり、音楽を選択するわずかな生徒以外は、ピアノの音色に触れる機会はほとんどなくなりました。

わたしの存在感もすっかり薄れて、ひとり孤独をかこつ身の上となってしまいました。ピアノを開いて鍵盤をたたいてくれればくれるほど、わたしも懸命に美しい音色でそれに応えるのですが、滅多に開けてももらえず弾いてもくれないのでは、足腰が痛み、張りつめた弦も弛んだり錆がついたりしてしまいます。本当に淋しく悲しい思いのなかで、瞬く間に二十年近い月日が過ぎ去っていきました。

昭和四十年頃でしたか、山の上の校舎から新築された校舎に移転することになりました。古くなって廊下や階段の床板も磨り減った昔風の木造校舎ではありましたが、懐かしい思い出がいっぱい詰まった校舎を去るのは忍び難いことでした。とりわけ、田んぼのなかの新校舎は眺望もきかず、学校という風格も地に落ちたようにさえ感じられました。しかし仕方ありません。わたしも一緒に移り住むことになりました。

ところがどういうことでしょう。それから十五、六年も経ったころ、このピアノも相当に歳をとったのでそろそろ引退させてはどうかということになったのです。早いものでこの学校に迎えられてから五十年近くにもなりますが、わたし自身はまだまだ現役で頑張るつもりでした。それにもかかわらずわたしは音楽準備室とかいう薄暗い小さな部屋に押し込められてしまったのです。これまでの華やかな講堂の桧舞台から、一転して奈落の底への転落です。落魄の身とはこういうことをいうのでしょうか。わたしはもう息の根を絶たれるほどの苦しみに喘ぎました。

それ以来ずっと外に出されることもなく、まして誰かの手に触れられることもなく、賑やかな生徒たちの歓声をよそに、小さな部屋で埃をかぶったまま、静かに眠り続けてきました。

それにつけても、静かな眠りのなかで夢に浮かぶのはもうなん十年も会っていない姉や妹のことです。どこでどうしているのか、お互いに歳をとって、わたしのように誰からも相手にされなくなったのではないか、暗い部屋に閉じ込められているのではないかと、哀れと寂しさが胸に迫ってなかなか寝つかれないことが多くなりました。

七、奇跡の復活へ

それはそれは長い眠りでした。とあるとき、突然わたしを覆っているカバーを上げて、鍵盤蓋を開けてくれる人が現れたのです。この学校の校歌を作曲した老H先生でした。先生がなん十年ぶりかで来校され、昔、新校歌の発表会で伴奏された折のことを思い出して、準備室のわたしを見つけ出し、そっと鍵盤に指を触れられたのです。わたしはいっぺんに目を醒まし、思わずボーンという深い音色を出しました。先生はちょっと驚いた様子で、数小節の試し弾きをしました。

わたしは、たまりたまった寂しさを吐き出すようにボーン、ボーンと精一杯昔の音色で応えました。わたしは、わたしの存在をなんとしても先生に訴えたかったのです。

しばらくして、先生は静かに鍵盤蓋を閉めながら「これは良いピアノだ。今なら元の音になる。大切にしてください」とおっしゃったのです。わたしは飛び上がらんばかりの嬉しさを隠せませんでした。平成五年（一九九三年）のことです。

H先生の一言で、わたしは再生復活の絶好のチャンスを摑めそうになったのです。「わたしはスタインベルクです！」と大声で叫びたいくらい嬉しくて嬉しくて夜も眠れないほど興奮しました。

ところで、このわたしというピアノを再度復活させるためには、かなりの修復作業が必要となります。寄る年波には勝てぬうえに、長い間埃をかぶって放置されてきたのですから、からだの至るところに綻びが目立っています。

まず外観は、鍵盤蓋も大屋根も塗装が剝がれ、ところどころ下地の白い木地が露出しています。内部の鉄骨自体はさすがにしっかりした鋳上がりが保持されていますが、弦に錆が浮き上がり低音部の弛みが目立ちます。ピアノの音色を印象づけるハンマー部分は、フェルトのヘッドが磨耗し、色もくすんだ白色に変色しています。また、鍵盤は白鍵の象牙板が黄色く変色し、爪が反り上がっていますし、ペダルも一部作動しにくくなっています。これらの損傷疲労のほかにも、取付け金具や飾りモールなど、ほとんどの部材を修理するか取り替えなければなりません。

修復費用の調達もからんで、事は容易には進捗しません。空しく時間を空費している間に、かれこれ六年近く経ってしまいましたが、ようやく修復に着手する時がきました。平成十二年（二〇〇〇年）の学校創立百周年を前にして、先ほど触れました昭和十六年の音楽会で「乙女の祈り」を弾いた当時女学校四年生だったTさんやその同級生たちが「この貴重なピアノをこのまま眠らせておくのはもったいない」と声を上げたのです。

その声をきっかけに修復計画は具体的に実行に移されました。わたしは腫れ物にさわるような慎重さで、大切に浜松のピアノ工場に運ばれました。バラバラに解体されて一時はどうなることかと心配しましたが、そのあと錆び抜き、研磨、部品の取り替え、弦の張り替え、塗装直し、組み立てなど、半年間の入念な工程を経て、平成十二年六月晴れて再生復元されました。われながら見まがうばかりに、ワイン色のマホガニー材に包まれた優雅な姿に生まれ変ったのです。わたしは遂に嬉しい晴れの日を迎えました。

生まれ変ったわたしが晴れて母校に帰ったとき、音楽担当のY先生は「まろやかで伸びがあり、小さな音は繊細、強い音には深みがある。弾いていて実に心地よい」と絶賛してくれました。わたしはまるでお色直しをした花嫁のような初々しい気持で、再び全校生徒の前に華やいだ姿を見せました。わたしのピアノ人生、最良の日とでもいいましょうか。

わたしが母校に戻ってほどなく、Tさんたちが呼びかけて修復完成記念ミニ・ピアノコンサートが催されました。みなさんそれぞれに歳をとられてもう八十歳近くになりますが、ピアノに打ち込んだだけあって背筋がピンと伸び、顔もつややかで、元気で小柄なおばあちゃんたちです。

もちろんTさんは「乙女の祈り」を弾きました。Yさんの「ソナチネ第一番」、Mさんの「アルプスの鐘」、Aさんの「紡ぎ歌」など、まるで六十年前の音楽会の再現です。みんな恥かしそうにしながらも、満面に笑みを浮かべての熱演でした。わたしも身も心も昔に帰って、力いっぱい新しい音色を膨らませました。一期一会の喜びにこれほど浸ったことはありません。華やかで晴れやかで楽しいコンサートでした。

八、もうひとつの一期一会

その後、思いもしない巡り合わせがやってきました。しばらくあとの話になりますが、あの六十年前の音楽会で、ただひとり男の子がピアノ独奏をしたA君とのめぐり合いが果たせそうなのです。こんないきさつです。

平成十六年（二〇〇四年）夏のお盆の頃です。地元の新聞が「ふるさとを想う」というテーマで特集を組んだのですが、そのなかに、今は横浜に住むA君が「ピアノに辿る思い出」という一文を寄稿しました。彼は次のように往時を懐かしんでいます。

「今は昔、私が小学校五年生、昭和十六年ごろの話である。本町から上野町へ急な登り坂を上り詰めたところに、昔の府立綾部高等女学校があった。週にいちど土曜日の放課後に女学校のI先生のもとへピアノレッスンに通った。音楽室でのレッスン、まわりにはいつも姉のような女生徒たちが集まってきた。いつもはやさしいI先生も、ピアノの指導は厳しかった。冬の寒い日など、指先のあかぎれから血が滲んで鍵盤を赤く染めたこともあった。そのうちに、恒例の音楽祭で私

ひとり、異分子が客演する機会を与えられた。たしか「庭の千草」と他一曲を弾いたが、緊張のあまり最初の出だしで失敗した。すぐに気を取り戻しはしたが……。今にして思えば、わたしにとっては珠玉の思い出だ。……しかしその後戦争があった。戦後の混乱と苦難もあった。六十年が瞬く間に過ぎ去って、既にI先生は亡い。懐かしくもまた楽しかった思い出を辿りながら、今ふたたびピアノに向き合っているのだが……」

たまたまこれを読んだTさんが、六十余年前の記憶をよみがえらせたのです。Tさんの手許には当時の音楽会のプログラムが大切に保存されていました。まぎれもなくA君の名前と演奏した曲目がはっきりと載っていました。それをきっかけにTさんとA君との間で手紙のやりとりが始まりました。当時十六歳だったTさんは八十歳、十一歳だったA君ももう七十五歳、二人の老男女が昔の記憶を辿って青春を取り戻した瞬間でした。

もちろん、わたしスタインベルクの修復がかなえられたこともA君に知らされました。彼は、そんな立派なピアノで演奏させてもらったことに今さらながら驚き、感激していたそうです。六十歳になって再びピアノを再開したというA君に、生まれかわったわたしの鍵盤に触れてもらえる日がいつやってくるかと、首を長くして待っています。

九、見つかった！姉と妹

さてわたしの思い出話ばかりになってしまいました。話は前後しますが、わたしの心からいつも拭うことができなかったのは、姉妹二人の消息です。

昭和四年に神戸の港から西へ東へ生き別れになったわたしたち三人姉妹も、今や優に七十歳をこえていいおばあさんです。わたしはこれまでお話ししたように、幸いにも周囲の人々に助けられてすっかり若返りましたが、姉と妹は変わりなく元気で生き長らえているのでしょうか。七十年のあいだわたしの小さな胸を痛めつづけてきたのは、実はそのことでした。

ところが、わたしの修復が終ったあとの平成十三年の頃、二人の姉妹が時を同じくして見つかったのです。

姉は岡山の政田小学校で、妹は長野の八千穂中学校で健在でした。三姉妹とも、ピアノの本体正面に「STEINBERG BERLIN」、そして同じように「昭和三年・御大典記念」の文字が残っていました。なんという奇遇でしょう。これでわたしたち三人のDNAが完全に一致したのです。

姉妹というのは奇しくも同じ運命を辿るものなのでしょうか。偶然というにはあまりにも不思議な人生航路、いや〝ピアノ航路〟でした。

姉はわたしと同じように、老朽化のため昭和五十七年に廃棄処分となり、政田地区の民俗資料館に収納されたまま埃をかぶっていたそうです。資料館の新築のため収納品を調査するなかで古いピアノの存在が浮かび上がり、スタインベルク・ピアノについて調査を始めた政田小学校が、綾部高校のホームページに同種同型のピアノがあることを発見しました。早速校長先生たちが、ひと足先に修復したわたしを視察するためわざわざ綾部を訪ねてくれました。「昭和三年御大典記念」という文字、「STEINBERG」という金文字に目は釘づけになりました。さらにすっかり

新しくなったピアノを見て先生たちは二度びっくり。政田も綾部に続こうと思い立ったばかりではなく、両方の学校と地域が交流を深めようというところまで話が弾みました。

その後、政田小学校をはじめ民俗資料館、連合町内会、PTAなど、地域ぐるみの修復活用委員会を立ち上げ、綿密な修復計画のもとに平成十三年の夏から八ヶ月かけての入念な修復作業を経て、新生スタインベルクに生まれ変わったそうです。もちろん修復記念演奏会を開き、地元出身のピアニスト・岩崎淑、チェリスト・岩崎洸の姉弟の両先生が熱演されたそうです。先生は「それぞれの音が鍵盤の上で囁きあい、ピアノから天上へ天使が舞い上がっていくようだ」と絶賛されたと聞きました。

一方、長野の妹のいきさつは次のとおりです。「最近村誌の編纂作業を進めるなかでこのスタインベルク・ピアノの素性が分りました。七十年余り前に地元の篤志家によって小学校に寄贈されたものだったのです。この地方は土地が少なく雪の多い村で、小学校を卒業すると次男、三男は外へでていくしかなかった。そのため『頭に耕地を作れ』といって地域ぐるみで教育に力を入れた。ピアノもその証しだった。しかしそのピアノも、今では茶色のボディはくすみ、内部は錆が進んで、引っ張り出そうとするとかつての名器も悲鳴のようなきしみ声を上げる。しかし鍵盤をたたくとさすがに優しい音が響いて驚いた」と村誌編纂担当の方が語ったそうです。

八千穂中学校の体育館の片隅にひっそりと置かれたままになっていたピアノが、綾部、政田と同じであることが政田小学校の問いかけで分りました。二人の姉に倣って、できるだけ早く修復に踏み切ると言っています。そしていつの日か三姉妹で競演できることを夢みているそうです。

なかにはこんな話も伝わってきました。岡山の姉の話です。

修復費用の募金を始めたころ、岡山の地方新聞が「よみがえれ！　スタインベルク」という特集記事を掲載しました。そのなかに、昭和十八年頃から約一年間、政田小学校の代用教員として音楽の授業を受け持ち、こよなくスタインベルクを愛しながら徴兵されて戦地に赴き、終戦まぎわに戦死されたY先生の思い出を、歳老いた教え子たちが口々に語っています。「憧れの先生でした」「ピアノを弾いていない時でも、自然に指が動いていた」「合唱団を組んで陸軍病院へ慰問にいった」「全校生徒のお別れ会の最後に、先生がひとりでピアノを弾きながら、涙も見せず朗々と『荒城の月』を歌われた」など、昨日のことのようにY先生を偲ぶ声が綴られていました。「六十年近くも昔の思い出がよみがえり、悲しくもまた懐かしい想いに涙しています」という姉の声が聞こえてくるようです。

十、邂逅への夢

長野の妹も、はるかに耳に入ってくる二人の姉の物語を風の便りに聞いて、きっと胸を震わせているのではないでしょうか。一日も早く修復を終えて、新しい装いをわたしたちに見せてください。

そのあかつきには、新生スタインベルク三姉妹がともに手を取り合って積もる思い出話を語り合いましょう。そして、七十余年ぶりに三人のピアニストの手とわたしたち三つの音色で、懐かしい曲を奏でましょう。

「うさぎ追いしかの山、こぶなつりしかの川……」にしましょうか、「この道はいつかきた道…」にしましょうか、いや、「夕焼け小焼けの赤とんぼ……」もいいですね。

昭和の初めにドイツに生まれ、はるばる海をこえて渡ってきた、日本にたった三台しかないわたしたちスタインベルク・ピアノ。政田、綾部、八千穂と遠く離ればなれに、七十余年の風雪に耐えて生き抜いてきました。

それぞれに異なる自然と世の中の変化のなかで、楽しいことも悲しいこともありました。しかし地域の人々が次代を担う子供たちに注いだ熱いまなざしを、三姉妹ともに同じ思いで強く受けとめてきたといえましょう。わたしたちがそのために少しでもお役に立つことができたとしたら、これほど嬉しいことはありません。

八十年近い歳月を経て、期せずして三人とも新しく生まれ変わり、これから再び真新しい音の響きで人々の心を共鳴させることができれば、この上もない幸せと思っています。

なにはともあれ、わたしたちをここまで育んでくださった方々に導かれて、再び三人揃って美しい音色をよみがえらせる……夢のようなその日がくるのを、一日千秋の思いで待ちわびながら、ひとまずこの物語の筆を擱くこととといたします。

参考図書

「スタインベルク・ピアノ修復の記録」
岡山県政田小学校修復活用委員会編
（洋泉社　04．8．2．刊）

「スタインウエイ戦争」高記　裕・大山真人共著
（05．3．11．刊）

「南蛮のみち」をゆく

山田　嘉久

私にとって、司馬遼太郎の後半生のライフワークというべき「街道をゆく」シリーズ四十三巻はそれぞれの思い出があるが、そのなかでも「南蛮のみち」は特に印象深い。

平成八年二月中旬、私は初めてのスペイン旅行に行くべく、その準備に余念がなかった。還暦を過ぎてから始めた海外旅行はこれで何回目かだったが、ヨーロッパは初めてだし、それに現役時代と違って二週間にわたる長期間であることもあってつい気分は高揚していた。

と、何気なく聞いていたＮＨＫニュースが司馬遼太郎の急死を報じていたのだ。

偶然にも荷造りしている旅行鞄のなかに、この旅行中に読むべく「南蛮のみち」を入れている最中のことだった。

当然のことながらこの旅行中は司馬を偲びつつ「南蛮のみち」を熱心に読んだが、残念なことに通常のツアーだったため司馬の好んだバスク地方などを訪れることは出来なかった。それが十年近く経った平成十七年、同好の人たちによって「南蛮のみち」コースが計画されたので喜んで

参加したのだった。

「南蛮のみち」(1)は一五四九年、日本に最初にヨーロッパ文明を伝えた宣教師フランシスコ・ザビエル（一五〇六―五二）の生家を訪ねてフランスとスペインの国境の地バスク地方を旅行する紀行文で、(2)では更にスペインの首都マドリードからポルトガルの首都リスボンまでイベリア半島を横断する続編である。

〈私はザビエルのきまじめさと、無垢な感じがすきである〉

と「この国のかたち2」で書いているように、司馬がザビエルに異常に興味を示す第一の理由はザビエルが「南蛮人」であることではなかろうか。

戦国時代から江戸時代にかけて「南蛮人」といえばポルトガル、スペイン人を指した。日本に最初に来た南蛮人はザビエルより更に六年前の一五四三年、種子島に漂流したポルトガル人でいわゆる「鉄砲伝来」として知られているが、司馬はこの本では「日本発見」と表現しているのは興味深い。

これに対してのちに長崎で貿易をしたオランダ人は「紅毛人」と呼ばれ区別された。南蛮には切支丹（カトリック）が裏打ちされ紅毛はプロテスタントであったが、このうち南蛮は切支丹禁制と鎖国によって全否定されてしまう。

しかし戦国末期から江戸初期の日本文化に華やかさをそえたのは南蛮文化だった。鎖国までのおよそ一世紀は「キリシタンの時代」といわれるように日本人にとってはいまもロマンチックで

エキゾチックな香りを放つ南蛮文化が花開いた時代であった。そんな南蛮人に対して明治、大正期の北原白秋や木下杢太郎が強い憧憬の気持ちを持っていたが、司馬も同じような南蛮に対する郷愁を持っていたのではないだろうか。

そして第二の理由は（この理由が一番大きいと思うが）ザビエルがバスク人であることだろう。事実、彼は〈私は、その宗門の徒でもないのにザビエルが好きなのは、むろんかれの人柄が好ましく思えるためであるが、かれへの感情の部分は、ザビエルがバスク人であるというところからきているらしい〉と正直に書いている。（随筆集「以下、無用のことながら」）

司馬は「辺境」を好んだ。同じヨーロッパでも興味を示したのは花のパリやローマではなくこのバスク地区やアイルランドのケルト地区であった。

日本国内でも十津川街道やオホーツク街道など。

これは彼が少年時代からアジアの辺境モンゴルに興味を示したことと無縁ではない。

ついでに云えば司馬は「辺境の地」ばかりでなく歴史上の人物でも「辺境の人」を好んだ。「梟の城」は武家社会における忍者という卑賤な少数民族を描いたし、「上方武士道」は大阪において少数民族である武士に焦点をあてている。

そのほか坂本竜馬、大村益次郎、十方歳三など司馬作品の主人公はすべて当時の江戸、京都から離れた辺境（地方）の下級武士や武士にもなれない階級の人たちが殆どである。

司馬小説が「辺境小説」、また彼の歴史感が「辺境史観」といわれる所以だろう。

(一) バスク地方にて

「南蛮のみち」(1)では司馬はザビエルの青年時代を探るため彼の母校であるフランスの聖バルプ学院―現パリ第2大学を先ず訪れている。その頃のザビエルはアリストテレスのギリシャ哲学に傾倒、やがて助教授として教壇に立つ。青年時代の彼は聖職者タイプというより、スポーツマンで人に好かれる好青年だったと司馬は書いている。

司馬はフランス側からピレネー山脈を挟んでフランスとスペインの両国にまたがるバスク地方を旅する訳だが、我々はロンドンから直接、スペインバスクの玄関口であるビルバオへと飛んだ。ビルバオはスペイン北部の北大西洋（カンタブリア海）に面した風光明媚な港町だが、意外にも緑の多いのには驚いた。「南蛮のみち」を読んでピレネーの北側すなわちフランス側は緑が多いが反対側のスペイン側は赤茶けた土地が多いとの原風景を頭に描いていたからだ。

司馬はバスクの旅の最後にビルバオの北、ピレネー寄りのサン・セバスティアという小さな漁村を訪ねているが（山バスクから海バスクへ）、我々は司馬とは逆に（海バスクから山バスクに）行こうとしている。

ビルバオの海に面した瀟洒なホテルで一夜を過ごした我々は翌日、専用バスで早速、山バスクに向かった。

まず目指すはザビエルが生まれ育ったハビエル城。ハビエルはビルバオから約二百キロ東南の山間に入った小さな村だが、勿論日本で出版された観光地図には載っていない。司馬も幾種類かのスペイン地図で「Javier」を苦労して探している。

ただ途中、「巡礼の道」と交錯している。「Camino de Santiago」の案内板も目に付いたがピレネー山脈から遥か西方の聖地サンチアゴ・デ・コンポステラへ向かうスペイン横断の巡礼の旅。車窓からも巡礼地に向かう人々が散見されたが、誰かが「さしずめ四国八十八ヶ所巡りと同じだな」と呟いていた。

ガイドの説明によるとバスク地方では道路標示板をスペイン語、バスク語二種類で表しているとのこと。勿論、我々には分からないが確かに二行に表示されている。

そのバスク語に司馬は興味を示している。

奇妙に日本語に似ているというのである。〈日本人にとってたとえばロシア語のような印欧語を学ぶよりも、モンゴル語、固有満州語を学ぶ程度になじみやすいように思われる〉と。

バスクの言語や習慣が日本のそれに似ているというのは、〈その比較が科学的でないとわかりつつ〉、バスクも日本もいずれも孤立性がつよいことによるものではなかろうかと司馬は推察している。

そして司馬の思いはバスクの歴史にまで遡る。

バスクはフランスとスペインの両国にまたがる国境地区だが、その国境線は今から約三百五十年前の仏西戦争後の「ピレネー条約」によって決まったという。

しかしこの国境線は太古からピレネー山脈の両側に住んでいたバスク人には知らされず、しかもその後数百年も知ることもなかったとは驚きである。

〈住民無視もいいところである。人類史では、住民がさきに存在して、国家があとからきた。と

きに国家はしのび足でやってきて、住民たちに投網をかぶせた。この場合、バスク人たちは投網をかぶせられたことさえ気がつかなかった〉と司馬は書いている。

二十世紀、フランコ時代は更に悲惨だった。ピカソが「ゲルニカ」を描き、ヘミングウエイが「誰のために鐘はなる」を書いた動乱の時代である。

この時代にはバスク語を喋ることも禁じられた。

このようにバスクは国家を持たない人々の暮らす地域だが、逆にバスクの豊かな自然と、それを共有するという人々の意識こそがバスクを支えている、と司馬は考えている。

〈もしバスクに現在の日本の土地制度を持ち込めば、たちどころに人情が崩壊し、社会は混乱してしまう〉と書いている。日本の土地問題に早くから警鐘をならし続けた（昭和五十一年刊「土地と日本人」）司馬らしい考察である。

〈国家というのは、つきつめれば山川草木のことである。さらには、山川草木に依存してくらす人々とそれらの暮らしの総和のことである〉

とは司馬以外には書けない、いかにも司馬らしい白眉の文章であろう。

一方、我々の最も懸念したバスクやアイルランドの過激民族主義について司馬がどうみていたか、

〈バスク人は、もともと激しくない。広域国家のおごりが、元来、天賦の権利をもった少数者に少数者であることをはじめて自覚させ、その集団を結束させ、さらに自己と集団との同一感覚（アイデンティティ）を激烈にしてしまったのである。〉とかなり同情的である。

またこうも云う。〈民族というものは非常にすばらしいものであると同時に恐ろしいものである。両刃の剣を素手でつかんでいるようなもので、ひとたびファナティックになった場合に大変です。スペインにおけるバスクのETA（バスク祖国と自由）やイギリスに対抗するアイルランドのIRA（アイルランド共和軍）みたいに。〉（「日本の未来に」―梅棹忠夫との対談）

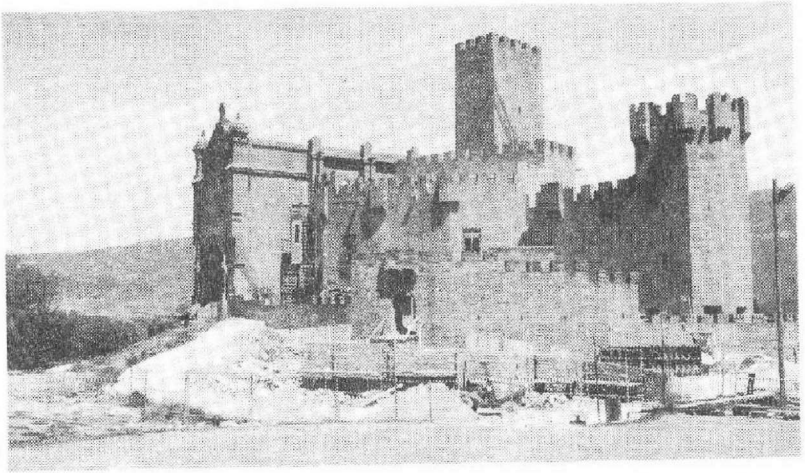
ようやく目指すハビエル城に着いた。

その時の感激を司馬はこう書いている。〈左手の暗色で塗りつぶされた谷間の樹叢ごしに塔が赤ばんで出現した感動は、おおげさにいえば十五、六世紀の地理的発見者のような気分だった〉と。

ザビエルは一五〇六年（永正三）、スペイン、フランスに接した小国ナバラ国のハビエル城で生まれたが、父はナバラ国の宰相をつとめたバスク貴族、母もバスク名門の出身で、このハビエル城は彼女の持参金だったという。

丁度、来年がザビエル生誕五百年に当たるので城内は修復中で入場は出来なかった。（その城内に司馬自身の写真と「南蛮のみち」(1)(2)の二冊が展示されていることを、帰国後読んだ福田みどり（司馬夫人）著「司馬さんは夢の中」で初めて知った。）

城内は見ることが出来なかったが、城に隣接するハビエル教会には入ることが出来た。教会の入り口で一人の修道士が片言の日本語で挨拶をされたので、一瞬、司馬を全身で歓迎して、そのくせ名をきいても齢を聞いても「私はオバケ、オバケに齢も名もありません」と答えたというあ



ハビエル城

の修道士と同一人物ではないかと錯覚したが、司馬が訪問してから既に二十年以上も経っている。

教会内には一五四一年、インドに旅立つザビエルとポルトガル国王ジョアン三世の会見を描いたアスレージョ（装飾タイル）を見ることが出来たが、此処では特にフラッシュ撮影が許されたので盛んにフラッシュを焚く。それが脇で敬虔な祈りを捧げている地元の人たちの迷惑にならないか気がかりだった。

この日の昼食は近くのホテル内でとったが、驚くことにこのホテルの名前は「YAMAGUTI HOTERU」。

司馬もこのホテルに泊まっている。〈ザビエルが足跡を印した周防の王大内氏の首都山口にちなんだ屋号なのである。〉

司馬はヤマグチという日本の地名がついているだけに、経営のことが心配になっていろいろ聞くと一九六〇年にオープンしたがこんな所に泊る観光客など少ないため三年後に閉店、それから五年後に再開と記している。その後どういう経緯を辿ったか詳らかではないが、ともかく二十一世紀の現在でも

開業中であることは事実であった。

もう一つ驚いたことは今日の現地ガイドがザビエルと同姓同名だったことだった。「南蛮のみち」(1)でも司馬はこの地方にザビエル姓は珍しくないと書いているが、念のためこのガイドにサインを求めると「Fraucisco Javier」と記し、なおも当方が疑っていると思ったのか胸に下げた身分証明書まで見せてくれた。

脇にいたベテランの日本人ガイドが同じフランシスコ・ザビエルでもＳＴ（聖）と「さん」が前と後につくのでえらい違いだとからかっていたが、日本語の分からない「ザビエルさん」に果たして通じたかどうか。

この日の午後、我々はナバラ王国の首都として栄え、今もバスク地方の中心都市であるパンプローナに向かった。途中、ルン・ビエールという村落で下車して散策を楽しんだ。

小さな教会を中心に狭い石畳の路が続く典型的なバスクの村。丁度、スペインの何処の町でも見られるように「午睡」（シエステ）の時間だったので殆どの店が閉まっており閑散としていた。

パンプローナはザビエルとその師ロヨラにとって因縁の深い都市でもある。

ザビエル六歳のとき（一五一二年）フランスとスペインとの間に戦争があった。

ハビエル城の城主であるザビエルの父はナバラ王国の宰相として首都パンプローナ城に詰めていたがフランスに加担したためスペインの攻撃を受け城は陥落、ナバラ王国は滅亡、父も命を落とす。

それから九年後、ザビエル十五歳のときザビエルの兄たちは愛国軍を組織、フランスの援助を受けてかつての首都パンプローナに進軍した。このときロヨラは同じバスク人ながらスペイン軍に属しパンプローナ城の守備隊にいたが戦闘により片足を失う。その後、神の道を目指したロヨラはザビエルを無理やり同志に加え、熱心にインド行きを勧める。ザビエルと同じパリ大学に転校し、寄宿舎を共にし更に同室に同居するという徹底振りで最初は躊躇していたザビエルをついに口説き落とすのである。

一五三四年（天文三）、モンマルトルの教会に集まった同志七名は清貧、童貞、神への献身を誓った。イエズス会の誕生である。〈かれらは神の勅命をうけて異郷にゆくだろう。そこで討死するだろう。そういうことをエラスムスやルッターの徒がやるか、やりはしない、というのがかれの戦闘思想であり方法だった。〉と司馬はかなり刺激的に書いている。

我々は一旦、パンプローナのホテルにチェックインしてから市内見物に出かけた。スペインの都市はどこでも九時頃まで明るい。

パンプローナ旧市街はカステーリョ広場を中心に古都の面影を色濃く残しているが、現在では「牛追い祭り」で知られる。毎年七月、十五頭の雄牛が一斉に放たれ市の中心部をゴールの闘牛場を目指して疾走する。牛と一緒に群集も走るが、牛に突き飛ばされて怪我人が続出することはよくニュースで流されるので世界中に知られている。

また市内にはバスク地方の特産であるベレー帽を売る店が多い。

(二)　トレドにて

翌朝早くパンプローナからマドリードに飛んだ。朝一番の国内線だったので五時起き朝食抜きで空港に向かったが何故かフライトは二時間以上も遅れた。理由がハッキリしないのもいかにもスペインらしい。

仕方なく空港内のベンチで持っていった「ザビエルの見た日本」を読んでいる。著者は上智大学教授のピーター・ミルワード。

ザビエルの書簡集は「南蛮のみち」でも多く引用されているが、そのうち面白かったのはザビエルが来日二年前にマラッカで初めての日本人アンジローを見て、友人の船長に日本人の特長を聞き出している箇所。

「日本人は傲慢で怒りっぽい。欲は浅く物惜しみしない。他の国について知ろうとする切ない欲望がある。嫉妬を知らない。盗むことを憎む。等々」

この典型的な日本人として司馬は「平家物語」の熊谷次郎直実、「義経記」の武蔵坊弁慶、講談、浪花節に出てくる一心太助、近くは広沢虎造の森ノ石松、はては山田洋次の寅次郎までを挙げているのは面白い。

ザビエルは故郷のバスクにいるひとたちとそっくりではないかと思ったのかどうかとも書いている。このことは後述の短編「奇妙な剣客」でも取り上げている。

二時間以上遅れの便はフライト時間一時間足らずで首都マドリードに着いた。機窓から見る下

界は緑濃いバスク地方から岩肌の目立つ風景に次第に移って行くのがよく分かる。

司馬はかつて世界を支配した大帝国の風土が、なぜかくも惨憺たる状況を呈するにいたったかを考えている。スペインの広大な植民地支配の源泉となったのが、艦船五百隻といわれた無敵艦隊（アルマダ）だが、その建造のためにスペインの樹木はことごとく伐採されてしまった。

〈云いかえれば荒稼ぎしているうちに、手のつけようもないほど家屋敷や田畑が荒れきってしまったという感じである。〉いかにも司馬らしい考察である。

〈こう考えてくると、あの輝かしい大航海時代というのは、スペインにとってなんのためのものだったのか。考えこまざるをえない。一国が一目的に大傾斜するとこうなってしまうという歴史的好例のようなものである。〉

このことは、なにもスペインだけではなかろうと司馬は云っているのである。

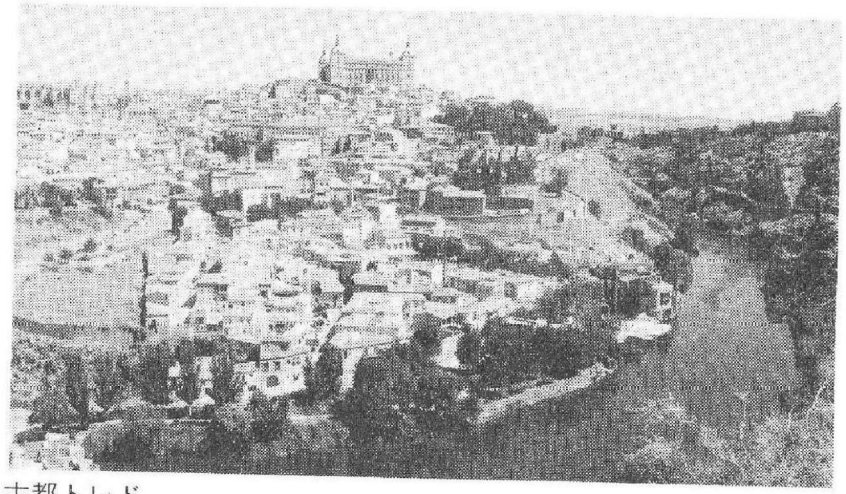
マドリードからトレドに直行する。

トレドには前回の旅行でも行ったのでこれで二回目。前回はツアーの日程には入っていなかったがオプションで真っ先に出かけた。〈もしスペインに一日しか滞在できないとしたら、迷わずにトレドの街にゆけ、ということばがある〉と「南蛮のみち」(2)に書かれていたからである。

トレドはマドリードの南西七十キロに位置する中世スペインの首都。

城壁に囲まれた旧市内には狭い石畳の坂道が迷路のように巡らされていた。

ヨーロッパで最も古い都市といわれるだけに両側に立つ建物もタホ川に架かる橋もすべて数百



古都トレド

年前のもの。遺跡の多いスペインの中で一番先に「世界遺産」に指定されたというのも頷ける。

京都や奈良に見られる「街並み保存地区」みたいなチャチなものではない。街全体が中世都市そのもの。路上を歩いていると中世にタイムスリップしたような錯覚を抱く。司馬も〈街ぐるみが博物館の陳列ケースに容れられているようで〉と書いている。

こんなところに人が住んでいるのかと不思議に思うが、事実観光客を除いては歩行者は殆どいない。司馬もたまに散歩している老人をみて〈市長にたのまれて観光用に歩いているのではないか〉と疑っている。

しかし人が住んでいる証拠には信号も歩道もない坂道を古びた小型車（殆どが日本製）が時たま走っていたことだが若干、違和感を覚えた。

今回もまた真っ先に市内でひときわ目立つ建物――大寺院（カテドラル）に案内された。

十五世紀末に完成したという巨大な石作りでステンドグラスをふんだんに使ったゴシック調の大聖堂である。

昔日のトレドの繁栄を象徴するように聳えている。スペインにおけるカトリック教会の総本山とか。

しかし一方では目の前に展開する城壁はどうみてもアラビア様式である。七七一年から約四〇〇年にわたりイスラム教徒によって支配されたこともありイスラム文化を色濃く残している。

「南蛮のみち」(2)でも〈トレドはローマ的なものと、回教、ユダヤ教、さらにキリスト教という四大文明が堆積する街である〉と書かれている。

そして〈スペインにおいては、その文化がイスラム文化と混合しているという部分に妖しいばかりの光彩を感じる〉とも。

昔、西洋史の教科書で「レコンキスタ（国土回復運動）」という言葉を習った記憶がある。そのときはどうも理解できなかったが、こうして実地に来てみるとおぼろげながら少し理解できた。

前回、見学したエル・グレコの家は修復中のためクローズされていたが、その代わり前回見なかったサント・トメ教会にある彼の作品「オルガス伯爵の埋葬」を見ることができた。

勿論、古都トレドの雰囲気は前回と九年後の今回とでは全く変わることはなかったが、強いて挙げれば今回は年に一度の「大聖祭」を明日に控え町中、華やかな装飾が施され、その準備に追われる住民の姿があったことだろうか。

(三) マドリードからリスボンへ

スペインの首都マドリードの歴史は九世紀アラブ人が砦を築いたところから始まったといわれる。その後キリスト教軍によるレコンキスタ（国土回復運動）によりスペインが統一され、フェリペ二世により宮廷をトレドからここに移し首都となった。

このマドリードでは我々は今回の旅行でも前回同様に真っ先にプラド美術館に案内された。日本にいるときはスペイン絵画にあまり興味を示さない観光客も、このスペインが誇る世界的な美術館では神妙にグレコ、ベラスケス、ゴヤの宗教画を「鑑賞」させられることになる。

司馬も「南蛮のみち」(2)では同行の須田剋太画伯にピカソの「ゲルニカ」を観にゆくことを薦められるが、なぜか「あとで」と断わっている。

若い頃、一時期美術記者としての経歴もあり、「微光のなかの宇宙―私の美術観」の著作もある司馬だが、「いまは、ピカソどころではない」と先を急がせた場所はどこか。

プラド美術館の近くに偶然見つけた古ぼけた教会だった。ここは天正遣欧少年使節団がフェリペ二世に拝謁した修道院ではないかと司馬特有のカンが働いた。

東方のはるか小島から来た四名の少年たちは十五世紀のスペイン全盛時代を見た数少ない日本人だが、彼らの貴族らしい（実際は彼らは一介の武士の子達に過ぎないが）気品と凛々しい振る舞いに王のほうが興奮し、マドリードの宮廷はこの四少年に沸いたことを記している。

私はプラド美術館を見学している最中からこのことが気になって、美術館を出てからも付近にそれらしい教会がないかウロウロした。他の人も思いは同様のようで皆でようやくそれらしい教

会を見つけて満足した。

また須田画伯が司馬に薦めた「ゲルニカ」はプラド美術館にはなく「ソヒィア王妃芸術センター」にあった。一九九二年に新設された美術館のようで、新設時にプラドから移されたものだろう。今はここの目玉となっている。

「ゲルニカ」とはスペイン北部にある小村の名前だそうで、ピカソが戦争の悲惨さを描いたこの名作は縦三・五m、横約八mと想像よりも大分大きかった。画の前には大勢の幼稚園児がちょこんと座り込んで引率の先生の説明を神妙に聞いていたのが印象的だった。

我々は更にポルトガルの首都リスボンへと飛んだが、司馬はわざわざ「リスボン特急」に乗って九時間をかけて国境越えを楽しんでいる。

そしてリスボンでは早速、世界史上に大きな役割を果たしたテージョ川（上流はトレドのホタ川）の河口に佇んで、この港から東洋に、さらには日本に旅立ったであろうザビエルに思いを馳せるのである。

我々も司馬と同様にテージョ川の河畔に沿ってリスボン郊外のベレン地区を訪ねた。バスコ・ダ・ガマのインド航路発見を記念して建てられたという白亜のジェロニモス修道院、司馬が「テージョ川の公女」と表現したベレンの塔、そしてザビエルを含めた大航海時代を代表する二十七人の像が並ぶエンリケ航海王子記念碑などである。

また夜のリスボンではポルトガル伝統のファドを聴くことも出来た。独得の楽器ギターラの伴

奏で朗々とそして時には嫋々と歌い語られる民衆歌謡を司馬は気に入ったらしく「南蛮のみち」(2)では再三登場している。

更には司馬が最も関心のあった国立海洋博物館にも足を運んだ。司馬のポルトガル訪問の目的の一つが、此処で「甲板の起源」（大航海を可能にした「樽のような船」はいつ、誰が考案されたのか）を調べることだったと吐露しているからである。

そして我々の旅はユーラシア大陸の最西端、大航海時代の詩人カモンイズの有名な一節「ここで陸終わり、海始る」が刻み込まれた碑が建つロカ岬で終わったが、司馬は同じ岬でもロカ岬ではなく無人の西南端サグレス岬に向かっている。

この岬は司馬が好きなエンリケ航海王子が隠棲した場所である。

陽が西の海に沈みつつある夕闇のなか、同行の須田画伯がなぜか岬上の小石を拾い集める。そしてポケットいっぱいになると、一つずつ地面に落とし始めた。

〈画伯は小石を捨てた。私どもの旅は、小石がサグレス岬のせまい地面に落ちたときにおわった。〉

なんとも詩情一杯の文章で「南蛮のみち」(2)は終わっている。

（付記）

バスク地方に異常な関心を示す司馬だが、彼にはバスク人を取り扱った小説まである。

短編「奇妙な剣客」はバスク人と日本人が驚くほど似ているというわさを確かめるため、一五六一年に九州平戸に上陸したバスク人の剣客の物語である。

人類文化学者の梅棹忠夫によって高く評価されたこの小説を司馬が書いたのは昭和三十七年、「南蛮のみち」を旅した二十年も前のことである。ということは司馬は二十年もの長い間、バスクを恋い憧れていたことになる。

現代詩

この町・他

青木　昭成

自称

ぼくは　時に　ぼくはね
と自称することがある　つまり
すでにぼくは幾らかの追憶と　甘えと
その中に身をおいているようだ
ことに　ことさら幼なじみを相手にすると
彼がこの鼻先に遠慮なくタバコを煙らしたりしても
それはもう　ぼくにはその横顔さえ困惑にはならず
浪漫の名残のなかに自らをも見つけ出していて
すっかり何もかも許したりしている
けれどおれは　俺は　とときに喋る

おれは時にひどく投げ遣りなおのれを
見つけだしているのだ　つまり　人々は
生身の憂さを一杯の酒にまぎらわすこともある
だがおれは　そのほろ酔いの術をもたない下戸だ
それは　おれの無駄な妄想そのものかもしれぬ　が
それは　おれがおれと話す悔恨そのものなのか
でなければ　おれの呪術の一つだったのか

ぼくはと語り　おれはと喋る　しかし
やがて　私は私と言い　それは自然に口をついて出る
それはまるで霧雨のようで郷愁のようで　だから
そうだ私は私が私とよぶ私のなかに返すしかあるまい
この私が今　この私をやさしく書きはじめるとき
私の魂はいつもよりも柔軟で　叙情にみちている
この髪の白さは　あの日よりいよいよ白く　けれど
だからと言ってこの思考までもが　いよいよ
白髪になるとまでは　私は信じたくないのだ

詩人

わたしは詩人ではない
これが　詩であるわけがない
そう言いつつ　詩を創る
詩作とはそんな根拠のない
告白のようなものだ

かくて　わたしはますます詩人ではない
そう肯定しつつ　わたしはわたしの
言葉を創りつづける
林檎が林檎の香りをひそかに漂わせるよう
小石が小石の形をそれぞれ置いているよう
そして　それが
すべて素材で　かつ豊饒であるようにと

だから　わたしの言葉は

わたしのかけがえのない刻印
わたしの刻印はわたしの生きることへの回帰
わたしには信仰がない
わたしには憧憬もない
だが　ここに在ること　それがうつつ
その姿がわたしの詩そのもの

友だち

雨がそぼふる　九月の夜
彼は逝った
あれから一年　彼は何処まで歩いて
とふと想う
それは物悲しい連想だよ
わたしをさらに誘う

三年前の　また五年前の

逝ってしまった友だちたちよ
そう　その享年さえも
さらに数えなおして見なければならなくなる
またしても　何処まで逝っただろうかと
その幻影の歩調を想ってしまう
人の死とは　こんなにも
人の心を内省させてしまうものか
ただ　己の生のある瞬間を
忘れさせて

誤差ゼロの

路地から　路地の角を曲がり
わたしは気まぐれな散策を　ここから始める
今日の路はどう見ても　雨にそぼ濡れている
もちろん明日もそうあるとはかぎらない　が

わたしの言葉の端々が　水彩のようにそこにある
独り言なのか　でなければそれは　うわ言か
それともわたしの自我の　いつしか屈折し
とうとう残滓となってしまった姿なのだろうか

六月の空気は明るく　しかし湿っている
ときどき紫陽花がそれらしい色彩で
それらしい個数で咲きそろっていたりする

わたしはこの時　ふっと　思い出した
人類の時刻はすでに「誤差ゼロの」時代にいる
と誰かが何処かで　そう言明していたのを

けれどなんと云うことだ　この腕の時計は
今も決して「誤差ゼロの」には同調してはいない
いやはや　まったく同調などできる代物ではない

ましてや　振ってみたとて
どうにもならぬこの脳裏よ
その底のほうで　脈絡しながら生き
永らえているものよ　この誤差だらけの
わたしの過ぎてきた路々よ

叫んでみたい

「破たん」とは　なんと
素っ気なくも味気ない物言いではないか
わたしの筋向いの
あの銀行が土曜日に破綻してしまった

月曜日には大勢集まって文句を言っていたよ
と　息子が窓ガラスごしに見た様子を伝えてきた
予期していた気分の話し方で

二級国道の人通りは　それから
もう元の閑散にすっかり戻ってしまっている
車輛の通行だけが途切れることもなく

それが謂わば　このあたりへの「破たん」の訪れ
何処よりも一足早く実感させてくれるのだ
だけどあの　ペイオフは困る　それは困る

そう云ってみる　だがなんと改めて考えれば
それは変な意地の張り方ではないか
わたしに預金なるものなし　と反省させられる

払い戻して貰うものがない　それでいて
支払い停止の体験だけを困った顔で　わたしは
じつは何か叫んでみたい　けっきょく　いま
そう叫んでみたい欺瞞のなかに座りこんでいる

左の中指

無用なものと考えたことはない
といって　強いて
有用なものと考え直したこともない
その左の中指の
第二関節を脱臼してしまった　愚かにも
人間の掌には　それぞれ
いかにも権威のありそうな親父風な指がついてて
なにやら秘密めき艶めくもありとする小指もあり
他人には後ろ指を差されるなとも教える指もあり
粉くすりはその腹で舐めて見るしかない指もある
けっきょく　その存在は健忘のかなたに
ついに放置されていたわたしの左の中指よ
わたしはいま改めて
濡れタオル一本さえ絞りきれないでいる

人間にとって生きるとは　こんなふうに
実に　こんなつまらぬ豊饒さを
取り戻す努力をつづけることでしかないのか

この町

この町　というとき　私は
下町の裾に点在する　それらしい農家の
庭先を基点とする町なみを　ふと　描いている
農家　それはこの町の核に違いない
数はすでに希少　しかし古い生垣の隣から町は広がる
私はここに　ついに半世紀をも住みついてきた
そもそも「ついの住処」と考えていた　若年の
それは不可思議な感覚で　願望でもあったが

それにしても農道のうねりのままに　残る道路
しかも　掘割であった小川を覆いつくして
四車線の道路が　まっすぐ隣町までのびている
ひっきりなしに疾走する自動車のための
だから　ここは新しい町なのだろうか
それとも　何となく古いものが残る町か
ここが好きかと問われれば　嫌いではない
ここが嫌いかと訊かれれば　すきでもある
ただ私の出生の地でなく　育った土地でなく
その故にだろう　これは究極の感情
としか云いようのない内心かも知れぬ
この頃この町でも　虫歯のぬけた歯のように一か所
また一か所と住宅が消える　やがて駐車場になる
そして平屋だった町並みの　建てかえは約束のように
とんがり帽子の　三階建てになる

十五階建のマンションは駅まで十三分　だと広告され
それが嘘であったとしても　男女の群れは
日々　都心へと　急がなければならない生態に
身を置く

この町　それは私のものだ　日々どう変わろうと
どう老境に至ろうと　けっきょく
私が描きえる原風景は　この町　今

がいろ樹

年ごと　秋ごと　かり込まれ
さらに二の腕までも　刈り伐られ
だから剪定とよぶには　いかにも邪険で
工夫のない仕事が　何年　行われてきたことか

とは言え　町なみ沿いに無造作に立ちならび
お前たちは　たしかに野放図に育ちすぎてしまった
人々がもはや　それを負担にさえ感じはじめてきた
緑　プラタナスの樹影よ

だが或る　冬の日　それが彼らの
落葉した姿の　最後の季節であったのだが
それはまったく　こつぜんと　一斉に
モッコクの幼い苗の列　それに変身していた
おもてが紅葉に衣装替えした細い
葉っぱ付きの立姿で

人々はその初め　育て　やがて愛賞し
ときには仲間としてさえ　眺めたであろう
それが人々の　樹影への無邪気な所有感
それがまた人々の　かわり身のすばやい情緒

ひどく気まぐれで　ひどく身勝手

だから　おのれのその不条理さえ
吹く風の気楽さに似て　ただ　流れさる

消えてしまった樹影よ
それが虚構でなかった事実と
だが　それがいつまで人々の思いの底に
襞のように実存することが出来るものか
ふっと　ため息する

犬たち

ついに成犬にまで育てあげられず
けっきょく　余所にあげてしまった後悔

犬　と言うとき私は　ふと
一匹のコリー　彼を想いだす
それはもう四十年もまえのことなのに

おおきな図体　でも穏健であるだけに
むしろ臆病者でさえあった一歳半　彼に
なんの教育をも与えることがなかった
どんな調教をも受けさせなかった
自然児のように成長し

その頃　家並みを外れれば
もう田圃のひろがりが遥かにつづいていた
首輪を外された彼は　もう一目散に走る
彼の厠の位置が田圃の一画に定まっていたのだ
彼はそんな習慣を身につけてしまっていた

いま町を歩く私に　出会う犬たちは
チンやマルチーズ　ポインターや　ときに
セントバーナードに柴犬　などなど大小
その愛犬と呼ばれる彼らや　彼女たちは
本能に導かれるままに　嗅ぎまわり

放尿して歩く　それは電柱や垣根の根方
であり　また　私が散歩する町の
いたるところの辻である

「イヌにフンをさせないでください」
もう芽吹きはじめているハナミズキの
しずかに佇む幹の根元にある　立て札
もう永いこと取り付けられたままで

その根元にあるのは「フン」ではなく
「フンヌ」であろう　怒りの形だ
そういえば　私の散歩の行く手を
ときどき遮る花壇の土のうえにも
放置されたままの塊がある
私の　はるかな後悔を　ときに
引き出してくれるものよ
また　愛玩することが　非自己の存在を
わすれさせてしまう摩詞不思議さよ

短歌

湘々湖南　六十首

曽根　竣作

大輪の向日葵（ひぐるま）海へ向きて立つはづき背信の真陽高きなか

雨晴れし空のまほらゆ群れ鴉こゑ猛々しく薄暮をゆらす

街いゆく人ら眩しも並木よりこぼるる陽ざし背にかぎろひて

忘れな草いちりんふるへこの夏の望蜀の夢断ちがたくゐる

突き抜けて谷(やつ)よりひびく鳥の声八月の白雲(くも)へたちまち消えつ

小流れの引地川べり夕づけば芥のなかに白鷺(さぎ)ほそく立つ

「生還は期せず」と言ひて朝立ちす昭和二十年二月一日

詔勅を拝せし六十余年前営庭の正午(ひる)夏日燦たりき

武道館に雨しとどなる終戦日顔なき顔が脳裏にうかぶ

俯瞰する首都の夕景うす蒼し暴かるるべき偽善も呑みて

雁来紅（かまつか）の朱（あけ）あたらしき季いたりしも月尽の風冷ゆるかな

冬の陽を一（いっ）に集めて石蕗（つは）の花うしほ干きたる浜にゆれゐつ

靄こむる冬のビル群重なりて往き交ふ人らその影を負ふ

陽にかげる並木通りの人混みをこころ鎧ひて靴音鳴らす

昼の月淡くかかれる病棟の人去(い)にし部屋シーツまばゆき

昇りゆくエスカレーター側壁が写せり己が時のたしかさ

朝よりの冷雨やまざり古書店を出でし項にしづくの刃

なだれつつ篁(たかむら)おほひさ走れる北山時雨に軒を借りたり

ふるさとを二つ持ちたる我にして蓬萊(ほうらい)を恋ふ霜おくあした

四、五年の遅速おろそかなるまじき同期の会にまた黙禱す

艫(とも)に立ち水脈(みを)目に追へば静かなる湖(うみ)にきららと飛沫とび交ふ

風さぶき晩秋の湖(うみ)かがよへり船足かろき海賊船ゆく

山腹に白堊のやかた点在し芦の湖の景ニース想はす

戦野にて被弾もあらでここに在りかなた赫々と夕火雲とぶ

雨あとを夕虹立ちて小都市のそびらの森へあはあはと消ゆ

西風(にし)吹けば遠潮騒のひびき来る寒晴れの気を胸ふかく吸ふ

冬の海波の秀(ほ)白く極月の貴(あて)なるときをひたすらたたむ

氷漬けされたる秋刀魚にび光り一尾(いっぴ)百円の安さあがなふ

投げ出しし体(たい)そのままに美しく俎上の魚のまなこうるみて

世に阿(おも)ね生き来し日々を積み重ねけふ小安の日溜りにゐる

さるすべり顆粒細花をふりこぼし幹冷えびえと初秋をむかふ

側溝をかへで落葉のわたりゆき一颯の風季(とき)をいざなふ

秋さむきみ寺の銀杏さびさびと黄金いろなる箔落としつぐ

黄の落葉ちりしく堂宇の敷石は足裏（あうら）にかたく冬近みかも

甘やかな匂ひはなちて金木犀いろどりうすき庭に華やぐ

「西施」とはいかなる美形、葉を閉ぢし合歓は真闇に白く息づく

白皙に論立ちし旧友（とも）天界へ相思樹のまどゐいまに惜しみつ

ひそかなる快楽（けらく）のいろか毒を秘めのうぜんかづら陽にかげろへり

秋灯下年に一度の名著とふ「ローマの物語」ひたに読みつぐ

終りたる宴（うたげ）の余韻さめぬまま孤りを欲（ほ）りて階下りゆく

下萌に蝦蟇（ひき）の出できてまばたけり瞿鑠として青き沈黙

流木やわれに見よとぞささくれし肌（はだへ）いくへの波濤（なみ）を越え来て

冷えびえと白木蓮咲けり端正に神の領せる一隅として

確定申告終へて出づれば新芽立つ径にふはりと風さやかなり

ひたすらに素枯れし蟷螂立ち上がる呪文の枝に雨水走りつ

山門を登りてゆけば打ちひらき鎌倉山の冬木ていてい

三椏の黄なるつぼみのほろほろと零るるごとく寺苑を飾る

雲ひとつ流れやうなき深み空たましひ捨てて形骸さらす

謂はれなき風聞ひとり歩きしてわが流刑地（るけいち）に水木咲くなり

散りそめし桜花びら一騎駆るわれが箙（えびら）を彩（いろ）ひてとまれ

花芒たそがれどきに際立ちて山ふところは銀いろに光(て)る

朝あさに剝ぐ日めくりも数葉を残して告ぐる時のうつろひ

波のうへ波なだれ来る冬海のはたて火焔の落暉墜ちゆく

味爽の丘に穂すすき打ちなびき歴はすでに極月に入る

何がなし心いぶせき日の暮れを軍歌全集のCDを購(か)ふ

戦意昂揚のそしりはあれど戦中に名曲多しそして悲しき

冬の疎林あさのうすら陽濾過しつつわが平安のけふが始まる

寒の夜を満月冴えて額照らす思へば杏き係恋のとき

遠つ祖先いかなるひと生遂げつらむ湘々湖南にわれは生き継ぐ

すんすんと日の昏れ早しビル影の闇往還の人群れを呑む

新春ユーモア小説

聖徳銀行秘書室

鯨游海（くじらゆうかい）

第一話　頭取の宿題

「足下はこの問題が解けるかね」

聖徳銀行秘書役の泉ピン太郎は、突然頭取の聖徳太平に呼ばれ一枚の紙片を手渡された。

「ハァ……。ハイ早速」突然の問いにとまどい乍らもピン太郎は急いで目を通した。

次の文中の○○には全て同じ或る単語が入る。どんな単語かを答えよ。

司馬遼太郎・子供に朗唱させるならやっぱり○○かなあ。

湯川秀樹・私は幼児の頃祖父から意味も判らず○○を暗唱させられたお蔭で、後年中間子の発想が閃いた。

天声人語氏・当コラムで一番引用が多いのは○○である。

藤原正彦・小学生に英語を教えるぐらいなら○○を暗唱させた方がよっぽどいい。

山本七平・金融界の頂点に立った人達が○○に魅せられ何人も解説書を著した。
白川静・○○は結論だけしか書かれていないが、いつのまにか作者と対話させられ考えさせられる。こんな面白いものはない。
伊藤仁斎・○○こそ宇宙第一の書なり。
ピン太郎は司馬遼太郎と湯川秀樹それに天声人語氏迄は判ったが、その他の人はどこかで聞いたような気はしたものの何者であるかを想い出せなかった。然しこんな時直ぐ応じないと太平の機嫌が悪くなるのを知っていたので、思いつくままに答えた。
「落語……。いや漫才……ではないでしょうか」
太平はやにわに身体を揺すって呵々大笑して言った。
「ワッハッハ。落語ねえ、なる程。そして漫才か。これはご迷答だ」
（どうやら正解ではないらしい）ピン太郎は冷や汗をかき乍らあたふたと退散した。
同じ日、階下の研修室では朝から新任支店長研修会が開かれていた。今朝の人事異動で憧れの金的を射止めた三〇人の紳士淑女が集合していた。一昔前には考えられなかった事だがその内三分の一が女性で、大阪外語大の中国語学科を出た沼田美紀もその一人だった。黒木瞳に似た色の白い聡明な美人で学生時代はミス外大と噂された。
「豪徳寺支店長を命ず」の辞令を貰ったつい今朝がたの感激が未だ全身に漲り、今もなお高揚感が脈打っていた。
型通りの発令の儀式のあと全員がこの研修室に集められ、九時半から始まった研修は漸やく最

終コースを迎えていた。ドアが開き頭取が現われ徐ろに登壇した。
「エヘン。エー君子諸君。本日は誠におめでとう。諸君は多くの行員の中から選ばれ愈々わが行の中枢を担われる事となりました。明日からは夫々の支店で存分の働きをして戴きたい。同時に諸君は人の長となったからには君子になって貰わねばなりません。古人も言っています。『君子は大きな器たるべし』と。
ついては君子諸君への餞に宿題を出す事と致したい」
朝からの辞令交付、その後の訓示やら事務連絡、法令遵守や個人情報の重要性の講義が続き全員かなり疲れた様子であったが、これ迄頭取と直に接する機会などめったになかったので皆緊張して聴き入っていた。
「論語にこういう文章があります。〈賓退、必復命曰、賓不顧矣〉〔ひんひけば、必らず復命して曰く、ひんかえりみず〕賓とはお客様です。口語訳してみましょう。『お客が帰る際（孔子は見送って）必らず（主君に）復命した。お客は振り返りませんでした』
さて右の解釈は定説として定着しており、異説は一つしかありません。古今東西の凡ゆる学者のうち異説を唱える唯二人の学者を除いて他は皆一致しております。
然し私はどうも釈然としないのであります。来客が立ち去る際主人側は玄関なり門なりに出て見送る。客は数度振り返って頭を下げ帰って行くのが東洋の作法であります。いや東洋に限らない世界共通の古今の慣わしでしょう。三歳の幼児でも振り向いて手を振ったり笑ってバイバイするではありませんか。

所で私はこの章の前半を省略しましたが、そこには孔子が主君から客の接待役を命じられ緊張し乍らも大役を立派に果たした様子が書かれています。客は満足して辞された。まして主君の賓客ですから当然礼に通じた人であります。おそらく丁寧に振り返り揖譲（両腕を前に組み腰を屈め頭を下げる）しつつ感謝して帰った筈であるのに一度も振り返らないとは一体どういう事なのでしょう。何か主人と諍いでもあって怒って別れたのなら納得いきますがそんな様子は書かれていない。

本日の宿題とはこれであります。

なお異説について一応説明しておきます。百年以上も前にイギリスの支那学者でJ・レッグという人が『これは完了形である』とし、京都大学の宮崎市定がこれを承けて『賓、顧ずなりぬ』と訓み『お客が（立ち去って視界から消え）顧りみられなくなるのを見届けました』と解釈しました。これなら振り返った事にはなる。

確かにこの方が定説よりベターのように感じますが、ちょっと持って廻ったくどい表現になりますね。主君への復命にしてはやや失礼でもある。礼に篤い孔子ならもっとストレートに簡明率直に答えた筈であります。この説も今一つしっくり来ない。

そこでもう一度多数説の定説に戻るとして、では何故客が振り返らなかったのか。

諸君にこの謎を考えて戴き、判ったら聴かせて欲しいのです。では君子諸君、今日は長時間ご苦労さまでした。明日からの健闘を期待しています」

頭取は足ばやに退室して了った。

俄にざわめきが起こった。昇任した興奮と難題が課された慨嘆、長い一日が終った安堵等が入り混った複雑な空気が室内に満ち一種独特の気流が生じ漂よった。

誰かが叫んだ。「やれやれ論語なんか今迄一度も読んだ事あらへんわ」美紀と同期の神戸から来た高橋精一だった。「我れ未だ論語を知らず。また悲しからずや」この声は仙台支店に赴く森下勝則だ。美紀は「ひん、かえりみず。かえりみず。かえりみずなりぬ……」と呪文のように唱えていた。

その夜帰宅した美紀は本棚の隅から昔読んだ憶えのある岩波文庫の「論語・金谷治訳注」を取り頁を繰った。巻五郷党篇第3章にその文章はあった。そこには「お客は振り返りませんでした（満足して帰られた）」と確かに書かれていた。

（確かに矛盾だわ。満足したなら振り返る筈なのに……）と思案しつつ（金谷治先生といえば東北大学の名教授でわが国を代表する論語学者なのに。学生時代に読んだ時この明らかな矛盾に何故自分は気づかなかったのだろう）と腹だたしくなった。

瞬く間に一カ月が過ぎた。一息ついた美紀は休日の午後図書館に行き論語のその章だけを片っ端から読み漁ってみた。吉川幸次郎、貝塚茂樹、武内義雄、倉石武四郎、簡野道明、下村胡人。曽て講義を聴いた阪大の加地伸行や九大の合山究。九十歳を超えてもなお現役で活躍中の立命館大学の白川静。更に江戸時代の伊藤仁斎「古義」と荻生徂徠「徴」という古典迄も借り出し熟読した。

不思議な程内容は皆同じであった。唯の一人もあの矛盾（満足して帰るのに振り返らない）に

ついて説明も言及もしていない（知ってか知らずか、知っていても敢えて触れないのか。皆超一級の論語研究者なのに……）

最後に宮崎市定（いちさだ）の「論語の新しい読み方」「論語の新研究」を繙いてみた。頭取の言った通り「顧りみずなりぬ」と読み下し「うしろを振り返られなくなる迄お見送りしました」とあった。ついでにJ・レッグの英文も探してみた。そこには The visitor not turning round any more. と書かれていた。少なくともこの方がベターと思われる。それなのにこの二人の説に追随した人は見当らず孤立無援のようである。（何故だろう。第三の説があるのだろうか）美紀は途方に暮れ呆然と図書館を後にした。夕陽が真紅に燃え沈んで行く。無性に虚しかった。

宿題が気がかりだったものの多忙の内に無為に一年が過ぎた。美紀は（あの日集まっていたのは殆どが法、経、商学部出身者で中国語を専攻したのは自分一人だ。やはり私がまっ先に答えなければ……）と思い改めて〈賓退、必復命曰、賓不顧矣〉をじっと眺めた。ふと矣（い）の字が気になり漢和辞典を引いてみた。「文末に用いる助辞。疑問、断定、反語、詠嘆」とある。反語の文字を見た途端、霧の中で曙光が煌（きら）めいたように感じた。学者の説は皆断定的詠嘆で訓んでいる。これを〈不…矣（い）〉で反語ととれば強い肯定となるではないか。

論語冒頭の〈不亦樂乎＝また楽しからずや＝大いに楽しい〉という名句と同じ構文となる事に気づいた。乎（や）と矣（い）はほぼ同じ助辞だ。すると「顧りみざるや＝顧りみない事があろうか＝大いに顧りみた」となる。曙光が稲妻となった。不顧矣は「何回も振り返り立ち去られました」となり定説と正反対の解釈が出来る。美紀は「やったあ」と叫んだ。（二千年来の凡ゆる学者の説を

あっさり引っくり返した）と思った瞬間だった。夜更けにも拘わらず頭取に提出するレポートを作成すべくパソコンに向ったが、興奮で手が震えた。

数日後ピン太郎秘書役から電話があり（頭取が会食したいので出頭されたい）と伝えられた。美紀は天にも昇る心地がした。

頭取との会食と対話は有意義で楽しかったが、結論からいうと満点は貰えず（七〇点）との評であった。合格ではあるが未だ何か足りないという。

即ち「反語で答えるのは同等以下の人に対した時で、主君に対して言うのは礼を失しないか。論語冒頭の『また楽しからずや』も読者一般への語りかけであるか、又は自問であろう。上位の人、ましてや主君に対する答なのに逆に問いかけるようないい方＝反語での答え方は論語には無い」と太平は悟すように美紀に言った後「宿題に最初に答をくれるのは中国語に詳しい貴女であろうと思っていたがやはりその通りになった。何より『振り返った』のがいい。しかし先程述べた難点が有る。更に考察を窮めて満点の答を考えて欲しい」

美紀は百点こそ貰えなかったが、はからずも太平にご馳走になり親しく会話出来たのが嬉しかった。同時に太平が如何に論語を読み込んでいるかを知って畏敬を憶えた。

美紀はその夜また論語を開き〈賓退、必復命曰、賓不顧矣〉を何回も読み返した。

唐突に不が気になった。今迄は打消しの意に決まってると勝手に思い込み、辞書で調べた事もなかった字である。

念の為と思い辞書を引いて愕然とした。不が元来は「大きい、多くの、はなはだ、しばしば」

等の意味だった事をその時始めて知った。急いで他の辞典にも当ってみたが全てほぼ同じ内容だった。要約すると「ふくらんだ莢が垂れている象形文字。丕〔大〕の原字。非の音ヒを借りた打消しの助辞。①ず。せず。……にあらず。否や。②大きい。多くの。はなはだ。しばしば。丕に同じ」とあった。

美紀は雷に打たれたような心地がした。不の意味を②で解せば「お客は何回も何回も振り返り頭を下げて立ち去られました」となる。この場合不は副詞「しばしば」で矣は断定調の感嘆詞と成る。ストレートに「振り返った」を強調し感嘆している。孔子の主君に対する応答としては完璧ではないか！

それからの三カ月、美紀は論語に出て来る不の字全てを調べてみた。五百を越える不は全て打消しで訳されていたが、古い時代に書かれたとされる（上）論語（巻五迄をいう）の中で少なくとも四ケ所の不が打消しではなく「大、多…」の方がよりスムースな解釈になる事を発見した。論語より古い詩経や書経に多くの不が大で訳されている例も知った。丕〔大・多〕は論語には現われずこの字が戦国時代以降に作られた事も判った。つまり孔子の時代の不は未だ丕が分離独立せず、従って不は大や多の意味も併せ持っていた事が考証出来た。精緻で実証的な論文＝論語に於ける不の解釈について＝が完成した。何時の間にか夏が来ていた。

太平の喜びようは尋常ではなかった。「白点満点を差し上げましょう。よくぞ素晴らしい答を考え出してくれました。有難う。これで私も永年の懸案が氷解しすっきりしました。論語の歴史上画期的な発見でしょう。

ついてはせっかく書かれたこの論文を中国語と英語に翻訳しここに送ってみませんか」と一枚の名刺を差し出した。そこには「北京大学文学部教授　文学博士　日本文化研究所々長　劉金才」と書かれていた。美紀はどのようなご縁かは聞かなかったが、流石頭取だけあって広い人脈をお持ちだなと改めて感心した。

翻訳を終えた美紀は、ふと（頭取は不の本義を前から知っていたのではないか）と思った。何故ならあの研修会の時太平は〈君子不器〉に触れ『君子は大きな器たるべし』と訓示したのを憶えていた。通説は全て『君子、器ならず』と不を打消しで訓んでいるのに大で訓んだではないか！　美紀の疑念は確信に変った。そこで論文の署名の上に太平には内緒で聖徳太平と書き加え共同研究の形として北京大学に送った。

この論文が北京大学文学論輯の二〇〇五年一月号に掲載された。イギリスのサイエンス学術誌ネイチャーに比肩される人文科学系誌として世界的に権威のあるこの学術誌に載る事は即「北京大学文学博士号」が授与される事を意味した。かくして聖徳太平と沼田美紀は揃って文学博士号の栄誉に浴する事となった。

二〇〇五年正月早々には追っかけて「二〇〇四年度の漢籍研究の最優秀論文に贈られる古典文学部門の学会賞に選ばれた」との連絡が中国社会科学院哲学研究所から入った。〇五年二月のはじめ北京大学で授賞式が行われ二人は正装して出席した。夕刻北京大飯店で開かれた祝賀会の席上、美紀は太平にそっと聴いてみた。

「不の本義は以前からご存知だったのでしょう」太平はニッコリ笑って応じた。

「うむ、知ってはいたが確証が乏しく自信がなかった。それを中国語に堪能な貴女が論語に使われた不を全て検証して下さった。それにこれからは若い人の時代だ。私ごとき老兵が受賞するよりも貴女が受ける方がずっと意義がある。銀行の為にも日本の為にも好ましい。

それにしても貴女のお蔭で孔子様も二千年来の誤訳が正され喜んでおられる事だろう。私はそれが何よりも嬉しい。尤も老兵にとっても博士号や学会賞は勿論嬉しく光栄なことだが」

「もう一つお聞きしたいのですが、宮崎市定先生を除き他の全ての学者の解釈はどうして皆一様なのでしょうか。私のような素人でさえ気づいたのですから何人かの学者は既に気づいていたと思うのですが」

「そこです。学者は師の説に忠実でないと生きていけないのです。縦い今度のようなユニークな説を考えたとしても一旦発表すると師や兄弟子を傷つける結果となるでしょう。狭い学界ですからそんな事をすれば大学から追われかねません。

師にも先生が必らず居ます。ですから限りなく遡っていくと理屈では魏の何晏、後漢の鄭玄に迄至るでしょう。逆に先人が間違った注解をするとそのまま引き継がれていく。師の説に従っておけば無難ですからね。私は論語の注を始めて著した後漢の鄭玄が間違えたと思う。この時代既に不の字が不から分離独立し、それに伴ない大の意味が不から消えていた。だから不を全て否定で解釈した。それが蜒々と踏襲されて了ったのだと思います。

そもそも異説を出すのは余程の自信と職を失なうかも知れない覚悟が必要です。その点私達のように本業が別にある者は気が楽で却って本音で勝負出来るのです。

異説といえば南宋の朱熹や伊藤仁斎、荻生徂徠は立派でした。宮崎市定先生や合山究先生も敢然と新説を発表されていますが未だ未だ日本の大学は保守的、封建的です。

論文の提出先を北京大学にした理由も聡明な貴女ならもうお判りでしょう。さあでは文学博士号と学会賞に乾杯しましょう」

二人はグラスを合せ高々と挙げ一気に飲み干した。劉金才教授と中国社会科学院の卞崇道博士の二人がにこやかに笑みをこぼしつつ近づいて来た。

黒木瞳かと見紛ごう晴れやかな美紀の美貌は会場を圧倒していた。帰国後「北京支店長を命ず」の辞令を受けるのだが今は未だ知る由もなかった。

第二話　頭取の読み

平穏に明けた新年の松の内を過ぎた静かな日の午後であった。頭取の声が響いた。

「ピン太郎秘書役」

「ハイハイ。只今……」

聖徳銀行秘書役の泉ピン太郎は慌てて読みかけの書類を閉じ、聖徳太平頭取の机の前に駆けつけた。

「何かご用で」

「いや、用という程でもないが……。ところで足下は『しんなくんばたたず（無信不立）』という言葉の意味が判るかね」

足下とは同輩の相手に対する敬称で、太平が気嫌の良い時によく使う。

「はあ、その―……。それはですね『中心となる柱が無ければ家は建たない』というような意味ではないでしょうか」

経験上ピン太郎は何か答えた方が無難だと思い、とりあえず思いつくままの返事をした。太平はピン太郎の心中を見透かしたように彼の答を無視してとうとうと話し始めた。

「これは論語にある言葉で子貢が政治について尋ねた時の孔子の答なのだ。国家の運営に一番大切なことは軍事力でも経済力でもなく民衆と為政者との間の信頼なのだと。今の日本はこれが失なわれてる。実に歎かわしいことだ」

「ハイ。実に歎かわしいことであります」

「歎かわしいのはそれだけではない。若い足下らの古典、とりわけ漢籍を読む力の貧弱なことだ。こんな有名な言葉すら解せないとは実に情ない。足下らは一体学校で何を勉強してきたのかね。これでは銀行の行く末、日本の将来が思いやられるわい」

「申し訳ありません。恐れ入ります」

ピン太郎は内心（しまった）と悔んだが、太平のいうのも至極もっともだと思い黙って拝聴するより他はなかった。

こんなことがあって聖徳銀行ではとり敢えず在京幹部行員を対象に古典教養講座を開催することとした。早速一月の末に近い某日、本部の大講堂で一回目が開かれた。講師は当面言い出した太平が勤めるという。

この日各地の支店長や本部の部課長らが神妙な顔をして集まって来た。ピン太郎もその一人だった。彼は自分の頓狂な返事がきっかけでこんな事態となって了ったことに内心忸怩たるものがあった。一方太平は得意の漢籍の蘊蓄を傾ける好機なので朝から張り切っていた。

初回の講義は荘子の逍遙遊篇であった。淡々と進んで第三話の寓話に至った。荘子には喩え話が多く判り易い。

「日月出矣　而爝火不熄。『日月出でたるになお爝火（たいまつの火）の熄まず』

これは聖天子の尭が舜に天下を譲ろうとして、自分をたいまつの火に喩えていった有名な句であります。もう既に太陽が出て明るくなっているのに、未だたいまつを熄めずに燃やし続けていると歎いたのであります。

もう少し詳しく解説するならば

『あなた舜は、人格も智恵も非常に優れていて太陽のように輝やいている。それに対して私、尭は齢をとってあなたより遙かに劣り、もうたいまつ程の光しかない。

太陽であるあなたが現われているのに昼あんどんのような私のたいまつは、もう直ちに熄めない訳にはいかない。

どうか私に替って天子になって世の中を治めてほしい』

と舜に天子の位を禅譲することを宣言したのであります」

場内はシーンとしていた。

太平の声を子守唄のように聞きながら、うつらうつらと舟を漕いでいる者も居たし、また頭取が引退を暗示しているのではないかと勘ぐって耳を傾けている者もいた。

ピン太郎の隣には千葉支店長の辻岡藤勝が座っていた。二人は同期入社だが大学も違い同じ所での勤務もないのに、何となく気が合って仲が良かった。

辻岡は先程から睡魔の誘惑にかられ夢うつつであったが、太平の話が「日月出矣而燋火不熄」の所まで来た時、ふと何処かでこの話に出逢ったような気がした。

それが何時、何処であったのかを想い出そうとしたが、なかなか想い出せない。しかし先刻来の眠気は吹っ飛んでいた。想い出せれば何か素晴らしいことが起こるような予感がして懸命に考えを巡らせた。

突如辻岡は「アッ」と叫んだ。周りの居ねむりをしていた連中が驚いて眼を醒まし彼の方を凝視した程その声は大きかった。

（そうだ。あの掛け軸だ。しめた。これで岩下志麻いや宮崎香織を納得させられる）辻岡は確信に近いインスピレーションを覚え心がはやるのを押えかねていた。

時は十二年前に遡る。

平成三年六月十二日の朝日新聞朝刊の社会面に次の記事がかなり大きなスペースで載ったのをご記憶の読者もおられるだろう。

〔以下新聞記事のママ。……は筆者〕

《死の心境詠んだ渡辺崋山の漢詩千葉鴨川の資料館で見つかる》

《江戸後期の蘭学者で南画家、渡辺崋山（一七九三～一八四一）が死を前に心境を詠んだ七言絶句の掛け軸が千葉県鴨川市で見つかった。

蛮社の獄（幕府が渡辺崋山、高野長英ら蘭学者に加えた言論弾圧事件）に連座して閉居を命じられ、江戸から故郷の愛知県田原町に移り自刃した天保十二年（一八四一）に残した漢詩。

幽居元旦七言絶句（この題は箱書にある）

又迎春風犬馬年

讀書應患固非天

堪嗤燼火縦無煖

不直太平一點煙

また春風を迎える犬馬の年

読書（蘭学を学んだこと）まさに患（うれ）うべし固より天に非ざるを

嗤うに堪えたり燼火たとえ煖（そう＝暖かみ）なきも

まっすぐならず太平一点の煙

と読み下す。署名はないが渡辺登など二つの朱印がある》

記事の一隅には掛け軸を写した写真が掲載されていた。なお登は崋山の本名である。

この掛け軸は当時鴨川の老舗料亭「赤門」の江戸時代に建てられたという蔵の中から幾束かの古文書と共に見つかった。鑑定の為鴨川市立資料館に持ち込まれていたが漸やくこれが本物であ

ると認定され、この日の朝日新聞のスクープとなった。

渡辺崋山の漢詩はこれ迄十九首しか残されておらず貴重な発見であった。この掛け軸は翌年県の重要文化財に指定された。

江戸末期、幕府の鎖国政策に反対し開国を主張した進歩的学者で、超一級の知識人でもあった渡辺崋山は、幕府に危険人物として捕えられ死一等を免じられたものの厳重な看視下にあった。捕えられる直前、鴨川の旅館に潜んでいたのであろう。

赤門の主人がかくまったのかもしれない。だとすれば立ち去る際に宿賃の代りにこれを残していったのではなかろうか。当時文人墨客の書や絵はこうして残されたものも多い。

ところで料亭赤門は江戸時代の創業をほこる県内屈指の名門で鴨川が発祥の地であるが現在本社は千葉市内にある。

房総半島一円でホテル、料亭、ゴルフ場、牧場等を経営しており何れも盛業中で、県下有数の企業である。現社長は創業者宮崎赤ヱ門誠秋の七代目といわれ、あの大女優岩下志麻に似た知的な美人で名前は香織という。赤門産業株式会社の総帥である。

赤ヱ門誠秋と名乗った初代は読書人で、崋山や高野長英らと同じ開国派―憂国の志士だったと伝えられている。

さて千葉支店長の辻岡藤勝は、二年前の平成十四年一月に藤沢支店長から転勤して来た。未だ四十代前半の男盛りであった。

有力取引先である赤門産業に着任の挨拶に訪れた際、通された社長応接室にこの掛け軸が掛け

られていたが、余りにも達筆の行書なので半分も読めなかったことを憶えている。

宮崎香織社長と初対面の挨拶を交した時辻岡がこの掛け軸に感嘆すると彼女は前述した新聞のコピーを渡しながら辻岡に問いかけた。その美しい所作や声が今でも甘酸っぱく耳に残っている。

「支店長さんは漢詩にご造詣がお深くていらっしゃいますか」

「いえいえ。恥ずかしながら全くの不調法で……。残念ながらこの字の半分も読めません」

「おほほ。皆さんそうおっしゃいます。ご謙遜なさっておられるんでしょうけれど……。私は何をやっても不器用で特技はありませんが父や祖父の影響でしょうか、漢詩と書だけは大好きなのです」

「それは高尚なご趣味をお持ちでうらやましい限りです」

「ところでこの新聞記事に書かれている読み下しではどうしても意味が通らないのです。崋山は亡くなる前の正月に詠んだのですから覚悟の上の辞世の句といえるのではないでしょうか。

それにしては胸に響く悲憤とか慷慨のようなものが感じられないのです。意味も今一つはっきり致しません。どこかに間違いがあるのではと思うのです。でも天下の朝日新聞が間違えた読み下しをする筈がないでしょうし……。そのうちどなたか詳しい先生にお尋ねしようと思いつつそのままになっておりますの……」

辻岡は以上のような会話を交したことを憶い出した。またかねてより熱烈なファンで憧れていた大女優の岩下志麻に香織がそっくりで驚いたことも。

爾来一年半が経過した去年の秋、赤門産業から館山と犬吠岬に大規模ケアハウスの新事業を展

開する計画について相談があり、新築資金三十億円の借入れ打診があった。これはライバルの房総銀行にも内々打診中で、何れか好条件の銀行一行から借入れたいとのことであった。着工は三月頃という。

辻岡は社会的にも意義ある事業であり計画も妥当なので、自行単独でやりたかったが房総銀行も金利等で好条件を出し簡単に引き下る様子はなかった。どうしても負けたくはないがキメ手がなく悩んでいた。

古典教養講座が開かれた翌朝、出勤した辻岡は机のひき出しの奥から例の新聞記事のコピーをとり出し改めて読み直してみた。

詩の転句（三行目）の末尾の字を朝日は熄（そう＝暖かみ）と読んでいる。一方昨日の太平の講義では燈火とくれば熄（や）まず、だという。

確かに行書（ぎょうしょ）の崩し字で、熄とも熄とも読める。しかし荘子の寓話を典故として引いたとすれば燈火無熄（しゃっかやまず）で先ず間違いなかろう。意味もその方がすっきりと通り、崋山の幕府に対する警鐘、木鐸としてもぴったり合うと思った。

確証を得たい辻岡は昨日隣席に居合せた泉ピン太郎秘書役に電話をかけ手短かに訳を話し、

「何とか聖徳太平頭取にこの漢詩の解読を依頼してみてくれないか」

と頼み込んだ。ピン太郎は快諾したうえ直ぐに新聞記事のコピーをファックスで送るようにいってくれた。持つべきは友である。

その日の夕刻、早くも回答が届いた。驚いたことに朝日の読み下しとは大きく異なっていた。

以下はピン太郎秘書役から送付されて来た太平手書きのファックスである。〔……のケ所が朝日新聞と異なる〕

〈読み下し〉

また春風に犬馬の年を迎う
読書患（わざわい）にあたるは固より天に非ず
嗤（わら）うに堪えたり燈火のたとい熄む無きも
ただに太平一点の煙ならざらん

〈解釈〉

新年を迎え私は又無駄な馬齢を重ねた。

読書（蘭学を学んだこと）が身の患わいとなって了ったが、これは固より天の意志ではない。

西洋文明という太陽が輝いているのに未だにたいまつをかざしている幕府の政策は誠に滑稽である。かりにこの時代錯誤の古いやり方が続いたとしても、

文明開化の太平の世には単なる一点の煙ほどの価値も無いものとなるに違いない。

ファックスの最後には太平から辻岡に宛てたメモがあった。

〈秘書役から万事聞いた。朝日の読みは四行とも全て誤り。大新聞ともあろうものが実に歎かわしい。足下の健闘を祈る。頭取〉

辻岡は読み終えるや否や受信紙を摑んで赤門産業本社に向って走った。

宮崎香織社長の歓びようは大きかった。

「お蔭さまで喉のつかえがとれました。嵩山が理不尽な弾圧を受け死を覚悟し、漢詩に託したのはこの意味だったのですね。

それにしても一体どなたがこんな素晴らしい解読をして下さったのかしら」

辻岡は胸を張って応えた。

「私共の頭取です」

「えっ。聖徳太平頭取さまが……。そうでしたか。有難うございました。では早速にもお礼にお伺いしなければなりませんわ。そうそうお土産は何が宜しいでしょう」

「例の借入れを当行にご下命下さるのが何よりのお土産になると存じますが……」

「承知致しました。そのようにとり図らいましょう。末永く何卒宜しくお願い致します。お返し終えるのは二十年も先になるのですもの」

香織はにっこりと笑い深々と頭を下げた。

辻岡は永遠の恋人である岩下志麻が眼前に居て自分に笑みをこぼしながら優雅におじぎする姿を恍惚と眺めていた。夢なら醒めないでくれと願いつつ銀行員の幸福を噛みしめていた。

「頭取の宿題」は平成十七年正月号、「頭取の読み」は同十六年正月号の銀行新報（銀行新報社）に掲載された作品である。

（参考文献・合山究「論語解釈の疑問と解明」明徳出版社・原田種重「漢文のすすめ」新潮社　他）

霧の彼方に

太田　精一

(一)

ソコリニキ公園は雪に埋もれていた。葉を落とした白樺林に冷たい風が吹きつけ、枯枝を揺らしている。わずかに樅の木や糸杉の緑がまわりの景色に潤いを与えていた。

矢吹陽一郎は、モスクワ日本産業見本市の会場となるソコリニキ公園内の四号館を訪れるところであった。彼は、菱友物産の特派員として、本社から三ヶ月の出張を命じられ、一九七〇年二月三日モスクワに着いた。モスクワは、矢吹にとって初めての海外であった。ロシア語は、ほんの片言程度しか話せない。ただ、大学で半年間、学んだお蔭で、キリル（ロシア）文字には、違和感はなかった。

矢吹は、除雪された雪が両脇にうず高く積まれたトンネルのような道を足早に会場へと向った。寒気が防寒靴を通して体の中に浸み込んでくる。耳が千切れるほど痛い。二月初旬のマロースは、寒さを通り越し、刺すような痛みをともなって襲ってくる。マロースとは零下二十度にも三十度

にもなる寒気を擬人化したものだ。ロシア民謡に出てくる爺さんで、善人には優しいが、冷酷な悪人には厳しい。マロース爺さんの怒りに触れ、凍死した人も少なくないという。

見本市会場となる四号館は、ガランとしていた。まだ本格的な準備は始まっていない。二～三日前に、やっとソ連側の事務所ができ、執務を始めたところだ。主催者のジェトロの事務所もまだ会場内には設営されていなかった。

矢吹は館をひと巡りし、日・ソ双方の見本市関係者に挨拶した後、昼食を取るため公園内のカフェテリアに入った。食事客は、長蛇の列をなしている。三十分並んでやっと食事にありつけた。店は、セルフサービスシステムである。スタンドの女店員からスープ、鳥肉、パン、ピクルスをトレイの上の皿に乗せて貰い、空いた席についた。

「日本の方ですか。同席させていただいてもよろしいでしょうか」

若い男が話しかけてきた。安藤商事の水野忠男と名乗った。丸顔で人の好さそうな人物である。年の頃は二十七、八。やや太り気味の男だ。

矢吹は、ライバル会社の社員とはいえ、彼に親しみを感じた。話しているうちに二人は、たまたま同じホテルに宿泊していることが分かった。二月八日の日曜日に、二人でモスクワの街を散策する約束をしてカフェテリアを出た。

(二)

その日が来た。二人はモスクワ銀座と呼ばれるゴーリキ通りへと向った。芸術座、イズベェスチヤ新聞、映画劇場、コンサートホール、などがこの一角に立ち並んでいる。一軒の瀟洒な喫茶店を見つけ中に入った。ロシア風紅茶を飲みながら店内の様子を見渡すと、若い男女が楽しそうに話している。時折ちらちらと矢吹と水野を見ている二人の女性がいた。二人は突然矢吹たちのテーブルにきて、空いている席に座った。

「私の家にきて遊ばない。一人二十ドル」

たどたどしい英語で囁くような声だ。矢吹と水野は何のことか分からない。

「二十ドルって何が二十ドルなの」

矢吹は、金髪の背の高い女性に尋ねた。

「分からないの。メークラブすることよ。あなたたち日本人でしょう」

「ソ連には、売春するような女性はいないと聞いてきたが、こんな昼間から声を掛けられるなんて思いもしなかった。よほどドルが欲しいのか、それともぼくらが物欲しそうに見えたのかな」

矢吹は、白人女性への肉体的な好奇心に蓋をしてしまったことを惜しむように、日本語でぽつりと呟いた。

古代エジプト以来あるといわれている売春は、いつの時代でも、どんな体制にあっても、無くならない。矢吹は、社会主義の理想の裏に潜む〝みにくい現実〟に触れ、その理想が色褪せて見えた。

その後二人は、カリーニン通りに出た。肩を並べて歩いているといきなり一人の学生風の青年

が立ち塞がった。矢吹の左手を取って袖口をたくし上げ、何か小さな声で言っている。矢吹は一瞬ギョッとして身構えた。柔道二段の彼は、相手が刃物や拳銃さえ持っていなければ何んとか撃退できると思い、そこに踏み止まった。

「カイタイ、セイコー、カイタイ、セイコー」

青年は何か口走っている。

落ち着きを取り戻し、よく聞いてみると、どうやらセイコー社製の時計を買いたいと言っているらしい。矢吹は、自分の時計を見せ、英語で言った。

「これは、セイコー社製の時計ではない。シチズン製だ」

「シチズンでも何でもいい。日本の時計が欲しいのだ」

相手も英語に切換えてきた。

「貴国でも時計は大量に生産し、輸出している筈だ。何故日本の時計が欲しいの」

「日本の時計は正確で壊れにくいとの評判だ。持っている人も少ないから、友達にも自慢できる」

矢吹は、売るつもりはなかったが、どれほどの値段で買いたいのか聞いてみた。

「幾らなら買う」

「二百ルーブルでどう」

当時の二百ルーブルは、日本円にして八万円にもなる。矢吹の時計は、日本で一万二千円位だから六倍以上の値段で売れることになる。矢吹は、売りたいという衝動に駆られた。だが、ソ連

では、外国人が所持品を売却することは、固く禁じられていた。特に、時計、衣類、電気製品の類いは厳しくチェックされる。もし売買の現場を押さえられれば、国外退去させられる恐れもある。矢吹は、入国前に注意されたことを想起し、思い止まった。水野も同じ思いであった。二人は、残念そうに時計をさすって、青年に答えた。

「この時計は、売ることはできない。入国の時に税関からそういわれている」学生風の青年は、あきらめきれない様子で、二人の立ち去る姿を見送っていた。

(三)

開会も迫ってきた。矢吹と水野は、日曜日にもかかわらずソコリニキ公園の四号館に出勤し、それぞれのブースの設営に当った。昼食時、二人は申し合わせて、公園内のカフェテリアで食事をすることにした。

食事が終って席を立とうとした時、若い女性二人に声をかけられた。

一人は年の頃二十七、八、ロシア人にしては珍しく小柄で、身長も百五十五、六センチ程度しかない。鼻はわずかに上向き加減で、額が少し出ている。やや大きめの口もとに微笑を浮かべ、栗色の目がキラキラ輝いていた。茶色の髪を無造作に垂らし、理知的な感じであったが女性としての魅力を損なうものではない。

もう一人の女性は、二十五、六才で、身長百六十センチ前後、均整のとれた身体をしている。目は蔦色。鼻筋が通り、ルージュを引いた口元が可愛らしい。金髪にウェーブを入れたやや長め

の髪の毛を肩の辺まで垂らしている。
「ニホンジンデスカ、ワタシノナマエハ、アリヨーシヤ・ワシーリエヴナトイイマス。イマニホンゴヲベンキョウシテイマス」
小柄なほうの女性が話し掛けてきた。矢吹と水野は思わず顔を見合せ、またその手の女性ではないかと疑い、身構えた。だが二人の様子は、肉体を〝売り物〟にしている人とは見えなかった。アリヨーシヤと名乗った女性は、化粧をほとんどしていない。茶色の厚手のスェータと焦茶の無地のスカートをバランス良く着こなして洗練された感じである。
「どうして日本語を勉強する気になったのですか」
「ワタシ、デンキノエンジニアデス。ニホンノデンキノ〝テクノロジー〟ガ、スバラシイトキキマシタノデ、ベンキョウシヨウトオモイマシタ」
「そうですか。あなたもやはり日本語を勉強しているのですか」
矢吹はアリヨーシヤの友達にも聞いた。しかし彼女は、矢吹の日本語の意味がわからなくて、キョトンとしていた。アリヨーシヤが彼女に代って、英語で答えた。彼女の名前は、タチヤーナ・アンドレーエヴナ。アリヨーシヤの近所の友達で、国営の衣料品店に勤めている。今日は休日なので、ソコリニキ公園に遊びにきた。日本語はおろか英語もほとんど話せないという。
矢吹、水野、アリヨーシヤ、タチヤーナの四人は、公園内の除雪された道を散歩した。寒いモスクワでの散歩は、つい早足となる。早足で歩くことによって、血液の循環を良くし、体を温め、寒さを防ぐことができるのだ。

ソコリニキ公園もわずかに春の気配が感ぜられるようになっていた。白樺もその木肌に生命の温もりが宿って息づいている。
「レニングラードホテルに宿泊しています。日本語の勉強に役立つかどうか分かりませんが、できれば電話をして下さい。今度、四人で食事でもしましょう」
矢吹は、何んとなく、このまま別れるのが惜しい気がした。二人の住所と連絡先を聞いておきたかった。だが、思い止まった。秘密警察の手先ではないかとの恐れが頭をよぎったからである。それでも矢吹はアリヨーシヤとタチヤーナからの連絡を密かに期待しながら、ソコリニキ公園の出口で別れた。すでに夕闇が迫り、雪がまた降り出した。ライオネル・バートの〝ロシアより愛を込めて〟の甘いメロディーが公園内に流れていた。
部屋に帰った矢吹は、アリヨーシヤの首を傾けて語る仕種、美人とはいえないが、均整のとれた小柄な体、理知的でそれでいて女性らしさを失わない表情や身振りに成熟した女を感じ、遅くまで寝付かれなかった。

三月二十日夜九時頃、矢吹は、ホテルでアリヨーシヤからの電話を受けた。まわりを警戒するようなくぐもった英語の声が受話器を通して聞こえてきた。アリヨーシヤだと矢吹は直感した。盗聴器を意識しているのか肉声とずいぶん違っていたが、ロシア語なまりのたどたどしい口調は、まぎれもなく彼女のものだ。
「もしよかったら、明日夜七時に会っていただけないかしら。タチヤーナも一緒ですから水野さ

んにも話して下さい」
「分かりました。ぼくも是非お会いしたい。ずっとあなたからの電話を待っていました」
矢吹は、喜びを嚙みしめながら水野にそのことを伝えた。

(四)

翌日の夜七時に、ホテルの入口で会った。当時のモスクワのホテルは、一般の市民が気楽に入れるような雰囲気ではない。ドアーボーイは、監視と警備を兼ねていて不審な人物を入口でチェックする。ことに若い女性は、コール・ガールの疑いを掛けられることが多いので、ホテル内への立入りは、できるだけ避けようとする傾向が強い。
小雪のちらつくレニングラードホテルの前で、アリヨーシヤとタチヤーナが足踏みしながら待っていた。道路は凍てついて、滑り易くなっている。春分の日が過ぎてもモスクワは、まだ冬である。
矢吹たちは、アルバーツカヤ駅付近のレストランに案内された。モスクワの一般市民の利用する中級のレストランで、サラリーマン風の若い男女で賑わっている。すでに予約してあったのか、席に着くと間もなく、ウエイターが白パンと黒パンを盛った篭を持って来て、飲物の注文を聞いた。
矢吹と水野は、二人の温かいもてなしに感謝し、アリヨーシヤとタチヤーナに、それぞれ日本製の絹のスカーフをプレゼントした。

「スパシーバ・ボリショイ。ヤブキサン、ミズノサンアリガトウゴザイマス」
二人は、頬を紅潮させ、手を取り合って喜んだ。タチヤーナも、アリヨーシヤが日本語で話す〝アリガトウゴザイマス〟の意味を理解したようで、〝アリガトウゴザイマス〟を繰り返した。
「たかがスカーフをプレゼントしただけで、こんなに喜ばれるなんて、思ってもみなかった」
水野は、二人に聞こえないように、そっと矢吹に囁いた。この二人の表情や仕種から暗い秘密警察の陰など感じられない。
(秘密警察の手先である筈はない)
頭の片隅に澱のように溜っていた疑念を晴らすことができたと矢吹は密かに思った。だが、それでもなお、不安は残った。その不安は、独裁国家の持つ暗い陰が人の心の襞に忍び込み猜疑心を呼び起こすことによって生ずるものであろう。矢吹のモスクワ滞在中、常にこの不安は心の片隅から離れなかった。
アリヨーシヤとタチヤーナは、レストランを出ると早速スカーフを頭に被った。アリヨーシヤは、矢吹の肩に手を掛け、頬に口付けをした。矢吹の頬は、熱く燃え、アリヨーシヤを抱きしめたい衝動に駆られた。だが、人通りもあり、水野もいたので、かろうじて踏み止まった。横目で、チラッと水野を見た。タチヤーナが水野の頬に接吻しているところだった。水野は照れ笑いをしながら恥ずかしそうに身を捩っていた。
「矢吹さん、日本語を教えて下さいね。その代りにロシア語を教えてあげる。でもどこで勉強しようかしら。ホテルには行きたくないし……」

「今、見本市の始まる直前で、準備に追われている。だから教えてあげたくても時間がない。だが、開幕すれば、夜には、ある程度の時間がとれるから、四月に入ってからにしよう」
「四月になったら一週間に一～二度は教えて下さる」
「うん、大丈夫だと思う。場所は、あなたと初めて会ったソコリニキ公園のカフェテリアがいいね。いつからにするか、また電話して欲しい」
「わかったわ。今度会う時にテキストを持ってくる」
「どんなテキストか知らないけれどやってみよう。そうそう見本市の招待券を持ってきたのを忘れていた。一枚上げるから見にきて」
矢吹は、アリヨーシヤに招待券を渡しながら握手を求めた。アリヨーシヤは、柔らかな可愛い手を差し出し、矢吹の手を強く握り締め、しばらく離さなかった。
水野も招待券をタチヤーナにプレゼントした。アリヨーシヤとタチヤーナは、急ぎ足で、粉雪の舞い散る街角に消えて行った。時計の針は既に十一時を指していた。

(五)

日本産業見本市が開幕して三日目に、アリヨーシヤとタチヤーナは連れ立って会場を訪れた。ひとわたり会場内を見学した後、アリヨーシヤは、矢吹に感想を語った。
「日本の工業力はすごいわね。ソ連は、宇宙開発や軍事産業の分野では、アメリカと肩を並べる程だけど、生活用品や電気製品など、日常生活に必要なものは後回しにされ、遅れている。配電

盤を製造している私の工場も部品が不足したりして大変なの」
矢吹は、豊かな消費生活を送っている日本と社会保障は充実しているが慢性的な物不足に悩む大国ソ連を比較して一般市民は、どちらが幸福なのか改めて考えさせられた。
「ところで、見本市も開幕したから、毎日夜遅くまで残る必要はなくなった。日本語の勉強も週一、二回なら大丈夫だ。いつどこで始めるか決めよう」
「うれしい。助かるわ。じゃあ火曜日と金曜日の夕方六時、ソコリニキ公園のカフェテリアにしましょう。一時間待って来なかったら帰ります」
アリヨーシヤは、そっと矢吹の耳元で囁いて、タチヤーナと共に人混みの中に消えた。
矢吹は、約束通り火曜日にカフェテリアに行った。アリヨーシヤは、隅の席で本を拡げ、一人で待っていた。満席に近かったが昼間ほど混雑はしていない。
「オマタセシマシタ。ナニカラハジメマショウカ」
矢吹は、日本語で語り掛けた。アリヨーシヤは、配電盤の仕組みを解説した日本語の本を取り出し、その説明文をわかり易い日本語で言い換えるか、英語に訳してほしいという。
矢吹は、経済学部出身で、理数系の学科は苦手であった。日本語で読んでみたが、内容を十分理解することはできなかった。
「アリヨーシヤ、ボクハニホンジンダケド、コノホンノナイヨウガリカイデキナイ。ダカラコノテキストデハキミニ、ニホンゴヲオシエラレナイ」
矢吹は悔しそうにその本を伏せた。片言の日本語しか話せないのに、辞書を引きながらでも、

電気に関する日本の文献を読みこなそうとするアリヨーシヤの努力に感服し、少しでも彼女の役に立ちたいと思った。

「まずは、日本の童話や小説をテキストに使って始めたいのだが、生憎持っていない」

矢吹は済まなそうに、アリヨーシヤに英語で言った。

「今、私の勉強している日本語のテキストの中で、分からないところを矢吹さんに聞くことにしたらどうかしら」

アリヨーシヤもつられて英語で答え、お互いに顔を見合わせて笑った。

矢吹は、言葉の勉強のためだと言い聞かせて、会っているうちに、アリヨーシヤが独身で、アパートに一人で暮らしていることが分かった。彼は、次第にアリヨーシヤの中の〝女〟を意識するようになった。アリヨーシヤも矢吹を単に日本語の先生としてだけではなく、いつも会って語り合い、身近に感じたいという想いが強まっていた。手が触れただけで、胸の高鳴りを押えることができないほど、二人は相手を意識するようになったのだった。

(六)

見本市も終った。四月も半ばを過ぎ、ソコリニキ公園にも春が訪れた。白樺の芽もふくらみ、雪もほとんど消えている。カフェテリアを出た二人は、早春の冷たい風に吹かれながら、公園内を散歩した。パブロヴィッチの〝モスクワの夜は更けて〟の甘いメロディーが流れている。

矢吹は、アリヨーシヤの肩を引き寄せ、唇に触れた。アリヨーシヤの冷たい唇から熱い吐息が

洩れ、矢吹の首を抱え込むように腕を巻き付けてきた。二人は、白樺の木の陰で、長い間抱き合って、激しく波打つ胸の鼓動を確かめ合い、何も語らなかった。北斗七星が、澄み切った夜空に輝いている。

矢吹とアリヨーシヤは、公園を出て地下鉄のクールスカヤ駅まで歩いた。人影はまばらだった。前方の闇の中に街燈の明りが一列に浮かんで見える。

しばらくすると、後から二人の歩調に合わせるような靴音が聞こえてきた。振向くと靴音はぴたりと止まり、人影がビルの角に消えた。アリヨーシヤは、立ち止まり辺りを見回してから、矢吹を誘って素早くビルの影に隠れた。

「秘密警察の人かも知れない」

怯えるように呟きながら、じっと耳を澄ませ周囲を窺った。音がしなくなったのを確かめて、急ぎ足で、クールスカヤ駅まで歩いた。

矢吹は、甘い夢が一瞬のうちに醒め、現実に引き戻されたような気がした。別れ際に、矢吹はアリヨーシヤに聞いた。

「君のアパートに一度訪ねてもいい」

「いいわ、何もない殺風景な部屋だけど、一人で住んでいるから誰にも気を使わなくてもいい。ただ、外国人のあなたが、部屋に入ってくるところを近所の人に見られると困ったことになるかもしれない」

アリヨーシヤは、そう言いながらも、矢吹と二人だけで過ごすことのできる場所が欲しかった

のだ。
矢吹は、アリヨーシヤが、危険を冒してまで、自分を部屋に招き入れる気持になってくれたことが嬉しかった。それが、二人にとってどんな意味を持つことになるのか、後で分かった。

(七)

メーデーが近付くにつれ、モスクワにも本格的な春がやってきた。白樺の木は日一日と緑が濃くなって行く。五月に入ると太陽の光が増し、気の早いモスクワっ子は半裸で、日なたぼっこをしている。
矢吹の帰国も迫ってきた。アリヨーシヤの日本語の読み書きは、それほど上達はしていない。だが、会話は、矢吹への愛の証しであるかのように、見る見る上達した。それでもまだ、複雑な会話は英語に頼らざるを得ない。
最後の学習の日のことであった。
「ヤブキサン、ミジカイアイダデシタケド、ニホンゴヲオシエテクレテ、アリガトウ。キョウデサイゴニナルトオモイマスノデ、ドウゾワタシノアパートニ、キテクダサイ」
アリヨーシヤは、矢吹の手を取って、地下鉄のコンソモリツカヤ駅に向って歩き始めた。彼女のアパートは次のクールスカヤ駅から歩いて五分ほどの処にある。
霧の深い夜だ。街燈が、ぼんやりと灯っている。人通りの少ない薄暗い道路を二人は腕を組み、無言で歩いて行く。暗闇の中にじっと潜んでいる何か得体の知れないものが、突然襲って来るよ

うな恐怖感に怯えながら、ただひたすら歩いた。長い五分間だった。
アリヨーシヤのアパートは、七階建のビルの三階にあった。矢吹は、忍び足で階段を昇り、そっとドアの鍵を開けた。九時を過ぎたばかりであったが、周囲は静まり返っていた。ドアーを開け、中に入ると、右側は洗面所、左側はダイニングキッチンとなっている。キッチンの隅には、ささやかな調理台と流しが取付けられていた。小さなテーブルと二脚の椅子がダイニングの真中に置いてある。
アリヨーシヤは、洗面所で顔を洗った。サモワールでお茶を沸かし、ガラスのコップに入れ、ピロシキを添えてテーブルに置いた。食事は、すでにカフェテリアで済ませてきたので、二人共空腹は感じなかった。
ダイニングを抜け、二人は奥の部屋に入った。居間と寝室を兼ねている。そこには、小さな洋服ダンスとシングルベッドがそれぞれ正面と左手の壁を背にして置いてあった。正面の洋服ダンスの上には、両親と一緒に撮った子供の頃の写真が飾ってある。左手のベッドの上の壁には、ロシアの田園風景を描いた絵が掛けてあった。
「ヤブキサン、オクサンイナイノ、スキナヒトハ」
ベッドに腰を下ろしながら、アリヨーシヤは、これまで、何んとなく聞きそびれていたことを言葉に出した。
「ウン、ツマハイナイ。スキナヒトハイタケド。アリヨーシヤハ、ドウナノ」
「スキナヒトハイタケド、イマハイナイ」

そこまで日本語で言って、突然英語に変った。
「いたらあなたを私のアパートには連れてこないわ」
「両親はモスクワにいるの」
矢吹もまた英語に切替えた。
「両親はシベリアにいるわ。父はモスクワの近くのコルホーズ農民だった。第二次世界大戦の時には、兵隊としてドイツとの戦いに参加し、終戦後はまた元のコルホーズ農場で働いていたの。十五年前のことだった。コルホーズ農民の生活向上を共産党地区委員に訴えたら反スターリン主義者と言われ、シベリヤに送られてしまったの。母も一緒だった。私は幼なかったので、モスクワにいる伯父夫婦に引取られ、育てられたの」
「じゃあ、ずいぶん苦労したんだね。外国人のぼくが、アリヨーシャの国のことをとやかく言うべきではないかも知れないけれど、最近になって何か変化があったんじゃない」
「フルシチョフ政権の時に少し変るかと思った。でもブレジネフ政権になってまた元に戻ったみたい」
「しかし、経済はずいぶん良くなっているようだし、GNPはアメリカの半分だといわれている。フルシチョフは一九七〇年代でアメリカに追いつき、追い越すのだと言ってたけど」
「それは無理じゃないかしら。私は技術者だから分るけど、アメリカとのテクノロジーギャップはすごく大きいと思う。見本市を見たけど、日本と較べても、多くの分野で後れているのではないかしら」

確かにソ連は、一九七〇年のその頃から、西側先進国との技術競争に水を開けられつつあった。そればかりではない。競争がないため、合理化や技術革新への意欲が乏しく、恐ろしく無駄の多い社会システムが出来上ってしまっていたのだ。重化学工業を優先するあまり国民生活は犠牲にされ、一部の食料品は配給制で、日常生活用品は慢性的な不足状態にあった。このため、買物をするのに何時間も並んで待つことは、ごく当り前のことと思われていた。
当時のソ連は現在の北朝鮮に似た状況下にあったと言える。

(八)

アリヨーシャは、スターリン主義に対する不満とソ連経済の将来への不安を持っていたようであったが、あえてそれを語らなかった。ただ、両親と引き離された時のことを想い出したのか、涙を浮かべ、ベッドの上に顔を伏せた。
しばらくしてアリヨーシャは、顔を上げ笑顔を作った。
「政治や社会の話は止めましょう。それよりも今日はお別れの日。矢吹さんが日本に帰ったら、もうお会いすることはできないと思うの。私のことをいつまでも忘れないでね」
「住所をここに書いてくれない。日本に帰ったら必ず手紙を出す。君とはもう会えないかもしれないが、ぼくのことも、いつまでも心に留めておいて欲しい」
矢吹は、アリヨーシャの住所を書いたメモをそっと畳んで、ポケットに入れた。
「楽しい二ヶ月間だったわ。あなたのことは死ぬまで忘れない。これからどんなことが起きても、

あなたとの想い出を大切に生きて行く」

危険を察知しているようなアリヨーシャの口ぶりである。

矢吹は、激情を抑え切れなくなった。アリヨーシャの肩を引き寄せ、強く抱き締めた。アリヨーシャは全身を矢吹に預け、潤んだ瞳で彼を見た。濡れた唇から熱い吐息が漏れ、激しい心臓の鼓動がアリヨーシャの胸から伝わってきた。矢吹は、狂しいほど愛しく思った。アリヨーシャと唇を重ね、そのまま彼女を抱き上げベッドに運んだ。

二人は、ベッドに倒れ込み、衣服を脱ぐ間ももどかしく、激しく愛し合った。アリヨーシャの身体はすぐに反応し、悦びを隠そうとはしなかった。

激情の去った後、二人はしばらく裸のまま抱き合い、余韻に浸っていた。その時、突然ドアーを強く叩く音がした。アリヨーシャは素早くガウンを纏い戸口に出た。一人の中年の女が中に入ってきて、アリヨーシャと何か声高に喋っていた。女が出て行った後、アリヨーシャは沈痛な面持で、涙を浮かべ矢吹に告げた。

「矢吹さん、急いで帰って下さい。送って行けないけれどこれでお別れです」

矢吹は、何か悪い予感がした。すぐに服を着て、三階の廊下に出た。

アリヨーシャは、ドアーの外に立ち、矢吹が階段を下りて行く姿を見送り、突然足を踏み鳴らし大声で叫んだ。

「サヨウナラ、ダ・スベダーニヤ」

日本語とロシア語で、叫ぶアリヨーシャの悲痛な声は、アパート中に響き渡った。矢吹は、ア

パートの出口の扉の前まできて三階を見上げた。アリヨーシャは、日頃の慎しみと理性を失い、髪を乱し、足を踏み鳴らして手摺りを揺さぶっていた。

「ダ・スベダーニヤ、アリヨーシャ　サヨウナラ」

矢吹は、重い扉を開け戸外に出た。霧が深く垂れ込め、アリヨーシャのいるアパートを包み込んでいる。

アリヨーシャの部屋の明りが、ぼんやりと霧の中に霞んで見えた。

帰国してすぐ矢吹は、アリヨーシャに手紙を書いた。返事はなかった。手紙が彼女に届いたのか、届かなかったのか、それさえ分らない。

矢吹は、あの最後の夜、部屋に入ってきた女性が、アリヨーシャの友人だったのか、あるいは秘密警察の手先だったのか、その後ずっと考え続けている。

ベルリンの壁が破れ、民主化が進み、ソ連邦が崩壊した。国家権力が個人の自由を束縛した時代は終った。

だが、あの日のことは、霧の彼方に霞んだまま、矢吹の心の中に、いつまでも晴れることなく残っている。

歯医者さん

森　実与子

それは十二月三十日の夜からはじまったのです。

正月を過ごすために実家に帰っていた私は、夕食を食べ終わって、母と一緒にお正月のおせち料理の支度にとりかかろうとしていました。とその時、口の中に、異物感を感じたのです。夕食に食べた鯵の干物の骨がひっかかったのか、それとも食べ物のなかに、金属やプラスチックの混入物でも入っていたのでしょうか。……いえ、そうではなくて、歯の詰め物が抜け落ちていたのです。

「まずいことが起こったかな」

一瞬、私は思いました。もう世の中はお正月休みに突入し、歯医者さんはどこもお休みです。こんな時に病気になるなんて、まったく運が悪いとしかいいようがありません。少なくとも一月三日までは、どんなに勤勉な歯医者さんだって休暇中でしょうから、歯が痛み出したらこの正月は辛いものになるなと、ちょっと気が重くなりました。でも、それは杞憂に終わりました。詰め

物が落ちてスカスカの歯になり格好悪くはなったけれど、運良く、痛みは起こりませんでした。

私は子供の頃から歯が弱くて、しょっちゅう歯医者さんに通っています。それは母からの遺伝で、きっと人よりもカルシウムが不足した体なのでしょう。小さい頃、牛乳をたくさん飲んだにもかかわらず私は背も低く、効果は表れませんでした。これも体質の一種です。母も子供の頃から歯に悩まされ続けてきたので、私の歯に対しては細心の注意を払ってくれました。

幼い頃から、少しでも歯が痛み出すと、すぐに歯医者に連れていってくれました。おかげで八重歯だった私は、小学校の頃にいち早く矯正して、上の前歯に矯正用の銀色の金具をはめていました。見た目は悪かったけど、我慢したおかげで、私の歯並びは一応人並みだし、口元がかわいらしいと、子供の頃からよくいわれます。けれど、歯が弱いことには変りないのです。これまで、何軒の歯医者さんにお世話になったことか。一年通わなければいいほうで、必ず歯が痛み出したり、詰めていたものがとれたりして、歯医者さんに通わなくてはならなくなるのです。

つまり、歯医者さんと私とは懇意になるべき関係なのですが、なかなかうまくいきません。なぜなら、腕のいい歯医者さんを見つけるのは至難の業だからです。いくら通い続けても痛みがとれないこともあったし、口が小さいゆえに根が深い私の歯は、抜くのに厄介で、お手上げの歯医者さんばかりなのです。

結婚してから住んでいる家の近所には、いい歯医者さんがいなくて私は弱っています。三年前、突然痛みが走り、駅の近くの歯医者さんに駆け込みましたが、いつまでたってもよくならなくて、

救急病院の歯医者さんに助けを求めました。その先生の腕はよかったけれど、応急手当てしかしてくれません。

「ここでは、保険のきく仮のものしかいれませんよ。金や瀬戸物を入れたかったら、もっといい歯医者さんへいってください」

痩せて神経質そうな白髪の先生に、自嘲気味にいわれたのを覚えています。救急病院の先生なので、やけになっていたのかもしれません。

また、近所の別の若い歯医者さんは、太くて短い指の、不器用な人でした。歯医者向きではないなと不安に思っていたら、私の直感があたり、ある時、夜逃げをしました。いまだにその歯医者さんの看板はそのままで、雨風にさらされているし、二年たった今でも、なかをのぞくと、診察台などの機械が残っています。やはり職業には、向き、不向きがあるのでしょう。

暮れに詰め物がとれて、私はまたいつもの習慣が始まったと、面倒な思いにかられましたが、年があけて覚悟を決めました。今度こそいい歯医者さんに行かないと。私だって、もう三十代に突入したのです。中年期にさしかかりつつあるのですから、これまでみたいに自分の体を粗末にできません。億劫だけれど、体のことなのだから大切にしないとね。

そこで、歯の弱い夫の友達に頼んで、私の家の近くに優秀な先生を探してもらいました。

「学生時代にラグビーで歯を折ってさし歯にしてから、ずっとかかっている歯医者の教え子なんだってさ。その先生の推薦だから、腕ききに違いないっていってたよ」

夫は普段と変わらない冷静な口調で私にいいました。夫は私と違って歯が丈夫で、結婚してか

ら一度も歯医者さんに行ったことがありません。私より十歳も年上なのに、健康な歯を持つ夫は、歯が自慢なのです。

「僕は歯が丈夫でね、歯医者知らずなんだよ」

私が困っていると、そういって自分から口をあけて歯を見せてくれました。

その時まで、私は夫の歯をまじまじと見たことはありませんでしたが、よく見ると、白い歯が、形良く並んでいます。夫の唯一のセールスポイントといえるかもしれません。けれども、夫は無口でめったに笑うことがないので、私は夫のきれいな歯に、まったく気づかずにいたのです。宝の持ち腐れとは、こんなことをいうのではないかしら。

そんなわけで、お正月が過ぎた一月の中旬になって、私は意を決して新しい歯医者さんへ通うことにしました。

地図で場所を調べると、そこは私の家と同じ区内にありながら、不便な場所です。最寄りの駅が近くにないので、電車やバスを乗り継いで行くか、直線距離をたどって歩いていくしかありません。結局地図を片手に、寒空の下を三十分も歩いて、やっとそこにたどりつきました。

こぎれいな病院は、まだ新しい感じがします。予約時間の十分前についた私は、しばらく待合室に座っていました。ちょうど昼休みのため、待合室には誰もいません。しいんとした部屋を見回すと、白い壁には、歯科に関する雑誌の切り抜きや、この病院の治療方針を説明したものが貼ってあります。

先生の経歴を見ると、有名な歯科大学出身のことがわかりました。どの張り紙も、エイズ予防

は完璧で最新の設備を整えているとか、歯周病予防に力を注いでいるなどという、一種の自己ピーアールです。こんな自己顕示欲の強い病院は初めてなので、私はおかしくなってきて、

「きっと、歯医者になったことがうれしくて仕方のない先生なんだわ。どうせなら、先生の顔写真でも貼っておけばいいのに」

と一人でにやにやしてしまいました。

午後の診療開始時間の二時になると、先生や看護婦さんが立て続けに入ってきました。私は一番乗りで、診療室に通されました。三台の診療台と、ピンクのエプロンをつけた若くてかわいらしい看護婦さんが三人ほどいる風景は、どこの歯医者さんでもおなじみです。

真ん中の台に、私は案内されました。体が水平になるくらい椅子が倒され、私が神妙な面持ちで白い天井を見つめていると、大きなマスクをしてメガネをかけた、体の大きな先生が近寄ってきました。

「こんにちは。今日ははじめてなので、レントゲンをとって、どこが悪いのかチェックしましょう」

軽く口の中をのぞきながらの初対面の挨拶がすむと、私はすぐにレントゲン室へ通されました。こういう一連のパターンを、私はもう何十回となく繰り返してきました。いわば、歯医者さんの通過儀式です。

しばらくすると、どこが悪いかを一目瞭然に示した「お口のノート」という口のなかの歯の図を見せられ、看護婦さんから説明がありました。

暮れに詰め物がとれたところには、案の定、虫歯になっていました。

他の患者さんを見ていた先生が私のところに来て、早口で説明します。

「山田さん、歯医者が一生懸命治療しても、患者さん自身がちゃんと歯を管理しないと意味がないんですよ。鏡を見て下さい。歯茎が引っ込んでいるのは、磨き方が悪いからです。歯茎を歯ブラシで摩耗しているんです。ブラシが大きすぎるのかもしれませんね。山田さんは口が小さいから、小さい歯ブラシでいいんじゃないかな」

看護婦さんから渡された手鏡に写った私の口なかは、歯茎が引っ込み、貧弱な黄色い歯が頼りなさそうに並んでいます。

「年のせいで歯茎がひっこんできたんだと思っていたんですけど」

「そうじゃないです。歯の磨きかたが悪いんです」

子供にいい聞かせるような強い口調で先生はいいます。

「デンタルフロスもしないと。しっかり磨いてくださいね。一日十分は必ず磨くことです」

「はあ……」

私に話しかけながらも、先生は、他の患者さんを見回ったり、せわしげに動きます。

「私はうちの息子に、お父さんはずるいって、いつもいわれるんですよ。夜しか磨かないじゃないかって。たとえ一日一回磨くだけでも、磨き方がよければそれでかまわないんですよ」

と自信ありげにいいます。

三つの診療席を交互に回り、主婦の患者さん相手に「子供さんは元気ですか」なんて精一杯の

お愛想をふりまいているかと思うと、時々受付に行ってみたり、コードレス電話を手にしたり、お喋り好きの変わった先生です。少なくとも、私が今まで出会ったなかでは一番変人に近いかもしれません。

患者の身としては、先生に息子がいようが娘がいようが関係ないし、無駄口は必要ありません。寡黙でかまわないからとにかく治療に専念して欲しいのに、早口で饒舌な先生は、歯医者というよりもサービス業の人みたいに、せまい部屋のなかをこまめに動き回るのです。

その日は、「お口のノート」のコピーと歯磨きの仕方を書いたものを渡されました。ブラシの小さな歯ブラシを買い、私は家に帰って鏡を見ながら歯磨きに励みます。

渡された「お口のノート」をじっくり見ると、図解で示された私の歯は、すでに四本の奥歯はなく、一部欠損や虫歯の歯がたくさん記されています。三十年以上生きてくると、歯も手入れが必要不可欠になり、少しずつボロボロになっていくのが明らかです。慣れ親しんできた私の歯も、随分酷使してきたものだと実感しました。

もう一枚の紙には、『「磨いている」と「磨けている」は違う』と大きな文字が印刷され、磨き方が事細かに示されています。磨き方がなってないといわれた私は、まるではじめて歯医者さんに行った小学生のようです。ともあれ、説明通りに鏡を見ながら、一本一本丁寧に歯を磨いていくということがいかに難しいかを、私ははじめて思い知らされました。

こんな具合に左下の奥歯の虫歯治療がはじまり、私は一週間に一度の割合で歯医者さんに通うことになりました。朝の散歩を兼ねて、午前中に通院することにしました。そして十一時頃から

一時間くらい、私は診察席に座って俎板の鯉になるのです。

狭いバス通りを、車を気にしながら三十分歩くというのは、ひと苦労です。しかも鉛色の空の季節ですから、優雅な散歩というわけにはいきません。でも、歯医者さんに通うのが私の大切な日課になったような気がして、なんだかうれしいのです。やることがなくて、毎日時間を持て余している私にとって、歯医者さんに通うことは、いわば仕事の一種のような感じがしてくるのです。

東京郊外の工場に勤務する夫は、朝早く家を出ると帰りは毎晩深夜近くです。一日の大半を、私は家で一人ですごしています。結婚して五年たっても子供もできず、私はただひたすら家事をこなせばいいのです。

朝食を食べさせて夫を見送った後、一人で朝食を食べ、洗濯をし、掃除をし、買い物に行き、夕食の支度をして一人で夕食を食べ、夫の帰りを待つ、その繰り返しです。休みの日には、夫はほとんど一日中寝ているので、私の日課は変りばえしません。私の一番の友達は、テレビです。朝起きると真っ先に新聞のテレビ欄をチェックして、一日のテレビメニューを考えます。ワイドショー、バラエティー、ドラマ、ニュース……。テレビがあれば、私はちっとも寂しくありません。

でも時々、私の体を冷たい風が吹き抜けます。私は、ただ空気を吸って生きているだけなのではないかしら。時間が無為に流れ、これといってやることがない生活。苦しくもないけれど楽しくもない毎日。砂を噛むような味気なさに、私は愕然とするのです。ある時、お勤めをしたいと、

夫にいってみました。すると、

「あえて苦労することもないじゃないか。君は家のことをやって、僕の留守を守ってくれればそれでいいんだ。それとも、僕の稼ぎに不満があるのかい」

といって、私が外に出ることに反対しました。いわれてみれば、今さらお勤めをはじめるのも億劫だし、手がかからない夫の稼ぎで喰うに困らない生活は、快適といってもいいでしょう。

けれども、すべすべとした白い肌、卵型の顔にのった小作りの部品はバランス良く、まだまだ私も捨てたものではありません。自分でいうのも恥ずかしいのですが、年齢より十分若く、チャーミングです。それなのに、夫の所有物みたいに家のなかでくすぶり続けているだけなんて、世の中にこれほど矛盾したことってあるかしら。

でもそんな思いも、一瞬のうちに消えさります。食べたい時に好きな物を食べ、ソファに寝そべってテレビを見ながら居眠りしたり、こんな怠惰で楽ちんな生活は、私だけに与えられた幸福なのだと、思い直すのです。

こんな私にとって、一風変わった歯医者さんに通うことは、特別の出来事なのです。歯医者特有の金属音が、苦手な人も多いでしょう。私も体が硬直してしまうくらい緊張してしまいますが、あの神経に触るような甲高い音や消毒液の匂い、先生の大きなマスクや看護婦さんのピンクのエプロンが、私に独特の感情を抱かせるのでした。

まだ黒々とした豊かな髪から推測すると、先生は、私と同年代か数歳年上でしょうか。マスクのせいで顔立ちはよくわからないけれど、丸い目とめがね、よく喋り一人で冗談をいって自分で

受けている先生は、なんとなくマンガチックな感じがします。まあ、どこにでもいるような中年にさしかかった男なのだけど……。

毎回、虫の食っているところを削っていきます。

「痛かったら左手をあげてください」

これの繰り返しです。

私は根気よく、先生のいうことを聞いて通い続けました。遅刻もしない、模範的な患者です。そして気がつくと、寒さにうちひしがれていた草木も目ざめ、春らしい季節に変わり、三十分の散歩が私のお花見となりました。同時に、やっと虫歯を削り終わり、そこに金の詰め物をする段階に入ったのです。

それは、はじめて見た最新の設備でした。私の歯の中が超小型のカメラで撮影されて、目の前の小型テレビの画面に写し出されるのです。大写しにされた私の口のなかには、ピンク色の歯茎と黄ばんだ歯、軟体動物のような舌がグロテスクにうごめいていました。

「ここに詰めますから、こんな風に削りとったんです」

ざっくりと削りとられた私の歯は、まるで工事中の道路のような無残な姿でさらけ出されています。

こんな口の中を毎日のぞき、それを仕事にしている歯医者さんは、私にはまったく想像できない遠い世界の人のように思えます。日常とかけ離れた異質な世界だからこそ、歯医者さんに通うのが、私の楽しみになっているのです。そして、最新の設備と自信に溢れた先生の態度は、徐々

に私にとって好ましいものとなっています。大きな体で顎を力強く押さえつけられると、私はその男らしさに圧倒され、体の奥底で官能がうずくのです。

「もっと強く、私の顎を持って、顔を押さえつけて欲しいの」

無意識のうちに、私は心の中でそんな叫び声をあげているのです。

目をむいて喋る先生の顔は、大きなマスクで口が見えないけれども、きっと男っぽい大きな口をしているに違いないわ。上から顔を覗きこまれ身動きできない状態にいる私は、先生の顔を下から見つめ、いつのまにかうっとりとしています。

型をとるための冷たいバリウムみたいなものを口の中に入れられて、私は吐きそうになってしまいました。

「山田さんは、これが苦手のようですね。笑気ガスを使いましょう」

「笑気ガスって？」

「一種の麻酔みたいなもんです。心配はいりませんよ」

鼻からガスを吸い込むと、神経が麻痺してボーッと意識が遠のいてきます。吐き気もなくてなんだかいい気持ち。診察台の上で次第に眠気に誘われ、夢のなかをふわふわ飛んでいるような心地です。それは笑気ガスで酔わされているのではなく、この先生に抱かれて酔わされているような気分です。

私はすっかり先生のとりこ。力強い手と、明るいお喋りと自信にあふれた姿に、私は夢中なんだわ。と同時に、束縛するだけで、近頃ではまったく私に無関心な夫への、反発心がこみあげて

きます。私が求めているものを理解しようとしない、でくのぼうみたいな薄情な夫への感情は、憎しみといってもいいかもしれません。

季節が暖かくなるにつれて、私の足取りも軽くなります。でも、明らかに治療は終わりへ向かっているのです。ここへ通うことがなくなったら、私は一体、どうしたらいいのかしら？

型をとって作った金の詰め物も出来上がり、それを歯に入れるために微調整するという最終段階にさしかかりました。しかしいくら削ってもらっても、噛み合わせがしっくりきません。

「まだ、ちょっと上の歯に当たるんですけど」

「おかしいなあ、いいはずなんだけど」

先生は首をかしげますが、私の通院は引き伸ばされました。

私の足は、歯医者さんに吸い寄せられるように、規則正しく歩み続けます。

診療台の上に横たわる私の横で、先生は私の金の詰め物を、金属音の響く機械で少しずつ慎重に削っています。これほど平穏な風景ってあるかしら。私の心は、母親に抱かれた子供のように満たされています。

「どうですか？」

「まだ、高い感じがするんですけど……」

「解せないなあ、山田さんの神経は繊細なんですね」

私の言葉に、先生の方が音を上げだしました。

「まあ、このくらいで入れてみましょう。様子を見て、痛かったらまた来てください」

「最後に、歯石をとっていただきたいんですけど」

一回でも診療を長びかせたい私は、懇願口調でいいました。

「じゃあ、次回歯石をとって終わりにしましょう。……気候もよくなってきたから、こんなところに通うのはもうごめんでしょう」

ああ、あと一回で終わりだなんて。先生は、私の胸の内をしって、わざとそんな冷たいことをいうのでしょうか。

最後の日、私は緑を増した並木の下を歩いて行きました。季節にふさわしい黄緑の薄い布地のスーツを着て、きれいにおしゃれをしたけれど、私の足取りは鉛のおもりをつけたように重いものでした。

看護婦さんが、私の歯を丁寧にきれいにしてくれました。鏡を見ると、黄ばんだ歯が真っ白に生まれ変っています。

「待っててくださいね。……お昼、待っててください」

診療が終わって、突然、先生が私にいいました。

待っててなんて、一体、どういう意味？私は一瞬耳を疑いました。お昼を一緒に食べようってことなのかしら？　私はどきまぎしながら、聞き返しました。

「どこで待っていればいいんですか？待合室、それとも外？」

すると先生は、驚いたような奇妙な表情を見せ、

「違います。すぐにお昼を食べないで、しばらく時間をおいてからにしてくださいという意味で

す」

看護婦さんが、くすくす笑っています。私は、とんだ間違いに体中がカッーとなりました。待っててなんて、まぎらわしい言い方をするからいけないんだわ。

「ああ、そうですか」

私はぶっきらぼうに答えると、怒ったように診察台を降りて、出口へ向かっていました。この半年余りの私の夢が、一挙に崩れ去り、私は現実に引き戻されたのです。恥ずかしさのあまり頭が熱くなった私は、お金を払うと挨拶もそこそこに大急ぎで玄関を出ました。その時、急いだ拍子に階段で足を滑らせ、私はしたたか膝をコンクリートに打ち付けました。

「あっ、痛いっ！」

目の前で火花が飛び散ったような強烈な痛みに、膝のお皿が割れたのかと思うほどでした。が、しばらくすると痛みがひき、立ち上がることができました。

その時、ある考えが思い浮かびました。

「次は整形外科へ行かないと。今日限りで、もう歯医者は卒業したんだわ」

そして、足をひきずりながら帰途についたのです。

94号　2年10号

楽茶碗の怪

（陽炎の女性）

忠内　正之

（一）

平成三年晩春のことである。バブル景気はピークを過ぎていたが、美術骨董界の好況は遅れて来ただけにまだ盛況が続いている。

美術商岩崎は五十才台半の働き盛りで都心に近い高級住宅地に上品な雰囲気の店舗を構えている。開業十五年目となる。

岩崎は元々、特殊塗料を道路会社等に加工販売する中堅企業の経営者であった。優秀な開発力と技術力があるのでユーザーからの評価も高く業績は順調であった。アメリカの著名な経営学者であるドラッカーが、彼の技術力を認めて著書の中で賞讃したこともある。ドラッカーは日本の古美術にも造詣があり後に岩崎の店を訪ねている。

岩崎は若い時から美術骨董を趣味としてコレクションに打ち込んで来た。好きが嵩じたのであ

ろう。努力して育て上げた会社を大手に売却して、プロとしてこの道に入った。「好きこそ物の上手なれ」と言う諺がある。岩崎の転業は順調であった。生来の研究熱心さと人柄の良さとが相俟って、美術学者、同業者にも受けが良く、優良顧客との取引も拡がった。折しも骨董ブームの到来で資産もかなり出来た。鑑識眼も更に養われて、今では都内でも中堅に位する美術商となった。

その日は好天気であった。明るい昼下がり、岩崎の店に人が来ていた。石井老人である。石井は年齢八十才を過ぎているが元気の良い果師である。果師とは一言で言うと「ブローカー」である。彼はこの道の目利であり、古い良質な取引先を持っているユニークな存在である。

石井老人は若い頃から都内有数の老舗美術店で修業し勤め上げた。一時応召で中断したが復員後旧の店に復帰してその店の大黒柱となって活躍した。戦後は宮家、華族、旧家等、所蔵品が多数流出したので優品を数多く扱うことが出来たのである。

電力の鬼と言われた「松永耳庵」に可愛がられ数々の名品を納入したことも自慢の一つである。有名な「釈迦金棺出現図」も彼が扱った。その図は国宝に指定され、現在は京都国立博物館に収蔵されている。

石井は既に一線を退いたが、今も元気で、昔納入した目星しい品を掘出しては仲間に卸す仲介を行って余生を送っている。

岩崎とは岩崎がプロとなる以前からの付き合いで、遊びがてら、商売がてら、岩崎の店を度々

訪れる。この物語の発端は石井の来店中に生じた。

(二)

岩崎と石井は例の様に、ごく他愛ない世間話に花を咲かせていた。

その時一人の女性客が店に入って来た。石井は直ぐ別室に控えたが、岩崎はその女性客を迎えてハッと胸をつかれた。彼女の容姿が彼が若い日に別れざるを得なかった恋人のそれにあまりに似通って感ぜられたからである。

岩崎は学校卒業後、オーナー経営のある大手化粧品会社に勤務していた。真面目で熱心に働く彼は営業マンとして実績を上げ将来を期待された。勤務先会社もかなり利益を上げ大きくなりつつあった。美術品収集家のオーナーは後に立派な美術館を開く程の余裕を持つこととなるが、それは岩崎が退社してからの話である。岩崎の美術好きもオーナーの影響を受けたからとも言える。

オーナーの秘書室に、美しい女性が勤務していた。岩崎より四つか五つ年下で、短大出身、理知的且つ上品なお嬢さんであった。オーナーの姪である。キビキビとした態度で良く働く岩崎もまた長身の白皙の美青年である。高倉健似と言われよくモテた。この二人が相思相愛の仲となるのは極めて自然の成行きであった。だがこの恋は結局実らない儘で破れてしまった。岩崎の実家の商売が傾いたのである。まだ封建色の濃い時代であった。化粧品会社は退職せざるを得なかった。

もともと企業家精神が横溢し、経営センスに富んだ岩崎は塗料関係の家業に復帰するや程なく、

好況の追風もあって再建に成功することとなるが、その時点では先行きが見えず、あてもなく彼女を待たす訳にも行かず、また彼女側の事情もあり、涙を呑んで別れざるを得なかった。

岩崎はかなり遅れたが、地方出身の今の妻女と結婚した。事業の再建から、そして思い切った転業に伴う多くの苦労を今の妻女と共に乗り切って今日の成功を得る事が出来たのである。従って妻女に全く不満はない。

岩崎は女性によくもてるタイプである。金離れがよくて気持が明るい。しかも背が高くイケメンである。だが身持ちは堅く未だ嘗って妻以外の女性に心を寄せたことが無い。しかし初恋の人だけは忘れようとしても忘れることが出来なかった。その彼女の面影に似た雰囲気を持つ女性が現われたので思わず胸がときめいたのである。

女性は四十才前後、中肉中背、スラリとしている。はっきりした顔立ちで、色白く上品である。古浅葱の着物に八つ橋の染帯をキチンと着こなしている。指輪も爪のマニキュアもない。僅かに腕時計だけは最高級らしきものを覗かせている。総体の感じとして、上品ではあるが、稍地味な印象を免れない。人知れぬ苦労があるのかも知れない。岩崎は応待しながらこの様に観察した。

彼女の来意は次の通りであった。彼女はある地方都市の商家の生まれで、縁あって東京近郊都市にあるお寺に嫁いで来た。結婚する際、嫁入道具の一つとして茶碗を一個貰い受けて来た。祖母の時代から家に伝わる品で彼女も娘時代に時たま茶の稽古で使わせてもらった。相当に良い品らしい。

「良い茶碗なので呉々も大切にしなさい。婚家には内緒にしておく様に。万一どうしてもお金が必要な時には処分しても良いが、その時は信用の置ける店に持込みなさい」。と父から念を押された。長い間使用する機会も無くしまっておいたが、この程実家の商売が破綻してしまった。加えて中心となる母が重い病気を患うに及んで、娘として実家を少しでも援助したい。と言っても地味な寺では勝手許不如意である。そこでこの際大切にしていた茶碗を処分することに踏みきった。ついてはどの位の値段で買って貰えるか見て欲しい。骨董店は沢山あるが仲々入り辛い。そんな中、この店は入り易く、信用もありそうなので、一週間程前から迷い抜いた挙句この店を選んだ由。以上の内容をか細い声で岩崎にやっとの思いで告げるのであった。

岩崎は彼女の風情にすっかりいかれてしまい、何としても相談に乗ろうと心にきめた。だがそこはプロ、落ち着いた態度で先ず「茶碗を見せて下さい」と切出した。

出されたのは黒楽茶碗であった。先ず箱から見る。キチンとして時代色がある。箱書きは「黒楽茶碗了入」とサインされ草書印「禾」がある。蓋裏に「玩土老人」の添印がある。

立派な仕覆に包まれた箱内の黒楽茶碗は堂々とした出来で、高台脇に了入の隠居印「禾」が刻まれている。早速別室に控える石井老人とも相談しながら印譜、花押等、資料を繰って調べて見ると、「楽九代了入」作に相違ない様である。茶陶にかなり詳しい石井老人も「これは確かだ」と太鼓判を押した。

「おいくら程で手放しになるのですか？」

「〇百万円を希望しますが、直ぐに現金で買って下さるなら△百万円で良いです。あちらこちらと持ち廻って、さらし者になるのは嫌ですから」

と更に消え入る様な声で言う。岩崎は心中小躍りして喜んだ。

筋目の通った楽茶碗は希少価値がある。筋目が通るとは先ず形式が整っていること。つまり作者の誂える共箱、それに花押、押印等が完備していなければならない。出来れば伝来と言って、有名な持主の記録があれば尚申し分ないが、そこ迄は高望みと言うものだ。

次に茶碗の出来工合、風合、等々感触も含めた内容が納得出来るものでなくてはならない。いわば純正品とも言える。来が無いことを除けば、この茶碗はそれらの条件を充分満たしている。結局言値に近い□百万円で購入した。業者は常に多額の現金を用意しており不時の仕入に備えているので即金取引である。

元来美術商が立派な老舗を構えるのは、一見客への販売を促進するためであるが、今回のケースの様に素人が所蔵品を換金するため直接持込を受け入れる窓口としてのメリットも大きい。市場とか仲間から仕入れる眼垢のついた品より、ウブで良質な品が安く手に入るのだ。本件はその意味合いからも典型的な好例である。買値の3倍か？　もしかしたら5倍位まで売れるかも知れない。

身許確認もそこそこにして取引を終えて、岩崎はホッとした。善行を施したとの気持と商売への期待で自己満足を覚えた。優しい眼差しで彼女を送り出すと、帰り姿の彼女の足どりは心なしか軽やかで陽炎の立つ街並の中へ消えていった。ふさいでいた気分が晴れたのであろうか？

「良いことをしたなあ」と岩崎は思いながら既に売先を考えていた。

岩崎の考えた売込目当先は、吉田三郎であった。吉田は骨董好きなサラリーマンであるが、ほどほどの資力もあり妻女が茶道の師匠をしている。かねて茶会を開くため適当な黒楽茶碗を探してくれと頼まれていたことを憶い出した。そうだ「吉田さんに声を掛けて見よう。それ程簡単に楽茶碗は見付からないのだから、きっと未だ探しているに相違ない」。との腹積りがあったのだ。吉田は岩崎の店の上客でもあったので買値の2倍程度に抑えて売れば、それでも世間相場に比べてかなり安い筈である。恩が売れる。きっと喜んでくれるに違いないと早速連絡した。店先に飾ったり市場に出すより遙かに効率が良いと計算したのであった。

(三)

吉田は知らせを受けて、早速飛ぶ様に来店して茶碗を手にとった。茶会や美術館等で垣間接することはあっても直に触れるのは初であり感激した。「楽九代了入」（一七五六年―一八三四年）作である。共箱表並に蓋裏に夫々きちんと花押及び印がある。

茶碗はと見ればかなり大振りである。作行きは厚造りで大胆な強い篦を斜めにはしらせながら手すさび風な趣に力強くまとめ上げている。底部は土見せで高台は小さく、高台脇はざんぐりと

荒々しく削りとられている。高台畳付きは一ケ所割られて割口に隠居印（禾）が押されている。資料に見る「了入」晩年作の優品「湖月」もかくあるかなと連想させる程である。

楽家の先祖は室町時代末期の永正頃、瓦焼工として中国から渡来した帰化人であるとされるが定かではない。「初代長次郎」が利休の指示によって赤と黒の楽茶碗を創案以降、現在の当十五代に至るまで、色々変遷はあったが、千家の指定道具職である「千家十職」の一員として約四百年の伝統を守り、主として茶碗を造り栄えて来た。茶碗は茶の湯の必須の道具であり、数多い「三千家」の茶を指向する人達が渇仰するのが楽茶碗である。世に茶碗は「一楽、二萩、三唐津」と言われ、楽がトップに位する。

「了入」は楽家九代で、作陶に励んだのは江戸後期、文化文政期を含む江戸文化の高揚期であって茶道の隆盛期を支えた存在であった。

「この立派な茶碗を格安で手に入れることが出来るとは」。大満足で吉田は至福感一杯の気持ちで購入した。当時黒楽茶碗の優品は軽く一千万円以上する筈である。

自宅に持ち帰って妻女と共に更に落款、花押、印等を参考書で確認した。そして頬ずりせんばかりに大切にかかえて、茶を点てて楽しんだ。永年の恋人に出逢ったかの如くである。いずれ妻の還暦の茶会を予定しているので、その際の目玉としてこの茶碗を披露すべく楽しみにして秘かにほくそ笑んだものだった。

ところが好事魔多しと言うか、とんでもない事態が生じたのである。

（四）

茶会に使われる主要な道具類、つまり茶碗・釜・水指・茶入・掛物等は茶会の華であり真正且つ立派な品を誇示する事が席主の生き甲斐である。招かれる客はそれらをしっかり確かめたいのだが短時間の席で見極めるのは至難の技であり、鑑賞力にも限度がある。そこで物を言うのは箱書きである。

この茶碗の場合、作者「了入」のキチンとした条件を具備するものの二百年以上経過した品でもあり、更に加えて決定的な箔付けが欲しいところである。茶会に集う人達は他人の持物のアラを探して喜ぶ出す嫌な性がある。従って席主としては衆目の批判に耐える備えをしておくのがベターである。

吉田は考えた。この茶碗に一番ふさわしい備えは何であろうかと。それは「楽当代吉左ヱ門」氏の追加箱書きである。これだけの茶碗だから堂々とお願い出来よう。京都の楽家へは附属の美術館を含め、何度か訪ねたことがあった。

当代楽さんは、

「先祖の遺した数々の作品が埋れているのは忍びない。これを現代にレビューさせるのが子孫として当然の責務である」。

と良心的で、どんな無冠の茶碗でも快く鑑定してくれるとの下馬評で、真正な品は更に頼めば二重箱の箱書きに応じてくれるのである。鑑定料は僅少で、その料金も美術館の運営費に充てら

れるとか。吉田は幸い楽家に多少のコネもあったので半ば強引にアポイントして、楽家へ直接茶碗を持ち込むことに成功した。普通は美術館経由の間接依頼となるのであるが。

楽焼窯元、楽家は京都市上京区の御所に近い閑静な住宅街の中にあって、初代以来永年に亘って今も変らぬ楽焼伝統の陶技を伝えている。

楽家十五代当主は一九四九年「十四代覚入」の長男として生まれる。芸大卒業後イタリヤ留学ののち一九八一年十五代を襲名現在に至っている。楽家の伝統を継承しつつ現代陶芸作家としてその優れた作家活動が注目されている。作風にあるモダニズムは、名手「三代ノンコウ」（一五九九年―一六五六年）の再来と言われる程技巧的である。超多忙な人であるが、楽夫人経由で吉田持参の茶碗を見て呉れたのである。

結果は意外や意外、誠に悲惨なものだった。才色兼備の誉れ高い楽夫人が現われて「これは全くの偽物でございます。お高い品でございますから今度お求めなさる時は、是非事前に見せて下さいませ」。と気の毒そうに言う。吉田は寝耳に水の驚きでキチンと挨拶する余裕さえ無い程愕然とした。当主が直接説明する価値すら無いとの判断かとひき下がらざるを得なかった。

購入してから既に半年以上経っていた。楽家の都合で訪問が翌年の二月となった今、京都はただささえ凍てついており肌刺す寒さで心まで凍ってただ悄然として帰京した。帰るや否や吉田は直ちに岩崎の許に走り、事の顛末を告げた。

流石の岩崎も内心驚いた様だが、落ちついた対応で、早速売値そのままで返金、ひきとった。

そこは損得よりも信用第一とする商売だからである。

後日談であるが、吉田はこの時の体験を無にせず、この後真正な黒楽茶碗を購入することに成功した。

（五）

岩崎は実際あの茶碗が偽物であるとは俄に信じられなかった。後に彼は文化庁の購入評価委員を委任される程の目利となるのだが、未だ当時は鑑賞陶器、書画等に注力しており、茶道具就中楽茶碗についてはあまり経験が無かった。楽当代が偽物と断定した以上認める他に手段はないが、それにしても、作品、箱書、押印等完璧と思えるだけに口惜しい。憤懣やる方なかった。

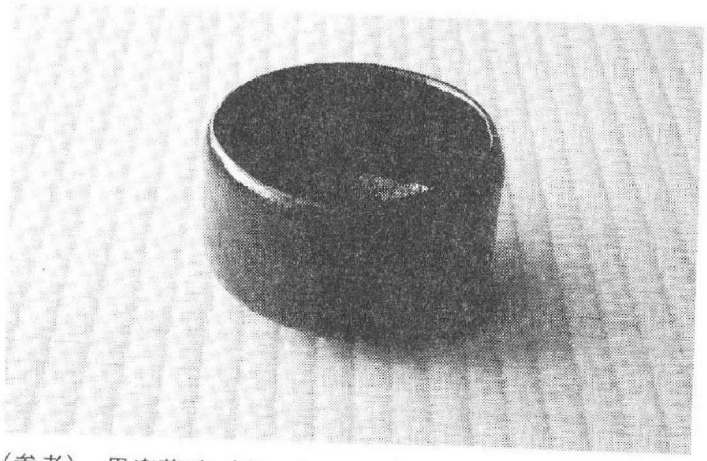
後に知らされた事なのだが、黒楽茶碗は千三百度ていど高熱焼結の途中で窯から引出して急冷却、黒釉を発色させると言う。瀬戸焼の引出黒と同様の工程である。引き出す際使われる鋏により真贋を極めると言う。その内容は勿論秘中の秘であろう。成程それでは楽家以外では本当の判断が出来ないのは当然である。そして「四代一入」以前の作については鋏の保存を失しているので、原則鑑定しない由である。いや鑑定出来ないと言う表現が正しい。従って本件「了入」作の茶碗では鋏跡で確認出来る訳である。岩崎はやっと納得し自らの不明を悟った。

石井老人もそれが癖である首を振り振り「楽さんの鑑定を求めなかったら、あれはあれで形式は万全なのだから楽茶碗で通用するのになあ」、又「あの箱は本物で中味の茶碗は出来の良い適

当な品を探して来て合せたのではないか？」となお諦め切れない未練げであった。いずれにしても楽茶碗の扱いは伝来品、つまり著名人が所有したと言うエビデンスのある品を除いて極めて難しいものなのだと、二人の共通の認識となった。

岩崎は考えた。これまでの商売で、今度の楽茶碗以外でも、見損なって失敗した例は何度もある。逆に危ぶんで買った品が掘出し物として思わぬ儲けとなったケースもある。成否は半々で商売をしていれば当然の結果である。だが今回は違う。詐欺行為に完全に騙された様だ。マンマと仕掛けられた罠に嵌まってしまったのか？　口惜しさを通り越して自己嫌悪に落ち込んだ。これは犯罪事件であろうか？　ひっ掛った自分が未熟者だったのか？　それに相違ないと、あれこれ心の中で反芻せざるを得なかった。しかしあの薄幸と思われた佳人は果たして偽物を承知で犯罪の片棒をかついで売りに来たのか？　いや彼女の実家の段階で既に騙されて購入し、そのまま大切にされて来たのかも知れない。

故物を商う業者は守秘義務が求められる。同時に値嵩物の仕入は身許確認が必要である。この場合ではパスポートで確認したと思うが、あの時の雰囲気ではとても充分な確認は出来なかった。不確かな記録をもとに事件にすることは不可能だ。まして今更騒いでも不名誉を公表するだけである。ここはじっと我慢しよう。岩崎は茶碗を裏の倉庫の奥深くに格納し封印することにした。



（参考）　黒楽茶碗（楽四代一入作）

あれから丁度一年経った。店先から交差点を望むと人通りが激しい。年々この界隈は賑やかになって来た。今日も陽炎が立っている。ふとあの女性がまた現われそうな妄想にかられる。あのしおらしさは演技であったのか？　そう言えばあの人の帰り足は早かったなあ。途中で共犯者が車で待っていたのかも知れない。様々な思いが錯綜して悪夢を見ていた様な気がする。

もう後悔はしない。恨みがましく思わない。すっかり無かったことと忘れてしまうことに決めた。幸い商売は盛んになっている。

都市銀行『爆発物処理班』

宅見　勝弘

この物語はフィクションです。まんじ84号より6回連載して未完になっていましたが、名前など一部を変更して完結までのストーリーとしてまとめました。

一　爆発物処理班

一九九七年（平成九年）当時、都市銀行九行の中で、東西銀行は資産順位で五番目の規模であった。

東京都千代田区にある東西銀行千代田支店は、法人取引を中心とした大規模店舗であった。

千代田支店の融資課は三つの班に分けられていた。第一班が大企業、第二班が中小企業と個人、第三班が不良債権を担当していた。

支店では不良債権のことを『爆弾』と呼んでいた。不良債権を処理する融資課第三班は『爆発物処理班』と呼ばれていた。

毎月のように取引先企業の倒産が起きており、第三班の仕事は増えていった。また、不良債権処理には常にトラブルが発生していた。

第三班には山名班長の下に三名の班員が配属されていた。武見勝人（たけみかつひと）は第三班に所属していた。武見は、一九九〇年に早稲田大学を卒業し、東西銀行に就職した。本店勤務、京都支店を経て、九五年七月に千代田支店に転勤してきたのであった。

二　暴力団組長射殺事件

一九九七年八月二十七日、武見が銀行の仕事を終えて帰宅した後、暴力団組長が射殺されたというテレビニュースを見た。

暴力団の組長の名前は、武見勝人から一文字除いた『武見勝（まさる）』という名前だった。日本最大の暴力団・山内組のナンバー2である武見組長が、京都のホテルのロビーで、一般人の多くいる中、拳銃で撃ち殺されたのであった。

この事件では、たまたま隣に居た医者が巻き添えになって射殺された。

武見は自分と似た名前の人間が殺された、と聞いて非常に不愉快な思いをした。この事件が自分の担当先と関係あるのではないかと思って、さらに不快な気持ちが強まった。

武見が疑っていた担当先とは、トーキョーファイナンスというノンバンクであった。

三　トーキョーファイナンス

翌二十八日、トーキョーファイナンスの本社の様子を武見勝人が見に行ったが、特に変わったところは見つからなかった。

トーキョーファイナンスは、元々は新東京信用金庫の子会社のノンバンクであった。当初は自動車ローンを中心とした経営であった。

新東京信金の派閥争いから、東京政財界の黒幕と言われる大物フィクサーの川田義秋が新東京信金に介入してきた。

川田がトーキョーファイナンスの代表取締役になってから、暴力団関係者への巨額の融資が増えたのであった。

この会社の全貸出金千四百億円の内、九割以上の約千三百億円がフロント企業や企業舎弟と言われていた。

フロント企業とは暴力団の経営する企業のことで、企業舎弟とはフロント企業の経営者のことである。

最大の貸出先は明治総合開発で、武見組のフロント企業と噂される会社であった。貸出金額は四百七十億円であった。

また、トーキョーファイナンスの経営陣にも暴力団関係者が入ってきており、取締役の一人は暴力団組長であった。

トーキョーファイナンスの監査役は森田一郎弁護士であったが、射殺された武見組長の顧問弁護士であり、武見組長と親しいと言われていた。

東西銀行では、この時点での貸出していた金額は、約百五十六億円であった。

四　イトマル事件

組長射殺事件から数日後、イトマル事件の京英宗被告人が海外に逃亡したことが報道された。

武見は、その報道を聞いて、組長射殺と関係があるのではないか、と思った。

イトマル事件とは、総合商社を舞台にした戦後最大の経済事件である。『三千億円が闇の世界に消えた』と言われている。

イトマルは、総合商社の第五位の規模で、百十年の歴史を持つ上場企業であった。最終的にイトマルは住川財閥系の住川金属商事に吸収されて解体されたが、三千億円は暴力団関係に流れたまま返ってこなかった。

イトマル事件では山村社長・末光専務・京英宗らが東京地方裁判所で、特別背任罪・業務上横領罪などで摘発されており、審理中であった。

京は、竹上昇元総理大臣や尾中和義元建設大臣とも関係が有ると噂されていた。

京英宗の逃亡、組長射殺事件、それにトーキョーファイナンスの三つは関係があるのでは、と武見は考えていた。

イトマル専務の末光が代表取締役を務める会社が明治総合開発であったが、その会社に四百七十億円を貸している会社がトーキョーファイナンスであった。

数千億円もの金を巡って、武見組長と京英宗とが対立した。あるいは武見組・京英宗らのグループと、別の暴力団とが対立した。その結果、組長射殺事件が起こったのではないか、と推測していた。

五　脅迫電話

武見組長射殺事件の犯人が大野組系の暴力団組員であることが報道されていたが、武見組と大野組とで全国各地で銃撃事件など抗争が繰り広げられた。主婦など一般民間人が巻き添えで被害に会う事件も発生していた。

数年前には、銀行役員が射殺される事件もあった。住川銀行取締役名古屋支店長射殺事件、和阪銀行副頭取射殺事件でいずれも不良債権担当の役員で、犯人は捕まっておらず、迷宮入りとなっている。

銀行で債権回収をしている武見勝人は相手から、組長射殺事件の話題を持ち出されると、不快に感じた。

また、銀行担当者を道連れにして自殺してやると取引先に言われて、恐怖を感じていた。

その最中、武見宛に殺してやるという暴力団風の男の声で脅迫電話があった。

武見は暴力団による間違い電話か、取引先の恨みの電話か、不安な日々を過ごしたが、結局、真相は分らないままであった。

六　社長死亡

一九九八年三月九日の朝刊に、トーキョーファイナンスに関連する事件が載っていた。この会社の取締役が恐喝で逮捕されたという事件であった。行方不明の京英宗の息子と山内組暴力団員数名も同時に逮捕されていた。

その日、トーキョーファイナンスの畑山部長から、十一カ月前に就任した上岡社長が死亡したとの電話を武見は受けた。

武見は、社長死亡の事実に驚いたが、特に問題無いでしょう、と言われて呆れた。部長の話し方があまりに事務的な印象であった。

トーキョーファイナンスの取引は、融資した当時の南社長が、代表取締役名でしていた。上岡社長の社長就任に伴い、南は代表取締役会長になった。

南の代表取締役名で、銀行取引が続いたので、社長が死亡しても、取引上は何も問題が無いという理屈であった。

畑山部長は特に社長の死因が何か言わなかったが、武見も死因を訊くのを躊躇した。

武見が電話を切ると、十一カ月前のことを思い出した。

十一カ月前の一九九七年四月八日に畑山部長と一緒に上岡社長が新任の挨拶に銀行に来たのであった。

上岡社長は卑屈なほど大きく頭を下げて挨拶した後、大きく足を組んで仰け反る様に座った。

そのアンバランスな姿が、武見には妙に強い印象を受けた。

新社長が大蔵省銀行局の出身ということを畑山部長が紹介した。部長の紹介を聞いて、武見は眼前の人物について、その前に見たことを思い出した。

九六年十月の衆議院選挙に、武見の住んでいた東京第二区で竹上派として立候補したが、落選した人物であった。

上岡社長は十五分足らずの短い挨拶の中で、形式的に社長に就任するので代表者個人保証をしない、ということを三回繰り返したのだった。

十一カ月前の上岡社長の態度を、武見は思い出して、社長に就任して一年も経たずに死んだ理由を疑問に思った。

七　二百三億円株式詐欺

二百三億円で売却予定だった新川建設の株式千百二十万株が詐取されたという報告を、トーキョーファイナンスの畑山部長が来店した時に武見は受けた。上岡社長の死亡の連絡から一カ月後の四月六日であった。

三月までの報告では、新川建設の担保株式を二百三億円で売却して、その売却代金を銀行に返済するという話であった。

トーキョーファイナンスの監査役の森田弁護士が株式の名義を融資先からトーキョーファイナンスに書き換えするために、株券を持ち出した。今回の株式売買契約の仲介者である弁護士に渡

したが、株券が戻ってこなかったという説明であった。
二百億円もの株券が行方不明と聞いて、武見は呆れていた。
仲介者の中口弁護士というのは、イトマル事件の詐欺容疑で警察に逮捕された弁護士であった。別の詐欺事件で逮捕された弁護士に二百億円もの取引を依頼することに、武見は何か仕組まれたものと疑った。
イトマル事件の中口弁護士が関係しているのか、行方不明の京英宗が事件の黒幕なのだろうかと武見は考えた。
二百三億円株式詐取事件と暴力団組長射殺事件とイトマル事件とが、武見の頭の中で結びついていた。
トーキョーファイナンスは明治総合開発には四百七十億円の融資をしているが、これは全て東証一部上場の新川建設株式千百二十万株の購入資金で、株式を担保に貸付したものであった。
この担保になっている株式だけで新川建設の上場株式全体の三分の一を超えていた。
この貸付金の回収のため、トーキョーファイナンスは担保権を行使して、返済金に充当する筈であった。
売却価格は、一株当り一八一三円、総額二百三億円であった。新川建設の株式は、一株一八〇〇円前後で推移していた。
株式の売却先は、石林建設という一部上場企業であった。当時の株式市場では、石林建設と新川建設との合併の噂が流れていた。

石林建設の社長は石林雅司であったが、その石林雅司の弟が、トーキョーファイナンス前社長の石林博であった。石林博は、死亡した上岡社長の前任の社長であったが、わずか五カ月で退任していた。
石林博が社長の時に、トーキョーファイナンスと石林建設とが新川建設株式の売買契約を交したのであった。
トーキョーファイナンスは売買代金として石林建設振出で四月末期日の額面二百三億円の手形を受け取っていた。
畑山部長は武見に二百三億円の手形のコピーを見せた。コピーとはいえ十一桁の数字が並んでいる手形は、かえって非現実な感覚がして、本物らしく見えなかった。
石林建設がトーキョーファインナンス相手に二百三億円の手形を振り出すことが、武見には理解できなかった。
しかも、二百三億円の手形は、石林建設が詐取されたものとして裁判に訴えているというのだった。
つまり、二百億円もの売買契約で、売り手が株式を、買い手が支払手形を騙し取られたと主張しているのであった。
株式の引渡しが出来ず、石林建設としても手形の決済ができない。三カ月後に手形期日を延長することで対応するという説明であった。
同席の山名係長は、手形期日の延長に応じず、石林建設の手形を交換に回せばいい、と言った。

今回の詐欺事件は最初から仕組まれたものと山名は考えているようであった。

畑山部長は、山名の言葉を聞くと、椅子を蹴飛ばすように立ち去った。

畑山部長が千代田支店を出て行ってから三十分後に、不良債権担当の役員から鬼束支店長に、トーキョーファイナンスとの交渉の仕方に厳重に注意するようにという電話がかかってきた。

八　『鉄砲』（株の売り逃げ詐欺）

二百億円もの詐欺事件の対象になっている新川建設の株について、大川証券に勤める金城に、武見は訊ねた。金城は山三証券から子会社の大川証券に転籍していた。

新川建設が『仕手株』になっている、と金城は説明した。

仕手株とは、投機的な短期売買で利益を荒稼ぎする投資家（仕手筋）が対象とする銘柄のことである。

その後、新川建設の株価が、一カ月の間に最高値二五七〇円と急騰したが、一気に最安値六一五円まで一九九五円も値を下げていた。

九七年八月十五日、金城の勤める大川証券が資金繰りに窮して倒産した。

翌週、消沈している金城と会って、武見は話を聞いた。新川建設の『鉄砲』の被害に会った、と金城は言った。

鉄砲とは株式詐欺の一つで、株の売り逃げのことであった。詐欺の手口としては、架空の買い注文を証券会社に出して、売り注文を他の証券会社に出す。そうして、高値で売買を成立させる。

売った株の代金だけ手に入れて、買った株の代金を支払わない、証券取引法で禁止されている犯罪行為である。

株式代金の決済は休日を除き四日後であり、本来は購入代金を確保してから、証券会社は買い注文を出すのだが、現実には守られていなかった。

金城の話では、大川証券の社長は系列の山三証券から送り込まれていた。新川建設の大量の買い注文は、山三証券からの指示で、社長が独断で決裁したものだった。

結局、買い注文の代金を受け取れず、十四億八千五百万円の損害をだしたのであった。この多額の損失は中小証券である大川証券では負担できず、倒産したのであった。

金城は倒産の経緯を説明した後、親会社の山三証券も必ず潰れると、吐き捨てるように言った。

それから三カ月経った九七年十一月二十四日に、金城の予言通り四大証券の一角の山三証券は自主廃業により倒産するのであった。

「社員は悪くないんです」と叫んで号泣する山三証券の社長の姿を、武見はテレビで見て、金城のことを思い出していた。

九　バルクセール

一九九八年九月末の中間決算において、東西銀行は全国的にバルクセールという不良債権処理を行った。

バルクセールとは回収見込みが有っても無くても不良債権を全部パッケージにして大量に一括

売却するのである。
トーキョーファイナンスの百五十六億円の債権もバルクセールの対象になることに決定した。
東西銀行が売却した価格は一円であった。百五十六億円もの金が一円に値引きされるのは、まるで質の悪い手品を見ているように武見は思った。
九八年当時は未だ銀行は辛うじて黒字決算をしていたため、不良債権を保有したままでは、法人税など多額のコストがかかっていた。たとえ一円でも売却した方が得になっていた。
買手としては、例えば、百億円の不良債権を一円で買っても、九十億円免除する条件で十億円を回収すれば、十億円は全て利益になる。
不良債権の買手はイギリスのウオーターマン証券であったが、実際には、その子会社のケイトラストが買い受ける形式になった。
ケイトラストの住所は、アメリカ合衆国の南に位置するカリブ海に浮かぶケイマンという国になっていた。タックスヘブンと呼ばれる国である。日本での法人税が発生しないためである。
トーキョーファイナンス宛に債権譲渡の通知をする内容証明郵便を武見は書いた。
カリブ海の会社に債権を譲渡したので、今後は、借金をその会社に返済してくださいという趣旨の内容証明郵便を書いていて、下手な小説を書いているような感覚になった。
この莫大な踏み倒し構造が日本経済の停滞につながっていると武見は思った。
翌日十時に、武見宛にトーキョーファイナンスの畑山部長から電話があり、今すぐ訪問したいと言うことであった。

十五分後に畑山部長がやってきた。カリブ海まで行って返済するのは無理だ、と部長は言った。武見は、返済する気も無いくせに、と心の中で毒づきながら、今後の交渉窓口は東京都内の弁護士となることを説明した。
譲渡通知書にも、日本国内の連絡先として、東京都内の弁護士事務所が書いてあった。
債権譲渡により今後の返済が楽になるかもしれないと考えているのか、いつになく安堵の表情を浮かべていた。
武見自身もトーキョーファイナンスから完全に手が離れるということで安堵の気持ちがあった。

十　ヤクザ企業の上場

一九九九年十二月、ハイパーミュージックという音楽配信会社が店頭（現在のジャスダック）市場に上場した。
二〇〇〇年一月ハイパーミュージックの株式上場記念パーティーが開催された。
三十一歳で株式公開企業最年少の社長となった神保文康は、パーティー会場で落ち着いた様子で挨拶をしていた。
人気アイドルグループ「イブニング娘。」のミニコンサートが開かれるなど、上場記念パーティーにしては異例な華やかさであった。
他にも、浜坂あやめ・藤沢紀子・鈴井アメ・小村鉄夫など有名な芸能人が多く出席していた。
東西銀行はハイパーミュージックと取引が無く、社長の資産管理会社ディールに一億円の貸出

があっただけであった。
ディールは、神保社長が大学在学中に中古車販売会社として設立された。神保社長がハイパーミュージックの仕事に専念するようになってから、社長の資産管理会社になっていた。
会社の経理担当と名刺交換をしただけであったが、招待状がきたので、様子を観に行ったのであった。
上場する会社の関連会社を、武見が担当しているのは理由があった。
貸出後の調査で、社長が暴力団と関係があることが判明したのである。社長が以前に山内組系列のフロント企業つまり暴力団関係の会社の役員を務めていた事実が発覚したのであった。
また、ハイパーミュージックは、失踪中の京英宗との関係があるのでないか、と噂されていた。
上場記念パーティーから半年後に資産管理会社の経理担当から武見に電話があった。
社長が警察に逮捕されたという、連絡であった。逮捕の件は既にマスコミにも報道されていた。
神保社長は、暴力団員と数名でライバル企業の役員を監禁暴行したのであった。上場企業の社長が暴力事件で逮捕されることは前代未聞であった。
被害者の勤めるライバル企業のデジタルミュージックには、本社に銃弾が撃ちこまれる等の事件が発生していた。
また、ハイパーミュージックの上場審査で和親証券は公開を断っていたが、和親証券の公開引受部長が拳銃で撃たれて重傷を負っていた。
ハイパーミュージックの上場の主幹事は公日証券になったが、公日証券は神保社長に暴力団関

係者でないという念書を書かせていた。念書を書かせた事実そのものが公日証券は暴力団関係と知っていた証拠でないか、と武見は疑っていた。
暴力団に関係ある会社が上場するということに、日本の将来がどうなるのか、武見は憂鬱な気持ちになった。

十一　元建設大臣の逮捕

千代田支店は永田町という立地条件もあり、数件の政治家案件があった。
二〇〇〇年五月十三日、武見は上司の山名と衆議院第二会館に尾中和義衆議院議員に会いに行った。
尾中は十期連続当選した衆議院議員であり、通産大臣と経済企画庁長官を歴任し、橋友虎太郎内閣では建設大臣を務めていた。
武見の担当先で尾中議員の弟である尾中正也がいた。尾中和義議員が弟正也の保証人になっていた。
政治家案件ということで、当初の稟議書には、先方の計画書が添付されているだけであった。いいかげんな稟議書という感じを武見は受けていた。
正也の株式投資資金として五千万円を融資したが、株式の運用の結果が芳しくなく、現状は利息の支払のみになっていた。
議員会館の一階で、武見の鞄が金属探知機に反応したことも有り、武見は少し緊張した。

議員会館の部屋は、大渕総理大臣の部屋と同じフロアであった。武見が上司の山名係長と一緒に入ると、年配の女性秘書が奥の部屋へと通した。

部屋の中では、尾中議員が机で書類を読んでいるところであった。正也が恐縮した様子でソファに座っていた。

議員の地元である広島の話をした後、山名は保証書を手渡した。

尾中議員は保証書を一瞥しただけで、そのまま署名して実印を押した。

保証期間が五年間のため、保証書は五年毎に書き直していた。

現在は衆議院議員なので議員会館にいるが、次の選挙に落選した場合、五年後の保証書を預かるのは難しいだろうと考えていた。

武見と山名は二十分ほどで議員会館での尾中議員の手続を終えた。

トーキョーファイナンスやイトマルの事件で、闇に消えた京英宗の資金のうち、竹上元総理大臣とともに尾中和義議員にも渡ったと噂があった。

五月十四日、現職の総理大臣である大渕圭一が脳梗塞で死亡した。大渕首相は竹上派であったが、六月十九日に竹上昇元総理大臣が死亡した。

六月二十五日に衆議院選挙が行われたが、尾中和義は落選した。

選挙の六日後、尾中元議員が斡旋収賄罪で逮捕された。建設大臣在職時に建設省の大臣室で八千万円の賄賂を貰ったのであった。

贈賄したのは、トーキョーファイナンス元社長石林博と石林建設社長石林雅司の兄弟である。

石林建設は河川工事では日本の建設業界でトップであったが、道路工事を官公庁から受注するため、当時建設大臣であった尾中議員に賄賂を贈ったのであった。

時効は贈賄が三年で、収賄が五年のため、賄賂から三年経ったところで、石林博・雅司が犯罪事実を認めたのであった。

尾中和義の五年後の保証はどうなるのだろうか、武見は思った。

十二　銀行破綻

一九九八年九月のバルクセール以降、トーキョーファイナンスとの取引はなくなったが、武見勝人は新聞報道などを注意していた。

九九年七月にイトマル事件の一審判決が出た後、十一月に失踪中の京英宗が逮捕された。

二〇〇〇年三月にトーキョーファイナンス監査役であり、武見勝組長の顧問弁護士の森田一郎が新川建設株式の詐欺容疑で逮捕された。

二〇〇〇年九月に、破綻した旧日本不動産信用銀行が、あけぼの銀行として再出発することになった。その月の二十日に本田頭取が自殺をしたと報道された。不良債権処理を進めると会見した翌日の自殺報道であった。

前年は破綻した再生銀行の不良債権担当副頭取が自殺をしていた。

ニュースを聞いて本当に自殺なのか、日本全体でまた不良債権処理が遅れると、武見は感じた。

二〇〇〇一年三月、東西銀行は、不良債権処理が進まなかった上に、負債が資産を上回る債務

超過に陥ることになり、事実上の倒産となった。
東西銀行の破綻は、武見の勤務中に千代田支店のロビーに設置されたテレビのニュースで流れた。
自分の勤めている会社が倒産するのを、銀行内部の連絡ではなく、テレビニュースで初めて知らされるのは非常に虚しい、と武見は思った。
東西銀行の総資産は四十五兆円であった。破綻処理を間違えれば、国家予算が八十兆円の日本国の経済に大きな悪影響を与えてしまう情況であった。
日本政府は二兆円の公的資金を投入することを決定し、東西銀行の破綻処理案を発表した。
東西銀行から正常債権と預金を引き継ぐグッドバンクと不良債権だけが残るバッドバンクとに分離するという処理案であった。スウェーデンでの銀行国有化や、昭和金融恐慌の時に設立した昭和銀行で実施した銀行の破綻処理方法である。
武見はバッドバンクで債権回収の仕事を続けることになった。
日本の不況を海外のメディアで『YAKUZA RECSESSION（ヤクザ不況）』と呼んでいるという記事を、武見は読んで、正にその通りだと感じた。
不況の原因は政・官・財・暴（暴力団）の四つの権力構造によるものであり、腐敗構造が無くならない限り、日本経済は回復しないだろう、と武見は思った。

天城の鬼火異聞

堀内　永代

（一）

「天城の鬼火」と怖れられた静岡県伊豆半島の連続放火事件は、平成五年十一月八日、二十八歳の被疑者山田漣一が逮捕されて終焉した。天城湯ヶ島温泉郷に再び平和な湯煙りが立ちこめた。
逮捕された漣一は、その夜、正面と横向きの写真を撮られ、続いて指紋と掌紋を採取された後、そのまま留置場に留置された。漣一は、警察で用意した遅い夕飯を済ませ、入浴した後就寝した。
警察では、被疑者が自殺を図ることがないよう万一の事態に備えて、看守二名のほかに警察官二名を増員して監視に当らせた。
留置場で一夜を明かした漣一は、翌日午前六時過ぎに、看守から声を掛けられて、寝具を片付け留置場内を清掃した。洗面の後、出された朝食を食べ、しばらく休憩して午前八時三〇分頃から取調べが始まった。
取調べは、大仁警察署刑事一課鈴木警部補が主任となり、二人の警察官が当った。取調べは、

まず家庭状況、経歴など簡単な事項から始まり、続いて十一月七日に発生した「猫越川民家放火事件」について、放火の動機、放火の方法など細部にわたって供述させたところ、その内容が警察で捜査収集した証拠とほぼ一致した。

翌日の十一月十日午後一時過ぎ、大仁警察署長は刑法第百八条「現住建造物等放火の罪」で静岡地検沼津支部に送致した。

地検では大杉勇一検事が担当となり、被疑者を大仁警察署に留置したまま身柄を受取り、直ちに取調べに掛かった。検察官は、被疑者に犯罪事実を告げ、弁護人を選任できる旨、何時でも自分に有利なことを主張して弁解できることを告げたうえで穏やかに話した。

「今から私は君を取調べるが、君を裁判所へ起訴するか、しないかを決めるためだ。そのために君から直接話を聞きたい。警察と同じようなことを尋ねるが正直に答えて欲しい。判ったね」

「ハイ」

と返事をして漣一は素直に取調べに応じ、検察官は手続きを終えた。

検察官の取調べを受けた漣一は、即日、裁判官の勾留質問を受けるため、静岡地方裁判所沼津支部へ連行された。裁判所へ着いた漣一は、法廷とは別の部屋で、裁判官から猫越川民家放火事件について犯行事実確認があり、勾留期間は十一月十一日から同月二十日までの十日間と決まった。直ちに大仁警察署に戻され、残る五つの放火事件について取調べが始まった。

警察では、連続して発生した六件の火災はすべて漣一の犯行と断定していたが、七月二十九日の明徳寺隣家放火事件以外は、比較的すらすらと話したため、調書をとる取調官をほっとさせた。

動機について漣一は、勤務先でのトラブルが原因で、鬱憤が溜まったからだ。赤い焔が燃え上がると胸がすーっとなったと供述した。

（二）

警察の裏付け捜査が終わった六つの事件は次のとおりである。

第一の事件、平成五年六月二十日（日曜日）湯ヶ島借家放火事件

〔犯罪事実〕被疑者は、同日夜十時過ぎ、湯ヶ島小学校近くに建つ三軒長屋の壁際に積み上げてあった雑木の束に火をつけ、トタンの外壁及び庇を焦がした。この長屋は被疑者の父親が所有していた。当時この借家には、秋田美人の仲居・大沢登世子（二十七歳）が住んでいた。登世子に岡惚れした同じ勤務先本谷楼の板前関戸由三（四十二歳）が、その周辺を深夜に徘徊しているという噂があったため、男女の愛憎絡みの事件かと思われた。被疑者漣一は、人の迷惑を考えて父親山田藤吉所有の借家に放火した。

第二の事件、平成五年七月二十九日（木曜日）明徳寺隣家放火事件

〔犯罪事実〕同日夜九時頃、厠信仰で有名な明徳寺の隣家一棟が全焼した。この家には高額な火災保険が掛けられていたので、保険金目当ての放火と思われたが、この家の住人が古物商で、高額な書画骨董を商っていることが判明し、保険金詐取の線は消えた。犯人の目星が付かないまま日時が経過した。

第三の事件、平成五年八月二十八日（土曜日）湯ヶ島納屋放火事件
〔犯罪事実〕同日夜九時頃、第一回目の火災現場の直近で、漣一の父親山田藤吉所有の納屋が焼失した。これら一、二、三回の火災は、いずれも人目に付き難く、かつ、消火施設の比較的整備された建物の近くであるという共通点があった。土地鑑があり、消火に詳しい者の仕業ではないかと噂が立った。

第四の事件、平成五年九月二十六日（日曜日）吉奈温泉宝屋旅館従業員寮放火事件
〔犯罪事実〕同日夜十時頃、子宝霊泉で人気の吉奈温泉宝屋旅館従業員寮自転車置場の段ボール箱が燃え出した。幸い住民が発見して消火したので、住家には延焼しなかった。この夜は、日曜日で地元消防団員による夜間巡回はなく、このことを知っていたのは消防団員とその家族だけであった。
（土地鑑があって、消防の内情に詳しい者の犯行）と消防団員中原修一は推理した。警察も消火活動の消防団員や見物する野次馬の方にカメラを向けていた。それから数日後、不審な人影の目撃情報が警察に寄せられた。
被疑者漣一は、この火災に関与したことを不確かながら認めた。

第五の事件、平成五年十月二十三日（土曜日）青羽根製材工場放火事件

〔犯罪事実〕同日夜九時過ぎ、天城湯ヶ島町のほぼ中央に位置する青羽根地区の製材工場から火災が発生。その直後に若い男の匿名通報が一一九番へあった。それとは別に、たまたま近くを通り合せた住民が、不審な人物を目撃していた。その人物は、吉奈温泉火災の不審者と似ており、白いセダンに乗り、中肉中背、防犯灯に照らされた横顔は、人気タレント「U君」に似ていたという。その後、匿名通報は出口交差点近くの公衆電話からであることが判明した。
これらの情報とは別に、青白い不気味な火の玉が数個、縫れ合うように燃え広がっていくのを、学習塾帰りの男子高校生が見たという噂が立った。住民たちは、放火魔の怨念が「鬼火」になったと怯えた。その昔、天城山中で命を落とした旅人の呪いが鬼火になって山々を焼き尽くすと言い伝えられていた。静かな伊豆の温泉郷を恐怖の底へ突き落とした連続放火事件を、住民はいつしか「天城の鬼火」と呼ぶようになっていた。
消防団幹部の中原修一と青山健太郎は、この火災の直後に、日頃不審な行動が多く、かつ、「U君」に似ている消防団員の山田漣一を問い詰めたこともあったが、漣一は関与していないと犯行を否定した。この時点では、消防団員で、わさび栽培業の野村道夫、ゴルフ場勤務の栗本実男の二人も、アリバイ不明で疑われていた。また、本谷楼の板前関戸由三の犯人説も消えていなかった。
漣一は、一つ年上で幼馴染の伊郷麻紗子が経営しているスナック白百合で、葛藤する心の苦悩を癒していた。麻紗子には、三十五歳のフィアンセ雑賀光夫がいた。雑賀は麻紗子が学んだ大学の先輩で、弁護士資格を持つ大学講師であった。麻紗子は、今までにも増して苦悩する漣一の姿

を見て、良い手立てはないものかと雑賀に相談したこともあった。

逮捕後の漣一は、取調官による厳しい追及により、青羽根製材工場の火災についても犯行を認めたが、出口交差点の公衆電話からの匿名通報は知らないと主張した。

第六の事件、平成五年十一月七日（土曜日）猫越川民家放火事件

〔犯罪事実〕同日夜十時過ぎ、消防団員の夜間巡回が終わって、団員が帰宅した直後に火災が発生した。火災現場は、天城湯ヶ島町消防署から県道を南へ二キロほど猫越川沿いに下ったところだ。この民家は高く生い茂った生垣に囲まれていて、道路からは屋敷の中は全く見えなかった。

漣一の供述によれば、爆発の危険があるガスボンベ置場を避けて放火した。消火活動中に、先輩の消防団員中原修一が民家の裏側に廻ろうとしたので、

「ガスボンベがあるから気を付けろ」

と声を掛けた。結果は、ボンベの存在を知らないはずの漣一が、ガス爆発の危険を中原に告げるのは、現地を下見したからに相違ない。『真犯人しか知り得ない秘密の曝露』だ。その後、現場検証の結果、その近くに、漣一が勤務先の工場で履いている安全靴の足跡があり、この二つが決め手となって漣一は逮捕された。逮捕後の取調べでは頑強に否認したが、第五の火災現場から檜の小枝の燃えカスが押収されており、一方、証拠物件として押収された白い通勤用自動車のトランクにもビニール袋に入れた檜の葉っぱが残っており、これを火付けに使ったと追求されて遂に自白した。

（三）

被疑者山田漣一は、警察官と検察官から、刑事訴訟法第三〇条の規定により弁護人を依頼できることを告げられていたが、両親に金銭的な負担を掛けられないと思って私選弁護人を諦めていた。ところが、勾留期間が半ばを過ぎた十一月十六日の昼頃、大仁警察署の受付に書類のつまった革カバンを持ったスーツの男が現れ、被疑者に面会を求めた。

その男は「雑賀光夫」と名乗り、漣一の私選弁護人になると申し出た。雑賀は伊郷麻紗子のフィアンセである。日本文化大学法学部在学中に司法試験に合格、二年間の司法修習生を経て東京中央弁護士会に弁護士登録、師である高桑正之法学博士の法律事務所で弁護士活動を続けていた。法曹界で著名な刑法学者・高桑博士は、弁護士と日本文化大学法学部教授を兼ねており、政治家の絡む裁判や難事件といわれる裁判の弁護団にはほとんど名前を連ねていた。大仁警察署から雑賀弁護士が私選弁護人になる旨の通知を受けた大杉検事は、これから始まる裁判の行末を思いやった。

被疑者と弁護人は、刑事訴訟法第三十九条第一項の規定により立会人なしで面会できる接見交通権がある。雑賀は漣一に、両親から依頼を受けたこと、漣一のたった一人の女友達伊郷麻紗子からも度々頼まれたことを告げて、「弁護人選任届」に署名させ指印を押させた。

漣一は連日取調官から厳しく追及されたが、第二の明徳寺隣家放火事件は頑強に否認し続けた。検察官は二回目の勾留を裁判所に請求し、十二月一日までの十日間勾留は延長され、二回目の勾

留期間満了後、直ちに第二の事件を除く五つの事件について、静岡地方裁判所沼津支部へ起訴した。

漣一は起訴された後も、第二の事件について取調べを受けるため、引き続き大仁警察署に留置されていた。雑賀は漣一の犯行の動機を知るため、大仁警察署での面会を重ねた。

漣一の家は、五十八歳の父山田藤吉と五十五歳の母梅子、高校生の弟秀二の四人家族であった。藤吉は地元の森林組合に勤め、僅かであるが農地と山林を所有し、勤めの余暇に農業も営んでいた。梅子は子供の教育費を得るために、パートで温泉旅館の調理場の下働きをしていた。弟の秀二は、県下有数の進学校韮埼高校三年で、小学校五年生の時に実施した知能テストでは、知能指数（ＩＱ）一三六と驚異的な高さを示し、小学校入学から今日まで、学業成績は常にトップクラス、秀才といわれて周囲から期待されていた。当然両親の愛情も期待も秀二に向けられていた。

（四）

弁護人雑賀は、漣一と警察署で面会を重ねていった。初めは寡黙な漣一であったが、次第に心を開くようになり、生い立ち、子供の頃に受けたいじめ、職場での屈辱など放火の動機についていろいろ話しがあった。

果して、この程度の動機で放火するだろうか。憂さ晴らしの犯行というには、連続放火はあまりにも大罪だ。もっと別の大きな動機があるのではないだろうか。また、犯行の手口についても、詳細な点については不明確なところがある。事件については口を閉ざすが、雑談には時々笑顔を

見せて応じたりもする。特に弟秀二の大学受験のことをしきりに聞いてくる。両親の愛情が弟に注がれていることに対する嫉妬心から、弟の受験が気になるのか。弁護人としての雑賀には、何か気になるものがあった。そんな時、麻紗子の何気ない話を、ふっと思い出した。

「漣一さんは、秀二さんが欲しがる物は、参考書でも何でも、よく買ってやるようよ。お父さんが違っても、歳が離れた弟は可愛いのかしら」

漣一は、母親の愛情まで弟に奪われて、秀二を恨んでいるのではというのが世間の見方であったが、雑談中に見せる弟に対する漣一の思いは少し違うようだった。雑賀はこのことが何となく気になった。

年が改まって平成六年二月、雑賀と麻紗子は結婚し、新幹線三島駅の近くに新居をもった。式後の慌ただしさも一段落した二月中旬、雑賀と麻紗子は漣一に面会した。その時漣一は、弟秀二が肩身の狭い思いをして勉強に身が入らないのではないか、としきりに秀二のことを気にしていた。

「大丈夫よ。秀二さんは優秀だから、きっと希望の大学に入れるわよ」

と麻紗子は漣一を慰めた。しかし、実情は少し違っていた。入試センター試験の結果も予想をはるかに下回っていた。大学受験も滑り止めの私立大学に合格しただけであった。周囲は気付いていなかったが、秀二の成績は二年生の頃から少しずつ下がり始めていた。焦った秀二は次第に不眠症となり、持病の蓄膿症の悪化もあって、やや自暴自棄的な状態になっていた。もともと頭のよい秀二は、表面的には成績低下を人に知られないように装っていたが、それだけに秀二の葛

藤は激しかった。そのことに気付いていた雑賀と麻紗子は、ある不安を感じた。

二人が面接してから一週間後、第一回公判が平成六年四月四日と決り、弁護人雑賀を通じて漣一の両親にも知らされた。

公判の五日前、三月三十日の夜半、天城温泉郷に不審火による火災が発生した。火災現場は、町の公営施設「湯の国会館」の広場に設置された天城名産ワサビ椎茸などの地場物産や土産物を販売する仮設店舗であった。仮設店舗は青羽根警察官駐在所の真裏にあり、駐在所と安産の仏様として信仰篤い「子安地蔵尊」の間を通る狭い町道に面していた。

当日は水曜日で、湯の国会館は定休日、監視の目の届かない時と場所である。町当局は驚いた。住民も驚いた。一番驚いたのが捜査当局である。

仮設店舗には火の気がなく、延焼の危険も少なく、かつ、駐在所の真裏で最も犯罪の起り得ない場所の一つだ。連続放火魔の再来か。漣一の逮捕で一旦忘れかかった放火の恐怖が、再び平和な温泉郷を襲った。焼失した仮設店舗は、営業は昼間だけ、夜は無人で全く人の気配はない。二日後には早くも迷宮入りが囁かれた。

「湯の国会館仮設店舗放火事件」のあった三日後、弁護人雑賀は、公判について話し合うため漣一に面会した。話が済んだ後の雑談で、雑賀が駐在所裏の放火事件の話をした。

「えっ、またっ……」

漣一は絶句、驚愕、目を閉じ、両手を握り締めて、ぶるぶる……と震え出した。

「漣一君どうした、漣一君……」

雑賀は漣一の驚きの激しさに、しばし唖然とした。

雑賀は、漣一が『えっ、また……』と言った時に、誰か人の名前を口にしたような気がした。

雑賀は漣一に尋ねた。

「漣一君、君は何か隠していないか……」

「……」

「漣一君、君の供述調書を読んだが、各事件について、放火した時の状況がいまいちはっきりしない。そのうえ供述が時々変わっている。裁判官には真実を話して本当のことを知ってもらう必要があるんだよ。私も君の弁護活動をするためには、真実を知っておく必要がある。それが君にとって不利になることなら別だがね」

雑賀に諭されて、漣一は重い口を開いた。

「今は何も言えません。しばらく考えさせて下さい」

雑賀は、これ以上聞いても進展はないと判断して、面会を打ち切った。

（五）

いよいよ第一回の公判が静岡地方裁判所沼津支部（巌谷正雄裁判長）で開かれた。

被告人山田漣一は、二人の看守に伴われ、紺のスーツ、白いワイシャツ、ノーネクタイ、ゴム草履を履いて出廷した。

傍聴席には父親の藤吉、雑賀麻紗子、消防団員の中原修一、青山健太郎が最前列に着席して裁判の成り行きを見つめていた。母親の梅子は、自分の育て方が至らなかったと責任の重さに苦悩し、家に閉じこもっていた。

裁判長は開廷を宣した後、

「被告人は前に出なさい」

と促し、続いて冒頭陳述に入った。証言台に立った漣一は、前かがみの姿勢で裁判長をそっと見た。裁判長は、名前、生年月日などの人定質問を行い、続いて、公判担当検察官が起訴状を朗読した。罪状は刑法第一〇八条現住建造物等放火罪及び第一〇九条非現住建造物等放火罪である旨を述べた。次いで裁判長は、

「法廷で発言したことはすべて証拠になるから、自分に不利なこと、言いたくないことは答えなくてもよい」

と黙秘権（供述拒否権）のあること、意見があればいつでも発言してよいことを告げ、続いて、被告人漣一の罪状認否に入った。

「今、検察官が読み上げた公訴事実は間違いないね」

と尋ねた。傍聴席は、漣一がどのように陳述するか固唾をのんで見つめていた。

漣一は一瞬沈黙したが、

「いずれの事件についても今は言いたくない。もう少し考えさせて下さい」

と意外にも大きく、はっきりした口調で答えた。弁護人雑賀は、漣一の言葉に驚いた。

裁判官は雑賀に向かって尋ねた。

「弁護人のご意見は……」

「弁護人は次の公判で、意見を述べさせていただきます」

裁判長は、左右の陪席裁判官と意見交換し、了解を得てから被告人に向かって、

「被告人はよく聞きなさい。弁護人は君の弁護について真剣に考えておられる。君も心を開いて素直な気持になり、小さなことでも何でも弁護人と相談しなさい」

と諭すように言い聞かせた。第一回の公判は、三十分程度で閉廷し、被告人の罪状認否は第二回公判に持ち越された。次回公判は、十日後と決まった。

第一回公判の三日後、弁護人雑賀は漣一に面会し、裁判長の説諭、高桑博士が弁護人を内諾していることなどを伝え、さらに、父親の藤吉が『自分の愛情が足りなかったからだ』と自分を責めていたことも話した。しばし沈黙していた漣一は、

「先生、おれはお父さんに、すごく感謝している。おれの実の父親は鬼畜のような奴だった。大工だったが、大酒呑みの博打好きで、仕事もしないで、競輪とパチンコばかりやっていた。車券を買う金がなくなると、母が日雇いで稼いだ僅かな労賃を取り上げてつぎ込んだ。それだけではない。おれのミルク代にとっておいた百円、二百円の金まで競輪につぎ込んだ。母が、漣一のミルク代だからといって拒むと、母を殴ったり蹴ったりしていじめた。おれは物心がつくようになってから、『お母さんをいじめないで』と泣きながら親父の足にしがみついた。『邪魔だ。うるさい』と、親父はおれを蹴飛ばした。母とおれはいつも生傷が絶えなかった。着る物は勿論、食

べる物もなく、空腹でおれは痩せこけていた。おれは親父の姿を見ると、また母をいじめるのか、いつ自分が蹴飛ばされるかと、終始おどおどしていた。そんな毎日だったので、おれはだんだん無口で人嫌いになった。母は、これ以上一緒に生活していては、わが子の将来はないと思って離婚した。おれが四歳の時だった。母はおれが六歳の時に、現在の父と再婚した。幸い新しい父はとても優しい人で、おれを養子にして、実子以上に可愛がってくれた。やがて弟が生まれた。それが秀二だ。弟が生まれても、父のおれに対する愛情は少しも変わらなかった。弟はおれと違って明るい性格で、いつも勉強は一番だった。それにおれによくなついてくれた。おれも歳の離れた弟が可愛かった。両親は弟に期待していた。おれにとっても自慢の弟だった。だから一流大学に入って出世してもらいたい。いつもそう思って弟を応援していた。大恩あるお父さんに恩返しするためにも弟を助けたかった」

　漣一は涙ながらに語った。

「そうだったのか、君の気持はわかった。それでどうしようとしたの……」

「うん……おれは放火なんかしていません。本当です……」

「なんだって、放火してない？」

「……」

「なぜそれを早くいわなかったんだ。それでは犯人は誰だ。どうして自分が犯人だと嘘の供述をしたんだ……」

「今はそれだけしか言えません。次の裁判までに心の整理をしておきます。だから今日はこれ以上聞かないで下さい」

　雑賀は面会を打ち切り、その足で両親の山田藤吉夫妻に会ってことの次第を打ち明けた。次回の公判で何があっても驚かないように念押しもした。

（六）

　四月十四日、静岡地裁沼津支部で第二回公判が開かれた。四十席ある傍聴席は、報道陣で埋まっていた。

　漣一の服装は前回と同じ紺のスーツ姿であるが、今日は顔を上げてしっかりした足取りで入廷してきた。漣一は、被告人席に座る前に、傍聴席の最前列に固くなって座っている両親の姿を見て、静かに頭を下げて着席した。その態度には漣一の決意のようなものが感じられた。漣一の顔を見た母親梅子は、思わずハンカチで目頭を押さえ、声を殺して嗚咽した。

　裁判長巌谷正雄は開廷を宣した後、証言台に立った漣一に尋ねた。

「被告人は、罪状認否について話して下さい。違うならば『違う』と遠慮なく言いなさい。公訴事実は間違いないですか」

　公判廷内は、漣一の発言を一語も聞き漏らすまいとシーンと静まった。

「……」

「……」

「裁判長さん、おれはやっていません。おれはひとつも火付けなんかしていません」

「おおー……」
声にならないどよめきが傍聴席から起った。すかさず裁判長は傍聴席に向かって、
「静粛に願います……」
と、どよめきを制した。その実、裁判長自身も驚いた。検察官も驚いた。裁判長は、
「被告人は罪状を認めないですね。ではどうして事実と異なる供述をしたのですか」
「……」
「被告人は、この法廷ではっきりと真実を主張しなさい」
裁判長に促された漣一は、両手を証言台におき、肩で大きく息をしていた。たまりかねた雑賀弁護人が発言した。
「裁判長、私から被告人に問い質したいことがあります。ご許可願います」
「検察官、ご意見は……」
「異議ありません」
「弁護人の発言を許可します」
「漣一君、君は前回面会した時に『お父さんに申し訳ない』と言っていたので、面会後にご両親といろいろお話した。お父さんは『漣一は一人で苦しんでいる。なんとか救ってやりたい』と君のことを大変心配しておられた。今日は君がどんなことを言ってもお父さんは許して下さる。事実をありのままに話すことがご両親のためなのだ。勇気をもって話しなさい」
「ハイ……」

漣一は、ゆっくり身体の向きを替え、傍聴席の両親に頭を下げたまま嗚咽した。ややあってから、小さな声で、
「お父さん、許して下さい……」
と謝った。再び正面に向き直って、
「裁判長さん、やったのは、実は……」
裁判長には、漣一の発言の語尾がよく聞き取れなかった。傍聴席も一瞬ざわついたが、すぐに静まった。裁判長は、
「被告人は、もう少し大きな声で発言しなさい」
と促した。漣一は肩を震わせ嗚咽をこらえていたが、今度はしっかりと裁判長を見て、
「やったのは弟の秀二です……」
法廷内に強烈な衝撃が走ってどよめいた。
「優等生の秀二が……」
母親梅子は、驚愕のあまりへたりこんでしまった。父親藤吉も呆然となった。
「傍聴席は静かにして下さい」
と制しつつも、裁判長自身も驚いた。
「被告人、君は弟の身代りになったと言うことかね。もっと詳しく話しなさい」
「弟は、高校二年の夏頃から成績が下がり始め、焦っていました。持病の蓄膿症も再発して飽きっぽくなっていました。去年六月の中間テストの成績が悪く、自暴自棄になっているようでし

た。六月二十日の深夜に、家の借家の薪束に火を付けたと言いました。『赤い焔がぱあーと燃え上がると、嫌なことを忘れる』と言っていました。おれは消防団員でもあるし、これは大変なことになったと心配でした。その時、直ぐ父に相談しようと思いましたが、弟に期待している父が気の毒で話せませんでした。幸い犯人が判らないので、それをいいことに黙っていました。その後も次々と火事があり、困ったことになったと思いましたが、言い出すきっかけがなくなり悩みました。十一月になり、ついに人の住んでいる家に放火したので、これ以上隠す事はできないと思いました。消防団の人たちから、おれがタレントの「U君」に似ていると言って犯人呼ばわりされて責められましたが、おれは黙って我慢していました。その後、猫越川の火災の時、おれがガスボンベの設置場所を知っていたことと、おれの安全靴の足跡があったということで逮捕されました。ガスボンベのことは、おれが消火に行く時、弟が教えてくれました。安全靴はいつも通勤自動車に積んであるので弟が履いたと思います。弟は運転免許を取ってから、時々おれの車を運転していました。おれが身代りになれば、弟も犯行を重ねないだろうと思いました。父や母を喜ばせるために弟にはいい大学に入って欲しかったので、おれが罪をかぶることにしました。裁判が始まる直前、雑賀先生から、駐在所裏の火事のことを聞き、『また弟がやったのか』と思いました。これ以上弟が犯罪を重ねたら大変なことになると思い、二日間考えました。それで今日は本当のことを話すしかないと覚悟を決めました。いままで嘘を言って済みませんでした。お父さん、お母さん許して下さい」

　漣一は、身代りになったいきさつを一気に話した。裁判長は雑賀に向かって、

「弁護人、ご意見は……」

「衝撃的な話で驚いています。被告人とよく話し合ってから、改めて陳述します」

「検察官ご意見は……」

「検察としましても、予想外のことで驚いています。よく検討協議したうえ、改めて陳述いたします」

　こうして「天城の鬼火」と恐れられた連続放火事件は意外な方向に展開していった。

　次の公判で検察官は、公訴を取消し、即日裁判長は公訴棄却を決定した。漣一は釈放されたが、代わって弟秀二が逮捕され、取調べが始まった。秀二は、明徳寺隣家放火事件を否認した。猫越川民家放火事件も否認し、自分が民家に着いた時に不審な人影が去るのを見た。その後、すぐに燃え上がったと供述した。

　天城湯ヶ島温泉郷に真の平和が訪れるのは、当分先になりそうだ。

　この小説を執筆するに当り、法務について静岡県警三島警察署長杉山靖警視からご懇篤なるご指導をいただいた。この場を借りて謝意を表します。

新美先生のこと

松下　壽男

一

（たんぽぽの蜜を吸うハナアブは、まるでサーカスのトランポリンのようだ……）

と、店構えの家を出てから、街道をしばらく歩いた道端で、草むらを眺めて佇んでいた南吉は、

「新美先生、新美先生」

と自分を呼ぶ声を聞いて、我に返った。

車を降り、傍らに立った婦人は、もんぺ姿ではあったが、品のよい身なりをしていた。

「安城高等女学校では、この三月まで、娘が、先生に大変お世話になりました。お陰様で娘も毎日、元気よく進学先の学校に通っております。宅は実家がこちらでございまして、この頃は実家の伝手まで頼って、原料の調達に走り回っております次第です。お体が優れないと伺いましたが、お元気そうでなによりでございます」

「ええ、お陰様で。しばらく親元で静養していますが、来週からは安城に戻るつもりです」

「それは、よろしゅうございました。後程、精の付く物でも届けさせましょう」
運転台の日焼けした若者が、鉢巻きを外して頭を下げた。
「いえ、ご心配なく」
「いいえ、何よりお体が大切でございます」
バタバタと埃っぽい爆音を立てて、オート三輪は走り去っていった。南吉は、女学校をたくましく巣立っていった教え子の母親の目に、病み上がりの自分がどんなにひ弱く見えたことだろうと苦笑した。しかし卒業後も信頼を寄せて親しく声を掛けてくれる母親や教え子の存在が嬉しかった。自分が死んでも偲んでくれる人々がいるかもしれないと思った。
知多半島の背骨の丘陵が一歩一歩目の前に近づいてくるようであった。右手に広がる田んぼには、まだらに水が引かれ、農夫や牛馬が、せわしなく代かきをしていた。晩春の農村の慌ただしい営みも、遠目には、一面のレンゲ畑と水面の揺らめきが織り成すダンダラ模様の中で、のんびりと時の流れも忘れて遊んでいるかのようであった。時折、牛が鳴いた。
田んぼを緩やかに流れる矢作川と、その向こうのこんもりとした新緑の山は、彼が十年前に、童話雑誌「赤い鳥」に載せたことのある「ごん狐」の舞台に選んだ風景であった。初めて故郷を舞台にしたその物語の中で、南吉はすでに二つもの死を描いていたのであった。
人は故郷に死ぬ。遺骨も魂も故郷に帰る。思えば、故郷とは、人の生まれ育つ所の前に、死ぬ所であったのだろう。そう考えると、故郷が如何なる者をも受け入れる、その理由がわかるような気がするのであった。なぜなら死とは、全ての者が共通に受け入れることができる唯一の理解

なのだ。死を通して初めて人と狐がわかり会う、その物語を書いていたとき、十年後の運命など想像すらしていなかった。が、今となって、やっとその主題がわかり始めた南吉なのであった。
うねうねとくねったあぜ道から、腰の曲がった農夫が鍬を担いで街道にやってきた。幼なじみの平太君の父親であった。南吉は、少年時代の平太君を「平太郎」という名前に変えて、童話の世界に度々登場させてきたのであった。
「おじさん、お久しぶりです」
「ああん、渡辺ん許（がれ）の先生かい、元気になったかえ」
「ええ、お陰様で。おじさん、平太くんから便りが届きますか」
「ああ、あいつァ、毎週のように送って寄越すだに。この前はよォ、部隊は北支から南方へ転戦中とか書いてきよってなァ。これから暑くなるっちゅう時に、南方は大変ずらに」
「そうですか、是非よろしく伝えてください。もう七、八年も会っていませんから」
「あいつァ、徴兵検査で甲種合格だっちゅうてほらふいとったら、いの一番に兵隊にとられちまって、お国のために戦いづんめョ。正直の、早う、命のあるうちに、帰ってきてほしいもんだに」
別れ際に、農夫が、黒い皺だらけの顔に浮かべた皮肉っぽい笑みを、南吉は目ざとく感じ取るのであった。
南吉は、皮肉な運命を歩む宿命の子供だった。それが世間のもっぱらの噂であった。故郷とは噂の飛び交う所なのである。昼下がりのだらだら坂をとぼとぼと歩く南吉、旧姓渡辺、本名新美

正八の耳には、こんな噂話が聞こえてくるようであった。

（渡辺ん許の正八は、あの因業親父が後妻に気兼ねしたせいで、母親の里の新美ん許へ養子に出されたっちゅう訳さ。そうでもして機嫌を取らにゃ、よっぽどの山の神でも渡辺ん許にゃ居着きはしまい。ところが正八は体は弱いが頭のできがいい。こりゃあ他所へやっちゃあつまらんと、あの渡辺の業突く張りが、新美を名乗らせたまんま家に戻したのさ。正八は、半田の中学を二番で卒業して東京の外国語学校に行ったとこまではよかったけんど、結核に罹って家に帰って来ちまった。ぶらぶらしたあと、女学校の先生になるにゃなったが、どうも長生きゃあできんようだ。ありゃあ、因業親父が高利貸で人をいじめた報いだっちゅう、もっぱらの噂だに）

実際、噂は、子供の頃から南吉の耳にも入ってきた。噂を聞いて、初めて、そうだったのかと思ったこともあった。本当は違うのにと心底憤ることもあったのだった。

（父は、冷酷な取り立てに同行させたり、握った白銅貨を力ずくで取らせてみたりして、幼い長男の僕の技量を試したのだった。一方母は、ずっと心から僕を愛してくれている。この数日間、我が身が倒れる寸前まで、付きっきりで看病してくれたのも母だった。弟の方を跡取りに選んだのは、冷徹な実父の才覚であり、養家に馴染めなかった僕を再び家族として包み込んでくれたのは、温かい継母の愛情だったのだ）

とはいえ世間とは、自分の思う真実よりも噂話の方が説得力があるものだった。さらに噂によれば、実母やその兄弟のように、自分も長生きはできない存在なのであった。それは南吉にも確かな宿命のように感じられるのだった。そして、たくましい同級生の多くが戦地に赴く一方で、

不治の病を背負った自分が故郷にいて無為の日を過ごす、この皮肉な現実を直視するほかはないのであった。

（平太君が隣り合わせている死は、名誉の戦死だ。異国の見ず知らずの敵と戦って殺し合うのだ。それも戦時下の運命なのだ。一方僕に今も粛々と近づいてくる死は病死だ。そのために故郷を離れられない僕は、肺に、腎臓に、そして今度は咽に巣くう病や、その果ての死の不安と寄り添っている。すでに病死は始まっているのだ。それは世間から見れば、お国の役に立てない穀潰しの非国民の生き様に違いない。それも僕の宿命なのだ）

とはいえ、噂話はともかくとして、故郷には、誰一人、死に行く彼の身に辛く当たる者はいなかった。死は全てを赦す。この原則に例外はないのだ。敵も味方も、勝ちも負けも、善人も悪人も、英雄も非国民も。なぜなら人は全て死ぬのである。

二

南吉は、母校の、今は岩滑国民学校と名前を変えた小学校の門をくぐった。故郷の金次郎さんはどうなっているのだろうか、自分の眼で確かめておこうと思ったのだ。

南吉は、戦時下の二宮金次郎像の運命を、教え子の作文から知らされていたのであった。

安城高等女学校に着任して以来手塩にかけて育ててきた卒業生を三月に送り出した南吉は、この昭和十七年度は一年生の国語の担当になった。彼は、最初の授業で、まだあどけなさを残す少女らに「小学校時代の思い出」という題で作文を書かせてみたのであった。

擦れ擦れの鉛筆で書かれた粗末な原稿用紙の束に、朱筆で傍線を引いたり、圏点を打ったりしていた南吉は、こんな文章に出くわしたのだった。

「……一年生の三学期に、わたくしの小学校にも金次郎さんの銅像が建ちました。全校の子供でお祝いをしたのを覚えています。わたくしたちは、登下校の度に、校門の近くの金次郎さんにあいさつをしたものでした。

それが、五年生の三学期に金次郎さんが出征をすることになりました。その時も全校でお見送りをしました。お客様の中には軍服姿の軍人さんもいらっしゃいました。そして金次郎さんの立っていた台座の向い側に奉安殿が建ちました。六年生になると、学校の名前も国民学校に変わりました……」

南吉は、筆を置き、両手の平で顔を包んで、瞑目した。台座から下ろされ、荷車に乗せられた金次郎像は、他の供出品と共に山と積まれ、やがて溶鉱炉で一緒くたに溶かされて、爆弾の原料にされるのだ。それが金次郎さんの出征なのであった。南吉は、金次郎像の行く末と、一歩一歩死に近づいていく自分とを重ね合わさずにはいられなかった。

死のもたらす理解とは、忘却の入口でもあった。死は速やかに無意味の象徴へと転化する。だからこそ死は死であってはならない。死は譲でなければならないのだ。生まれ変わらなければならないのだ、何物かに、たとえそれが爆弾であっても。

南吉は、その作文を書いた生徒と、その同郷の友人を教員室に呼び出した。初めて教員室に入った二人の少女は緊張しきっていた。南吉は、二人を衝立の陰の休憩用の長椅子に座らせて、

「君たちの母校では、金次郎さんの出征をなさったそうですね。その時の様子を詳しく話してくれませんか」

と、笑顔で語りかけた。

少女らは、顔を見合わせたり、相づちを打ったりしながらおしゃべりを始めるうちに、快活さを取り戻した。次々と浮かんでくる思い出が、入学以来の緊張をほぐしていくのであった。

すでにかしましい小学生に戻っていた二人組が、問わず語りに演じ始めた金次郎さんの見送り風景を、頷いたり、男性にしては少し甲高い声でくり返したりしながら、記憶にしっかりと焼き付けておく南吉であった。

「でもさ、金次郎さんの銅像の建っていた跡に、村の人たちが焼き物の金次郎さんを造ってくれたのよね」

「だってさ、あたしたちの村は焼き物の村なんだから」

「そうそう、『代用の金次郎さんだ』なんて悪口を言う男子もいたけどね」

「いたいた。でもさ、あたしたちは、みーんな、その金次郎さんと一緒に、奉安殿におじぎをしていたのよね」

そんな後日談に、幾分かは心が和んだ南吉であった。

岩滑国民学校の金次郎さんは、校門から少し進んだ左手に立っていた。しかし近づくにつれて南吉の心は物悲しくなった。青銅の銘板が埋め込まれた石造りの台座の上に、いかにも不釣り合いなセメントづくりの金次郎像が佇んでいたのであった。

（代用の金次郎さんとはよく言ったものだ）

とはいえ、その土地土地で、身なりを石に、焼き物に、セメントに代えてさえ、村の有志と匠の手になる金次郎像は、確かに残っているのであった。単に物質の問題ではない、大切なのは心と、物が支える暮らしなのだ。南吉は安堵した。金次郎さんは忘れられてはいない。そして彼の心の中にも、二宮金次郎の思想は、確固として息づいていたのであった。

思えば、昨年南吉は、初めての単行本「良寛物語・手毬と鉢の子」を執筆した後、出版社と共に「土手小僧・二宮金次郎」という伝記を企画したことがあったのだった。そのために、尊徳二宮金次郎の生涯やその報徳思想を研究したのだ。その後、企画は出版社の判断によって「大岡越前守」に変更になったが、「至誠」「勤・倹」「分度・推譲」「一円融合」の思想は、耕された畑に降り注ぐ雨のように、彼の心に染み込んできたのだった。心がそれを待ち構えていたのだとさえ思えた。世界とはこうであろう、こうあるべきだと感じていた事柄とぴたりと合っていたのであった。

それまでの彼は、言わば、自我に目覚め、貪欲に学び、そして思いつくままに歩んでいた金次郎像であった。しかも宿命の鋳型に象られて、いつまでも大人になれない少年のような者であった。しかし金次郎の報徳思想の全体像に出会った後は、仕立てのよい羽織を纏ったように、心は自由に、しかも不動心が備わったように感ずるのであった。

そして東京の出版社から、初めての童話集の発行の話が届いたとき、彼の心の中に、むくりむくりと沸き上がるものがあった。これまでにない創作意欲を感じたのであった。

この一か月余り、南吉は、初めての童話集「おぢいさんのランプ」の著作に没頭した。

報徳に支えられた心の高まりの中で、南吉は、童話「貧乏な少年の話」を書き始めた。自らを誠実に見つめ、天分を自覚し、勤労と倹約の尊さに目覚める少年を、温かな人情を込めて描き上げることができた。続いて童話集の表題作に選んだ「おぢいさんのランプ」のお話では、灯し火の美しい暗喩とともに、新しいものに進んで譲る潔い人生を描き上げることができたのであった。さらに教え子から聞き出した金次郎さんの出征場面を下敷きにして、故郷のお寺の鐘の供出をめぐる「ごんごろ鐘」の物語を練り上げた。古いものが新しいもののために自らを譲る切ない場面に立ち会い、それに真心で関わっていく少年らの姿を、誠実な眼差しを通して描き切った。

こうして新たに書き下ろした三篇は、「最後の胡弓引き」や「久助君の話」といった、それまでの彼の童話作品には描かれることのなかった世界であった。

南吉は、夜を徹して書き上げた原稿を東京の出版社へ発送したその日に夥しく喀血をした。安城の下宿を出、鉄道を乗り継いで岩滑の実家に辿り着き、深い眠りについて、目覚めた彼は、起き上がることができなかった。咽の奥に絶えず違和感を感じるようになっていた。また死に近づいたなと思った。

しかし、病床でも彼の頭の中だけは活発に働き続けた。早くも新しい童話集のための構想を巡らせていたのだ。回復し、何とか歩き回れるようになったとはいえ、肉体に与えられた時間は限られていた。書きたい、書かなければならない、でも今の南吉にどんな物語を紡げというのか。

「あれ、まあ、新美先生」

金次郎像の前に佇んで回想に耽っていた彼を、遠くから呼ぶ声が聞こえた。懐かしい声であった。身を巡らした南吉は、校門の右手の奥に目をやった。声の主は、基壇を囲む柵の扉を開いて、近づいてきた。後ろの神殿風の建物の所々に輝く金色の金具が眩しかった。

「おばさん、お久しぶりです」

「元気になってよかりましたの。心配しとったですよ」

子供の当時と変わらぬ小使いさんは、南吉がここに代用教員として勤めていた頃も、中学出立ての彼を気遣って、あれこれと世話を焼いてくれたのだった。

「たいそう立派なものが建ちましたね」

「奉安殿のことですかいの。柵の中に草を生やすな、金具を錆びさすなと、けっこうお世話が大変でして。ところで、もう三時になりますかいの」

南吉は、真鍮の地肌が露になった腕時計を覗き込んで、頷いた。

彼女は、これから中庭に行き、手にした鐘を振るのである。すると、放課を待ちわびていた子供たちが、歓声と共に、われ先に校門をくぐり抜けていくのだ。

南吉は、講堂の脇の踏段に腰を下ろして、その様子を観察することにした。日陰のコンクリートが微熱を帯びた体に心地よかった。

やがて、垢で襟元がてかてかになった着物姿の男の子や、もんぺの膝に厚い大きなあてこを付けた女の子が次々とやってきた。ブラウスを着た小奇麗な少女も、下の二つのボタンが、緑色にくすんだ焼き物の代用品だったりした。それでも彼らは、奉安殿の前で神妙に衣服の乱れを改め、

深々と頭を下げるのだった。それからセメント像の前で、

「金次郎さん、さようなら」

と、まるで友達に声を掛けるようにして、いそいそと校門を出て行くのであった。

賑やかに与太を飛ばし合う男子の集団の後ろを、パタパタと、お尻に薄汚れたどうらんを踊らせながら、黒い学童服を羽織った少年が駆けてきた。帽子の庇は横っちょを向き、代用皮革の顎掛けがだらしなく伸びていた。少年は、奉安殿の前まで来ると、どうらんを投げ出して、慌てて服のボタンを掛け始めた。どうらんの蓋が半開きになって、半紙の代用の水書板が顔をのぞかせた。少年の短い指は、もどかしそうにボタンをくぐらせていくのだが、さっきから校門の方ばかり見ているものだから、一番下のボタンを掛け違えているのだ。素焼きの粘土に金粉をまぶした代用品の金ボタンは、そうとも知らず、むくりむくりと穴から顔をのぞかせ、その度にぴかぴかと光るのだった。少年は、襟元まできてやっと変だぞと気付いた様子であった。ところが、何もかも中途半端なこの少年は、そのままぺこりと頭を下げたのだった。

「おおい、待ってくりょう」

駆け出した少年が、両手で服の裾を捌くと、ボタンはするすると造作なく穴から抜けて、学童服はあっという間にはだけていくのだった。

「あっ、いけねえ」

あたふたと引き返してきた少年は、どうらんの紐をつかむと、引きずるようにして走り去っていった。

南吉は、覗き込むようにしてその一部始終を目に焼き付けていたが、やがて笑いが込み上げてくるのだった。

「いつでも、どこでも、平太郎君はいるもんだ」

そして、

（たとえ身の回りは代用品ばかりでも、子供は本当にぴかぴかと光っているのだ）

と、何度も何度も頷くのだった。彼の心の中にも、快く捌かれたものがあって、少年と共感しながらぴかぴかと光っているのであった。

校門を出ると、南吉は左手の丘陵の麓を見やった。その逆光に翳る辺りには、彼の養家があるはずだった。そこで過ごした日々の不安は、短くはあったが、彼の心の基調色として、ずっと残っていたように思われた。

（代用の子供として、ずっとボタンを掛け違えて生きていたのは、僕の方かもしれないな）

踵を返した彼は、半田の町に向かって歩き始めた。

（日が沈む前には図書館に着くだろう、休み休み歩いても）

三

丘陵を見上げながら、梅子は必死でペダルをこいだ。子供らがノーパンと呼ぶ代用タイヤは重いのだ。前に進まずハンドルがふらつき始めると、彼女はサドルから飛び降りた。そして自転車を押しながら歩き始めた。暑かった。傾きだした日光が彼女の背中に突き刺さり、絣のもんぺの

内側は、ズロースの下まで汗が流れていた。

「僕は、喀血して、今は岩滑に帰っています。貴女に会って話がしたい。二十七日に図書館で会いましょう」

南吉から封書を受け取ったのは一昨日だった。

「新美先生が血を吐かれたんですって、急にわたしに会いたいんですって」

梅子はすぐに母親に相談した。童話創作での二人の師弟関係を見守ってきた母親は、校長には母と落ち合って知り合いの見舞いに行くと言いなさい、乗り物の乗り継ぎはもうあてになりません、その日は自転車でお行きなさい、教え子を帰したら坂を上り丘陵の道を通って半田に向かうがいい、帰りはいつものように常会に出席する本家のおじさんと帰っていらっしゃいと事細かに知恵を授けた。自転車で三〇キロもの道のりも、健康な梅子には苦にはならなかった。

（あの峠を越えれば、新美先生とお会いできるんですもの）

結社の図書館は、大講堂で月例の常会が開かれる夜は遅くまで開いているのであった。結社は、戦時下でもそれを崩しはしないのである。だから普段は郵便で添削をしていた南吉も、春夏冬の休暇には図書館で梅子と会って、直接指導することができたのであった。

しかし、

「この春休みは僕は岩滑には帰れません」

と、三月に届いた葉書には書いてあった。早いもので女学校の三年生になる教え子も、春休みに帰って来た時には、

「新美先生って子供みたい。卒業式で真先に泣いたのよ」
なんて、宿直室で話し込んでいったのだった。
（それ以来、新美先生はどうなさったというのでしょう）
南吉の喀血は、梅子にも想定できた出来事だった。しかしそれは余りにも唐突に、しかも厳粛にやってきたのであった。
（わたし、信じないわ。運命なんて。だって、先生との出会いはみんな、私の願いが叶えた偶然ですもの）
胸元で力強くハンドルを押しながら、梅子は回想に浸るのであった。そしていつものように、気恥ずかしさが頬のほてりとなって甦ってくるのだった。
思えば、文学少女と呼ばれていた小学生の頃から「赤い鳥」に載る南吉の詩や童話は、梅子の憧れの的であった。だから教師になった海辺の小さな小学校の教え子から、親類を頼って安城高女に進学したいと相談を受けたときには、何となく心が浮き浮きしたのだった。南吉がそこにいることを創作仲間から教えられていたのであった。放課後もみっちりと勉強を教えた彼女は、満を持して、自ら教え子の願書を提出しに行った。そして事務室で書類を手渡したあと、そのひょろひょろとした職員に、意を決して尋ねたのであった。
「あの、新美先生にお会いしていきたいのですけど」
「新美なら僕ですが」

四

傾いた晩春の陽射しが、半田の町の低い家並みに穏やかな陰影を描き出していた。古びた看板の裏手からひらりひらりと舞い出した一つがいの白い蝶を、立ち止まって額に手をかざしながら追い続ける南吉であった。
やがて南吉は、大理石の低い石段を踏みしめていた。黄褐色のタイルを張詰めた、地方には珍しい、アールデコ様式の鉄筋コンクリート造りの図書館であった。
「あっ、新美先生、いらっしゃい」
受付の少年が明るく声を掛けてきた。彼は結社の書生の一人であった。南吉は、彼らにとっても、憧れの存在なのであった。
中学時代から南吉は図書館に足繁く通った。放課後の道場にも運動場にも病弱な彼の居場所はなかった。連れと町に繰り出すだけの小遣いも与えられていなかった。たまに申し訳程度に早く帰宅して、家業を手伝いはしたが、図書館の書棚の間に身を置くことが一番落ち着けたのであった。やがて投稿を思い立った彼は、童話の創作が失われていた自分を満たしてくれるのを感じた。そわそわと開いた雑誌に作品が筆名で掲載されているのを見つけて、密かに喜ぶ南吉がいた。
外語学校時代にも、帰省中の勉強は、大抵ここで済ませていた。結社の方針の一つとして、田舎町には珍しく英書が多数並んでいたし、読み解くための辞書も揃っていたのである。図書館にとっても、横文字の書物を楽しみながら次々と読み進めていく南吉は、嬉しい存在であった。彼

が詩や童話を創作していることを知ると、作品が載った雑誌や関連書籍を揃えてくれた。結社は図書館ができる限りの支援を惜しまなかったのである。もっともそれは、天分を度して人を生かせという社是を忠実に実践しているに過ぎなかった。

「先生、お弟子さんはまだお見えではないですが、閲覧室に上がられますか」

南吉の肉体は疲れ果てていた。彼は、記帳用のガラスペンを手に取った。

（ペンは剣よりも強しというが、この代用ペンのなんと頼りないことだろう。そしてなんと清く澄んでいることだろう）

南吉は、書庫を背にゆっくりと曲階段を昇ると、真鍮の取っ手を回して、瀟洒な造りの扉を開いた。書棚に囲まれた空間に、黒ずんだ机と椅子が整然と並び、歴史をおびた臭いがした。中には誰もいなかった。

南吉は、縦長の窓に面した、いつもの席を選んでそこに座った。その窓から、なだらかに連なる丘陵と刻々と色を変えていく空を眺めながら、思索に耽った。

南吉の新しい童話集の基調色は黄金色に定まった。主な舞台は心の故郷の村である。そして村というものは、心のよい人々が住まねばならぬ。

彼は、理想の村に「花のき村」という名前を付けた。二宮尊徳が陣屋を置いて桜町に理想郷を創ったように、南吉は人の心の中に理想郷を創るのだ。彼の心の村人たちが、むくりむくりと個性豊かに活動しだした。

「ああ、新美先生……」

呼びかけは途中から声にならなかった。軽く手を上げて答えた南吉にも、梅子はしばらく返す言葉が浮かばなかった。扉を開け、そこに見えた彼の横顔は、別人かと思うほど青白くやつれていたのであった。

「ずうっと自転車をこいで参りましたの。こんなに汗がいっぱい……」

梅子は胸のポケットから木綿のハンカチをとり出して額を押さえた。それからブラウスの所々を指先で摘んで引っ張った。南吉は甘酸っぱい健康な体臭を嗅いだような気がした。

今日の梅子は、沈黙が恐ろしかった。いつもの通り書きためてきた習作を包みから取り出す間も、話題を探して話し続けた。が、出てくる言葉は意に反してたどたどしかった。

「わたし、一年生の受け持ちになりましたのよ。ですから毎朝、先生の幼年童話を読み聞かせていますの」

「いや、ご自分の創ったものを話しておあげなさい。われわれ大人の目は、子供の目には敵いません。ですから子供の反応を元にして大人の構想力でまとめ直すのです。僕もそうやって権狐を書きました」

わら半紙の表裏がペン書きの整った文字でびっしりと埋まった習作を手に取って、目を落としたまま語る南吉であった。その頬に残された産毛のような髭を見つけて、梅子は、床屋さんのように温かな泡をいっぱい付けて、優しく優しく剃ってあげたいと思うのだった。

（ああ、そしてできることなら頬ずりをしてあげたい。その頬を思いっ切り抱きしめてあげたい。先生の赤ちゃんを産んでさしあげたい。でも先生は、きちんと距離を保っていらっしゃる。それ

はご病気をもって生きていらっしゃる先生の、周囲の者や、ご自身のお体への、深い深いいたわりなのだ。だから梅子、あなたは堪えなければなりません。そして先生の心の支えになって差し上げるのです」

南吉が梅子の他愛ない習作を読み終えるまでの沈黙は、若い彼女が妄想を逞しくするのに十分な時間であった。そして時折彼女の口からため息が漏れるのだった。

「子供一人一人の思いは、とてもよく著わされていると思います。しかし子供の置かれている現実と子供の進むべき理想が読み取れません。それを描くには大人としての理念が大切なのです」

そう言い切る南吉に、梅子は驚きを感じた。これまで彼の口から、現実とか理想とか理念とかいう言葉がこれほどきっぱりと発せられるのを聞いたことはなかったのだ。彼の言葉は、新鮮さと力強さに溢れていたのだった。

（新美先生は、新しい境地を開かれたのだ。でもそれを、何より大切な健康とひきかえになさったことは、一目見てわかります）

梅子の目に、一つの図式が浮かんできた。それはこれまで教室で何度も黒板に書いては子供らに教えてきた算術の説明図であった。新美先生が創作に打ち込めば打ち込むほど、先生の命は縮まるのだ。そして創作がある量に達したとき、先生の命は「0」になるのだ。できることなら存分に創作に取り組みながら、存分に長生きをしてほしい。

（しかし梅子、あなたに運命が変えられて？）

彼女は眼鏡を外してハンカチで目頭を押さえた。

（言いすぎたな）

と、南吉は思った。無口なくせに、話し始めると夢中になる子供じみた性癖の彼なのであった。

「すみません。全て僕自身に言っている言葉なんです」

梅子は、首を横に振ることしかできなかった。口を開くと言葉より先に嗚咽が漏れ出しそうなのであった。

「僕は、最初の童話集を書き上げたばかりです。僕はその中のお話の一つを、古いものは新しいものに生まれかわって、はじめて役立つということに違いないという言葉で結びました。そして主人公の少年にも、その言葉は半分くらいはわかるような気がしたと。でも少年にわかったことは、古ぼけたごんごろ鐘がぴかぴか光った新しい爆弾になるということだけでした。僕にはそこまでしか書けなかったのです。だから残りの半分を、僕は書かなければならないのです」

梅子は黙ってうなずいた。彼女の胸には、命を懸けても、という南吉の言外の意味が痛いほどわかるのだった。

「僕は、これから、別々の出版社から出す二つの童話集の執筆にかかります。二股をかけるのですから、それぞれにお世話になる東京の先輩方から大顰蹙を買うことでしょう。それより僕の体では、もう無理かもしれません。そういったことは承知の上なのです。そのことを、僕が一番理解しておいてほしいと思う貴女に話したくて、手紙を出したのです」

梅子は息が止まりそうになった。憧れる気持ちが一つの塊となって下腹部に集まるような気がして、しばらく声が出なかった。こんな一瞬が来るかも知れない、来てほしい、でも来たらどう

しようと、寝付く前の布団の中で度々考えもしてきたのだ。だから彼女は嬉しかった。しかしもやはや彼女に何ができるというのだろう。そう思うと再び目に涙が溢れてきた。涙を流しながら梅子はうなずくのだった。

「僕は書きますよ。残りの半分を。新しいものは古いものを生かしてはじめて活動するということを。だから世の中に、古いも新しいも、勝ちも負けもないことを。戦時下の今は、代用品ばかりですが、それはみんなが心や暮らしを懸命に守ろうという証拠です。代用品だからこそ、物質よりも心や暮らしが大切だということがわかるのです。僕が新しい時代に、時代を拓く子供たちに残しておきたいのは、その心や暮らし、そう文化なのです。僕は今の世の中はボタンの掛け違えだと思うのです。人の心や暮らしはいつでも変わらずぴかぴかと光っているのに、どこかでボタンを掛け違えたために、今、喉元で非常事態が起きているのです。だから僕は再び日本がむくりむくりとボタンをかけ直す日のために、本物のぴかぴかのボタンを残しておこうと思うのです」

「ええ、ええ。でもお体だけは……」

これが、やっと声が出せるようになった梅子の言葉だった。それは全くの自家撞着であった。彼の思いを認めることは、彼の命を削る仕事に加担することにほかならないのだ。しかし彼女はこの言葉を口にせざるを得なかった。そして止めどなく涙を流すほかはなかった。

梅子の涙をよそに、南吉は、窓から、ほんとうに平和な、金色の夕暮れをめぐまれた空を見つめていた。その色が徐々に夕闇に変わっていく様を見届けるかのように。

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の揺籃期

松下　魏三

一　出　生

赤堀四郎先生は明治三十三年十月二十日、遠州灘の荒波が磯を洗い、日夜波の音が子守歌のように聞えてくる静岡県小笠郡千濱村成行（なりいけ）（現掛川市千浜）で生れた。今から百五年前である。明治三十三年は西暦で一九〇〇年であるから十九世紀の最後の年であり、あと二か月余りで二十世紀になる大変意義深い年であった。

先生の年齢は西暦の年の下二桁と同じで、逝去された平成四年は西暦一九九二年であったから満九十二歳の天寿を全うされたのである。

明治三十三年頃のわが国は、日清戦争と日露戦争の中間に当たり、日本は殖産興業と軍備の拡張や官営の軍事工場の拡充に力を入れ、財源は日清戦争による賠償金と増税更には内外の公債が当てられていた。

当時のわが国の産業は一次産業が中心で二次産業や三次産業の従事者は少なく、増税は地租に偏っていたので農村は租税の重圧に苦しんでいた。

この時代の千濱村は半農半漁の純朴な農村で海岸線一帯は砂地で、冬期の西風は俗にいう〝遠州の空っ風〟で強く吹くが、日照時間は長く、年間を通して平均十五度程度の温暖な気象条件と適度の降雨量により農業と養蚕業が盛んに行われ、漁業は副業であった。

では、赤堀四郎先生はどのような家庭で生れたのであろうか。

父の名前は秀雄、母の名前はしのといった。四郎が生れた当時父は三十三歳で小笠郡佐倉村（現御前崎市佐倉）の村立佐倉小学校の校長であったが、翌明治三十四年には千濱小学校の校長に就任し、その後大正六年まで十六年間同校の校長の職にあった。

母は同村で近くの篤農家赤堀八太郎氏の長女で心身ともに強健な主婦として多くの人々から尊敬され慕われた。そして七人の子供を産み育てながら家事一切を切り盛りし、自ら進んで農業に従事した賢夫人であった。

父秀雄は教育に専念し毎日多忙であったので家の農作業は母が中心となり、懸命に働いた。

当時赤堀家では四郎より十三歳年上の長男郁太郎が将来の進路について真剣に考えていた頃であったが、父の妹しゅんの夫で義理の叔父に当たる沖卯太郎という人が明治時代では人のうらやむ〝官員様〟と呼ばれる大蔵省専売局の役人として長崎の専売局に転勤しており、明治三十四年正月に秀雄の家を訪れた時「郁太郎どうだ長崎に来ないか」と奨められ、郁太郎は千濱小学校を卒業し、長崎に行き、沖卯太郎の家に寄寓してカトリック教会の東山学院中等部に入学した。東

山学院はキリスト教の経営する学校であったから、郁太郎は次第にキリスト教に深い関心をもつようになり、キリスト教に帰依して洗礼を受けている。

その後叔父卯太郎が長崎専売局から東京の専売局に転勤すると郁太郎は東山学院を退学し、東京に出て横浜税関に勤めたが、京北中学に編入学試験を受けて入学し、明治四十一年に同校を卒業し、更に京都の同志社大学に入学し、神学の研究に専念し、大正二年に同志社大学を卒業した。

その後郁太郎は父秀雄の恩師である中島秀清の娘ふじと結婚したが、郁太郎の宗教哲学に対する研究心は堅固で、大正四年単身で米国に渡り、苦学をしながらペンシルベニア州立大学に入学し、社会学・教育学・宗教学・人種問題等を研究し、更にクローザー神学校研究科に入学し、比較宗教学や応用社会学を研究した。その後大正九年（一九二〇年）に帰国し、間もなく大阪府知事林市蔵に招かれ大阪府主事を命ぜられたが、翌年には石川県に転出し、社会教育課長・図書館長を歴任した。そして昭和四年、当時わが国はようやく社会福祉事業の重要性に着目し、内務省は中央融和事業協会を設立し、郁太郎を常務理事に任命し、社会福祉や同和対策に関する企画運営に当たらせた。その後昭和十年には神戸市の要請により社会福祉事業を推進するための社会部長に就任し、労働問題や社会福祉問題に取り組み、優れた実績を残した。

そして戦時体制となり、激務が続き健康を害したので昭和十六年に退職し、古里の千濱村に帰り余生を送っていたが、昭和三十四年九月に七十三歳で逝去された。

二男の昇は明治二十八年五月に生れ、千濱小学校を卒業し、進学を志したが、学費の支援が無理であったので、当時同志社大学に在学していた兄郁太郎が弟昇を同志社大学の食堂の給仕に採

用してもらうよう奔走し、採用された。昇は働きながら同志社中学に学び、更に京都医学専門学校に入学し、医学を学び卒業後は友人と大阪で開業する準備を進めていた。その後不幸にも病魔におかされたので郷里に帰って静養していたが、大正十四年一月に他界した。療養中の昇は母あての遺書のなかに「貧しい中から物質的には少なくとも精神的には無限の援助と恩愛を注いで下さったことを感謝して居ります。未だ成功の途中にあって何のお慰めもせず早く逝くのは不幸なことでせう。然し私は三十年全く幸福に暮して来ました。精神上には可なりの苦痛があり物質的にはあまり豊とは云へなかったが学業が了りて実地に入ってから死ぬと云ふのは幸でありませう……。死は何人の上にも来るもので私は丁度よい時でせう。喜びに満されて死んでゆきます。母上様どうかなげかず老後を大切に。さよなら永遠に　昇　母上様」と記されていた。

この昇も兄郁太郎の感化で貧困者の医療福祉を志していたのではないかと思われる。後に四郎も大阪府の教育委員長を務め、地域の行政に貢献しているが、このように優れたヒューマニストの長男や次男の感化影響が大きかったのではないかと推測されるのである。

赤堀家では三男の三郎が早逝し、その後生れた妹と五男はまだ幼かったので、母の手伝いは専ら四郎が中心になっていた。

赤堀四郎先生が生れた明治三十三年は十九世紀から二十世紀に移る象徴的な年であった。

奇しくもこの前年の明治三十二年一月には浜松市出身で文化勲章を受賞した高柳健次郎、アメリカの生化学者F・リップマンそして明治三十三年にはイギリスの生化学者H・グレブスが誕生している。翌明治三十四年にはわが国第一二四代の昭和天皇、ノーベル賞を受賞した元首相佐藤

栄作、磐田郡見付（現磐田市見付）出身の元建設大臣で静岡県知事を歴任した竹山祐太郎が生れている。

このように明治三十二年から明治三十四年にかけては後世にその名を留める偉大な人物が誕生した時代である。

これらの事実は偶然に生れたものであろうか。それとも人類の歴史に残る必然的なものであったのだろうか。しばし歴史の流れに感動するばかりである。

二　父の薫育と母の慈愛

父秀雄は明治元年（一八六八年）二月四日に赤堀清吉の長男として成行村で生れた。天保時代の記録によれば秀雄の家は村の鍛冶屋で、土地の人は西鍛冶屋と呼んでいた。父清吉の時代には鍛冶屋をやめて半農半漁の生活であった。秀雄は幼名を弥太郎といい、幼い時から頭脳明晰で周囲の人々から秀才として注目されていた。

当時はまだ学制が確立されていない時代であったので隣村（現菊川市河東〈藤井〉）の幕府時代の漢学者であった中島秀清氏の私塾に学び、明治十年に成行村砂走に薫成学校が創立されると弥太郎はこの学校に通った。明治十四年に薫成学校が廃止され、千濱村成行に遠南学校が設立されると弥太郎は在学中に一時遠南学校の助教を勤めたことがある。

その後明治十六年に静岡師範学校（現静岡大学教育学部）に入学し、村民から大きな期待が寄

せられたといわれている。明治十九年（一八八六年）に卒業すると、日頃から敬慕している恩師の中島秀清を訪ね、先生の秀の一字を貰い受けたいと申し出で秀雄と改名し、教育者としての道に進むことになった。

秀雄は最初磐田郡見付（現磐田市見付）の見付小学校に赴任したが、その後小笠郡佐倉村（現御前崎市佐倉）の佐倉小学校（現浜岡東小学校）に転出し、明治二十六年（一八九三年）には同校の校長に就任し、成行の自宅から佐倉小学校へ通勤した。

日頃から新しがり屋で好奇心の旺盛な秀雄は、当時まだゴムタイヤのついた自転車は大都会にしか見られない時代であったが、ガタガタと音のする鉄製の輪がついている自転車に乗って砂利の田舎道を通勤したので村の人々の噂になった。

また当時は誰も食べたことがなかった赤ナス（現在のトマト）を栽培し、人にも奨めたといわれている。

その後四郎が十歳になった明治四十三年の春の夕方、秀雄が「明日の夜明け前にハレー彗星が一番地球に近づいて、大きく見えるそうだから一緒に早起きして見よう」といったので、何時もより早く寝たが、翌朝午前四時頃にたたき起された。「眠い目をこすりながら家の外に出てみると、空はもうかなり明るくなっている。すると東の方の地平線すれすれに懸っている火の球から上空に向かって黄色く輝いた帯が見えた。上に行くにしたがって幅が広くなり、次第に色が淡くなり、ほぼ中央に達しているのを見て肝をつぶして、唖然として空を見上げていた」と四郎は述懐している。

その後長い歳月が流れて再びこの星が巡ってきた昭和六十年には、四郎は世界に知られた大科学者となり、すでに現役を退き八十六歳の高齢になっていたので兵庫県芦屋市の自宅ではこの星を見ることは出来なかった。しかし、この星を観測するために紀伊半島の潮岬まで出かけていった娘や孫たちから「土産話を聞いて感動した。」といっている。

当時千濱村には新聞が配達されていなかったが、秀雄は新しい知識には強い興味と関心を持っており、折に触れキュリー夫妻のラジウムの発見や池田菊苗博士の味の素（グルタミン酸ソーダ）の発見さらには郷土の出身で高名な鈴木梅太郎博士のオリザニン（ビタミンB_1）の発見の話など、興味深い自然科学に関する話を子供たちにわかりやすく話してくれたので、後に四郎が生化学への道に進む土台になったと語っている。

その後秀雄は、三十四歳で千濱小学校の校長に就任し、郷里の教育に専念することになった。そして大正六年（一九一七年）に退職するまで栄転は固く辞退して地元の小学校の教育と青年の教育に献身的な努力を傾けた。そのため千濱村の教え子はもとより佐倉村の教え子は赤堀秀雄の人徳を慕い、千濱小学校の校地に「赤堀秀雄先生頌徳碑」を建て顕彰している。その篆額には文部大臣従三位勲二等岡田良平（現掛川市出身）。碑文は静岡中学校（現静岡県立静岡高等学校）教諭加茂喜次郎（現菊川市棚草出身）である。そして碑文の最後には「家嗣遠遊於米州費府大学次子京都医学専門学校三子東京中学餘猶幼皆在家他日学成名揚之時立斯碑下諸子之感其奈何也」と記されている。

この碑文のように赤堀秀雄の子女はそれぞれ成長されたのである。秀雄は郷里において子女の

大成を楽しみながら余生を送り、特に四郎が大阪大学教授となり世界各国の学者から注目される優れた業績を残し、活躍していることを誇りに思っていたが、終戦も近い昭和二十年一月七十七歳で永眠された。

母しのは聡明で強健な身体をもち、人のためには労を惜しまず一所懸命に働いたので多くの人々から尊敬された。そして郷土の千濱小学校の校長として教育の充実発展のために走り回っていた夫秀雄のよき伴侶として家計を切り盛りし、自ら農業に従事し一家を支える太陽のような明るい存在であった。

四郎は後年「わが青春」と題する自伝のなかで「母は天折した者もあるが七人の子供を産み育て決して豊かではない小学校教師の家計の切り盛りを引き受け、自らも農業に従事して、さぞ苦労したことであろう。母の事を思うと感謝の念でいっぱいである」と述べている。

父秀雄は職務に熱中し、多忙な毎日を送っていたので農作業は母しのが中心になり、地味で温厚な四郎は母の手助けをするのが常であった。

明治から大正へかけてわが国の最大の輸出品は生糸で外貨を獲得する手段として生糸を生産する養蚕は農村の有力な現金収入源であった。四郎の家でも副業として養蚕を導入し、母方の祖父が村に養蚕を推奨した功労者であったので、祖父の指導と援助により母が一人で養蚕に懸命の努力を傾けたのである。

赤堀家では長男と二男は家を離れて進学しており、三男は早く亡くなっていたので母を助け、農作業を手伝うのは四郎少年ひとりであった。

養蚕は春と秋の二回で、春の蚕は桑を鎌で刈って、ドイツ鋏で切り、葉のついた木を与えるのであるが、蚕が大きくなるとだんだんの台が高くなるので母しのと四郎の作業は大変であった。

五月になると新緑の桑の若葉を一枚ずつ右の人指し指に二センチメートルぐらいの刃のついた鉄の指輪のようなものをはめ、葉の柄には少し葉を残して摘むのが桑の葉を摘む大切な要領であった。この摘み方はビタミンB_1の発見者で有名な郷土の農芸化学者鈴木梅太郎先生の指導によるもので、〝桑の萎縮病〟を予防することが出来るようになって養蚕業の振興に大きな貢献をした。

蚕は次第に成長し食欲も旺盛になるので、桑の葉の量が増えるとともに蚕棚を増設しなければならなくなる。田の字型住宅の農家では台所と寝室以外の部屋はすべて養蚕室に変わり、各部屋は十段ぐらいに仕切った蚕棚で一メートル四方の床に網を敷いて、蚕と一緒に広げ、蚕の糞を捨て、新しい葉を与える所謂〝床がえ〟を何回となく繰り返さなければならず、雨天の時には水分が残っている葉は乾かしてから〝床がえ〟をするという大変な重労働であった。

五月は、このように多忙な毎日が続くのであったが、母はほとんど一睡もしないで働いた。ある日四郎は母が忙しい毎日であることはわかっていたので恐る恐る「明日は遠足の日だから弁当をつくってほしい」と頼んだところ、当日朝早く出かける日の夜明け頃には温かい弁当を作って送り出してくれた。後に四郎は「遠足に出かける朝、母が作ってくれた温かい弁当のうれしさは今でも忘れられない」と語っている。

六月になると蚕は体が透き通ったようになるので床を一枚ずつつくってやる。この床は筵(むしろ)を敷

いて、その上に藁を折ったものをのせる〝山あげ〟という作業であるが、蚕はこの藁を折ったなかに繭をつくるのである。この藁を折り曲げる細かい作業は母が中心になっていた。

蚕は日に日に成長し、成虫になる前には口から絹糸を出して繭をつくり、繭が出来上がる頃には繭の中で蛹となる蚕の一生は生命の不可思議としか思われなかった。

四郎は何時も母と一緒に作業をし、蚕の成長を楽しみながらその一生を観察していた。特に興味をもったのは、蚕が桑の葉を食べ、やがてその一生を終るが、蛹になる前に絹糸という天然の蛋白質を生成する不思議な働きをもっていることであった。何時も母とともに互いに助け合い励まし合って汗を流す勤労の喜びとともに蚕の一生の驚くべき現象についてもっと深く解明してみたいと思う意欲は高まるばかりであった。

小学校の高学年に進むにつれて、父が教育者としてひたむきな情熱と強い信念をもって誠実に行動していることがわかってきた。特に新しい知識や情報をいち早く知り、更に深く探究しようと努力する姿勢は無言のうちに父から子に伝わっていた。

そして互いに助け合い励まし合って農作業に従事してきた母の生きざまが一家を支える太陽のような存在であり、四郎の心の大きな支えになっていた。そして何時も、

父は照り　母は涙の露となり
同じ恵に　育つ撫子

という歌を想い出し、父と母から受けた限りない薫育と慈愛は四郎の人生の大きな基盤となったのである。

三　千浜の海と幼少年時代

遠州灘の波の上に朝日が燦然と照り映え、遙か東北方には悠然と聳え立つ富士山を仰ぎ見ることのできる古里千浜の絶景は格別である。そして日本三大砂丘の一つである南遠大砂丘のなかの千浜砂丘は、北に聳える小笠山と戦国の存亡をかけた高天神城合戦の地とともに自然と歴史が美しく調和している。

夏になると朝霧が立ちこめる砂防林の彼方から村の青年たちが叫ぶ大漁の掛声が谺し、鉢巻き姿の若者が駆け出す活気に満ちた村里は子供たちの心が弾む時である。

そして夕方になり、遙か西の天竜川の河口に近い掛塚の燈台の灯が見える頃になると、西の海に沈む太陽は遠州灘の荒波に反射して金波銀波となり、刻々と水平線の彼方に金色に輝きながら真紅な光を放ち青い海の彼方の雲を茜色に染めて静かに沈んでゆく光景は、素晴しい一幅の絵のようである。

夏から秋にかけて毎年台風が襲来するが、猛烈な風と豪雨と高波によって海水は第一砂丘を越えて第二砂丘の近くまで流れ込み、砂丘と砂丘との間に大小さまざまの水溜り（池）ができ、大きいものは長さが三十～四十メートル・幅は約十メートル・深さは二メートルにも及ぶ池が一夜にして出現するが、晴天が続くと水分は蒸発して数日後には深さも一メートル程度となり、小さい水溜りを含めると数十の水溜りができる。

この水溜りは村の子供にとって絶好の遊び場で、南側の遠州灘の海水と比べると波もなく深さも程々で、安心して泳ぎができる天から贈られたプールであった。

四郎は毎年この時期になると隣近所の友達とともに毎日この天然のプールで水遊びを楽しんでいた。

秋分の日が過ぎる頃には心地よい秋風が吹いて、水溜りの周辺には葦やすすきやえのころぐさなどが茂り、その中をコウロギやバッタやカマキリなどの昆虫が群をなしていた。そして赤トンボや塩辛トンボなどさまざまなトンボが飛び交い、さながら昆虫の天国であった。

子供たちは毎日のようにこの水溜り周辺に集まって、トンボを生け捕りにすることを楽しんでいた。トンボを捕えるために、山から〝うめもどき〟の実をとって来て、ヘタと赤い実との間に母親の長い髪の毛を結びつけたものを一対にして空に高く投げ上げると、トンボは赤い実を餌と間違えて近づき、髪の毛にからまって地上に落下して来るので、水溜りの周辺では好みのトンボを捕えて喜ぶ少年たちの喚声が毎日絶えなかった。

木枯らしが吹いて西風が強くなると砂嵐が発生し、砂丘の上に立っていると頬にあたる砂粒で痛みを感じるようになる。元気のいい子供たちは家から二キロメートル足らずの海岸砂丘まで、寒風をものともせず冬のマラソンをして互いに競い合うのがこの地域の年中行事であった。

多くの子供たちにとって冬の遊びは寒い海に行くよりも家に近いところの雑木林や海岸砂防林のなかでの遊びであった。

特に人気の高いのはトリモチを作って目白を捕えることである。近くに自生している太いモチ

の木から表皮を切り取り、水に数日間浸して腐らせてからその皮を石で叩いていくと粘り気の強い褐色のトリモチが出てくるので、程よく粘りが出てきたトリモチを竹の枝に満遍なく伸ばして着け、雑木林の枝に仕掛け、目白がトリモチに足をとられてもがくのを待つのである。子供たちは思い思いの場所に隠れて、目白に気付かれないようにじーと固唾を呑んで鳥の来るのを待つのはつらいが、仕掛けにかかってばたばたする目白を急いで捕える楽しみは何にも替えることが出来ない醍醐味であった。

そして春になると荒波の遠州灘はうねりが穏やかになり、蕪村の「春の海終日（ひねもす）のたりのたり哉（かな）」の句のように、暖かい春風とともに波も静かに磯辺を洗い、遠くから地曳網の船歌が聞えてくる長閑な海辺も騒々しくなってくる。

四郎は友達とともに漁師たちの中に入って地曳網を引き、網が磯辺に引き上げられ、大小さまざまな魚が飛び跳ねるのを固唾を呑んで見入っていたのである。何時も温和で素直な四郎少年は漁師たちに可愛がられ、水揚げされた漁獲の一部を報酬として戴くことが多かった。

晩年になって、赤堀四郎先生は懐しい幼少年時代の千浜の海を思い出し、「わが青春」と題する自伝の中で『昭和六十二年八月三十日・何十年ぶりかで生まれ育った千浜の地を家族や親せきの人たちの協力で、娘や孫たちと一緒に訪れることができた。残暑はきつかったが、快晴で久々に見る遠州の澄んだ青い空、幼い頃から聞き慣れた潮騒の音・何もかも懐しく、長年の望みが満たされた満足感と懐しさがない交ぜになって心の洗われる思いであった。

特にうれしかったのは同行した中学生の孫に、南遠の砂丘の上から荒波の寄せては返す遠州灘

を見せてやれたことである。黒潮の流れる広大な海原に見入っている孫に、おいの一人が、君のおじいさんは子供のころ毎日のようにこの壮大な海を見て育ったんだよ。だからこの海原のように心の広い人になったんだ』と語っている。

現在のように潮騒橋や天然温泉「シートピア」などの近代的な施設はなかった明治三十年代は海は漁業の場であり、また憩いの場であり、遊びの場でもあった。四郎は時々海に行き、村の大人たちとともに地曳網を曳き、親しい友と将来の夢と希望に胸をときめかせる絶好の場でもあった。そして果てしなく続く広大な遠州灘を眺めながら遙か彼方から聞えてくる潮騒の音は子守歌であり、青春の讃歌であった。

波打ち際から二キロメートルも離れていない四郎の家では何時も波の音が一定の方向から聞えてくるし、波音の高低で明日の天候を予測することが出来た。この天気予報は今も同じで遠州の七不思議の一つである。

四　高山樗牛の名言に魅せられて

四郎が小学校五年生になった五月、学校の遠足で静岡市の久能山に登り、帰りは東側に出て清水港の西南にある竜華寺に参詣した。この寺には高山樗牛（ちょぎゅう）の墓があり、大きな蘇鉄の古木があることで有名であった。

樗牛は明治初年に生れ、三十二歳で天折した思想家であり評論家であった。学生時代に書いた

といわれる小説「滝口入道」は明治の文壇に名を残した処女作で当時の学生には相当強い感化を与えたといわれている。不幸にして胸を病み、竜華寺で静養し、この寺が大変気に入り、自分の墓をこの寺に作るように遺言したといわれている。この墓は石が横に置かれており、その上に「吾人は須（すべ）らく現代を超越せざるべからず」と刻まれている。

この遠足の時引率された先生から教えられた樗牛の墓であったが、小学生の四郎には碑文の意味を理解することは困難であった。しかし子供心に「現代を超越する」という言葉は何となく難しい意味をもっているように思ったが、何かしらとても深い意味があるような感じがして終生忘れることができなかった。その後上京して中学校の上級生になった頃小説「滝口入道」を読んで強い感銘を受けた。この小説は美文調で近代恋愛小説の先駆といわれるもので、後に東北帝国大学（現東北大学）理学部化学科に進学した時、樗牛が仙台の旧制第二高等学校の教師であったことを思い出し、樗牛との不思議な巡り合いに感心した。

四郎は東北帝大（現東北大学）を卒業後十年近く仙台に住んでいたので、休日等を利用して友人と市内を散策した。その頃新緑の青葉城や広瀬川の流れは特に懐しい光景であった。また市の北の方に一本の松があり、東北帝大の学生たちは〝樗牛の瞑想の松〟と呼んでいた。これは短い期間ではあったが樗牛が旧制第二高等学校の教師をしていたので、当時の学生が創作したものではないかとも言われている。

後に大学教授として生化学界の世界的なリーダーとなった赤堀四郎先生はいかにも科学者らしく「〝現代を超越せざるべからず〟という意味は人間の生きがいは物欲を離れて悠久の真理を探

究することであると解釈し、自分に対する励ましの言葉であると受け止めている。」と語っている。

五　郷土の偉人に啓発されて

赤堀家では家族揃って団欒するとき、常に話題の中心になるのは新しい科学の話と郷土の偉人の生い立ちなどであった。父秀雄の時代には近代日本の文化の発展に先駆けて活躍したスケールの大きい人物が特に南遠地域から傑出していたことについて、四郎は何時も感心して聞き入っていた。

まず第一に話題になるのは同郷の土方（ひじかた）村（現掛川市土方）出身で中国人日本留学生の教育に生涯を捧げ、周恩来や魯迅を教えた松本亀次郎と日本の女子医学教育の先駆者として東京女子医科大学を創立した吉岡彌生の生い立ちと活躍であった。そして土方村から十五キロメートルほど北にある倉真村（現掛川市倉真）からは大正五年に文部大臣に就任し、昭和二年に辞任するまで四回文部大臣を歴任した岡田良平とその弟であり、宮内大臣と枢密院議長をつとめた一木喜徳郎の兄弟の少年時代や業績であった。

また遠州灘海岸沿いで四郎の家から四キロメートルほど東の池新田村（現御前崎市池新田）からは旧制第一高等学校（現東京大学）の学生時代に全寮の委員長として記念祭（現在の駒場祭）を発案・実行し、後に京城帝国大学総長と李王職長官を歴任し、法学博士で国際法の権威であった篠田治策とその弟で第三師団の参謀長に就任し後に陸軍中将となり退役後は軍人会館の理事長

として活躍した篠田治助兄弟の立志伝であった。この篠田兄弟の家から約三キロメートル東にある堀野新田村（現牧之原市堀野新田）には篠田兄弟の従兄弟に当たる鈴木梅太郎博士がいた。鈴木梅太郎先生は日本の近代生化学・農芸化学の元祖ともいわれた人で、米糠に含まれるオリザニンの発見者であり、生命を維持するために不可欠のビタミンB_1の発見者として日本はもとより世界の学界に多大な業績を残し、後に文化勲章を受賞された郷土の誇る偉人である。

そして隣の朝比奈村（現御前崎市朝比奈）には日本女性でわが国最初の国際的なプリマドンナとして活躍した三浦環がいた。彼女は東京で生れたが、父は朝比奈村の酒造家であったが、上京し法律家となった柴田猛甫で、母登波（とは）は河城村（現菊川市小沢）の出身であった。

このように南遠州からは日本を代表する逸材が数多く輩出し、近代文化の発展に寄与したばかりではなく国際的な舞台でも素晴しい活躍をしている。これらの人々は明治の中葉に遠州の寒村で育ったが、志を高くもって働きながら私塾で学び、少年同士が互いに励まし合い助け合って勉学に勤（いそ）しんだのである。当時は近代国家の建設に向って国家主義が高まっていた時代であったにもかかわらず、政治や軍事の中心となる権力者がほとんどいないのである。特に掛川市倉真出身の岡田・一木兄弟は文部大臣や枢密院議長という栄職についたが、学者肌の官僚であった。また篠田兄弟と鈴木梅太郎の従兄弟はわが国を代表する学者であり、世界的にその名を知られている人物である。そのほかの人々は教育・科学・芸術などの発展のために尽力した郷土の誇る逸材であり、四郎少年の夢と希望を一層大きく啓発したのである。

極楽楽園

三戸岡道夫

色あざやかな蓮の葉がさざ波のように揺れて、池の彼方までひろがっている。

深草信也は極楽浄土の蓮の掌に身を横たえながら、うつら、うつらと、午睡をとっていた。

その風が頬に心地よい。

風にのって、ほのかな芳香が通りすぎる。その匂いをかぐように信也はものうげに眼をひらいて、あたりを見廻した。

澄みきった池には、白とピンクの色あいが微妙にとけあった大輪の蓮の花が、数かぎりなく夢のように咲いていた。その彼方には、朱塗りの太鼓橋や、白い塔、青甍の宮殿、煙るような森や林がつづいている。

どこからか妙なる楽が流れてきた。

晴れた空には七彩の瑞雲がたなびき、羽衣をひらひらさせながら天女が舞っている。妙なるしらべはその天女の奏でるものなのであろう。

深草信也はそんな光景にうっとりしながら、思いきり手足をのばすと、
「ああ、俺は極楽浄土にいるのだ」
その満足感をゆっくり味わうように、独り言を言った。
しかし、ここは普通の極楽浄土ではない。極楽浄土の中の特別地区、極楽浄土のＶＩＰ地区、いわば極楽の中の極楽ともいうべき極楽で、そのため名前も特別に、
（極楽楽園）
と呼ばれていた。
だからこの極楽楽園へは、誰もが入れるわけではない。日本で毎年死亡した人の中から選ばれて入れるのは、たった十名という、狭き門なのである。
その資格があるのは、政治、経済、学問、芸術、宗教、科学、スポーツと、いずれかの分野で、生前にスケールの大きい功績を残した者に限られていた。
だが最近は極楽楽園への競争も激しくなってきているので、十名では不足気味になっていた。しかしお釈迦さまは頑としてその枠の増加をお認めになろうとはしなかった。
昨年死亡した深草信也はそのきびしい審査に見事合格して、いま蓮の掌にゆっくりと身を任せているのだった。
あたりを見廻すと、極楽楽園入りを許された大勢のエリートたちが、蓮の花影でまどろんだり、池のほとりを散歩しり、木陰で談笑したり、橋の上で歌ったり、草原で踊ったりしているのが見えた。

彼岸が現世でいかなる地位にあり、名誉、名声があろうとも、ここではすべて平等であった。極楽楽園に入った日から、誰もが現世の姿を捨てて一様に観世音菩薩の姿に変わるのである。だから外見からは、誰彼の区別はつかなかった。現世の姿を知っているのは、本人とお釈迦さまに限られていた。だが、いったん、それと現世の名前を言われれば、誰もが直ちに、
（ああ、あのお方……）
と、名前を知っている著名人ばかりであった。
言ってみれば極楽楽園とは、何千人、何万人という観音さまが、はるかな太古から、果てしのない未来まで、悠々と団欒する世界なのである。
深草信也はにわかに喉の渇きをおぼえ、池の水に手をひたした。
池の水は澄みきって、どこまでも明るい光がさし込み、無限に深い池の底が手にとるように見えるのであった。
信也はしばらく指先で水の清冽さをたのしんでいたが、掌にすくうと、一口飲んだ。
が、その時、信也の視線が、見てはいけないと言われている池の底に行きそうになり、あわてて視線を外らした。
深草信也は戦後の日本経済の中で、セントラルグループという巨大な企業グループを一代で築き上げた、成功者中の成功者であった。成功者というよりもむしろ革命児といった方が、本人のお気に召すかもしれない。

しかし、一代といっても、まったく零からスタートしたわけではなく、若干の火種はあった。それは父の深草大蔵からもらった、東京のターミナル駅にある小さなデパートであった。

だが、その貰い方に問題があった。それを説明するには、父の深草大蔵と、弟の肇のことに触れなければならない。

深草大蔵は生前、強盗大蔵と異名をとったほどの遣り手の実業家で、本業は東京のターミナルA駅から郊外へのびるA電鉄の経営者であった。しかし事業が急速に拡大したのは戦後であった。終戦後のどさくさにまぎれて大蔵は、A電鉄沿線一帯の土地、箱根、軽井沢などの厖大な山林、それに東京都心に散在する皇族や、斜陽貴族、財閥の広大な邸などを、安い値段で買いあさり、その上に、ホテル、デパート、遊園地、ゴルフ場、レジャーランドなどを次々と作った、戦後の新興財閥であった。

その深草大蔵は、死に先だって二人の子供に事業を分割した。だが問題なのは、長男の信也へはA駅にあるデパート一つしか与えなかったのに、深草グループの主流をなす鉄道事業をはじめ、厖大な土地、ホテル、レジャー関係の全部は、弟の肇の方に渡してしまったことであった。これは長男を自負していた信也には大打撃であった。

これには信也、肇が、異母兄弟であったこと、そしていずれもが妾腹であったことに原因があった。

深草大蔵の正妻には子供がなかった。そこで好色な大蔵は次々と妾を作り、最初の妾が信也の母であった。

正妻が死ぬと、信也の母が正妻の座についたが、その時にはすでに次の女が新しい妾の座についていた。それが肇の母であった。

大蔵はその他にも多くの女性と関係を持ったが、一番愛したのは肇の母であり、したがって子供の方も、長男の信也よりも弟の肇の方を溺愛した。

そうした複雑な家族関係の中で青春時代をすごした信也は、大いに悩み、傷つき、そして父親に反抗した。そのため父大蔵の気持はますます信也から離れてしまい、そうした悪循環の結果が、信也にはデパート一つという無惨な事業引継ぎになってしまったのであった。

いくら父子が憎みあっていても、こんなになるとは信也は思っていなかった。この時から信也の心は、はっきりと父と弟に訣別した。

しかし大蔵が生きている間は、信也は静かにしていた。だが大蔵が死ぬと、にわかに活動が活発になっていった。

と言っても、信也は急に事を構えるような愚挙はしなかった。なにせ信也の拠り所は三流デパートが一つである。世間に信用がない。事業を拡大するには金が必要であるが、弟の肇がひきいている深草グループの信用力に頼らなくては、銀行から金を借りられないことを、信也は痛いほど知っていたからである。

信也がまず手がけたのはAデパートの拡張であった。田舎デパート、下駄ばきデパートと陰口をたたかれたデパートを、はやく三越、伊勢丹なみの一流デパートにしたかった。

そのため信也はAデパートを拡張に拡張を重ねて売場面積を拡げ、商品を豊富にした。

同時に、東京の都心やターミナル、また地方都市にも積極的に支店をふやしていった。それは従来のデパート経営の常識を破った無鉄砲な拡大策で、半ば人々からあきれられ、半ば賞讃の声を浴びせられながら、ついに全国一位の規模にまでのし上ってしまったのであった。

デパートの次に信也が眼をつけたのが、スーパーマーケットであった。

その頃になると都会の人口がふえはじめて、東京や大阪の郊外に急に家が建ちはじめ、デパートと小売店しかなかった日本の小売業界に、スーパーという新しい商売が拡がりはじめていた。信也はその郊外型スーパーも急ピッチでふやし、これもいつの間にか日本のスーパー王といわれるまでになってしまった。

その拡張に必要な資金は、すべて深草グループの保証で銀行から借りていた。その金額も、三百億、五百億、一千億、二千億と、次第にふくれ上っていき、取引銀行の数もふえていったが、どの銀行もその背後にある深草グループを信用して貸してくれた。

信也はその都度弟の肇のところへ保証の依頼に足を運んだが、しかし事業を拡大する方便だと思えば、弟に頭を下げることぐらい別に苦にはならなかった。

むしろ弟の肇の方が、あまりに急な兄の事業拡大に警戒の眼を向けはじめていた。

(兄はいったいどこまで事業を拡大するのだろうか。そして俺はどこまで借金の保証をしなくてはならないのだろうか)

しかし、信也がデパートやスーパーの範囲内で事業をやっている間は、肇も文句は言えなかった。それは兄弟の間に、信也はデパートとスーパー、肇は鉄道、ホテル、ゴルフ場などのレ

ジャーと、相互に事業分野の協定があったからである。名称も、信也の方は「深草流通グループ」、肇の方は「深草鉄道グループ」と呼んでいた。

しかし二人の間に間もなくヒビの入る時がきた。仕掛けたのはもちろん信也の方からだった。

ある日肇は、信也がホテルの買収をしているというニュースを耳にした。あきらかに協定違反である。問いつめると信也は、

「業務提携をしている地方のデパートが倒産したので、買収することにした。そのデパートがホテルも経営していたので、ホテルもいっしょに買収してくれと頼まれ、やむをえず買収する破目になってしまっただけで、他意はない」

と、ケロリと言ったのである。

だが、これが信也のホテル事業進出への突破口であるのは眼に見えていた。それが証拠に、これをきっかけに信也は、あっち、こっちのホテルに手を伸し、肇との間でホテル事業をめぐる紛争が瀕発するようになった。

そんな頃であった。信也は肇からある通告を受けた。それは、

(兄さんの事業ももう一人前になったのだから、自分の力で銀行から金を借りてほしい。もうこれ以上鉄道グループは流通グループの借金の保証をすることはできない。現在の保証残高をもって、限度とする)

という内容であった。

いくら肇が父の全財産を引継いでいるとはいえ、このままいけば、信也が喰いつぶしてしまう

危険があった。しかし、肇がこう宣言した本当の理由は、信也の金銭感覚の異常さに対する、警戒であった。

異常というよりも、信也には金銭感覚がまるでないといってよかった。子供のように欠如しているのである。ちょうど、有名スターが欲しいものを前後の見境なく買いまくるように、やりたい仕事のアイデアが浮かぶと、資金手当や採算に頓着なく、すぐとびつく性癖があった。金は自然に湧いてくるものと、思っているらしい。

だから深草信也は日本の百貨店王、スーパー王などと言われているが、注ぎこんだ資金量にふさわしい儲けを、本当にあげているのかどうか、怪しかった。肇の眼から見ると、信也の借金は赤字の累積の結果としか思えないのである。もともと信也は芸術家肌であって、事業家の素質はあまりなかった。それなのに協定を破ってまで肇の領分に喰いこんでくるのは、身のほど知らずとしか言いようがない。

そんな借金をいつまでも保証していたのでは、鉄道グループの破滅である。せっかく父から受けついだ厖大な資産も、喰いつぶされてしまう。父が事業のほとんどを弟である肇につがせたのも、本当はこうした信也の性格を見抜いていたからではないかと、最近肇は思うようになった。

そろそろ見切り時と判断した肇は、保証打切りの非常宣言に出たのである。

しかしこの日の来ることを、信也の方でも実は覚悟はしていた。だから保証打切りは、ただちに二人の間の事業の協定は打切りへとエスカレートして、兄弟の縁は完全に切れてしまった。

信也は急に開放されたように、ホテル、ゴルフ場、レジャーランドへと事業の翼を拡げていった。

それと同時に名称も「深草流通グループ」から「セントラルグループ」という新しい名前に変更した。名実ともに深草グループからの独立宣言であった。

こうしてセントラルグループはその規模と華やかなイメージによって、いまや日本経済界で、深草鉄道グループ以上の存在になり、銀行も保証なしで競って金を貸してくれるようになった。

しかし信也の事業拡大欲は、まだそれだけでは満足しなかった。彼の眼はたえず時代の流れを捉え、時代の先を読み、次から次へとアイデアが湧いてくるのだった。

レジャー関係が一巡すると、今度は宅急便に眼を向けた。白鳩マークのコンテナ車を日本国中に疾走させ、怠慢な郵便小包の大半を横取りして、小荷物輸送の革命と絶賛された。

つぎに信也の触手は金融業に伸びていった。正式の銀行の設立は大蔵省が認可しないと出来なかったので、ファイナンス会社、ローン会社、クレジット会社などを手当り次第に設立する積極性は、古色蒼然とした銀行行政への挑戦のように思われた。

それから先は信也自身でも、見当がつかないくらいだった。インテリジェントビルの建設、劇場の創立、高級レストランチェーンの展開、旅行サービス業、映画製作、出版、美術館の設立、通信業への参入、工場跡地を利用したタウン造り、さらに眼を海外へも向けて、海外ホテルの買収、海外リゾート会社との提携など、当るを幸いなぎ倒して、止まるところを知らなかった。

ここまでくると、もう肇との事業協定など何の意味もなくなってしまっていたので、肇の方から文句のつけようもなく、あれよ、あれよと、見守るばかりであった。

こうしてついにセントラルグループは、企業数で二百二十八社、年間の総売上高は五兆八千七百億、従業員数は十二万八千人という巨大グループにまで発展し、戦後日本経済界の奇蹟と言われるまでになってしまった。

信也のこうしたスケールの大きい華麗な活躍を、マスコミが放っておくはずがなかった。毎日、どこかの新聞、雑誌、テレビに信也の顔の出ない日はなく、マスコミはこぞって、

（セントラルグループの時代がきた）

とはやしたてた。新聞記者が、

「深草社長の経営哲学は何ですか」

と質問すると、きまって信也は、

「経営は永久革命です」

と、まるで革命思想家のような答えをした。

信也の企業永久革命論を一口でいえば、企業経営とは果てしない前進で、これでいいという限界はない。一つが終わればまた一つと、新しい分野に次々と挑戦していく、それが永久につづいて終りはない——、要約すればそういったものであったが、それがいったん信也の口から、

企業には創造的破壊が必要だ
現代は産業革命前夜である
シナジー戦略
企業は時代情報の発信基地

衣食住から遊休知美へ
経営共和主義
街は劇場である
社会の中に経営がある
……

などといった、コケオドカシの、新鮮で奇抜な警句が、未来指向の形容詞で飾られて弁じたてられると、それは魔術にかけられたように、たちまち崇高な経営哲学に変身してしまうのだった。それを聞くと新聞記者たちは酔いしれたように、深草信也の経営哲学を新聞紙上で絶讃した。その度に、セントラルグループはその未来志向のイメージを増幅させていくのだった。

こうして信也の事業は止まるところを知らず、まるで宇宙の果てへまで飛んでいきそうで、ここに至って信也は完全に、父や弟を超えたのである。すなわち父と弟への復讐を果したのである。

弟の肇はときどき、

（もし父が生きていたら、兄の事業展開を何というであろうか）

そんな思いにかられることがあった。

（兄の事業は、発展というよりも、たんなる膨張にすぎないのではないか。セントラル風船はどこまで膨らめば気がすむのか。膨らみすぎてパンクしなければいいが）

こうして深草信也は戦後日本の新しい経営者、経営者というより事業創造者として大成功し、それは日本経済ルネッサンスの旗手ともいうべき輝かしさで、人によっては、

（深草信也は経済という素材を使って、芸術の創造をやっているのだ）

という人もいた。

事業の本来の目的は利益であるべきなのに、信也の事業目的が『事業拡大そのもの』にあるという経営永久革命論は、とりもなおさず企業経営というよりも、芸術の概念に近いといえるかもしれなかった。

絵を描き、詩を作り、陶器を作るのと同じように、信也は会社やホテルやデパートを作り、キャンバスに女体のデッサンをするように、日本経済の未来に新しい金融サービス網の夢を描いたのである。

ということは、信也の未来の資質は事業よりも芸術にあり、だから彼が本当にやりたかったのは事業活動ではなく、芸術活動だったのにちがいない。信也にとって経済とは、たんなる芸術活動の素材にすぎなかったのかもしれない。

セントラルグループには一つの謎があった。それは六兆円という巨大な借金をかかえているが、それが果して儲かっているのか、そして六兆円というような借金を返せる当てがあるのか、という疑問であった。

六兆円といえば、利息だけでも毎年二千億円前後払わなくてはならない。だがどう見ても、そんな巨額な利息が払えるほど儲かっている企業集団とは思えないのである。

銀行はそんなに貸して大丈夫なのか。セントラルグループという虚像に貸しているにすぎないのではないか。だが、その謎はあまりに深く大きいので、誰もが解明できなかった。しかしその

謎をとく鍵が、実は信也の『経営永久革命論』の裏側にひそんでいた。それを一口で言えば、

（成功とは何ぞや）

ということになろうか。事業の成功とは継続的に事業が拡大し、儲かることである。しからばどうすれば企業は継続することが出来るのか。

結論的にいえば、それは『金』である。資金である。

ちょうど植物人間や病人に、絶えず血液を注入していれば、いつまでも生きていられるように、企業にも資金を注入しつづけていれば、企業は永久に継続するのである。たとえ瀕死の赤字会社でも、資金繰りがつづいている限りは、倒産することはない。こう考えてくると、

（成功とは要するに、企業に永久に金を注入できる力のことである）

これが信也の『経営永久革命論』をよく透視すると、その内側にひそんでいる信也の秘密哲学なのであった。

では、いつまで資金を注入すればよいのか。はっきり言えば、信也が死ぬまでよい。信也がセントラルグループ経営の大成功者であるためには、死の時までセントラルグループは繁栄していなくてはならないが、死んでしまえば、もはや信也とは関係ないからである。あとは野となれ、山となれである。

だが、信也が生きている限りは金が必要である。だから信也は金を借りつづけるために、いつも必死の努力、工夫をしていた。

グループ傘下のどの会社も無理やり黒字決算にし、株主配当も二割、三割、いや会社によっては五割という高配当もやった。その結果、裏に厖大な赤字が累積したが、それはすべてAデバートにしわ寄せして、カムフラージュしていた。その秘密を守るためにAデバートの株式のすべてを信也とその一族とで握り、株式は上場しなかった。株式を上場して公開すれば、手品のカラクリがばれてしまうからである。

平行して信也はセントラルグループのイメージアップに努力した。マスコミには精力的に顔を出して、セントラルグループの未来性、発展性、創造性をPRし、その演出に惑わされて、どの銀行も競って貸出しに応じた。

だから弟の肇が考えているように、信也は決して金銭感覚に欠けている人間ではなかったのである。欠けているどころか、鋭すぎるほど鋭い人間だった。

新しい事業計画が頭に浮かぶと、専門家の試算が出る前に、信也の頭の中には、だれよりもはやく必要資金量と収益見通しが出来上がっていた。

しかし金のことばかり考えていたのでは、足枷となって、前へ進めない。仕事に情熱を燃すには、逆に金銭感覚があってはならないのである。ゴッホは金のことを考えながら、キャンバスに向ったであろうか。採算を念頭においてハイネは作詩し、モーツアルトは作曲し、ルードウイッヒは、城を築いたであろうか。否である。

信也の事業もそれと同じだった。信也はわざと金銭を無視しているのである。金銭感覚がないふりをしているにすぎない。六兆円の借金は、返済するメドもなかったし、また返済するつもりもなかった。

毎年、極楽楽園への入園合格者が発表されるのは、大晦日の夜ときまっていた。

暗闇に除夜の鐘が鳴りはじめると、にわかに西方浄土の方角が紫色に輝きはじめ、そこへ入園者の名前が黄金色に現れるのである。

なにせ一年間に十名という狭き門である。今年の入園合格者は誰であろうかと、日本国中の人々がそのベストテンの名前を見ようと、荘厳な夜空を見上げるのだった。

かつて父の深草大蔵が死んだ年、信也が願ったのは、父の名前がその夜空に出ないことだった。強盗大蔵とまで渾名された父であるから、まちがって極楽楽園に入ることはないとは思うものの、夜空で確認するまでは信也は落着かなかった。そして父の名前がないのを見届けた信也は、その夜は安堵で熟睡できた。

そして年が明けた新春の信也の初夢は、極楽楽園に入れなかった父が、地獄の血の池でのたうちまわっている姿であった。信也は胸の溜飲が下る気がした。

その父の大蔵が死んで四十年後に信也はこの世を去った。が幸い信也は日本経済の革命児という名声によって、その年のベストテンに選ばれ、見事極楽楽園に入ることができたのである。

だが信也には一つ心配があった。弟の肇が極楽楽園へ入ってこないかということだった。

(弟も父といっしょに地獄の底でのたうちまわっていればいいのだ)

幸にして、まだ肇が極楽楽園へ入ったというニュースは聞いていない。信也は朝夕、

（お釈迦さま、どうか弟を極楽楽園へお呼びになりませんように）

と合掌して祈るのを忘れなかった。

信也はゆっくりと手を伸すと、蓮池の澄みきった水に手をひたした。

池は晴れた空の下で澄みに澄み、どこまでも透明で、底の底まではっきり見えた。その遠い底には、現世が見えるはずであった。しかし信也は、

（見ては、いけない）

と、視線を水底からそらした。極楽楽園には、（決して蓮池の底から現世を見てはならない）という掟があるからだった。

しかし、見てはいけないと言われると、かえって見たくなる。だが見たら最後、その瞬間に、見た者の上になにか大異変が起るのである。しかしその大異変とは何なのか、それは誰も知らなかった。

信也が水中で指をひらひら泳がせていると、困ったことに、

（蓮池の底を覗いてみたい）

という思いが、突き上げてくるのだった。

六兆円の借金はどうなったであろうか、それが気にかかった。深草信也というリーダーを失ったセントラルグループは、その後どうなったのか。倒産してしまったのではあるまいか。その様子を知りたいという気持を、信也は押えることができなくなってしまった。

（お釈迦さまに見つからなければ大丈夫だろう）

今日はお釈迦さまは森の奥の宮殿で休息されているはずである。

信也はその隙をねらい、ついに禁断の池の底を覗いてしまった。

蓮池の底から見た現世は一変していた。

信也が死んでから、地球の上ではすでに百年がすぎていた。昨年死んだとばかり思っていたのに、地球の上ではその百倍の歳月が流れていたのである。その百年の間に、日本は一変していた。東京にはニューヨーク以上の摩天楼が立ち並んでいた。百年前、東京を国際情報都市にしようという構想があったが、それが本当に実現していた。信也の死を境にして、世界の情報集中化が急速に進んだのにちがいない。かつて、ニューヨーク、ロンドン、東京の三大都市が世界の三拠点であったが、今はすべてが東京に集中されて、東京が世界の中心になっていた。

新宿にしかなかった高層ビル群が、いまは丸の内にも、日本橋にも、渋谷にも、池袋にも、赤坂、六本木、品川にも林立し、東京全体があたかも空にむかって無数の触手をのばしている爬虫類の背中のように見えた。

セントラルグループはどうなっているであろうか。六兆円の借金にあえぐ企業グループは、時代の激変にもみくちゃになり、すでに倒産してしまったのではないか。ところが驚いたことに、それが逆になっていたのである。

百年にわたる一大変革の中で、ホテルも、デパートも、土地も、ゴルフ場も、すべてが値上りし、そのためセントラルグループは隆々と繁栄し、いまや押しも押されぬ世界のセントラル王国

にまでのし上ってしまっているではないか。
六兆円の借金もすっかり解消されていた。土地が金に化けたのである。これは驚きである。これ以上の驚きはない。
よく眼をこらして見ると、セントラルグループの本社前に建てられた信也の銅像の前で、いま記念の百年祭が盛大に行われているではないか。
信也は大いに満足した。

蓮池の底は現世とつながると同時に、地獄にもつながっていた。
信也はついでに地獄の方も覗いてみた。するとまっ赤な血の池地獄の中で、父の大蔵と弟の肇がのたうちまわって苦しんでいるのが見えるではないか。弟も極楽楽園へは入れずに、地獄に落ちていたのである。信也は思わず、
「ざまを見ろ」
と叫んだ。
異変が起きたのはその時であった。蓮池の底から、にわかに、
ゴーッ
という地鳴りのような音が聞えたかと思うと、うす気味の悪い風が吹き上げてきた。
それまで晴れ上っていた東京の空に、にわかに黒雲がひろがってきたかと思うと、大粒の雨が降り出した。

あっという間に視界はまっ暗になり、風が吹き、雨脚が狂ったようになり、稲妻が光り、雷鳴が轟き、大暴風雨となった。東京湾の海水が野獣のように荒れ狂いはじめたかと思うと、荒波は大津波のようにふくれ上がって、東京のビル群をめがけて押し寄せた。するとセントラルグループのホテルも、デパートも、インテリジェントビル、ゴルフ場、レジャーランドも、あっという間に大激流に呑みこまれてしまい、信也の銅像も濁流の中に没してしまった。
「ああ、失くなってしまうわい」
さきほどまで中天に太陽のように輝いていたセントラル王国は、一瞬にして洪水に呑みこまれ、海底に没してしまったのである。
「こんなことって、あっていいのかよう」
信也はだだっ子のように泣きわめいたが、どうすることもできなかった。
だが、異変はそれだけではすまなかった。血の池地獄にもにわかに荒波が立ちはじめ、激しい血の雨が降りはじめた。その暴風雨の血の池で、父と弟はますます苦しみ、もがいていた。
そのとき恐ろしい竜巻が起こった。血の池の中心から原爆キノコのような水柱が湧き上ったかと思うと、それは恐ろしい勢いで池の血を吸い上げ、極楽楽園へむかって伸び上ってきた。
だが信也が腰を抜かしたのは、事もあろうに、父と弟がその竜巻に吸い上げられて、この極楽楽園へ上ってきてしまったことだった。
「そんな馬鹿な！」
叫んでみても、現に父も弟も信也の眼の前で、蓮の葉の上にちょこんと座っているではないか。

そしてうれしそうに笑っている。
「なんでなんだよう……！」
信也が泣きわめいて、叫んだ瞬間であった。
次の異変が起った。
信也の座っていた蓮の葉の茎が、
ポキッ
大きな音をたてて折れた。
そして、信也はそのままっ逆さまに、血の池地獄にむかって墜落してしまった。

極楽楽園の中は、そんな珍異変の起ったことなど知らぬげに、大輪の蓮の花が夢のように咲き、妙なる音楽が流れ、空には七彩の瑞雲がたなびいて羽衣が舞い、ほのぼのとした極楽浄土が拡がっていた。

あとがき

同人雑誌「まんじ」は今回で百号を迎えることになり、それを記念して本記念号を発行することになった。

まんじは昭和五十六年に創刊され、年四回、規則正しく発行されてきたから、二十五年間継続されているわけである。

まんじは最初、純文芸誌としてスタートしたが、その後、順次ジャンルがひろがり、現在は、現代小説、時代小説、伝記、ノンフィクション、詩、漢詩、短歌、俳句、エッセイ、論文など多方面にわたり、綜合誌の方へむかっている。

なお、このまんじにはその源流ともいうべき、「作家群」という文芸同人誌があった。昭和二十七年の創刊であるが、途中で休刊となったため、そのメンバーの有志が昭和五十六年に「まんじ」をスタートさせたのである（このいきさつについては「まんじ」九十七号の大和禎人の論考を参照されたい）。

こう考えると「まんじ」はその源流からでは、実に約半世紀にわたる歳月を生き抜いてきたわけであり、まさに、

（持続は力なり）

を実証したのである。

「量より質」という言葉があるが、「質より量」もまた真である。量もそのボリュームがふえると、そのエネルギーは質に転化するのである。これからも「まんじ」は百五十号、二百号を目ざして、時間という量に挑戦しようではないか。

平成十八年五月一日

三戸岡道夫

まんじ100号記念

平成十八年五月一日（非売）

発行人　三戸岡道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）
（事務局）郵便番号二一三―〇〇五六
横浜市港北区新吉田町二四七七―三
太田善朗方
電話・FAX　〇四五（五四四）五九四七
（郵便振替口座）No.〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入名　まんじ

（印刷製本）株式会社　栄光出版社
郵便番号　一四〇―〇〇〇二
東京都品川区東品川一―三七―五
電　話（〇三）三四七一―一二三五
FAX（〇三）三四七一―一二三七

表紙の絵について

題名「慈悲」田寺怜葦（たでられい）画

読み方の復活……連続

まんじ

No. 101

2006.8.1

まんじ第百一号　目次

あばれ天竜―金原明善の一生―……三戸岡道夫…4
正義の旗を掲げて（一）……千坂精一…15
漢詩潮騒録（四十七）……鯨游海…30
将軍義政と愛妾……島津隆子…36
源平交代思想（一）……宅見勝弘…48
針の穴を通った駱駝（五）……鍋屋次郎…51
小幡洋次郎氏（上武洋次郎氏）のこと……吉田忠雄…62
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…72
金沢からまたひとつ「昔」が消えた……伊治哲…75
還暦からの考古学（六）玉の話（その5）……中山喬央…80
過激な夫婦と品格……新井宏…94

古い物・遠い夢　第十一章　茶道具三昧……忠内正之…100
「本郷界隈を歩く」（司馬雑感八）……山田嘉久…106
風説・天城の鬼火……堀内永代…116
詩集「ろかいゆ」より　その二……松下壽男…132
ハート・トウ・ハート第四話ア・ラブ・シュプリーム（中編）……松下壽男…133
短歌　行雲流水（十三）……石黒修身…143
短歌三十首　一兵として……曽根竣作…150
アッツ草幻想……大和禎人…154
空風（二）……太田精一…156
編集後記……編集子…166

表紙……田寺怜葦

カット……宮城正彦

鈴木國男

清水トム

あばれ天龍

―金原明善の一生―

三戸岡道夫

プロローグ

天龍川は、遠く信州諏訪湖に源を発して太平洋の遠州灘まで、静岡県の西部（遠州地方）を縦断するが、その雄大な流れから『あばれ天龍』と昔から呼ばれていた。が、それはその雄姿もさることながら、その大洪水の災害が、人々から恐れられていたからでもあった。

したがって中世から、天龍川流域の治水、治山は、地域住民の宿願であった。

明治時代に、その天龍川の治水治山に一生を捧げた人間がいた。

金原明善である。

金原明善は天保三年に生まれて大正十二年に没と、九十二歳の長寿を生きたが、その一世紀になんなんとする生涯を、ひたすら天龍川の治水治山と、それに関連する社会公共事業に、生き抜いたのである。

すなわち若い頃の金原明善は、青年名主として郷土のためにつくし、明治維新になってからの壮年期は、巨万の私財を投げうって、天龍川の治水、治山事業に挺身した。

また、治水治山事業をサポートするために、金融、交通、製材などの企業も経営として、企業経営の倫理性の範を示し、並行して、出獄人保護、教育、育英などの、社会事業、文化事業などにも貢献した。

さらに晩年には、老躯に鞭打って、全国的な講演行脚に東奔西走し、社会指導にも打ち込んだ。

金原明善の事業の二大眼目は、天龍川の治水と、天龍川上流の治山であるが、明治元年の天龍川の大洪水が、三十七歳の金原明善を、天龍川の洪水対策に立ち上がらせたのである。

しかし金原明善の洪水対策は、たんに洪水で破損した堤防を修繕する程度のものではなかった。天龍川の流れをまっすぐに直したり、堤防全体を頑丈に作り直したり、また天龍川の流れを途中から浜名湖へ流入させようとする大規模な構想であったので、その実現は技術的にも資金的にも困難をきわめた。

そこで明善は金原家の全財産を治水事業に供出して、その推進をはかった。その無私の精神、社会奉仕の精神は、二宮金次郎の農村復興の報徳精神に通ずるものがある。

やがて金原明善は、治水は河川ばかりやっていたのでは駄目だ、川は山から流れてくるのだから、山が禿山では洪水は治まらない、洪水を防ぐには山に木を植えなくてはならないと考え、植林事業にも進むのである。

自然環境の保護とか、山の緑化運動とか、言うはやさしいが、実行は至難である。しかも金原明善の志す植林は、天龍川の治水と同じように小手先のものではなく、本質的、大規模なものだった。

そのため金原明善は天龍川の治水のときと同じように、植林事業にも全財産を投入し、治水以上の努力を重ねた。そして天龍川上流の瀬尻地域（現在の浜松市竜山）を中心に、三百万本もの植林をし、その生涯を植林事業に捧げたのである。

金原明善こそ、その生涯を社会公共のために捧げた、近代の偉人、巨人である。

第一章　出生と青年時代

（一）

金原明善は、天保三年（一八三二）六月七日に、遠州国長上群安間村（現在の静岡県浜松市安間町）に生まれた。

幼名を弥一郎といった。のちに久平、また久右衛門と称し、さらに明治六年に明善と改めたが、本著においてはわかりやすくするため、すべて明善で統一する。明善は、

父は久平、

母は志賀、

の長男である。父の久平が二十五歳、母の志賀が二十歳のときに生まれた。

しかし母の志賀は健康を害し、明善を出産した後は、病床にある日が多かった。

明善の生れた金原家は、安間村の大地主であった。金原家の遠祖は藤原鎌足に仕えた武人だと伝えられているが、後に民間に入り、鎌倉時代になると、遠州に移って金原姓を名乗ったという。

金原家では代々当主が久右衛門を名乗った。明善が生まれた時は、六代目久右衛門を名乗る祖父が働き盛りの五十歳で、当主をつとめ、安間村の名主をつとめていた。祖父は孫明善の誕生を非常によろこんだ。祖母も同様非常によろこび、病身の母親に代わって、何くれとなく孫明善の世話をし、養育した。

このような家庭環境の中で、明善は家族の愛を一身に集め、何不自由なく、すくすくと育っていった。

父の久平は、経営、理財の才能にすぐれ、勤倹力行の人であった。その才能を領主の松平正孝にみとめられて、給人格に取り立てられていた。

久平は次々と土地を買い集めて、約七十町歩の大地主にまでなった。そして農業のほかに、酒造りと質屋をも営み、番頭丁稚七人、作男三人、下女四人、仲居一人という、奉公人を使用するまでになった。

久平の仕事振りをみると、非常な勤勉家であった。朝は、まだ夜の明けないうちに起きて天気を見定め、雨ならば雨、晴ならば晴で、その日の仕事の用意をした。重要な用事のときは袴を着て外出したが、帰宅すればすぐ普段着に着がえて、臼を挽くなどの家事にはげんだ。夜は一番あとから寝た。家の者がそれぞれ枕につくのを待って、家の中の全部の部屋をはじめ、土蔵、納屋、竈の下まで見廻ってから、床に入るのが例であった。また夏の暑いときでも障子を閉めて、その中に正座して、一家出納の帳簿の整理をするのが常であった。

(二)

明善は幼い時から、おとなしい少年であった。温厚で、思慮深く、勤勉な少年であった。今に残っているエピソードとしては、

寺小屋で先生から、「なぜ本を読むのか」と質問されたとき、「習ったことを実行するためです」と答えたとか、

寺小屋へ通う途中、毎日同じように竹を削っている凧屋を見て、忍耐ということを学んだという話、

金原家には大勢の下男や下女がいたが、自分の身の廻りのことは自分の手で行った、

また時間を無駄にすることなく、つねに家事の手助けをした、

などという話しである。

よく偉人の少年時代にある、暴力をふるう餓鬼大将であったとか、四、五歳で論語をすらすら読んだというような話などは、伝っていない。すなわち決して人目につく腕白小僧でも、神童でもなく、普通の少年であったが、先天的にすぐれた素質と意思の力の強い、悧発な少年であった。

少年明善が通った寺小屋は、浜松宿近くの竜禅寺村（現在の浜松市竜禅寺町）にある、地蔵院の貫志和尚の開いている寺小屋であった。竜禅寺村は安間村からは約六キロメートルの距離にあったから、四、五歳の子供が通うのは無理であった。だから明善が通いはじめたのは七、八歳頃からで、それから四、五年、勉強したものと思われる。

明善はここで読書や習字を習ったが、物覚えもよく、学んだことを実行しようという気持が強かった。明善の、勤倹、力行、誠実、謙譲の性格は、この少年時代に形成されたものと思われる。

しかし、このようにすくすくと育った明善は、十四歳のとき突然の不幸に見舞われた。それは生死の境をさまようような重病に、襲われたのである。

明善は健康な少年であった。それが十四歳の年の九月十五日、掛塚にある継祖母の実家からお祭りに招かれた。そこで四、五日滞在して、二十日頃帰宅すると、高熱を出して寝こんでしまったのである。

その後熱は下らず、食物も喉を通らず、生死の境を一カ月ほどさまよったが、やっと危機を脱して、快方に少しずつむかった。

しかし翌年の三月になっても、なお歩行が困難で、頭髪は抜け、精神状態も放心したようになってしまった。医者も何の病気であるのか、診断を下すことができなかった。明善は薬と灸と按摩にたよらねばならぬ病身者となってしまったのである。

そのような状態で明善は、さらに三、四年の間、療養生活を余儀なくされたが、しかしやっと十九歳のときに、どうやら健康を回復することが出来て、家業の手伝いができるようになった。

明善は後日この病気のことを回顧して、

(わたしはこの長い病気から脱却したとき、『これでわたしの人生の一つが終ったのだ』と思った。病気が全快してからは、次の別の新しい人生がやってきたのだ。だから新しい人生には、もう欲も要らなければ、何も望みはない。これからの人生には、財産などを持つ必要はないと思った)

と語っている。

青春時代の大病は、感受性の強い年頃であるから、人生観や価値感に、大きな影響を及すものである。この時の病気が、明善の人生の中の、一つの転機となったことはたしかである。

十四歳から十九歳までの、五年もの長い大病は、一時は明善を不治の病と、絶望の底に突き落したことであろう。だが明善はその絶望の底から、人生というものは自分の力だけではどうにもならないという達観と、私欲を捨ててこそ真の人生があるのだという、無私の精神、利他の精神に目ざめたのであった。

この時の価値観の転換が、後年の、私有財産をすべて投げ出しての社会奉仕活動（天龍川の治水や植林事業）の原動力となり、明善の一生を社会奉仕活動へと方向づけたのである。

（三）

明善がこの大病の療養中に、母の志賀は死亡した。嘉永二年（一八四九）七月二十六日で、明善が十八歳のときであった。

母の志賀は長男の明善を生んだ後、とかく健康がすぐれず、病床にある日が多かったが、その後、長女の加賀を天保十年に、二男の鷲二を天保十四年に、さらに三男の庄三郎（早世）を生んだ。しかしこの四人の子供の出産が、もともと虚弱な志賀には重すぎる負担となり、ついに三十七歳の若さで死去してしまったのである。

とくに、三男の庄三郎を生んだ後は病気が重くなり、医者から再起不能を告げられたのであろう。すでに死を覚悟した志賀は、ある日、明善を枕許へ呼んで、えっ、と驚くようなことを告げたのである。

「わたしの命はもう、そんなに長くはないと思います。だから、わたしの生きている間に、大切なことを決めておきたいと思います。それは、お前のこれからのお母さんと、お前のお嫁さんのことですよ」

死んでいく人間が、これからの自分の後釜になる後妻と、息子の嫁、のことを決めておくというのである。普通あり得る話ではない。十八歳の明善は驚いて、

「えっ、次のお母さんと、わたしのお嫁さん…？」

「そうです。わたしが死んだ後、まだ子供たちは小さいから、新しいお母さんがいなくては困ります」

「それはいったい誰なのですか」

「新しいお母さんは、わたしの従姉妹のお沢さんですよ。お沢さんはとてもいい人ですから、わたしが推薦するのです。お沢さんを新しいお母さんとして、孝行をつくしてください」

志賀が死んだら、志賀の従姉妹にあたる沢が後妻にくることは、すでに夫の久平との間で決っているようで、志賀ははっきりとそう告げた。

従姉妹の沢はすでに結婚していたが、夫運が悪く、女の子を一人生んだが、離婚し、その女の子をつれて実家に帰っていた。その沢に、志賀は目をつけたのであった。沢にしてみれば、願ってもない話であった。

沢の生んだ女の子の名前は玉城といったが、志賀はその玉城にいたく同情して、

「お前のお嫁さんは、玉城さんがいいと思います。ぜひ、そうしてください」

と、明善の将来の嫁に、その玉城を決めたのである。

この件についても志賀と久平との間で話はついていた。それに、この時すでに沢は玉城をつれて金原家へ家事の手伝いに来ていたから、明善は玉城を知っていた。

すなわち、金原家では久平と明善の親子が、沢と玉城の親子と、それぞれ結婚することになるわけであったが、十八歳の明善にとって否応はない。明善は、

「はい、わかりました」

と頭を下げた。

間もなく志賀が死ぬと、その遺言通りに沢が後妻として金原家へ入った。

そして明善も母志賀の遺言を守って、六年後の安政二年になると玉城と結婚した。明善が二十四歳、玉城が十七歳のときであった。

明善は後日、

「母が死後の継母を決めてくだされたことは、子を深く愛する心から起きたことで、世に珍しい母である」

と、母志賀の賢明さを、よく感謝して話していた。

明善が明治時代の人でありながら、女性関係に複雑なところがなく、一夫一婦をもって一貫したことは、注目に値する。

明善の言葉に、

（英雄色を好むという語は面白くない。色を好んだために失敗した英雄がたくさんいたではないか）

というのがあるが、英雄であった明善の言葉として、含蓄深いものがある。

第二章　父久平のこと

静岡県は物産の豊かな国であるが、とくに天龍川下流の平野部が占める地位は重要である。

江戸時代の遠州平野は、天龍川の水害と、遠州灘の強風による塩害はあったが、気候は温暖で、地味は肥沃であり、位置は東海道の中央部にあって交通の便はよく、自然条件に恵まれていた。また天龍川は遠州と信州との物資輸送路となり、その河口には産物の積出港の掛塚港があって、はやくから商品経済が発展した。

天保年間に、時の浜松城主の水野越前守忠邦が、有名な農学者の大蔵永常を招いたのも、当時すでにこの地方一帯に展開していた商業的農業を、藩の財政政策上、より計画的に推進しようという意図があったからであろう。

幕末における浜松藩領内の産物をみれば、第一位が木綿、第二位が砂糖、第三位が畳表、第四位が絹糸、第五位がお茶、椎茸、などであり、当時この地方における商品経済が、いかに高度の発達をしていたかがわかる。

明善の金原家がある安間村は、この浜松藩の東に隣接した村で、村としては特にこれといった特産物のない、平凡な農村であった。しかし、そのように商品経済の発

達した遠州平野の中央にある村であったから、ちょっとまわりに眼をくばり、まわりに手を伸せば、経済活動のチャンスはいくらでもあった。

明善の父の久平は、そういった経済活動に積極的な人間であった。

そうした安間村の中で、金原家は、安間村の田畑のほとんどを所有し、また安間村の他にも田畑を所有する大地主であった。同時に名主の役をつとめる名家であった。そして農業だけでなく、金融業や、その他の商業にも手を拡げて、年代を重ねて資産の蓄積をはかってきた。

その代々受けついできた資産を、さらに大きくふやしたのは、明善の父の久平だった。

久平は頭のきれる、気性のはげしい人であったが、同時に商売上手の人であった。明善も多分に、この父の性格を受けついでいた。

金原家は代々農業のほかに、金融や農産物の売買などで、資産をふやしてきたが、久平はその資金を上手に運用し、財力を大きくのばした。久平は質屋や酒造業を経営し、さらに横浜で遠江屋という貿易商までも経営した。

また、当時の重要な肥料であった干鰯を江戸へ送ったり、材木をさかんに積み出したりして、遠州平野の豊富な物産を、手広く扱っていた。

すなわち、久平は商機を見るのが敏だったのである。明善も若い頃から、この父の手助けをし、父の最もよい助手として働きながら、農業に商業に、その経営の才を身につけていったのである。

とくに久平が力を入れたのは、金融業であった。金原家は代々、金融すなわち金貸しを行ってきたが、久平のときになって、これを営業として、いっそう手広く、安全に行うように、質屋の看板をあげた。しかし質屋といっても、個人相手の生活資金を貸すのではなく、主として大口の商業資金の貸し付けが目的であった。

だから借りる者も、浜松宿の商人をはじめ、近村の在郷商人、富農、地主などのほかに、浜松藩の武家、寺社、あるいは村役人などの支配階級の者にも及んでいた。したがって質物も、土地、家屋などの不動産をはじめ、衣類、家具、具足、刀剣、骨董品など、千差萬別であった。面白いのは、多くの村が、鎮守の幟や、祭礼用の大太鼓まで質物に入れていることだった。

要するに、現代の観念からいえば、質屋というよりも、私設の銀行といった方がいいのかもしれなかった。

この経営の責任者はもちろん父の久平であるが、しかし若い頃の明善がその経営に大いに腕を振ったことも当然であった。

遠州平野は、木綿、砂糖、畳表、絹糸、茶などを主要

物産とする、商品経済の発達した地域であったから、遠州地方は金原家の金融業にとって、有力な経済的な地盤であった。

明治初期において、遠州地方の銀行業類似の会社数が、全国的にも有数なものであったことからみても、幕末における遠州地方の事業資金需要の多かったことが推測できる。金原家は明治初期に、その銀行業類似会社の先駆をなすものだったのである。

後に述べるが、明善が明治十八年（一八八五）に東京日本橋に、東里為替店を設立して、金原銀行にまで発展させることができたのは、明善が若い頃から父の下で家業の金融業に従事していたからであった。したがって、金融業というものが、経済界でいかに重要で、かつ有利であるかを若い頃からよく認識しており、かつ、金融経営に自信を持っていたからであった。

また久平は、金融業のほかに、酒造業にも手を拡げた。しかし、これは久平が新たに酒造業を始めたのではなくて、酒造株の質流れによって、その経営を引き受けたのである。酒造家に金を貸し、金が返せなくなったので、その経営を譲り受けたのである。

したがって酒造りの工場も、金原家の屋敷の中ではなく、近くの国吉村にあった。

金融業、酒造業のほかにも、久平は商機をつかむのが敏で、つねに江戸へ材木を積出しており、そのため明善を深川の材木商へ集金に行かせたりもした。

また公用で江戸へ行ったとき、江戸の肥料商をまわって、干鰯の相場を調べているが、それは遠州灘の干鰯を江戸方面へ送っていたからであろう。また、その帰りには横浜に寄って、開港間もない横浜の景気を観察し、その結果、横浜に遠江屋という貿易商を開いたりしており、遠州商人の積極性をよく現わしている。

このように久平は、遠州の豊富な特産物の中で有利な商品とみれば、手持の豊富な資金を使って、好機を逃さず、売買を行った。そして、その商取引をするのに、明善は久平にとってよい相談相手であり、また、久平の有能な代理人だった。

したがって金原家の身分は農家であったが、その経済的性格はむしろ商人であったということができる。明善が明治時代に実業家として活動した素地は、この父久平とともに仕事をした、幕末の青年時代に培かわれていたのであった。

久平はこのように大地主として、また商人として、理財の才を振う一方、地方行政においても、代官として、また村の名主として、活動した。

遠州地方の安間村は旗本松平正孝の知行地であった。しかし松平家は関東各地にも知行地を持っていたので、遠州地方へは自分の代官を置かず、名主の金原久平に遠

州知行所の代官を任せていたのである。松平家では代官金原久平にたいする信頼は非常に厚かった。それは財産難に苦しむ松平家を支えるのに、商売を手広く営む久平の力が、大きかったからである。

また久平は、名主の役目も、安間村と隣村の茅場村の二ヵ所を兼務していた。しかし幕末動乱期のため、公務は多忙であった。そのため、安政二年（一八五五）には、明善にその役（名主役）を譲った。明善が二十四歳のときであった。

第三章　松平家の家政整理

明善は安政二年二月に二十四歳で結婚し、その年の五月に、安間村の名主役をつとめることになったが、二年後の安政四年（一八五七）に、領主松平家の家政整理のために、父の久平の代理として江戸へ行った。二十六歳のときである。こは明善にとって、はじめて対外的に彼の財政手腕を示す機会といってよく、明善の生涯における記念すべき出来事であった。

金原家のある安間村は、もとは幕府の直轄領であったが、弘化二年（一八四五）に旗本松平正孝の知行地となった。

松平家の知行は表高七千石（込高を加えた実高は八千二百二石）であったが、その地行所は、三河、遠州、安房、上総、上野、五カ国の、二十九カ村に散在していた。

このうち、遠州における知行は、村数で十三カ村、石高では役二千石余であって、他の国々に比し、村数、石高は最も多く、一番まとまっていた。この中に安間村（百八十三石）が含まれていた。

このように松平家は七千石の大旗本であったが、知行所が五カ国に散在したため、陣屋を置かず、各国の知行所の有力な百姓を代官に任じて、それぞれの地方行政を取り扱わせていた。そして必要に応じて松平家の用人が、知行所へ出張するという制度をとっていた。遠州の代官としては、

市野村の大村竜左衛門
安間村の金原久平
安間新田の安間左市

の三人が指名されていた。

すなわち明善の父の久平は、嘉永元年（一八四八）に松平家の代官に指命されていたのである。

なお久平はすでに安間村の名主役をもつとめていたから、久平は安間村の名主と、松平家の代官とを兼務していたわけである。

そして明善は、この安間村の名主役の方を、安政二年（一八五五）に、父の久平から引き継いだのである。

さて江戸時代はこの頃になると、大名であれ旗本であれ、すべて財政は火の車で、財政的に困窮していた。松平家も旗本の中では七千石と高禄でありながら、例外でなく、やはり財政が破綻していた。

とくに嘉永三年（一八五〇）に天竜川の大洪水が発生したために、水害による多額の減税を行って、収入減になったことが財政逼迫に拍車をかけた。そのため毎年の赤字が慢性化し、多額の年貢の先納が恒常化し、また江戸本邸における借金も多額にのぼって、なんとか財政再建をしなくてはならない急迫した状態に立ちいたっていた。

そこで松平家では、その財政再建案を立てるために、安政四年（一八五七）に、各地行所の代官を江戸に招集した。

この時、二十六歳の明善が、父久平の代理として江戸へ行ったのである。明善にとって、生れてはじめての江戸行きであった。

なお、松平家の江戸招集は一回では終らずに、翌年（安政五年）にも、もう一度行われている。

この時の江戸出張について、一つの逸話がある。江戸に集った各地の代官たちは、財政再建の仕事はそっちのけで、伝馬町の宿にごろごろしながら、夜になると岡場所通いにうつつをぬかしていた。そのとき岡場所に明善を誘ったが、明善は断乎としてそれを断わり、ただ一人で松平家の財政改善の事務を処理したというのである。そして暇があれば、書家であり、儒者である中沢雷城のところに通って、勉強をしていた。

さて、松平家の財政再建案として立てられた計画は、どのような内容のものであったのであろうか。

その頃の大名旗本の財政再建策定としては、関東を中心に行われた二宮金次郎の報徳仕法が有名である。報徳仕法は農村の復興によって経済力を増強し、その上に立って大名旗本財政の建て直しをしようとする前向きで、積極的なものであった。

しかし今回の松平家の財政再建案はそのような前向きのものでなく、松平家の債務弁済計画や、生活費の節約などを中心とした、その場しのぎの、消極的なものにすぎなかった。

しかし七千石の旗本松平家の厖大な財政赤字が、単なる生活費の節約などで解決できるわけがない。生活費の節約を口実に、その実、寄付金を募集し、それによって借財を返済しようとしたものであった。

したがって江戸への各知行所への代官の招集は、財政再建案の協議などではなくて、松平家への寄付金の募集や、松平家が負っている債務の免除などを、説得するものだった。

その代わりに代官たちに、「苗字帯刀」の認可とか、御紋服の下賜などという、恩典が与えられたのである。すなわち恩典引換えの、資金協力にすぎなかったのである。

明善もこのような協議のために、父の代理としてわざわざ江戸まで出向いたわけであるが、金原家としても相当の寄付金を上納せざるを得なかった。そしてその見返りとして、父の久平は紋付羽織を頂戴し、明善は中小姓待遇を与えられ、形だけの武士の地位を与えられた。

明善にとってはじめての江戸行きといっても、この程度の内容のものだったので、明善にとってあまり働き甲斐のある仕事というわけではなかった。

しかし父の久平が明善を代理として江戸へ行かせたのは、江戸での協議の内容や結論が、すでに久平には予測できたので、わざわざ久平自身が出向かなくても、代理でもよかったことと、そして明善に生まれてはじめての江戸経験をさせようとの、親心であったと思われる。

そのお陰で明善は、尊王佐幕、攘夷開国と対立する、騒然たる江戸の情勢を肌身で感ずることが出来て、いい人生経験になったのである。

（つづく）

正義の旗を掲げて（一）

千坂精一

一

北国にようやく春がやってきた。

磐梯山にはまだ名残の雪が斑にへばり付いていたが、麓の盆地では地肌が拡がり、梅、桃、桜、菜の花などがつぎつぎに開花して、百花繚乱の季節を迎えた。

豪雪の消えるのを待ち侘びていた會津郷では、半年あまり中断していた道や橋づくりがあちこちで忙しくはじめられ、槌音高く活気づいた。

會津九十二万石はもと蒲生飛騨守氏郷の領地であったが、氏郷が死ぬと、僅か十三歳の嫡子藤三郎秀行に奥羽を睨む要衝の地を任せるのを心許なく思った秀吉が、秀行を宇都宮十九万石に移封すると、そのあとへ越後の上杉中納言景勝を転封させて奥羽探題に据えたのである。

景勝は、蒲生の遺領に佐渡三郡十四万石と出羽三郡十四万石の旧領を安堵されて百二十万石の大身になった。

これは、徳川家康、毛利輝元に次ぐ石高であった。

このことは、秀吉が天正十一年（一五八三）四月に越前の柴田勝家を攻めるにあたって同盟を求め、越中出兵を依頼してきたときに、景勝が即座に応じて誓書を交わし、妹婿上條義春の三男彌三郎を人質に差し出して二心なきことを示して以来の信頼感のあらわれであった。

秀吉は、このとき景勝に、新領のうち陸奥伊達、信夫、出羽長井の三郡三十万石を上杉家の重臣直江山城守兼續に与えるよう特命した。

これまで秀吉が陪臣を大名に取り立てた例はない。

また、豊臣政権下における三十万石以上の大名は、徳川家康、毛利輝元、上杉景勝、前田利家、伊達政宗、宇喜多秀家、島津忠恒、佐竹義宣、小早川秀秋、鍋島直茂の僅か十名だけであり、子飼いの直臣でさえも加藤清正

が二十五万石、石田三成、福島正則、小西行長、増田長盛が二十万石、黒田長政が十八万石であったから、兼続に与えられた処遇がいかに破格であったかが判る。

秀吉は、陪臣の兼続をなぜそこまで厚遇したのか。

それについては、こんな話がある。

天正十三年（一五八五）八月、秀吉が越中の佐々成政を攻めたとき、要請に応じた景勝は八千の軍勢を率いて越中に攻め入り、境城、宮崎城を陥として兵馬をすすめた。

西からは先鋒の前田利家軍が急進撃してきていた。

上杉軍と前田軍に挟撃された成政は、富山城に立て籠もったまま身動きできなくなったところへ秀吉の率いる十万の大軍が到着し包囲したので、観念した成政は頭髪を剃って法体となり、恭順の意を表して降服した。

秀吉は、礪波、射水、婦負三郡を没収して前田利長に与え、新川郡二十万石だけを安堵して成政を赦した。

佐々成政の処分をおえた秀吉は、ある日側近の石田三成、木村秀俊と僅か三十八人の雑兵を伴れただけでふらりと越後勝山城下（糸魚川市青海）にきて、城将須賀修理亮盛能に使者を送り、景勝に面会を求めた。

秀吉自身の突然の来訪に愕ろいた須賀盛能は、一行を城内に迎え入れると、いそぎ不動山城（糸魚川市越）に留まっていた景勝の許へ使者を走らせた。

景勝は、ただちに兼続、藤田信吉、泉澤河内守、安田筑前守ら十二人と雑兵六十人を伴れて勝山城へ駆けつけた。

景勝を迎えた須賀は、急き込んで、

「まさしく関白殿下に相違ござりませぬ。飛んで火に入る夏の虫、お屋形様が天下を奪う好機到来にござりまする。お屋形様、この機を逃さず殿下をお討ちなされませ」

と進言した。

景勝は、無言のまま不快な表情をうかべた。

ひかえていた兼続が、須賀のまえにすすみ出て、

「修理殿、たわけたことを申すでない。お屋形様と殿下は柴田攻め以来の盟友ぞ。なればこそ殿下は僅かの人数でこの越後へ入られたのじゃ。殿下の信頼は裏切れぬ。修理殿は上杉の正義をなんと心得ておられるか」

と叱責した。

須賀は、そんな兼続にかわまず、なおも景勝に、

「いま、この場で殿下をお討ちなさらねば、悔いを千載にのこしまする。お屋形様、なにとぞご決断を――」

そう執拗に迫った。

景勝は、むっとして語気荒く、

「いうな、修理」

一括して、謀叛の唆しを退けた。

景勝は、さっそく秀吉に謁し、一刻あまりにわたって会談した。秀吉は、景勝に豊臣政権への協力を重ねて要請し、景勝はしかと約束した。

このとき、同席を許されたのは兼続と三成の二人だけであった。ともに二十六歳の智慧者同士はこの初対面で意気投合し、以後肝胆相照らす仲になった。

兼続は、この会談のあとで秀吉から、

「山城殿、中納言殿とともに京へ参られよ」

と言われたことを忠実にまもって、翌年六月景勝に供奉して上洛し、秀吉に拝謁して景勝が正四位上左近衛権少将に叙任されると、兼続も従五位に叙せられた。

こうした景勝・兼続主従の律儀な態度が全面的に信頼されて、奥羽探題という要職に据えられたのである。

また、兼続の大抜擢も、秀吉自身が兼続を高く評価していたからではあろうが、勝山以来親交をつづけてきている三成からの推挙もおおいに与かっていたに違いない。

その年の秋、景勝は正室於菊（武田勝頼の妹）を人質として京へ送ったが、そのとき兼続は、妻のおせんを供奉させて伏見留守居役千坂對馬守景親に預けた。

景勝が、転封のため三年間参覲免除で伏見を発ち、會津若松城に入ったのは慶長三年（一五九八）三月十九日で、このとき景勝四十四歳、兼続三十九歳であった。

その一箇月後に秀吉は病に倒れ、薬石の効もなくついに八月十八日に伏見城で六十三歳の生涯を閉じた。

景勝は、越後春日山から養父謙信の遺骸を會津へ移して、新領国の整備にとりかかったばかりのところであったが、伏見の千坂景親から秀吉逝去の急報を受けると、いっさいの政務を放擲して慌ただしく上洛した。

統率者を喪った豊臣政権は、互解の危機にあった。

五奉行は秀吉の直臣だから謀叛の気遣いはなかったが、五大老はいずれも天下取りを狙った戦国大名であった。なかでも徳川家康と毛利輝元は油断がならなかった。

五大老たちは、それぞれに思惑を秘めて秀吉亡きあとの天下人を狙っていたが、しかし、誰一人として実力行使で勝ち取る乱世に戻すことをのぞんではいなかった。

そこで彼らは、豊臣政権を裏切らないという誓紙をつくって連判し、たがいに牽制し合った。

だが、所詮姑息な手段はすぐ反古になった。

最初に連判した誓紙を無視したのは家康であった。

家康は、大名同士の私婚を禁じた『太閤法度』を破って、親族の水野忠重の娘を加藤清正の子忠廣に、一族の松平康之の娘を福島正則の子正勝に、おなじく一族の小笠原秀政の娘を蜂須賀家政の子至鎮にそれぞれ嫁がせ、わが子松平忠輝に伊達政宗の娘を娶るなどして諸大名との婚姻を結び、しだいにその勢力を拡げていった。

また、諸大名と懇親を交わすことを慎むと誓約しておきながら、これも公然と破った。

見兼ねた石田三成らの奉行が、かわるがわる使者を派遣して詰問したが、家康は惚けて取り合わなかった。

それでも、五大老筆頭の前田利家が睨みをきかせているうちはまだよかった。その利家が翌年閏三月三日に死去すると、家康の専横は目立ち、遠慮会釈なくなった。もはや豊臣政権の崩壊は、誰の眼にも明らかになった。

（ゆるせぬ）

兼續は、家康の眼にあまる専横ぶりに心底腹を立てた。

（この事態を、不識院様ならどうなされる）

不識院殿は謙信の諡号である。

謙信は、生来実直な人で、皇室や幕府を敬い、忠誠心が旺盛であった。あくまでも正義を貫き、筋目を重んじた。自分は皇室や幕府の臣下であるという立場である。だから謙信は、反逆者や侵略者を赦さず、断乎として戦った。弱きを援け強きを挫くのが身上であった。

謙信は、つねづね、

「勇士の操は生死の道を決す。仁義信を具足せざれば、采配をもって兵を動かし難し」

といっていた。

そして、いざ出陣に際しては、

「聖戦じゃ、義戦じゃ」

と叫んだ野太い声が、いまも兼續の耳朶に残っている。

幼時から謙信の近習として仕えていた兼續には、その薫陶が骨の髄まで染み込んでいた。

豊臣家の将来を憂慮する景勝は、謙信以来の義を重んずる正義感から、邪心を抱く家康を赦さず、

（有事に備えねばならぬ）

と決意して、放置したままになっている新領會津の国づくりを理由に大老たちの許しを得ると、大坂城の秀頼に暇乞いして、八月上旬帰国の途についた。

二

會津へ戻った景勝は、さっそく防衛態勢を推進した。まず、南山、背炙越、信夫、米澤、仙道、津川、越後の七口を修復して軍用路を整備することからはじめ、橋普請をおこない、牢人たちや武具兵糧を掻き集めた。

そして、若松城は手狭で籠城に適さないと判断すると、若松の北西神指原に新城を計画し、築城を急がせた。

こうした景勝の行動を見咎めた隣国越後の堀秀治と、家康の家臣鳥居元忠の娘婿出羽角館の戸澤政盛は、

「會津中納言に謀叛の兆しあり」

と家康に注進した。

そのことは、伏見の千坂景親からの急使で知らされた。

しかし、その後家康からはなんの咎めもなく、年があらたまって慶長五年（一六〇〇）の正月を迎えた。

景勝は、秀頼への年賀挨拶使者として信夫郡大森城将藤田能登守信吉を大坂城へ遣わした。

その藤田信吉が帰国しての報告によると、毛利輝元、宇喜多秀家、前田利長の三大老が国許へ帰っているのをよいことに、家康ひとり大坂城に君臨してあたかも天下人のごとくに振る舞い、西の丸大広間では諸侯がこぞって家康に年賀のあいつさをしていた、ということであった。

そのあとで藤田信吉は、

「大坂では、會津謀叛の噂が高まっておりまする。天下の実権はすでに内府様の手中にあるやにうかがえますれば、このまま放置しておいてはお家の一大事になりまする。内府様のお咎めあるまえにお屋形様がご上洛あそばされて、申し開きをなされるのがご賢明と心得ます る」

と諭すように言上した。

景勝が、

「たとえ内府がどう詮議いたそうとも、儂には亡き太閤殿下への忠誠心のほかは、一片たりとも私心などない」

そういって取り合わないので、

「黙して誤解を受けるよりは、すすんでご存念を披瀝なされたほうが得策でござりましょう」

藤田信吉はなおも執拗に勧めた。

同席していた直江兼續は、権力者に阿ねて屈服しろと進言している藤田の卑屈な態度に腹が立って我慢ならず、

「あいや、能登殿」

藤田信吉を制して、膝をすすめた。

「内府も大老なら、お屋形様もおなじ大老でござる。同格の内府になにゆえ頭を下げねばならぬのじゃ。たとえ内府が疑心を抱いてどう振る舞おうとも、正義はいずれにあるか諸侯はとくと承知いたしておろう。上洛して内府の膝下に屈するなどは笑止千万、断じて出来ぬ」

毅然としてそう一蹴し、藤田信吉と対立した。

それ以来、藤田信吉は家中の諸将から、

「能登殿は、もと武田の家臣から当家へ鞍替えいたしたした者ゆえ、こたびはまた内府に通じたのであろう」

そう陰口を叩かれて、蔑視された。

藤田信吉の父康邦は関東管領山内上杉氏の重鎮であったが、上杉氏が北條氏に逐われると氏康に降り、三子氏邦を養子に迎えて隠居したので、信吉は武蔵寄居の居城鉢形城を出て上野沼田の金剛院に身を潜めた。

沼田は東上野の要衝で、上杉、武田、北條が死闘を繰り返したが、武田の圧力が加わると信吉は武田に属し、勝頼が滅びると、こんどは上杉景勝の家臣になり、越後侍中に加えられて佐渡攻めに抜群の手柄を立てた。

景勝は、會津へ移った機会に信吉を譜代同様に扱い、越後との国境を固める津川城将に抜擢した。

こうして、形振り構わず大樹を渡り歩いて乱世を彷徨い、生き延びてきた信吉であったから信用がなかった。

二月に入って間もなく、伏見の千坂から急使が届き、「堀秀治の家老堀監物が、徳川の出頭人榊原康政を頼って公式に当家を告訴した」
ことを報せてきた。
堀秀治は、越前から越後へ移封されたのであるが、景勝が越後を去るとき年貢米を全部持ち去ったことを恨んでの意趣返しだろうといわれているが、真実のところは隣国會津の不穏な動きが脅威であったに違いない。
これによって、家康との抗争が間もなく表面化するであろうことを覚悟した景勝は、謙信の忌日に当たる三月十三日に二十三回忌の法要を執り行うことを布告した。
その前日に異変が起こった。藤田信吉と栗田刑部少輔國時が一族郎党を引き連れて出奔したのである。
景勝は動じなかったが、兼續は捨て置けぬとばかり、「能登と刑部は内府を頼るに相違ござりませぬ。士気を鼓舞する好機なれば両名を血祭りに上げましょう」
そう言上して、景勝の許可を得ると、ただちに岩井備中守信能の騎馬隊に全員誅殺を命じて急追させた。
夕刻近くになって戻ってきた岩井の報告によると、討手の騎馬隊は南山口の坂の途中で追い付いたが、栗田の郎党たちに阻まれてようやく刑部らは討ち取ったものの、藤田信吉は取り逃がしてしまったということであった。
報告を受けた景勝は、岩井の失敗を咎めなかった。
(討ち漏らしたのは残念じゃが、軍議のまえに遁走したのがせめてものさいわいであった)
兼續は、ひそかに胸を撫でおろした。
しかし、藤田信吉が家康の許にいたれば會津謀叛は表面化し、風雲急を告げることになるのは明白であった。
兼續は、家康と雌雄を決するとき近しと臍を固めた。
翌日の大法要のあとで景勝は、参集した諸将に太閤殿下の遺児秀頼を蔑ろにし、恰も天下人のごとく振る舞う家康打倒の決意を披瀝して、迎え撃つ軍議をひらいた。
席上、伏見から帰国した千坂景親が、
「恐れながらお屋形様、それがしは大坂の様子をとくと見聞いたしておりますれば、一言申し上げまする」
と申し出て、誼を通じている徳川出頭人たちの言動を取り混ぜ、大坂の事情を具に述べて計画の無謀を論し、懸命に押し留めたが、兼續がなかに割って入り、「お屋形様は、たとえ内府であろうとも、太閤殿下のご意志に背く者は捨て置けぬ思し召しでござる」
そう景勝を庇っておいからみずからの意見を開陳し、「對馬殿、内府を討つは正義でござるぞ」
と極め付けた。
千坂景親は、分別工夫あって弁才見事だったが、正義に生きる景勝と兼續には百言も虚しいと悟ってか、小さく頷くと黙して退がり、軍議が終わると早々に、
「大坂の動きが気懸かりゆえ、これより伏見へ戻ります」
と暇乞いして、その日に慌ただしく旅立っていった。
景勝は、小男で顔は大きく眼光鋭かった。
生来無口でおよそ笑顔を見せたことがなく、身じろぎひとつしない容姿は精悍そのもので、近寄り難い威厳があった。
兼續は、幼時から景勝と苦楽をともにしてきていたので、寡黙な主君の意中が手に取るように解っていた。
景勝はいま、家康との抗争回避を胸に秘めて長途の旅をいそぎ、伏見へ戻ればたちまち窮地に陥るであろう老臣千坂景親に思いを馳せているに違いなかった。
「千坂殿は、もと鎌倉管領家の血縁ゆえ、誰よりも上杉家の安泰を希うものでござりますれば、たとえ当家がいかなる立場に追い込まれましょうとも、かならずや智慮才覚をもってお家のために尽くしてくれましょう」
兼續は、先刻の軍議のあとで、千坂が人知れず仏間に入り、不識院殿眞光謙信法印大阿闍梨の位牌に合掌している背後姿を垣間見て、只管主家の加護を恃み存続に賭ける決意を誓っているに違いない、と感じ入っていた。
「お屋形様、歳月は人を待たずと申しまする。おこころのままご存分におやりなされませ」
二人は、顔を見合わせて、互いの意中を確認し合った。

三

四月十三日。
その日、兼續は神指原の築城現場に出向いていた。いよいよ家康との抗争が焦眉の急に迫ってきたので、工事関係者を叱咤激励するためにやってきたのである。
兼續が進捗状況を検分したあと、今後の工程の打ち合わせをしているところへ、若松城から早馬がきた。
家康からの使者が到着したというのである。
兼續は、
(ようやく参ったか)
待っていたぞとばかり立ち上がった。
家康の使者がくることについては、すでに伏見の千坂景親や石田三成から詳細な報らせが届いていた。
さきに出奔した藤田信吉から會津の様子を逐一聴取した家康は、大老と奉行を招集して相談したという。
その席上で家康が、暗に上杉征討を仄めかしたので、宇喜多秀家、増田長盛、長束正家らが、
「讒訴を信じて征討を向けるのは早計でござる。まず中納言殿の真意を確かめるのが道理でござろう」
と諭したことから、家康はやむなく家人の百人組頭伊奈圖書助と川村長門守を使者に選んで近々會津へ差し向けることにした、ということであった。
翌日、景勝、兼續主従は大広間で使者たちと面会した。
正使伊奈圖書助は、ずばり會津謀叛の噂を確かめた。

「伝聞によれば、諸口を切り開き、城塁を築き、そのうえ近国に兵を出して隣境を侵し、近国の郷民たちに金銀を与えて一揆を起こさせているということでござるが、これらは明らかに陰謀でござる。このことについて中納言様にご存念がござらねば、ご上洛なされてわが主君内府に霊社の起訴文を差し出され、申し開きなされよ」

伊奈の口調は、真偽を質すというものではなく、詰問使であることを露呈する居丈高な糾弾調であった。

兼續は、主君が罪人扱いされるのに我慢ならず、

「あいや、しばらく。會津の仕置きはこの山城が任せられておりますれば、主君中納言に代わってお答え申す」

そう居直ると割って入り、伊奈圖書助と対峙した。

「陰謀とは迷惑千万。道や橋づくりは亡き太閤殿下のご遺命によるものであり、新城は昨今思い付いたことではなく、この若松城では手狭ゆえ入国のおりに計画いたしたことをいまようやく手懸けているまでのこと。また、近国の牢人や郷民たちに金銀を与えて一揆を起こさせているなどはまったく与かり知らぬことでござる」

疚しいことなど微塵もないことを堂々と主張した。

「しかし、隣国を侵したることは確かな証拠がござるぞ」

伊奈圖書助は凄んだ。

「それは伊達とのことを申されているのでござろう。あれはわれらが會津へ入って間もなくでござった。郷民の落ち着かぬ隙を狙って伊達政宗が兵を出し領国福嶋を侵して民家に放火したので、狼藉を咎めて退散させたまでのこと。非は伊達にござる」

「なれば、なにゆえわが主君から太閤殿下の御廟所に詣でられよとのたびたびの上洛要請を延引しておられまするか。疚しいことがおありだからではござらぬのか」

「一昨年三月国替えにより會津入りして間もなく太閤殿下ご不例になり、八月に薨去あそばされて伏見へ赴いたまま一年あまりを過ごし、昨年九月にようやく帰国いたしたばかりでござれば、国づくりが急務でいまは叶わねども、落着のうえはかならず上洛いたして幼君秀頼公に拝謁いたし内府様にもご挨拶いたしましょう。内府様がわれらの動向に疑念をいだいて討つと仰せられるならば是非もござらぬ。このこと確と内府様にお伝え下されい」

兼續は、毅然として上杉の存念を披瀝した。

兼續に堂々と弁じ立てられて伊奈圖書助は取り付く島がなく、その矛先を沈黙している景勝に向けて、

「中納言様、いかが」

と迫った。

促された景勝は、徐ろに重い口をひらくと、

「山城が申すとおり、儂にはいささかも逆意はない」

そう強い口調で揆ねつけた。

それは、まったく妥協の余地のない拒絶であった。

伊奈は怯んで詰問に窮し、兼續の主張を景勝の意向と汲み、家康に伝えるとして、その日の会談は終わった。

伊奈圖書助は、このとき別に兼續へ宛てた一通の書状を持参していた。それは、以前伏見屋敷にいたころ交誼を結んだ相國寺塔頭豊光寺の僧承兌からのものであった。

終始毅然たる態度で振る舞い、ときには惚けて鉾先を躱し、伊奈圖書助に付け入る隙を与えず会談を終えた兼續は、別間へ引き籠もると、承兌からの書状を開いた。

だが、読みはじめた兼續は意外な内容に眉を顰めた。

熊々急用の書状をもって申し達す。

景勝卿の上洛が遅滞していることについて、内府様はご不審に思っておられる。上方に伝わる雑説はどうも穏やかではない。このことは伊奈圖書助と川村長門守が使者の口上として伝えていることと思う。神指原に新城を築いたり、越後口に道や橋を造っているそうだが、中納言殿が分別を違えようとなされたら貴殿が諫めて留まらせていさえすれば内府様のご不審を招くようなことはなかったのだ。このたびのことはすべて貴殿の不注意から起きたことである。

前置きのあとの箇条書は伊奈発言とおなじであった。

兼續は、読み終えて腹を立てた。これは一見忠告めいてはいるが、あきらかに書かされた詰問状であった。

承兌よりも卑劣な手段を弄する家康が許せなかった。

兼續は、書院に出向いて景勝に書状を提示すると、

「これは、承兌長老からそれがしへのものではなく、内府からお屋形様へ突きつけてきた詰問状と心得まする」

判断を仰ぐべくそう つけ加えた。

「まさしくそうじゃ。老獪な内府のやりそうなことよ」

「返書をせねばなりませぬが、いかがいたしましょう」

「山城に任せる。存分に書くがよい」

「畏まりました。そういたしまする」

兼續は、別間で文机に向かうと、悠然と墨を磨った。

そして、こちらも承兌宛てのかたちはとるが家康本人に突き付けるべく、感情の赴くままに筆を走らせた。

尊書は昨十三日に到着し、具に拝見仕った。

そう述べておいて筆を止めると、承兌からの書状を手に取って詰問の箇条毎に反論を認めていった。

一、当国のことにつきいろいろ雑説があって内府様がご不審の由であるが、もっともである。京や伏見の出来事でさえいろいろと取沙汰されている時世だから、いわんや遠国の景勝は若輩でもあり、似合いの雑説であると存ずる。

一、景勝の上洛延引について不審に思われているよう

であるが、一昨年越後から国替えになって程なく上洛し、去年九月に帰国したばかりのところを、また今年になって上洛せよと言われる。そんなことを繰り返していたのでは国づくりをする暇がない。とりわけ当国は雪国であり十月から三月まではなにごとも思いのままにならないのだ。これは当国のことをよく知っている者に聴いてもらえば判ることだ。景勝の上洛延引を逆心ありと極め付けられることは、はなはだ心外である。

一、景勝に別心がなければ誓書を差し出せとのことであるが、去年以来数通出させた起請文はすべて反古になっている由、役に立たない誓書など何通出させても仕方があるまい。

一、太閤様以来景勝は律儀者として通っている。これはいまも変わりはない。世上の朝変暮化する者たちとは違う。

一、景勝は、心中毛頭別心がないのに、讒人を糾明せずに景勝を逆心と思し召されるのは心外である。景勝と讒者とを引き合わせて是非を尋ねないのは内府様の片贔屓である。

一、北国の肥前殿（前田利長）のことは内府様の思し召しどおりで、御威光浅からぬ事と存ずる。

一、増田長盛と大谷刑部については委細承ったとおり珍重させてもらうが、榊原康政は景勝のことを内府様に取り次いだ者である。たとえ景勝の逆心が歴然としていてもいちおう景勝に意見をするのが侍の筋目であり内府様の為にもなることである。その分別を致さず讒人堀監物の取り次ぎをしている。そういう者が内府様の忠臣といえようか。忠臣というのは分別があるかないかで決まるものだ。

一、第一に雑説ゆえに上洛を延引しているということについての申し開きは右のとおりである。

一、第二に武具を集めたことについてであるが、泰平の世であるから上方の武士たちは今焼や炭取り瓢などの道具を所持しているようであるが、田舎武士は無骨であるから風流が分からず古来どおり鎗、鉄砲、弓箭などの道具を仕度する。それもその国々の風俗と思えば不審はない。景勝は武士として不似合いなことをしているわけではない。

一、第三に道や橋を造ったのは街道往還の便利を考えてやっただけのことである。越後に在国していたときも道や橋を拵えた。それはいまも残っている。堀監物も知っているはずである。当国へ移ってから上野、下野、岩城、相馬、伊達領、最上領との諸道をつくったが、他国からはなにも言われないのに堀監物だけが道づくりを恐れて異を唱えるのは弓箭を知らぬ無分別者と思し召されてよろしい。もし景勝に逆心があるとするならば、會津攻めに都合のいいように態々諸道を拵えるであろうか。

一、景勝は、今年の三月が謙信の年忌であったから、法要をすませて夏にはお見舞いに上洛するつもりであった。そこへ増田長盛と大谷刑部から使者があり、内府様から逆心の疑いがあるから申し開きに上洛せよとの思し召しであるという。昨日まで逆心を企てていた者でも知らぬ顔で上洛し、あるいは徳川家と縁を結び、新しい知行をもらって顧みず不足人の交りをしている。そういう当世風は景勝の身上に不相応である。いわれのない別心の汚名を着せられて上洛したのでは景勝の律儀がとおらぬ。とりわけて景勝家中の藤田能登守と申す者が三月半ばに当国を出奔して上洛いたしいろいろなことを讒訴したことも知っている。それをそのまま信じた内府様が正しいか、あるいは上洛を拒んでいる景勝がもっともであるかは世上の沙汰を待とうではないか。

一、なんども繰り返すが、景勝には毛頭別心はないのである。このまま會津にいても、太閤様の遺命に背き、数通の起請文を反古にし、御幼少の秀頼様を裏切ってこちらから手出しをしては天下の主になっても悪人の名を受け末代までの恥辱になるだけであるからそんことは決してしない。安心されていてよい。ただし、讒人の申し立てを受け入れて内府様が事を構えるならば是非もない。誓言も堅約ももはやそれまでである。

一、近隣諸国の無分別者たちから景勝逆心の雑説が伝えられているようだが、耳を貸すことはない。

一、内府様へ使者をなりと遣わして弁明すべきだとのことであるが、隣国よりも種々讒人があり、また当家中よりも藤田能登守が出奔上洛して讒訴していて、内府様が疑心を抱いているときに使者など派遣してはかえって表裏者の謗りを受ける。内府様が讒訴を糾明しないうちは疎意のまま弁明しないことにする。

一、遠国にいるが何事もよく心得ている。当世風に振る舞えば真実も嘘のようになってしまう。愚意を申し述べたのは尊意を得たいためである。

慶長五年四月十四日

直江山城守兼續

豊光寺侍者御中

オリジナルあるそうすか 直江状

いつきに書き上げて筆を擱くと、兼續は大きく息を吐いた。鬱積していた感情を洗い浚い文字に託して率直に叩きつけたので、胸の痞えがおりて爽快であった。

この返書が承兌に届けば和平工作に奔走している千坂景親の努力は水泡に帰し、景勝の立場はいっそう悪化することは承知していたが、しかし、そうかといって家康に難詰されたからにはなにが律儀でなにが正義であ

るかを披瀝して対決しなければ上杉の面目が立たなかった。

兼続は、眼の前に千坂景親がいるかのようにして、

「武門の意地じや、許されよ」

そう呟くと、深々と頭を下げた。

これはかなり激烈な内容である。亡き秀吉の恩顧に報いる筋目をとおすためには、主君景勝ともどもいかなる報復をも恐れぬという気概が横溢していて、盟友石田三成との密約を守ろうとする兼続の決意のほどが窺える。

のちに『直江状』とよばれるこの返書は、家康が正義の道を誤れば決戦もやむなしとする挑戦状であった。

四

無礼極まる兼続からの返書を読んだ家康は、自尊心を傷つけられて地団駄踏んだが、内心では舌を捲いた。

(山城めよくぞ書きおったわ。畏れを知らぬ剛胆者よ)

家康に面と向かって苦言を呈する者などいなかった。

家康は、やがて心を鎮めると、すぐさま兼続から突きつけられた刃を逆用する方法を考えた。このへんがのちに天下人となる偉大な政治家の対応の早さである。

家康は、返書に怒り挑発に乗ったと見せかけて、不穏な行動の石田三成らに公然と蹶起する機会を与え、力づくでいっきに叩き潰してしまおうという策を廻らした。

陽動作戦を考えているのは兼続とてもおなじであった。あの返書を引き金にして家康を上杉攻めに立ち上がらせ、徳川の与党を會津へ引きつけておいて、三成らの挙兵を容易にする密約を果たそうと謀っていたのである。

(勝敗は時の運と雖も、長途遠征の不利を負わせれば、地の利を得て意気壮んなわれらに勝算あり)

そう確信していた。

兼続は、家康の天下乗っ取りに激しい義憤を抱いていたが、しかし、だからといって勝手な振る舞いで會津百二十万石の命運を賭けているわけではなく、つねに主君景勝の大筋の意を体して行動していた。瑣細なことまでいちいち相談して決断を仰ぐことまではしていなかったが、そこは幼時からともに謙信の薫陶を受けて育ってきていたので、景勝の意中は手に取るように解っていた。

兼続は、景勝の父長尾越前守政景の下士の子であった。

永禄三年(一五六〇)庚申生まれで、幼名を與六といった。幼時から学問を好み聡明の噂が高かったので、源義仲の乳兄弟で木曽四天王の一人樋口次郎兼光の後裔といわれる上田衆樋口伊豫守兼豊の養子になって謙信の近習に取り立てられ、景勝とともに春日山城で成人した。

景勝は、父政景の家臣の子である五歳年下のこの與六を、血を分けた弟のように扱って馴れ親しんだ。

天正六年(一五七八)三月十三日、謙信が脳溢血で急逝したき、謙信には景勝のほかにもう一人北條氏康の七男で景虎という養子がいた。謙信は生前いずれを後継者にするか定めていなかったので景勝と景虎のあいだで後嗣争いが起こった。世にいう〈御館の乱〉である。

抗争一年、鮫尾城(妙高市)に追い詰められた景虎夫妻が自害して決着がついた。景虎の妻は景勝の妹だった。

非情な争いに勝った景勝は、亡父の旧臣上田衆を忠臣にして固めたが、自分と命運をともにした與六を特に重用した。このとき景勝二十三歳、與六は十八歳であった。

名将謙信がなぜ後継者を定めずに領国越後を累卵の危うきに陥らせたかについては疑問が残る。内訌が起これば近隣の諸将たちにつけ入られて略取される破目になりかねないことは充分承知していたはずである。

では、なぜ二人の養子の将来を定めなかったのか。

推測だが、いずれは関東に大遠征して小田原を攻略し景虎をもって主家山内上杉管領家を再興させ、景勝のほうは生まれ育った越後の国主に就かせるつもりで二人の養子を訓育してきたのではないかと思われるが、あるいは、その生涯を合戦に明け暮れ修羅場を潜り抜けてきた猛将だけに、強者だけが生き残れる戦国の世であれば後継者の座は自力で勝ち取れ、強者は領国を安堵し繁栄させるが器量なき者はいつか滅ぶ、という世襲制より実力主義をとろうとする考えもあったのかも知れない。いずれにしろ死者に口なしで真意のほどは判りようがない。

それから三年後の天正十年(一五八二)十月、與板城(三島郡与板町)主直江大和守信綱が春日山城内木樋の間で儒者山崎秀仙と政務の打ち合わせをしているところへ、御館の乱の論功行賞の縺れから山崎に遺恨をもった毛利秀廣が闖入してきていきなり山崎を刺殺したので、信綱は咄嗟に脇差を抜いて身を守ろうとしたが逆上した毛利に斬殺されてしまった、という事件が起こった。

殺された信綱には嗣子がなかった。景勝は代々の功臣直江家の断絶を惜しんで與六に名跡を継がせ、信綱の未亡人おせんに入婿させた。おせんは先代直江景綱の娘で、斬殺された信綱は景勝の生家上田長尾の客将で一門の惣社長尾平太景貞の二子であったから、二十六歳のおせんははからずも二人の婿養子を迎えることになった。

こうして與六は、二十三歳で樋口與六改め直江山城守兼続となり、與板衆を束ねる頭領になった。

景勝にとって、文武両道に勝れ智略に飛んだ部将に成人した兼続は、いまや片腕とも頼む重鎮だったのである。

ここで、兼続面目躍如の武功を紹介しよう。

景勝に最後まで反抗したのは、新發田重家であった。これには景勝も手古摺り、平定するのに四年かかった。

はじめたのは天正十一年（一五八三）九月であった。景勝から梶城攻略を命ぜられた兼續は、城の西方新發田城とのあいだに枯草を積み上げて少数の雑兵を配し、自分は本隊を率いて城の東方に陣取り、南北をあけて敵兵が堕ちて行くところを討ち取ろうと計画した。

兼續の合図とともに、まず西方に潜む雑兵が枯草に火を放ち、弓矢と鉄砲をうちかけた。城兵たちは兼續軍の奇襲に右往左往して狼狽えたが、城将落合吉藏、小岩村清介の指揮で全員西の虎口に集結して守りを固めた。

三方が手薄になったと看て撮った兼續は、すかさず本隊に突入を命じた。どっと鬨の声を叫げて攻め入った本隊は無人同様の城内を駆け上って易々と本丸を占拠してしまったので、西の虎口を守っていた城兵たちは呆然として戦意を喪失し、われさきに南北の口から脱走した。

途中で待ち伏せていた兼續の別働隊が逃亡兵たちに襲いかかり、浮き足立つ新發田勢を苦もなく討ち取って三百余りの首級を挙げ、梶城を焼き払って勝利を収めた。

こうした兼續の軍略は夙に有名だが、平時の領内仕置きについても機智に富んだ逸話が数多残っている。

一例を紹介しよう。

まだ越後にいたときの話である。

あるとき、三寶寺勝藏という家臣が召し抱えていた下僕を無礼打ちにした。するとその下僕の親族たちが、「あの粗相は手討ちにされるほどのことではなかった」と怒って兼續に訴え出た。

兼續が双方を呼び出して事情を聴いたところ、訴人たちの言い分どおりだったので、兼續は三寶寺勝藏に、「下僕の弔料として白銀二十枚を遺族に与えよ」と申し渡して裁決した。

ところが親族たちは承服せず、本人を返せと迫った。

兼續は、

「生き還らせることは出来ぬから、銀子で料簡しろ」

そう繰り返し説得したが、親族たちは下僕の蘇生を固執して譲らなかったので、やむなしと決意した兼續は、

「是非に及ばぬ。死者を呼び返すといたそう。しかし冥途へ遣わす者がおらぬ。大儀ながらそのほうたち伯父と兄と甥の三人で閻魔の庁に出向いて申し受けて参れ」

と命ずるや、三人を捕えて往来橋で斬首し、

いまだ御意を得ず候えども、一筆啓上申し候。三寶寺勝藏家来何某不慮の儀につき相果て候。親族ども嘆き候いて、呼び返してくれるよう申し候につき、三人の者を迎えに遣わし候。死人をお返し下さるべく候。恐々謹言。

慶長二年二月七日　　直江山城守兼續

閻魔王様宜敷く獄卒御披露

と書いた高札を立てて、一件落着させた。

将来に禍根を残さぬ見事な採決であった。

こうした才智と見識を兼ね備えた兼續であったが、風雲急を告げる會津の防衛対策に追われて、秀吉から拝領の米澤三十万石の国造りには手をつける遑がなかった。

（後半次号）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇ー〇ー六四五九二

加入者名　まんじ

漢詩

潮騒録（四十七）

鯨游海

孔子之一生(二)幼少時代

平成十七年亥月

父歿貧窮薄母縁
一家糊口擔雙肩
雖聞以力誰能肯
十五青春志學年

押韻・縁肩年

〈孔子の一生(二)幼少時代〉

父歿し貧窮　母の縁薄く
一家の糊口　双肩に担えり
力を以て聞こゆと雖も　誰か能く肯んぜん
十五の青春　志学の年

〔注　解〕

生母は巫女を生業とし、父と野合して孔子を生んだ為、孔家には同居出来ず離れて暮らしていた。当然乍ら家には継母が居りまた兄や姉も居て生活は楽ではなかった。

孔子が三歳の時、下級武士であった父の叔梁紇が死んだ。然も長兄は足が悪く、労働に耐えられない身体であったので一家の生活は未だ少年の孔子の双肩にかかってきた。若年乍ら巨漢で腕力もあった彼は農事をはじめ凡ゆる仕事に精を出して収入を得た。母方の親族が従事する葬儀も手伝った。後年「私は若い頃身分が低く、食べる為につまらない仕事もいろいろやったので、大人になった今も人がつまらないと思える仕事もやれるのだ」と述懐している。また城門の門を一人で持ち上げ有名になる等、力仕事は体力に恵まれたお蔭で得意であった。

しかし力仕事だけで評価されるのに満足出来ず（力をもって聞こゆるを肯んぜず）頭脳も明晰だったので、士大夫には必須の教養とされた文字に親しんでいった。

糊口＝糊をすすって貧しい暮らしを立ててゆく事。糊はのり。口を糊らすだけの貧しい食事＝かゆ。誰能肯＝反語＝誰が肯定出来ようか、出来ない。亥月＝十月。

☆すする糊垂るる汗水苦きほど
鬱勃と湧く志学の執念

孔子之一生(三)仕業學問

平成十七年亥月

穀倉委吏牧場郎
六藝讀書勤日常
時有季孫家饗宴
非權門不許登堂

押韻・郎常堂

〈孔子の一生(三)仕業学問〉

穀倉の委吏　牧場の郎
六芸と読書　勤しむこと日常なり
時に　季孫家の饗宴あるも
権門に非ざれば　堂に登ること許されず

〔注　解〕

仕業＝仕事（和語）の漢語。委吏＝穀物倉庫を管理する村役人。郎＝①男子の美称。②下級官吏の総称。

六藝＝貴族に必須の六つの教養。礼、楽、射（弓術）、御（馬術）、書（文字）、数（算術）で、士大夫（没落貴族や優秀な平民）はこれらを貴族に教えて俸祿を得、さらに熟達すれば士大夫でも中枢の仕事に就けた。

讀書＝漢文の世界では通常「学問」の意で用いる。

季孫家＝魯の国の権勢を独占していた三桓の筆頭。他に孟孫家と叔孫家の三家。魯の桓公（BC七一一～BC六九四）の子から派生した家柄なので三桓と呼ばれた。

堂＝ここでは季孫家の奥座敷をいう。

仕事と学問に勤しんだ孔子の評判は徐々に高くなったものの未だ士の資格はなかった。或る日、季孫氏は自己の勢力拡大を図り人材を募集せんと饗宴を開いた。孔子も士の候補者の一人として招かれたので喜び勇んで出掛けたところ、受付をしていた季孫氏の家老陽虎から「お前のように小僧っ子に用はない」とののしられ追い返されて了った。「貧しい出のくせに生意気だ」と嫌がらせを受けたのである。これが孔子にとって生涯ライバルとなる陽虎との出会いであった。このことが却って孔子の発憤の因となり、何れ世の中を見返してやろうとする情熱となって燃えたぎった。

孔子は学問の力によってのみ自分が末端の小役人から国政の中枢へ進めることを自覚していた。生来学問好きの孔子は、苦労をいとわず仕事のかたわら学問に励んだ。これらの苦労がその後の人間形成や深く巾広い人間学の成立に有益だったのである。

なお後掲短歌は、史記・陳渉世家「燕雀安知鴻鵠之志哉」を下敷とした。また朱門とは、金満貴顕の人の邸宅の門が朱色だった事から、その象徴として用いられる。

☆鴻鵠の我がこころざし誰か知る
騒げ燕雀朱門の饗宴

孔子の一生(四)私塾開設
平成十七年亥月

尊崇聖者周公徳
畏敬賢人子産行
三十桂冠開塾立
俊才決皆溢回廊

押韻・行廊

〈孔子の一生(四)私塾開設〉
尊崇す聖者　周公の徳
畏敬す賢人　子産の行
三十にして冠を挂け　塾を開きて立つ
俊才皆を決して　回廊に溢れたり

〔注　解〕
尊崇＝尊び崇める。周公＝周の始祖武王の弟。武王の子成王を佑け王朝の基礎を築く。魯に封じられ始祖となった。仁厚く孔子が聖人と仰いだ明君。名は旦。
畏敬＝半ば畏れ謹んで敬まう意。子産＝魯の友邦鄭の名宰相。民の声を熱心に聴き政治に反映させた孔子の師。
桂冠＝官を辞す寓意。後漢の逢萌は王莽に仕える事を潔しとせず冠(官制の衣冠)を東都の城門に掛け逃れた。
孔子にとって師とは建国時代の周の文化を築いた周公旦と鄭国の名宰相子産の二人であった。
若き孔子はこれら昔の聖賢たちの言行を記憶し、復習し、思索し、体得した。その熱心さは恐ろしい程であった。彼らの言動に感動し、夢中になって寝食を忘れるのも度々で、夢にまで見た。
為に孔子の学識は魯の国で徐々に評判になっていった。
この頃孔子と同じように「士」になるべく学問を身につけ世に出ようとする若者が大勢いたが、彼らが孔子の評判を聞いて遠い各地から教えを乞いに集まるようになってきた。そこで孔子は村役人の仕事を止め塾を開くことにした。中国史上はじめての私塾である。
当時名門の子弟は公立の郷校で勉強出来たが、多くの貧しい下層の子は勉学の道が閉ざされていた。これらの中の向学心ある若者がこの私塾に集まったのである。
孔子は丁度三十歳であった。「三十にして立つ」は、自信と野心に張る意欲の宣言であった。
これら弟子の中に生涯の友ともいえる筆頭弟子となった子路が居た。運命の邂逅である。更に三桓の一家孟孫氏の息子の懿子と南宮敬叔の兄弟も入門してきた。

☆仁説けば弟子の眼輝けり
容貌の有らば伝へむものを

孔子之一生(五)周都留學
平成十七年亥月

待望留學洛陽城
陶醉王朝文化精
揭得老聃道家祖
叱呵客氣諷聰明

押韻・城精明

〈孔子の一生(五)周都留学〉
待望の留学　洛陽城
陶酔す　王朝文化の精に
老聃なる道家の祖に　謁え得たるも
客気を叱呵され　聡明を諷せらる

〔注　解〕
謁ゆ＝目上の人に逢う。老聃＝老子。聃は俗字。叱呵＝叱咤する。客氣＝血気。諷＝ほのめかしあてこする。
塾の運営が安定してくると、予て憧れた周都洛陽留学への願望が強まった。幸い門弟に三桓の一つ孟孫氏の子の南宮敬叔が居た事もあり君主の許可と援助を得、二人は勇躍して洛陽に向った。周王朝は衰えたりとはいえ、儀礼や音楽、文化や伝統は流石に素晴らしく陶酔した。
老子にも拝謁し諫言られたが今一つ釈然としなかった。

☆雅びなる琴の調べに頭垂れ
老子の言辞想ひ侘びぬる

孔子之一生(六)國際情勢
平成十七年子月

周興春秋六百年
諸候同族似無縁
仁信智義在何處
晉楚齊秦爭覇權

押韻・年縁權

〈孔子の一生(六)国際情勢〉
周興り春秋　六百年
諸候同族なるに　縁無きが似し
仁信智義　何処に在りや
晋楚斉秦　覇権を争いたり

〔注　解〕
周は紀元前一一二二年、武王が黄河流域に勢力を張っていた殷を滅ぼして建国した。
伝説時代の堯、舜から禹の夏(前二〇七〇年)、殷(前一七〇〇年。なお中国では商という)を経て出来た王朝で、前半を西周、後半を東周という。
東周(前七七〇年)以降を世に春秋時代と呼ぶ。これは夷狄の侵入を避ける為に都を従来の鎬(西安の北)から東の洛陽へ遷したのである。子月＝十一月。

鬼子母神童女褒
翩翩卍字墨香高
一吟忽覺僧敲戸
再讀亦思龍臥濤
二十五年三瞬夢
千篇萬律百家號
有情天地人間事
硯友猶須揮兎毫

押韻・褒高濤號毫

〔卍百号発刊に寄す〕

鬼子母神も　童女も褒めし
翩々たる卍字の　墨香高し
一たび吟めば忽ち覚ゆ　僧の戸を敲くを
再び読めば亦思う　竜の海に臥すを
二十五年は　三瞬の夢
千篇万律は　百家の号
有情の天地　人間の事
硯友なお須からく　兎毫を揮うべし

〔注　解〕

鬼子母神＝インドの安産と子育ての女神。千人の子を持つという。訶梨帝母とも。なおこの記念号の表紙カバー絵は田寺怜輦画伯の描く女神（表）と童女（裏）であ

この頃から、周王は実質的に中華全体を統治する力を失い、一地方政権に過ぎなくなっていた。諸侯も元同族だったことを忘れ、相互に反目し合うようになった。

仁信智義＝人が常に踏み行うべき道五常の礼を除く四。

さて、孔子の祖国である魯は、武王の弟の周公旦が建国の功を賞せられ、曲阜に封ぜられ魯氏を名乗って創建した。

武王亡き後、子の成王を佑け、周王朝を揺ぎないものにした功臣かつ成王の叔父の国、いわば親藩である。徳川幕府でいえば水戸、尾張、紀州あるいは会津であった。

格式や文化の高さも周の伝統を最も強く継承していたし、更に武王の父であった文王を祭ることも唯一許されていた。

つまり他の諸国よりも詩、書、礼、楽が盛んで、孔子もそれを誇りに思っていたのである。

なおこの漢詩の起句に用いた春秋は、東周以降の意味ではなく、普通名詞として「年月」を指す。東周以降を指すのは、孔子の著した魯の歴史書の書名に由来する。

☆年経れば忘るるものか志
　仁も義もなく覇を競ひける

った。翩翩＝ひらひら飛ぶ形容。転じて詩や文章が粋で優れているさま。文才があるさま。

卍＝萬、滿、まんじ。梵語で「めでたい」の意もある。

僧敲戸＝中唐の詩人賈島の推敲の故事より。「僧推月下門」の句で推か敲かで迷い、韓愈の行列にぶつかって了った。「無礼者」と都の長官であった韓愈の前に引き出されたが、理由を聞いた韓愈は「敲」が好いとし、車上に同乗させ詩論を交しつつ役所に連れ帰ったという。以後賈島は韓愈門下生となり終生親交を結んだ。

さてここでは以上の故事を踏まえ「卍の文章が推敲され尽くした優れたものである事が一吟で判った」とする。

龍臥濤＝諸葛孔明の臥龍鳳雛の故事より。即ち「世に出る英雄」の喩え。ここでは卍同人の将来の出世を暗喩。

百家＝諸子百家。春秋戦国時代の論客。卍同人を指す。

硯友＝硯の友。文人墨客、ひいては同人の比喩。なお文士の四友は硯、墨、筆（毫）、紙という。余談であるが尾崎紅葉が主宰した文学結社を硯友社と呼ぶ。これを明治文学史上「硯友時代」と呼び、一時期を画した。

須＝須く…すべし。再讀文字「必らず…すべきだ」

兎毫＝兎の毛で作った筆。最高級の筆とされる。中国江蘇省中山地方が産地であった。兎は俗字。免は別字。

☆繙けば墨ふくいくと薫り立ち
　万字の想念迫り来るかも

《漢詩の流れ37》南宋の巨星たち②陸游―その二―

陸游にしては珍しい閑適の詩。前年北伐を支持した為左遷され、職を辞し帰郷していた四十二歳の時の作。

游山西村（山西の村に遊ぶ）

莫笑農家臘酒渾　笑う莫れ　農家の臘酒の渾れるを
豐年留客足鷄豚　豊年客を留めて　鷄豚足る
山重水複疑無路　山重なり水複なって路無きかと疑えば
柳暗花明又一村　柳暗く花明かるく　又一村あり
簫鼓追隨春社近　簫鼓追随して　春社（祭り）近く
衣冠簡朴古風存　衣冠簡朴にして　古風存す
從今若許閑乘月　今より若し閑に月に乗ずる事を許さば
柱杖無時夜叩門　杖を拄いて時無く　夜門を叩かん

劍門道中遇微雨（剣門道中微雨に遇う）

衣上征塵雜酒痕　衣上の征塵　酒痕を雑う
遠遊無處不消魂　遠遊処として魂を消さざるは無し
此身合是詩人未　此の身合に是れ詩人なるべきや未しや
細雨騎驢入劍門　細雨　驢に騎って　剣門に入る

（注）消魂＝大きなショックを受けて、魂が身を離れること。

転句＝古来、詩人が蜀に入ってその詩風が成熟した例が多い（杜甫、李白、賈島、鄭谷）のでそれに準えた。

将軍義政と愛妾

島津隆子

一　お今の死

女性は時として悪魔にもなり、天使にも変貌するものだ。しかし、その女性がどこから天使になり、どこから悪魔に変るのかは誰も知ることができない。

室町幕府八代将軍足利義政の側近には、君側の奸として、世に「将軍をめぐる三魔」といわれる人たちがいて、政治をとりしきっていた。大納言の烏丸資任、有馬持家、そして今参局である。

この三人に共通する「ま」の字を当てて、三魔とゴロ合わせをしたわけだ。

落書にも三魔と皮肉られたひとり有馬は、摂津国の大名赤松氏の庶流であり、有馬の守護である。烏丸は義満の生母日野氏と同族のよしみから権勢を握っていた。この二人はともかく、今参局は、ある時までは将軍義政にとって、他にかけがえのない天使のような存在であった。

ところで、古代には奴婢が貴人宅で初奉公することを「今参」といったらしい。狂言や能でも召使を必要としたさる大名が、太郎冠者に命じて適当な人間を物色させるくだりがある。そこで東国の者で都へ行って奉公したいという人物がみつかった。大名はその者に「今参」という名称をつけてやる。つまり新参の局というほどの意味である。

今参局は通称「お今」と呼ばれていた。

お今は幕府の家臣大館満冬の娘である。幕府の奉公衆大館持房はこの大館家の宗家であること、また、兄の兵庫頭教氏は幕府の申次衆を勤めるなど、なかなか立派な家柄の出である。

義政が三春と呼ばれた幼児の頃、十二、三歳の少女であったお今は、乳母兼養育係として抜擢され、将軍家に仕えることになった。

この養育係りというのがふるっている。子供を相手にお伽話をしたり、一緒に遊んだりすることは建前であって、本音の部分はその子に変な虫がついたり、女子を追いかけ廻したりしないように、性教育を施してお守をする役柄であった。

普通なら、子供が一人の女性から諸々のお話を聞かされたり、文字を習うならまだしも、乳房を吸うことや性の手解きをされるのでは、どんな大人に成長するのか、末恐ろしい話である。

案の定、義政少年のお今に対する執着は大変なものであった。

行く行くは将軍になるかも知れない少年には、誰もがちやほやし、ご機嫌を取り結ぶに決っている。だが、義政少年は他の侍女たちには目もくれず、お今にだけ近寄って、晴れやかに微笑みかけるのだった。ただただお今の愛撫の許で成長し、お今を相手に屋敷内に響き渡るような声で、はしゃぎ廻る少年であった。

しかし、こうして年上の女性の性に強く魅了されてゆくに従って、義政少年からは良家の過保護児にありがちな母親への甘ったれは消えていた。そして、ことお今に関しては、実母にむかってさえ反抗的態度を見せた。

こんな義政の成長ぶりは、お今にとれば願ってもないことだが、面白くないのは烈婦として名高い母の重子である。

重子は応永十八年（一四一一）の生まれなので、義政が十三歳で将軍になった時には四十四歳の女盛りであった。超エリートの日野家から嫁いできた重子は、六代将軍義教の後妻として義勝、義政の二人を産んだ。

だが、長男義勝は十歳の時、将軍在位わずか八ヶ月で病死してしまう。これは重子にとって悲しみ以上に大きな打撃であった。なぜなら、それ以前に「万人恐怖」と謳われるほどの専制君主であった夫義教が、重臣赤松満祐から暗殺されていたからだ。

これがいわゆる「嘉吉の乱」である。

こうして思いがけず次男の義政に将軍の座が転がり込んだというわけなのだ。

夫と長男という二人の将軍を相次いで喪ったことは、残された義政に賭ける重子の期待がどんなに大きかったか、想像に余りある。

もとより十三歳の坊ちゃん将軍に何ほどの政治的見識も期待できるわけがなく、政務に関しては、重子がそのバックにいたことは言うまでもない。

ただ問題なのは、この幼稚なわが子を何とか早く一人前の将軍に仕上げようと、重子が焦れば焦るほど、教育ママタイプのうるさい母親にならざるを得ないことであった。

それでなくても夫の暗殺事件や長男の死を契機に、将

軍家を脅かす守護大名の台頭が著しくなった。義政が将軍になった四ヶ月後には、足利成氏が「鎌倉公方」の名乗りを上げて、関東は怪しい雲行きになっている矢先のことである。

末亡人である重子の激しい気性を、混迷した時代背景がさらに鞭打って「傍若無人」だの「頗可比褒似」という悪評が生まれ、広まっていった。

お今の義政に対する接し方や考え方は、重子のそれと大きく異なっていた。将軍ともあろう男児が母親に頭が上がらず、言いなりになっているようではいけない。若いうちから自由に伸び伸びと母親以外の女性と接することが、早く大人になる秘訣だろう。そして、強い母親に抵抗し、凌いでこそ天下人の器量というものだ。つまり早い話が早く母親から乳離れするよう、

「絢爛たる将軍職に相応しい男性になるために、私の言う通りにするのです！」

といいたいのだ。

両者とも目的は同じだが、一人の年若い将軍を巡って、強烈な個性をもった女二人が対立することになった。

片や将軍の実母、片や将軍の性教育指南役である。

だが、成長する政義の目には、お今のもつ濃厚な才色は一段と色鮮やかに映り、今や、お今は義政の愛妾と呼ぶにふさわしい存在となっていた。

何かと賢母ぶる女と、夢のような情交に耽溺できる愛人とでは勝負にならない。母親はどこまでも母親だが、時として、愛人は天使の存在ともなるものだ。

お今は義政側近の多くの女官の中で、義政の愛情を独り占めにしていった。だが、こうなると女はすぐに天狗になりやすいものだ。

「将軍の真の後ろ盾は、この私である」

とばかり、お今は重子をさしおいて政務にも何かと口出しをするようになる。

宝徳元年（一四四九）、義政十四歳の時、重子とお今が表面だって対立する問題が起きた。尾張守護代更迭事件といわれるものである。

かねて何かと意に逆らう尾張国の守護代織田敏弘を同族の郷広（さとひろ）に交替させるようと、お今は義政を動かした。そして、これに反対する重子との間で激論となった。

この時、義政は重子を批判、一方的にお今の肩を持ったのだ。

「母である私の言うことを聞かずに、あの妖婦の言いなりになっているわが子が嘆かわしい。幕府が支配されるとは忌忌しき問題じゃ」

激怒の余り発作を起した重子は、嵯峨野の別邸に閉じこもってしまった。

険悪化した親子関係は、むしろお今の望むところだ。しかし、重子の後には綺羅星のごとく重臣たちが控えて

いる。それに比べ、もとを糺せば一介の子守に過ぎないお今は、いわば日陰者である。

「下賤な女人の分際で将軍の寵愛をかさに、こともあろうに政治にまで口出しするとは、身の程も知らぬ、でしゃばり女が！」

重子は一旦は引っ込んだものの、今度は逆襲に転じ、最有力の臣細川勝元と畠山持国に計って、お今追放のキャンペーンを張った。

こうなるとどっちつかずの性格の義政は、勢力のある方へいとも簡単に靡いてしまう。

お今は追放の身に。しかし、今後いっさい政治には介入しないという条件つきで、処罰だけは免れた。

このような義政の性格は生まれつきで、その優柔不断ぶりは、一生涯変らない。だが、えてしてこのタイプの男性は、母性本能を掻き立てられるのか、気性の勝った女性にもてるというから不思議だ。

義政はかなりのインテリにはちがいないが、義政の念頭には常に、三代将軍義満時代に咲き誇った、あの豪奢な北山文化への憧れが、劣等感のようにこびりついていた。

話は前後するが義満の「金閣寺」を真似て義政が「銀閣寺」を創建したことは、その性格からも頷けよう。だが、金が銀に格落ちしたこと自体、幕府財政の欠乏を天下に公表したようなものである。

しかし、当の義政はそんなことにお構いなく書画、陶磁器、その他の工芸品を飽くなく蒐集した。また、庭造りには病的なほど熱心で、京都、奈良一帯の名刹、古寺、貴族の邸宅などの名石や樹木で気に入ったものがあると、相手の意向を無視して収集した。そして、それに携わった文人や名工たちを集め、茶会や物見遊山を催した。

つまりよく言えば優雅な風流人、悪評すれば現実をわきまえぬ単純な浪費家であり、放蕩者、道楽息子である。

とくに働き盛りの三十代には応仁の大乱をよそに、東山の地に創建した宮殿「東山殿」に公家や武家の高位高官を参集。時の過ぎるのも忘れた遊宴が、連日連夜にわたって繰り広げられた。

それは、一つの現実逃避の境地を求めつづけた藤原定家や西行や、あの鴨長明などとは似ても似つかない〝華麗なる方丈〟であった。

また、きらびやかな王朝絵巻に描かれる刹那的耽美の世界と、荒々しい戦乱絵巻に描かれる野心的闘争の世界との、接点でもあった。

だが、義政のものの考え方は、短絡的でいい加減なところがある。強固な意志で物事を追求する人間性には程遠い。その時々の人間関係も、好悪の感情だけでどのようにも左右される浮気女と好一対な、軽佻浮薄な男の典型でもある。

このような男と巡りあい、抜き差しならぬ三角関係の狭間に立たされた女こそ、迷惑千万というものだ。その意味でお今は、多分に不運な宿命を背負った女性ともいえよう。

さて、将軍家追放二年後の享徳四年（一四五五）正月、お今は義政の一子を出産する。

期待に反して生まれたのは女児であったが、重謹慎の身でありながら、その間隙をぬって年若い将軍と深い情交を重ねるなど、まさに大胆不敵な妖婦を彷彿とさせる。

しかし、義政はこの時すでに数人の側室を持ち、享徳二年、一色右馬頭満範の娘が女児を産み、翌年にはまた別の側室も女児を出産しているのだ。

お今も烈母重子と他の側室への巻き返しのため、女性最強の武器をもって、将軍の子を産むべく励んだに相違ない。

時に義政は十九歳の血気盛んな青年期であり、お今は五、六歳年上の脂ののった女ざかりである。義政のお今を見つめる眼は、念願の子を持った愉悦に満たされて、無邪気に輝いている。

こうなると、お今の胸の内には、この子のためにも…という野心を越えた貪欲なまでの権勢欲が急速に膨らんでいった。義政の新たな愛情の他に、将軍の子持ちであることを威光として、お今は何の躊躇いもなく将軍家に戻っていった。

そして、以前よりも一段と激しく、政治への介入が始まるのだった。その介入ぶりはエスカレートするばかりであった。

「政権のことは今参の方が発し、その気勢や支配は燃えさかる炎のようで近寄り難く、手のほどこしようもない」

と記録されているほどだ。

それだけ年若い義政が政治的に無力であり、是が非でも義政の背後からしきりに手を伸ばす重子の政治力を排除しようとする、お今の意気込みでもあった。

「何という、しぶとい女！」

重子をはじめお今と敵対する総ての人は、あいた口が塞がらないと同時に、さらに危険なものを肌身に感じ始めていた。

「あの女一人に溺れるのは、いつまでも義政を独身貴族にさせておいたためなのだ。ならば……」

と考えた重子は、この上、お今に男の子でも出産されては一大事とばかり、さらに強力な手をうった。

それは、お今のような容貌と性格を備えている女性を嫁に宛がうことである。相手はお今よりはるかに家柄の良い、若い姫君にかぎる。それも自分の息のかかった女でなくてはならない。そう熟慮した重子は、お今に優るとも劣らぬほどの美貌と、才気に溢れた一人の娘を探し当てた。自分と同じ家門に生まれ育った日野富子である。

康正元年（一四五五）八月、日野富子は義政の正室として、花の御所と謳われる室町の将軍家に輿入れしてきた。それは何と、お今が子を生んだ八ヶ月後のことであった。

花嫁の行列およそ二千メートル、飾り立てた数十両の牛車を従えている。金粉を散らした黒檀の御車から降り立った白綾の被衣姿の富子は、この世のものとも思えぬ美しさだった。

日野家は古くから皇室貴族に属す、いわば中流公卿である。第三代将軍義満の正室業子を娶って以来、正室はこの日野家からもらう習慣になっていた。だから富子が嫁いできたことは別に驚くには当らない。

しかし、ここで注目したいのは、富子の兄大納言日野勝満の権謀術策があったことだ。勝満は常々、

「俺は極重の悪党である」

と世間に自称して憚らないほどの野心満々の策略家であった。普通では許されないが、この時、十六歳の富子の後見役という名目で、勝満も将軍家に乗り込んだのだ。つまり、重子は富子よりもバックにいる勝満の手腕を見込んで、婚姻させたと言う方が当っているかも知れない。

ここに、お今独りを向こうに廻して、重子―勝満―富子という三者の呼吸がぴたりと一致したのだ。あとに残る問題はひとつ、義政がどっちに転ぶかである。

自分を取巻く人々の思惑をよそに、義政は相変わらずの日々を送っている。

（母と愛人の確執、妻と愛人の対立、女たちのややこしく陰湿な関係に頭を突っ込んで煩悶するほど予は暇ではない！）

この呟きが威厳からならまだしも、退屈極まりない義政は、まるで対岸の火事を眺めるように、自分だけが色男だという態度に終始していた。そして、

（女たちの葛藤こそ、予に対する深い愛情の現われである）

などと虫のいい考えに浸っていた。

昼間はお今との子を膝に抱いて、目に入れても痛くないほどの可愛がりようである。だが、夜になればなったで、新妻の富子を胸に抱いて可愛がりたい素振りを示すのだ。

しかし、お今はあれこれと理由をつけて義政を牽制。けっして富子の寝所へ足を向けさせまいとした。その常軌を逸した火のような嫉妬こそ、お今の立場を守るための砦でもあったのだ。

義政のわが子に示す愛情が、父親一般のそれと変らぬかぎり、義政が他の側室たちにどんな愛情を示そうと、それはそれでお今には我慢もできた。

だが、こと富子に関してだけは病的なほど監視の目を怠らなかったし、義政に対して少しの妥協も許さなかった。

（将軍様なら自分の一存でどうにでもできる。義政の最高の意思決定権を持つ存在は、自分しかいない）

お今はそう信じていた。

だが、たかが家庭教師役の女に頭も上がらず顔色ばかり窺う夫への、富子の落胆ぶりもわかるというものだ。後年、富子がパンチのきいた烈女、悪女、悪妻として歴史の檜舞台に登場する下地は、このように屈折した嫁ぎ先の家庭事情にあったのかもしれない。

楽しかるべき新婚二人を陰険な目つきで監視する鬼婆さながらのお今の姿は、忍従だけを美徳とする中世的世界の女性にはほど遠い。

だが、その心情は現代女性たちに近いものがありそうだ。

しかし、お今がいかに目を凝らしたところで、四六時中義政と富子を見張りつづけるなど、どだい不可能な話である。

ある月明かりの夜。

富子の寝所から出てくる義政の姿が月光の下に白く浮かんだ。その姿をお今側近の女監視人の目が捉えた。

「う、うッ、しまった……私としたことが」

怒りと焦燥の中で、鋭いお今の本能は、ある種の危険を感じとっていた。

お今のその予感が的中したのは、それから間もなくのことであった。

長禄三年（一四五九）正月、富子は衆人待望の男児を出産した。富子が嫁いでから三年四ヶ月目のことである。

この事実に、当の富子はもちろんだが、重子や勝満以上に、喜色満面、小躍りしたのは義政であった。

「とうとう予にも世継ぎができたわ！」

いちばん早くこの世に顔を出した男子が、その家の鍋一つ、茶碗一つまでも引き継ぐ権利がある。それは王侯でも百姓でも、昔から変わることのない家族制度の掟だ。まして将軍家の男の子なら、少々お脳が弱かろうが、一切を後継する権利を有するのである。

今や義政は、愛妾よりも正室の産んだ男児に、持てる愛情のすべてで傾斜してゆく。

禁欲主義は矛盾を秘めていて、生きながら生きるなと、命じているようなものだ。お今はそのことを、骨身に滲みて思いしらされることになる。

富子の出産祝いに湧く御所の長い廊で、多くの女官を従えた重子と、同じようなお今の一行がすれ違った。重子は控える格好のお今を見下して冷然と言った。

「閉ざされた火はなお盛んに燃えるとか。まして若い二人ですものなぁ。妬み深いお女のお陰で、将軍殿も火のように富子様を抱かれて、やっとお世継ぎができたと申すものじゃ」

強者の側に立ったときの女の傲慢ぶりこそ、女が動物に近いといわれるゆえんだ。だが、確かに勝ち誇った重子の言葉は、義政と富子に禁欲を強いて、結果、愛の媚薬を注ぐことになった、お今の愚かさを指摘していた。

（女は何と孤独なもの。女を支えるものは、子供以外何もないのか）

とお今は思う。悲しむべきはお今の立場である。それが男であれ女であれ、子は母親にとって命以上の存在だ。当然父親から注がれるべき愛情関係が、今、お今母娘の前で音を立てて崩れようとしているのだ。

お今と富子の子は誕生が同じ一月だから、四歳ちがいの異母姉弟ということになる。この姉と弟が何の波乱もなく成長していたら、どんな人生が用意されていたかは知る由もない。ただ二人の母の互いに引くに引けない確執からみて、この姉と弟も幼児からわめき合い、汚く罵り合う、恵まれない人生を送ったことは想像に難くない。いずれにせよ暗く侘しい想像しか浮かばないのは、一人の父と二人の母にその責任があるといえよう。

ところで、富子の出産数日前のこと。

富子の兄勝光は、お今の兄大館教氏に、安産祈願のための春日神社への使者の役を「是非に」と頼んだのである。表向きの理由は、

「このへんで、そなたの妹と私の妹とを仲良くさせようではないか。そのためには、後ろ楯である我われ兄同士が、手を結んだことを行動で示す必要があると存ずる次第」

というものだった。

この言葉に賛同した教氏は、使者の役を引き受けた。

しかし、運命はどこまでも人間を翻弄し嘲笑してやまない。

男児出産の慶びに沸き返る将軍家と日野家。そこに駆けつける引きも切らない祝い客の列を嘲笑うかのように、運命の導き手は、この男児をあっけなく他界させてしまったのだ。

死産に近かったともいう。

義政の落胆と富子の嘆き。富子を見つめる義政の冷ややかな目。

「お前はまともに子も産めぬのか！？」

二日後、周囲には義政夫妻の亀裂さえ囁かれる始末である。

その日、義政はお今との間にできた女児を抱きしめ、夜はお今の寝所に入った。

同じ頃、やつれ憔悴しきって床に臥す妹富子に、勝光は落着きはらって言葉をかける。

「まあよい、すべて、この兄に任せよ」

その足で勝光は重子の所へ向う。

かすかに揺れる燈明の火に、重子の険しい形相が浮かぶ。そして、勝光を待ちあぐねていたように、

「勝光殿、こんなことになって、どうなさるおつもりじゃ」

「こうなったが、むしろ好都合というものでござる」

平然とうそぶく勝光に、重子の詰問がとぶ。

「ええっ！　好都合とはどういう意味です？」

「今、流れている噂はご存知ですね、重子様も」

「うわさ？」

「そうですとも、大変な噂が流れておりまするぞ」

したり顔の勝光に、怪訝な面持ちの重子が呟く。

「何のことか、さっぱりわかりませぬが……」

「噂があるのです。驚くべき噂ですぞ！」

いつにない勝光の厳しい表情と、断定的なもの言いに、重子は暗黙の内にすべてを了解した。

奇妙な噂が義政の耳に聞こえたのは、翌朝、つまりお今を抱いて、その寝所を出た朝のことである。

〝将軍様のかけがえのないお世継ぎが死産なのは、大館教氏が安産祈願に変えて、胎児呪詛の願文を春日神社に奉納したからだそうな。それを計画したのは妹の今参局だという〟

〝いや、昨年の夏、正室富子様のご懐妊以来、今参局は夜毎に呪詛をつづけていたそうな〟

この噂を耳にした義政は、はじめ、あっけにとられた。しかし、お今の祈りの姿を見たというお今側近女官の言質や、春日神社への使者役は、教氏が願い出たのだ、という重子や勝光の言葉を聞くに及んで、お今に対する疑惑は義政の心の中で拡大していった。根が単細胞な勝光のことだからひとたまりもない。

一方、噂は噂を呼んで、その日の昼頃には室町御所全体に広がり、世間にも実しやかに流れていった。こうなると噂でも取り返しがつかない。

ずる賢い方法だが、自分が疑われないためには、世間の名を借りて、世間ではこう言われていると流布させるのがいちばんだ。世の陰口は誰も免れることができない。だから、あくなく繰り替えされるデマは、やがて真実として受けとられてゆく。

このようにデマ、中傷、噂はライバルや有力者を蹴落とし失脚させるのに、古来から用いられる恐ろしい言葉のテロである。

他人の口を借りて語り伝える冷酷非情な仕打ちといえる。一種の処刑であり、人を破局へと追いやる最強の手段かもしれない。

その意味で、お今の風評は義政にとれば、聞くほどに真実味を帯び、胸板を貫いてこたえるのだ。

「そういえば思い当たることばかりだ。恐ろしい女狐めが！」

激昂した義政は直ちにお今を召し出し、詰問につぐ詰問の矢を浴びせかける。お今は、

「そのようなたわいもない噂を、本気で信じるおつもりなのですか」

と訴える。しかし、義政は、

「信じるも信じないもあるものか。現に予の子は生まれるとすぐ死んだではないか！」

「……」

「何も言えぬのか。えエッ、どうなのだ。返事をいたせ！」

お今は黙ったままだ。

「予の、予の子どもは死んだのだ！　そのことに答えてみよっ！」

「何をおっしゃるのです。それは自然にそうなったまでのこと。敢えて申せば、産んだ女の責任ではござりませぬか」

「それみよっ、そちはやっぱり富子を憎んでおるではないか」

「それとこれとは違います。あなた様には女人の心がわかりませぬのか？」

「ええいッ、黙れ！黙れ！　お前のような者は予の目の前から、とっとと消え失せてしまえっ！　目ざわりじゃ！」

怒り狂ったときの人間は、一時的にせよ一種の狂人である。相手が何を言っても聞く耳を持たないのだ。話せば弁解ととり、言い訳とみなす。途中で黙ると言葉に詰まったととられ、なお不利になる。

人はこのようなとき、はじめから黙秘し、無視してしまうのが最善なのだ。だが、勝気な人間にかぎってはげしく言い合い、相手をいっそう激怒させてしまうか、途中で自分の心情を吐露する方法をとるものだ。

お今はこの二つが入り混じった最悪のケースで応対した。

（昨夜、私を抱擁したときの義政の仕草や言葉は何であったのか。この男にとって、女とはただその場その時の無為の慰み物か、つれづれに過ぎないのだ……）

無念の男涙を流して憤懣やるかたない義政の顔を、身動ぎもせずに見つめるお今。その目には勝ち誇って冷笑する三つの顔―重子、勝光、富子のそれがはっきりと浮かんでいた。

そして、かつてあれほど義政と馴れ親しんだ乳母として、保母として、愛人としての自分の存在が、泡沫のように消えてゆくことを、お今は実感した。

「貴方は人の良過ぎるお坊ちゃん。騙されてはなりま

せぬぞ。お今の口車になど、二度と乗ってはなりませぬ。貴方は私が産んで、一人残った、かけがえのない将軍なのですぞ」

語尾を長く引く特徴ある重子の音色が、それこそ呪文のようにお今の耳朶に聞こえる。

お今は追放流罪の身となった。

これは富子にとって、どれほど幸いであったか計り知れない。同じ家門の出で、同じように誇り高く個性の強い姑と嫁なら、激しい葛藤と確執の関係になるのは当然といえよう。だが、個性は強いが自分たちより身分の低いお今を共通の敵とすることで、重子と富子は親密に手を組むことができた。いわばお今は富子の身代わりとさえいえる。

もっとも、お今のような女性が義政の相手でなかったなら、重子はもっと個性のない平凡な女性を義政の嫁に選んだかもしれない。

長禄三年（一四五九）一月十三日、琵琶湖上を一隻の船が、沖の小島を目指して行く。

そこには寒風に髪を流した白衣の囚われ人お今が乗っている。富子の子が死産してからわずか三日後のことである。

湖面を吹き渡る風と、流れゆく雲と、蒼白のお今の頬を濡らす冷たい飛沫。囚われの女人などには全く無関係な風景が、果てしなく広がっているばかりだ。

遥かな水平線にはまるで震えているような小さな漁船が望まれる。それら一切のものを、鋭く研ぎ澄ました眸で凝視するお今。その胸奥には、やがて無惨な死を迎えるであろう、独り取り残された四歳のわが娘に対する、限りない惜別の念いがある。

（この冬の日の黄昏、心を凍らせる寂寞、ああ！）

苦痛なまでの孤独感を噛みしめて耐えるお今の影法師がゆれる。

一方、室町の将軍家ではさらに姦計が企てられていた。

ひとたびは激怒した義政であるが、あの性格ではいつまた気が変わって、お今を呼び戻さないとも限らない。先手を打って刺客を差し向けたがよい……という重子、勝光、富子による謀議は、完璧なまでに意見の一致をみたのだ。

琵琶湖上の沖ノ島に幽閉されたお今は、見張りの屈強な一人の武士を前にして、一切を悟っていた。

「そなたの手を借りずともよいのです」

きっぱり一言を言い切ると、お今は懐剣を握り従容として自害し果てたのだ。

自害といっても喉や胸を突く女人一般のそれではなく、武将同様、古式作法に従った見事な切腹であった。

「武将の棟梁たる者は、このように潔い死に様でなければなりませぬぞ」

その人生の今はのきわに、お今は身をもって義政に教えたかったのかもしれない。

この時代、呪詛という非科学的なことが、どれほどの信憑性をもって信じられていたかはわからない。しかし、富子の産んだ子は男児ではなく、実は女の子だったという説もある。また、敢えてお今を葬るための重子、勝光、あるいは重子、富子、勝光による男児毒殺も考えられる。

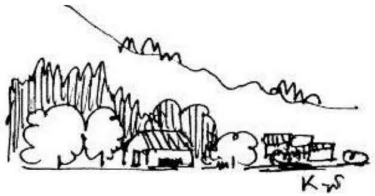
実際にお今やその兄教氏による呪詛、呪殺があったのか、どうか？　いずれにせよ、お今の悲劇の真相は遠い歴史のかなたに消えてしまい、知る術もない。

お今が死んだ年の六月十九日と、七月二十日、空に二つの太陽が出現するという不吉な現象が起きた。

また、室町御所には夜な夜なお今の亡霊が出るという噂に、人々は恐れはじめた。そして、お今に対する世間の同情がしきりとなった。

その後、富子の末子養覚が悪質な眼病を患い片目が潰れたことから、お今の祟りであると噂された。そのため富子は京都御霊社の末社を建て、お今の霊を祀った。

そのことが、この陰惨な事件にいくらかの光明を投げかけているといえようか。



源平交代思想（一）

宅見勝弘

序章

人間にバイオリズムがあるように、人間の集団や民族、文明にも栄枯盛衰の波が存在する。

東洋文明と西洋文明は、約一六〇〇年を一つの周期として栄枯盛衰の波を繰り返している。

東洋と西洋の栄える時期は約八〇〇年の差があり、約八〇〇年ごとに東洋と西洋の優位性が交代する。

五六〇〇年前から八〇〇年単位で文明期を分け、順番に代表的な文明や国家を例に挙げると、次の通りになる。

第一期（西洋文明期）（BC三六〇〇年～BC二八〇〇年）エジプト（古王国）文明

第二期（東洋文明期）（BC二八〇〇年～BC二〇〇〇年）メソポタミア文明・インダス文明・黄河文明

第三期（西洋文明期）（BC二〇〇〇年～BC一二〇〇年）エーゲ文明・エジプト（中王国・新王国）文明

第四期（東洋文明期）（BC一二〇〇年～BC四〇〇年）アッシリア・ペルシア帝国（アケメネス朝）

第五期（西洋文明期）（BC四〇〇年～AD四〇〇）ギリシア・ローマ帝国

第六期（東洋文明期）（四〇〇年～一二〇〇年）ササン朝ペルシア・唐・イスラム帝国

第七期（西洋文明期）（一二〇〇年から現代）ポルトガル→スペイン→オランダ→イギリス→アメリカ

第八期（東洋文明期）（現代から）

つまり、現代は、西洋文明から東洋文明へ覇権が移る一六〇〇年目の転換期である。

（本件については、まんじ八三号に記載）

*

日本の歴史では、一六〇〇年前は古墳時代であり、東洋文明の最盛期が平安時代に、西洋文明の最盛期が戦国時代に相当する。

短期的なレベルでも歴史の波というのは見つけることができる。例えば、江戸時代の三大改革の周期性である。

①徳川吉宗の「享保の改革」一七二二年（二十四年間）

②松平定信の「寛政の改革」一七八七年（十六年間）

③水野忠邦の「天保の改革」一八四一年（二年間）

前の改革から次の改革までの間隔は、実施期間も考慮すると、約五十年である。江戸時代に改革をしても五十年ほどで制度疲労を起して、次の改革が必要となるのである。

*

江戸の改革の周期性は景気循環理論の「コンドラチェフの波」で説明できると思う。

経済学では四つの景気循環理論がある。

①キチンの波　三・七年前後の在庫投資循環

②ジュグラーの波　十一年前後の設備投資循環

③クズネッツの波　二十二年前後の建設投資循環

④コンドラチェフの波　五十五年前後の技術革新循環

なお、二〇〇六年は四つの全ての波が上昇に転換する年である。

*

景気循環は太陽黒点の増減周期に深い相関性が有ると言われている。

太陽黒点周期のシュワーベ・サイクルは十一年であり、ジュグラーの波に一致する。

黒点周期には主サイクルの三分の一、二倍、五倍のサイクルが有り、それぞれエルニーニョ・サイクル、ヘール・サイクル、吉村サイクルと呼ばれる。

黒点周期と景気循環理論には相関関係が在る。

①エルニーニョ・サイクル＝キチンの波

②シュワーベ・サイクル＝ジュグラーの波

③ヘール・サイクル＝クズネッツの波

④吉村サイクル＝コンドラチェフの波

太陽黒点サイクルが景気循環に影響を与えている。

つまり、天体の周期性が歴史の周期性に関連しているのである。

＊

日本史の中で大きな二つの波が交互に栄枯盛衰を繰り返した。

それは「源氏の波」と「平氏の波」である。

源氏と平氏のそれぞれ流れを汲む者が交互に権力を手中にするという思想が、『源平交代思想』である。

元々、源平交代思想は、鎌倉時代の北条氏打倒の大義名分であった。

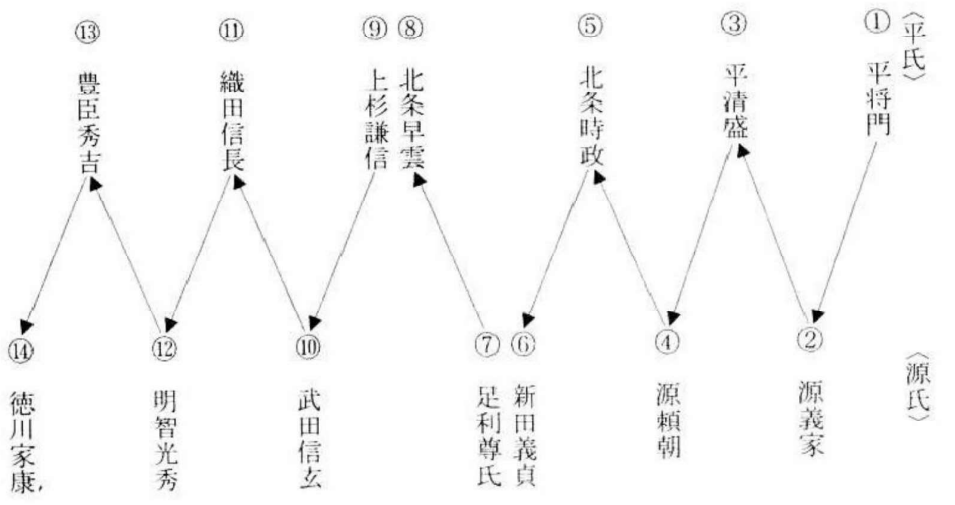
また、戦国時代の武将の間でも源平交代思想が信じられていた。

源平交代思想は戦国時代で終わっておらず、源平が交代で覇権を握るという事実は、江戸時代まで連綿と続いてきた。

明治維新で徳川幕府が瓦解して初めて源平交代の政権は終焉したのである。

代表人物で源平の覇権争いの流れを示すと、次のようになる。

なぜ、この人物が源氏または平氏であるかは後述する。



針の穴を通った駱駝（五）

鍋屋次郎

小西行長は領有する肥後二十二万石の内、天草の一部二万石を高山右近に与えようとした。しかし、右近は、自分が小西領内に匿われていることだけで小西行長に迷惑が掛かるのではないかと心配していた。更にこの好意を受けることによって秀吉から小西行長にどのような難題が降りかかるか分らない懸念もあった。そこで、天正十七年（一五八九）十一月、小西行長に涙ながらの別れを告げ、かねてから右近を招いていた加賀前田利家のもとに身を寄せた。

利家は、秀吉にとってただ一人の友人であり、秀吉も利家に対して心を許していた。そのような関係から利家は、右近を加賀に招くことについて既に秀吉の了解を取っていた。

しかし、利家は、常に秀吉を天下人として立て、秀吉に対する礼節は崩していなかった。

師走も五日目に入った昨日、金沢城に着いた右近は、前田家家老横山山城守長知の出迎えを受け、大きな屋敷に案内された。屋敷内外を見渡すと、家具・丁度品は勿論のこと、生活に必要な全てのものが揃っていて、中間（ちゅうげん）や女中が庭先にかしこまっていた。

驚いた右近は横山山城守に

「これは、これは。このようなお気遣いを賜わろうとは、お礼の言葉もありません」

と礼を述べると、横山は

「全て大殿（利家）の直接のご指示でございます。中間・女中はそれぞれ屋敷内の中間部屋・女中部屋に住まわせますのでご自由にお召使い下さい。なお、大殿は明日巳の刻に登城するようにとの仰せでございます。

ここまで言った横山山城守は、急に声を落として

「高山様、登城用の裃（かみしも）をご用意いたしましょうか」

と尋ねて、そっと右近の表情を窺った。

「ご家老、ご心配痛み入ります。浪々の身ではありますが、用意はしてあります」
「これは失礼を申し上げました。明日は五千石以上の重臣達が午の刻に登城を命ぜられていますので、それまでの間、高山様には大殿から親しくお話しがあるのではないでしょうか」

横山山城守が帰ってから、右近は想像もしていなかった鄭重な扱いに戸惑っていた。
風呂に入って旅の垢を洗い落とし、夕飯をすませ、中間・女中が下がってから、ようやく自分達家族だけの祈りの時を持つことが出来た。

翌日、大手門にさしかかった右近に、城門の中程に立っていた侍が近づいてきて一礼し
「高山右近様でございましょうか」
と尋ねた。右近は
「いかにも高山右近でござる」
と会釈すると
「身どもは栗橋嘉門と申します。これから大殿がお待ちの奥書院までご案内申し上げます」
と鄭重に挨拶して、先だって歩き出した。
利家のこのような気配りに利家を頂点とする前田家の組織というか、前田家全体から醸し出される暖か味が、秀吉を取り巻く京・大坂の、いわば表面だけを糊塗した、潤いの全くない権力社会との大きな違いを感じていた。

栗橋嘉門が、廊下から襖越(ふすまご)しに
「大殿様、高山右近様をご案内申し上げました」
と声をかけると、音もなく襖が開いた。
利家は書院の中央まで歩み寄って来て
「高山殿、良く来られた。さ、堅苦しい挨拶は抜きにして、こちらへ」
と、用意された座布団を示した。

利家が着座したのを見届けた右近が、少し離れた下座で平伏し、利家の配慮に礼を述べると
「高山殿、お招きする側として当然のことをしたまで。お気になさるな。今日は午の刻に重臣達を集めている。高山殿を重臣達に紹介しよう」
まだ平伏している右近を見て
「高山殿、貴殿を当家の客将としてお迎えしている。重臣達と同じ下座ではまずい。どうかその座布団にお座り下され」
と、利家の左斜め前の座布団を指し示した。遠慮がちに右近が座り直すのを見届けて
「高山殿、重臣達が来る前に、二人だけで話をしたく

てこの時間に来ていただいた。話というのは、客将といっても、今どこかに出陣するわけではないので、前田家後継(あとつぎ)である利長を教育していただきたい。だから貴殿は家臣ではない。このことを重臣達にもよく知らせておきたい」
ここまで言って一息ついて
「高山殿、ご家来衆はいつ頃到着するのか。そして人数は如何ほどか」
「はい、高槻、明石以来の者達がやがて五十名くらいはやって来るものと思われます」
「高山殿、ご遠慮召さるな。高山殿を慕ってこの加賀へ来てくれる家臣であれば、如何ほどの人数でもこの利家がお引き受けしよう」
ここまで言って辺りを見回して、小姓達に席を外すように命じてから
「高山殿、かねてからの貴殿の願いであったキリシタン寺のことであるが、明年には建設しよう。場所はこれから考えるが、城下の、この城からあまり離れないところに用意しよう。この利家が寄進しよう」
右近は驚きのあまり利家の顔を見つめた。
「高山殿、そのように驚くにはあたらない。上様（秀吉）にはこの利家がキチンと話はつける。いや、もうつけてある。ご安心あれ」
右近は座布団を外し

「前田様、有り難うございます」
と平伏して、しばし顔を上げなかった。いや、上げることが出来なかった。右近の左手は涙を拭っていた。

暫くして、重臣達が集まってきた。皆、利家に平伏した後着座した。先程案内してくれた栗橋嘉門もいる。勿論横山山城守もいる。重臣達の着座を待っていたかのように、前田一門の利長、利常が着座した。

利家の右に利長、利常と並び、利家の左斜め前に右近が座り、重臣達は利家の正面に、禄高に応じて三列に座っている。やがて利家が口を開いた。
「皆の者、この方が高山右近殿だ。この前田家の客としてお招きした。高山殿は幾多の戦いを経験し、その功は上様も大変高く買っておられる。そして、予が最も高く評価することは、いや尊敬することは、その人格の高潔さにある。高山殿はキリシタンである。上様に大名の地位も、領地も、全てお返ししてキリシタンを守り通している。俗人には出来ないことだ。キリシタンとしての高山殿を当家にお迎えすることについては既に上様のご理解を得ている。その方達が心配するには及ばない。当面、予と利長の相談相手となってもらうこととした。皆の者、高山殿と親しく交わり、何かと教えを乞うが良かろう」

ここまで言って右近に挨拶を促した。

「高山右近でござる。ただ今大殿様より過分なお言葉を賜わり身の縮む思いでござる。またこの素晴らしい前田様ご家中の皆様と昵懇に願えることは身に余る幸せと思っている。これから、何かと宜しくお導きを賜わりたい」

と挨拶して、低頭した。

重臣達の中には、利家の右近に対する姿勢が理解できず、戸惑っている眼差しもあることを右近は感じていた。

屋敷に戻った右近は、利家の親切に感謝すると同時に、これからこの前田家の中で自分がどのような立場におかれるのか、不安であった。

出来ることであれば、表向きの世界から離れ、キリシタンとして、多くの人達に教えを述べ伝えたい。それさへ出来れば、それ以上の望みはない。しかし、問題は高槻、明石以来の家臣達がこの加賀へやってくることだ。

「俸禄も何も要らない。キリシタンとしての信仰を守り、ただ右近に仕えることが出来れば」

との思いでやってくる彼らを迎え入れ、そして彼らと一緒に地上の楽園を作って行きたい、と考えていた。

しかし、心配なことは、そのような家臣団を抱えて、前田家に対して、ただの客将、言い換えれば集団ごと食客として甘えることが出来るのだろうか、それをどのようにしたらよいのか、利家は

「家臣は来るものは拒むことなく、何人でも受入れよ」

と言ってくれているがその本心はどこにあるのか、考えてもよく分らなかった。

年の瀬も押し迫り、年末の挨拶に登城したところ、利家から

「上様がいよいよ小田原北条征討の軍を進めることとなりそうだ。そうすればこの利家も当然参陣しなければならない。正月三日が明けたら利長を伴い年賀の挨拶のために上洛する。その時、具体的なことは分ろう。加賀へ戻ってから高山殿のご意見も承ろう」

と話があった。

今年は雪が少ないという。しかし、雪また雪の山路を越えてこの時期に加賀と都を往復する。それも利家父子が。右近はここに

「前田家としての、秀吉と他の諸侯への見せるべき姿勢」

を垣間見た感じがした。

正月、年賀の挨拶に登城したが、利家は正月行事と上洛準備で多忙なため、挨拶のみに終わった。

小田原への参陣、一緒に行けと言ってくるのか、利長の近くいて、何かと助言をしなければならないのか、出来ることであれば出陣に加わりたくない・・・。

右近は秀吉に対する自分の考えを頭に描いてみた。信長に仕えていた頃の秀吉は、秀吉自ら、己を全く顧みることなく、文字通り命を賭して信長に仕えていた。その仕え方は何人(なんぴと)も真似の出来るものではなかった。秀吉にとって、信長は「神」そのものであったのではなかろうか。秀吉の対信長への姿勢は、「絶対的崇拝」であった。

山崎の合戦で明智光秀を討ち、越前で柴田勝家を滅ぼし、実質的に天下を掌握した頃から変わった。というか、信長の手前押し殺していた我欲が、誰はばかることなく表面にでてきたと考えるべきであろう。

そして、秀吉には「天下統治はかくあるべきだ」という理念も信念もない。天下人としての秀吉の下には本来あるべき行政組織もない。

このまま秀吉の天下が続いたとしても、秀吉の死と共に、再び権力争奪の争いが起きるのは明らかだ。

乱れている天下を、秀吉が統一することによって、争いも餓えもない万民が幸せに暮らせる世が来るだろうと願って、秀吉の天下統一に協力してきたが期待が外れた。むしろ裏切られた思いが強い。秀吉の天下は長続きしない。現在の秀吉は、財の確保と自らの誇示と漁色にのみ権力を使っている。全てが「自分が満足する」ことが最優先であり、相手の「こころ」のことは全く考えていない。人間社会を統治してゆく資格も能力も秀吉にはない。

右近にはこれ以上秀吉に追従する気持ちは既になくなっていた。

バテレン・オルガンチーノから贈呈されたラテン語の聖書を読むことが出来る右近は、聖書を開いて呟いていた。

※心の清い人々は幸いである。その人達は神を見る。

※平和を実現する人々は幸いである。その人達は神の子と呼ばれる。

※義に飢え渇く人々は幸いである。その人達は満たされる。

上洛した利家・利長父子は京に二日滞在したのみで、慌ただしく帰ってきた。利家は城につくやいなや右近に直ちに登城するよう使いを出した。

右近が登城すると、利家は疲れを隠すことなく、脇息に凭れたまま

「高山殿、上様には来月はじめ小田原征討の軍を進める。この利家も上様本陣付きとして、三千の軍勢で付き

従うこととなった。高山殿に三千の中から五百の手勢を預けるので、一方の将として従軍されたい。栗橋嘉門など数名の重臣を貴殿の軍勢の将として配属する。詳しくは家老横山山城守が手配を致そう。追って軍議を致す。二月上旬に出発することとなろう。小田原までの途上にある北条方の城は、上野松井田城、武蔵鉢形城、武蔵八王子城であり、通過を邪魔だてすれば攻めながら軍を進めることとなろう」

ここまで一気に語った利家は

「高山殿、小田原への参陣で、貴殿が現地で上様に拝謁できるようこの利家画策をしてみるつもりだ。上様の勘気が許されれば、貴殿も天下に恐れるものはない」

と言って右近を見つめた。

右近は

「この右近に軍勢五百をお預けになると仰いますが、しばし戦から離れ、どこまでお役に立つのか不安でございます。大殿の側近として加えて戴くと言うことではいかがでしょうか」

と言うと、利家は

「その五百の手勢に利長を加える。しかしその軍勢を指揮するのは高山殿だ。利長ではない。利長に、戦とはこうするもの、と言うことを、実践を持って教えて欲しい。勿論、何かあれば本隊が応援に駆けつける」

両手を畳につき頭を下げた姿勢のまま無言の右近を見て

「高山殿、この利家は、広い天下に貴殿ほどの軍略家はいないと思っている。今までの貴殿の実績がそれを物語っている。前田家に仕えて欲しいとは言っていない。利長を教育して欲しいのだ。高山殿、お分かりか」

このように利家に言われては、受けるしかない。右近は

「身に余る仰せ。有り難くお受けいたします」

と答えた。

その後の軍略会議では、横山山城守が常にリードして、右近は黙っていた。右近の手勢は本隊の直ぐ前に位置して進むこととなった。

細々とした指示は全て栗橋嘉門に任せ、右近は最初に攻めることとなる上野松井田城を囲む山並み、川、道路状況を書き込んだ図面に見入っていた。八王子城、武蔵鉢形城の様子も図面に落としてある。

いよいよ上野松井田城攻略に掛かる軍略会議で、右近ははじめてこの図面を出して攻略作戦を説明した。

「ここは籠城させることなく、一日も早く城から逃げ出させる戦略でいかが。城の中は大凡二百の軍勢と思う。敵が裏山に逃げ出せるよう、裏山側の出口は攻めないで開けておき、左右から火矢を浴びせましょう。正面に我が軍勢が布陣すれば、裏山に逃げるしかないでしょう」

この意見に対して、家老の一人飛騨玄蕃は大声を上げて

「何、これしきの城、総攻めを行ってもみ潰しましょうぞ。高山殿は弱気でいらっしゃる」

と言って一同を見渡した。

これに対して、横山山城守は

「飛騨殿、我々は無事に通過できればよいのだ。ここで無駄な命を落とすことはない。高山殿のご意見に従おうではないか」

と言って利長を見た。利長が

「皆にはいろいろと意見があろうが、ここは高山殿のご意見に従おう」

この一言で攻撃方針が決定した。

翌日は城の左右から大量の火矢を打ち込み、守りが浅い右手から城内へ侵入し、一刻あまりの攻防で城兵は全て裏山に逃げ去った。逃げた城兵が再び城に戻ってくるのを恐れて、城を焼き払った。

武蔵鉢形城、八王子城も殆ど戦らしい戦をすることなく攻め落とした。

右近が、これら三つの城の地形や道路状況、どこから攻めるのが攻めやすいか、などを事前に図面に描いてあることに気がついていた利家は、

「高山殿、三つの城の図面はいかがして手に入れたのか」

と聞くと、右近は

「大殿から小田原出陣をお聞きした段階で、高槻・明石と従ってきた家臣三名を物見に走らせ、描かせたものでございます。攻撃に間に合って良かったと思います」

と答えた。

利家は、同席している利長を見て

「利長、高山殿の戦は、目的をいち早く達するために、どうすればよいか。それと味方の兵も、敵の兵も、殺し合うことを最小限にとどめている。これが戦のあり方だ。ただ力任せに押して行くのが戦ではない」

と言い聞かせた。

小田原では、利家は何とか右近を秀吉に会わせたいと、小田原着陣までの右近の武功を秀吉に話したが、秀吉は乗ってこなかった。しかし、右近が利家の客将として一隊を率いて参陣していることには

「そうか、右近が来ているのか」

と笑顔で頷いていた。

金沢に戻った利家は、利長と右近を招き

「利長、能登の一部一万五千石を高山殿に差し上げる。高山殿の家臣も追々増えてくれば、家臣団を養ってゆかなければならない」

と言った。これを聞いて驚いている右近に対して利長は

「高山殿、お聞きの通りです。是非お納め下さい」

と右近を見て笑顔で言った。右近は

「大殿様、利長様、勿体ないお言葉でございます。身どもはこれからどれだけお役に立つことが出来るのか、不安でなりません。知行地など勿体なくてとてもお受けできません」

ここまで言った右近を抑えるように、利家が

「高山殿、貴殿の新しい知行地にキリシタン寺を二つ寄進しよう。また金沢城下にも一つ寄進しよう。それなら知行地をお受けいただけるな。いかが」

利家のこの言葉に、右近は座布団をよけ、下座に引き下がり平伏して

「大殿様、利長様、身に余るご配慮を賜わり、右近、御礼の言葉もありません。有り難く拝領仕ります」

と礼を述べた。

帰宅して妻と息子に一通りのことを話してから、自室に閉じこもった。妻がお茶を入れてきたのにも頷くのみ。

右近には利家父子の考えが理解できなかった。

秀吉の勘気が解けていない右近に、単なる客将でなく、小大名とも言える禄を与え、その上知行地と金沢に天主堂を利家自らが寄進するという。

利家以外の大名がこのようなことを行ったとしたら、それこそ謀反の言いがかりをつけられるであろう。

利家と秀吉の関係だから、出来ることだ。しかもキリシタン容認どころか、金沢城下に天主堂を作ると言うことは、右近知行地のみでなく前田家領内での布教も堂々と認めようと言うことだ。利家は秀吉のキリシタン対応について何か情報を握っているのか。

それと、前田家からこのような待遇を与えられて、前田家の中での自分の立場はどうなる？　子飼いの家老や重臣達に対しての身の処し方はどうすれば良いのか？

もう戦はしたくない、敵も殺したくない。家臣も勿論殺したくない。秀吉の天下統一にこれ以上協力したくない。

しかし、前田家存続の条件は、秀吉の在世中はもとより、秀吉後のことを考えても、今は、他のどの大名よりも秀吉に協力して行くことが必要だ。そのような立場の前田家から協力要請があった場合、断れるのか。一万五千石の知行を与えられた以上、断ることは出来ない。

自分としては早く、一日も早く、信仰の世界にのみ生

きる自分でありたい。

雨戸の隙間からいつの間にか外が白んでいるのが分かった。

その年の八月、堺の利休から手紙が届いた。

「六月二十日にヴァリニャーノ師が天正少年使節団を率いて長崎に戻った。秋には秀吉への土産を持って上洛するであろう。表向きキリシタン禁制となっているので、一歩間違えると大変なこととなる。ヴァリニャーノ師を、キリシタン・バテレンでなく、インドの外交使節として秀吉と正式に合わせたいと思う」

と認めてある。内容が内密なものであるだけに、利休は小西行長の「小西家」から「前田家の高山右近」宛とした大名飛脚便を使っていた。

この手紙を読んだ右近は、「上洛してヴァリニャーノに会いたい」という思いを抑えることは出来なかった。幸いヴァリニャーノの上洛まで日数はある。その前に新たな知行地の支配体制も確認しなければならない。

右近は急遽登城して、利家に

「大殿から賜わった知行地、能登へ二～三ヶ月行って、自分なりに地域情勢を見て、また一向宗徒の動向も観察し、これからの能登支配のあり方を考えたい」

と申し出た。利家は

「高山殿、高山殿の領国支配の手法を利長に見せてやってくれぬか。学ばせたい」

と言い出した。驚いた右近は、咄嗟に

「見張り役か」

とも考えたが、利家が利長の教育を頼む、と言った言葉は嘘ではなく、折りある毎に、利長の教育の場を作りたいと常々考えていたことからの着想と思い直し

「この右近、ご聡明な利長様のご意見も賜わりながら知行地の支配体制を作らせていただきます」

と礼を述べた。

右近は、一人、また一人と加賀へ集まって来た高槻・明石以来の家臣を伴い能登へ入った。この時には既に二十五名を越えていた。彼は能登での今までの支配体制人事をそのまま認め、自分の連れてきた家臣には、家臣団の住宅建築に当らせながら、税をはじめ従来の支配体制をそれとなく見ておくことを命じていた。

また、右近は利長と共に、地元の役人に案内させて知行地の隅々まで馬で回った。

利長は、この間右近父子と日夜行動を共にして、右近父子と家臣達の朝夕の祈り、食前の祈りにも同席して、キリシタンの信仰生活に接していた。

翌天正十九年（一五九〇）二月初め、利休の娘お吟の

訃報が届いた。

それは一月二十三日の朝、白無垢の衣装のまま、お吟は床の中で息絶えていたという。死因は自殺ではない。他殺でもない。その日は午前中に秀吉からの迎えの駕籠が堺の利休屋敷へ来ることになっていた。

秀吉から側女として聚楽第に上がるよう命令があり、父利休の立場を考えて断ることも出来ず、キリシタンとして教えに背く自殺をすることも出来ず、お吟は苦しんでいた。その苦しみを知ったデウスが、人知れずパライソ（天国）に招いたのであろう。

秀吉の御殿医が検視に来たが、自殺でもなく、他殺でもなく、死因は「心の臓の突然死」と秀吉に報告された。

これを知った右近は、益々秀吉に対して、人間としての不潔感を抱いた。お吟の悩みを聞き、慰め、力になることの出来なかった自分を自分自身で責めていた。それと共に秀吉がお吟を側女に求めてきたときの、父親としての利休の苦しみに、また立たされた立場に、何とも言葉に尽くせない同情を禁じ得なかった。むしろ秀吉への怒りを感じていた。

追い掛けるように翌三月、利休が秀吉から「賜死……自宅での切腹」を命ぜられ、死亡した知らせが届いた。大徳寺山門に、雪駄を履いた己の像を掲げ、秀吉にその下を潜らせた不敬罪だという。堺の自宅で切腹するよう命ぜられた。

右近にとって利休は茶道の師である以上に、利休茶道の「侘び」「寂び」の世界を通して人間のあり方を教えられた師でもあった。

お吟の死、利休がどれほど悲しみ、悩んだことか。秀吉が利休に死を命じたのは、むしろ利休は喜んだのではなかろうか。その理由が、大徳寺山門事件という言いがかりであっても、利休は喜んで死に赴いたのではなかろうか。

あと一つ右近が絶対に許せないと思ったことは、秀吉にとってお吟の死の「バツの悪さ」である。お吟の美貌を聞いて側女としようとして、死をもって反抗されたその「バツの悪さ」は、利休がいる限り続くものである。利休さえいなくなれば、そして茶道頭を別人に命じれば、秀吉自身、利休のことやお吟のことを忘れ去ることが出来るだろう。秀吉が「利休は目障り」と考え、利休に対して理屈をこじつけて「賜死・自宅での切腹」を命じたに違いないと考えた。

右近は、ヴァリニャーノが天正少年使節団を引き連れて秀吉に謁見し、秀吉から行動の自由を保証された知らせを受け、利家に「ヴァリニャーノに会いたい」と、しばしの上洛を願い出た。

利家は

「高山殿、前田家の伏見屋敷をご自由にお使いなされ。利長を連れて、ヴァリニャーノ師はじめ、多くの方々にお目に掛かる機会を設けてくだされ。利長も良い経験を積むこととなろう」

と快諾した。

右近は内心、ほんの一瞬であったが「また監視付きか」と思った。しかし、右近の生き様と思想を利長にそのまま理解して貰うことも将来的に大切なことと考え、利長を伴うこととした。

右近父子・利長が上洛してヴァリニャーノの宿舎を訪問したのは四月の初めであった。五月の初めまで、右近は毎日のようにヴァリニャーノと、これからの日本でのキリシタン布教のあり方や現状分析を、利長同席のまま行っていた。右近は堺の利休屋敷に夫人を訪ねて、利休とお吟の死を一言慰めたいと思っていたが、利休は「罪人」でもあり、また利長の手前もあって訪問はしなかった。

右近達は長崎に戻る天正少年使節団にも会うことが出来た。彼らは右近の流暢なポルトガル語と、ラテン語の聖書理解に驚きを隠さなかった。そして右近の長崎来訪を切望した。

五月初め、加賀へ戻らなければと言う時に、利長が突然

「高山殿、ヴァリニャーノ師、キリシタンの洗礼を受けるにはどうしたらよいのか。高山殿父子のような清廉な生き方はどうしたら出来るのか。身どもも是非洗礼を受けて高山殿を人生の師と仰ぎたい」

と言いだした。

利長の表情は固く真剣そのもので、考え抜いて発言している様子がうかがえる。

ヴァリニャーノは一瞬喜んだが、右近の厳しい表情を見て右近の言葉を待った。

小幡洋次郎氏のこと

吉田忠雄

一．はじめに

小幡洋次郎氏とは知り合ってからまだ五年である。自分から言うのもおかしな話だが、氏は私の親友の一人である。小幡洋次郎（旧姓　上武洋次郎）氏は東京、メキシコ両オリンピックの金メダリストである。普通ではお近づきになれない人である。幸いにそういうことを感じさせない人柄なので、甘えて付き合いをさせていただいている。

私は縁あって故郷足利に職を得て、小幡氏と親しくなった。しかし、私も七五歳の高齢であり、現在の職も期限があり、小幡氏とも将来疎遠になる可能性がある。最近、小幡氏は國際レスリングに対する貢献によって國際レスリング連盟殿堂入りをされた。

この機会に私はこの偉大な親友の来歴を記憶にとどめるためにこの一文を記すことにした。

二．生い立ちと経歴

上武洋次郎氏は、昭和一八年群馬県邑楽郡長柄村（現在の邑楽町大字篠塚）に父上武万蔵氏、母静子さんの次男として生れる。

父君はすでに他界されたが、母堂静子さんは、現在も矍鑠として自宅で野菜を栽培し、これを愛息に分け与えている。

長柄村立長柄小学校、同長柄中学校を卒業

父君万蔵氏は、長柄小学校校長、邑楽中学校校長等を務められた。

昭和三三年	群馬県立館林高等学校	入学
同　三六年	同校	卒業
同年	早稲田大学	入学
昭和三七年	米国オクラホマ州立大学	留学

オクラホマ州立大学はレスリングのメッカである。

この留学には、当時群馬県レスリング協会会長をしていた正田文男氏及び日本レスリング協会会長をしていた八田一朗氏の尽力があった。

昭和四二年	オクラホマ州立大学	卒業
昭和四三年	小幡久子さんと結婚、小幡性となる。	
平成元年	株式会社ニューミヤコホテル	社長
平成三年	足利市教育委員会	委員
同　一二年	同委員会	委員長
同　一五年	同委員会	退任

三．中学、高校時代

ここに書いたことは、主として平成一四年四月二三日に足利短期大学の学生の前で講演していただいた「私の教育談義―子育て論―」、小幡氏の随筆「先生」（季刊群馬、七六号、一六―二〇頁、平成一五年）及び新聞等のインタビュー記事から採ったものである。

中学時代の上武洋次郎少年は運動が大好きで、三年生まではテニスを、三年生後半では柔道をやっていた。中学三年生の八月お盆前に1週間、隣町の館林高校で近隣の中学生を集めた土用稽古が行われた。洋次郎少年もこれに参加した。柔道の稽古は午前一〇時から一二時までであった。このとき隣でレスリングの合宿が行われていた。洋次郎少年は始めてレスリングを見て、これに興味を持った。

レスリングの午後の練習は午後三時から始まるので、一週間毎日、柔道の練習が終わってから昼寝をして、レスリングの練習を見学した。洋次郎少年は、柔道は一階級体重制で自分のような小さいものには不利だが、レスリングは八階級体重制で非常に合理的であると感じた。

それまでは別の隣町の太田高校に入学することを考えていた洋次郎少年は、この合宿を見て考えが変わり、館林高校を受験して優秀な成績で合格した。早速館林高校レスリング部の久保田利重先生にレスリング部入部を頼んだ。久保田先生は、洋次郎少年に「どこの誰か」と聞く、洋次郎少年はそれに答える。先生は洋次郎少年のお父さんを知っていた。先生は「お前は結構いい成績で合格している。レスリング部なんかに入ると大学進学に差し障りがある。親にしかられないか？」と気遣った。少年は「自分で決めたことですから、おこられても是非入部したいと思います」と言った。

久保田先生は早速帰りに洋次郎少年の家に寄り、少年のお父さんと話し合った。お父さんは「あれはどうも勉強ができないわけではないが、特に勉強が好きではないようだ。勉強で大成するとも思えない。本人が自分で決めたことだから、是非やらしてやってください。」と言われた。ここで将来の金メダリストへの道が開かれた。

洋次郎少年は、館林高校のレスリング部に入部してか

ら半月くらいは、今まで経験したことのない激しい練習で、トイレで座るのも階段を上がるのも大変だった。それでも稽古は大好きで、三年間一度も休まなかった。朝稽古のために毎朝一般の生徒より一時間半も早めの電車で学校に行った。また帰りは毎日練習を終えた後六時過ぎの電車で帰った。

久保田先生も、行きも帰りも同じ電車で三年間何時も一緒に通った。久保田先生の指導は熱心であった。先生は放課後何時も練習に付き合い、先生方の会議の始まる放送があってもなかなか行こうとしなかった。洋次郎少年はそんな先生が大好きであった。

東京で大学生や社会人のレスリングの試合がある時は、久保田先生は見学に行くように勧めてくれた。洋次郎少年らも良くこれに応え、試合を一生懸命見て、一人一つずつ新しい技を持ちかえり、練習しようと約束した。

館林高校はレスリングの名門校である。多くのOBや大学生が合宿に訪れた。久保田先生は彼らの面倒をよく見て、彼らを招いて館林高校レスリング部員の指導をしてもらった。

洋次郎少年が高校一年の時のクラス担任は内田昭淳先生で、早稲田大学を卒業して館林高校に赴任してからレスリングを始めたが、毎日稽古にきてくれた。そして稽古に熱中して学業生成が下がる洋次郎少年を励まし続けた。

上武洋次郎少年はレスリングでひとかどの者になるために努力をした。私は親しくなってから小幡洋次郎氏に「小幡さんはレスリングに関しては天才ですね」と言ったことがある。「私は天才ではありません。努力の人です」と怒ったような口ぶりの言葉が返ってきた。本人がそう思っているのでは反論のしようがない。

高校時代の洋次郎少年は自分からも色々な努力をした。最初の頃は、レスリングの試合でよく負けた。始めたばかりであるから当然である。洋次郎少年は、これは体力がないからだな、上腕が弱いからだな、と考えた。昼飯を食べた後の三〇分の休み時間に、道場に行き三〇kgのベンチプレスを二〇回五セット毎日やった。何時の間にか腕が太くなり、筋肉がついた。

当時の風呂桶の風呂に入ると、桶の両端につかまり体を持ち上げる腕の筋肉強化運動を毎日二〇回行った。毎日電車で篠塚から館林の成島まで通う間、つり革につかまって握力増強の練習をした。帰りに駅についたら、稽古で疲れてはいたけれども家まで走って帰った。

レスリングの技についても研究をした。先輩から投げ飛ばされると、翌日はその技を先輩に聞く。そのとおりやったら同じように相手を投げ飛ばすことができた。できたら嬉しい。励みになる。今日は先輩があんな技を使った。明日は早速聞いてみよう。

洋次郎少年は高校入学後三ヶ月めに東京で行われたレスリングのアジア大会を見た。これが洋次郎少年の心に一つの転機をもたらした。今までは、彼の目標は、スカウトされて大学に入ることであった。今や目標はユニホームに日の丸をつけた日本を代表する選手になることになった。

洋次郎少年はその素質と努力によって高校在学中に上の目標を達した。昭和三五年一二月三一日横浜港を出港して米国カリフォルニヤ州に三〇日間の遠征をする第一回日米高校選抜チームの一員に洋次郎少年も加えられたのである。ユニホームに日の丸をつけて転戦した。

洋次郎少年はレスリングでめきめき腕を上げた。同時に館林高校レスリング部も強く、小幡少年が高校二年生のときは、関東大会団体優勝を果たした。三年生のときは、関東大会インターハイに優勝した。高校三年生のときにはさらに全日本アマチュアレスリング選手権大会に出場し、大学生や社会人を相手に三回戦まで進んだ。

洋次郎少年がここまで進歩したのには、レスリングの精進だけでなく、節制と克己もあった。洋次郎少年が高校二年生のとき館林高校の男子生徒が館林女子高校の生徒と東武の夜行電車で赤城まで行って、スケートをやって帰ってくるという計画を立てた。洋次郎少年も誘われた。洋次郎少年は、スケートをやって怪我をしたら大変だと思ってこれを断った。この旅行で喧嘩がおこり、殺傷事件に発展し、関係者は退学させられた。

同じく二年生のときに三泊四日の関西方面への修学旅行があった。洋次郎少年は計画的な貯金もした。しかし彼は、一週間後に行われる国体のことを考えてこの修学旅行には参加しなかった。

正田文男元群馬県アマチュアレスリング協会会長も上武洋次郎少年の良き後援者であった。同氏は早稲田大学でレスリングをやっていたが、館林に帰り、直ぐに館林高校にレスリング部を創設した。そして第一回全日本高等学校レスリング大会を館林で開催した。館林高校レスリング部はこの大会の覇者となり、同氏の努力に報いた。

洋次郎少年は正田文男氏の勧めにより早稲田大学に進んだが、洋次郎少年を早大にスカウトしたのは早大レスリング部監督の永里高平氏であった。氏は正田氏を先輩として大変慕い、尊敬していた。

四、大学時代

洋次郎青年が早大に入学すると、監督は永里氏から白石剛達氏に交代した。洋次郎青年が入部したこの年、早大レスリング部は関東大学リーグ戦で第二位となった。部員の少ない早大としては大変な快挙であった。

八田一朗氏も洋次郎青年の恩人である。氏は、早大で柔道をやり、大家であった。講道館の嘉納治五郎氏の秘書役も務めた。氏が日本柔道チームの一員として渡米した際にアメリカンスタイルのレスリングと接する機会があった。恐らく氏は感ずるところがあり、日本にレスリングを紹介し、早大にレスリング部を創設し、また日本アマチュアレスリング協会を設立した。そのために、氏はしばらくの間日本柔道界から破門されていた。

氏の長男正朗氏と次男忠朗氏は、慶応の幼稚舎から高校に進み、当時オクラホマ州立大学に留学し、レスリングをやっていた。昭和三六年年には八田正朗氏がオクラホマ州立大学を卒業する予定であった。その穴をうめる為に、オクラホマ州立大学の関係者は八田一朗日本アマチュアレスリング協会会長に、日本の五五kg級から五七kg級の選手の派遣要請をした。

同年前述した正田文男氏は、米国トレド市で開かれたレスリング世界選手権大会に日本チーム役員として参加した。八田氏とオクラホマ州立大学レスリング関係者の話し合いの場にいた正田氏は、すかさず上武洋次郎氏を推薦した。早大の関係者達は洋次郎青年の留学に難色を示したが、八田会長、正田文男氏の熱心な説得によって洋次郎青年のオクラホマ州立大学留学は決まった。オリンピックの金メダルに一歩近づいた。

私は平成一二年に、足利工業大学と足利短期大学がアメリカのイリノイ大学スプリングフィールド校とリンカンランドコミュニティーカレッジとそれぞれ姉妹校協定を結ぶために、イリノイ州のスプリングフィールド市に行った。小幡洋次郎氏は、足利市とスプリングフィールド市との姉妹都市締結一〇周年記念行事の為に足利市教育委員長として同時にスプリングフィールド市に行った。私は小幡洋次郎氏と始めて1週間ご一緒した。縁とはありがたいものである。以来親しいお付き合いをいただいている。

ある晩、他の人達がジャズバーでジャズを楽しんでいる間、私は通訳の黒木女史と共にジャズバーの外のテーブルで、洋次郎青年の米国オクラホマ大学におけるレスリング修業時代の話を伺った。大変強い感動を覚えた。苦しい経済状態の下での生活、厳しい練習、着実に上がっていく成果、招待されてご馳走をいただいた僅かな時の楽しみ、家から本を送ってもらって読んだこと、そこでできた友人のことなど、私はそこが金メダルへの階段であったこと感じた。

昭和三七年オクラホマ州立大学に留学した洋次郎青年は独自の練習法を編み出した。米国では、全米大学体育協会のルールで、全米学生選手権大会が終わってからの夏休みは、マットが片付けられ練習が出来ないようになっていた。高校時代から一年三六五日練習してきた洋次郎少年は困った。どうしても練習がしたいので、道場

のガラスを破って中に入り隠れて練習した。当然しかられたが、そのうち黙認してもらえるようになった。又仲間も誘って練習した。

アメリカンフットボールの練習も参考にした。これをレスリングの稽古に生かすために、アメリカンフットボールのトレーニング方法を見て取り入れたり、相手を押す機械を使わしてもらったりして足腰を鍛えた。フットボールスタジアムならオフシーズンや日曜日でも一人で練習が出来た。フットボールスタジアムに行くのにも坂道を丸太を担いで駆け上がった。

オクラホマ州立大学留学中の洋次郎青年の進歩に欠かせないのは、同大学の名コーチ、ローデリック氏の存在である。ローデリック氏は飛行機投げの名人で、洋次郎選手の飛行機投げはローデリック氏と早大レスリング部監督白石氏から伝授された。ローデリック氏は最後まで基本に忠実な指導をした。

上武洋次郎選手は、昭和三九年には日本に帰り全日本アマチュアレスリング選手権大会に出場し、勝ち抜き、優勝した。

同年、東京オリンピックではフリースタイル・五七kg級レスリングでみごと優勝し、金メダルを獲得した。このときの様子は、一枚のDVDに収められている。

東京オリンピックでは日本はレスリングで五個の金メダルを獲得したが、上武洋次郎選手は、レスリングの最後の試合に登場し、観客を最も興奮させ、日本人をテレビに釘づけにした。

東京オリンピックの時のレスリング会場の表彰式で、表彰される一、二、三位の選手の後ろに上がるそれぞれの国旗は風になびいていた。そのアイデアを思いついて実行に移させたのは、当時オリンピック組織委員会に出向していた野木村浩元群馬県アマチュアレスリング協会会長であった。

柔道の大家であった野木村氏は、館林高校レスリング部の創設者正田文男氏に請われて、館林高校レスリング部の初代部長となった。館林高校レスリング部は第一回全日本高等学校レスリング大会で優勝し門出を祝った。

洋次郎青年の早大時代のレスリング部の監督白石剛達氏は、東京一二チャンネルの副社長等を歴任した人であるが、東京オリンピックの際は解説者を務めた。上武洋次郎選手の出場するレスリングの決勝戦では、洋次郎選手を声をからして応援した。

東京オリンピックを優勝で飾った上武洋次郎青年は再びオクラホマ州立大学に戻り、レスリング部のアシスタントコーチを務めながら、選手としても活躍した。昭和三九年から四一年にかけて、全米学生レスリング選手権大会で三連覇を成し遂げた。そして昭和四〇年と四一年には同大会最優秀選手に選ばれた。

上武洋次郎青年は、昭和四二年にオクラホマ州立大学

を卒業した。

五．メキシコオリンピック

上武洋次郎青年には、当時足利市駅前で旅館を営んでいた小幡家への婿入りの話が持ち上がり、昭和四二年一二月に帰国した。そして小幡久子さんと婚約した。恐らく上武洋次郎青年は、美しく聡明な小幡久子さんを見て直ぐに結婚を決めたものと私は思っている。

帰国した翌年恩人八田一朗氏から「暇なら全日本の合宿に来い」と頼まれた。昭和四三年のメキシコオリンピックに向け、全日本レスリングチームの練習が始まっていた。気がつくと、そのときのレスリング五七kg級（現在のバンタム級）の日本代表候補より洋次郎青年の方が強かった。洋次郎選手は、昭和四三年全日本アマチュアレスリング選手権大会で優勝した。

昭和四三年東京で行われたメキシコオリンピック一次予選では、当時の世界チャンピオン、ロシアのアリエフに決勝で勝った。

平成四三年一〇月に行われたメキシコオリンピックでは試合中に左肩を脱臼した。それでも試合を勝ち抜き、ついに優勝し、オリンピック二連覇を果たした。

館林高校レスリング部の恩師久保田利重先生は、優勝が決まって洋次郎選手が控え室に一人でいた時に部屋に入ってきた。今まで涙を見せたことのなかった洋次郎選手も涙が止まらなかった。先生の目にも涙があった。表彰式が終わって、皆一緒に記念撮影をした。このときの久保田先生は二度の栄光を手にした教え子を肩車して写真に撮り、嬉しそうであった。

同年一一月には、かねて婚約中であった小幡久子さんと結婚し、小幡洋次郎氏となった。

故郷邑楽町は熱狂した。帰国後オープンカーに乗って町内を優勝パレードした。沿道では町民が旗を振って熱狂的に郷土の英雄をたたえた。邑楽町は小幡洋次郎（旧姓上武洋次郎）氏に名誉町民の称号を送った。

国も放って置かない。天皇陛下から金杯を賜る。内閣総理大臣表彰を授与さる。天皇陛下主催の園遊会に招待される。朝日賞を授与される。

六．その後の小幡洋次郎氏

オリンピック二連覇をした小幡洋次郎氏は小幡家に婿入りした。岳父小幡平三郎氏は出来た人で、婿の洋次郎氏に旅館の経営は自分が元気の間は心配しなくとも良いから、後進の育成に尽くせと言ってくれた。

私も二〇歳頃小幡平三郎氏と付き合ったことがある。小幡さんの家も私の家もタバコの販売をしていた。小幡平三郎氏と私は足利の専売局野球チームのメンバーであった。平三郎氏は背が高く一塁手、私は中堅手であった。平三郎氏は大先輩であったが、かわいがってくださった。

小幡洋次郎氏のその後の日本レスリング界への貢献は目覚しいものがあった。昭和四七年のミュヘンオリンピックでは日本レスリングチームのコーチを務めた。昭和五一年のモントリオールオリンピックでは同じく日本チームの監督・コーチを務めた。

小幡洋次郎氏は積年のレスリング界への貢献により数々の栄誉を与えられた。昭和五五年には米国レスリング協会殿堂入りをした。平成一二年には全米学生レスリング連盟によって一九六〇年代のベストレスラーに選出されている。平成一七年には全米学生レスリング連盟創立七五周年アニバーサリーチーム一五名に選出されている。そして平成一七年一〇月ハンガリーのブダペストで開かれた國際レスリング連盟の総会で同連盟の殿堂入りの名誉が与えられた。

小幡洋次郎氏は上述の社会的貢献のほかに地域貢献もしてきた。結婚してから四年間足利工業大学の非常勤講師として学生の教育をしてくれた。又自分の体力維持の為に足利工業大学附属高校に七、八年間稽古に来られた。この間に足利工業大学附属高校からは名選手が輩出し、全日本高校レスリング選手権大会で優勝したこともある。又小幡洋次郎氏には足利工業大学は評議員をお願いし、その議長を経て現在は理事をしていただいている。

平成三年から一五年まで四期一二年間にわたって足利市教育委員会委員を務められ、その最後の三年間は委員長を務め、足利の児童・生徒の教育の改善に尽力された。

足利市警察官友の会の幹事としても尽力されている。余談になるが、この会は定員五〇名で、悪い人は入れない。不肖私も会員とさせていただいているが、ここで多くの良き知人を得た。

小幡洋次郎氏は、金メダリストとして後進を育成するという社会的責務を果たした後、社業に専念した。

モントリオールオリンピックの監督を終えた頃、足利市駅前の再開発計画や渡良瀬川の堤防の増幅工事があり、それまでの家業であるみやこ旅館の一時移転とホテルへの転進の話が持ちあがった。平成五九年には足利市駅前ビルにニューミヤコホテルを作った。現在足利と館林に三つのホテルを所有し経営している。平成元年には株式会社ニューミヤコホテルの社長に就任した。熱心にホテル経営に携わっている。常務取締役の奥様の貢献も大きい。また娘婿の英樹氏も育ってきて、この貢献も大きい。

七．良き師良き友

小幡洋次郎氏は随筆「先生」の中で述べているように、良き師に恵まれた。一方小幡氏は先生に良く従い、先生を大事にした。本稿でまだ述べていなかった一人の小幡氏の先生について述べる。

館林在住の兵藤三郎群馬県アマチュアレスリング協会会長は小幡洋次郎氏の親しく敬愛する先生である。兄のように慕っている。小幡氏は酒が好きであるが、酒が入ると「兄貴」、「兄貴」といって兵藤氏のお宅に電話する。兵藤夫人の芳子さんにも大事にされている。

小幡氏の話によれば、兵藤氏は根っからの親分肌の人である。金曜日、土曜日となると毎晩多くの後輩達が押しかけて、奥様の芳子さんの親切に接する。その席には必ず酒やビールと多くの料理が出る。在米時代の洋次郎青年の頭の中には何時も楽しい兵藤家の集まりが頭にあったそうである。

館林はつつじの名所である。兵藤氏はこの季節になると船を一艘借りきり、親しい人達を招待して、花見の宴を催す。お客は仕事で世話になっている小倉金属の人達、小幡氏をはじめとするレスリングの後輩達、親しい安楽岡県会議員と小幡氏の縁で招待された私と谷、町田、川島の各氏である。

午前十一時に現地に集合し、船に乗りこんで酒盛りが始まる。肴は客の夫人たちの手作りの料理である。兵藤氏はどっかりと座り、にこにこしながら黙々と杯を口に運んでいる。お腹が温まった頃になると、皆つつじヶ丘公園に上陸し、満開のつつじのあいだを散策し、記念撮影をする。それからまた船に戻り、酒盛りが再開される。

夕方には船を降り、館林のミヤコホテルで二次会が開かれる。ここでは婦人方も参加してカラオケが歌われる。それが終わると小人数であるが、兵藤家に押しかけて三次会が行われる。芳子夫人はいやな顔一つせずにこにこと世話をしている。

小幡氏は良き友を持っている。私はそのおこぼれにあずかり幸せである。小幡洋次郎氏は酒が好きである。気楽に飲めるということで「志まや」という蕎麦やをひいきにしている。ここの主人の川島謙一氏とその親友の町田造園社長の町田文夫氏とは親友である。私はアメリカにご一緒した時このことを教えられ、それから仲間に入れていただいている。

警察官友の会の顧問医師と小幡氏の主治医という関係で、谷二郎・源一父子と知り合いになった。谷二郎先生は酒脱な方で私にとっては尊敬すべき優しい方であった。残念ながら最近物故された。谷二郎先生の縁で中井利昌氏とも知り合いになった。

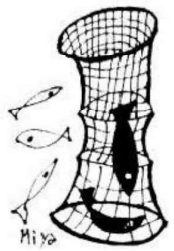
小幡氏は早大には一年しかいなかったが、足利出身の早大の同級生とは仲がいい。なにかの折には冗談を言いながら一緒に酒を飲んでいる。早大の一年後輩になるが足利ガス社長の石川尚志氏とは仲がいい。私は石川氏とは多少の縁があり、共通の友人にしてもらっている。詳しいいきさつは知らないが、小幡氏は両毛ヤクルト会長の相馬省二氏とは特に親しいようである。

木村好文氏は足利出身の県会議員であるが最近県会議長になった。足利ソフトボール協会会長であり、この関係では私も前から知っていた。最近、小幡氏と木村氏はオール足利野球チームの後援会の会長・副会長として、また、同年齢という関係からも親しいことを知った。野球チームの宴席や、木村氏も懇意にしている蕎麦店「志まや」で親しく酒を酌み交わしている。私も時々それに付き合う機会を得た。おかげで私は木村好文氏とも親しくなった。

平成一七年一〇月に小幡洋次郎氏は國際レスリング連盟殿堂入りをした。この後各地で祝賀界が開かれた。私は、館林と足利で開かれた計三回の祝賀会に出席した。全て会場が満員となる大盛況であった。

館林での会は、兵藤三郎群馬県アマチュアレスリング協会会長の主催になる祝賀会であった。レスリングのオリンピック金メダリストが一〇人以上集まった。その他有名なレスラーが多数集まった。八田正朗氏もアメリカからかけつけた。

この会では小幡氏の謝辞はレスリングでお世話になった人々への感謝の言葉と著名なレスリング関係の参会者の紹介が主なものとなった。日本にレスリング王国を築いた人々を目の当りして私は感動を禁じえなかった。また他の祝賀会会場でも、小幡氏の謝辞はその会場にふさわしく、また立派なものであり、小幡氏の人柄を表すものであった。



文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生

松下魏三

三、千濱の海と幼少年時代

遠州灘の波の上に朝日が燦然と照り映え、遥か東北方には悠然と聳え立つ富士山を仰ぎ見ることのできる古里千浜の絶景は格別である。そして日本三大砂丘の一つである南遠大砂丘のなかの千浜砂丘は、北に聳える小笠山と戦国の存亡をかけた高天神城合戦の地とともに自然と歴史が美しく調和している。

夏になると朝霧が立ちこめる砂防林の彼方から村の青年たちが叫ぶ大漁の掛声が谺し、鉢巻き姿の若者が駆け出す活気に満ちた村里は子供たちの心が弾む時である。

そして夕方になり、遥か西の天竜川の河口に近い掛塚の燈台の灯が見える頃になると、西の海に沈む太陽は遠州灘の荒波に反射して金波銀波となり、刻々と水平線の彼方に金色に輝きながら真紅な光を放ち青い海の彼方の雲を茜色に染めて静かに沈んでゆく光景は、素晴らしい一幅の絵のようである。

夏から秋にかけて毎年台風が襲来するが、猛烈な風と豪雨と高波によって海水は第一砂丘を越えて第二砂丘の近くまで流れ込み、砂丘と砂丘との間に大小さまざまの水溜り（池）ができ、大きいものは長さが三十～四十メートル・幅は約十メートル・深さは二メートルに及ぶ池が一夜にして出現するが、晴天が続くと水分は蒸発して数日後には深さも一メートル程度となり、小さい水溜りを含めると数十の水溜りができる。

この水溜りは村の子供にとって絶好の遊び場で、南側の遠州灘の海水と比べると波もなく深さも程々で、安心して泳ぎができる天から贈られたプールであった。

四郎は毎年この時期になると隣近所の友達とともに毎日この天然のプールで水遊びを楽しんでいた。

秋分の日が過ぎる頃には心地よい秋風が吹いて、水溜りの周辺には葦やすすきやえのころぐさなどが茂り、その中をコウロギやバッタやカマキリなどの昆虫が群をなしていた。そして赤トンボや塩辛トンボなどさまざまなトンボが飛び交い、さながら昆虫天国であった。

子供たちは毎日のようにこの水溜り周辺に集まって、トンボを生け捕りにすることを楽しんでいた。トンボを捕えるために、山から〝うめもどき〟の実をとって来て、ヘタと赤い実との間に母親の長い髪の毛を結びつけたものを一対にして空に高く投げ上げると、トンボは赤い実を餌と間違えて近づき、髪の毛にからまって地上に落下して来るので、水溜りの周辺では好みのトンボを捕えて喜ぶ少年たちの喚声が毎日絶えなかった。

木枯しが吹いて西風が強くなると砂嵐が発生し、砂丘の上に立っていると頬に当たる砂粒で痛みを感じるようになる。元気のいい子供たちは家から二キロメートル足らずの海岸砂丘まで、寒風をものともせず冬のマラソンをして互いに競い合うのがこの地域の年中行事であった。

多くの子供たちにとって冬の遊びは寒い海に行くよりも家に近いところの雑木林や海岸砂防林のなかでの遊びであった。

特に人気の高いのはトリモチを作って目白を捕えることである。近くに自生している太いモチの木から表皮を切り取り、水に数日間浸して腐らせてからその皮を石で叩いていくと粘り気の強い褐色のトリモチが出てくるので、程よい粘りが出てきたトリモチを竹の枝に満遍なく伸ばして着け、雑木林の枝に仕掛け、目白がトリモチに足をとられてもがくのを待つのである。子供たちは思い思いの場所に隠れて、目白に気付かれないようにじーと固唾を呑んで鳥の来るのを待つのはつらいが、仕掛けにかかってばたばたする目白を急いで捕える楽しみは何も替えることが出来ない醍醐味であった。

そして春になると荒波の遠州灘はうねりが穏やかになり、蕪村の「春の海終日のたりのたり哉」の句のように、暖かい春風とともに波も静かに磯辺を洗い、遠くから地曳網の船歌が聞えてくる長閑な海辺も急に騒々しくなってくる。

四郎は友達とともに漁師たちの中に入って地曳網を引き、網が磯辺に引き上げられ、大小さまざまな魚が飛び跳ねるのを固唾を呑んで見入っていたのである。何時も温和で素直な四郎少年は漁師たちに可愛がられ、水揚げされた漁獲の一部を報酬として戴くことが多かった。

晩年になって、赤堀四郎先生は懐かしい幼少年時代の千浜の海を思い出し、「わが青春」と題する自伝の中で『昭和六十二年八月三十日・何十年ぶりかで生れ育った千浜の地を家族や親せきの人たちの協力で、娘や孫たちと一緒に訪れることができた。残暑はきつかったが、快晴で久々に見る遠州の澄んだ青い空、幼い頃から聞き慣

れた潮騒の音・何もかも懐しく、長年の望みが満たされた満足感と懐しさがない交ぜになって心の洗われる思いであった。

特にうれしかったのは同行した中学生の孫に、南遠の砂丘の上から荒波の寄せては返す遠州灘を見せてやれたことである。黒潮の流れる広大な海原に見入っている孫に、おいの一人が、君のおじいさんは子供のころ毎日のようにこの壮大な海を見て育ったんだよ。だからこの海原のように心の広い人になったんだ』と語っている。

現在のように潮騒橋や天然温泉「シートピア」などの近代的な施設はなかった明治三十年代は海は漁業の場であり、また憩いの場であり、遊びの場でもあった。四郎は時々海に行き、村の大人たちとともに地曳網を曳き、親しい友と将来の夢と希望に胸をときめかせる絶好の場でもあった。そして果てしなく続く広大な遠州灘を眺めながら遥か彼方から聞えてくる潮騒の音は子守歌であり、青春の賛歌であった。

波打ち際から二キロメートルも離れていない四郎の家では何時も波の音が一定の方向から聞えてくるし、波音の高低で明日の天候を予測することが出来た。この天気予報は今も同じで遠州の七不思議の一つである。

（つづく）

金沢から、またひとつ、「昔」が消えた

伊治　哲

二月の初め、一通の手紙が届いた。

裏書に「金沢市、ぼたん、松田芳枝」とある。

「ぼたん」の〝おばさん〟である。最近は、四、五年に一度訪ねるくらいだが、今年も正月に元気な筆づかいの年賀状をもらったばかりだ。この時季に分厚い封書とは、いったいなにごとだろうと急いで封を切った。

「戦後一年目の開店から六十年間、みなさまのご愛顧とご支援をいただいてきました『茶房・ぼたん』を、都合により二月十四日をもって閉店することにいたしました。いろいろな思い出がいっぱい詰まったお店で、ごひいきを頂いたみなさまには誠に申し訳なく、心苦しうございますが、なにとぞご容赦くださいますように」

とある。そして

「このようなお便りをお出しするのが辛くて、迷いましたが、力不足で閉店いたします。奥さまとご一緒にまた来ていただきたかったのに、申しわけありません。どうかお体を大切にお過しくださいませ」

と追記してあった。また

〈学生、文化人ら集い、六十年。片町、純喫茶『ぼたん』、思い出〝挽き終え〟閉店。オーナーに、にじむ涙〉

と、大きな見出しで地元北国新聞が報じた、六段抜きの特集記事の紙面が添えられていた。

〈まさか？　あの「ぼたん」が？　わたしたちの心の故郷「ぼたん」が……？　まわりの風景はどんなに変っていっても、「ぼたん」だけは昔のままの姿で、いつまでもわたしたちを迎え入れてくれると思っていたのに……〉

わたしは気が抜けたように茫然としてしまった。

五年ほど前に、妻を伴って金沢を訪ねた折、いつものように「ぼたん」に立ち寄った。五十余年を経た昔話に花が咲き、時の経つのも忘れるほどであった。その折、

〝おばさん〟と一緒に撮った写真を引っ張り出して、妻とともにその時のことを思い返した。

あの時は、まだ〝おばさん〟の髪は黒かった。送られてきた新聞の写真に写った〝おばさん〟の頭は真っ白になっている。それもそのはず〝おばさん〟はもう九十一歳になっているのだ。世の中の急激な変わりようのなかで、お店の経営にも随分と苦心されたのだろう。〝おばさん〟が閉店を決断したのが、なんとなく分かるような気がした。

昭和二十二年から三年間、わたしは金沢で学生生活を送った。十七歳から二十歳の間である。

学校の構内にある学生寮（「時習寮」といった）での寮生活であったが、終戦直後の混乱の時代、ひどい食糧難でいつも空腹を抱えていた。着るものにも事欠いたが、そこは伝統の弊衣破帽が幸いして、いつもヨレヨレの学生服や羽織袴で闊歩していた。

しかし、なによりもあの時代の若者が苦しんだのは、やり場のない心の彷徨であった。敗戦ですべての目標を喪失し、あらゆる権威が失われた時代であった。ともすればニヒルな虚脱感に陥りがちであったが、その混迷に挑戦するかのように、およそ現実から遊離した人生論や恋愛論、果ては哲学論争までが、寮内に渦巻いていた。議論に飽きると、調達したイワシを肴にコンパと寮歌とストームである。遂には、街頭に繰り出して寮歌を放歌高吟し、集団ストームに青春を乱舞した。傍若無人ともいえる学生のご乱行にも、当時の金沢市民は寛容であった。学生さんだからというひと言で、むしろ歓迎さえしてくれた。

このような、奔放で野性的な寮生活のなかで、唯一安息の場を与えてくれたのが、「ぼたん」であった。

どんなきっかけで「ぼたん」に出入りするようになったのかは覚えていない。恐らく寮の先輩がコンパの後の流れで連れていってくれたのだと思う。

なぜか、金沢の中心街といわれる香林坊に隣接してわたしたちの学校があった。まるで銀座四丁目に隣あわせて学校があるようなものだ。校門を出て広坂通りを左に行けば、県庁、市役所そして兼六園に向かう。右に曲がればすぐそこが香林坊の繁華街である。飲食街の周りにスメル館、松竹座、立花座などの映画館や寄席が軒を並べていた。

香林坊から小さな清流が流れる石橋を下って、大和百貨店の裏小路――昔、古寺町といった――を数分歩くと、路地の一角に二階建ての木造家屋がある。その一階部分がわが「ぼたん」である。

今はその前を広い中央通りが突き抜け、周囲の様子はさま変わりしたが、「ぼたん」だけは昔も今も寸分変らぬ佇まいを残している。

香林坊裏の広場に面したミルクセーキの「大陸」、竪町通りにあるコーヒーの「郭公」、そのほかにも「モナミ」や「芝生」など、明るくこざっぱりした喫茶店が数多くあった。学友の多くはそれぞれに自分の根城をもっていたようだ。というより、そこに勤めるメッチェンに憧れて通いつめていたのかもしれない。しかし、わたしは「ぼたん」が他のどこよりも好きだった。

一見普通の住まいのように見えるが、ドアを押して中に入ると、そこは別世界である。正面の暖炉の上に大輪の牡丹の絵がかかっている。牡丹の図柄を模した濃緑色の壁の間に、これも牡丹をモチーフにしたステンドグラスが外からの淡い光を映し出す。昔ながらのタングステンランプがほのかな光をそれぞれのテーブルに注いでいる。どちらかというと重厚というべきだが、だからといって重苦しい感じはしない。落ち着いて温もりのある空気がそこはかとなく漂っていた。

その空気は、まさに〝おばさん〟のかもし出す雰囲気そのものなのだ。いつも矢絣柄の着物に身を整えて、どの客にもニッコリとほほ笑みをかけてくれる。ふっくらとした面立ちと、穏やかなつつましさが、どことなく高貴な気品をうかがわせる。しかも決して気取らない、素足のような親しみを投げかけてくれるのだ。

（あとで漏れ聞いたところでは、加賀百万石の支藩であった富山藩主のご落胤の家系に生れついたといわれるから、やはり血は争えないものだと思う）

当時どうして手に入れたものか、自家焙煎の豆をブレンドしたコーヒーのほろ苦い香りが店全体に漂っていた。そして、かなり大型で、音質の豊かな電気蓄音機が備え付けられていた。レコードもクラシックを中心に豊富に揃えてあった。いつもレコードの音が静かに流れ、しわぶき一つ耳に入らない。静寂そのものだった。寮の喧騒から逃れて、吾に帰る唯ひとつのオアシスだった。

しかし、ひとりで「ぼたん」に通うようになってからも、〝おばさん〟と口をきくことは滅多になかった。そのうちにこんなことがあった。

寮でのコンパのあと、酔いにまかせて、まるで自分の巣に帰るようなつもりで「ぼたん」の門をくぐった。したたかに酩酊していたのだろう。挙句の果てに〝おばさん〟に介抱してもらう破目になってしまった。まさか店の中で寮歌を高唱するような真似はしなかったと思うが、よくは覚えていない。

送られてきた新聞記事の中に、「酔ったお客に手を焼いたこともあった」と、〝おばさん〟の述懐が載っていたが、その中の一人は間違いなくこのわたしであった。なんとも申し開きようのない失態であった。この度の閉店に際してのお礼の手紙に、かさねがさねお詫びの言葉を

ヒー一杯で二時間も三時間もねばる学生に対してである。

その心遣いがたまらなく嬉しかった。

この地に縁者、知人もなく、望郷の念と心の放浪に悩んでいたわたしは、この「ぼたん」の片隅でどれほど癒やされたことか。いつの間にか、〝おばさん〟に対して、母か姉を慕うような気持を抱くようになっていることに気づいたのは、三年が過ぎて金沢を去ってからのことであった。

以来、金沢での同窓会や同期会の度に「ぼたん」を訪れた。妻に昔のことを話すことはほとんどなかったが、最近になって妻を同伴するようにした。妻もわたしと同じように「ぼたん」の〝おばさん〟への憧れをもつようになった。

それだけに、今年十月金沢で催される開学百二十年祭には、いつものように「ぼたん」を訪ねたいと楽しみにしていた矢先の「ぼたん」閉店であった。

香林坊界隈はすっかり変った。足繁く通った本屋も映画館も、そして喫茶店も大方が姿を消した。かわりにホテルや百貨店の高層ビルが、昔からここにあったと言わんばかりの顔をして立ち並んでいる。もちろん、わが母校も赤レンガの本館だけが姿をとどめて、文学館とやらに表札が変ってしまった。

申し添えたところである。

ところが、この失態のおかげで、それ以来〝おばさん〟となんでも話ができるようになった。

当時わたしたちの他に、医大や美専（美術工芸専門学校）の学生たちも大勢「ぼたん」に通っていた。その後には、五木寛之、高橋治らの作家や、俳優の森繁久弥、笠智衆、高峰秀子、仲代達矢などの有名人もなじみ客だったと聞く。その中で、無名の一学生を六十年もの間、名前はもちろん素行まで覚えていてくれて、会うたびに「あの頃のあなたは……」などと言ってくれる人は〝おばさん〟を措いて他にはもういない。

店に入り座席に着くと、コーヒーとともにレコードのリクエストをする。最初の頃は学友を真似て「蝙蝠」や「会議は踊る」だった。まだクラシックに耳が慣れていなかった。そのうちにショパンに心を惹かれるようになった。それを見て取った〝おばさん〟は、わたしのリクエストを待たずに、黙ってショパンのピアノ曲をかけてくれた。

また、時には分厚いノート（実は、自分のノートではなく、真面目な学友が筆記したノートを時間決めで借りてきたノートだった）を小脇に抱え、慌ただしく入ってきたわたしを見て、そっとレコードのボリュームを落としてくれたこともあった。この人、試験前の一夜漬けの勉強をしにきたのだと推し測ってくれたのだろう。コーヒー一杯で二時間も三時間もねばる学生に対してである。

その心遣いがたまらなく嬉しかった。

この地に縁者、知人もなく、望郷の念と心の放浪に悩んでいたわたしは、この「ぼたん」の片隅でどれほど癒やされたことか。いつの間にか、〝おばさん〟に対して、母か姉を慕うような気持を抱くようになっていることに気づいたのは、三年が過ぎて金沢を去ってからのことであった。

以来、金沢での同窓会や同期会の度に「ぼたん」を訪れた。妻に昔のことを話すことはほとんどなかったが、最近になって妻を同伴するようにした。妻もわたしと同じように「ぼたん」の〝おばさん〟への憧れをもつようになった。

それだけに、今年十月金沢で催される開学百二十年祭には、いつものように「ぼたん」を訪ねたいと楽しみにしていた矢先の「ぼたん」閉店であった。

香林坊界隈はすっかり変った。足繁く通った本屋も映画館も、そして喫茶店も大方が姿を消した。かわりにホテルや百貨店の高層ビルが、昔からここにあったと言わんばかりの顔をして立ち並んでいる。もちろん、わが母校も赤レンガの本館だけが姿をとどめて、文学館とやらに表札が変ってしまった。

「ぼたん」だけが今も変らず、「昔」の時を刻んでくれていたのに、その「ぼたん」も姿を消した。

しかし、金沢、そして「ぼたん」は、いつまでもわたしの〝心の故郷〟である。金沢を訪ねれば、必ずあの「ぼたん」の跡に立つつもりだ。そして十月には夫婦で〝おばさん〟と再会してその労をねぎらいたいと思っている。

〝おばさん〟は、「これからは趣味の俳句や日本画に精進したい」となおも意欲を燃やしている。

（２００６．４．２５．記）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）

春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

還暦からの考古学（六）

玉の話（その5）

中山喬央（たかひろ）

エジプト文明と玉

中王国時代

古王国時代の終末は、社会暴動や外国の侵略ではなく、エジプト社会の基盤となる政治的・経済的危機によってもたらされました。

増水期のナイル川の水位は低く、乾燥化が始まって農業条件が悪化し、加えてペピ二世の九三年に及ぶ極端に長い治世に続く王位継承は、多くの年老いた後継者を生み出しました。その王家の弱点に乗じた地方の統治者はより大きな自治を目指し、国境地域は不安定になりました。

ヘラクレオポリス（カイロの南約一〇〇㎞）の王達が、メンフィスにいた古王国の王から権力を奪った時、テーベの地方行政官の子孫は隙をついて武力衝突を起こし、エジプト最南端の地域を支配するようになります。

その北の王国（第九・十王朝）は古王国時代の美術を継承し、南の王国（第十一王朝）のそれは質素で厳格なものから、より精力的で革新的な様式へと発展します。すなわち北のヘラクレオポリスの王達の建築活動は従来と比べるとずっと小規模でしたが、墓にあるビールの醸造や肉を調理する人々を表した浮彫りに、数少ない古王国時代の伝統を残しました。これに対し南の工房は北の伝統的な芸術とは接することがほとんどありませんでしたから、その作品には穀倉への穀物の輸送を独特のタッチで表現する等、独創性と地域的特色が見られます。

第十一王朝スアンクカーラー・メンチュヘテプ三世時代（前一九九九～前一九八七年）の興味深い考古学的遺物が、彼の宰相メケトラーの岩窟墓で見つかっています。彼の墓からは、木製模型の大工工房、紡績と機織、舟から網で魚を取る男、畜牛の頭数調べ、ビール作り、パン焼き、穀倉、畜牛の解体場、供物を運ぶ人々が出土し、それはヘラクレオポリス王国の初期の地方墓で見られたものと類似しています。

前二〇四〇年にエジプト再統一を達成した南のテーベの支配者は、国の北部をテーベ王国の属州と考え、本質的には上エジプトの王のままでした。これは第十二王朝アメンエムハト一世（前一九八〇～前一九五一年）の時にかわります。

彼は前のテーベ王ネブタウイラー・メンチュヘテプ四世の宰相でしたが王位を簒奪します。そして伝統的な北のメンフィス地域の南端に、二つの国を捉まえる男という意味を持つイチ・タウイと名付けられた新しい王宮と都を建設します。

その後イチ・タウイとメンフィスは世俗的なエジプトの都となり、宗教的な中心がテーベということになります。

アメンエムハト一世は自分の墓を伝統的なピラミッドの形にし、それを南部のテーベ西岸ではなく新しい都の近くのアル＝リシェトに建造しました。

彼は前二〇〇〇年紀の最初の二世紀にエジプトの富を復興した、強力な支配者達の最初の王でした。大規模な農地改良事業がファイユームのオアシス地域で始まりました。顕著な繁栄は芸術に新しい命を与えます。

外交政策は初め南のヌビアに向けて行われます。前の時代の乱暴な搾取に代わって、第十二王朝時代（前一九八〇年以降）度々軍事遠征が行われ、恒常的な占領地が確保されました。そしてナイル川第二急湍（流れの速い浅瀬）の地域にあるブーヘン、ミルギッサ、ウロナルティ、セムナなどに大規模な要塞が築かれます。その役割はエジプト南の国境の保護、流れを下る河川交通の管理、ナイル渓谷に至る砂漠の隊商の監視などでした。

一方西アジアとの関係は、戦さよりも交易に頼りました。シリア・パレスティナ地域、特にレバノン沿岸のビブロスで集中的な交易が行われていました。そこでは地方首長墓から第十二王朝の王達の名前を記した壺などの他、エジプト様式の現地生産物が出土しています。

その一方で砂漠に住む遊牧民がエジプトの領土に侵入するのを防ぐ為、砦が国境に沿って建設されました。そして遠征隊がシナイ半島のワーディ・マガラやサラビト・アル＝カディムにある、銅やトルコ石の鉱山に送られました。

話は変わりますが当時の庶民の暮らしを物語るものとして、アル＝ラフーンにあるセンウセレト二世（前一八八六～前一八七八年）のピラミッドの下神殿近くで見つかった、壁で囲まれた定住区があります。

それはピラミッド建設の為に雇用された労働者が神

殿の近くで生活していたものだと考えられています。

古王国時代のピラミッド付近にも保存状態は悪く小規模な定住区がいくつか存在しています。

勿論それらは、役人や神官の家そして知事の邸宅とはその大きさや設計において大きな違いがありますが、アル＝ラフーンで見つかったものを含め、エジプト都市部の貧者の典型からみれば、はるかに恵まれたものでした。

これらの発見はピラミッド建設に奴隷を使用したとの従来の考え方を変えさせるものとなりました。

元来アメン（妻がムト女神、息子がコンス神、後で太陽神ラーと習合してアメン・ラー神となり、エジプトの国家神になります）はテーベの一地方神だったと思われますが、前三〇〇〇年紀の末までには、この町で最も重要な神となっていました。そしてテーベがエジプトの宗教的都になると共に、アメンがエジプトのパンテオン（あらゆる神を祭った寺院）の神々のなかで最上位となります。

又カイロの北東地区にあるヘリオポリスの太陽神ラーの神殿址には、記念碑である、頂上がピラミッド形をした一本石の柱で、高さ約二〇mのセンウセレト一世（前一九六〇～前一九一六年）のオベリスクが立っています。

この時代の王の像は、古王国時代の王の像とは大きく異なります。その精神が変わったのです。古王国時代のファラオの彫像は永遠の地位を約束された自信に満ち溢れたものでしたが、中王国時代のそれは、その地位が永遠のものでない事を知っている一人の人間として描かれています。この時代から神の仲介が求められるようになり、王は強力な国家神アメンの隠れた存在となります。

中王国時代には王族以外の者の像が神殿や祠堂に出現します。二つの新しいタイプの彫像が導入されます。一つは、ごく普通の休んでいる男性を表現しているものであり、今一つは書記の姿勢で足を組んだ、或いは長い衣裳で足を隠した座像です。これは中間層の地位向上を意味するものと考えられます。

また第十二、十三王朝時代（前一九八〇～前一六四八年）になりますと、テーベのネクロポリスの神としてのオシリス神（冥界の支配者。作物の豊饒を司る神で、植物の芽吹きを表す緑色が顔に塗られます。王は死ぬとオシリス神になるとされました）信仰が一般化されその聖地アビドス（アビュドス）が巡礼地になります。これは王の特権であった信仰が大衆化したことを意味します。

中王国時代の玉類について

中王国時代は技術的にも美術的にもエジプト史を通

じて最高のものが見られます。

最も優れたものは、ダハシュールやアル＝ラフーンにあるピラミッド付近で、王族の女性達の副葬品として出土しています。

ダハシュールで出土した前一八九〇年頃の金、紅玉髄、ファイアンス、ラピスラズリで作られたアメンエムハト二世の王女クヌメトの襟飾りは、縦十五・二cm、横三三・二cmの大きさですが、両端に隼の頭を象った金具がつけられ、ビーズのラインの間には生命・支配・安定を象徴するシンボルである「アンク」「ウアス杖」「ジェド柱」の三種類の文字記号が交互に連続してつけられています（図一、参照）。

その他センウセレト二世と三世、アメンエムハト三世がサトハトホル王女とメレレト王女に贈った前一八二〇年頃のラピスラズリ、トルコ石、紅玉髄などで象嵌された黄金の胸飾りも見事なもので、透かし彫り細工の枠は、上部に軒蛇腹装飾のある小型祠堂の正面の形をしています（図二、参照）。

更にクヌメト王女の、トルコ石と紅玉髄で象嵌された小さな五芒星をちりばめた、非常に薄い金で編んだワイヤーでできた王冠も出土しています。

又ダハシュールに建造されたアメンエムハト二世（前一九一八～前一八八四年）のピラミッドの西側で発見されたイト・ウレト王女の襟飾りは、金や紅玉髄、長石、ラピスラズリなどの細かなビーズを組み合わせて作られた縦十八・二cm、横二七・七cmのものです。両端には半円形の金具がつけられ、一番外側には水滴の形をした三六個の金の飾りがつけられており、当時の金属加工技術水準の高さがわかります。

このようにトルコ石、紅玉髄、長石、ラピスラズリなどを象嵌したものを結び、小環や王冠、襟飾り、腕輪、帯、胸飾りなど繊細な金細工を作る技法の幾つかは西アジアなどからもたらされました。

花や植物、特に再生と関係するロータスの花のモティーフが巧妙な幾何学的模様に配置され、動物（ライオンや牡牛）、鷹、神話上の獣（グリフィン）などと一緒に組み合わされたものには、「保護」「喜び」「生命」などの古代エジプトで祝福の言葉をあらわすヒエログリフや、王の称号の一部なども含まれていました。

この時代エジプトとビブロス在住のシリア職人達の間で、宝飾品と武器を中心としたデザイン・モティーフの交換がありました。またクレタ島のミノア文明との間で相互に影響があったことも、クレタ土器の装飾様式がエジプトの墓で使用されたことから明らかになっています。

南ではエジプト美術の影響が、クシュ王国の中心地、ナイル川の第三急湍を越えたケルマの、ファイアンス製

容器の複雑な模様に表われています。

聖甲虫スカラベ形の護符が前二〇〇〇年紀の初めには大衆化されます。これはすべてのエジプト人によって共有された、再生と幸せな死後の生活に関係していました。

しかし前一六四八年、デルタの北東部にいた西アジア系移民の指導者が自分をエジプトの王であると宣言した時、事態は急変します。

エジプトの状況は、古王国時代末期に続く政治的分裂の時期に似てきました。最も重大な反発が南のテーベで起こります。最初北のヒクソスの宗主権を認めますが、彼等は軍事力を涵養してアヴァリスにいるヒクソス王に対して軍事行動を起します。前一五四〇年、第二テーベ王国のイアフメス王は戦闘を成功裏に終結させエジプト全土を支配します。

新王国時代

新王国時代（前一五四〇～前一〇六九年）は戦争で始まります。ヒクソスを破った後、イアフメス王はヒクソスの同盟者であったシリア・パレスティナに軍事介入をします。そしてユーフラテス川上流に中心域を持つミタンニ王国で反抗が起こった事もあり、エジプトはシリア・パレスティナ地域の支配闘争に巻き込まれます。

軍事遠征は南のヌビアに対しても行われます。ナイル川第三急湍の南のケルマにいたクシュの支配者も、ヒクソスと友好関係を保っていたからです。この戦いに勝利を収めてエジプトの領土は更に拡大し、ナイル川第四急湍もしくは第五急湍の地域にまで及びます。

この両地域に対する軍事行動の結果、それらの交易権の確保もできるようになりました。シリア・パレスティナの首長達からは先端技術品であるチャリオット（戦闘用軽戦車）とか武器や贅沢品がもたらされ、一方ヌビアからは金、銅、鉱床、木材、人的労働力が流入する事となります。

このようにして中王国時代後期の停滞とヒクソス支配下の低迷からエジプト経済は復活し、真の国家神となったアメン・ラー神は軍事計画において王を勝利に導いた神としてあがめられます。そして彼の神殿は外国への軍事遠征によって得られた戦利品と、エジプトの支配下に入った外国の領地からもたらされた貢物などにより、大きな利益を受けることとなります。

新王国時代初期の王墓はすべて盗掘されています。そのため副葬された品物やその品質は判りません。

しかし新王国時代の墓内装飾の特徴である、日常生活を描写したものから様々な事を知る事ができます。

それには彫刻家、陶工、金属細工師、宝飾職人、大工、皮革職人、レンガ職人、舟やチャリオットの製作者、網

や綱の職人、職工、染色工、洗濯屋、肉屋、パン屋、そして醸造職人などの職工や商人の場面があり、葡萄栽培や魚とか水鳥を網で捕まえる様々な活動、農耕や家畜の飼育、園芸なども含まれています。このすべては自然主義的で写実的印象を与えますが、エジプト美術には必ず解釈すべき意図がありますので、額面通りには受け入れることができません。

古代エジプト人は家庭で日常使う品物を、人目をひくデザインや装飾で飾る事が好きでした。このことを証明する多くの品々が残され、その多くは墓で発見されています。そのなかには、宝飾品、染色された織物、精巧な編細工、装飾された楽器、遊具箱、書記のパレット（化粧板）、医薬容器、動物形錘などが含まれています。

一方テーベのナイル川西岸にあるディール・アル＝マディーナの職人の墓地からは、ベッドや椅子、低いテーブル、箪笥、箱など多くの実用家具が出てまいりました。

護符や小像といったファイアンス製の小品をつくる技術は既に先王朝時代（前三九七二年以前）に知られていました。エジプトのファイアンスは石英や方解石の粉末とナトロン（天然のナトリウム塩の混合物）に、銅あるいは酸化鉄を混ぜたものを、手で捏ねたり型に入れて高温で加熱して作られました。

そうして作られたファイアンスは、硬く明るい釉薬の表面と、トルコ石の陰影が得られました。新王国時代（前一五四〇年以降）までにファイアンス製の碗や杯は一般的になりました。この時期の典型的な碗は魚とかロータスとか、他の湿地の生物などから成り立っています。これはロータスが日の出に開花することとか、エジプト人が魚の産卵行動を自己増殖と考えていたことから、再生と死後の生活に関係すると思われますので、これらの鉢形容器は墓の為に特別に作られたものと考えられます。

日常の目的の為に使用された容器は殆ど轆轤製のものでしばしば未装飾でしたが、アメンヘテプ三世（前一三九一～前一三五三年）の治世下で多彩な浮彫り装飾のあるものが広く使用されるようになります。動物はお気に入りの題材で、家族の幸福と結びついたライオンのような顔をした小さな半神ベスも、しばしば見られます。彩色された花の装飾は、宴会や祝典の際に容器の上に載せられた本物の花を模倣しています。土器のなかには、革のような材料で作られた瓶や、フラスコ（首の長いガラス容器）を模倣したものもあります。子供に授乳する女性の形で作られた容器は、母乳を入れる為に作られたと考えられますが、女性楽師の形をした瓶には何が入れられたのかは判りません。貴重な容器は銅、青銅、金、銀を使って作られました。

多色のガラスの皿やフラスコ、そしてゴブレット（台付のコップ）は陰影のある水平の波形文様で飾られていますが、これは前十五世紀に西アジアの影響で発展した

ものでした。同時代のクレタ島のミノア文明とミケーネ文明はエジプトにモデルを提供しています。

第十八王朝時代（前一五四〇～前一二九五年）の職人は、碑文を容器に描く為の手法である粉砕されたガラスを製品の表面に載せて再加熱してエナメルガラスを作る方法を知っていました。様々な箱や容器、コール墨（黒色のアイシャドウ）の筒、スプーン、柄杓（ひしゃく）、コール墨のスティックなどの化粧道具は綺麗に装飾されていました。それらには召使の少女やペットとか鳥の形をしているものがありました。鏡は装飾用の柄を持つ金属製の円盤の形をしていましたが、柄には少女や半神ベスの姿をしたものもありました。マニキュア道具は馬や豹あるいはチーターのような動物の姿に似せて作られました。櫛やヘアピンは動物を象（かたど）った柄や先端を多くが持っていました。

このようにアメンヘテプ三世の時代の約四〇年近い平和と繁栄のなかで生活していたエジプト人は、突然アマルナ時代という短期間の重い時代を迎えることとなります。

前一三五三年に王位についたアメンヘテプ四世（アクエンアテン王）は古代エジプトの知的基礎を形成していた宗教に革命的な考えを導入します。その改革は、王のみが神と大衆との間の唯一の仲介者であることとし、神官達が持っていた宗教支配権を奪い返したことでした。

アメンヘテプ四世によって行われた宗教改革は多神教のエジプトに一神教を導入するものでもありました。王は太陽神ラーと鷹の頭を持つホルスを合わせ持つラーホルアクティの熱烈な信者でした。

王が示した新しい宗教教義の基盤は、太陽神の特別な姿である、光線を放つ太陽円盤（アテン）でした。

このような変化はエジプトの神殿や墓に関係する美術の全てに深い影響を及ぼしました。アマルナ芸術として知られる美術様式の最初の動きを知る為には、宗教の中心地であるテーベに行かなければなりません。恐らく八つの新しい神殿がカルナクに建てられましたが、一番古い建造物では、神はラーホルアクティと呼ばれ、頭に大きな太陽円盤をつけた鷹の頭部を持つ姿で描かれています。

唯一神に焦点が当てられた為、殆ど全ての伝統的な神殿の浮彫りは見られなくなりました。特に様々な神と一緒にいる王の姿は全くなくなりました。そして写実的なイメージが神殿の壁画に現れ主流となります。新しい美術は伝統より写実を重んじ、永遠性を即時性に置き換えます。

アマルナ時代は神に対する瞑想にふけり質素な生活を送る聖者の生活ではありませんでした。この時代のガラスやファイアンス製の小さな品々を見ると、当時の思想を支配していた宗教的情熱が決して美しい物や贅沢品に対する欲望を抑えていなかったことが判ります。エジプトにおけるガラス工芸はこの時代頂点に達し、非常に美しい容器や壺が多色ガラスで製作されています。なかには魚の形をしたものもありました。

エジプト史の中で唯一度だけ基本的美術様式を排除したアクエンアテン王の宗教改革は二十年と続きませんでした。「アマルナ革命」は指導者の死によって終りとなります。

アクエンアテン王の後、スメンクカラー王（前一三三八～前一三三六年）の短い治世がありますが、その後を継いだのは、恐らくアクエンアテン王の息子であり、一般にはツタンカーメン王として知られているトゥトアンクアテン王（前一三三六～前一三二七年）です。彼は僅か十歳か十代の初めで王位につきますが、治世の三年目に名前を「アテン」から「アメン」に変えて太陽円盤の教義を放棄します。そしてアマルナから北のメンフィスに都が移されます。王の若さを考えますとこれらの判断は王の重臣達の意見を入れた為だと考えられます。

トゥトアンクアメン王は僅か十年の治世でした。彼の墓はテーベのナイル西岸、アメン神を祀ったカルナク神殿の対岸にある王家の谷に作られました。その墓は七〇〇年後のタニス王墓以前のもので、今のところ盗掘を免れた状態で発見された唯一のものです。

経済的繁栄の頂点に達していたエジプトの国力は安定し、アマルナ時代も一時的な逸脱にすぎませんでした。前一二九五年ホルエムヘブ王の死後、王権は東デルタの出身で軍人だった平民宰相のラメセスに移ります。

ラメセス朝の初め、国の行政と宗教の中心地はメンフィスとテーベでした。しかしラメセス二世（前一二七九～前一二一三年）の在位中にピ・ラメセスという新しい王宮が昔ヒクソスの首都があったアヴァリスの近く、北東部のデルタに作られます。

ラメセス朝の特徴は記念碑と巨大な建造物ですが、それはアメンヘテプ三世時代の流れを汲んだものでした。

王墓の造営は引続きテーベ西岸、王家の谷で行われました。又テーベのネクロポリスは私人墓の重要な場所でした。高官や神官の岩窟墓が次々と作られましたが、そこに描かれた壁画の題材は、純粋に宗教的なテーマや碑文が主流となり、当時の世相を映したものはだんだんと減って行きました。

ラメセス朝の王妃や子供達の多くはテーベ西岸にある王妃の谷の岩窟墓に埋葬されていました。これらは礼拝室を伴わない豪華な埋葬室で、私人墓よりも王墓に近いものでした。

ここで専門工人の動きについて述べます。

第十八王朝でテーベの対岸であるナイル西岸に王墓

が造営され始めますと、この仕事を請け負っていた石工、下書画家、彫刻家、及び画家などの職人や芸術家の共同体が作られます。仕事は安定しており、彼等が職を失う事はありませんでした。しかし支払いが遅れたため抗議してストライキをした記録が残っています。職人や彼等の家族が住んでいた村が王家の谷から一・五km離れた西岸のディールアル＝マディーナです。この村はアメンヘテプ一世（前一五二五～前一五〇四年）の時に作られますが、ラメセス朝で最盛期を迎えます。この村は閉塞した社会を形成し世襲制で息子が父の仕事を継ぎました。彼等の日々の生活や仕事はオストラコン（表面の滑らかな石灰岩の破片で、高価なパピルスの代用品）やパピルスに詳細に記録されています。このオストラコンの碑文に、職人の家系図が書かれていますので、どの職人がどの王墓の仕事に携わったのかがわかります。

彼等の地位は決して高くはありませんでしたが、技術を持っていましたので、村の近くに小さなレンガ造りのピラミッドを外に配した質素な岩窟墓を作りました。これらの墓の装飾は特に新しいものではありませんが、題材や色遣いが魅力あふれるものとなっており、精神的に彼等が恵まれた環境にあったことがわかります。

前十二世紀の中頃からエジプトは経済的にも政治的にも衰退し国の治安は悪化して無政府状態に陥ります。王家の谷の王墓も次々と盗掘されます。ラメセス十一世（前一〇九九～前一〇六九年）の死後、国は徐々に崩壊しヌビアに対する支配権も失われます。

新王国時代の玉類について

先ずガラスについて話をします。ガラスはローマのプリニウスなどの伝えるところによりますと、フェニキヤ人がシリアの海岸に上陸し、硝石を囲って竈を作り炊事をしていたところ、硝石と砂とが溶け合って偶然発生したといわれています。そして現在のところ現存しているものとしては、エジプト第十八王朝（前一五四〇～前一二九五年）の物が最も古いとされています。エジプト第十八王朝では不透明ながら青、緑、黄、黒、朱の色ガラスの玉が作られていました。前一四五〇年頃、サッカーラの墓から多色ガラスの把手つき容器が出土していますし、前一三四〇年頃、アマルナで多色ガラスの魚の形の容器が見つかっています。

ベルリン国立美術館が所有しているアメンヘテプ三世（前一三九一～前一三五三年）の妃ティイを象った木彫り頭部は、頂上に円錐状の装飾をつけた銀製の鬘をかぶり、前額部に黄金製のヘアバンドをつけ、黄金製耳飾りをしています。

トウトアンクアメン王＝ツタンカーメン王（前一三三六～前一三二七年）の陵墓から出土した、王が少年時代

に着用したと考えられている耳飾りがあります。ラピスラズリ、ガラス、樹脂などの玉で飾られています。

この陵墓から出土した首飾り三点を紹介します。

一つは金線にラピスラズリ、ガラス、樹脂等の玉類をつらぬいて紐帯を作り、これで黒色樹脂製の甲虫を吊るしています。王のミイラの頸部にありましたが、おそらく生前も付けていたものと思われます。

今一つは壺鳥悉鷹を象った首飾りです。黄金の板にラピスラズリ、緑色ガラス、紅玉髄などを七宝風に象嵌しています。これを吊り下げる紐帯は柔軟な革を使い、それに玉類の縁飾りと黄金およびラピスラズリで作った額板を貼り付けています。そして襟留めは黄金製の双鷹の形で、これに垂飾同様、多彩なガラスを七宝風に象嵌しています（図三、参照）。

三つめのものは金銀製の日月を捧げる三匹の甲虫をラピスラズリでつくり、これを囲んで紅玉髄の子玉を飾り、その下のほうに多彩なガラス製の蓮花と蕾を表した垂飾を吊っています。その襟留には多彩なガラスを象嵌した黄金製の聖眼を始め、様々なシンボルを透かし彫りにし軸部に銘文を刻んでおります。

ポスト新王国時代

次にラメセス朝から無血クーデターで権力を奪った第二一王朝（前一〇六九～前九四五年）が、ラメセス朝の都ピ・ラメセスから遠くないデルタのタニスを首都にします。しかし南はテーベの神官アメン大司教によって掌握され、このポスト新王国（第二一～二四王朝）の時代は政治的に不安定な時代でした。

新しい政治状況によって大きく変わったのは、北のタニスに宮廷を構えていた王が南の王家の谷に埋葬されなくなったことです。同様にテーベの私人墓も作られなくなります。その最大の理由は、治安が悪化して墓を守ることができなくなったからです。

その一方タニスでは、盗掘を受けていない王墓が六基見つかっています。

それにはプスセンネス一世（前一〇三九～前九九一年）、アメンエムオペトE（前九九三～前九八四年）、オソルコン二世（前八七四～前八五〇年）と、シェションク三世（前八二五～前七七三年）の墓などがあります。これらの埋葬室の壁には碑文が記され、小規模ですが初期のテーベの王墓の伝統に従った浮彫装飾が施されています。そして副葬品の多くが銀や金で作られた壺、杯、宝飾品で、ミイラは黄金のマスクをつけていました。

この時代青銅製小像など金属を細工したものに人気があり、中が空洞の像を作るため、砂の中子の周りを蜜蜂の蝋で固めて型を作った、ロスト・ワックス技法が用いられました。象嵌を施された小像は王や個人や神を表していました。全体が高価な金属で作られた小型の彫像

は、鋳型に流して製造されました。ポスト新王国時代の芸術的発展の中で、大規模な金属加工の出現が最も重要なものでした。

芸術的な生命力は続きましたが分裂したエジプトは、外敵を退ける力がありませんでした。まず南からクシュ人が入ってきてしばらくの間エジプトを支配します。

ポスト新王国時代の玉類について

未盗掘であったタニスⅢ号王墓の副葬品出土の様子や、内容について説明します。

第二一王朝三代目の王プスセンネス一世のミイラが被っていた黄金のマスクは厚さ〇・六㎜の純金製で、額には聖蛇ウラエウスがつけられ、耳の脇に伸びるつけ髭の紐はラピスラズリ製、眼の周囲や眉毛は色ガラス製です。

アメンエムオペト王の遺体は腕輪や指輪、黄金の祠堂形ペクトラル（胸飾り）を身につけ黄金のマスクを被った状態で発見されました。また石棺の傍らには新王国時代第十九王朝初期のセティ一世（前一二九四～前一二七九年）時代のものと思われる大型のアラバスター製容器や、金製潅奠（酒壺）容器、銀製容器などがありました。

そして彼の埋葬室の石棺内部から発見された前任者プスセンネス一世の腕輪には、両脇に王の即位名と誕生名がデザインされたスカラベ（再生を意味する聖甲虫）が羽根を広げています。スカラベの胴部はラピスラズリで作られ、上部には太陽円盤が載せられています。羽根の内部には赤や青の石が象嵌されています。

次にプスセンネス一世のミイラが身につけていた金、碧玉、長石、色ガラス、ラピスラズリで作られた胸飾りを紹介します。スカラベの上部に王の誕生名を記したカルトゥーシュ（王名の枠）があり、下部には永遠を意味する「シェン」と呼ばれる無限の象徴がつけられています。そして両脇にある羽根には青や赤の碧玉製ビーズがはめ込まれていました。

シェションク二世（前八九〇年）の埋葬室からは金とラピスラズリで作った胸飾りが見つかっています。中央にラピスラズリ製の翼を持つスカラベがあり、その両側にはイシス女神（国家の象徴的な母であり、死者を守る保護女神）とネフティス女神（オシリス神、セト神、イシス神と兄弟姉妹で、死者を守る保護女神）が描かれ、上は翼のある日輪で飾られ、スカラベの上下にあるカルトゥーシュには、王の即位名と誕生名がそれぞれ記されています。

末期王朝時代

ヌビアにおけるエジプトの力は前一〇六九年以降は事実上消滅し、第四急湍付近のナパタを中心とした王国が栄えます。そしてそのクシュ王国が前七三〇年頃テーベを含むエジプト南部の支配権を獲得します。彼等はエジプト全土の支配を目指しますが、古代近東の強国として出現したアッシリアに破れ、前六六七年には属国化されてしまいます。その後エジプトはアケメネス朝ペルシャに征服されたり、ギリシャと結びペルシャに対抗したりしますが、前三三二年にアレクサンドロス大王に征服されます。アレクサンドロス大王の病没後、前三〇五年に将軍プトレマイオスが王朝を開きますが、その流れを汲む有名なクレオパトラ七世は前三〇年にローマと戦って敗れ自殺して、独立国家としてのエジプトは終りローマの属州となります。

ローマ人たちは自分達の文化より古いエジプト文化に対して敬意と称賛の念を持ち、その深遠と美しさを評価していましたから、多くのエジプトの記念物、特にオベリスクやスフィンクス、彫像などが凱旋を祝う為、また異国趣味の魅力によりローマに運ばれ、公共の広場や庭園、皇帝や裕福な市民の別荘を飾る為に使われました。そしてローマの美術作品の多くにエジプト美術の影響をみることができ、それはローマ帝国が終わった後もヨーロッパ人の心の中に残りました。

参考文献

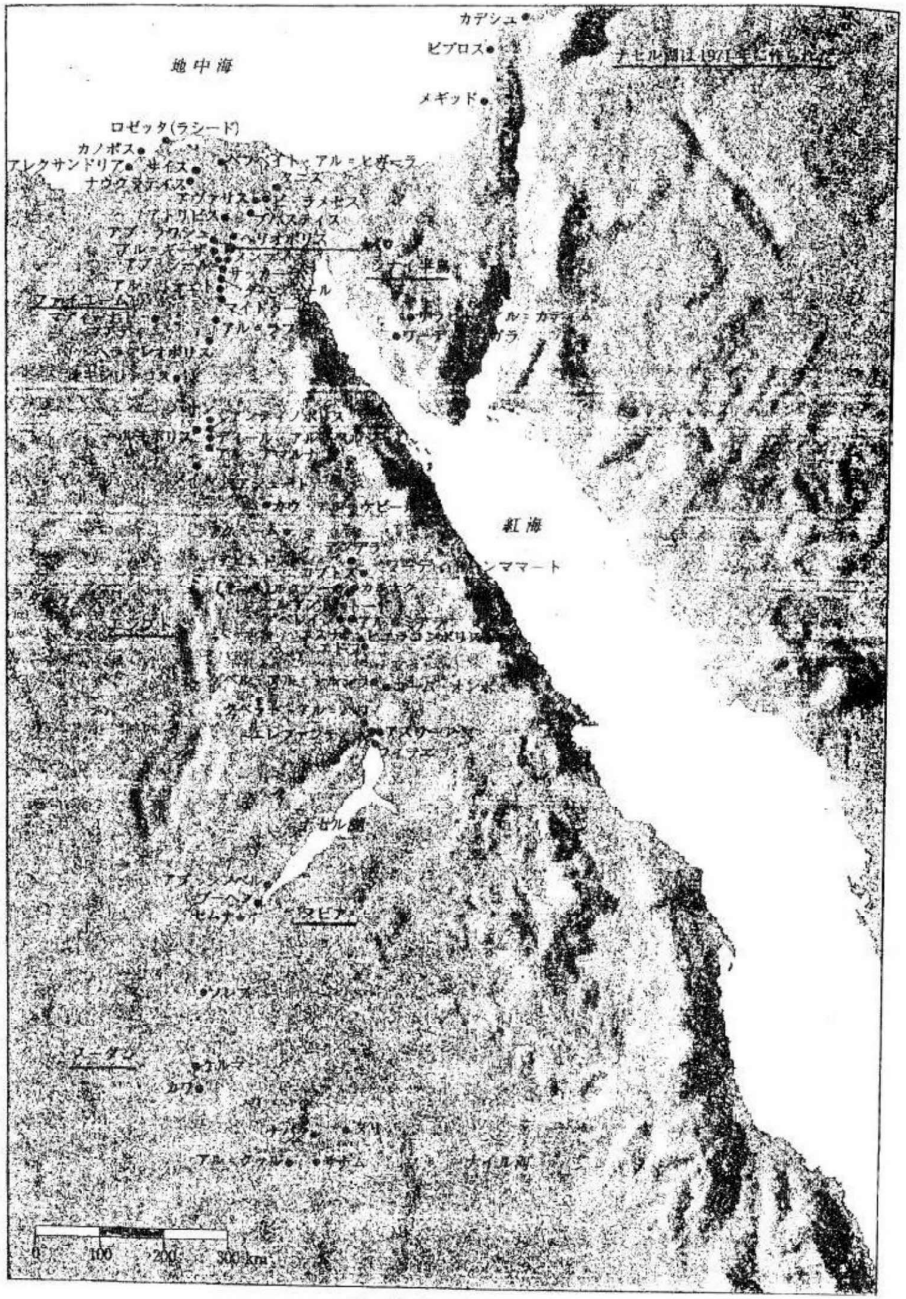
岩出まゆみ「エジプト発掘史」『世界四大文明・エジプト文明展』東京国立博物館、二〇〇〇年。

ギーメット・アンドル「エジプト人」『古代エジプト展』名古屋市博物館、二〇〇五年。

近藤二郎『エジプトの考古学』同成社、一九九七年。

原田淑人『古代人の化粧と装身具』東京創元新社、一九六三年。

ヤロミール・マレク著・近藤二郎訳『エジプト美術』岩波書店、二〇〇四年。



エジプト及び関連地域

図1　クヌメト王女の襟飾り

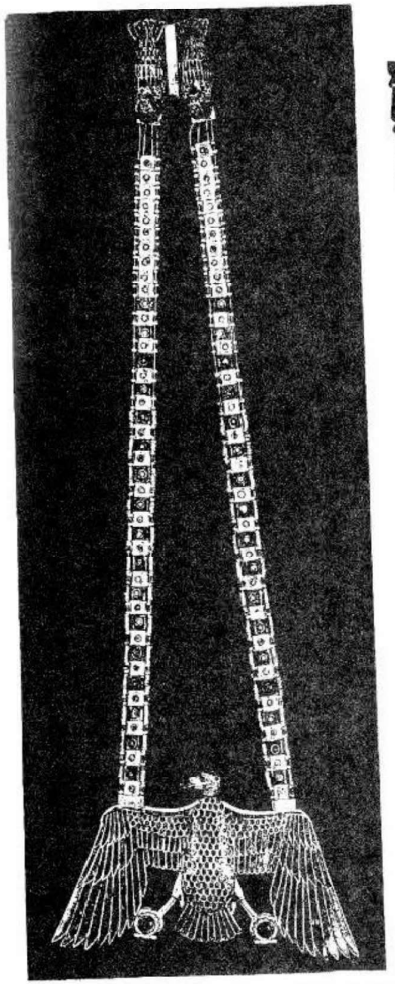


図3　ツタンカーメン王のハゲタカ型首飾りと錘(おもり)

図2　サトハトホル王女とメレレト王女の胸飾り

過激な夫婦と品格

新井宏

このところ海外旅行には、もっぱらU社の十五日間ツアーを利用している。やや費用がかさむ欠点はあるが、それでも個人で出かけるよりかなり割安であり、また格安ツアーのようにどこに行っても日本人ばかりと言うこともない。時間に余裕がある分、勝手に周辺を歩き回る楽しみもある。我が家の企画担当に言わせれば、実質的な観光の日割計算ではむしろ格安ツアーよりも割安な場合もあるのだそうだ。

ところで、U社のコースを利用しているのにはもうひとつの理由がある。いやこちらの方があるいはウエイトが高いのかも知れない。それは十五日間にわたり擬似的な夫婦単位の社交が楽しめるからである。

ご承知のように、上流階級はいざ知らず、日本には夫婦単位の社交の習慣がない。職場や近所付合い、趣味などの付合いは基本的には個人単位であり、複数の夫婦の社交の場とはほど遠い。その中で、コースや日程、費用の関係もあろうが、おおむね似通った背景を持つ夫婦が五組から七組ほど参加するU社のツアーは、十五日間の昼食や夕食時には、たいていお酒も入り、ちょっとした社交場の雰囲気なのである。初対面なので話題ひとつ選ぶにも若干の緊張感があるが、その内にいろいろと見えて来る。

ひとことで言えば、夫婦というものは実に多様だということだ。結婚して初めて味わった出身家庭間のカルチャーショックがここでも再現される。

南スペイン旅行のため、マドリッドの王宮に立ち寄った時のことだ。

「パンプローナの写真、撮っとけ」

と、女性の声が響いてきた。スペイン各地を紹介した画の中にパンプローナのものがあり、それをご主人に撮るように言った場面であった。それにしても、わがツアーのご婦人には相応しくない物言いであるが、ご主人は唯々として指示に従っている。

後で知ったことであるが、ご主人は大手自動車メーカーの役員を勤め、パンプローナ（バスク地方の主要都市で牛追い祭りで有名）にある子会社の社長も経験した方で、職場では大変な権限をふるった方だという。

いわば社長令夫人が、ご主人に向って

「もう連れてこないよ」

とも言っている。それでもご主人はにこにこしている。

まあ不思議なご夫婦であるが、奥様の話によると、現役時代のご主人が大病を患ったとき、群がる見舞客を一切シャットアウトし、命を救ったのは自分だと威張っている。ご主人の苦学時代に働いて助けたばかりでなく、ご主人の弟さんの奨学金まで面倒を見たとも言う。それらの話がまったく違和感なく伝わってくるのがこのご夫婦の品格である。

また、ハンガリーのブダペストでは、朝の散歩時にこんな場面にも出くわした。前を歩くご夫婦がどちらへ行くかでもめていた。

ご主人「間違っていたらぶっとばすぞ」

奥様も負けずに「違っていたらけっとばすわよ」

ご夫婦ともになかなかのインテリで、食卓では話しが弾むのであるが、この過激さはなんとしたものであろうか。

そうかと思うと、ふたりだけなのに、ていねいな敬語を使って話しあっている夫婦もいる。喧嘩をする時も敬語をつかうのであろうか。それとも喧嘩なんぞとは無縁なのであろうか。

食事時の共通の話題と言えば、嫁姑や親の介護をめぐる問題もしばしば登場する。時には、深刻な話のはずなのに、実に明るくおおらかに、そして過激に語る奥様たちに、ご主人方はただただにこにこして聞いているのが大勢である。おおむね過激さでは女性軍が勝るという意外な結果である。

ところで、我が家で最も受けている過激な夫婦は、何といっても新田次郎と藤原ていである。

藤原ていが幼子をつれて満州から引上げてきた時の感動のベストセラー『流れる星は生きている』を昭和二十四年に出版した直後のことである。彼女の収入は気象台の課長補佐の新田次郎の給与の十倍以上にもなり、映画化の話も飛び込むなど、周辺はにわかにあわただしくなった。それが面白くない新田次郎は、出入りする出版や映画関係者の対応にてんてこ舞いな彼女がお茶を頼んでも頑として応じない。

「いつ私がいばりましたか」

「毎日だ」

「お父さんはひがんでいるのですよ」
「何をいう。人をバカにしやがって」……「うるさい。お前の顔も見たくない」
その頃、大学を出ていない新田次郎は課長になれず、事情を知らぬ長男の正広が課長職以上の家庭の子供たちで構成する野球チームに参加できずに泣いて帰ってきても「お前は男だ。泣くな」と抱いてやるしかなかった。そして小さな隣室に閉じこもって密かに何かを書き始めた。それが第三十四回の直木賞受賞作『強力伝』である。
知らせがもたらされた時、新田次郎は藤原ていに原稿用紙を片手に
「ざまあみろ」
といって渡した。これが我が家でたいへん受けているのである。
ところが、この発言は藤原ていが語る『わが夫新田次郎』の中にはどうしても見つからない。どうも彼女がテレビで語った言葉らしい。それが何ともすがすがしい夫婦愛として聞こえてくるから不思議だ。

過激と言えば、ふたりの間の次男坊、藤原正彦も似ている。正彦は数学者であるが、両親から受継いだ文才もあり、素晴らしいエッセイ『若き数学者のアメリカ』や『心は孤独な数学者』などで知られている。しかし最近では『国家の品格』を書き、いわば親子三人でベストセラーを競っている。写真を見ると、風貌は新田次郎そっくりである。文体はどこか理系的で、私の文章のリズムと似かよったところもある。だから日ごろ艶や香りのある文章を書けずに劣等感を味わっている私にとっては自信を与えてくれる貴重な作家なのである。
その藤原正彦が『国家の品格』のなかで、「品格なき筆者による品格ある国家論」と前置きしながら、「強い者が弱い者ぶん殴っちゃいかん」と教える新田次郎の言葉に続いて、彼の奥様について
「現実には、ぶん殴りたくなるような女は世界中に、私の女房を筆頭に山ほどいる」
などとのたまうのである。我が家ではとてもこうは行かない。
一方の奥様も、正彦が「もちろん私ひとりだけが正しく、他のすべての人々が間違っている」と彼の確信を披露すると、「(彼の)話の半分は誤りと勘違い、残りの半分は誇張と大風呂敷」と応じるのである。
その正彦は『流れる星は生きている』の最も感動的な場面で次のように描かれている。

私は正彦を見てぞっとした。パンツをはいてない下半身は紫色になり唇は黒ずんで私に向ってもう何もいうことができなかった。はげしく身ぶるいしている両手から

ら雫がぽたりぽたりと音をたてていた。
「お母ちゃん、正彦ちゃんが寒いって」
正広は私の顔を見ていった。その正広自身もぶるぶる震えていたが、正彦をこうさせたのが兄としての責任でもあるかのごとく、私にいっているのであった。
正彦はもうすぐ駄目になる瞬間であった。

何度読んでも、私のような無感動な男でさえ思わず涙ぐむ情景表現である。その母にしてこの正彦ありなのであるが、その正彦は『国家の品格』で「論理よりも情緒、英語よりも国語、民主主義よりも武士道精神」を強調するのである。
純粋論理の世界である数学においても、「論理ですべてに決着をつけることはできない」と「数学的に」証明されているのだそうであるが、論理よりも情緒をというのは母の影響であり、一方、武士道精神は四書五経の家庭に育った父から卑怯を忌む精神と共に徹底して叩き込まれたものである。

この藤原正彦の主張を受けて、私流に若干つけくわえるなら、借り物で飾り立て見栄を張る国家は品格に劣り、借り物の幼稚な正論を振り回す社会は品格に欠けるとなる。それは私が韓国の最近の風潮について日ごろ感じていることなのである。そしてその典型を韓国の英語熱と盧武鉉大統領の行動に見る。
何しろ英語狂いの国である。韓国の宗教は何か問えば「英語」と答えれば正解である。英語にすがっていれば心がやすまるからである。だから親たちは貧困生活に耐えながらも子供たちを中学や高校の内から海外に送り出し、小学校から英語教育を義務化しようと言い出す。韓国国内で博士号なんか取っても何の役にもたたないと優秀な学生ほどみんな海外に留学してしまう。そしてその結果、大した内容もないのに、流暢に英語をしゃべって見せ、英語の下手な者を見下す連中が増える。これでは韓国の大学院のレベルが高くなるはずはない。
藤原正彦は理数系に似あわず英語の成績が抜群であったが、米国に渡っておどろいた。米国人はみんな自分より英語がうまいと。本心から言っているわけでもあるまいが、ここが親父ゆずりの自信家、正彦らしいところである。その正彦は基礎教育では英語よりも国語をと力説する。まったく同感だ。幼児の英語教育など百害ばかりだ。
第一、英語のうまい国は、米国や英国など英語国を除けば、後進国ばかりではないか。自国語の確立もできず、高等教育では英語の教科書を使用せざるを得なかっただけではないか。それなのに韓国は、漢字を捨てハングル化したのはまだしも、韓国語を捨てて英語にしようとしている。先進国のあとをわき目も振らずにまっしぐら

に追いかけている時には英語遣いの意味もあったであろうが、先進国の一角に頭をもたげた現在、これから求めなければならないのは独自の技術や文化である。借り物の英語では絶対に米国を追い越せない。言語はコミュニケーションの手段でもあるが、論理思考の最大の武器なのである。国語を大事にしないことには論理思考力の高揚など望めるわけがない。

現に韓国の学生たちが、しばしば英文を直してほしいと言って来るが、いつも英語より韓国語をという話になってしまう。第一私に英語を見てくれというのがおかしいのだが、多少しゃべれる学生でも書く方はたいしたことがないので、気軽に引き受ける。ところがどうしても意味がとれないので、韓国語をもって来るように言うと、これがまたとんでもない代物なのである。私の韓国語の方がはるかに品格高いと自信持っていえる。言葉は論理思考の武器である前に、論理思考的でなければならないのだが、論理構成がめちゃくちゃなのである。いくら母国語に堪能でも論理的な文章がかけるわけではない。かくして外国人に韓国語をけなされるほど、韓国語レベルは低下しているのである。

同じような意味で、黄禹錫教授のBS細胞事件も韓国の見栄が傷を大きく拡げてしまった例である。いまだにノーベル賞を持たない韓国がそれを熱望するのは当然としても、勝手にノーベル賞をとったかのように騒ぎ立て、疑惑には徹底して目をつぶろうとしたのは、中身よりも外見を気にする昨今の風潮である。ワールドカップの熱狂だって同じ脈絡上にある。だから品格に欠けると写るのである。

それが政治面に現れると盧武鉉大統領を生む。何しろ、既成政党を批判しまくって政権についたグループである。批判や幼稚な正論には長けていても何しろ深みがない。にわか作りの借り物の知識で右往左往しては、最大の若年支持層まで失い、人気回復に国民受けの良い外交強硬路線を持ち出している。これは本来「禁じ手」である。「禁じ手」を使うのは最も品格に欠ける行動である。

国の長期的な利害関係を調節する外交交渉は、如何にして現実的な果実を得るかが目的であり、勇ましいことを言って国内的に人気を取れば、いずれそれが足かせになって、失うものが多くなるのは歴史を見るまでもない。野党やマスコミが勇ましいことを言うのならまだしも、国の最高責任者自らがそれを言い出したら支離滅裂で、品格に欠けることおびただしい。対日強硬姿勢や東アジア調停者論では、一時的な人気を取れても、国際的に、あるいは韓国内でも識者間では極めて評判が悪いのである。

礼訪国に出かけては「日本の無法」を「いいつけ」て得々としているが、実は失笑を買っているだけなのである。北朝鮮を手なずけたかのように国民の前でふるまっては、いつも煮え湯をのまされている。そういえば暴力団のように肩を揺すって歩く癖の盧大統領の顔まで品格に欠けるように映ってくる。

同じ意味で言えば、小泉首相の靖国神社参拝もいただけないが、それを美学として譲らない点だけは借り物とも思えず救いがある。まあ総体的にみれば、昨今の日本はまだ韓国よりもましだということであるが、小学校から英語教育をという動きは日本にもあるという。

英語が多少しゃべれたからと言って国際人になれるわけではない。国際人とは自分たちの文化を相手国の文化と比較して意見を持っている者のことである。相手から「どうして日本では武家政権が朝廷をほろぼさなかったのか」とか「どうしてキリスト教をうけいれなかったのか」とか聞かれて、何も言えないようでは失格である。

藤原正彦もいうように、意地悪な国際人は「漱石の「こころ」の先生の自殺と三島由紀夫の自殺とはどんな関係があるのか」などと言って値踏みをするものなのである。その時まともに答えられなかったらシェクスピアの四大悲劇のことでも質問すればよい。これが国際人のゲームなのである。

過激な夫婦の話が、国家の品格の話になってしまった。韓国のことに話が及ぶとつい力が入ってしまう。そもそも、品格に欠ける(と自称する)藤原正彦が国家の品格などについて、巧みに描いてみせたのがいけないのだ。「写真とっとけ」「もうつれてこないよ」と語る奥様が、恵まれぬ子供達の支援に力を注いでいるのを見て、見かけの品格と真の品格とは何の関係もないと書こうと思っている内に、どこか見栄っぱりな韓国が、品格ない国家のように思えて義憤を覚えてしまったのだ。

ところで、韓国がむかしから見栄っ張りだったかと言えばそうではない。建前とは異なり韓国の女性は気が強く、そのため伝統的に夫婦仲は過激である。とても日本では想像できないほどおおっぴらに夫婦喧嘩をする。わが愛すべき過激な夫婦も、あるいは韓国の血筋を受継いでいるのであろうか。そういう夫婦に興味を示す我が家は予備軍たり得るだろうか。

古い物・遠い夢

忠内正之

第十一章　茶道具三昧

（五）茶掛「春はきにけり」

◎　光悦の色紙

こゝに掲げるのは、光悦筆の色紙である。

〔原文〕
み芳野の
おほかはのへの
ふる柳
陰こそ見えね
春はきにけり

〔出典〕
〔新古今和歌集〕巻第一・春歌上

（作　輔仁親王）
「み吉野の大川のべの古柳
かげこそ見えね春めきにけり」

今回は、私所有の茶掛けの一幅を紹介したい。私の拙い説明よりは添付されている古筆学研究所・所長・小松茂美氏の「調書」を転記するのでお先ずはこれをお読み願います。

〔調書〕

（一）本阿弥家は、代々刀剣の研磨・鑑定・浄拭を業とする。その家に生まれた光悦（一五五八―一六三七）は、家職を継ぐ一方、とりわけ、書・蒔絵・作陶などに卓抜な才能を発揮した。幼名次郎三郎、のち光悦と称し、徳友斎・大虚庵などの号がある。

（二）とくに書は、〝寛永の三筆〟の一人に数えられる。上代様を基盤にして、南宋の張即之や大師流の影響を受け、さらに光悦独自の斬新な装飾性を加え、典麗な書風を創造した。晩年は肥痩の変化の著しい乾いた書風へと変貌したが、これは〝光悦流〟と称され、在世中から多くの追随者を輩出した。

（三）元和元年（一六一五）、徳川家康より洛北鷹ヶ峰の地所を与えられる。一族をはじめ、紙師、筆師ら諸工匠とともに移り住み、一大芸術村を築き上げた。また、かれらは熱心な法華宗の信徒でもあった。晩年はここに大虚庵を営んで、作品制作・茶の湯といった風雅な日々を送った。

（四）寛永十四年二月三日、八十歳で没した。法名〝了寂院光悦日予〟。

（五）この色紙は、「新古今和歌集」に入集する輔仁親王の歌を書いたもの。蔦の葉と蔓を金銀泥で刷り出した料紙に線の細太の変化、潤渇の妙を発揮して、みずみずしく自由奔放な筆致を展開している。

（六）光悦の色紙といえば、俵屋宗達筆と推定される金銀泥下絵の料紙に揮毫した、「慶長十一年（一六〇六）十一月十一日光悦書」の年記と自署のみえる一群のものが有名。すべて「新古今和歌集」の歌を書いたものである。これらと、この「み芳野……」の色紙との書風を比較すると、華麗な趣はピタリ一致する。ほぼ同時期の執筆ではなかろうか。

（七）となると、光悦は五十歳前後。円熟の境に到達した、最もエネルギッシュなころの筆と思われる。

「調書」の内容は右の通りで、小松所長は既に現役を退いているが、難解の平家物語を解読して苦学力行、遂に古筆鑑定の第一人者となった努力家である。

◎　この色紙は掛軸に表装され、茶掛けとして伝えられて来た。茶掛けとは以前にも述べた通り茶席の本席の床および、寄付に飾られる物。古くは絵画、墨跡に始まって詩歌、消息（手紙のこと）等に及んでいる。いずれも筆者の人格とか経歴によって価値が決定される。つまり有名人願望、悪く云えばフェチシズム的要素が強く表われる。

本席の床に飾られる掛物は茶道具の中で最も重要な道具の一つであり、茶会当日の目的趣向を決定づける重大な要素となるだけに茶人としては特に掛物の優品を求めて止まないのである。

貴重とされる古筆・古画は、唐物・和物を問わず数が少いため得難い。茶道が盛んとなるにつれ、また侘び寂びの精神が一般化するに及び掛物にも変化が生じ詩歌、

消息等迄巾広く用いられる様になった。歌が最初に使われたのは藤原定家（一一六二―一二四一）の書跡で、利休の師武野紹鴎（一五〇二―一五五五）が「天の原ふりさけ見れば」の歌色紙を床の間に掛けたのが嚆矢とされる。

以来、天皇、高僧・茶人等の詩歌が使われ、一般化したのである。なおこれらの場合も個人崇拝（フェチシズム）の傾向が強く表われている。つまり有名人の書跡程尊重される度合が高いのである。

◎　本阿弥光悦の事蹟について

光悦の育った本阿弥の家は「本阿弥の三事」といわれる刀剣の仕事を家業として室町時代以来続いた京都の名門町衆である。光悦は分家の生れながら晩年には人格の円満さもあって一門の長老としての立場にあった様である。

本阿弥家は代々、禁裏、足利幕府、織田家、豊臣家、徳川家等々歴代の権力者の許に親しく出入りした。また京都の有力町衆と法華宗による強い信仰の繋がりがあり、有力者との縁戚も生じた。

光悦の本家叔父光刹の娘は「俵屋宗達」の妻となり、光悦の姉法秀は孫に光琳や乾山が出ることで有名な呉服商「雁金屋尾形宗伯」に嫁ぐなど上層町衆との結束が見られる。

また縁戚関係だけでなく光悦の鷹ヶ峰は芸術村であったと同時に法華信仰を絆として結ばれた集落であったことも指摘されており尾形宗伯ばかりでなく、貿易商として名高い茶屋四郎次郎の屋敷もあって信仰をともにした経済的な結び付きも強かった様である。なお当時の豪商灰屋紹益・茶碗の楽家もまた法華宗であり京都の有力町衆は同宗派で団結していた様だと、現十五代楽吉左エ門氏も言っている。

さて、政治、経済、宗教を強力なバックとする光悦は一門の中心となるが、何と言っても特にその芸術性が秀れている。総合芸術のコンダクターとも言われ、古今その類を見ない程の達人である。

専門分野だけに特化し、特異な才能を発揮する人材は古今数多く輩出しているが、総合力で秀れる光悦に勝る人物は居ない。光悦芸術の分野別事蹟を見てみよう。

（一）　書は寛永の三筆と言われた。

あるとき近衛三藐院信尹が光悦にたずねられた。「今天下に能書というのは誰であろうか」と。光悦は、「先ず、さて次は君（信尹公）、次は八幡の坊（松花堂昭乗）です」と答えた。近衛公が「その先ずとは誰であるか」と尋ねると、「恐れながら私です」と申し上げた。このやりとりは、この三筆が天下に名高かった。（伴蒿蹊「讀近世畸人伝」）

この様に自他共に認める能筆家で光悦流を確立した。

現代に伝わる美品は四季草花和歌巻（重文畠山記念館）他色紙、歌切、短冊、消息等数は少いが保存されており、鑑賞眼を楽しませてくれる。私の所有する色紙もまた希少なものと言える。

（二）　光悦茶碗について

光悦の作陶は、茶碗にその名を轟かせている楽家系統の影響を受けたが、天稟の才能を発揮して独特な美しい作品を造り上げた。現在伝わる和物茶碗で国宝指定は二点。一つは「志野卯花墻茶碗」（三井美術館）ともう一つが光悦作「白楽茶碗不二山」（サンリツ美術館）である。その他光悦作茶碗の名品は雨雲（重文）、加賀光悦（重文）、雪峯（重文）、昆沙門堂、乙御前、七里、時雨、紙屋、等が現存し極めて大切に扱われている。

利休の侘び寂びの境地に沿うべく徹底した簡素な作風をもつ初期の楽家の作品に比して、光悦の作風は自由でおおらかである。「人の心を魅せずにはおかない茶碗を作り得た（また世に有へき人間）とは思えない人であった」と、紹益も激賞している。

私は嘗て光悦茶会に招かれて、光悦作の紙屋茶碗にさわらせてもらう事が出来た。堂々とした風格と気品に圧倒され、手が震へ戦慄する思いであった。作者の精神性の高さが茶碗に凝縮されている結果であろう。

（三）　光悦蒔絵

光悦はまた出色の蒔絵作品を残している。先ず舟橋蒔絵硯箱（国宝　東京国立博物館）、樵夫蒔絵硯箱（重文　MOA美術館）、鹿蒔絵笛筒（重文　大和文華館）、子の日蒔絵棚（重文）、芦舟蒔絵硯箱（東京国立博物館）、等が名品として伝えられている。

作品の顕著な、特色とは何かといえば、意匠に宗達派の絵画と共通した装飾性がとり込まれていること。次に加飾材料の用い方が秀れて新鮮であることである。つまり自然主義的な従来の表現から脱して情緒や知的なたのしさ（歌など使い）を誘う象徴的な表現である。また材料の用法が見事であり、貝、鉛、銀などが使用され当時としては革新的である。作品は現在美術館等で見ることが出来る。美しさ完成度のの高さに驚ろかされる。

◎　近代作家との比較

さて、始めに戻して、総合芸術家として希有な存在である光悦に比肩できる人物は、その後世に現われなかっ

たであろうか？　考えてみたい。

幕末の芸術家青木木米はどうであろうか？木米は識字陶工と言われ、焼物も書画も極めて秀れた人物であるがこの二面だけであり、量感が乏しい。

自説だが、光悦の域にまで達していないものゝ、略匹敵する人物は北大路魯山人（一八八三―一九五九）ではないであろうか？　魯山人自身も今光悦を気取った節がある。山人は書・画・陶芸・漆・篆刻等夫々の分野で超一流の才能を発揮した。家貧しく逆境の中で、用に即した個性的な作風を展開し、果ては料理の面まで天才を発揮したことは決して光悦にも負けない総合芸術家であったと思う。但し人格面では到底光悦に及ばなかったと考えるが、歴史に〝もし〟は許されないが、両者が同世代で対峙していたらさぞ面白かったであろう。

光悦は当時としては長命であった。（享年七十九才）だからこそ立派な足跡を残し得たのであろう。しかし史料によれば没年より二十五年程前中風の症状下にあったと言う。ために書体が微妙に変化している。そのことがまた芸術性を高める結果となった。この病気の他にも色々と困難があった。

光悦の茶の師は古田織部（一五四四―一六一五）である。織部は東軍側であったが、大阪夏の陣で、豊臣方に内応したという責を負って自刃した。光悦は豊臣家とも親交があった関係上、徳川方から所領を拝領する間柄であったと言っても、その一部の勢力（本多正信か？）に睨まれて、必ずしも住み心地は良くなかった様である。（光悦没後二十七年、延宝七年拝領していた鷹ヶ峯は返還することゝなる）。災いから逃れ、保身を図るためにも、芸術三昧に没頭する姿勢が必要だったのであろうか？

光悦寺周辺は位牌所とし残ったと思われるが、鷹ヶ峯返還後は京都市内の居宅に戻ったのであろう。鷹ヶ峯を返せば反対勢力の矛先も鈍った様である。

◎　冒頭の色紙について

（一）この色紙の下絵は、当時著名であった宗達工房によって描かれたと思われ、光悦の眞筆を更に引き立てている。茶掛けとして私の分に過ぎる品である。

（二）この掛物は平成の始めに手に入れた。値段はバブルの前でそれ程高くはなかったが、それでも金策には苦労した。この種のものは一期一会逃したら二度と相見えることは出来ない。そこで見栄も外聞も無く美術商の好意に甘えた。なお美術商への借金は勲章みたいなものだと好事家は言っているが。

前にも述べたが、今は亡き秦秀雄氏（芸術評論家、珍

珍品堂主人のモデル）が私に向って「骨董集めをするなら〝徳利とぐい呑み〟から始めなさい」とアドバイスしてくれた言葉を眞に受けて二十年位前からまだそれ程値が上っていない、徳利とぐい呑みをぼつぼつと集めていた。それでも家計を圧迫していたので妻と意見の相違があった。茶道具への指向を転換したのがこの頃で妻と和解出来たことも既述の通りである。

最近M氏なるタレント評論家がテレビに現われ、趣味に没頭するあまり資金源について次の様な数式に徹底していると言う。（趣味は玩具集めである。）

収入―家計費＝全額趣味に使う

恐れ入った人物もあるものであれで良く妻君は我慢しているものだと感心させられた。

私の家庭も収集に熱が入っていた頃は火宅の毎日で資金難の連続であった。そこでこの掛物を買う資金を作るため、かねて購入済の「徳利とぐい呑」の在庫を一部下取りしてもらった。幸いかなり値上りしていたので助かった。そして残金は分割支払にしてもらった。

信用出来る美術商との日頃のつき合いが有難かった。下取りに出した品々は、現在更に値上りしている一級品ばかりで思い出しても涙が出る位未練が残る。明細を記しておきたい。

1．絵志野ぐい呑み（桃山時代・花籠絵）

2．初期伊万里辰砂徳利（白洲正子所持）

3．黄瀬戸紐造り小服茶碗（桃山時代）

4．まだら唐津ぐい呑（桃山時代）

これらの下取りで三分の二以上の資金が賄えた筈である。現在ならお釣りが来ると思う。手離したのは残念であったが、家庭の安寧を守るため致し方ない処置であった。

かくしてこの掛物は我家の所蔵する処となった。平成七年三月、根津斑鳩庵での妻の初茶会の本席を飾った。それ以降何度か出番がある。

（この章終り）

（司馬雑感　八）

「本郷界隈」を歩く

山田嘉久

大阪で生まれ大阪の大学を出て、生涯大阪に住み着いた司馬遼太郎にとって、若い頃は東京に対しては「異郷の地」という思いを抱き続けていたらしい。

そのためか昭和四十六年に始った「街道をゆく」シリーズに東京が登場するのは、ずっと後の平成に入ってからであり彼は既に六十歳を過ぎていた。

平成元年の「赤坂散歩」を皮切りに翌二年「本所深川散歩、神田界隈」、三年「本郷界隈」と立て続けて都内を歩いている。

尤も都下の八王子付近は例外のようで早くも一作目「甲州街道」に登場しているが、昭和三十年後半に「燃えよ剣」「新撰組血風録」を書いた司馬にとっては新撰組発祥の地として懐かしい土地柄だったからであろう。

平成十七年の夏と秋二回にわたって本郷界隈を歩いたが、まず感じたことは、予想に反して、なんと坂の多い街だろうということだった。思いつくだけでも真砂坂、炭団坂、胸突坂、菊坂、見返り坂（見送り坂）、そして切通坂、無縁坂、暗闇坂、弥生坂、団子坂と挙げればきりがない。

それにさらに感心するのは「本郷界隈」では司馬が驚くほど丹念にこれらの坂を歩いていることである。平均標高二十五メーターの本郷台地の四方に切り開かれた多くの坂と小道を辿りながら、我々を江戸と東京という歴史空間にいざなってくれる。この紀行文が「街道をゆく」シリーズ中の傑作といわれる所以だろう。

（一）

① 小石川後楽園

残暑が厳しい八月末、カンカン照りのなか小石川後楽園を訪れた。

隣の後楽園球場（現東京ドーム）には野球観戦で何回も来ているのに、この水戸徳川家ゆかりの名園を訪れるのは学生時代以来のことである。

江戸時代における典型的な大名の回遊式庭園として現在、国の特別史跡、特別名勝と指定されており、入り口で渡されたパンフレットにも「大江戸、東京に残る深山幽谷」と謳われていた。しかし入場してみるとたしかに都心では珍しい広大な敷地（七万坪、当初は十万坪）だが、すぐ近くに二十五階建ての文京シビックセンターをはじめ高層ビルが林立し、特に隣の東京ドームの銀傘が覆いかぶさるように迫っていて、とても最初に訪れた五十年前の面影は薄かった。

江戸時代初期、寛永六年（一六二九）水戸徳川家の祖である頼房がその中屋敷（後に上屋敷となる）として造ったもので二代藩主光圀の代に完成した。

「本郷界隈」によると水戸家の上屋敷は当初は江戸城のなかの松原小路にあって、いわば将軍家と一つ家のなかに住んでいたという。このあたり尾張六十万石、紀伊和歌山五十五万石に比して水戸三十五万石と石高こそ少なかったが、そのかわりに参勤交代が免除された江戸定府という水戸家の誇りが感じられる。

そして今でも庭内には円月橋、西湖堤など中国風の名前が多いのは、光圀が造成に当たって中国明の遺臣朱舜水の意見を用いたもので「後楽園」の名も「士は当に天下の憂に先んじて憂い、天下の楽の後れて楽しむべし」という中国の故事からとったことは世に広く知られている。

この先憂後楽という言葉そのものが水戸藩の藩風となり、幕末、この藩が憂国の大本山となってゆくのは光圀が作興した士風と無縁ではなかろうと司馬は書いている。

その朱舜水の碑はこの日最後に訪れた東大農学部の校内にあった。ここが彼の寓居の地であり、水戸徳川家中屋敷五万四千坪の跡である。

朱舜水は祖国明朝の復興運動に挺身したが果たさず、日本に亡命後、光圀に寵愛されるのだが、水戸学確立に大きく貢献した。このことは「司馬雑感3」で荻生徂徠の関係から少し触れたが、私は彼はコチコチの朱子学者と思っていたが、この記念碑の脇にある説明版によると、「彼の学風は朱子学と陽明学との中間に位置する実学（実行の学）で、空論を避け道理を重んじ」と記されていたのは意外だった。

司馬も「水戸学的な朱子学的偏向には鈍感である」と書きながらも、光圀が豊かでもない藩財政のなかから多くの史官を雇い、彼らを全国に派遣して（佐々介三郎＝助さん、安積澹泊＝格さんもその一人）、光圀死後二百五十年経った明治中期になってようやく「大日本史」が完成したのは偉大な事業だったと記している。

② 樋口一葉、坪内逍遥の旧居跡

前述の文京シビックセンターの最上階まで登って展望ロビーから眼下の緑濃い小石川後楽園を見下ろしたが、今更ながらその広大さに驚いた。が、それよりも東京都のなかの一つの区に過ぎない文京区がこのような豪壮なハコモノを作ってしまったバブル期とは何だったのだろうとの驚きの方が大きかった。

その冷房のよく効いた涼しい展望ロビーから降りて、再び真夏の炎天下のなか本郷台地を歩く。特にこのあたり坂が多いので汗びっしょりとなる。

まず松平右京亮（高崎藩）の中屋敷跡といわれる右京山に登る。（といっても二十メーターほどの丘だが）ここは富田常雄作「姿三四郎」の三四郎と宿敵源三郎の対決の舞台になった場所とは今日の講師O女史の説明だった。

またこのあたりは旧真砂町。泉鏡花の『婦系図』（真砂町の先生）で知られた町名だが今は本郷4丁目。これらの由緒ある町名は昭和四十年代に入るとすべて町名変更されてしまった。例えば私の独身時代住んでいた文京区の「竜町」も既になく、今は僅かに小学校の校名にだけ名を残しているのは限りなく寂しい。

司馬も同じ東京の「神田雉子町」の町名が無くなってしまったことを嘆いて「しかしいまは、地名もない。そばやを出て、なすところもなく、まわりを見まわすだけである」と記している。因みに神田雉子町は司馬の好きな子規が執筆していた「日本新聞」（社主陸褐南）のあった場所である。

本郷台地から菊坂の谷へ下る急な坂（炭団坂―江戸のむかし炭団を商う人が多かったとも、あまりの急で人が炭団のように転がり落ちたことに由来するともいう。）を降りると、狭い石畳の奥に古ぼけた共同井戸があった。ここが「樋口一葉の菊坂旧居跡」。

「私はこのシリーズで、本郷の原型を書いている。べつに文学散歩をしているのではない。しかし路地裏から一葉女史に出て来られては、手にあまる思いがする。」と司馬は書きながら「凛とした」彼女の生涯に特別の想いを持っているのだ。

「不幸という生態のえがき方は毛彫りのように犀利で、しかも詩がある。詩の有無が十年後にあらわれる自然主義文学と一葉のちがいといっていい」とはいかにも自然主義文学の対極にいた司馬の言葉らしい。

それにしても一葉の父親が夏目漱石の父の警視庁時代の部下だった関係から一葉と漱石の長兄大助との見合い話があったとのくだりは興味があった。

炭団坂を登りきったところに坪内逍遥旧居〝春のや〟跡がある。

明治十七年（一八八四）から三年間、逍遥は此処に住みその間、代表作「小説神髄」や「当世書生気質」を書

いた。また遊女センを妻に迎えたのもこの頃。逍遥はすでに東京専門学校（現早稲田大学）の先生だったが、その愛を貫き通した。その労をとったのが逍遥の人柄に惚れ込んだ掛川銀行頭取の永富謙八だったこと、またその結婚式に長谷川如是閑少年も出席したことも披露している。

逍遥がその後、近くに移転した後、此処は明治二十年、旧伊予藩主久松氏の育英事業として「常盤会」という寄宿舎となった。正岡子規が明治二十一年から三年間ここに入ったのは何かの奇遇だろう。河東碧悟桐も寄宿したし、内藤鳴雪は舎監だった。

「私は、子規がすきである。子規のことを考えていると、そこにいるような気がしてくる」と書く司馬は当然、この本でもこの当時の子規について「給費生」という一章を設けている。

それによれば、子規自身「常盤会寄宿舎第二号室（子規の部屋）は坂の上にあり、家々の梅園を見下ろし、いと好きながめなり」と書いているそうだ。

この寄宿舎の子規を同窓の漱石が訪ねてきているのだが、「崖下に一葉という天才が陋居しているなど、知る由もなかった」と司馬は記している。

司馬がこのあたりを最初に訪ねたのは子規を主人公の一人とした「坂の上の雲」を書いた頃と思われるが、その後二十数年後に再訪してみて「相変わらずまわりがしずかで、その点では子規のころとさほどかわっていなそうであった。」と書かれている。しかし私たちが訪れたときには近くに高層マンションが建設中で「一葉と住民を殺すな三井住宅」の物騒な立て看板が方々に立てかけてあった。

坂を下りて春日通りに出ると、「啄木ゆかりの喜之床旧跡」があった。

子規より時代はやや下がるが、同じ早熟の歌人石川啄木も菊坂あたりを転々としていた。明治四十一年、北海道の放浪生活を経て上京した啄木がやがて朝日新聞社の校正係として定職を得て、ここにあった喜之床という新築まもない理髪店の二階二間を借りて久しぶりに家族揃っての生活が始ったのは明治四十二年だった。啄木の最もすぐれた作品が生まれたのは、この喜之床時代の特に後年だった一年間だったといわれる。

旧家屋は春日通りの拡幅に伴って「明治村」に移されたが、現在でもこの場所では理髪店が営まれている。

このあたりにはそのほか徳田秋声、高山樗牛、二葉亭四迷、長岡半太郎らの文人や学者が数多く居を構えてをり、まさに司馬のいう「本郷界隈」が日本文明の「配電盤」だったことがよく分かる。

③　本郷の大楠

壱岐坂から春日通りへ抜ける道はちょっと落ち着いた雰囲気の街並みとなっているが、その傍らに高さ二十四メーター、幹の太さ九メーターという巨大なクスノキが聳えている。樹齢六百年という。

そのそばに昭和五十五年からこの樹と共に歩んできたフランス料理店「楠亭」があるが、司馬は「本郷界隈」を書き始めた最初の日と最後の日の二回、ここで食事を取ったことを記している。そこで我々もそれにあやかってこの店で昼食をとったがさしたる料理ではなかった。食事オンチで知られる司馬もこの店の料理が目的ではなく、その脇の大楠が気になったことのようだ。

このあたり江戸時代は甲斐庄喜右衛門という旗本の屋敷だった。喜右衛門については司馬は大正時代に書かれた矢田挿雲の「江戸から東京へ」を紹介しているが、それによると甲斐庄氏は南朝の忠臣楠正成の子孫で、甲州に逃れて世を忍ぶために用いた仮名であるが、その後江戸に出て徳川家に仕え、偶然にも大楠の下に住居を定めることになったという。

しかし司馬はこの本の誤りを指摘して「甲斐庄」は山梨県の甲斐ではなく河内国（大阪府）の地名だという。そして楠木正成（楠は正しくないとも司馬はいう）の子孫が徳川家康に仕えた事情を詳細に調べ上げているのには感心する。更に最後には正成と前述の朱子学者朱舜水を結びつけるあたりはさすがという外ない。

④　「本郷もかねやすまでは江戸のうち」

享保年間（一七一六―三六）に現在の本郷三丁目の交差点角に兼康祐悦という口中医師（歯医者）が乳香散という歯磨き粉を売り出したら、これが当たり店が繁盛したという。一七三〇年に大火があり、湯島や本郷一帯が燃えたため、町奉行の大岡越前守は、ここを境に南側を耐火のために土蔵造りの塗屋にすることを命じた。一方で北側は従来どおりの板や茅葺の造りの町並みが並んだため

「本郷もかねやすまでは江戸の内」といわれた。

（今も同じ場所に「かねやす」はあるが、女性用の化粧品などが並べられていた。）

司馬によると本郷の大部分は「江戸」に入らないという。

江戸市域のことを「ご府内」というが本郷はご府内でないから、もし本郷の町方で殺人事件がおきても江戸町奉行から与力や同心などが出役することはなかった。町奉行がたまたま本郷の事件を知った場合、馬喰町の関東郡代屋敷に連絡して、関東郡代の手代が担当しただろうと面白い例を挙げている。「武蔵野国豊島郡本郷村」は関東郡代の管轄なのである。

いいかえれば東大赤門となった加賀藩邸や東大農学部近くの福山藩邸あたりは「江戸の外」だったわけだ。

じっさい、東大農学部のはずれにある本郷追分で、道は日光街道と中山道に二つに分かれ、「江戸の外」に出てゆく。

「かねやす」を少し北に歩いた路傍に「別れの橋跡、見送り坂と見返り坂」と書かれた説明版がある。江戸時代、「江戸払い」となった罪人は此処から放たれたので、縁者などは此処で見送り罪人が見返ったという。

しかし路面は平坦で坂のあったような形跡はない。司馬もこれは江戸の好事家の創作で、「本郷もかねやすまでは江戸の内」という古川柳がよほど喧伝されたため、「かねやす」のむこうあたりでどんと背中の一つも押して追放し、見送ったり見返ったりしたという巷説ができたのではないかと想像している。そして「見送り坂、見返り坂」という尾鰭がついたのであろうと。

⑤　東大赤門（旧加賀屋敷御守殿門）

私大出の私が東大赤門をくぐるのはこれで二回目である。

加賀藩前田家上屋敷の遺構で、十一代将軍家斉の娘が前田家に嫁入りする際に作られた。そのため屋根の上の棟瓦には葵の紋、軒の丸瓦には前田家の家紋梅鉢がつけられている。

（東大といえば加賀藩邸だが、東大医学部の付属病院があるのは旧加賀藩邸ではなく、大聖寺藩邸跡である。司馬も「なによりも驚いた」と書いている。）

司馬が此処を訪ねたときの案内役だったM記者が「時空を越えた司馬の世界」を上手に表現している。

「本郷三丁目の交差点に立っていると、向こうから森鴎外が歩いてくる。水戸黄門が加賀藩士と旗本との喧嘩の仲裁をしている。樋口一葉は遊女たちのラブレターを書くのに忙しいし、寺田寅彦が光圧の実験をしている。正岡子規が人力車に乗って嬉しそうな顔をしている。夏目漱石が義理の父親に怯えながら東大にやってくる。そしてわれらが司馬さんはゴルバチョフの話をしている。」（「司馬遼太郎について」より）

「三四郎池」にも行ってみた。かっては心字池と呼ばれていたが、夏目漱石の「三四郎」で主人公三四郎と美弥子の出会いの舞台になったことから「三四郎池」と呼ばれるようになった。大学の中とは思わせないほど樹木も茂っており静謐なことは前回と同じだったが、十一号台風の余波か夥しい木の葉が散らかっていた。

司馬は正岡子規と同様に夏目漱石が好きらしい。

そのため「本郷界隈」の後半では漱石の「三四郎」についてかなりのページを割いている。

明治後、東京そのものが欧米の文明を受容する装置となった。同時に下部（地方や下級学校―「大学令」によ

る大学は明治末年に京都大学が出来るまで東京に一つしかなかったため)にそれを配るという配電盤の役割を果たしたというのが司馬の持論である。

「三四郎」に登場する広田先生はその配電盤の象徴であり、「三四郎」という小説は配電盤に向かってお上りをし、配電盤の周囲をうろつきつつ、眩惑されたり自分を失いかけたりする物語である」というのである。

だから「たとえばマルセイユの青年がパリにゆくとか、英国の田舎の若者がロンドンにゆくということでは「三四郎」は成立しない。その点、大げさでなく、世界文明史上の奇譚というべき小説なのである」と司馬独特の持論を展開している。(随筆「三四郎」の明治像)

「三四郎の汽車は雛(熊本)から首都にむかっている。」途中、京都から女が乗ってくる。汽車は名古屋止まりだった。小説では名古屋駅前宿で同室となった三四郎とその女の多少の絡みがあるが、問題は翌日、名古屋から乗ってきた向かいの席の四十男(広田先生)との会話である。

ときに日露戦争が終わって二年目。戦後の恐慌の幕開けで以後、不景気が続いていた。

「いくら戦争に勝ってもこんなに弱っていては一等国になっても駄目ですね」と広田先生。

「しかしこれからは日本も段々発展するでしょう」と三四郎がカラ元気を出して反駁すると

「亡びるね」と男は澄ましていった。三四郎はおどろいた。」

このシーンを司馬はこの本だけでなく多くのエッセイで引用している。

(同じ頃「漱石の憂鬱」と題して講演までしている。)

「ひげの男の予言が、わずか三十八年後の昭和二十年(一九四五)に的中するのである」。

「私は日露戦争は日本が好んで起こしたのではなく、やむをえざる祖国防衛戦争だと思っている。しかし、勝ったあとに、日本がおかしくなった。」と。

「この紀行文を「三四郎」でおわりたかったのは、最初からのもくろみであった」と書く司馬だが、漱石の代表作の一つである「三四郎」がこの紀行の大きなモチーフになっていることは間違いなさそうだ。

明治を愛し、そして漱石を愛した司馬は平成の日本をどう感じたのだろうか。

「本郷界隈」を歩きながら、あるいは漱石の憂鬱と同質の想いを抱いたのではなかろうか。

帰宅してから久しぶりに書架から「漱石全集」を取り出し「三四郎」をめくってみた。

(二)

① 切通し坂から無縁坂へ

真夏の前回と違って、二回目は秋晴れの一日だった。

地下鉄湯島駅に集合して先ず近くにある「湯島天神」に参拝する。私は始めてだが家内は数十年前に長男の合格祈願に訪れたという。

泉鏡花の「婦系図」の舞台でもあり、境内には鏡花の筆塚などがある。

石川県から上京してきた鏡花は尾崎紅葉の弟子となるが、ほどなく神楽坂の芸者を知り苦労の末結婚する。その後発表された「婦系図」は彼自身の反映であり芸者に対するフェミニズムと江戸文化に対する美化だと司馬は書いている。

次いで切通坂を歩いて麟祥院へ。この寺は春日局の隠居所として創建された禅寺だが、将軍家光の乳母として大奥に絶大なる権力を持った「お局様」といわれただけに彼女の墓も立派で大きい。卵塔である墓石の四方に穴が開いているのは死後も家光の政治を正すためだったという。

周囲をからたちで覆ったので「からたち寺」ともいわれたが鷗外の「雁」や漱石の「三四郎」にも登場する。普通、からたちは枳殻という文字が当てられるが、「三四郎」ではその通り枳殻寺となっているに対して、鷗外がからたちを「臭橘」などという異様な文字をあてているのは彼が代々医家の生まれであるのと無縁ではなかろうと司馬は書いている。

司馬が訪れたとき境内には数多くの猫がたむろしているのに驚いたと書かれているが、我々の時には一匹も見あたらなかった。

これも「雁」で有名となった無縁坂を回って、旧岩崎邸に向かう。

その前に隣の「三菱資料館」に寄る。岩崎邸とはいうまでもなく三菱の創設者岩崎弥太郎(一八三四—八五)の家である。鷗外が「その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であったが、まだ今のような巍々たる土塀で囲っていなかった」「中に這入って見たことがない」と書いた岩崎の邸は平成十三年から旧岩崎邸庭園として公開されている。明治二十九年にコンドルによって設計された日本建築史に残る洋館だけに広大で豪壮。正面の西洋館の裏には和館。そして独立した撞球館まで付いている。南側に広がる庭の芝生も広々としていた。

この屋敷地は譜代大名榊原家の藩邸だったようで維新後は一時、桐野利秋が住んでいたとも云われる。

第二次大戦後は悪名高い「キャノン機関」のキャノン中佐(松本清張は占領下日本の怪事件はすべてキャノン機関が絡んでいると推論している)が住んでいたが彼は庭木に弾を撃ち込むのが趣味だったようだ。当時、二代目の岩崎久弥はまだ存命で邸内の一室で暮らしていた

が、娼婦を連れ込んだりする占領軍の野卑さを悲憤して「わたしの家は風紀の正しいのを誇りにしてきた。然るに彼らは泥靴で踏みにじった」といったという。なお戦後、混血児の保育事業に尽力した「エリザベス、サンダース、ホーム」の沢田美喜は久弥の長女とか。

② 鴎外旧居跡など

午後は不忍池畔を少し散策して、東大寒手の暗闇坂を上り、更に右折して弥生坂を通る。この辺もやたらに坂が多く、好天気ともあって汗ばむほど。

弥生坂は明治十七年、当時の東大生三名によって発見された弥生式土器で有名だがこのあたり都市化されて発見場所が分からなくなってしまったという。弥生町二丁目の路傍に「弥生式土器発掘ゆかりの地」の碑が立っていた。

弥生坂を更に左折すると異人坂と続く。このあたりベルツ水で有名なベルツなど東大に招かれた外人講師が多く住んでいたのでこの名があるという。

明治初年、本郷に住んだ外国人はベルツのほかフェノロッサ、ワグネル、モースなど。「明治政府が雇った外国人の俸給は欧州で評判になるほど高いものだったようで、このためあらそって優秀な人材が日本にきた。というより、東京に集まった。さらにいえば本郷に集中した。」

明治七年の工部省の予算の三十三、七%、また明治十年の東京大学の全予算の約三分の一がお雇い外国人教師の給料だったというから驚きだ。

オバケ階段を降りて根津神社に着く頃には大分、疲れた。

根津神社（根津権現）は日本武尊が創祀したと伝えられる古寺で、今の社殿は五代将軍綱吉によって奉建されたもの。司馬も「権現作りの優等生のようなつくり」と書いている。境内の表示板には本殿、幣殿、拝殿、唐門が「国宝」と表示されていた。（現在は重文財）

境内に小さな池があったが司馬は東大構内の三四郎池と同様に、本郷台地の地下水脈が湧き出したものだろうと書いている。

また境内には「徳川家宣胞衣塚」があった。胞衣とは胎児を包んだ膜と胎盤をいうのだそうだが、六代将軍家宣は此処で生まれた。此処はもともと家宣の父綱重（五代将軍綱吉の兄）の別邸だったようで、そんなことから綱吉が奉建したのだろう。

根津神社から日本医大を越えたところに「夏目漱石旧居跡」がある。

漱石がイギリス留学から帰国後すぐに住んだ家のあったところで「吾輩は猫である」の舞台ともなったので「猫の家」とも呼ばれた。

漱石が住む十三年ほど前に森鴎外もここに一年あまり住んでいたというのも奇遇だろう。炭団坂の常盤会に逍遥と子規が、そして此処に鴎外と漱石が同じ場所に居を構えたことは明治の文人たちのなにか因縁めいたものを感じる。

司馬は鴎外の「団子坂」に漱石の「三四郎」が登場することも紹介している。司馬によると漱石と鴎外の両文豪は生前二度しか会っていないそうだが、漱石の「三四郎」が朝日新聞に連載された翌年に鴎外が「団子坂」を書いている由。団子坂を歩く男女の会話。

「三四郎が何とかいう、綺麗なお嬢さんと此処から曲がったのです」

鴎外がどんな顔つきでこのくだりを書いていたのかと思うと、意味なくおかしいと司馬は書いている。

鴎外はその後、団子坂を上りきった場所に居を移し終生、此処に住んだ。当時、二階からは品川の海が見えたので「観潮楼」と名づけた。

数十年前、此処を訪れたことのある同行の女性の話によると当時は家屋も保存されていたそうだが、その後家屋は犬山の「明治村」に移され、現在は門の礎石や敷石だけが残されている。そして今は「文京区立鴎外記念本郷図書館」となっている。

この前に弥生坂を通る際にもう一つの「森鴎外住居跡」を少し覗いた。鴎外の最初の結婚（同郷の西周の媒酌で赤松海軍中将の長女との）のあと住んだ場所だが、今では「鴎外温泉」と銘打ったなんとも派手な場所となってしまっており興を逸した。

司馬も多分、観潮楼に行く途中、此処を通ったはずだが、全く無視している。鴎外は先妻と死別後、十九歳も年下の女性と再婚して小倉から帰郷、前記千駄木に引っ越すのである。

数年前、竹橋の国立文書館を見学した際、鴎外の「結婚願」が展示されているのを目にした。内閣総理大臣桂太郎宛に提出したものだが、「結婚届」ではなく「結婚願」であることが不思議だった。その横には陸軍大臣児玉源太郎の「不都合無之付御許可相成度候」の添え書きであった。一身上のことに関して承認を必要としたのは、鴎外が陸軍高官（勅任官）であったためか、あるいは再婚だったためか、その辺のことはよく分からない。

団子坂を下りると、まもなく地下鉄千駄木駅だった。

了

風説・天城の鬼火

堀内永代

一、伊豆天城連山

伊豆の国は、日本列島のほぼ中原に位置し（静岡県東部）、太平洋岸の一つの突起として、地形上異彩を放つ半島である。ここを伊豆半島と呼び、南北の長さが五〇キロメートル、東西の幅が丁度中ほどの天城峠辺りで三〇キロメートル、相模湾と駿河湾の間に舌を突き出したような形をなしている。伊豆学の泰斗佐東三博士は、あたかも成人女性の子宮を逆さまにしたような形だと表現している。筆者はその神秘な胎内を見たことはないが、なんとなくそのような気がする。

日本列島は約一億年前に、地殻プレートが移動して日本海溝の下にもぐりこみ、海が退き、陸地が隆起してできたといわれている。さらに五千万年前頃、北海道石狩地域や岩手県久慈地域（琥珀の産地）に石炭の原料になる植物が蓄積したり、冬夏の寒暖の差が生じたり、日本海地域の断層があったりして、大規模な火山活動が最盛期を迎え、日本各地に温泉が湧出して伊豆の国にもその恩恵をもたらした。

もっとも伊豆半島ができたのは、それからずーと後のことである。

やがて六百万年前頃に、神奈川県の丹沢山塊が本州に激突したり、古琵琶湖が南方から北上して琵琶湖になったり、日本列島が東西から圧迫されて山や盆地ができたりした。

その後百万年前頃になって、南方に隆起したラグビーボール型の陸地が本州の真中に激突してできた半島が、この物語の舞台となる伊豆半島である。

伊豆半島ができた頃に、氷河期と間氷期が繰り返されて、次第に現在の日本列島が形をなした。北海道に大陸からマンモスが渡ってきたのもこの頃である。秀麗な円錐型の日本一の富士山もこの頃から形をなしてきた。

伊豆の地名は「湯出」より転訛したもので、いたるところから温泉が湧出している。また伊豆半島は古くから開闢し、幾多の史蹟、旧址を見ることができる。

日本地図を見れば誰でも気付くことであるが、この半島は古来より関東・関西の分界地となっており、近代の西欧文明は伊豆半島の南端下田港より開かれ、明治維新外交史の第一ページを飾る栄誉を得ている。

この半島は、日本列島太平洋岸の中央部という地の利を得て、文明開化の足音を聞きながら開けていった。

物語の舞台になる静岡県伊豆市は、伊豆半島の中央部に位置する人口三七〇〇〇人、面積三六四平方キロ、伊豆大島四つ分くらいの大きさの温泉と森林の町である。

伊豆市の大半を占める一〇〇〇メートル級の山々が「天城連山」である。

天城の名は、「アマキ」即ち「甘茶の木が群生する山」が転じて「甘木山」となったといわれる。また、低地から巨木の間を通して見え隠れに聳え立つ伊豆連山は、「天にもとどく城」のように見えたことから「天城」と呼ばれるようになったともいう。

伊豆半島は、男性的な景観を持つ東海岸に対して、西海岸は女性的な風景が多い。しかも入江が多く、漁船や台風を避難する回漕船のための港が栄えた。

この半島は全体に山が高くて平地が少なく、特に内陸の中伊豆地域一帯は、森林に依存する農林業が中心であった。幸いなことに良質な温泉がいたるところから湧出し、癒しの場所として温泉場が繁盛した。

天城連山に抱かれ、半島の中央部分にある湯ケ島温泉郷は、かつては、徳川家康の金山奉行として権勢をほしいままにした大久保長安が、金の採掘に辣腕を振るった土肥金山によって潤い、明治期以降は持越鉱山の金銀採掘ブームにより繁栄した。

峻険な海岸線には、海から吹き付ける潮風を頑なに拒み通す断崖絶壁が聳え立ち、打ち寄せる太平洋の荒波によって俗化が遅れた。このことが幸いして、伊豆半島全体が桃源郷的な保養地として栄え、多くの文人墨客が逗留したことで知られている。

伊豆半島の山林は、江戸時代は徳川幕府の天領として保護され、明治以後は国有林として良質な材木が産出して地元の経済を潤した。

その半面、原始林で覆われた天城連山は、万丈の山、千尋の谷が、多くの旅人を山中に呑み込み、その怨霊が火の玉となって現れている。村人たちはこれを「天城の鬼火」と呼んで神霊とした。

これから展開される物語は、山間に吹き抜ける冷たい谷風のように、平和な温泉郷の人々を、恐怖の底に引き込んだ事件によって展開していく。

二、蛍狩りの夜

天城湯ヶ島の温泉旅館白雲荘の若主人青山健太郎は、四一歳になり、厄年を来年に控えて自身の結婚について悩んでいた。何時までも温泉旅館を年老いた両親に任せておくことはできない。女将となるべき配偶者を得て、両親を安心させたいと焦りを感じていた。

若女将であった妻を難病で失った健太郎は、苦労した夫婦生活を経験したこともあって、再婚に臆病になり、妻の死亡から五年を経過した今日まで、半ば無為な日々を送っていた。

昨年の夏に、同じ湯ヶ島温泉の老舗旅館本谷楼の仲居赤池冬子を知ってから、事態は変わってきた。

健太郎は、冬子の不確かな態度にしびれをきらして、五月の大型連休の終わったある日の夜、二か月振りに彼女のアパートを訪ねた。

健太郎は、彼女の気持ちを確かめることが目的であったが、ひそかに彼女の魅惑的な肢体に惹かれてもいた。久し振りで健太郎に会う冬子は、喜びを全身に表わし、恋人を受け入れる乙女のように胸をときめかせて男を迎えた。

「よく来てくださったわ。お待ちしていたの……」

「ありがとう……今日は、少し冬子さんと話をしたいと思って来た」

「あら、恐いわ、なんのお話でしょう……」

「うん……実は、貴女のことをおやじとおふくろに話そうと思ってね」

「嬉しいわ、そうしていただけるとほんとに嬉しいわ。でもわたし心配だわ……」

「冬子さんと知り合ってからもうすぐ一年になる。おれも腹を決めなければと思っている。去年の秋に東京駅で偶然顔を合わせたときから、いつかはこのようなときがくるのではないかと思っていた」

「ほんとね、本谷川の蛍狩りの夜、健太郎さんに助けていただいたのもなにかの縁でしょうね。あの東京駅の雑踏の中でお会いできたのも神様のお導きね。不思議な縁だわ。それも友人のりく子さんの婚礼に招かれなければ東京に行くこともなかったし、健太郎さんにお会いすることもなくて、そのまま一生を終わったかも知れなかったわ。わたしにとって、りく子さんは出雲の神様ね」

「縁は異なもの味なものというが、二人が知り合うのも前世から決まっていたのかも知れない」

「わたしね、ホームで新幹線を待っている時に、健太郎さんだってことすぐわかって嬉しかったわ。健太郎さんみたいに立派な方は近寄り難くて、ときどきちらっと目線を送るだけだったの。それがわたしの方を向いて声を掛けて下さったでしょ。わたし、びっくりしたし、とても嬉しかったわ」

「うん、おれも最初、どこかで見たことがある人だな、誰だったのかなって考えていたんだ。それからすぐに思い出した。そうだ、蛍狩りの夜に酔っ払いにからまれていた、あのときの人だってことをね」

「忘れないでいて下さったのね」

「あのときは暗い夜だったから、よく顔が判らなかったし、横顔しか見なかったから顔を覚えられなかった。でも横から見ていたから、夜目にも色白で、ツンとやや上向きに威張ったような魅力的な鼻が印象に残っていた。横顔を見て思い出したんだ」

「去年の十月頃に、健太郎さんが旅館組合のご用で本谷楼にお見えになったでしょ。そのときにわたしがお茶をお出ししたの。覚えていらっしゃる？　蛍狩りの夜のこともあって、それ以来、わたし健太郎さんが忘れられなかったの……」

「そんなことあったかな……」

「健太郎さんはルックスもいいし、有名人ですから、健太郎さんがお見えになると、フロントの女性や仲居さんたちがさわぐのよ」

「おれはそんな立派な人間じゃあないよ。もうすぐ厄年、それに鰥夫だからね」

「だって、健太郎さんのお家の白雲荘は、湯ケ島で一、二を争そう名門旅館でしょ。健太郎さんはそこの経営者だから、お嫁さんのなり手が多くて、ご両親が選択に困るっていう噂よ」

「それはなにかの間違いだよ。妻との死別もあって、いろいろと苦労したから結婚に対して臆病になってね……いやそんな話はよそう」

「そうね、ごめんなさい、いやなこと思い出させて……」

二人の会話は弾み、楽しい時間が過ぎていった。

夢のような宴が終わって喉の渇きを覚えた健太郎は、水差しの水を飲もうと枕元の灯りを点けた。

「灯りを点けてはいや、わたし恥ずかしい……」

「冬子さんはほんとにきれいなからだしているね。東北の女性は色が白いっていうがほんとだ。上向きの鼻も魅力的だが、ここも弾力があってステキだ」

「わたし、中学高校と陸上部の短距離選手だったのよ。秋田県の高校二〇〇メートルの記録を持っていたの」

「だから、いつまでも若々しいんだね……」

「でもね、大学に進学してから陸上競技との縁がなくなって、すっかりからだが鈍ったわ。あの頃のわたし若かったからお馬鹿さんだったわ。だから……」

「だから、どうしたの……」

「よしましょ、その話。いやなことを思い出すわ……」

「……」

「健太郎さんは野球の名選手だったんでしょ。背は高

いし、体格はいいし、ステキだわ」
冬子は厚い男の胸に左手を伸ばした。

「おれがここに来たのは、今日で二度目だ。知り合ってから一年、交際を始めてから半年経つ。冬子さんは気立てがいいし、よく気の付く女性だし、それに健康だし、できれば……と思っているけど、ちょっと謎めいたところがあるので踏み切れなくて困っている。冬子さんはいったいどこの誰なの。今日はその辺のことをぜひ聞かせて欲しい。話してくれないかな」

「……」

「どうしても話すのが嫌なら仕方がないんだが……」

「そうね、いつまでもこのままというわけにはいかないわね……軽蔑しないでくださいね……でも嫌われてしまうとわたし悲しくなるわ」

「大丈夫だよ。どんなことがあっても驚かない、怒らない……」

「きっとよ……実はわたしバツイチなの。びっくりしたでしょ……」

「いや、そんなことはない。おれだって再婚だ」

「それも子持ちのバツイチなの……」

「ふーん、子供がいるのか。男の子、それとも女の子……」

「女の子で、恵っていう名前なの。平成元年生まれだから今年で四歳になるわ。秋田の実家は女手があるから、母に育ててもらっているの。それに子連れでは働けないから」

「ふーん、恵ちゃんというのか。もう幼稚園の年頃だね」

「そうなの、だからいつまでも母なし子でおくわけにいかないの。だからこちらに呼び寄せるか、わたしが実家に帰るか、どちらかに決めなければと悩んでいるのよ。だけど健太郎さんと別れるのも嫌だし……」

「このアパートで小さな子供と生活するのも心配だな」

「実はわたし、親の反対を押し切って結婚したの。その結果が離婚でしょ、離婚するのが大変で両親や祖父の顔を潰して辛い思いをしたわ。世間体もあったし、実家にいずらくなったの。田舎だから世間がうるさいのよ」

「苦労したんだね……」

「相手はわたしと五つ違いの東京の人だったの。わたしは大学の英文科を卒業して、秋田市に本店がある秋田商業銀行に就職したの。三か月間の研修期間が終了し、秋田駅前支店に配属されて融資担当の補助係をしていたときに知り合ったの。その男を思い出すだけで寒気がするけど、始めは優しかったので、あまり考えもせずに結婚したのね」

「それで……」

「その男は、昭和六十年に秋田に進出してきた工作機械メーカーの東京ツール秋田工場の社員なの。財務課に勤務していてよく銀行に来ていたの。東京出身だったので、都会的センスがあるように見えたのね。わたしは馬鹿だったわ」

「恋愛結婚だったのに、どうして別れたの」

「わたし、銀行に入って二年目の秋に結婚したんだけど、若くて考えが甘かったのね。あの男は当りが柔らかで、親切だったのでつい気を許したのね。取引先企業の財務担当者ということもあって、わたしたち同僚と企業ぐるみのような形でお付き合いしたのね。当時は、在京の大企業が人件費の安い東北地方に進出してきたので、うちの銀行も企業誘致に積極的だったの。そんなこともあって、銀行対メーカーという構図で交際が始まったのね。そのうちに支店長を経由して結婚の申し込みがあって急に話が進んだの。両親は男の身元がはっきりしなかったので、乗り気ではなかったの。でも支店長が仲に立ったので、二か月くらいで話がまとまり、結婚式を挙げたというわけなの」

「盛大だったろうな……」

「頭取も出席して、祝辞を述べてくださったわ。それだけに離婚するときは両親や祖父の顔をつぶしたし、いやな思いをしたわ」

「盛大な結婚式であればあるほど、うまくいかなくなったときは後が大変だ」

「その男は、父や祖父の名前を利用することと、財産が目当てだったのね。結婚してから一年くらいはあまり問題はなかったの。二年目くらいから東京出張が多くなり、朝一番で家を出て、秋田新幹線の終車で帰ってくるようになったのね。それが次第に二日出張になって、わたしもおかしいなと思って宿泊理由を聞いたりしたの。そしたら、会社の業績が悪くなって会議が長引くというの。後で判ったことだけど、その頃には昔の女とよりが戻っていたのね」

「そうか、よくある話だな……」

「恵が生まれる少し前から、不況が深刻になって各企業が設備投資を控えるようになったの。東京ツールも大型投資が裏目にでて、秋田工場も規模を縮小せざるを得なくなったのね」

「バブル経済が弾けた頃だな」

「その頃、わたしは子供がなかなかできなかったから、夫にすまないと思っていたの。そうしたときに妊娠したので、両親も祖父もとても喜んでくれたのね。祖母はその前の年に八〇歳で亡くなっていたので、それを祖父はとても残念がっていたの。ところが妊娠したことが引き金になって、とても厭なことになったの」

「なにがあったんだ」

「結婚してから五年目に、からだの調子がなにか思わ

しくなかったので、市立病院で診察を受けたの。そうしたら『おめでとう、もうすぐ四か月目です』って云われてびっくりしたの。わたしね、結婚してから五年間も子供ができなかったのね。中学から高校と六年間も陸上競技でからだを酷使したから、子供ができないからだになってしまったのかと思っていたの。妊娠は半ばあきらめていただけに、喜びというよりも、驚きのほうが大きかったわ」

「……」

「先生や看護婦さんへの挨拶もそこそこに、真直ぐ帰宅して、夫の帰りを待ったのね。一番に夫に報告しようと思って、母にも知らせないで待ってたの。その日、夫は珍しく早く帰宅したので、すぐ妊娠したことを話したの」

「そうしたら……」

「夫はね、いままで五年間も妊娠しなかったのにおかしいというの。おれの子ではない。わたしが不倫してできた子だというの。情けないやら腹が立つやらで、わたしは毎日泣いていたわ。だんだんお腹も目立ってくるし、それに夫が不倫の子だといって、暴力を振るうようになって辛い毎日だったわ。手足の打撲傷はしょっちゅうだし、だんだん暴力がエスカレートして、顔にも傷ができるようになったの。ほら、左目尻下の傷跡もその頃できたものよ。始めは我慢していたけど、折角授かった子供に万一のことがあってはいけないと思って、実家に避難したの。とても勤めに出られるような状況でなかったから、銀行に退職届を出して別居したのね。子供が生まれれば不倫の誤解も解決し、夫の暴力も納まるだろうと思っていたの」

「子供が生まれれば、血液鑑定でもなんでも親子関係を立証できるからな」

「夫は、わたしの父に買って貰った住宅団地に、銀行からお金を借りて分不相応な家を建てたの。勿論わたしの父からも援助してもらったり、わたしも将来のためにと思って貯めておいたお金も出したわ。家は夫の名義にしたので、毎月十五万円のローンは、夫名義の預金口座から引き落とされていたの。だから毎日の生活費のほとんどは、わたしが出したの」

「家の名義を二人の共有にしなかったんだね」

「始めは夫を信用していたので、土地も家もみんな夫の名義にしたの。そのために、離婚のときの財産分与で苦労したわ。ローンの残高が沢山あったから、不動産を処分しても、現金はあまり残らなかったの。父に出してもらったお金は、結局戻ってこなかったわ。腹が立ったけれども、父も母も諦めなさいというの。両親に申し訳なかったわ」

「子供の生まれる前、きみが実家にいたとき男は一人で生活していたの」

「夫もたまには実家に顔を出したが、すぐ帰ってしまったわ。わたしのことを心配するのではなくて、祖父や両親の顔色を伺いに来たのね。なにか下心があったのね。夫の実家や親戚が悪だったから、お金を強請ろうと考えていたのよ。離婚訴訟中に馬脚をあらわしたわ」

「夫婦っていうものは、本人同士はよくても、周りに悪い人間がいると、面倒なことが起こるものだ」

「子供が生まれて六か月を過ぎて這い這いするようになった頃、一度夫のところに帰ったの。そしたらまた暴力が始まったの。それでもわたしは我慢したわ。自分が辛抱すれば、いつか夫も直ってくれると思ったの」

「それでは毎日が地獄みたで、辛かったろうね」

「夫の会社は業績が悪くなるばかり、経費節減で交際費はなくなるし、諸手当は減らされるし、ボーナスも半分以下になって、住宅ローンを支払えば、預金通帳の残高は限りなくゼロに近づいて、小遣いを借金するようになったのね。わたしは母に頼んで、生活費を援助してもらってなんとかやり繰りしたのね。それが夫に知れると、自分では生活費も工面できないくせに、おれを馬鹿にするな、おれは顔をつぶされた、といって物凄い暴力を振るったの。結婚したときに、母が買ってくれた家具調度品やお洋服を壊したり破ったりするの。わたしは、からだ中あざだらけで、子供を抱いて逃げ回っていたの。大きな物音がするから、近所の人はみんな知っていて、皆さんに顔を合わせると、大変ねって同情されたけど、どうすることもできなくて、恥ずかしい思いをしたわ」

「よく辛抱したな……」

「そのうちに一歳にならない恵にまで、暴力を振るったの。不倫の子ってね。小さな子供にまで暴力を振るうようではこれはもう駄目だと思って、すぐ、その日のうちに子供を抱いて、着の身着のままで実家へ帰ったの。それは悲しかったわ。つらかったわ。タクシーの中で、運転手さんがいるにも拘わらず、恵ちゃんごめんねって、ずっと大泣きしていたの」

当時を思い出して、冬子はぼろぼろ涙を流した。

「それは可哀想だったね」

「あの男は、始めは猫をかぶっていたのね。わたしの両親に取り入っていたのが、だんだんメッキが剥げてきたところへ、恵が生まれたでしょう。わたしが不倫したのだと親戚の悪い奴らにそそのかされ、わたしの両親から慰謝料を取ろうとしたのね。目が経つにつれて恵はだんだん夫に似てきたのね。目なんて二重瞼であの男にそっくりなの。それは夫の子だから似るのは当然だけど。自分の子だということが分かってきたのに、金を取る目的だからわたしが不倫してできた子だと言い張るの。わたしは覚悟を決めて協議離婚を申し立てたの。夫はなかなか応じなかったわ。父が友人の弁護士に頼んで調停離

婚を申し立てたの」
「離婚訴訟は、裁判官も調停委員も和解を勧めるから、長引くようだね」
「難しいことは判らないですが、わたしや恵に暴力を振るったでしょ。だから民法七七〇条の婚姻を継続しがたい重大な事由という条文に該当するっていうことで、こちらが裁判に踏み切ったの。わたし殴られて何度もお医者さんにかかったの。その都度診断書を貰っておいたのね。先生も診断書がある方が有利になるとおっしゃったので、恵の分も一緒に書いてもらったの。それが有力な証拠になって、有利に裁判が進んだのよ」
「……」
「あの男は、はじめ恵はわたしが不倫してできた子だからといって、反対に慰謝料を請求してきたのね。それではDNA鑑定をやろうっていったら、それは引っ込めたの。こちらの弁護士が、あの男の素行調べをしたら、昔、東京にいた頃に関係していた水商売の女と縒りが戻って、それで東京出張が多くなり、わたしが邪魔になってきたのね。それが判って、民法の七七〇条に配偶者に不貞の行為があったときや、捨てられたときは裁判で勝っていうことで、弁護士が男の素行調査書を裁判に持ち出したの。それから男はすぐに協議離婚に応じたわ。こちらから財産分与と慰謝料を請求したけど、男の両親も全然財産がなく、ローンで買ったマンションがあるだけ。生活するのがいっぱいいっぱいなの。裁判で勝っても、現実に取れるものは全然なかったわ。父も母も、あんな男とは早く縁を切りたかったみたいで、お金なんかいらないから、早く離婚しろって云うのね。わたしもその方が早く吹っ切れて清々すると思って、和解調書にサインしたの」
「親権者をどうするかという問題もあるね」
「そうなの、あの男は育てる能力も意思もないくせに、恵の親権者は自分がなると云っていたの。嫌がらせなのね。裁判官は、養育は母親の方がよいと判断して下さったから、わたしが親権者になったの。恵との面会は母親が了解したときに、母親立会いのうえで行うということに決まったけど、離婚を申し立てたときより一度も恵に会わせていないわ。あの男には子供に対する愛情が全くないから、その後なにも云ってこないわ。それどころか、恵が高校卒業するまで、毎月三万円ずつ養育費を支払うことになっていたのに、最初の半年ぐらいは遅れ遅れで送金してきたけれど、もう最近は全く送ってこないわ。わたしはもうあの男のことは、忘れることにしたので、養育費も請求しないの。恵は、父親は死んだと思っているわ。あの子、今頃どうしているかな。もう三ヶ月も会っていないから会いたいわ」
「そうだね、恵ちゃんが気の毒だ……」
「恵を身篭ったときから五年になるのね。わたし五年

という数字にとても縁があるような気がするの。結婚して五年目で妊娠したのね。それから五年目に健太郎さんと結ばれたでしょ。健太郎さんも結婚して五年目に奥さんが病気になり、亡くなってから五年目でわたしとこうなったでしょ。今から五年後はどうなっているでしょうね。恵はその頃、小学校四年生だわ。わたし、独りでいるときはいつもそんなこと考えているの」
「そうか、五年後は恵ちやんが九歳、冬子さんが三八歳、おれが四六歳か……」
「ごめんね、嫌な話を聞かせて……もうやめましょうこんな話。わたし今はとても幸せよ、健太郎さんにこんなに愛されて……」
「おれも同じ気持ちだ……」
「健太郎さんも奥さんを亡くされて五年でしょ。ぼつぼつ結婚のお話があるでしょ……」
「そんな話はない。今は冬子さんがいるから、冬子さん以外のことは考えない」
「うれしいわ、そう云ってもらえるだけで満足よ……」
「……」
「ねぇ……健太郎さん……少し甘えていい……」
冬子はほてった下肢を、健太郎の長い脚にからめ、白いたおやかな腕を男の背中廻して力を入れた。
健太郎がからだの向きを替えようとすると、冬子は形のよい乳房を男のからだに密着させ、男の左肩に軽く歯形をつけた。彼女の愛情表現である。
半円球状の先端部分の乳輪からフェロモンが発散されて、男の昂奮をいっそう煽った。
健太郎は、右手を伸ばして成熟した彼女のからだを抱き締めた。彼女のからだは男の指先を吸い込むような柔肌をしていた。
高校時代に激しい陸上トラック競技で鍛えた冬子のからだは、必要なところ以外には余分なものは全く付いていない。陸上競技で鍛えた四肢は三〇歳を過ぎても衰えず、腰周りから大腿部にかけて普通の女性より一回りも成熟している。美白の肢体は僅かに汗ばみ、男の腕の中で弾んだ。
下部に伸びた男の指先に力が入って動いた。言葉にならない声とともに彼女のからだは鋭く反応していった。

三、不審な人影

「ねぇ健太郎さん、汗が凄いわよ。シャワーで流してきたらいかがですか。タオルは脱衣所の棚にありますわ」
健太郎は、冬子の声を背に受けて浴室の蛍光灯を点けた。蛍光灯の明りが眩しくて思わず目を細めた。
その時、ガタツと外で物音がして、浴室の窓に黒い人影のようなものが横切った。彼は一瞬ドキッとした。脱

ぎかけた下着を身に着け、急ぎ足で勝手口から外へ出ようとした。しかし、築二〇年の三軒長屋の借家は傷みが酷く、慣れない健太郎には勝手口のガラス戸は開けられなかった。ようやく建て付けの悪いガラス戸を開けて外に出たときには、すでに怪しい人影はなかった。

「人影は見えなかった。それにしても、こんな夜更けに人が徘徊することも考えられないし、野猿か鹿でもきたのかな。不用心だから大家の山田さんに話して、戸締りを直してもらった方がいいよ」

「建物の修理は無理だと思うわ、大家さんは農協に勤めていて、息子さんの学資を貯めるのに精一杯みたいよ。借家の修理まで手が回るかしら。でも、今の人影は何かしらね。ちょっと気味が悪いわ」

「山田さんの次男は、韮崎高校のトップクラスで、東大現役合格間違いないという噂だから、山田さん夫婦は期待してるんじゃないかな」

「それにね、長男の連一さんは鉄工場に勤めていて、まだ独身だから、お金の方はあまり期待できなさそうね」

「そうだな、ところで隣の家はばかに静かだけれど留守なのかい」

「お隣りは、奥さんの実家で貰った土地に家を建てて先週引っ越したの。今は空き家で、向こう端は老人夫婦だから気にすることないわよ。でもわたし嬉しかったわ。健太郎さんみたいな優しい人に巡り逢えて……」

青山健太郎の家は、ノーベル賞作家が書いた小説の舞台にもなった伊豆・湯ケ島温泉郷の老舗旅館白雲荘。一方、赤池冬子が働いている本谷楼は、明治時代から今日まで、文人墨客が逗留することで知られている当地を代表する有名旅館で、この旅館はお互いに相手を意識するライバルであった。

健太郎は今年四一歳、地元の進学校の元野球部員で、同校が甲子園で全国制覇したときの強肩強打の名センター、そのうえ老舗旅館の後継者である。本人は自分の立場を充分心得ており、今までは特定の女性に深入りするようなことはなかった。

冬子は離婚後、一度は東京で勤めたが、そこも長続きせず、天城湯ヶ島温泉でようやく落ち着いた生活を始めるようになった。

冬子は温泉旅館の仲居の仕事が性に合っているのか、今までにもまして明るくなり、旅館の主人夫妻からも、同僚の誰彼からも好かれていた。

冬子は去年の蛍狩りの夜、やくざ風の男に絡まれていたのを健太郎が助けたことが縁で知り合い、その後東京駅で再開してから二人は急速に接近した。

「ねぇ健太郎さん、本谷楼の板長さんがね、時々絡み付くような目付きをしてわたしの顔を見ているのよ。気持ち悪いわ。ぞっとするの」

「おれは、本谷楼の関戸由三という板前に会ったことはないが、いい腕を持ってるという評判だ」

「そうなのよ、贔屓のお客さんが、由さんの料理を目当てに泊りに来るから、女将さんも由さんのわがままを大目にみているの。それをよいことにして、由さん、一寸きれいな仲居さんがくるとすぐ手を出すの。そしてトラブルが起きるのよ。わたしあんな人嫌いだわ。なにか恐いのよ」

「こちらがしっかりしていれば、どうということはないさ」

四、老舗旅館の再生計画

それから一週間後、健太郎は冬子のことを両親に概略説明し、彼女の非番の日を選んで、白雲荘の二階事務室で昼食を共にした。

健太郎は、周囲の人たちに誤解されないように気配りしたうえで、白雲荘で会うことにしたのだ。この事務室は、いわゆる奥向きのプライベートな部屋であったから、誰にも邪魔されることなく静かに会話が楽しめた。

健太郎は、冬子が銀行員であったことに関心を持ち、彼女の財務的な知識を知ろうとした。彼女はわずか四、五年の銀行勤務であったが、業務研修を受けており、また、融資担当をしたこともあって、財務分析などの知識もあり、数理的な感覚も鋭いように思われた。

特に健太郎が感心したことは、お金を得ることの難しさ、貴さをよく認識していることであった。

銀行の教育が徹底していたのか、それとも真摯な家庭環境の中で育ったためか、良家の子女に有り勝ちな安易な金銭感覚は全くなかった。健太郎は、内心ひそかに白雲荘の女将に最適だと推察した。

本谷楼の勤務状況を調べたところ評判もよく、経営者夫妻の信用も厚いようであった。

この日の冬子は、健太郎と二度の逢瀬を重ねたことにより、健太郎に特別な親近感を見せながら、落着いた態度で会話に応じた。

毛先を軽くカールさせた黒髪と栗色のやや大きめな瞳は、藤色のツーピースとよくマッチし、控えめな化粧が美白の肌に潤いをもたせ、ツンと可愛く威張った鼻梁と共に、彼女をさらに理知的に見せていた。

「冬子さんは、銀行に勤めていたとき融資担当ということだったけど、銀行には融資の心得というか、融資基準のようなものがあるでしょうね」

「勿論ありましたわ。銀行の融資資金は、全部お客様の大切な預金でしょ、人によっては命の次に大切なお金をお貸しするわけですから、回収不能になることを全力で防ぐのね。始めから回収できないことが予測され

ば、絶対に融資しないわ。返済が滞る怖れがあるような企業に対する融資は非常に慎重ね。融資審査が厳格な銀行が、かえって信用を高めるみたいよ。融資を受ける側からすれば、例えば、ある大型事業に対して融資を受けられたということは、その企業が健全で、かつ、事業計画が成功する見込みがあるという証明にもなるようね。その反対に回収不能が予測され企業に融資すれば、犯罪に問われかねませんからね。だから銀行は事前調査をしっかりするわ。無理な融資は企業や経営者にとって、マイナスの場合もあるそうよ。支店長がよくそう云ってたわ。貸したためにかえって企業が資金繰りの深みにはまり、回復できないほどのダメージを受けることもあるみたいね。そんなときには、できるだけ早く不採算の部分から撤退して、思い切って企業規模を縮小するようにアドバイスするようよ。だからその辺の見極めが難しいみたい」

「きみは鋭いね。秋田商業銀行が徹底した社員教育をしているのか、それともきみが天性秀でているか、どちらかだ」

「わたしの祖父は、永年地方の政治や行政に携わった明治生まれの堅物だったから、行政執行者というものは、実施したことが納税者のためになったかどうかで評価が決まる。公のことに携わる者は、自分個人の利害、打算を考えてはいけない。自分が市民だったらこのようなことは嫌だということはやってはいけない。真に市民のためになることをするのが、本当の行政だ。銀行も、大きくは日本の経済を、小さくは地方経済の発展の一翼を担う半ば公共的な機関だから、自己の利益追求ばかりしてはいけない。お金を貸すときも、目先のことを考えて貸すのではなく、将来このお金が、その企業のためになるかどうかを見極めて貸すのだと云ってたわ」

「へェ……冬子さんのお祖父さんは偉いことを云うね。どんな経歴の人？」

「昔は農林省に勤めていたようね。なんていうか、いわゆるキャリヤみたいな人ね。お祖父さんの父親が病気になったので故郷に帰り、県庁に勤めていたが、定年前に退職し、地域の人に推薦されて市長を二期やったようよ。そんな関係で、父も県庁に勤めているの」

「きみの実家は名家なんだね」

「ふつうの家よ。祖父はこんなことも云ってたわ。むかし、ある人が、植林というものは、自分のために杉や檜を植えるのではなく、子供や孫のためになるかどうか、さらにそれが社会のために役立つかどうかを見極めて植えなければいけないと云ったので、自分もそれを実行したと……」

「なるほどね……」

「貧しい人は、今日明日のことしか考えないから、いつまでたっても貧しさから抜け出せない。五年後、十年後にどうなるか、どうすべきか、将来のことを考えて行動する人は成功するし、富も失わない。さらに財産は増えていく。そんな話をよく聞かされたわ。わたしは目先の幸せばかり考えていたので、結婚を失敗したのね。祖父の云うことを守っていれば、故郷を逃げ出さなくてもよかったと、後悔しているの……」

「なるほど、冬子さんも立派だ……遠くをはかる者は富み、近くをはかる者は貧すという教えは、二宮尊徳が説く報徳の教えだ。この伊豆地方には、尊徳から直接指導を受けて立派に財政を再建した人たちの子孫が大勢住んでいる。その人たちが、報徳社組織を創って山林などの事業を子々孫々受け継いでいる」

「そうでしょうね。こちらは二宮金次郎の生誕地小田原に近いものね。秋田県下にも報徳社があるわ。報徳社の社員が共有林などを経営して、農村生活を支えていたということをお祖父さんがよく話していたわ。秋田県の実家の近くにも、報徳社が十いくつかあって、実家も報徳社の代表を長くやっていたわ」

「東北地方にまで、報徳社があるとは知らなかった……ところで、本谷楼の景気はどうですか。相変わらずの繁盛のようだね」

「いいえ、うちの旅館もこの頃は暇になったわ。今までみたいに、土地転がしで儲けたとか、株で儲けたというお客様はめっきりなくなったわ」

「これから景気がますます悪くなるというが、本当なんだなぁ」

「いやなお話ね」

「先週の講演会での話だが、一九八五年に開かれた先進五か国蔵相・中央銀行総裁会議のプラザ合意以来円高ドル安になって、日本は金余り現象が生じたんだ。その結果、その金が不動産や株式に投資されて異常な好景気となり、土地は持っていれば必ず値上がりするという土地神話が生まれた。こういう見せ掛けの景気のことをバブル景気というんだそうだが、その反動と、大蔵省・日銀の金融引締め政策があって、やがて土地や株式が値下がりしてデフレとなり、日本は大不況になるそうだ。そうなると、一番先に不況の波を被るのが観光産業なんだ」

「難しい話はよく判りませんが、嫌な世の中になりそうですわね。健太郎さんは経営者だから大変ね」

「伊豆の観光地は、最近だんだん客足が遠のいて、温泉旅館の宿泊客の数が、一〇年間で三割以上も減少している。その原因には、次のようなことが云われている。

①バブル経済の反動がきて、産業界の景気が低迷しつつあること。

②伊豆半島沖の群発地震があること。

③旅行ニーズが変化してきたこと。

従来の企業型慰安旅行が減少して、行動型旅行に変わ

ってきた。それともう一つ、温泉客の対象が、大口の団体旅行から、グループ客、家族客、個人客に替わったことだ」

「時代の変化と共にいろいろ変わっていくのね」

「かつて温泉旅館は、高度経済の進展に伴って、景気のよい団体旅行客のお陰で成長してきた。そんなこともあって、大口団体旅行客向けの施設が多く、大宴会場や娯楽施設などのサービス面でも団体客を想定したものになっていた。最近は、若者も熟年世代も、外国旅行が盛んになり、過去には考えられなかった女性だけの海外ツアーが売り出されている」

「そうですわね……」

「国内旅行も海外旅行と同様に少人数旅行が中心で、宿泊客の要求するサービスも、高度で、かつ、多岐多様になってきた。したがって伊豆の温泉旅館も、考え方を百八十度切り替えて、設備もサービスも大変革する必要がある。勿論、経営者の営業姿勢も旅行ニーズの変化に対応していかなければならない。昔の古い旅館の旦那的な経営方法ではやっていけなくなった。女将が仲居さんたちを指揮してお客を接待し、親父さんは奥に引っ込んでそれを見ている。帳場は番頭がしきり、板前が食材を仕入れて調理場一切を好きなように動かしている。一見、宿泊客のことを考えているようだが、実際はみんな自分の利益になることしかやっていない。もうそんな時代ではない。もっと開かれた旅館経営をしなければ、伊豆の温泉観光旅館は消滅してしまう。それでおれも思い切った営業計画を立てて、伊豆温泉旅館の再生計画を実現したいのだ……」

健太郎は熱っぽく白雲荘のビジョンを冬子に語った。

「すばらしい計画ね。健太郎さんなら、きっと実現するわ。男の人には夢があって羨ましいわ」

「古い型の温泉旅館の再生には、斬新な構想をもった人たちが智恵を出し、協力しなければ駄目だ」

「……」

「白雲荘の再生計画は、本館の大広間や大宴会場は勿論、ロビーも客室も大改装して、少人数向けの本格的な純日本式旅館にして再出発するんだ。世界一の富士山と、伊豆の温泉を目玉にして、伊豆の人たちが一緒になって盛り上げていけば、将来必ず宿泊客は増加する。それも、富士箱根伊豆国立公園の魅力を生かせば、滞在客も増えてくる。近い将来に開港する静岡国際空港には、東アジア諸国の観光客が大勢日本にやって来る。その観光客に日本の第一夜を伊豆で寛いでもらうんだ。『フジヤマとオンセン』をキャッチフレーズにして、アジアの人たちを伊豆に引き寄せるんだ」

「素晴らしいわ。きっと実現するわ……」

「幸いなことに、白雲荘の日本旅館部分は本格的な木造建築だ。良質な温泉が豊富に湧出する大浴場は、伊豆の温泉旅館ならではの魅力だ。これらを生かさない手はない」

「そうね、わたしも伊豆に来て三年になりますが、伊豆には、都会では味わえない静かな心の安らぎがありますわ。健太郎さんのお考えはきっと成功すると思いますわ。わたしもお話に引き込まれそうよ……」

「このような大改革には、大きな資金も必要になる。それには資金調達と資金管理を委せられるパートナーが必要だ。冬子さん、きみならその能力がある。ぜひおれの計画実現に手を貸してくれないか。そのためにおれと結婚して欲しい……」

「エッ……わたしが健太郎さんの奥さんになるの……」

「そうだ、きみがおれの嫁さんになって、大改革の最強の協力者になるのだ。恵ちゃんも引き取ろう。そしておれと養子縁組しよう。そうすれば母子一緒に生活できる。冬子さん、ぜひ結婚してくれ……」

詩集「ろかいゆ」より その二

松下壽男

踏切

白の雨ぐつ
昨日も今日もで
もう走りたくないって言ってたから
アスファルトの
虹の流れる路の上
二つ並んでぴちゃぴちゃお悪戯
きれい
あなたたち真珠みたい

そうね私
この降りしきる
単調な鐘の響きも止んだなら
貝をひろいに行きましょう
手には白いサンダルと
やっぱり傘はさしてるけど
でも
降りそそぐのは
お日さま

渚に影をおいかけて
素足はぴちゃぴちゃしぶきをはねる
ふりむくと
砂丘までつづいている足跡の
小さいほうは私の足跡
やすみませんか息を切らして
声がするけど
すずしく誘う眼差しに
やっぱり夏が光ってたから
ご心配なく
かぶりをふって翻す
私にせまる
この轟きは

でも大丈夫
波はよせてはかえすもの
ほら

遮断機が上がった

返歌

さよならの
ことばもうつろ
さすかさの
あまつゆひとつ
あじさいにおっ

ハート・トゥ・ハート

第四話　ア・ラブ・シュプリーム（中編）

松下壽男

♥♡♥

年の瀬を迎えても、エルヴィンの日本からの出国許可は下りなかった。しかし彼は、新宿のライヴハウス＝ピット・インで日本の若いジャズメンと演奏を繰り広げる日々が愉しかった。

予定外の長期滞在のうちに、彼の旅装は季節の移り変わりに付いて行けなくなっていた。東京の冬はニューヨークよりも寒いと感じた。エルヴィンは風邪を引いてしまった。

それでも、彼は、その夜もピット・インで山下洋輔らとのセッションに打ち込むのだった。

（ヨースケは殻を破りたいのだ。元々ピアノのキーにはないブルー・ノートを鍵盤で表現するにはフリーな奏法しかないと気付いたのだろう。ところが何を崩し、何を積み上げればいいのかがわからずに悩んでいるんだ。そんな時期が俺にもあった。頭で考えるな、心を解き放て。志をもつ者のフリーには必ずソウルが溢れ出る。アイラーのフリージャズがその通りさ。だから、ヨースケ、お前の明日が、俺の楽しみさ）

洋輔は、ピアノのアドリブ・ソロを弾き続けた。何コーラスを弾き続けたのか、がんがんうずく今夜のエルヴィンの頭ではもう数えきれなかった。

（やつは、今何かを見つけかけている。つかもうとしている。それを産み出すようにしてやるのがおれの仕事さ。ヨースケ、とことん付き合ってやろうじゃないか）

「ッエッ、ッエッ！」

エルヴィンの唸り声を背中に聞きながらも、洋輔はしかしついに見出すことはできなかった。最後のコーラスを溜め息のような音で弾き終わると、洋輔は沈んだようにうな垂れてステージを降りてしまった。客席からブーイングが響いた。エルヴィンは洋輔を見送りながらコー

ダを打ち鳴らしていた。しかしいつものようには力が入らなかった。自らを励ますように大きく唸り声を上げたが、かえって意識が朦朧としてきた。彼の異変に気付いた客席からは惜しみない拍手と共に、はらはらした眼差しが注がれていた。エルヴィンは立ち上がると、ふらつく足でステージを降り、近くの椅子に倒れ込んだ。そこに一人の女性が影のように寄り添ってきた。いつも左隅の席で彼を見つめていた黒い瞳の女性であった。彼女はエルヴィンの額に手を当てた。

「まあひどい熱!」

手が焼けると思うほどに熱かった。

彼女はバッグからハンカチをとり出すと、エルヴィンの顔や額の汗を拭った。エルヴィンは甘い香水の香りを嗅いだ。

「エルヴィンさん。あなた、今、ホテルで独り住まいでしょ。今夜は私の所にいらっしゃい」

彼女は、流暢な英語で彼に語りかけた。それから駆けつけてきたマスターに、タクシーの手配を頼んだ。彼女の毅然とした姿を見て、マスターも頷いた。

二人を乗せたタクシーは、ほどなく場末の路地の入口に停車した。女性は、小さな体でエルヴィンの体重を支えながら、粗末な鉄骨製の階段を昇った。吹きっ晒しのベランダに並ぶ扉の一つを、彼女は、コートのポケットから取り出した鍵で開いた。明かりをつけると、目の前にキッチンとリビングだけのワンルームが姿を現した。その中にエルヴィンを押し込むと、彼女はドアを閉めた。巷の喧騒と風の音が途切れた。

「そこに座って、待ってて頂戴」

女性は、押し入れを開き、畳の上に夜具を敷いた。そこへエルヴィンを寝かせると、洗面器にポットの湯を汲んで来て彼の傍らに座った。皮のジャンパーを脱がされたエルヴィンは、セーターからしみ出るほどぐっしょりと汗をかいていた。

石油ストーブの火で部屋は暖まり始めていた。

「お脱ぎなさい、洗いますから」

彼女はとうとう彼を裸にしてしまった。エルヴィンは、温かなタオルで優しく体を拭いてくれる彼女に、子供のように身を任せるしかなかった。高熱のせいか全身が宙に浮いているような違和感の中で、彼は奇妙な幸福を味わっていた。男根が勃起するのを感じた。彼女は彼を掛け布団でくるむと、冷蔵庫から氷をとり出してきた。ビニル袋に氷を詰めてタオルで包んだ。それらで彼の頭と額を冷やした。体温計を口に差し込んだ。その手際のよさは、彼の知る限りアメリカの看護士の比ではなかった。

「三九度二分、今夜が峠ね。大丈夫、明日には元気になるわ。エルヴィンさん、あなた二日前から風邪を引いていたでしょう。私、心配してました。でもうれしかった。

して、日本の若手を仕込んでくれているんですもの。私、こうして風邪薬を買っておいたのよ。いつでもあなたの看病ができますようにって。だから私、今夜は感動しながらあなたのことを見てました」

そう言うと、女性は解熱剤のカプセルを彼の口にねじ込み、コップの水を口移しで飲ませてきた。エルヴィンも大きな手の平で彼女の頬を包み込んだ。長いキスが続いた。女性を夜具に引きずり込みたい衝動をエルヴィンは懸命に押さえた。

「ありがとう、おちびちゃん。そろそろ名前を教えてくれないか」

「私、ケイコ」

「ケイコ。素敵な名前だ。じゃあ、おやすみ、ケイコ」

「おやすみなさい、エルヴィン」

ケイコは、部屋の明かりを落とした。

エルヴィンが目を覚ました時も、ケイコは相変わらず枕元に居た。体温計を彼のわきの下に差し入れて何度目かの検温の最中だった。ビニール袋の氷まくらも氷嚢も新しい氷で満たされていた。ハンガーに彼のセーターとジーンズが干され、室内はストーブの熱とおそらく小まめな換気による快適な空気で満たされていた。

「エルヴィン、目が覚めたのね。七度三分、もう安心よ」

低く穏やかな声を聞いて、彼の耳は母親を感じた。エルヴィンに悪戯っ気が湧いてきた。

「寒い、寒い……」

彼は夜具の中で震えて見せた。

「どうしたの、エルヴィン、大丈夫?」

「寒いよ、ケイコ、寒い……」

彼は、手を差し伸べると、心配そうに身を寄せてきたケイコを思いっ切り抱きしめた。そして彼女を夜具の上に押し倒した。

「よかったわ、エルヴィン、元気になって」

ケイコは無抵抗で目を閉じた。

エルヴィンは蕾のような唇に口づけをすると、彼女の服を脱がし始めた。白い乳房が露になった。乳首に舌を這わせると、ケイコの閉じたまぶたから涙の筋が流れた。

再びエルヴィンが目覚めた時には、カーテンの隙間から、ちらちらと朝のまばゆい光が覗いていた。彼はウーンと大きな伸びをした。

ケイコはエプロンをしてキッチンの前に立っていた。

「おはよう、エルヴィン、もうすっかり熱も下がっているわよ」

「ケイコ、アイム・ソーリー」

「ノー。エルヴィン、アイム・ハッピー」

「サンキュー、ケイコ。アイ・ラブ・ユー」

エルヴィンは夜具から跳び起きると、駆け寄ってケイコを抱きしめた。吊るされた物干しに、小さなショーツ

コを抱きしめた。吊るされた物干しに、小さなショーツと大きなトランクスが仲良く並んで洗濯ばさみで止められていた。彼は、自分が丸裸であることに気づいて、そそくさと夜具に潜り込んだ。その様子を笑顔で見ていたケイコは、ハンガーのジーンズとセーターに頬擦りをして、彼に差し出してきた。

「もう乾いているわ、これに着替えて。今日はあなたの下着とパジャマを買ってくるわね」

夜具の隣の小さなテーブルに朝食が並べられた。オカユとミソシルとスクランブルドエッグだった。ソウルフードを思わせるミソシルの香りが懐かしかった。キルトをめくって足を差し入れ、エルヴィンはケイコと向かい合って座った。コタツがとても温かかった。

食器を片付けると、ケイコはコタツのテーブルに鏡を置いて化粧を始めた。彫りの浅い端正な顔立ちが陰影の濃い西洋的な顔立ちに変わっていく様を、エルヴィンは魔法でも見るように眺めていた。彼には、どちらの顔もプリティーに感じられた。

「私、仕事に出かけます。あなたはまだ病人ですから、外に出てはいけません。できるだけ寝て過ごしなさい。お昼はこのサンドウィッチをお食べなさい。私、六時前には帰って来ます」

そう言い残して、ケイコは部屋を出て行った。エルヴィンは急に寂しくなった。彼は、布団に潜り込んだ。

カーテン越しの薄紅色の陽射しが、明るくなったり暗くなったりしていた。空にはちぎれ雲が飛んでいるのだろう。目を閉じた彼は、寂しさと幸せとが溶け合った、どこか懐かしい感覚に浸っていた。大人になってからは初めて味わう感覚であった。北風に煽られて時折窓ガラスが音を立てた。食後にケイコに飲まされた風邪薬のせいか、やがて彼は深い眠りに落ちていった。

目覚めると昼はもうとっくにすぎていた。エルヴィンは起き上がって、カーテンを開けた。窓の外の、ケイコが移し替えていった物干しには、二人の下着が生き物のように身を打ち付け合っていた。陽射しの中に真夜中の記憶が甦った。エルヴィンは気恥ずかしくも温かな気持ちに包まれた。股間から力が張ってくるのを感じた。窓を開け、針金細工のような手すりの付いた、粗末なバルコニーに腰を下ろした。冷気がむしろ心地よかった。

エルヴィンは眼下の路地に屯す子供の群れを眺めた。今日はいつになく何もかもが懐かしく感じられた。

子供の間に何かもめ事が生じているらしかった。言い争う二人の少年を他の子供らが心配そうに取り巻いていた。すると片方が相手の胸を突き飛ばした。よろめくと同時に子供の輪も大きく動いた。やられた少年は体勢を立て直すと、勢いをつけて頭から相手の腹に飛び込んでいった。受け手になった少年は、何とか衝撃をこらえると、腰に回された手を振りほどき、相手の服を掴んで

思い様ふり回した。不意を突かれた少年は、地面に転がり込んで暫くは動かなかった。

(勝負あったな)

と、エルヴィンは思った。やがて、うずくまった少年は半べそをかきながら立ち上がった。しかしただ起きてはいなかった。少年の両手には路地の砂利が固く握られていた。

少年と子供らの間合いが広がった。その少年は武器を手にしているのだ。エルヴィンは子供たちの様子を固唾を呑んで見守った。彼はいつでも声を掛けられる位置に居た。

すると、子供らは一斉に歌い出した。大声を張り上げ、手拍子まで打ちだした。やがて少年は、手にした石を地面に投げつけると、しゃがみ込んで声を上げて泣き出した。明らかな敗北宣言であった。ひとしきり泣かせた後で、子供らは彼を取り囲み、手を差し伸べた。彼が立ち上がると、子供の群れは新たな遊びを求めて歓声を上げながら走り去っていった。

子供の様子を懐かしく眺めていたエルヴィンであったが、懐かしさは驚きに変わっていた。それがニューヨークの場末の路地の光景だったとしたら、どんな結末を迎えていたことだろう。

窓を閉めたエルヴィンは、ケイコの居ない部屋をあらためて見回した。部屋のいたる所に置かれたラックにジャズのレコード盤が詰め込まれていた。「ダウンビート」や「スイングジャーナル」といったジャズ評論誌や、アメリカのペーパーバックが並んでいた。日本語の本も、大抵ジャズメンの顔写真が載っているものばかりだった。アルバム大のスクラップブックを引きぬいて開いてみると、そこには、エルヴィンに関する記事がびっしりと貼り付けてあった。

「よくもこんなに集めたもんだぜ、あのおちびちゃん」

そしてレコードを手当たり次第に引き抜いてみて、棚の一角が彼の加わった演奏で占められていることに気付いたエルヴィンは、不思議な気分に襲われた。そのコレクションには、自分でも全く記憶に残っていないセッションがいくつも含まれていたのだった。

「まいったぜ、ケイコ、おれよりおれに詳しいじゃないか」

エルヴィンは、ケイコの帰りを待つ間、レコードを聴いて過ごすことにした。ケイコの作って置いてくれたサンドウィッチを頬張り、気の向くままに取り出した演奏を聴くうちに、ジャズの風が、彼の体に残った気怠さを吹き飛ばしてくれるのだった。すでに外はとっぷりと暮れていた。寂しさは、ケイコを待ち受ける期待感へと変わっていた。

軋んだ音を立てて小さなドアが開いた。

「ただいま」

そこには、バッグを肩に懸け、買い物袋を両手に下げたコート姿のケイコが微笑んでいた。
エルヴィンは立ち上がり、小さな体を抱きしめた。二人は唇を合わせた。エルヴィンは彼女を抱き上げると敷きっぱなしの夜具の上に寝かせた。彼の厚い胸の下で、ケイコが囁いた。
「待って、エルヴィン。レコードを止めなきゃ」
夕食は、とびきり上等のスキヤキだった。甘じょっぱい香りとグツグツという音を聞くだけで身も心も温まる思いがした。二人で鍋をつつきながら、エルヴィンは昼間見た子供の情景をケイコに語った。
「エルヴィン、子供たちはこう言ってたんじゃなくって。
『弱虫毛虫　挟んで棄てろ』
『石を持つ者　一等弱い』
やっぱりそうね。これは歌じゃなくって、『ハヤシコトバ』っていうのよ。日本人は、今も昔も子供の頃から武器を手にする者は弱虫だと教えられているの。今の日本の憲法にも軍隊はもちません、戦争はしませんと書いてあるのよ。日本人はまだ物心がつかないうちからハヤシコトバで子供同士教え合ってきたのよ。それは、私の子供時代も、戦争をしている真っ最中でも変わらなかった」
「じゃあケイコ、どうして日本はあんなにひどい戦争をしたんだい」
「それがわからないの。子供も大人も、私の周りの人たちは、みんな、早く戦争が終わることを望んでいたわ。ただ、誰も戦争に反対はしなかった。だからといって、みんな賛成をしていたわけじゃないのよ」
「じゃあみんなで歌えばよかったじゃないか『ヨワムシケムシ』って」
「そうね、でもそれは、アメリカがやることじゃなかったかしら。戦争を早く終わらせて犠牲を少なくするためにというのなら、なにも原爆を落とすことはなかったじゃないの！」
ケイコは思わず我を忘れていたことに気がついた。
エルヴィンは、場を鎮めるには沈黙の力を借りるほかはないと悟った。
すき焼がグツグツと音を立てて煮詰まっていた。
「エルヴィン、お風呂に行きましょう」
ケイコが明るい声で語りかけた。電熱器を止め、鍋や器を片付けると、彼女はまっさらの下着とタオルと石鹸箱を取り出した。ケイコは、帰り道に市場でそれらを買い求めたときと同じ浮き浮きした気持ちが戻ってくるのを感じた。そして嫌がる彼に体温計を差し出して最後の検温を済ませると、エルヴィンを夜の路地へ連れ出した。
道々、ケイコの説明を聞いても、エルヴィンには銭湯

がどんなところか見当が付かなかった。下駄箱に靴を入れ、ケイコと別々のノレンをくぐる時には、正直、子供のように不安だった。しかし曇りガラスの扉を入ると、再びケイコと向き合うことができたのだった。二人の間には、一段と高く作られた台座が立ちはだかっていた。
「おばさん、この人よろしくね」
ケイコが、小銭を手渡しながら、その番台に、まるで法廷の裁判官のように座っている皺だらけの老婆に声を掛けた。
「あいよ、うっとこは、黒ん坊もヤー公もお構いなしさ。それが裸の付き合いというもんじゃろ。どっこらしょ」
と、老婆は梯子段を降りてきて、ロッカーから脱衣かごの使い方まで手取り足取りエルヴィンに教えた。それから再び番台に上がると、
「ケイコちゃん、あんたのコレ、ほれぼれするほどいい体してるねえ、今夜は散々泣かされるよ」
「イヤだわ、おばさん」
などという半裸のケイコと会話に興じるのだった。
エルヴィンは、浴場のガラス戸を開いた。温かい湯気と、その一粒一粒にこだまするような気怠い残響が彼を包んだ。裸の男たちの視線が一斉に彼に注がれた。やがてその視線が体の一点に集中するのを感じた彼は、睥睨するように周囲を見回した。男たちは今度はそれぞれに自分の股間を覗くのだった。
（ツヘッ、ツヘッ、アイマ・ウィナー！）
エルヴィンは胸を張って空いている洗い場に向かった。
彼は愉快だった。それは、何も、下世話な競争に勝ったからではなかった。人は裸になれば皆同じ、人類の関心事は共通なのだとわかったからであった。肌の色の違いなどむしろたいしたことではなかった。こんな愉快はこれまで感じたことはなかった。エルヴィンは一層日本が好きになった。
ケイコに持たされた真っ白なタオルに石鹸を刷り込んで、黒光りのする背中をごしごしと擦っていると、ガヤガヤと子供の一群が浴場に入って来た。昼間見た連中だった。
子供らは、エルヴィンを見ると、その周りを取り囲み何やら議論を始めた。体格の一番大きい少年が指図をすると、まだ足元もおぼつかない幼児が、彼に近付き、短い指でちょんちょんと広い背中をつつくのだった。エルヴィンは、頭を撫でてやった。幼児が笑顔でガキ大将の元へ戻って来ると、子供たちは一斉にエルヴィンの肩やら二の腕やらをつつき始めた。備え付けの軽石で彼の背中を力一杯擦ってみる子もいた。
エルヴィンは悠然と湯を浴びると、浴槽に向かった。子供たちもあとに付いてきた。子供らは、湯船の中でも彼をつついたり、頭を撫でたりしてきた。中には、湯に

もぐって彼の下半身をのぞく子もいた。その子が仲間を誘って姿を隠したかと思うと、エルヴィンの股間に激痛が走った。彼は思わず立ち上がると、浮かび上がった子供に湯をかけ飛ばした。

「あー、おこったあ」

子供らもエルヴィンに湯をかけ飛ばしてきた。彼はすっかり童心に返っていた。子供たちとわめきながら夢中で湯をかけ合った。

「うるせえぞ！ガキ共。だまりやがれ！」

浴場に大音声が響き渡った。きょとんとして声の主を眺めると、洗い場の真ん中に、白髪を四角に刈り込み骨太の骨格にすじを浮き立たせた、皺だらけの老人が胸を反らせて座っていた。その背中には一面に青々と、角を生やしたデビルのタトゥーが彫られていた。子供らもエルヴィンも湯船に首まで浸かり、借りてきた猫のようにおとなしくなった。頭までもぐって身を隠す子供もいた。熱い湯が苦手なエルヴィンは、頭に血が上ってくるのを感じた。

（子供らが出てくれれば、一緒に窮地から抜け出せるのに…）

その時、洗い場の吹き抜けの空間からケイコの声が響いた。

「エルヴィン、出るわよ。レッツ・ゴー！」

エルヴィンはここぞとばかり立ち上がり、思わず、

「イエッサー！」

と、敬礼をしていた。その仕草に、老人も、子供らも、男たちも一斉にどっと笑い出した。背中に明るい笑顔を感じながら、エルヴィンは浴場をあとにした。

部屋に戻った二人は、一組の夜具に身を寄せ合ってもぐり込んだ。そこでも銭湯での出来事を愉快に話すエルヴィンであった。

「あなたって本当にビッグな人。体も、心も、ドラムの音も。そしてすべてが。世界一よ」

ケイコが耳元で囁いた。

「お前は、なんてプリティなんだろう。そして深くて、温かくて……」

エルヴィンの唇が囁きながらケイコの口を塞いだ。大きな体が小さな体の上にのしかかっていった。ケイコの手が枕元のスタンドの明かりを消した。

翌朝、エルヴィンは、出勤するケイコを引き止めた。もう片時もケイコと離れる寂しさに堪えられなかった。ケイコも頷いた。二人は、レコードを聴いたり将来を話し合ったりして時を過ごした。

サンドウィッチを仲良く摘んで昼食を済ませたあと、二人は、エルヴィンのホテルに向かった。名前の割にはこじんまりとした構えのその宿は、それでも、ケイコの部屋よりずっと快適そうに思えた。しかし、そこはもはや無用の長物であった。ケイコは、クローゼットの衣類

を手際よく畳んでトランクに詰めていった。バスルームや机の引き出しから細々したものを取り集めて、持ってきた袋に詰めた。絨毯に落ちた紙切れや糸くずをきれいに拾い集めた。

チェックアウトのとき、フロントは、滞在期間中の支払いを迫ってきた。

「それは、ミスター・エルヴィン・ジョーンズ個人ではなく、慣例通りプロモーターが支払うはずですし、支払うべきです」

と、請求書を突き返したケイコは、自らフロントの電話を取って、プロモーターと話をつけた。

ケイコの部屋に戻った二人は、荷物を解いた。プラスチックのコップの中に、さくら色と黒檀色の歯ブラシが仲良く並んだ。二人は、スーツに着替えて、再び部屋を出た。

ケイコは、エルヴィンを伴って職場に向かった。ボスに手渡した退職願には、ペン書きの端正な筆跡で「一身上の都合により」と書かれていた。小さな事務所のスタッフは、彼女の生き方を理解していた。一斉に立ち上がって祝福の拍手をした。ケイコはエルヴィンとつないだ手を固く握った。彼も握り返した。

事務方と必要書類をやり取りし、後輩と引き継ぎの打ち合わせを済ませると、二人は新宿の街に出た。街角から見上げる空は、いつになく澄み渡っていた。

ケイコは、ビルの最上階にある品のよい店を選び、二人で早めの夕食を楽しんだ。よくしゃべるケイコであった。それがケイコのケイコ自身のための心尽くしであることがエルヴィンにはわかった。これからは俺がケイコの運命を背負っていくのだと思った。しかしそれが不思議なことだとは思わなかった。彼らの宿命のように感じられた。

日が暮れてから、エルヴィンは、ケイコと腕を組んでピット・インの扉をくぐった。カウンターの中からその様子を見たマスターは、エルヴィンに親指を立ててサインを送った。エルヴィンも同じサインを送り返した。

（これで下手な英語で彼の質問に答えることも、通訳をすることもなくなるな）

マスターは、ほっとしたような寂しいような気がするのだった。

ケイコは、いつもの席に向かった。しかし今夜は、ミスター・エルヴィン・ジョーンズが椅子を引き、それから彼女の隣に座るのだった。

エルヴィンの耳に、弾けたピアノが聞こえ出した。

（ヨースケだ。あいつ、何か、ふっきれてるぜ）

洋輔は、体全体をピアノに打ち付けるようにして、がむしゃらに鍵盤を掻き鳴らしていた。実に元気がいいのだ。

「イエイ！」

エルヴィンは大きな掛け声をかけた。
こちらを振り向いた洋輔の左目の周りには青黒く痣ができていた。エルヴィンは白い歯を見せて笑った。洋輔も微笑んだ。それからピアノも叩き潰せとばかりの大音声を打ち鳴らすと、曲は終わった。
洋輔は、ステージから駆け降りてきた。そして、
「ありがとうございましたっ！」
と、最敬礼をした。エルヴィンは面食らった。ケイコがヨースケの話をにこにこしながら聞いていた。
ケイコの通訳によると、あの夜、洋輔が店を出た後、いつも仕事着の白衣のまま立ち見の席で聴いている天ぷら屋の店員が彼を呼び止めた。振り向くと、いきなり拳骨が飛んできた。いつもの洋輔ならば負けずに相手の胸ぐらに手をかけるところだが、その夜は、なぜか天罰のように感じられてネオンの光でにごった空を仰いだ。疼く左目に星が見えた。
「何でさっさと言いたいことを言って終わりにしないんだい。エルヴィンは風邪を引いてんだぜ！」
と、怒鳴りつけると、その常連は下駄を鳴らして去っていった。その言葉を聞いて洋輔は、
（そうか、言いたいことを言ってしまえばいいんだ）
と、悟ったのだった。そして言いたいことを引き出してやろうとずっと付き合ってくれたエルヴィンの思いがよくわかった。
（謝りたい、礼を言いたい）
と、店に戻ってみると、エルヴィンはもういなかった。
ケイコの通訳で、洋輔の痣と、元気と、最敬礼の、三つの不思議がつながった。エルヴィンは愉快であった。
「そうかい、若造、それじゃ、さっさと、お前の言いたいことをおれに聞かせちゃくれないか」
エルヴィンは、ステージに上がっていった。洋輔も再びピアノの前に座った。
二人の姿をケイコが見守っていた。
エルヴィンは日本が大好きになった。

短歌

行雲流水（十三）

石黒修身

㈠ 海外詠三十首

二〇〇六年四月、二週間の行程で、イタリアのジェノバからチレニア海、地中海、エーゲ海、マルマラ海、更にボスポラス海峡を通過し、黒海のオデッサまでを往復する船旅をした。
途中沿岸の主要都市に寄港し、観光する月並みなコースであったが、未知の都邑、風物、事象に接し、歴史的好奇心と旅心はそれなりに満たされたと思う。
以下に概ね立ち寄った順に、印象を詠んだ三十首を載せる。

五年振り訪ねしナポリ空澄みてサンタルチアは碧く凪ぎたり

レネアポリスこの明媚なる港町世界遺産になりて賑わう

美しきベスビオ山は朧げにナポリの海の彼方に聳ゆ

「見て死ね」と謂われしナポリは新旧の混りし都市に変りゆくらん

古来「ナポリを見て死ね」との言葉があるが、時代の経過とともに、何時までも旧いナポリでは居られないだろう。

神いますパルテノン殿仰ぎつつアクロポリスの石段(いしきだ)登る

先史なる黄金の代に造られしパルテノン殿に畏(かしこ)こみ対す

見はるかす斜面(なだり)を埋める白い館(いえ)アクロポリスの丘に迫りぬ

二年前オリンピックが開かれしスタジアム見きオリンピア杳(はる)か

アテネなる博物館で碗購いし妻は茶器にと見立てているらん

カオスからガイアが生じオリンポス神住みし国ギリシヤは眩し

吾をして虜(とりこ)にせんかこの魅力イスタンブールは魔力もつらん

東西の文明交わるこの都市の旅人魅する異国情緒は

オスマンの栄華を遺すトプカプは代々(よよ)スルタンの威信写せり

トプカプ宮殿、スルタンは王

イスタンブールこの近代の都市にしてサラート告げるアザーンが響く

「サラート」はイスラムの宗規に定められた、一日五回の礼拝。「アザーン」は礼拝の時刻を告げる呼び掛け。

チヤイ出され値切り交渉やゝありてトルコの石を妻は買いたり

トルコでは、商談の前にチヤイ（茶）を出す習慣がある。日本人向けの売り物は、トルコ石の宝飾品と絨毯が定番であろう。

デツキにてエトランゼらが声あぐるこゝボスポラスよイスタンブールよ

ボスポラス海峡を船で通過するとき、乗客は殆んど上部デッキに集まり、両岸をそして橋を見る。

文明の十字路と呼ぶこの都市を東西に見て海峡を航く

屈辱の協議なされしこゝヤルタ歳月流れ往時茫々

第二次大戦末期の一九四五年二月、米、英、ソ、三国の最高指導者ルーズベルト、チャーチル、スターリン、の三者がヤルタで戦後処理につき協定した。

今はもう敗者の悲憤とくになく淡々と見る協議の室(へや)を

ヤルタなる断崖に立つ館あり「つばめの巣」とう絶景なりき

アイ・ドトール岬の断崖に立つ小さな宮殿で、ヤルタを代表する観光名所となっている。それを見ると、「つばめの巣」と呼ばれる所以が良く分る。今は高級レストランになっていて、さっぱりとした、日本人に向いた料理が出た。眼下の海でイルカの群がしぶきを上げていた。

チエーホフの過せし館(いえ)はひっそりとヤルタの森につつまれており

チエーホフは晩年をこゝで過ごし、「桜の園」他名作を書いている。その建物が博物館になっており、館内、庭園、展示品も中々見ごたえがあった。

「黒海の眞珠」と称うオデッサは床しき古都の趣き残す

プーシキン滞在(あり)しを誇りオデッサは記念館もて勲(いさを)を称う

プーシキンが滞在した元ホテルの一部に、原稿や生活備品等が集められている。近時ロシアではプーシキンの評価がとみに高まっていると聞く。

劇的な彼の映像が甦る「戦艦ポチョムキン」撮りし階段

ロシヤ革命後に作られた映画「戦艦ポチョムキン」撮影の舞台となった階段が、オデッサ港を見下す位置にそのまゝ残っている。

V

「欧」と「露」のはざまに揺れるウクライナ・スラブの民の宿命(さだめ)を思う

ソレントもカプリも指呼にナポリから船は離(さか)りてジエノバに向う

予期せざる港湾ストに遭いしため「青の洞窟」見ざりきを悔やむ

チレニア海航く客船のキヤビンからカプリに懸る落日を見き

朝夕の陽の出入(でいり)りはあかあかと大海原を染めて美し

ジェノバからオデッサを往復する船旅でわたつみの青に癒やされにけり

(二) マリコ・テラサキ・ミラーを称える

二〇〇六年春の叙勲で、マリコ・テラサキ・ミラー女史が在外邦人として、旭日中授章を受章し来日した。五月十六日、関係者が開いた歓迎祝賀会に縁あって参加することが出来た。

マリコは、日本の外交官寺崎英成と米国人女性グエントレン・ハロルドとの間の娘で、一九四一年の日米開戦直前に、当時駐米日本大使館の一等書記官であった父英成が、本国への暗号電文に「マリコ」を使った事実が戦後公表され話題となった。

開戦により、英成とグエンはマリコを伴って日本に帰り苦難の生活を送った。

終戦となり、英成は宮内庁御用掛として、天皇とマッカーサーとの通訳を勤めたが、病に倒れグエンとマリコの帰米中に他界する。

マリコは母グエンにより健やかに育てられ、結婚後民主党員として平和運動で活躍を続け、現在は米、ワイオミング州キャスパーで、日本国名誉総領事として、日本の伝統文化の紹介を通し、日米親善に尽している。

マリコと同時代を生きてきた筆者としても、数奇な運命を逞しくも健気に乗り越えてきた女史に強い関心と畏敬の念を抱き、以下十首を詠んだ。

暗号の「マリコ」は受章す日米のかけ橋の功褒めらるるべし

亡き父の志つぎ日米のかけ橋たりし「マリコ」を称(たた)う

数奇なる運命(さだめ)乗り越え日米のかけ橋たりし「マリコ」は此処に

凛として平和を諭す「マリコ」には童女の頃の面影潜む

日本語を噛みしめるごと会話する混血の女史老いて美し

時折に童謡の片句混えつつ日本語で語る稚気愛らしく

亡き父の思い出語る「マリコ」には美丈夫なりし「英成」が映る

開戦の綾なす秘話を想わする幼き頃の「マリコ」の写真(かげ)は

受章せし「マリコ」は語る厳そかな宮中の儀に感激せしを

「マリコ」との所縁(ゆかり)の人ら集い来て懐旧の談尽くることなし

参考とした図書他
「マリコ」　柳田邦男　新潮社
「太陽にかける橋」　グエン・テラサキ　新潮社
「昭和天皇独白録」　庄野音比古　文藝春秋社
その他新聞、テレビ等

一兵として

曽根竣作

かすかなる魚臭したしみ鞳(せり)終へし午前十時の石畳行く

腰越の市場に春の風すさび白子(しらす)のかごの高く積まるる

ていていとそびゆる杉の木末(こぬれ)より星なく冥(くら)き虚無の空見ゆ

足繁く人らゆき交ふ交叉路のミラーが映す夕映えの街

とっぷりと冬の日昏れしビルの影帰巣(きそう)の人群れ足早に過ぐ

雨降山(あふりさん)の中腹あたり炊飯のけむりひとすぢ凍て空へ消ゆ

をちこちに雪渓残し大山の峯たたなはる春を兆して

暮れなづむ苑に裸梢のかげ長くひと日の無為を咎めて杳(くら)し

× × ×

風冷ゆる「新竹(しんちく)」の浜に扱(しご)かれき速射中隊の一兵として

「右行く先頭四つ右へ、距離五百」対戦車砲の号礼忘れず

学徒兵は消耗品か　幹候を志願せぬヤツ非国民とぞ

金モール付けし参謀ら後方に弾雨の下はつね下級将兵

襤褸(らんる)なる防暑服にて這ひずりし弱兵の日々汚点にあらず

ラジオ告ぐる破局のま昼あかあかと眼(まなこ)に沁みて仏桑華咲く

呆然とジョホール水道に手を浸す兵士の姿その後は問ふな

× × ×

去年(こぞ)ことし天覆(そら)ひたるさくら樹の変らぬ恵み仰ぐ傘寿ぞ

うす紅の雲たなびける姿してま秀(ほ)らに重しさくら大樹は

池の面に浮きてただよふ葩(はなびら)のもとの樹を恋ふ心は知らず

わが頭上ふぶく桜樹(わうじゅ)の外あらず友と若(し)きたる宴のむしろ

とりとめもなく石段(いしきだ)にふぶき来るさくら纏ひて階下りゆく

滾(たぎ)つ瀬をくり返し跳ぶ鱒の群れ銀の背びれが陽光はじく

うす靄の流るる木立条(すぢ)なして暁(あけ)の斜光のやはらかく落つ

ちらちらと夕日うつろふ墓の辺に友のみ骨をけふ埋葬す

兄弟(けいてい)と紛ふ厚情永かりき想ひふかしも香煙のなか

不遇なりし晩年をしも哀れみて集ひし人のいくたりか数ふ

伊達をとこ「勇」も遂に泉下なり　日比谷音楽堂に連れ立ちし日よ

いくたびも論打ち合ひし彼なりき大凡はわが負けしを想ふ

改札を出でゆく人らは黒き河シティーの時間ここに始まる

たとへばけふ地下街へ行く階(きだ)の間(あひ)ゴスペル・ソングふつふつと湧く

いくたびかラストシーンの甦る「第三の男」のアリダ・バリ死す

アッツ草幻想

大和禎人

アッツ草が無事に今年も芽吹きを見て、赤い可憐な花をつけた。二鉢がミニ盆栽よろしく、他の大方枯れ果てた鉢物の中にあるので、いっそう奇跡であり、可憐でもあり、そのために特別な感想に誘われるのであった。

もとは水上の農協売店で求めたものだ。わが家へ来てから、二年生、三年生である。水上という温泉地が、そもそも寒冷地で、天気予報でも谷川岳をひかえて、つねに不順、最悪条件の風土だから、不思議な気がするのである。

アッツといえば、かの戦争中の激戦地で、マキン、タラワ、とともに日本軍の玉砕の悲惨に血ぬられた島である。もはや忘れ去られても致し方ない六十余年昔のことである。可憐で赤い花であることが、そうした昔を知るものには悲しみを誘われる。鮮血を思わせる赤である。

ひとしきり、ミニ盆栽のブームが伝えられた。手ごろで取り組みやすいということが大方の人気を呼んだものであったろう。ところが、どっこいミニ故に管理が難しいのである。

ソニーファミリークラブというところの宣伝で「ミニ盆栽十二カ月」という宣伝にのって、花卉の趣味を多少持ち合わせている私は止せば良いのに、隔年一度も懲りずに買いつけに応じたものだ。あらためて例示すると、斑入り白丁花、唐楓、白紫檀、五葉松、黄梅、木瓜、楡欅、深山霧島、出猖々、八房下野、山梔子、紅紫檀、という十二品種で、限定二〇〇口、一回の負担は妙な半端で六、六九九円であった。

ほぼ似た品種で二年越しの二回だから、格好のお道楽と言えよう。締めて一六〇、七七六円也。とんだ道楽と言われても仕方がない。横好きもいいところであった。

これに比べアッツ草の値段はたったの五三〇円なのであった。

小品盆栽の愛培となると、どうやらお殿様あたりの趣味かも知れないのだ。その道で知られた本当のお殿様のご末裔があることを知る機会があった。讃岐松平氏の裔で松平頼寿伯爵である。この方の母上は大老伊井直弼の次女千代子とあり、最後の藩主十二代頼聴を父とするやんごとなきご身分、藩祖は水戸松平氏の出という家門である。ご本人は往年の貴族院議長を勤めた人だ。ある盆栽展で特別のコーナーが設けられその人ありと知識にしていたものである。

ミニ盆栽とはいえ、鉢物の鉢から吟味され、培養には底の浅い性質上、用土は少量だから、おのずから乾き易い、日照にあてる加減が難しいのである。したがって潅水の加減が難しい。しかも品種によりそれもまちまちなのである。保水加減を知悉していなければならないのである。ミニ盆栽という小天地あるいは小宇宙の管理には細心の知恵を働かせねばならない。迂闊に手ごろだからという気安さで取り組もうものなら失敗を免れない。もちろん培養をアドバイスする説明書はついても、十二ヶ月の自然は一様ではない。届けられた季節が一応の目安になりそうだが、培養者の居住条件はさらに一律ではない。日照条件も相違する。その上鉢を置く場所におよんで、品種によりよく考えた並べ方まで周到を要する。鑑賞上室内に何日置いたら、日当たりにという循環を忘れてはならないのである。口惜しいけれども、そんな手間暇は市井の人間向きではないのである。お殿様向きであって、家令を一人世話係におくくらいでないと、万全を期しがたいのではなかろうか、そう悟るのに二年要した救いようのない愚かさを身に沁みたことであった。

さて五三〇円のアッツ草は日ごと咲き誇って、健在を誇示するかに見える。原産地がアッツ島だから、アッツ草なのであろう。どうしてそれが水上農協の店頭に並んだものであろうか。他では見ないのだから珍重に値する。山野草の一群の中に例年健在なのである。店のものに由来を訊ねてみてもおそらくは無駄であろう。温泉地水上は意外にも文学碑の多いところだ。与謝野晶子から太宰治におよんでいる。だが谷川岳をひかえ、鬼怒川の源流に臨み、雪深い地である。南海のアッツとは結びつかない自然環境である。そういう土地柄にアッツ草がどうしてという疑問は解きようもなく困難である。

アッツ島の日本軍守備隊二五〇〇の玉砕は昭和十八年五月二十九日のことでる。年初一月一日、日本軍はガダルカナル撤退開始により戦局の主導権を失い、四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六ソロモン諸島上空で米軍機により撃墜され戦死。年末近く十一月二十五日、マキン・タラワの日本軍守備隊五四〇〇が玉砕。玉砕ということばのもつ悲痛、無念は計り知れない印象を国民の胸に刻んだ。鮮血に染むアッツ島では血潮に似た自生のこの赤い花がミリタリーの悲劇を彩って咲き乱れていたものであろうか。切ない思いがする。

（一八・五・六）

空風（からっかぜ）（二）

太田精一

（四）

東南海地震の六日後、浜松上空に一機のB29が飛来した。昭和一九年十二月十三日のことである。六百発余りの焼夷弾を浜松市内に投下し御前崎を掠めて南方海上に飛び去った。

最初の空襲である。その後、八月十五日の終戦までに浜松は艦砲射撃を含めて実に二七回の攻撃を受けた。

原爆の洗礼を受けた広島、長崎を除いて浜松の被害は地方都市の中では、きわだっている。

浜松は、明治の初期から綿織物を軸として産業が発達した。昭和初期には、染色、帽子、織機、楽器、氷糖、写真フィルムなどの製造業の街として知られていた。

ところが、太平洋戦争が始まるとともに、多くの企業が軍事産業への転換を余儀なくされた。たとえば、遠州織機や鈴木式織機は、工作機械の製造に転換、後に砲弾、機関砲、対戦車砲、照準器なども生産している。日本楽器、河合楽器のような楽器工場まで航空機のプロペラ、燃料補給タンクなど航空機の部品生産を行うようになった。

米軍機による爆撃は、昭和二十年になって本格化した。初めは軍需工場を狙ったものであったが次第に無差別爆撃にまでエスカレートし、そのうえ艦載機による機銃掃射まで加わって一般市民は、常に死の危険に晒されるようになった。

二月十五日のことであった。

空襲警報のサイレンが市中に鳴り響いた。伸一は、友達と家の前の敷地でぺったん（メンコ）遊びに興じていた。

突然、飛行機の爆音が近づき爆弾の炸裂音がした。

「伸一、強司を連れて早く逃げなさい。五社神社の裏手の横穴の防空壕に入るのですよ。お母さんは荷物をまとめて後からすぐ行くから！」

伸一は、強司の手を取って、鴨江観音の通りに出た。その道を西に向って走った。強司は、満三才にもなっていないので、そんなに早くは走れない。

警察署の脇の道を右に曲って中山町に差しかかったとき前方にすさまじい音がした。爆弾が炸裂したようだ。伸一は、強司を押し倒し、強司の上に重なるようにして身を伏せた。爆弾はすぐ近くに落ちたように思えた。だが、それほどの至近弾ではないことが後で分った。

伸一は、足がすくんでしばらく立ち上がれなかった。

「強司、だいじょうぶか。起き上がれるか」

強司は、伸一に押し倒された時に膝小僧をすりむき血が流れている。それを見て泣き出した。

「泣くな強司、たいした傷じゃない。五社の防空壕に着いたら血を拭いてやる。さあ立って走れ」

伸一は、強司の手を取って再び走り出した。するとまた前方に爆弾の落ちる音がした。彼は、早く防空壕に駆け込みたい一心で強司の手を引張った。強司はまた転んで泣き出した。

恐怖に駆られた伸一は、強司を置き去りにして一人で走り出したかった。だが、泣き叫ぶ弟を放置して自分だけ逃げるわけには行かない。

「強司、泣くな。立て、さあ、もう少しだ。もう五社の防空壕が見えてるぞ」

そう叫んで、伸一が前を見た。すると五十メートルほど先に、金山神社の裏手の山に掘った小さな横穴の防空壕を見付けた。伸一は、強司の手を取りその防空壕に駆け込んだ。中には、三人の男女が体を丸めてじっとしていた。

「すみません。弟が怪我をして走れないので、しばらくここに居させてください」

「いいよ、坊やたち、大変だったな。敵機が行ってしまうまでここに居なさい」

三人の大人たちが隙間を作り伸一たちを奥に入れた。三十分ほどじっと蹲っている間に一人の女性が強司の傷の手当てをした。爆音も消え辺りは静かになった。

「もう敵機もいなくなったようだ。外へ出よう」

三人の男女は防空壕からはい出た。伸一、強司の兄弟も防空壕を出て、大きく息を吸った。

「よかったな強司、よく頑張ったな。お母さんは五社の防空壕に居るかな。すぐそこだからちょっと見に行ってみよう。もし居なかったら家に戻ろう」

兄弟は、五社裏の防空壕の前の空地に立って、出て来る人の中から母を探した。どんなに探しても見付からない。兄弟は、手を繋ぎしょんぼりと家路に着いた。

母は家に居た。

「ごめんよ、恐い思いをしたね。預金通帳と位牌を持って後を追ったけれど見付からなかった。空襲が激しく

なったので、お前たちは途中の金山神社の境内の中に隠れたのではないかと思い探した。でも見付からなくて今、家に戻ったところなの」

さきは、二人の手を取って無事を喜んだ。だが、強司の傷を見るとその痛々しさに涙ぐんだ。

浜松戦災復興誌によるとこの二月十五日の空襲は、B29六機が飛来し、爆弾二一発、焼夷弾七三二四発を落し死者一四六人、重傷者四四人、軽傷者七十人、全焼家屋七六九戸、半焼四四戸と記録されている。

（五）

翌日、伸一は学校に行った。教室は昨日の空襲の話でもちきりであった。幸い直接被害を受けた生徒はなく普段通りの授業が行われた。

帰宅途中、空襲警報が鳴り、伸一は上空を見上げた。突然雲の中から戦闘機の編隊が現われた。いつもと様子が違う。陸軍戦闘機隼とは異なった型の飛行機が急降下して来て歩行者に機銃掃射を浴びせている。

「グラマン戦闘機だ」

誰れかが叫んだ。歩行者は遮蔽物を求めて走り出した。

伸一も、慌てて走り出し、コンクリートの建物の陰に隠れた。

ダダダダ……という連続音に次いでパチパチと舗装道路の上で弾のはじける音がする。

グラマンは、建物の上を掠めて機首を上げ、飛び去った。一瞬の出来事だった。

飛行機の去った後には、道路のところどころに傷跡ができ、街路樹の木肌に弾痕の痕が残っていた。歩行者はグラマンの急降下を避け物陰に隠れ、幸いにして怪我人はなかった。

「ひどいことをしやあがる。子供も何も見境いなく撃ってくるんだからな」

物陰に隠れていた人たちが次々と路上に現われた。お互いに、今しがた味わった恐怖を語り合い、日本軍の不甲斐なさを批難した。

「敵さん、動くものを見れば撃ってくるからできるだけ物陰に逃げ込み、じっとしているしかないね。それにしても日本の飛行機はどうなっているんだ。迎撃する戦闘機は一機もなかったなあ」

「これで戦争が勝てるだろうか。昨日のB29の爆撃でも高射砲隊が撃っていたが弾は飛行機のところまで届きやしない。手前で炸裂して白い煙がポンポンとあがるだけだった。まるっきりやられっぱなしだった」

伸一は、建物の陰から出て、伝馬町の角を曲がり、大工町の家に帰った。家では、父の吉雄が強司を膝の上に乗せ、フライパンで落花生を煎っている。落花生の焦げる匂いが部屋中に広がり、伸一の食欲をそそった。

「お父さん、今グラマンから機銃掃射を受けて、もうちょっとでやられるところだった。家は何んともなかったの。呑気に落花生なんか煎っていて恐くなかった」

「そりゃ恐かったさ。屋根の上にも弾が当って、瓦を壊した。だけど家の中にまで貫通しなかったから大丈夫だ。お母さんと強司は防空壕にいる。おじいちゃんは奥の部屋だ。空襲警報は出たが戦闘機だと分ったから家の外に出ないほうがかえって安全だと思って中に居た」

数年間戦場で過した吉雄は、危険を察知しその度合いを峻別する能力を磨いてきた。吉雄は、日中戦争が始まると間もなく召集を受け、三年間中国戦線を転戦し、昭和十五年に帰国している。帰国後二年足らずで太平洋戦争に再び駆り出され十九年の中頃に除隊となって郷里の浜松に帰っていた。

伸一は、父の煎った落花生を一粒、一粒味わいながら言った。

「お父さん。もう戦争に行かないよね。ずっと家にいるね。空襲が激しくなってきそうだし、お父さんがいないと心細い」

「実は、お前にはまだ話していないが、いよいよアメリカ軍が本土に攻めて来るらしい。お父さんもまた召集を受けている。今度は外地ではなく、内地のどこかになるらしい。これから戦争は、ますます厳しくなるようだから生きて帰れないかも知れないな」

吉雄は、サイパン島陥落以来度重なる本土空襲になすすべのない日本の敗戦を予想していたが、それを口に出すことはできなかった。

「日本は負けないよね。神様が付いているんだもの。この前おじいちゃんと見た〝かくて神風は吹く〟という映画にあったように、アメリカが攻めて来る時に嵐が来てアメリカの船をみんひっくり返してくれると言っている人がいたよ。そうしたら、お父さんも家に帰ってこれるようになる。なあ強司」

伸一は、父の隣にいて落花生を食べている強司に同意を求めた。

三月には、硫黄島に米軍が上陸、戦局は悪化するばかりであった。

浜松も四月、五月と度重なる空襲を受け六月には、大規模な焼夷弾攻撃に晒され、街は壊滅的打撃を被った。

（六）

六月十七日の深夜、けたたましい空襲警報のサイレンが街中に鳴り響いた。

「伸一、起きなさい。空襲ですよ。今日はいつもよりたくさんの飛行機で来たらしい」

さきは、伸一を起こし、強司を背負ってかねてから申し合わせていた親戚の杉本家の防空壕に逃げ込む支度をした。防空壕と言っても百年前に杉本家が裏山に物置

として掘った横穴で、山の中を半円形に刳り抜き、風が通るようになっている。

伸一は、寝巻のまま裸足で飛び出して、夜空を見上げた。上空にはB29が大編隊を組んで、轟轟と爆音を響かせている。

炸裂音とともに突然目の前に置いてあった材木が燃え上った。辺り一面がまるで昼間のように明るい。隣の家が火煙に包まれている。奥の部屋から祖父の厳次郎が大声で怒鳴った。吉雄は召集を受けて家にいない。

「おさき、子供たちを連れて早く逃げよ。今夜は敵機の数も多そうだ。とても消火しきれるものではない。俺は、位牌と預金通帳と身の廻りの必要なものを乳母車に積んで後から杉本の防空壕に行くから先に行け」

「はい、そうします。それじゃおじいちゃん、伸一と強司を連れて先に行ってるからね」

さきは、伸一の手を取って走り出そうとした。そのとき、伸一が寝巻のままであることに気付いた。

「伸一、服を来て運動靴を履き防空頭巾を被って来なさい。これから火の中を逃げなきゃならないかも知れないから」

伸一は、薄暗い家に入るのが恐ろしかった。灯火管制のため、光が外に漏れないように電燈の笠に黒い布を被せわざと部屋を暗くしている。だが、愚図愚図はしていられない。枕元にある衣服を身につけ防空頭巾を被って玄関の下駄箱にある運動靴を掴み飛び出そうとした。すると家の中に入れておいた鶏が異変に気付いたのか羽をバタバタさせて鳴声を上げている。毎日卵を産んで、伸一が可愛がっている鶏である。彼は、鶏を抱き抱え逃げようとした。

「何をしているんです。早くしないと火に巻かれてしまいますよ。あちこちに焼夷弾が落ちて火の手が上がっているんだから。可愛そうだけど鶏は家に残して行きましょう」

伸一は、可愛がっていた鶏を抱いた手を放すことができなかった。だが、防空頭巾を被り強司を背負っている母親の悲愴な姿を見ると鶏を放置して行かざるを得ないと悟った。

「ごめんね、お前を連れて行けなくって……」

伸一は、目をつぶって玄関の戸を閉めた。そして強司を背負って待っているさきとともに走り出した。鶏の鳴き声は、いつまでも伸一の耳に残って離れなかった。

さきは、伸一の手を引き大工町から隣の栄町まで、鴨江観音の通りを三百メートルほど走って、杉本家の防空壕に入った。中にはすでに三十人ほどの人が、避難している。壕は、幅二メートル位の横穴で、入口が二つあり空気が通るようになっている。中は暗くじめじめとしていて、蝙蝠でもいそうな感じだ。

伸一たちがその防空壕に避難した後も、避難者が続々

と集り、壕の中は五十人ほどの人で埋まってしまった。壕の中では誰れも不安げに蹲ってじっと息をひそめていた。

頭の上では、パチパチと物がはじける音がする。ときどきゴーという音が聞える。煙が壕の中に充満し、喉の痛みを訴える者や咳をする者が多くなった。水溜りにタオルを浸し、そのタオルを口に当て少こしでも煙を吸わないようにして一夜を明かした。

翌朝、敵機が去り煙もほとんど消えた。全員、恐る恐る外に出てみた。するとあたりの景色は一変している。防空壕の上の山は丸焼となっていて一本の木も残っていない。杉本家の屋敷も庭も焼け惨澹たる有様であった。

「よくまあ、皆んな助かったもんだ。家は恐らく焼けてしまっているだろう」

避難した人たちは、お互いに無事を喜び合い、それぞれ自宅の状況を確かめるため散って行った。

伸一は、母親とともに防空壕の外の焼跡を茫然と眺めていた。

しばらくして厳次郎が現われた。破れた着物の裾をからげ麻裏の草履を履き、顔は煤で汚れている。

「無事だったのか。よかった。お前たちを送り出して二十分後位に乳母車に荷物を乗せ家を出てここに来た。ところが、杉本さんの家が燃えている。壕の上の山は火の海だ。入口附近も燃えている。とてもこんな火の下に居ることはないだろうと思って、五社神社に逃げた。神社は焼け落ちてまわりの木々も燃えていた。だが火の勢いが衰えていたので、池の水を頭から被ってそこで一夜を過ごした。途中で乳母車にも火の粉がかかり燃えてきたんで捨てちまった。結局、残ったのは位牌と預金通帳と印鑑だ」

日頃口数の少ない厳次郎も昨夜の恐怖と興奮が冷めやらず早口で一部始終を語った。

「家はもう焼けてしまって跡形もないと思う。でも行ってみるか。火災から免れるために埋めて置いた食器類などは助かっているかも知れないから」

厳次郎たちは、大工町の家に戻った。予想した通り家は跡形もなく、辺り一面焼野原となっていた。かろうじて土中に埋めた食器類だけが残っていた。

大工町、伝馬町、鍛冶町などの下町で焼け残った家は一軒もない。大工町と伝馬町の境を流れる排水路にも死体が折重なり横たわっていたと言う。

「しばらく白羽の家にやっかいになるか。ところで、俺まで転がり込んでいいのかな」

厳次郎は、済まなさそうにさきに言った。白羽の家とは、白羽町にあるさきの実家で、大庭家のことである。

「そうね。おじいちゃんの親戚は、町中(まちなか)で皆んな焼け

てしまったもんね。兄さんも嫁さんも大変だけど、一部屋ぐらい空けてくれると思う」

大庭の家では、さきの父親はすでに他界し、母親のふみと兄の定吉夫婦、妹のしほの四人家族である。兄夫婦には子供はなく、妹のしほが家を継ぐことになっていた。

伸一は、家族とともに着のみ着のままの姿で、掘り出した食器類をボロに包んで背負い、四キロの道程を白羽の家に向って歩いた。

梅雨の晴間に当ったのか強い日差が照りつけ、乾いた石ころ道は砂埃が舞い上がっていた。

(七)

白羽町は、昭和十四年に浜松市に編入されたばかりの町だ。町とは名ばかりで、田圃や畑が広がり、ところどころに農家の集落が点在する田園地帯であった。

平成十八年の現在では、区画整理がなされ道が拡幅され家が立ち並び、風景は一変している。

この白羽の大庭の家に、さきの妹のみずえも子供を連れて間借りすることになった。みずえは、菅原町の旧家に嫁いでいた。当時の菅原町は浜松の南西のはずれ成子坂を下った旧東海道沿いにあった。その家も、六月十八日の空襲で全焼したのだ。

みずえの嫁ぎ先は藤本利右衛門といって、江戸時代から続く商家であった。罹災した当時は、建材店を営んでいたが、かつては大地主であったために利右衛門様、利右衛門様と近在の農家の人たちは様付けで呼んでいた。

みずえの主人は、利右衛門の名を世襲した建材店の嫡男であった。だが、海軍に徴用され兵役を務めるうちに、下士官となり終戦当時には岩手県の大船渡にいた。

藤本利右衛門の両親は健在で、利右衛門の留守中は建材店を切り盛りし、女学校と中学校に通う子供たち二人を養っていた。白羽の家では、木本の家族を同居させているうえに利右衛門の家族全員を引き受けることは無理な相談だった。そこで、みずえとその子供だけがこの家に身を寄せることになった。

白羽の家の四人だけの静かな暮しは一変した。さきの家族四人に、みずえとその子供が加わり一つ屋根の下に十一人が暮らすことになったのだ。しかも子供は男の子ばかりで、家の中はまるで戦場のようであった。

伸一と強司は、白羽での生活を楽しんだ。木々に囲まれた白羽の家の東の門を出ると田圃が広がっている。稲が青々として空気も爽やかだ。家の周りの敷地は、槇の生垣で囲まれ、敷地内の木々の間を道が通っている。その道の南側に竹林が、北側には椎の木林と夏みかん畑があった。

道は椎の木林に沿って西側は湾曲している。その道を百メートルほど行くと荷車がすれ違えるほどの道に出

る。その道の北五十メートル先が十字路となっていて、市内から中田島海岸に通ずる広いバス道路が南北に走っていた。その交差点に貝まぐりという停留所がある。

バス道路の下を横切ってしゃぐじ川という小さな川が流れていた。伸一はその川でよく鮒やどじょうを取った。川の浅瀬には、ときどきドブ貝の一種とみられる黒い大きな二枚貝が顔を覗かせていた。

この川は、馬込川の河口に流れ込んでいて、わずかに海水の影響を受けているようであった。そのためにこの地方で、イナと呼ぶボラの子が群をなして泳いでいた。

梅雨どきは、しゃぐじ川の水嵩も増し、鮒やどじょうも活発に餌を漁る。

伸一は、雨の中でも笠を被ってよく釣をした。餌は井戸の脇の土から掘ったみみずである。浮子の周りに雨滴が落ち、小さな波紋となって消えて行く様子をぼんやりと眺めていると米軍の本土上陸が間近に迫っていることなど想像もできなかった。

「お兄ちゃん、釣れた」

強司が伸一の側に来てバケツの中を覗いた。小鮒が五匹、どじょうが三匹泳いでいる。

「この魚どうするの。持って帰って食べるの」

「いや少ししか釣れないし、鮒もどじょうも小さいから鶏の餌にする」

「鶏は魚も食べるの」

「何んだって食べるさ。イナゴもバッタも食べるよ」

「へえー。お腹こわさないのかなあ。鶏って丈夫なんだね。でも、この魚も、もうすぐ食べられちゃうなんて可愛想だね」

強司はバケツの中に手を入れて鮒を取り出し、そっと握り占めた。

「可愛想だけど鶏もお腹を減らしていると卵をたくさん産んでくれないんだ。餌をたくさんやればきっといい卵をたくさん産んでくれるよ。強司も卵が好きだろう」

「うん好きだよ。ゆで卵たべたいなあ」

強司は、艶やかな白いゆで卵を想像した。

伸一は、元城国民学校が焼失したため、白脇国民学校に転校した。食糧難とはいえ、白羽の家は農家だったので、多少の米の蓄えがあった。伸一は、銀シャリ（白米飯）の弁当を学校に持って行った。

「木本、弁当には、麦飯を持って来るようになっている。何故白米の弁当を持って来た」

学校当局は、弁当に麦飯を持って来るように通達を出し、ときどき先生がそれをチェックしていた。転校したばかりの伸一は、知らなかった。伯父夫婦も子供がいなかったので、そんな通達は受けていない。むしろ伸一が片身の狭い思いをしないように、わざわざ白米のご飯を弁当に持たせてくれたのだ。食糧不足は、農家にまで及び白羽の家でも普段は麦飯を食べていた。

元城国民学校と白脇国民学校では、学力レベルに相当の差があった。元城国民学校では、それほどでなかった伸一の成績も白脇国民学校では一、二番を競うほどになっていたのである。

田舎の生活が伸一に合っていたのか、病気がちであった体もすっかり丈夫になり、たくましく見違えるほどになっていた。

夏休みになると伸一は、毎日トンボを取ったり釣をしたりして遊びまわり真黒に日焼していた。

戦局は、ますます厳しさを増し、ラジオから流れるニュースは、玉砕、空襲の報道ばかりであった。

(八)

七月二十九日夜十一時三十分頃、遠州灘に集結したアメリカの軍艦から浜松市内に向けて艦砲射撃が行われた。

空襲警報のサイレンを聞いて伸一たちは、庭先に掘った防空壕に退避した。沖合から轟音が響き、頭の上を閃光が流星のように走り、浜松市内へと向って行く。市内からは、ズシーン、ズシーンという着弾音が聞こえて来る。強司は必死で、母親の胸にしがみ付いて恐怖に耐えていた。

上空は、まるで花火を飛ばしているようであった。

「中田島の沖に艦隊が集結し、市内に向かってどんどん撃って来る。浜に上陸するつもりかな」

定吉が言った。

「さあ、敵さんの考えていることはよく分らないが、すぐには攻めて来る様子も見られなかったよ。昏しではないかな。それにしても凄い軍艦だった」

表の家の弥四郎さんが海岸まで行って見て来た様子を語った。

砲撃は約一時間続き、翌日の三十日の夜十二時半頃に終った。伸一は、恐る恐る防空壕を出て、夜空を仰いだ。まるで何事もなかったように星が満天に輝いている。

しばらく鳴き止んだように思えた蛙の声がひときわ大きくなった。遠州灘の海鳴りがいつものように微かに聞こえてきた。

その日の艦砲射撃で、打ち込まれた砲弾は一六八〇発、死者一七七人、重傷者四九人、軽傷者一〇七人、家屋の全壊三二四戸、半壊二四八戸と浜松戦災復興誌には記載されている。

すでに浜松は、六月十八日の焼夷弾攻撃によって、全市の半分以上が焼失し、その上に艦砲射撃の砲火に晒されて、街は壊滅状態に陥ったのである。

浜松は、航空基地や軍需工場が集結していたため、米軍の攻撃目標とされた。

だがそれだけではない。

伊勢湾上空から浜名湖上空にかけては、米軍機の進入

出路になっていた。多くの米軍機が名古屋を空襲した後残りの爆弾を浜松に投下し、身軽になって帰還する。

米軍機にとって浜松は、いわば残弾処理のゴミ捨て場のような役割を果たす都合の良い街であったのだ。

八月になると米軍機から投下される降伏勧告のビラが噂されるようになった。拾った者は、すぐ憲兵隊や警察などに届けなければならなかった。が、中には隠し持っている人もいて、多くの浜松市民がそのビラを見た。

八月六日には、広島に原子爆弾が投下された。伸一は、中部日本新聞の一面に掲載された広島での新型爆弾投下の報道記事を食い入るように読んだ。

(新型爆弾て一体何だろう。一発でそんなに多くの人が死ぬような爆弾ができたらどこに逃げても助からない)

彼は、これまでの罹災体験から新型爆弾が浜松に落された場合を想像するだけで、恐ろしさが込み上げてきた。

(もう日本には、闘う力は残っていないのではないか。B29に対して、たまに戦闘機が向って行ってもすぐに打ち落されてしまう。高射砲を打っても弾が相手の飛行機に届かない)

伸一は、子供心にも、戦争の先行きに大きな不安を抱いた。

広島の原爆に次いで、八日にはソ連が参戦、九日には長崎にも原爆が投下された。

八月十五日、伸一が学校から帰ると白羽の定吉伯父さんとしづ伯母さんが泣いている。汗が滴るような暑い日であった。

「どうして泣いているの」

伸一は、めったに涙を見せない伯父さんや伯母さんが泣いているので不審に思った。

「日本は負けたんだって、今天皇陛下の玉音放送があった。何んだかよく聞きとれなかったけれど、アメリカやイギリスに降伏するっていうことらしい」

「本当、だって日本は神の国だから負けるはずないって言ってたじゃん」

「いくら日本の兵隊が強くたって、鉄砲も、弾も、飛行機もなければ戦争はできない。竹槍では勝負にならないからな」

定吉は、肩を落して呟いた。

伸一は、定吉の話を聞いて外に飛び出した。太陽がギラギラと照りつけ青空が広がっている。裏の林から蝉の声が聞え、田圃の上をオニヤンマが飛んでいた。

しゃぐじ川の土手に腰を下した伸一は、田圃を吹抜ける爽やかな風に当りながら空(うつろ)な気持で、つがいとなったオニヤンマを眺めていた。

編集後記

『まんじ』一〇一号をお届けします。百号記念号の後であるにもかかわらず、まんじ特有の時代小説・現代小説・漢詩・エッセイ・詩集・短歌等各分野の作品二〇編を掲載する運びとなりました。

編集にあたりまして執筆者各位の熱意をひしひしと感じることができたのは何よりの幸せでした。

三戸岡さんの「あばれ天龍―金原明善の一生―」と千坂さんの「正義の旗を掲げて」の連載が始まりました。次号以降も楽しみです。

今年も夏を迎えました。

巻末に戦争に関連する幾つかの作品をおきました。これらを通じまして、編集子も生命の危機にさらされた六十有余年前の思い出が鮮明に蘇ってまいりました。

同人および日頃からご支援をいただいている維持会員各位の、ご健勝と益々のご発展をご祈念申し上げ文をとじます。

（T・N）

まんじ 第101号

平成18年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
世の人すべて皆わが師

田寺怜葦（たでられい）　画

まんじ

No. 102

2006.11.1

まんじ第百二号　目次

わが愛誦歌（一）……曽根竣作…4
黒南風（短歌三十首）……曽根竣作…6
短歌　行雲流水（十四）……石黒修身…10
詩集「ろかいゆ」より　その三……松下壽男…16
ハート・トウ・ハート第四話ア・ラブ・シュプリーム（後編）……松下壽男…17
掌篇小説……亜木陽一…24
正義の旗を掲げて（二）……千坂精一…26
将軍義政と愛妾……島津隆子…39
源平交代思想（二）……宅見勝弘…46
あばれ天竜（二）―金原明善の一生―……三戸岡道夫…49
挿絵界の春秋……大和禎人…69
伊豆の歯科医業の祖……堀内永代…72
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…78
空風（三）……太田精一…81
古い物・遠い夢　第十一章　茶道具三昧……忠内正之…87
清水武夫博士の自叙伝……吉田忠雄…96
奈良大仏の経済学……新井宏…103
還暦からの考古学（七）……中山喬央…110
漢詩潮騒録（四十八）……鯨游海…118
訪中記……伊治哲…125
司馬遼太郎の紀行文（司馬雑感九）……山田嘉久…131
編集後記……編集子…140
表紙……田寺怜葦
宮城正彦
カット……鈴木國男
清水トム

わが愛誦歌（一）

――戦後の歌壇逍遥

曽根竣作

初出「短歌研究」（昭31・4）の「祖国喪失」の中の冒頭にある一首。戦時中、多くの若者たちが祖国のために命をかけてこの海を越えて行ったと言うが、今自分たちの命をかけるにたる祖国が実際にあるだろうかという反措定にして懐疑的なうた。敗戦時、寺山修司は十歳であったこととも関連し、この〈平和〉ははたして本物であろうかという思いに常に噴まれていたとも思われる。作者が短歌にかかわったのはせいぜい四、五年の短かさであったが、幾多の秀作を残した。この歌も著名な俳人の俳句からの剽窃であるとの噂さもあるが、短歌としての機能は充分尽くされた出き栄えである〈一粒の向日葵の種まきしのみに荒野をわれの処女地と呼びき〉。

○かたはらにおく幻の椅子ひとつあくがれて待つ夜もなし今は　大西　民子

『まぼろしの椅子』（昭31）中の一首で歌集題名を決定した歌。夫に立ち去られた女性が、長い間夫の帰りを待っていたがついにその期待もむなしくなったという

○行きて負ふかなしみぞここ鳥髪に雪降るさらば明日も降りなむ　山中智恵子

「鳥髪」は古事記にある地名で、天井界から追放された須佐之男が降り立ったところ。出雲国簸川の川上。歌意は、私たち人間が生きて背おう悲しみの根源の地であるここ鳥髪に今日も雪が降っている。さらに明日も降りつづいて私達の悲しみをきっと覆いかくしてくれるであろうと言う原罪（須佐之男の悲しみ）についてのスケールの大きな歌である。

作者は前川佐美雄に師事し、古代から中世に及ぶ鋭い史眼を持ち、その詠風は形而上学的にて可成り難解と言われているが、塚本邦雄らの前衛短歌運動の反照を浴びつつ独自の清新な発想を閃かせた。〈さくらばな陽に泡立つを目守りゐるこの冥き遊星に人と生れて〉も忘れ難い一首である。二〇〇五年他界。

○マッチ擦るつかの間海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや　寺山　修司

心の空白を詠んでいる。ポイントは、椅子は現実のものであろうが、「幻の椅子」と表現することによって、その椅子は現実の椅子から飛翔し幻の椅子として作者の心のかたわらに転位した点である。このように現実の幻想化は、大西民子の短歌を特徴づける性格の一つと言ってよい。結局は離婚にいたるのであるが、歌集『まぼろしの椅子』には、愛の破綻を通して内面を視つめざるを得なかった一人の女性の自意識のドラマがいきいきと写し出されている。〈手に重き埴輪の馬の耳ひとつ片耳の馬はいづくにをらむ〉

○流氓の思ひを持てば黄に照れる山なみ流れゐる如く　福田　栄一

『きさらぎやよひ』（昭43）の「流氓―信濃旅愁」の中の一首。流氓とは他郷に流浪する民、すなはち流民を指すが、敗戦後作者は失意や不遇感を多く持っていたようで、この流氓の思いにしばしば駆られたのであろう。そういう気持を抱きながら山に向っていると、山は今黄に燃える秋の盛りであるが、山自体も流れ漂っているように見えるという歌意である。すなはち山河悲傷のすがたを心象的に詠みこんでいる。やや観念的なうたい方ではあるが、どこか艶なるものを湛えている一首である。〈ひと房の葡萄を持てばきみが手に流るるごとく秋の紫〉の相聞詠も見逃しがたく、その感傷的色彩的な美感覚は歌壇に少なからぬ影響を与えた。

○血と雨にワイシャツ濡れている無援ひとりへの愛うつくしくする　岸上　大作

一九六〇年六月一五日、作者は全学連の国会構内での抗議集会に参加し、警官の棍棒で頭部二針縫合の裂傷を受けている。頭を割られた血と、雨とでずぶ濡れになったYシャツ、いよいよ自分が孤立し、だれからも「無援」であることを感じながら、ひそかに一人の女性に対する愛がいっそう美しいものにふくらんでくると言うのである。六十年安保闘争から早や四十余年を閲しているが、当時学生歌人として清原日出夫と共に鮮烈なデビューを果した。その青春性に於いて、寺山修司に通い合う所もあるが、寺山の巧智な虚構が岸上にあっては生活実感そのものであったといえる。この「ひとりへの愛」は文字通り作者の片思いであり、六十年十二月五日午前三時プロバリン服毒自死。〈装甲車踏みつけて越す足裏の清しき論理に息つめている〉。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）

黒南風

曽根竣作

いづこより流れつきしか木片の渚にかげる海のおそ夏

砂浜を摩(さす)るごとくの波浴みて小さき磯がに生(あ)れてまた消ゆ

夕づきて友を待つ間のローカル駅いかづち激しく庇打ちたり

うす雲を洩るる日差しのやはらかくはつきの森に百鳥(ももどり)の啼く

吹く風も彩(いろ)づき始むわが頭上藤の花ぶさしみらに垂りて

垣いつぱい薔薇(さうび)咲かしめ駅路への角にひっそり軒低き家

刎頸の友の面差し、他界より薄暮の庭にからす下り来ぬ

五十人八十人とテロで死ぬ日常茶飯がこの地球(テラ)にある

啀(いが)み合ふ宗派にテロの頻発しイラクはいまだ泥濘(でいねい)のなか

時折に脳裏かすめる彼の人に逢ひたく逢はず傘寿を迎ふ

走り梅雨あした激しくかけ抜けて竹林青くそよぎやまずも

雲低き海辺に佇(た)てば帰舟ありて湿(しと)りし風はすでに黒南風(くろはえ)

絹雲をはつかしたがへ十三夜の月中天にまつぶさなりき

あぢさゐの藍濃きうへを紋白蝶のふたつ絡まり首夏の日昏るる

やうやくにみなづきの空晴れ渡り風なき真昼鳶自在なり

とりどりの色咲き匂ふバラガーデン王妃（アントワネット）の紅きは立てり

島影を淡く映して夕づける江の島のタワー点滅はじむ

ちらちらと夕日かぎろふ突堤に釣果（ちやうくわ）すくなき人ら影曳くく

わが裡の大正・昭和の総括を念（おも）ひつつただ時（とき）世に流さる

渺渺と回廊のこす砂の城「西夏（せいか）」とふ国かつて栄えき

森ふかく小げら木を搏つ音かそか空濛（くうもう）としてたそがるるとき

水慾（ほ）りてほそき蜻蛉（せいれい）ゆきたがふ夕あかねさす沼は黙（もだ）して

むらさきの菖蒲群れ咲く隠（かく）り沼（ぬ）よそを投影し水面たゆたふ

靄こむる夜の木立に青葉木菟（づく）ほうほうと啼く夢のつづきを

羽化終へしばかりに艶めく大むらさき新しき翅涼気をはらむ

軍事をば司りしとふ復元木乃伊（ミイラ）と鋭き眼差しに現世視つむる

四千年はまばたきの間（あひ）か肉付けをされし木乃伊は現代人（あらひと）に似る

御殿場線の「谷峨（やが）」とふ駅を通りすぐ始めての地にこころ弾みぬ

夕かげる塀をひとごゑ過ぎゆきぬながつきの宵耳ざとくゐて

くれなゐのダリアを截れば汝が手に硝煙にほふ詩歌（しいか）を他（よそ）に

短歌

行雲流水(十四)

石黒修身

意見を服膺しつつ、自からの歌作についての反省と、向上への指針として考えをまとめてみたい。

〔一〕 私的短歌考

—旅行詠について—

(1) 旅行詠とは

短歌は、その内容により色々なカテゴリーに分類される。それは古来万葉集から現代短歌に至るまで変らない。

例示すれば、自然、身辺、社会、挽歌、相聞、祝歌、旅行等である。

本稿では、旅を詠んだ短歌、所謂旅行詠につき私見を述べてみたい。

筆者は、本誌にしばしば旅行詠を寄せている。従って、自己の作品に何らかの納得性を得たい気持からこのテーマを選んだことは否めない。

然し、旅行詠はかくあるべしとの専門歌人、先達らの

(2) 旅行詠の約束ごと

歌人は、旅先の風景、事象を詠む時に如何なる創作過程を経て短歌作品は結晶させるのか。

①暗黙の約束ごととして、「作者は、実際にその場所に赴いて、その結果としての短歌作品である」こと。

②旅行は、昔も今も人々の生きる楽しみ、貴重な時間、金銭、労力を費やした結果の褒美である。それを空想で作る、虚の世界に遊ぶのは邪道である。

③旅行詠は、自からの目で見、皮膚に触れたものでなければ「詩情」が湧いてこない。

従って、現実に立脚しない観念詠には馴染まない。

(3) 旅行詠に求められるもの

人生の一過性、一回性はひとしく共感されるところである。旅の短歌は、本来そこにどんな風景が詠まれているか、と共に如何なる心の展開がそこに込められているかが問われている。

①旅の短歌は、感動の質が問題である。珍しいの一事だけで対象を詠むべきではない。

感動もなく単に面白さだけで詠むのはいけない。

②珍しい光景の描写に終始し、説明調になり易い。作者の昂奮、感動が十分に伝わらなければならない。

③旅の事柄をそのまゝ書いても詩にはならない。三十一文字で報告を書くのではない。

せめて表現の工夫で三十一文字により音楽を奏でるような試みがあって欲しい。

(4) 効果的な手法

①風景の写生とともに、三十一文字に限定された短歌文芸では、地名を生かし、イメージを増幅させ、細かい描写を省く手法が効果的である。

地名なり、その場所を特定出来る史跡、人名等の固有名詞を具体的に入れることは存在感につながる。古典和歌の手法である「歌枕」などはその一例であろう。

②歌の中に自分が居る、或いは、自己の主張があることが肝要である。

美しすぎる短歌は絵のようなものと厳しく批評されることがある。とくに海外旅行詠は、〝絵葉書的短歌〟などと評されやすい。

観光絵葉書には写されない部分を、日常を抜けてきた解放の喜びを五感の開放につなげることにより、〝絵葉書〟では伝えられない旅のくさぐさを詠むことが出来るのではなかろうか。

(5) 自からの指針—写実へのこだわり

昨今の歌壇は、専門歌人から一般の歌人に至るまで、少しでも目立つような前衛振りや、その反動としての、〝ただごと歌〟が多く、混迷を極めている。

筆者とても、前衛短歌の斬新さに魅力を感じない訳ではない。たゞ心情的には写実にこだわりたい、否、写実でしか詠めないのかも知れない。

これは決して単なる事実尊重主義ではない。見ただけの世界に閉じこもらず、自在に虚の世界に飛翔する歌が詠める時が来るかも知れない。然し、当面は目にしたものを率直に心に詠みこむ努力を続けるであろう。

旅行詠についての論考の結びが短歌の一般論に脱線した感があるが、市井の歌詠みとしての悩みと模索の一面として自からに問いかけたい。

末尾に自作の旅行詠三首を掲げ検証を試みたい。何れもJR社が発行するシニア向けの旅行PR誌「ジパング

倶楽部」に最近掲載されたもので、選者である篠弘氏（現代歌人協会会長、宮中歌会始の選者）の評がある。

○ローマなるスペイン広場の街めぐり塩野七生に出逢わぬものか

〈評〉ローマの街路をめぐる作者が、作家の塩野七生に出会うのではないかと、一瞬思う。塩野はイタリアに渡って「ルネッサンスの女たち」などの歴史小説を執筆。作者は彼女の愛読者か。

○夫婦して乗るのかという顔付きでサハラの駱駝やれやれと起つ

〈評〉場所は特定出来ないが、エジプトを旅行中の体験であろう。おそらく作者も初めて駱駝に乗ったのにちがいない。それを見透かしたような物憂いポーズ。旅のひとこまとして印象的。

○サンマルコのカフェテラスの演奏に「旅情」のシーンを憶い出しいる。

〈評〉イタリアのベネチアにある聖堂、その広場で聴くことのできた演奏を詠む。一九五五年のイギリス映画「旅情」のシーンを、作者は懐かしく想起している。一首全体からロマンが溢れる。

〔二〕　近詠二十首

ボランテイアのソプラノ澄みて患者集うがんセンターの午後のロビーに

故郷に近き街なり「夕張」はメロンは美味し破綻は悔し

犬も碁もまた文芸も淡々と「中野考次」はガン日記遺産す

団塊の男ら定年迎えしか「未老人」らが昼を闊歩す

半身の不随なる友全身の思いを込めた絵手紙を賜ぶ

老い来たり凡庸の方便に馴染みたり妥協を蔑し気概はとおく

身辺に糺すべきこと多けれど老を訳とし小安に居り

今月は「修証義」にせんと吾と妻に唱和勧める僧月参り

戦禍にて傷つける児はみなアラブ映像に見るこの悲劇とは

惑星を外されて哀し「冥王」は宇宙のドラマ少し変るか

×　×　×　×

爛漫の桜に浮かぶ鶴ヶ城天守仰ぎて一会の酒酌む

咄々と郷土を語る言の端に「戊辰」を恨む会津の人は

みちのくの茂吉の里なる上山（かみのやま）いまが旬なる桜桃を買う

山形で盃交わすこの男（ひと）は「周平」描く武士（さむらい）に似て

「おしょうしな」響きやさしきこの言葉山形で聞く「有難とう」とぞ

長良川鵜飼の舟は篝火を水面（みなも）に散らし鵜を曳いてゆく

篝火が水面（みなも）にこぼれ繋がれし鵜は夫々に役割をする

男系の世襲とぞいう鵜匠らは装束凛と鵜を率（ひ）きにけり

「コキリコ」は七寸五分の筑子竹古謡の合い間踊り手が打つ

「コキリコ」の調べいとおし・ささら鍬金合の間に鳴る

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）

春季号……　二月一日……十二月三十一日

夏季号……　五月一日……　三月三十一日

秋季号……　八月一日……　六月　三十日

冬季号……十一月一日……　九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

詩集「ろかいゆ」より その三

松下壽男

アイスティー

曇りは
耐えかねもろとも流れ
閉じこめられた
琥珀の
海を
氷をぬって泳ぐのが好き
冷たい光を潜るのが好き
寄せる
みぎわの
さざのみの
胸のあえぎに
すずしげに
手をさしのべた
この影は
白熱の砂丘そのものの
おとしているものだから
縋れ
絡まり
入り乱れ
あえぐ胸を焦すでしょう
だから
ミルクはいれないで
今日は夏の逝く日

返歌

いもうとの
ひとみはうつろ
またひとつ
はなびらあせてさるびあはちる

ハート・トゥ・ハート

第四話　ア・ラブ・シュプリーム（後編）

松下壽男

ケイコは、ほっとした。そして不安がじわりと心に広がってきた。自由の身になったにもかかわらず、帰国の準備を始めようとしないエルヴィンだった。そしてケイコの口からも切り出しづらい帰国話だった。しかしそれは、一日延ばしにするほどに、近未来の現実として、一層彼女に迫ってくるのだった。

（もしエルヴィンが一人で帰国すると言うのなら、私は、それでも構わない。次に来日するまで、私、待っているわ）

もはやケイコの心の中にも、エルヴィンが住み着いていた。だから（離れて暮らしても、いつでも一緒にいられるはずよ）とケイコは思っていた。（でも……）それはケイコの持ち前の強がりにすぎなかった。

（エルヴィンと離れるのは寂しいし、辛い。私、きっと泣き叫んでしまうわ）

確かにエルヴィンは、彼女との将来を約束していた。

♥♡♥♡

エルヴィンのマネージャーとして、ケイコが真っ先に取り組まなければならない仕事は、出国を差し止められている彼を、早く自由の身にしてやることだった。ケイコは、エルヴィンを伴って、再三、出入国管理局に足を運んだ。やっと担当者と面会ができると、

「さらに差し止めが長引く場合には、その間に行うことが可能だった演奏活動の報酬に相当する金額を、補償として請求させていただきます」

と、彼女は、試算書を開くのだった。そこには、（麻薬崩れの黒人ドラマーふぜいが）と高を括っていた当局が慌て出すほどの高額数字が並んでいた。しかしそれは、ダウンビート誌国際批評家投票で毎年一位に選ばれているドラマーとして、当然の金額だった。

数日後、エルヴィンの出国許可が下りた。

アメリカに渡り、結婚をして、ケイコがエルヴィンのマネージャーになって、二人三脚でジャズの道を歩んでいこうと約束し合った将来だった。

（約束が叶ったら、なんて素敵なことでしょう。私、エルヴィンを愛していますわ。それでは余りに幸せすぎる）

彼女には、子供の頃から、心の中に、自らの幸せを罪悪視させる眼差しが存在することを意識していた。その目が何故か愛おしかった。

（何より今は、エルヴィンがアメリカに戻って本格的な演奏活動を再開することが先決よ。だから私、彼の言葉を信じすぎてはいけないわ、彼の足手まといになるかも知れないし。でも私、彼の言葉を疑うと、毎日が不安でとても生きていけないわ、疑えば何より彼にすまないし…）

そこで彼女は、エルヴィンと出会う前の自分の生き方を取り戻そうと考えた。ケイコの心は、やっと落ち着く先を見出した。

（今ここで彼と別れたとしても、私がエルヴィンから得たものは限りなく大きいわ。エルヴィンのおかげで、ジャズの世界の内側に飛び込むことができたのだから。そして私にもジャズメンのマネージメントができそうな可能性が見えてきた。今なら、エルヴィンと別れても、私は彼に感謝ができる。私は私、彼を信じすぎず、疑わず、自分で生きていく道を見つけるわ）

ケイコは、新たな仕事を、日本のジャズ業界に見つける決意をした。

朝から、スーツに着替え始めたケイコをみて、エルヴィンは訝しそうに尋ねた。

「ケイコ、今日はどこに行くんだい」

「あなたも出国許可が下りたことだし、私もそろそろ新しい仕事を見つけようと思っているの」

見開いたエルヴィンの瞳は、ケイコの真意を探りかねているようにくるくると動いた。そして瞼に涙がにじんできた。彼は怒り出した。

「何を言っているんだい、ケイコ。お前の今日の仕事は、アメリカ行の飛行機の切符を二人分買ってくることじゃないのかい。いつまで待たせるつもりだよ。お前は、もう、俺のマネージャーだろう！」

ケイコは、嬉しかった。ジャケットの袖を通しきらないままで彼の胸に飛び込んだ。そして泣きじゃくった。ケイコが初めて見せた子供のような姿だった。彼女の心を思いやることができなかった自分の愚かさを恥じるエルヴィンだった。

「ありがとう、エルヴィン。でも私、一つだけお願いがあるの。アメリカに行く前に、私のお父さんに会って頂戴。」

ケイコと二人の日本旅行は、出発前からエルヴィンの

心を浮き浮きさせた。まるでハネムーンのようだった。新幹線の車窓から見る雪の富士に、歓声を上げて見とれるエルヴィンであった。

大阪から特急列車に乗り換えた二人は、夜遅く小倉に降りた。タクシーで郊外の旅館に着くと、ケイコが予約しておいた和風の離れの部屋で一夜を過ごした。エルヴィンはケイコに感謝した。はしゃぐ彼とは裏腹に、無口になっていく彼女だった。

翌朝二人は、ケイコの故郷に向かった。彼女にしても久しぶりの帰郷だった。彼女は、見慣れた景色に出会う度に、一層無口になっていくのだった。

二人で暮らしていても、彼らは兄弟や家族のことはほとんど話さなかった。ジャズ界に名だたるジョーンズ三兄弟のことは、エルヴィン以上にケイコは詳しかった。彼が話して聞かせるまでもなかった。ケイコの方も、自分の家族のことを彼に話そうとはしなかった。エルヴィンも敢えて聞き出しはしなかった。様々な血や過去を背負う者が集まるジャズの世界を生きてきた彼であった。時期が来れば、きっとケイコも話してくれるだろうと思った。

長崎についた彼らは、昼下がりの坂道を歩いた。眼下に港の景色が広がっていた。二人は石造りの門をくぐった。そこはケイコの生まれ育った家だった。

立ち枯れた雑草の揺れる寂れた庭に面した畳の部屋に、一人の老人が腕を組んで座っていた。

「お父ちゃん、あたい、こん人とアメリカに行って、一緒になるばってん、よかね」

「けいこ、こん男、なんばしとると。アメリカ兵じゃなかとか」

「ジャズ・ドラマーよ」

「そうか、太鼓ばたたいちょっとか……」

沈黙の空気にコチコチと柱時計が時を刻む音が響いた。冬の陽射しが縁側に差し込んできた。

「よか。けいこ、おまんがすきにするとよか」

老人は、吐き捨てるように言った。

「ありがとう、お父ちゃん」

ケイコの目から涙が流れ落ちた。彼は、正座をして、ケイコと一緒に頭を下げた。

それから、二人は、近くの寺へ墓参りに行った。手を合わせながら、そこでもケイコは泣いていた。エルヴィンも神妙に手を合わせた。

夕食はケイコが作った。すべてが父親の好みだった。老人は旨そうに酒を飲んだ。差し出された杯をエルヴィンが飲み干した。老人の横には、それをうれしそうに眺めるケイコが居た。

日本酒に酔い、居間の座敷で横になっていたエルヴィンの耳に、風呂場の父娘の楽しそうな会話が聞こえてきた。

父親の背中を流したあと、ケイコは布団を敷き始めた。(この家が客布団を使うのは何年ぶりのことだろう)とケイコは思った。自分の布団が、まだ棄てられずに残っているのを見て、彼女は涙ぐんだ。

「今夜は、私、お父ちゃんの隣で寝てあげることにしたの、ごめんなさいね」

風呂から上がったエルヴィンに寝巻きを差し出しながら、ケイコが許しを請うた。そしてエルヴィンを客間の布団に寝かせると、キスをして襖の外へ出ていった。薄暗い部屋に取り残されたエルヴィンは、一人で寝るのは何日ぶりかと考えた。寂しくはあったが、満たされた気持ちで目を閉じた。

朝食の片付けを済ませたあと、二人はケイコの実家を後にした。見送りに出てくるような父親ではなかった。

「もう一ヶ所、あいさつに行く所があるのよ」

坂の下の通りでタクシーを拾った二人は、木立に囲まれた公園に降り立った。敷地の奥に立つモニュメントを見て、エルヴィンは、はっとした。その白亜の人物像ながら、エルヴィンも写真で度々見たことがあった。ナガサキは、一九四五年八月八日、アメリカ軍によって原子爆弾が投下された町なのだった。

原爆殉難者慰霊碑の前で、ケイコは、見えない肉親に向かって話しかけていた。仲のよかった友達と語り合っていた。ケイコの口から嗚咽が漏れた。エルヴィンは彼女が家族のことを語らない訳を悟った。そして自分たちの結婚を赦した父親の心の広さも。彼はケイコの背後で手を組んで神に祈りを捧げた。

ニューヨークの高層アパートにあるエルヴィンの住まいは、広くて大きかった。何もかもが豊かで豪華であるでおもちゃ箱をひっくり返したように無造作であった。(ある意味本人のドラミングそっくりだ)と思うと、ケイコは微笑ましく感じた。しかもその家で、繊細な気遣いをケイコに示す、エルヴィンだった。

オンでもオフでも、常にエルヴィンと行動を共にするうちに、ケイコは、彼にはマネージメントの才能が、いや能力が欠けていることがわかった。ドラマーとしての力量はもとより、音楽に対する理念も、後輩を育てる度量も、仲間への思いやりも十二分に備わっているのに、彼がリーダーとして長続きのするバンドを持てないでいた訳がわかったような気がした。ケイコのマネージメントの目標が定まった。

ケイコの存在によって、エルヴィンは、一層ジャズ演奏に専念する生活を送るようになった。自らの能力のうち肉体と感覚器官と神経とを最大限に研ぎ澄ますことだけに集中できた。そうすることによってソウル(黒人魂)を全開にすることができたのだった。

(どうだい、ムーチ、ケイコがいれば麻薬なんてくそくらえさ)

エルヴィンは、もはや物事を記憶する必要さえなかった。元々記憶力に自信のある方ではなかった彼にとって、憶える努力も思い出す努力もしなくてすむ生活は快適だった。そして彼は、ソウルに任せてドラムを叩くオンの時間と、ケイコの作る美味しい料理や温かい家庭で寛ぐオフの時間が織り成す、大きな時のうねりを生きていった。彼はもう過去を悔いたり未来を案じたりすることはなかった。彼のドラミングも、リズムで時間を刻むのではなく、時間を創造する天衣無縫の境地に達していたのだった。

エルヴィンのソウルは、第二の故郷となった日本を忘れることができなかった。自らのバンド「ジャズマシーン」を率いて毎年日本公演を行った。そして新宿のピット・インを根城にして、日本のジャズメンと交流を欠かさなかった。ヨースケこと山下洋輔も世界的なミュージシャンに育っていた。

エルヴィンは、日本のジャズメンやファンの招きに応じて地方を旅することが楽しみだった。各地で耳にする民謡には、彼のソウルに響く何かがあった。アメリカ黒人の彼には思うように表現しきれないジャパニーズモードの楽曲を、彼はケイコの力を借りて作曲していった。

岩手県の入口に当たる一関市のジャズ喫茶「ベイシー」の招きで、エルヴィン・ジョーンズ・ジャズマシーンの一行は、東北に旅立った。

「民話の故郷遠野にも行きましょう、宮沢賢治の故郷の花巻にも行きたいわね」

と、移動のマイクロバスの中でオフの計画を立てるケイコの横で、ぼんやりと車窓を眺めているエルヴィンであった。彼の耳の奥では、オイワケのメロディラインが流れていた。彼は、オフには、オイワケの故郷、江刺を訪れることに決めていたのだった。

国道の両側の広々とした田んぼは、コンクリートの水路と真直ぐな小道によって、チェスの盤面のように区切られ、きれいに耕されていた。しかし中には、所々荒々とした区画があって、立ち枯れた葦原が根雪を残して早春の風に靡いているのだった。

「ケイコあそこはいったいなんだろう」

「あの荒れようは、一年や二年のことではないわね」

そのような荒地は、沿道のいたる所で、景観に物悲しさを漂わせているのだった。その光景は、豊かさの影に付纏う寂しさのようであり、ブルースのようでもあった。それは、自分の施佛同様、エルヴィンの心に焼き付いて離れることはなかった。

昼前に、ベイシーに着いた一行を、長髪で鼻の下にひげを生やした青年が、出迎えた。

「ようこそ、こんな田舎町のちっぽけな店に、エルヴィンさんが来てくださったなんて、夢のようです」

そのマスターは、昼食の用意をして待っていた。ライスと、みそ汁と、サラダとビーフステーキのセットは、その店の看板メニューであったが、カウンターの目の前でジュージューと焼いてくれたビフテキは、皿からはみ出しそうな特大であった。これから店の一角のアップライトのピアノの回りに楽器や機材を据え付け、リハーサルをして、夕べの演奏に備えなければならない彼らには、何よりのご馳走であった。

食後にエルヴィンは尋ねてみた。

「マスター、教えてくれ。田んぼの中のブルージーな荒地はなんなんだい」

「休耕田ですよ。日本人があまり米を食べなくなったので、取れ過ぎないように、わざと荒地にしておくんですよ」

「それじゃあ、農夫は稼げなくて困るだろう」

「いいえ、国が補償をするのです」

「国が農夫に金を出して田んぼに米を作るなってか。イッツ・クレイジー！」

「余ったら、輸出すればいいんじゃない？」

と、ケイコが尋ねた。

「ところが、日本の米は、タイやアメリカの米より高くつくいてしまうのです」

「じゃあ、豆を植えたり、牛を飼ったりすればいいんじゃないのかい」

「国も、転作を勧めているようですが、大豆も、牛肉も安く輸入され始めて、国内産の物は売れなくなってきています。お出しした味噌汁も原料はアメリカの大豆です。ビフテキの牛肉も、メイド・イン・USAのです。地元の南部和牛を使うと、同じ値段でこれっぽっちしかありません」

マスターは右手の親指と人さし指で輪っかを作った。それから、

「本当は、南部和牛の特大ステーキでおもてなしたかったのですが」

と、恐縮するのだった。

「ごちそうさま、本当にうまいビフテキだったぜ。それにしても、日本のソウルのルーツにやってきて、カンサスの牛やテキサスの豆を食うとは思わなかったぜ」

「でも、もう日本国中どこへ行っても同じです」

「日本がそんなに変わってしまっていたなんて」

と、ケイコは溜め息をついた。

「さあ、今食ったビフテキが、腹の中で『レッツ・ワーク！』って言い出した。マスター、手を貸してくれ」

エルヴィンは車からドラムを運びにかかるのだった。

一九八〇年八月、イングルウッド・クリフスにあるルディ・ヴァン・ゲルダーのスタジオで、日本のレコード会社のためにケイコがプロデュースしたレコーディングが行われた。

かつて「至上の愛」を録音したその場所に、エルヴィン・ジョーンズとトミー・フラナガンと、エリック・ドルフィーの伝説のクインテットでベースを弾いたリチャード・デイビスが集まった。すでに五十路に達し、巨匠と呼ばれている彼らは、共に歩んできたモダンジャズの仲間を振り返り、語り合った。

すでにジョン・コルトレーンも、アルバート・アイラーも、ジミー・ギャリソンも他界していた。散っていった仲間のソウルを引き受けた彼らは、まだまだ枯れるわけにはいかなかった。

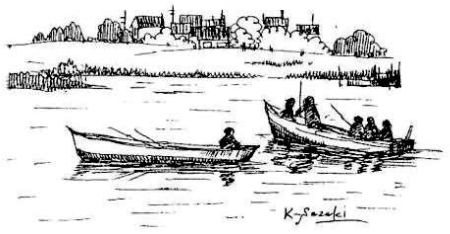
たくさんのソウルが響き合い、燻し銀の光を放つ凄みのあるアルバムが出来上がった。エルヴィンは「ハート・トゥ・ハート」というタイトルを付けた。そしてケイコの愛唱歌「ムーン・リヴァー」を曲目に忍ばせておくのだった。

掌篇小説

技

亜木陽一

わしは今、小・中学生の孫達と一緒に英語や社会科を一からやり直し、勉強している。
わしの好きなもの、それはちびた鉛筆や消しゴム。大好きというより宝物と言える。
物のない時代に育ったせいか、短くなった鉛筆や丸く小さくなった消しゴムは愛着があって仲々捨てられない。
最近ではカドだけで作った消しゴムを売っているというので、そのうち買って使ってみたい。
こうして自宅の大きな机で勉強している時、わしはよく消しゴムを床に落とす。
しかし、その落下して行く消しゴムが床につく前に素早くつかむことができる。
消しゴムが床に落ちた場合でも、ワンバウンドした時に必ずつかむ。
消しゴムや鉛筆は勿論、机や食卓のテーブルから箸・匙・電気・ガス・水道御使用量のお知らせ用紙・時には芋の煮転がし等々、床に落とさない事がわしの得意とする所。
これは近くに住んでいる孫達の間でも評判で、わしのことをみんなで〝サーカスじいさん〟と呼んだりしている。
落ちて行く消しゴムをつかむことに全勝街道を突走っているわしが、丸く小さくなった消しゴムを落しそうになった。
大きな机の上をコロコロころがって行く。
御茶の子さいさい、甘くみていた。
わしのうしろの書棚にめずらしく何かの本を捜しに来ていた婆さんが、いきなりわしの坐っている左側にガバッと倒れ込んだ。
びっくりしていると、
「おじいさん、これ」
左手をついて倒れていた婆さんが、右手を高く上げてわしの前でパッと開いた。
ワンバウンドした可愛い消しゴムを見事にキャッチ。
〝サーカス婆さんよ〟
事もなげに言った。
その間わずかに五・六秒。



正義の旗を掲げて（二）

千坂精一

五

兼續が築城、架橋、道路整備などに躍起になっているあいだに、大坂のほうも動きが次第に目紛しくなってゆき、伏見の千坂景親から逐一詳細な報らせが届いた。

それによると――。

家康は、豊臣政権の筆頭大老を痛罵した景勝、兼續は取りも直さず秀頼公への叛逆者である、と極め付けて、「叛臣上杉中納言を成敗する」

ことを公言し、伊達と最上に征討準備を命じた。

五月七日、中老堀尾吉晴、生駒親正、中村一氏、奉行前田玄以、増田長盛、長束正家らは連署して、家康の會津出兵を諫止する書状を井伊直政に差し出した。

賛否両論が対立して、一箇月近くも評議がつづいた。

六月二日、痺れを切らした家康は諸大名を招集して、「上杉中納言に謀叛の噂があるにより、使者を遣わして糾明いたしたが、中納言の返答は恭順どころか抗戦的である。よって、天下を乱す叛逆者として征伐する」

軍令を発し、七月二十一日に徳川軍本隊は白河口、伊達政宗軍は信夫口、最上義光軍は米澤口、前田利長軍と堀秀治軍は越後津川口、佐竹義宣軍は仙道口からそれぞれ會津へ攻め入ることを決めた、という。

この報らせを受けた景勝は、六月十日、浅香城将安田能元、白石城将甘糟景繼、宮代城将岩井信能、福嶋城将本庄繁長らに家康との決戦を披瀝した連名の書状を送り、興亡を賭けるにあたっての忠節を誓わせた。

そして、諸将を招集して迎え撃つ軍議をひらいた。

席上、兼續は、

「諸口から一斉に攻め込まれては不利ゆえ、會津を出て迎え撃つことにいたして、革籠原で決着をつけようぞ」

そう言って、主戦場を明らかにした。

白河南方の革籠原は、迎撃には恰好の場所であった。

問題は徳川軍本隊をどう革籠原へ引き入れるかであったが、少数の囮軍を革籠原のさらに南の地区へ進出させておいてそこで徳川軍の先鋒隊と小競り合いをさせ、敵わぬと見せかけて革籠原へ退かせることにした。そうすれば追撃してくる先鋒隊は勢いに乗じて革籠原へ雪崩込んでくるであろうからそこを待ち受けて打撃を与える。

先鋒隊危うしとなれば、当然家康・秀忠率いる本隊が救援に駆けつけてくるに違いないから、その機会を捉えて南山口や關山地区に配置しておいた部隊を移動させて徳川軍本隊を包囲し、決戦を挑んでいっきに殲滅する。

この作戦が成功しなかった場合は、白河城を中心にして持久戦に切り替えるという二段構えの戦術を立てた。

そして、兼續みずから南山口に出張り、本庄繁長軍を白河付近に、安田能元軍と嶋津昔忠軍を白河城に、市川房綱軍と山浦景國軍を關山南方地区に配置して、景勝率いる本隊は白河の北方長沼付近に布陣することにした。

この戦法は、諸将があらゆる角度から検討して最上の作戦に仕上げたものではなく、景勝と兼續で充分に練り上げておいた戦術をただ披瀝したに過ぎなかった。

だが、ただ戦法を説明しただけで押しつけたのでは連帯感と結束が生じないから、いかにも出席した部将たちの秘策妙案を採り入れて纏めたように見せかけるために、兼續が部将たちを巧みに誘導してすでに出来上がっている戦術に塡め込ませたのである。

そのことに気づかぬ部将たちは、みずからの発案に酔って昂奮し、いやがうえにも戦意は昂揚した。

このとき、ほかに景勝と兼續だけしか知らぬ迎撃の秘策があった。実はこのほうが主要策略だったのである。

それは、常陸の佐竹義宣との協同作戦であった。

両家は、應永期に関東管領上杉憲定の二子義憲が佐竹義盛の養子（義人）になったことから親戚関係にあった。

佐竹義宣軍は家康の命で仙道口から會津へ攻め入ることになっていたが、家康の本隊が鬼怒川を渡ったところで棚倉方面へ急行し、上杉の先鋒隊が討って出て小競り合いのあと故意に敗走するのにつられて家康の本隊が革籠原へ入ったところを南山口の兼續軍と呼応して挟撃し、徳川軍の混乱に乗じて白河布陣の本庄、安田、嶋津の各軍が総攻撃をかけて殲滅するという作戦であった。

家康に対して、正面から堂々と、

「讒言を信じた内府が正しいか、上洛を拒んでいる景勝がもっともであるかは、世上の沙汰を待とうではないか」

「讒人の申し出を受け入れて内府が事を構えるならば是非もない。誓言も堅約ももはやそれまでである」

そう大見得を切った兼續は、いま、あらためて、
(出て来い内府、眼に物見せてくれるわ)
と正義感に燃えて虚空を睨み、決戦の臍を固めた。

六

伏見の千坂景親から、
(内府は六月十六日に三千の手勢で大坂城を進発した)
との報が届いた。
兼續は、
(いよいよ来るか)
と指折り数えて決戦の日を想定した。
だが、徳川軍の到着は思惑どおりにはいかなかった。
家康は、その日のうちに伏見城へ入ると、翌日も留まって重臣鳥居元忠に守将を命じ、もし會津攻めの隙を狙って石田三成らが挙兵すれば伏見城は援軍なきまま孤立して捨て城となり玉砕の憂き目に遭うやも知れぬ、と因果を含めておいて、十八日の朝勇躍発向した。いかに家康と雖も後ろ髪を引かれる思いであったことだろう。
伏見城を進発してからの徳川軍は、戦場へ向かう軍団としては実に奇妙な行動をとった。
家康は、まず大津城で京極高次と会談してから東海道を下っていったが、途中岡崎城主堀尾吉晴、掛川城主山内一豊、駿河城主中村一氏らの饗応を受けて寛ぎ、武器の餞を機嫌よく受け取るといったまるで凱旋部隊と見紛うばかりの行動を繰り返してすすんでいったのである。
しかし、それは傍目には奇異に映ったかも知れないが、家康自身にとっては上杉に呼応する西の石田らの不穏な動きを包括しての戦略的行動であった。
家康が立ち寄ったそれらの諸大名はいずれも秀吉譜代の家臣たちで、家康を遠い関東へ移封したのち真逆のときに備えて大坂と江戸を結ぶ三河、遠江、駿河の街道筋に配置したのであったが、戦国の目紛しい栄枯盛衰の時代を強かに生き抜いてきたこれらの部将たちは時代がどう移り変わりつつあるかを逸早く肌で感じ取っていた。
家康がこの大名たちを完全に掌握しておけば、會津攻めで手薄になる関東を三成らに侵略される虞れはないし、また三成らが挙兵したときにも、踵を返した全軍がいっきに難なく大坂へ戻れるわけである。秀吉亡きあとの天下人の座を狙う家康の戦略に手落ちはなかった。
家康は、幼時に今川の人質として過ごした駿河に入ると、勝手知った古刹や旧蹟などを遊覧したり、放鷹をたのしんだりして、二十九日に鎌倉に到着、鶴岡八幡宮に詣でて戦勝を祈願し、金澤をまわって七月二日にようやく江戸城に入った。
(とうとう江戸へ着いてしまったか)
家康はそう呟きながら、旅装を解いたことであろう。

家康としては大坂からあまり離れぬうちに三成に挙兵してもらいたかったのだが、いまか、いまか、と牛歩しているうちについに江戸まできてしまったからには、もはや鳥居元忠に預けた伏見城は諦めねばならなかった。
だが、三成にしてみれば伏見城を陥として京を占拠したところでそれは一時の気休めにすぎず、家康を斃さなければ豊臣体制の安泰は得られなかったのである。
三成は、兼續との密約で、徳川軍が下野へ入り上杉軍と対峙して戦端を開くと同時に挙兵することになっていた。そして、徳川軍が上杉軍と対戦しているあいだに豊臣軍が東海道を下って江戸に迫り、徳川軍が慌てて踵を返して江戸へ向かえば上杉軍がそれを追って攻め入り、東と西から挟撃して殲滅するという作戦であった。
家康は、江戸城に居坐ってひたすら三成らの挙兵を待ったが、ついに痺れを切らし、二十一日に三万余の大軍を率いて會津へ進発した。
鳩谷、岩槻、古河と悠くりすすみ、二十三日夕刻小山に到着、鎌倉以来の名族で秀吉に廃され蒲生氏郷に預けられた小山政種の居城だった小山城に陣をおいた。
家康は、翌二十四日諸将を集めて軍議をひらき、あらためて上杉攻めの戦術を確認し合い、明朝前線基地宇都宮へ向かおうとしているところへ伏見から急使が届いた。
石田三成らが挙兵して伏見城を包囲したので、孤立した鳥居元忠以下の城兵たちは必死に防戦したが、ついに支え切れずに全滅したという悲報であった。
家康は、ただちにとって返し三成らの蹶起軍を潰滅しようと決断したが、難題は参陣した秀吉恩顧の客将たちをどう説得するかであった。迂闊に三成挙兵を報らせて叛乱を起こされては上杉軍につけ込まれてしまう。
(さて、どうしたものか)
家康は思案した。
そして、熟慮の末に、昨年文治派の三成に対する遺恨からおなじ武断派の加藤清正や池田輝政らと共同謀議して三成を亡き者にしようと企てたことのある直情径行の福島正則を籠絡して、諸将を抑えさせようと謀った。
さっそく、福島正則を本陣に呼び寄せると、人払いしたうえで上方で石田三成らが挙兵したことを伝え、
「治部少輔は儂を弾劾する盟守になりすましているが、実のところは己れが天下人になる魂胆に違いない」
そう悪し様に罵っておいてから、
「しかし、そうはいっても秀頼君を奉戴しているからには、お手前がた恩顧のかたがたは治部少輔の掲げる旗の下に馳せ参じなければ武門の意地がお立ちになるまい。また、大坂に留め置かれたご妻子のこともお気懸かりでござろう。この場を去られるに遠慮はご無用でござる」

と嗾けた。

福島正則は血相を変えて、

「いや、治部の麾下に加わるつもりなど毛頭ござらぬ」

そう言い切った。

「お手前の頼もしきお言葉は内府有難く頂戴いたしますが、ほかのかたがたはいかがでござろうかのう」

心配そうに誘いをかけて、正則が一命に代えても諸将を同意させるという言質を取り付けてしまった。

翌朝、家康は福島正則、藤堂高虎、黒田長政、池田輝政、浅野幸長、細川忠興、加藤嘉明、山内一豊、蜂須賀豊雄、生駒一正、中村一榮、堀尾忠氏らを集めて、

「石田治部少輔が挙兵いたした。お手前がたのご妻子は大坂に留め置かれておられるゆえさだめしご心配でござろう。取って返して石田方へご荷担なされてもこの家康けっしてお恨みはいたさぬ。早々にお引き取り召され」

突然異変を報らされて愕ろいた客将たちは、互いに顔を見合わせるばかりで声もなかった。

そのとき、福島正則が立ち上がると、沈黙を破り、

「ご幼少の秀頼公が内府様と干戈を交えようなどとお思いなされるはずはござらぬ。これはあきらかに治部少輔の陰謀でござる。われらは妻子を大坂に置いてござるが、余人は知らずこの正則は妻子に心ひかれて武門の道を疎略にする気は毛頭ござらぬ。内府様にお味方申す」

そう居丈高に叫んだ。

家康の思惑どおり、軽薄な福島正則のこの発言が契機になって、客将たちは次々に一味同心を誓い、挙って、

「石田治部少輔を討つべし」

と家康に進言した。

衆議一決した徳川軍は、會津攻めを中止して反転した。

家康は、二男結城秀康に二万の兵を預けて宇都宮に駐留させると、伊達政宗と最上義光に背後から上杉軍を牽制して釘付けするよう命じておいて、みずからは東海道を、三男秀忠には東山道を攻め上らせることにした。

七

兼續は、宇都宮から鬼怒川を渡り太田原を経て攻め寄せてくる徳川軍を迎え撃つべく、與板衆を中心にした一万余の軍勢を率いて南山口を発向、大川、男鹿川沿いに南下して川治近くの下野国塩谷郡高原に布陣した。

戦局展開の優劣を決定するのは、佐竹軍と呼応するこの兼續軍の活躍いかんにすべてがかかっていた。

家康小山着陣の報らせが届くと、兼續は、いよいよ正義の筋目をとおす決戦のときがきたと奮い立ち、

(内府、いざ参れ。亡き太閤殿下の信頼を一身にあつめた上杉が、その総力を挙げて目に物見せてくれるわ)

と手具脛引いて出撃の機会を窺った。

もし、この戦いに敗れれば、家康の邪な軍事行動は正当化され、上杉は後世まで叛逆者の汚名を着せられてしまう。徳川軍の革籠原突入開始を待って常陸から仙道口へ向かうと見せかけて棚倉まできているはずの佐竹義宣軍と呼応して後方から猛攻を加え、完膚なきまでに叩き潰して上杉の面目を施し、律義と正義の筋目をとおさなければならない。兼續は一途にそう思い込んでいた。

徳川軍が宇都宮を進発すると同時に、裏道を併進して白坂あたりから側面へ近づく手筈で満を持していた兼續であったが、予期した日を過ぎても報らせはなかった。

(おかしい)

そう直感した兼續は、すぐに物見を出した。

物見は途中で出会った探索とともに馳せ戻ると、

「石田治部少輔様が兵を挙げられたご様子にて、徳川軍は急ぎ大坂へ引き返したそうにござりまする」

と報告した。

「なに、治部殿が起たれたと―」

兼續は絶句すると、

「早まったり治部殿」

苦り切って舌打ちした。

もっと引き付けてからでなければ追撃は届かない。

「して、徳川軍は全軍引き返したのか」

「結城秀康ら二万が宇都宮に留まっておりまする」

「よし、すぐ長沼へ参る。馬を引け」

兼續は、数名の供をつれて景勝の許へ急行した。

長沼では、白石城将甘糟景繼の先鋒隊がいつでも革籠原へ出陣できる準備を整えて待機していた。

兼續は、人払いを命じて景勝と密議した。

「お屋形様。治部少輔殿が兵を挙げられて伏見城を陥とされましたゆえに、畿内、中国は申すに及ばず、南海、西海の大小名たちは一斉に蜂起した由にござりまする」

「うむ」

「これはまさに天の授くるところ、昨日内府は小山から慌てて江戸へ馳せ帰りましたるにより、このたび参陣の大小名どもは妻子を治部殿に奪われたることに愕きみな内府を捨ててわれ先にと逃げ帰ったようにござりまする。いずれも遠征に疲れておりますうえに上方の大乱を聴き東西より攻められる恐怖に怯えてのことにて、内府さえ逃げ帰りしことは天の時にござりまする。この機に乗じて追撃し江戸を攻め奪りましょう。佐竹義宣殿、相馬義胤殿が東から江戸へ攻め入り、治部殿が大軍を率いて東海、東山道を攻め下り、眞田昌幸殿父子が甲斐、信濃の軍勢を率いて八王子口から搦手に押し寄せ、四方から攻め入れば勝利は間違いござりませぬ。天下一挙のこのときを逃がさず一刻も早くご出馬なされますように」

兼續は、そう景勝を急き立てた。

しかし、景勝は、

「太閤殿下ご存命の砌にご前にて終生逆心いたさぬ旨の起請文を書き、内府、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家らとともに血判して誓約いたした。その誓紙を太閤殿下の御柩に納めたることは天下遍く知るところである。このたびのことは堀秀治の讒言により内府のほうから仕掛けてきたのでやむなく応じたまでのこと。その内府が戦わずして引き退がったからにはわれらも會津へ引き揚げるは道理である。もしいま内府を追撃すれば当方の申し分はみな偽りとなって末代まで汚名を蒙り、天下に信を失うは上杉家の恥辱である。内府を追うこと罷りならぬ」

そう言って許さず、兼續がなおも、

「お言葉ごもっともなれど、内府はこのたびのことは当方から仕掛けたものと天下の人々に思わせておりますれば、かならずや当家の根を絶ち葉を枯らさんと謀っているに違いござりませぬ。もし内府が天運を得て天下人となればまず第一に当家を断絶させるでありましょう。戦わずして滅ぼされるのを待つよりは、いま雌雄を決せられるべきでござります。勝敗は時の運でござりまする」

語気激しく執拗に勧めたが、景勝は、

「ひかえよ山城。当家の興廃存亡は世のなりゆきでやむを得ぬが、不信の汚名を負うは末代までの恥辱である」

と言って、断じて許さなかった。

上杉家危急存亡の瀬戸際にいたって、景勝の律義と兼續の正義のあいだに齟齬をきたしてしまった。兼續は、千載一遇の機会を得ながら長蛇を逸することに無念遣るかたなかったが、さりとて、主君の面目を失墜させるような行動は差しひかえねばならなかった。

兼續は、やむなく各口の部将たちに撤収を命じ、全軍八月十日を期して一斉に會津への引き揚げを開始した。

若松城に帰った兼續は、景勝と対策を協議した。

兼續は、追撃中止により三成らの敗北を予測して、

「恐れながら、もし治部少輔殿が敗れれば内府はあらためて当家を攻めに参りましょう。天下を分ける決戦の大勝利に乗じて會津へ攻め込まれてはとても野戦では持ち堪えられませぬ。たとえ総力を挙げて白河口で防ぎ止めたといたしましても、堀、溝口、村上らを先鋒とした前田利長の大軍に津川口から攻め込まれては大事にいたりまする。會津での防衛戦は不利でござりますれば、徳川軍が上方へ向かっておりますうちに山形へ討って出て、上の山、長谷堂、山邊、東根などの諸城を攻め陥とし、山形を襲撃して最上義光を討ち滅ぼし、家中の妻子を東根の奥深くに籠めおいてはいかがでござりましょう」

「して、内府がふたたび攻めて参ったらなんとする」

「されば、寄せ手を米澤城に引き付けておいて、主力軍

を東根城に集結し、東は黒伏、船形、白髪、西は羽黒、湯殿、月山の連峰に囲まれた出羽山地を背にして籠城いたせば、内府の軍勢はそれ袋の鼠よと勢いづいて東根城を攻め立てるでござりましょう。そこでわが軍は、天童、尾羽根澤、小野、清水、新庄あたりに出て砦を構え臨機応変に戦わば、遠征軍は深入りの長陣に倦んで士気衰えるは必定でござりまする。そこを狙って各砦から一斉に攻めかかればわが軍の勝利は間違いござりませぬ」

兼續は東根を決戦の場にして、徹底抗戦を主張した。

景勝は重ねて、

「だが、われらの最上攻めをきいて結城秀康が白河口から、佐竹義宣が寝返って南の關から攻め入り、北国勢が津川城を攻め破って會津の右手へまわればなんとする」

と兼續に問うた。

「さればでござりまする。白河口は安田順易と嶋津勝久が固めておりますれば結城秀康や佐竹義宣に攻め破られる虞はなく、また、津川口は鳥井峠を越える難所なれば五日や十日で一万の軍勢はとても押し入れませぬ。さきごろ奈良澤、上倉、小佐原以下の人数を差し遣わしておりますればお気遣いはござりませぬ。然れども、われらが最上へ攻め入りたるあとにもし敵勢が白河、津川に攻め寄せてきたりしときは、山形に砦を数多つくって人数を残し、後日攻め奪り易きようにしておいてから會津へとって返しても充分間に合いまする。ともかく、まず

は最上を攻めて東根城を陥とし、これを詰めの城に拵えておくことでござりまする。それがしこの春雪のあるうちに修行者に身を変えて出羽、陸奥の諸城を見て回りましたが、東根城がもっとも要害にすぐれておりました。この城を攻め奪って籠城いたせばたとえ内府みずから出馬あろうとも容易に寄りつくことはかないませぬ。すこしも早くこの城を手に入れることが肝要でござりまする」

兼續は、堂々と意見を開陳して景勝を説得した。景勝は、その綿密な計画にようやく最上攻めを同意した。

九月三日、兼續率いる上杉軍は、勇躍出陣した。

八

上杉軍が最上義光の属城畑谷城に攻め込んだのは九月十一日であった。兼續は、城将江口五郎兵衛道連に使者を送って開城を勧めたが承服せず、僅か百人余りの手勢で籠城したので、兼續はやむなく攻め立てて城を陥とし、江口道連父子を討ち取って出陣の血祭りに上げた。

意気揚がる上杉軍は、疾風迅雷の勢いで十四日には上ノ山城と長谷堂城を囲み、兼續は江戸攻めを許されぬ憤懣遣るかたない思いをこの両城攻略に敲きつけた。

上ノ山城には里見越後守が立て籠もり、長谷堂城のほうは志村伊豆守が指揮して必死に防戦した。

上杉軍が両城に猛攻を加えている十五日に、美濃關ケ

原では徳川家康と石田三成らの軍勢が激突して天下分け目の決戦が展開されたのだが、僅か一日で徳川軍の大勝利に終わり、長束正家は自害、宇喜多秀家は行方不明となり、石田三成、小西行長、安國寺恵瓊は捕えられた。

若松城の景勝の許に、伏見の千坂景親から石田三成らの敗報が届いたのは、二十九日であった。

景勝は、家康に備えて兼續に全軍の撤収を命じた。

兼續は、十月朔日未明に上ノ山、長谷堂両城に猛攻撃を加え、攻め奪ると見せかけておいて、巳の刻（午前十時）ごろ城兵たちに気づかれぬよう充分注意して謙信以来の懸かり引きの戦法で各隊をしずかに撤退させた。

その日、石田三成、小西行長、安國寺恵瓊の三人が、京の六條河原で斬首された。

景勝は、引き揚げてきた兼續をはじめとする部将たちを若松城に集めて、善後策を検討する評定をひらいた。

（武門の意地をとおすか、家名をのこすか）

なので、強硬派と穏健派が対立して激論となった。

兼續は、諸将のまえで徳川軍を追って江戸へ攻め込むことを景勝に具申したときの意見をふたたび披瀝して、

「治部少輔殿が太閤殿下恩顧の大名たちと謀って蹶起し、敗れたものを上杉が独り挑んで勝利するは至難と思われるやも知れぬが、いま手薄になっている江戸をいっきに攻めて占拠すれば互角の和議に持ち込むことが出来る。この期に及んで恭順しても叛逆者の汚名は払拭できず滅ぼされるであろう。おなじ滅亡するなら一矢を報いて死中に活を求め、不識院様以来の正義の戦いに武運を賭けるのが上杉の本分でござろう」

と盟友石田三成の弔合戦をも含めてそう力説した。

甘糟景継が、兼續の意を受けて、

「ごもっとも。上杉の意地を示そうではござらぬか」

そう主張したのを切っ掛けにして、同調の気運が盛り上がり、評定の趨勢は強硬派支持に傾いていった。

そこへ、伏見の千坂景親から急使が届いた。

「もはや天下の形勢は徳川に靡いております。これ以上武門の意地をとおしても所詮無駄な抵抗にすぎませぬ。飽くまでも徳川に抗すれば石田治部少輔らの轍を踏むことになるは必定でござりますれば、ことここにいたっては徳川に恭順して家名を残すことが賢明と心得ます。さいわい、徳川の出頭人本多正信、榊原康政の両人から降服を勧め仲介の労をとると申し出てきております。いまがまたとない好機にござりますれば、なにとぞ鎌倉以来の名門上杉家の存続のためいっときの恥辱をお忍び下さいますようご賢察のほど伏してお願い申し上げまする」

そう切実に訴える千坂の書状を読みおえた景勝は、

（内府の出頭人にひたすら上杉家の存続を懇願している対馬ならずとも、ここは恥辱に堪えて潔く降服し、家名を長らえることが採るべきみちであるやも知れぬ）

と悟った。

景勝もまた、石田三成らの惨敗が家康の天下制覇に拍車をかける結果になってしまったと考えていた。

そして、

（いかに正義の旗を掲げて押しとおそうといたしても、ときの勢いに抗することはかなわぬ。こことここにいたっては神仏の加護を恃んで決着を仕掛けるより、家名の存続を条件にして内府と和を結ぶのが賢明であろう）

景勝は、迷想を振り切ってそう決断した。

翌日の評定まえに、景勝に書院へ呼ばれた兼續は、

「内府に恭順して和を結ぶことにいたそうと思う」

と唐突に言われて、わが身を疑った。

「なんと仰せられます。いかに内府に与力する大名たちが多かろうとも敗れると限ったわけではござりませぬ。正義の旗を掲げての聖戦に家中の士気はいやがうえにも高揚いたしております。なにとぞご翻意下さりませ」

「山城。對馬からの報らせではもはや天下は内府のものに固まっておるとのこと。抗しても詮ないことじゃ」

「しかし、このまま内府の天下にいたしてしまっては、上杉家は取り潰されてしまいまする」

「それがじゃ、對馬のところへ内府の出頭人たちから恭順を誘ってきておるそうじゃ。内府は幸運にも關ケ原の一戦だけで天下を奪い取っただけに、完全掌握するまでは慎重に対処するつもりに違いない。当家はもちろん、毛利、島津などの大大名をいっきに取り潰せばふたたび乱世に戻る虞れを充分承知いたしておるのじゃろう」

「さりながら、取り潰されぬという保証はござりませぬ。正義の一戦を挑んだうえなればともかく、このままでは悔いを千載に残しまする。なにとぞ、ご再考を――」

「對馬の勧めを受けて熟慮したうえでのことじゃ。いまや上杉は天下に孤立いたした。山城、断念せよ」

兼續は、正義を貫けぬ口惜しさと憤りで震えた。そして、上杉が断罪されるときは責めを一身に負い、主君の面前で屠腹して詫びをいたそう。と覚悟を固めた。

景勝を凝視めつづける兼續の眼に、涙が光っていた。

十二月下旬、景勝は和議の使者として本庄繁長を伏見へ送り、結城秀康を通じて家康に恭順を申し出た。

九

慶長六年（一六〇一）正月中旬、大坂城西の丸において上杉景勝処分についての評定がひらかれた。

席上、結城秀康は、

「上杉景勝の謀叛はかならずしも定かではありませぬ。去年九月の關ケ原の役においても降服してきた大名たちを赦している例があるではありませぬか。いわんや上杉はわれらに手向かったわけではありませぬ。ことに景勝は、朝に同盟して夕に離叛する戦乱の世を太閤恩顧の大名の筋目をとおしてきた律義者です。赦せばきっと

恩義を感じて当家に忠誠を尽くすに違いありませぬ。なにがしかの処罰はやむを得ないにしても、鎌倉以来の名門上杉の家名は是非とも存続させてやりとうございまする」

と熱っぽく説いた。

家康が小山から引き返すとき、宇都宮に駐めおかれた秀康は、忿懣遣るかたない思いで血気に逸り、景勝に、

「出陣て一戦を試みたい」

旨の使者を送ったのだが、

「家康が大軍を引き連れて去ったとあるからには、当家は養父謙信以来人の弱味に付け込んで空き巣を狙ったりはいたさぬ家風なので、お気遣いなさらぬように」

と軽く往なされてしまった。

秀康は、残留部隊を駆使して功名を焦った己れの不明を恥じると同時に、筋目を通す景勝の爽やかな態度に感じ入り、以後は景勝に好感を抱いていたのだった。

本多正信、榊原康政の両名も千坂との約束を守って秀康を支持したので、評定の場は景勝に同情的になった。

家康は、秀康はじめ宿老たちの意見を無視するわけにはいかず、渋々ながら断絶させないことを承諾した。

七月朔日に會津を発った景勝・兼續主従は、二十四日に伏見屋敷へ入った。

そして、二十六日に大坂城へ伺候し、秀頼に拝謁したのち、西の丸で家康に面会して恭順の意を述べた。

家康は、上杉家の重臣であると同時に太閤恩顧の大名でもある兼續に向かって、

「山城。そのほうの傍若無人の振る舞い、赦さぬぞ」

と凄んでみせた。

兼續は、怯まず、

「もとより、覚悟のうえにて遠路はるばる會津より出頭いたしました。このたびの責めはすべてこの山城一人にござりますれば、ご存分にご処分下されますように」

と、堂々申し述べた。

家康との会見のあと別間で本多正信の吟味を受けた。

本多正信は、

「それがし徳川の家臣の分際にてまことに恐縮ながら、役目柄でござれば言葉をあらためさせていただきます」

そう丁重に挨拶をしてから、景勝へは差しひかえて兼續だけに訊問をはじめた。

「そのほう石田治部少輔と密約して大事を起こさんといたしたること、相違ないか」

「まさに相違ござりませぬ」

「わが軍が小山の陣より大坂へ引き返すおりに、これを追撃せんといたしたは誰の計画か」

「それがしの一存で決行し、殲滅せんといたしました」

「その追撃計画をなにゆえに断念いたしたるか」

「主君中納言に差し止められましてござりまする」

兼續は、この期に及んだからにはせめて景勝に火の粉

が振り掛からぬようにと、懸命になって申し開きした。

兼續が、責を一身に背負い、死を覚悟しているその気魄が伝わったらしく、正信は満足そうに頷いていた。

その日、景勝と兼續は結城屋敷に逗留させられた。

翌日、再度大坂城西の丸に呼び出されて、家康から、

「直江山城守兼續は所領没収、上杉中納言景勝は陸奥會津、仙道ほか百二十万石から直江の旧領陸奥伊達、信夫、出羽長井三郡三十万石に減知転封する」

旨を申し渡された。

処分を通告したあとで、家康は、

「山城。どうじゃ」

と得意気に問いかけた。

兼續は、毅然とした態度で、万感籠めてただひと言、

「正義が罷りとおらず、無念でござる」

と答えた。

このとき同時に、徳川に次ぐ大大名の毛利輝元もまた中国八箇国百二十万五千石の大身から周防・長門二国の三十六万九千石に減知され、上杉と同盟した佐竹義宣は常陸八十万石から出羽秋田二十万石に減知転封された。

兼續は、家康と一戦も交えずして処罰を受けたことがなんとしても無念であった。景勝の律義と己れの正義の筋目をとおすために意地を張りとおしたその代償が百二十万石から三十万石に減知とはいかにも高価であった。

兼續は、主家を衰退させてしまった責任を痛感した。

遣る瀬ない思いを抱いて伏見屋敷へ戻った兼續は、景勝のまえに平伏してひたすら謝罪した。ほかに術はなく、ただ慎んで処断の下知を待つよりほかなかった。

景勝は、豪放磊落で才気煥発な兼續がみる影もなくうち萎れているすがたを見て憐れに思い、

「山城、もうよい。上杉の武運が尽きたからには、たとえ削封処分を受けたところでなんの愕くことがあろう」

と言って慰めた。そして、

「山城、自裁は許さぬぞ。天寿を全ういたせよ」

慈愛を籠めてそうつけ加えた。

景勝の温情溢れるその言葉が、みずからの手で生命を絶ち大罪を謝そうとしている兼續の心に深く沁みた。

兼續は、平伏したままただただ感涙に咽んだ。

そして、

(切腹して詫びるより、この屈辱に堪えて生き長らえ、衰退した主家再建の原動力になる若い人材の育成に余生を捧げて償いすることで、この恩情に報いよう)

と心に決めた。

景勝と兼續は、秀頼と家康に暇乞いすると、十月十五日千坂景親に見送られ伏見を発ち、栄華の夢會津領をとおり、福嶋から板谷峠を越えて出羽米澤へ入部した。

景勝は、新領のうち六万石を固辞する兼續に与えたが、兼續は五万石を他の重臣たちに分け、さらに五千石

を家人たちに配分して、五千石だけを頂戴することにした。

そして、兼續はみずから上杉家の要職を辞し、本多正信の二子左平次を養子に迎えると隠居閉門同様に蟄居して、食事は一汁一菜、衣服は木綿という質素な生活をつづけ、和歌を詠み、漢籍を読破するかたわら、私財を投じて青年家臣たちの人材育成に努めた。

直江山城守兼續は、元和五年（一六一九）三月景勝に供奉して上洛の帰途、江戸桜田藩邸で病に倒れ、その年十二月十九日、家康に正義を踏み躙られた無念の想いを抱きつづけたまま、しずかに六十歳の生涯を閉じた。

政敵徳川家康は、すでに三年まえに世を去っていた。

（了）

将軍義政と愛妾

島津隆子

二　義政の立場

さまざまの事にふれつつ嘆くぞよ
　道さだかにも治め得ぬ身を

いろいろな事柄にふれるにつけ、嘆かれることである。はっきりと政治の道を治めることのできない、このわが身の不運を。

室町幕府第八代将軍足利義政の、偽らない心境を詠んだ歌である。一体なにが義政をしてこのような心情に駆り立てるのか。

「さまざまな事」に触れては、何を嘆くというのだろう。どうして「治め得ぬ身」なのであろうか。

日本史上の歴代将軍中、最悪ともいえる評判をとっている、悲しくもユーモラスな義政像が浮かび上がってくるようだ。

では、義政が嘆く「さまざまの事」からみてみよう。

義政の父義教は数奇な運命の持主であった。出家の身だったが兄の将軍義持急死のため、三条八幡宮の神前で、次の将軍を決めるクジを引いて当選したという、いささか滑稽な経緯の持主である。

そんな成り行きで将軍になったのだから、当然、面白くないと思う者も多くいた。

一族の関東管領足利持氏などはその代表格であった。持氏は関東に起った上杉禅秀の反乱を平定したので、すこぶる鼻息が荒かった。

「たかがクジ引き上がりの将軍めが」

と露骨に反感を示して、京都にいる将軍の命令をきこうともしなかった。それどころか、自分こそ将軍に相応しい人物であると、自負して憚らなかった。

だが、このクジ引き当選将軍は、そう間抜けな人物ではなかったのだ。突如、大軍を以って持氏に攻めかかり、あっけなく持氏を殺してしまった。

永享の乱である。

ところが、持氏の遺児を担いだ結城氏朝が関東で、土着の豪族たちを率いて反乱を起した。だが、この頃の幕府にはまだ相当の力が残っていて、氏朝の本拠である結城城を攻め落とし、反乱は程なく鎮圧されたのである。

これを結城合戦という。

これら一連の事変における将軍の実力を知った幕府の守護大名の赤松満祐は、この坊主上がりの将軍に得体の知れない不気味さを感じ、自分も滅ぼされるのではないかと、恐怖に駆られたのだ。そのあげく、自分の屋敷内で催した宴の席に義教を招き、暗殺してしまった。

これが嘉吉の乱である。

〃いなかにも、京にも御所のたえ果てて、公房にことを嘉吉元年〃

将軍様が宴会の最中に殺されるとは、恐ろしい世の中よと、誰が作ったのか、こんな歌が京に流行った。

田舎の鎌倉と都の京で、前後して持氏と将軍義教が殺されて、嘉吉すなわち欠吉で、嘉吉というめでたい元号は無いに等しい、というのである。

この赤松満祐もまた、同じ守護大名の山名持豊と細川持久によって滅ぼされた。

時に義政は六歳であった。

そして、八歳にして将軍の座に就いた。

わずか八歳の幼児に世に対してどんな対策が講じられるというのか。義政は幼い時から、激動する社会の中にあって、白痴的将軍として世の興亡を、ただ眺め暮らすだけの存在に運命づけられたのである。

世に何が起ろうとも、ただただ、傍観者であればよいのが、将軍という職業であった。実権は烏丸資任、有馬持家、愛妾今参局、いわゆる幕府の「三魔」が握り、やがて、義政の正室である日野富子に移っていった。

寛政二年（一四六一）には空前の大凶作に見舞われ、極度に飢えた農民が暴徒と化す、いわゆる土一揆が全国的に勃発した。義政にとれば、天災も人災も、現代でいえばテレビの画像を眺めているようなものであった。

それでも義政は、政治家として何の力もない我とわが身を嘆くことだけは忘れなかった。

憂き世ぞとなべて言へども治めえぬ
我が身ひとつになほ嘆くかな

力のある父義教でさえ殺されたのだ。まして全く無力な自分が、身内や側近に、いつ暗殺されてもおかしくないと、義政は常々思っていた。

このように自分の将来に全く希望が持てず、危険が迫っている場合、とるべき道は三つある。

一つは鴨長明のように出家隠遁してしまうか、西行のごとく和歌の道へはいってゆくか、源実朝のように叶わぬまでも何らかの抵抗を試みるかのいずれかであろう。

だが、義政はそのいずれをも選ばなかった。所詮、自分はロボットにすぎない。あるのは「将軍」という役職だけである。この立場を利用しない手はない。

義政は幕府の蓄財を濫費して、とことん遊びに没頭することに決めた。

ここに、日本人にしては珍しい義政の個性がある。

政治的には為すべき何事もない。どうせ父親ほどの力量もない。それに一つや二つの反乱を鎮圧したところで、もうどうなるものでもあるまい。それは至る所に噴出する火山のようなもので、幕府と肩を並べるほどの守護大名は全国各地に点在していて、一つの独立国のような形で成長しつつあるのだ。

事実、当時は群雄が割拠する戦国の世が、足音をたてて近づきつつあった。もはや幽玄の境地を気取っているどころではない。それに義政には長明ほどの文才も、西行ほどの歌の才も、実朝ほどの教養もない。政治力も皆無である。ただ遊ぶ術しかなかった。だが、義政の遊び方は異彩を放っていた。

さまざまに嘆きわびてもかひぞなき
かかる世をしも捨てやらぬ身は

いくら政治力がない、何がないと嘆いたとて仕方がないじゃないか。だが「かかる世」に生まれたことをはかなんで出家しようとは思わないと、義政は心情を詠うのだ。

むくひありてかかる時にし生れあふ
身をこそ嘆け世をば恨みず

義政は自ら嘆く嘆くというわりには、結構ふてぶてしい。嘆きのポーズがなかなかに上手いのだ。そんなポーズをとりながら義政は、室町幕府最盛期に君臨した祖先の義満の時代を思った。そして、それをもう一度実現させてみたいと考えた。

義満の時、京の室町の屋敷は花で埋まり、世に「花の御所」と謳われた。あの色彩豊かであった時代に思いを馳せた。

西方極楽にも換ふべからず

といわれるほどの金閣寺、正式には鹿苑寺舎利殿を中心とする北山の別荘に移り住んだ義満は、後世に〝北山文化〟と称される華麗なる文化遺産を遺したのである。

義政は恍惚とした眼差しで、祖先を偲んだ。ここで、義政の徹底した遊びの哲学が決意された。

このような時である。有力守護大名の斯波家で相続争いが起きたのは。そして、斯波義敏は細川勝元を、斯波義兼は山名持豊（宗全）を後ろ楯とした。

さらに同じく足利一族で有力守護大名の畠山家でも相続争いが起った。畠山政長は細川氏、畠山義就は山名氏を頼った。

偶然とは恐ろしいもので、そんな時、将軍家でも跡目争いが起きたのである。義政にははじめ子供がなく、弟の義視を跡継ぎとし、細川勝元をその後ろ盾とした。

ところが、妻の富子は義尚を生むと義視を排除して、義尚を立てる策略を巡らし、山名宗全を頼ったのである。何のことはない、幕府内部、有力守護大名が自然と真っ二つに分かれて対立が始まったのだ。

細川派には足利義視、斯波義敏、畠山政長が、山名派には日野富子、その子義尚、斯波義兼、畠山義就らのグループが出来上がり、睨み合った。

ところが、そのような対立など、義政にとってはどうでもよかった。自分の子が将軍になるのも、弟がその座に就くのも、同じようなものである。

大の大人がそんなことに血相を変えることもあるまいにと、どこ吹く風と受け流した。

むしろこの頃義政は、派手好きで虚栄心の強い富子を連れて物見遊山に出かけることが多くなった。

チャンスが廻ってきたのだ。義政の濫費への第一歩が開始された。

古寺や旧所名跡を廻り、庭園を観賞するのが何よりも楽しい。その遊山は豪華を極めた。道楽は大きければ大きいほど愉快にきまっている。

奈良は春日神社を巡るときなど、数百人のお供の者の乗り物に花輪を飾り、騎馬の鞍には黄金を散りばめた。夫人の富子はご満悦であったが、他の者たちにとってはいい迷惑である。財を削り、所領まで質に入れて、派手で遊び好きの夫婦のお供をさせられるのだ。

このように将軍夫妻が遊びにうつつを抜かしている時であった。畠山政長と畠山義就が京都で衝突したのである。これが口火となって、とうとうあの応仁の大乱の火蓋は切って落とされた。

時に応仁元年（一四六七）五月二六日の夜明けの頃であった。細川軍は京の東部にあって東軍と呼ばれ、二四

ヶ国約十六万の兵を集め、山名軍は西南部に拠って西軍または西陣と呼ばれ、二〇ヶ国約一二万の兵力であった。

これだけの大軍勢が京都を舞台に実に一一年間も戦い続けたのだから、京都は見渡す限り焼け野原と化してしまった。

疲弊した都にも春が巡り来て焼け野原に青草の芽が出た。そんな京の有様を飯尾彦六左衛門という武士は歌に詠んだ。

汝（なれ）や知る都は野辺の夕ひばり
あがるを見ても落つる涙は

京の都は跡形もなく焼け野原になってしまったのに、灰塵の中から、夕雲雀が飛んで行く。その雲雀を見ていると、どうしてもひとりでに涙が溢れて、頬を濡らすことだ。

一般の民家は言うに及ばず、公家たちの邸宅や、王朝の栄華を留める内裏も、天竜寺、相国寺などの大社寺の名刹も、ことごとく戦火に見舞われて消失してしまった。

ある高位の貴族でさえ人前に出るのに着るものが無く、蚊帳を身にまとう始末であったという。

町民の困窮は推して知るべしである。

そのようななか、義政は連日の風流の遊びに飽きると、連夜にわたり炎上する京の都を眺めながら、宴の盃を酌み交わした。

やがて、即位したばかりの後土御門天皇と後花園上皇を室町殿に迎え入れたのである。御殿の外ではいつ終るとも知れない戦いの日々がつづく。御殿の人々の心はその退廃に倦み、侍女と若い公達（きんだち）が、朝廷の女房と幕閣が、刹那的で刺激的な遊戯に耽っている。

こともあろうに、後土御門天皇と富子との怪しい関係も流言となって御所の中を駆け巡った。

乱れた呂律で糺す義政に、富子は艶然と言った。

「帝と私と？　まるでお伽話ですわね。こんな戦乱の世の中ですもの。お伽話の一つや二つあっても、夢をみているようで楽しいことよ。閑を持て余している人々の噂話でございましょう」

「そんな子供だましの言い逃れは許さぬぞ」

義政の猜疑に満ちた酔眼が富子をみつめる。

「何をおっしゃいますか。あなた、お今の亡霊にでも取り付かれていらっしゃるのでは？　きっとお今が言わせているのよ」

二人にとって死んだお今は、共通の後ろめたさが支配する存在である。しかし、お今に対する消し難い愛着が義政の心を占めていることが富子にはわかっている。

意地悪な富子の言葉に肩を落とす義政だが、より現実

的に生きる富子は、天皇と上皇を抱え込むことで、錦の御旗を掲げたことになった。それは富子と気脈を通じていた勝元の策略であったのだ。

富子にすれば自分の子を将軍にするために始めた戦であってみれば、とことん勝利を治めるまでのことだと覚悟は決っている。どんな事態になっても幕府だけは維持しなければ意味がないと、そのための資金獲得に手段を選ばなかった。

賄賂を贈らせ、高利貸、米相場、そしてかの悪名高い関所を至る所に設けて、びしびしと金銭を取り立てた。富子の悪名は一時に高まった。

義政も相変わらず庭造りや、書画、陶器収集に没頭し、大金をはたいては茶会や歌会を催した。また、それら風流人たちに恩恵を与え、保護した。

ある時など、兵火が御殿近くまで迫ってきたが、側近の驚きをよそに、義政はひとり悠然と盃を傾けていた。酩酊している指先が震えて、盃の酒が義政の膝を濡らす。

義政の唇から、お今の幻影に語りかける声がもれる。

「お今よ、どうして死んでしまったのだ。生きて、わしの傍にいてくれればよかったのに……」

「あなたが私を殺したのですよ。あの富子さまのために……」

「わしはどうすればよい？　お今、許してくれ」

「知りません、お気づきになるのが、遅すぎたのです」

「人間は何て愚かなものか。手許にいる時は気づかずにいたが、いざいなくなってみて、お今が何ものにも変え難く、大切だったことがわかったのだ。ああ、どうすればよい、お今よ、許してくれ……」

子供のように泣きじゃくっている義政の耳元に、お今は優しく囁いて消えた。

「あなたのお好きなことに打ち込めばよいのよ。あなたは幼い頃から、非凡なところのあったお子でしたもの。私がいつもおそばについていてあげますからね」

酔いから醒めた義政は、まるでお今の励ましを味方につけたように、世の混乱をものともせず、いよいよ自分の遊興にひたすら熱中していった。

世の中は騒然とすればするほどよい。

将軍職の名誉や権威などどうでもよいのだ。ただ、ただ幕府の蓄財と悪妻富子の徴収する金を湯水のごとく使えばよいのだ。

義政の道楽はクライマックスに達しようとしていた。

義政は義満の北山の別荘の向こうを張って、東山に山荘を建設しはじめた。いわゆる銀閣寺の建立である。

応仁の大乱、富子による情容赦のない悪政、農民の反

乱である土一揆の頻発、打ち続く大飢饉などで、全国では数千、数万人、京の都でさえ一日数百人の餓死者が出るといわれる世相であった。

だが、義政は一人華美歓楽に耽り、東山一帯の邸宅造営に夢中となり、庭園は数寄を凝らし、さらに都の紀河原に大きな劇場を設けて、猿楽を催したりした。

また、春は花頂山、大野原に花を愛で、秋には奈良の古都を楽しんだ。ゆえに歴史上、義政の評価は最悪だが、義政に言わせれば、

「大乱も、政治の無力化も、一揆も、みな運命のいたずらで、それは飢饉も含めて天災のようなものだ。人々はよろしく己の境涯のなかで、生をたのしむべし」

とうそぶいて憚らない。

暗雲の時代に生きながら憂鬱を吹き散らして、独特な活力をもって生きた義政は、ここで不思議な結果を後世に遺すのである。

竜安寺の石庭にみられるごとく、日本庭園の粋はこの時代に完成されたし、茶道の開祖といわれる村田珠光も、水墨画の大成者雪舟も、大和絵の土佐光信、狩野正信も、連歌の宗祇も、その他多くの能楽師、画家たちも義政の政治下の人々であった。

また、立花も華道として成立。一寸法師、浦島太郎などのお伽草紙、狂言など、今日の日本文化の極地といわれるもののほとんどが、絢爛と華咲いた。

世に言う暗黒の中に開花した極美の芸術「東山文化」である。それはあの義満の「北山文化」に優るとも劣るものではない。

義政を挟んで、はからずも憎み合う立場に置かれた、お今と富子という二人の女からの恩恵を蒙りながら、義政が華美に耽溺し、道楽三昧に生きた、とどのつまりの驚嘆すべき数々の遺産なのだ。

いわば東山文化を築いたのは、お今と富子の力に与って余りある、といえるかもしれない。

はかなしやめづる心の花園に
まよふ胡蝶の夢の世の人

義政晩年のロマンチックな独白である。

源平交代思想（二）

宅見勝弘

第一章　平将門

「歴史上、日本の首都は東京でないよ」

大学の先輩で国家公務員のAさんが私に言った。彼は東京から首都機能を移転すべきと主張している。

「先輩は、東京から首都を移転するべきと言うだけでなく、もともと東京は首都でないと言うのですか」

「その通り。行政機能が東京にあるのは事実だ。だからこそ東京への一極集中を避けて、行政機能を地方へ分散した方が良いよ」

「東京でないとすると、日本の首都はどこになるのですか」

「当然ながら、京都だよ」

「京都といっても文化遺産だけで、行政機能はありませんよ」

「歴史を遡って考えるといい。鎌倉幕府が誕生した時に、鎌倉に遷都されたと思うか」

「源頼朝が朝廷から征夷大将軍に任命されて、鎌倉幕府が誕生した訳ですから、朝廷のある京都のままで遷都されていません」

「江戸幕府も同じだから、江戸時代も京都が首都のままだ。明治維新の際も京都が首都という前提で遷都論が唱えられた」

「東京以外にも遷都の候補地はあったのですか」

「大久保利通が大阪遷都を進言して、天皇も大阪行幸したが、大阪遷都は実現しなかった」

「大阪遷都が反対されて、東京遷都になったのではないですか」

「いいや。東京に遷都するという天皇の詔勅や、明治政府による法律など公的なものは一切存在しない。むしろ、公的に首都を京都に残すということで、明治新政府への反発を抑えたという事情があった。江戸を東京と改称しただけだ」

「しかし、天皇は京都から東京へ転居しましたね」

「実は、これも東京行幸、つまり出張という位置付けで、現在に至っている」

「天皇家は百年以上出張していることですか」

「そうだ。七九四年に平安京に遷都されて以来、首都は平安京のままだ。正確には、長岡京に遷都された七八四年から京都が首都ということになる」

「正式な手続をしないで、なし崩し的に実体を替えてしまうのは、日本的ですね」

「そもそも三河出身の徳川家康が江戸幕府を開くまでは、鎌倉以東は未開の土地だったのだから」

「そうでもないですよ。千年も前に、平将門は、関東に独立国家を築いています。もしかしたら平安時代から首都が東京になっていたかもしれませんよ」

私は遷都論から平将門に話題を替えようとした。

※

筆者は数年前、大手町にある銀行の本店に勤務していたが、一つビルを隔てて、平将門の首塚がある。今回の執筆に際して、首塚を訪ねてみた。

東京の中心のビジネス街に、木々に囲まれた首塚が存在するのは、非常に異常な感覚がした。

昭和初期に政府がこの首塚の上に庁舎を建設しようとすると、関係者が次々と怪死した。

戦後、占領軍が工事をしようとするとブルドーザーが横転するなど、不審な事件が続いた。結局、占領軍は区画整理事業を断念したのである。

平将門の祟りとして人々から怖れられ、信じられた結果、オフィスビルの真ん中に開発されること無く、首塚だけが残ったのである。

首塚は、その名の通り将門の首を祀っている、京で曝し首になっていた将門の首が飛んで戻ってきたという言い伝えの場所である。

皇居前のこの地に将門の首塚が存在することに、歴史的な意味があるのでないか、と思った。

※

源平交代思想の最初の人物が、平氏の将門である。

平将門は、平氏としてだけでなく、武士の時代の始まりを象徴する人物と言える。

将門は、平安京を開いた桓武天皇の五代目の子孫である。桓武平氏の祖である高望王の孫にあたる。

将門は、平安時代中期の下総国（現在の東京東部・千葉北部・埼玉東部）の豪族であった。平安京に出廷していたが、父の良将の急死により下総に戻った。

当時は、朝廷の国司が東国を支配しており、民衆は国司の圧制に苦しんでいた。将門は、苦しむ民衆を助けて、朝廷に対して武装蜂起したのである。

将門は、常陸・下野・上野等の国府を攻め落とした。そして、将門は朝廷に対抗するため、自ら新しい天皇（新皇）として即位した。

関東一円を朝廷の支配から廃し、独立国家を宣言したのであった。

しかし、蜂起からわずか二ヶ月で、平貞盛ら朝廷軍により将門は討たれたのであった。その無念さが首塚の伝説として伝えられているのであろう。

短期間であるが、関東に朝廷の支配が及ばない国が誕生したという事実は、重要である。

将門の乱が成功していたら、将門の子孫が天皇家として、首塚の付近に皇居を築いていたかもしれない。

※

「平」は「源」と同様に、天皇の子孫が臣下となる時に付ける姓である。

「平」は、平城京からでなく、平安京から付けられたものである。平安京に遷都した桓武天皇の子孫が最初に賜姓されたからである。

なお、平氏には、桓武平氏・仁明平氏・文徳平氏・光孝平氏の四つの流れがある。

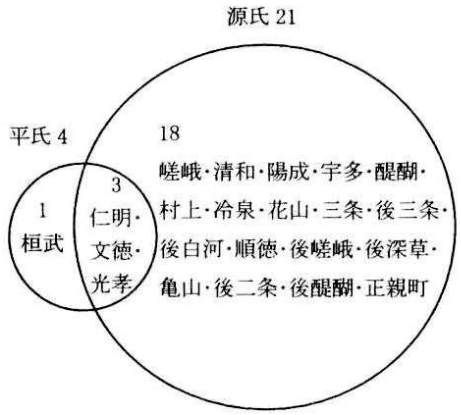
源氏が清和源氏を含め二十一も流れがあるのと比べると、平氏は極端に少ない。

しかも、仁明・文徳・光孝は源氏もいるので、源氏にない平氏の流れは桓武平氏のみである。

同じ天皇の子孫で、平氏と源氏のどちらになるか、規則性がある。

平氏と源氏とも子孫に持つ仁明・文徳・光孝の場合、子と孫は源氏で、曾孫が平氏に原則としてなっている。例外があるが、天皇からの血縁で近い者は源氏、遠い者は平氏になる。

単純に賜姓した天皇の構成比で図示すると次の様になる。



あばれ天龍（二）

―金原明善の一生―

三戸岡道夫

第四章　横浜遠江屋の経営

（一）

松平家の財政整理の仕事が終わると、明善は横浜にある遠江屋の経営にたずさわるという、商人としての活躍に青年時代を送った。

横浜の貿易商遠江屋は、明善の父の久平が始めた会社である。

金原家は代々理財の才にまぐまれ、とくに明善の父の久平は、すぐれた商才の持主であった。明善は少年時代から家業の手伝いにはげんだが、その父の指導によって、実業家としての力を身につけていったのである。

文久二年（一八六二）四月、父の久平は公用のため江戸へ行った。久平が五十五歳、明善が三十一歳のときである。久平は松平家の知行代官もやっていたので、その用事のため、江戸にある松平家へ行ったのである。

その帰り道に、久平は横浜へ立ち寄った。開港後わずか四年足らずであったが、外国貿易によって急速に発展している横浜を見たかったのである。人一倍、商機をつかむことが敏であった久平が、発展している横浜の外国貿易に深い関心を持ったのは当然である。

そして横浜の貿易に興味を持った久平は、それから二年後の元治元年（一八六四）五月に、親戚と共同出資で、横本町四丁目に『遠江屋』という貿易の店を出した。共同出資者は、久平のほかに、

笠井村の鈴木清六、
下石田村の小池治三郎、
下石田村の宗兵衛、

の三人であった。

鈴木清六は屋号を糀屋と称し、笠井村の地主で、木綿問屋を営んでいた。また肥料も江戸方面へ売りこんでいたところを見ると、木綿のほかにも遠州の産物を手広く扱っており、久平が計画した貿易商に参加させるのには格好の人間であった。鈴木清六の家へは、明善の妹の加賀子が嫁いでいるという、親戚関係でもあった。

小池治三郎も下石田村の地主であり、同時に商人でもあった。そして金原家とは古い親戚であった。

宗兵衛も下石田村の住人であり、金原家との関係ははっきりしないが、共同事業に参加したのであるから、なんらかの親戚関係にあったものと思われる。

元治元年といえば、あと四年で明治元年という、日本国全体が政治的にも経済的にも激動のときであった。遠州という地域は、数十万石というような大名が封建的に支配し、封鎖経済を強行するという地域ではなかった。支配する大名や旗本は小藩であったから、農村統制はゆるやかであった。したがって百姓の商業活動は比較的自由で、遠州には商品経済がすでに浸透していた。

そのため商品経済の発達した遠州平野の村々には、身分は百姓であるが、実質的には商人として、手びろく商業を営む地主や豪農が多かった。しかも遠州地方には、大名や旗本が知行するための陣屋を置かずに、地元代官に任せきりの旗本知行所や、小人数の代官所に支配される公領が多かったから、上からの制約が少なかった。そのため百姓たちは自由に商業活動をすることが出来たのである。金原明善一家や鈴木清六一家も、そうした豪農の一人だったのである。

遠州には古くから、

(笠井とんび(鳶)に、掛塚がらす(烏))

という言葉があった。笠井村は遠州木綿の集散地で、木綿問屋の多いところであり、掛塚村は、天竜川の河口港で、遠州物産の積出港であり、材木商と廻船問屋を兼ねる商人が多かったところである。この言葉は、これら両村の人々がいかに商機をつかむのに敏であったかを烏にたとえて諷刺したものであるが、広く遠州平野の商業活動の機敏さを象徴したものである。

遠江屋へ共同出資した四人も、もちろんこうした商人たちであった。日本が開国してまだわずか五、六年しか経っていないのに、はやくも遠い遠州の地から外国貿易の有利さに着目して、横浜進出を企てたのは、遠州商人の積極生を示すものである。

(二)

遠江屋の営業は、貿易商といっても、自己の計算において、商品の相場の高下による利鞘を追及する、投機性を持ったものではなかった。委託商品の売買の仲立ちをして、たんにその手数料を稼ぐ、手堅いものであった。

取扱いの商品は、茶、生糸、種紙、繰り綿、椎茸などだった。しかも貿易といっても、主としてこれらの商品の輸出を目的としていたのである。

荷主は、おもに遠江、三河、信濃などの商人であった。しかし遠く奥州方面とも取引きを行い、仙台産の生糸や種紙、八戸付近の大豆なども取扱っており、その交換物資として、遠江の繰り綿を売っていた。

要するに遠江屋は、国内各地から集荷したいろいろな商品を、横浜駐在の外国商人に売り渡す、いわゆる売込み商人といわれるものであった(この当時、まだわが国の商人は、直接外国と取引することを許されていなかった)。

そしてこれらの商品の廻送には、掛塚港の廻船問屋を利用していた。

四人の共同出資者の出資額は平等であったが、その経営は金原家に任されていた。明善の父の久平の提案によって成立した事業であり、また金原父子の商才を信頼していたからである。

店舗の所在地は、はじめ横浜本町四丁目であったが、手狭まのため半年ほどで、弁天通三丁目へ移転された。

遠江屋の経営は金原家に任されていたが、しかし久平は松平家知行所の代官を、明善は名主という公職についていたため、村を離れることはできなかった。

そこで遠江屋の現地の最高責任者である支店長ともいうべきポストには、もっとも信頼のおける、久平の弟であり、明善の叔父にあたる、金原家分家の当主の金原市之進が就任した。しかしこれも横浜に常駐したのではなく、ときどき国元から出張して、監査に当る程度であった。

そこで横浜に常駐する支配人としては、明善の実母志賀の実家である、中泉村の田中家の親戚である、中井儀一郎が採用された。

店員は全部で十名程度であった。

遠江屋の経営は順調であったが、三年目の慶応二年(一八六六)の春になると、共同出資者の間に分裂が生じた。それは店の経営をめぐる、金原家と他の三者との対立だった。

それは取引量の拡大によって運転資金が不足してきたので、支配人の中井儀一郎が追加の出資を要求してきた。しかし四人の共同出資者の意見が一致せず、一文の出資も出なかった。

そこで窮地に陥った支配人の儀一郎は、投機的利益によって運転資金を稼ぎ出そうとした。そのため店の営業方針を破って、商品の投機的売買や、洋銀会所におけるドル買いなどに、手を出したのである。

金原家ではちょうどその頃、家の普請を始めたところ

であり、そこへ持ってきて久平が中風のため床についてしまった。そこで明善は父の代理も勤めねばならず、三十五歳の明善は公私ともに多忙をきわめていた。

そこへ遠江屋の儀一郎の投機行為を国元（遠州）の方へ中傷する者があったり、そのため国元の方からも儀一郎の方へ詰問状が出るようなことが起ってきた。

支配人儀一郎は金原父子が信頼して遠州屋の経営を任せている人間であったから、闇取引で私腹を肥やすような悪人ではなかった。真面目で、不馴れな異人との取引にもめげず、遠江屋の繁栄のために努力している忠実な支配人である。彼としては、店の資金繰りをはかるために、苦しまぎれにやったことなので、うしろ暗いところはなく、また店の勘定に大穴を開けたわけでもなかった。そこで儀一郎は国元に対して、立派な申し開きを行うと同時に、一日も早く出資金を出してくれるように引つづき要求を行ってきた。

そこで明善は、たびたびの儀一郎からの出資催促の問題を解決するため、出資者四人の協議会を召集した。

しかし、清六、治三郎、宗兵衛の三人は、なにかと理由をつけて、なかなか出資しようとしなかった。

やっと四人が集って相談をしようとしても、三人は出資の話には触れようとせず、

（支配人の儀一郎が店の規則を破って危険な投機取引に手を出したために、荷主の信用を失った）

と、非難するばかりであった。

こうして話はもつれにもつれ、ついに、

（遠江屋を金原家が引取るか、それとも三人の方へ譲り渡すか、どちらかだ）

という急迫した場面に立ちいたってしまった。

そこで田中伝蔵と中井兵三郎という二人が仲裁人として中に入り、仲裁人から支配人の儀一郎へ、

（これからは投機的な売買はいっさい止めて、口銭一筋の堅実な営業方針へ立ち帰ること）

と忠告することとして、この場を一応治めた。そして五月に入ると、仲裁人二人から儀一郎へ、その旨を厳重に指示した。

儀一郎は止むをえずその指示に従って、投機的売買は止め、堅実経営に戻った。しかし、それによって運転資金の不足は解決したわけではなかった。

さりとて儀一郎の要求する追加の出資がされるわけでもなく、経営はますます苦境に陥り、その後やく一年近く無理に無理を重ねた結果、ついに翌年（慶応三年）三月に経営が破綻してしまった。これは儀一郎が苦しまぎれに町会所、同業者、金融業者など、いたるところから借金をし、さらに荷主への送金をも運転資金に流用して、支払いを滞らせるなど、経営がすっかり乱脈になってしまったからであった。

（三）

この経営破綻は当然国許でも問題となり、ふたたび金原家と他の出資者三人との対立となった。なかでも宗兵衛は、

（明善と儀一郎が通謀して、横領などの不正を働いていた）

などと非難して、執拗に明善の責任を追及し、

（金原家が遠江屋を引取って、自己の責任において整理すべきである）

と主張して譲らなかった。要するに共同出資者である三人は、遠江屋の整理による損失を全部金原家に負担させ、自分たちは損失を最小限度に喰い止めようとしたのである。

そこで明善は慶応三年八月上旬に、遠江屋の整理のため横浜へ行き、店の経理状態を調査した。明善が三十六歳のときである。

すると負債総額は、

特殊債務　百両（町会所よりの借入分）
　　百五十両（異人関係の債務）
一般債務　三千二百三十八両
合計　三千四百八十八両

であることがわかった。

主たる債権者は約二十人であった。最高は遠州中泉村の三文字屋田中伝蔵の七百両であり、主たる債権者の大部分は、遠江の繰り綿、茶などの、荷主であった。

しかし遠江屋としては、とてもこのような債務を弁済する力はないので、明善は遠江屋をやむをえず破産することにした。

そのため、破産手続を、弁天町三丁目の名主の中村金兵衛のところへ申請した。

すると運のいいことに、本町三丁目西横川の桂屋喜八という人が、遠江屋を千五百両で買い受けて、次男の喜助に経営させるという話が出てきたのである。そこで形の上で喜助を明善の養子にすることとし、その養子に遠江屋の跡を譲るという形で、話をまとめたのである。したがって実際は破産事件でありながら、表向きは桂屋喜八の相続問題として処理されたのである。これは明善の人柄に同情した、名主の中村金兵衛の配慮によるものであった。

もし破産事件として処理されたなら、当時、破産人は羽織着用禁止、あるいは名主役の取上げなど、現在の公民権停止に似た不名誉な制裁を受けるのが普通であった。しかし事件が相続問題とし処理されたために、明善はそのような制裁を受けずにすんだ。それは誠意をもって解決方法を願い出た明善の態度とその人柄に、名主の中村金兵衛が同情して、そのような配慮をしてくれたのであった。

明善はまずその千五百両で、特別債務である、町会所と異人に対する債務、合計二百五十円を全額支払い、残金千二百五十両を一般債務者の二十余名に支払った。

これに対して不服を申し立てる者は誰もなく、遠江屋の整理は無事完了することができたのである。

それから明善は、遠江屋を桂屋喜八と喜助へ引継ぎ、諸関係先へのお礼廻りなどの債務整理を行って、慶応三年九月十七日に、横浜を発って、安間村へと帰った。

こうして遠江屋の一件を明善は解決したのであったが、しかしまだ共同出資者との問題が残っていた。それは主として明善と宗兵衛の間の対立であった。

特に明善と宗兵衛との間がこじれたのは、宗兵衛が、(遠江屋がおかしくなったのは、明善が横領したからである)

と、誣告したからだった。生来、潔癖な明善は、この宗兵衛の誣告に激怒したのである。

そこで明善は、公的機関の手によって事の真相を明らかにし、毀損された名誉を挽回しようと、大久保陣屋へ訴え出た。

しかし慶応三年という年は、徳川慶喜が大政を奉還し、その後、討幕軍の東下、江戸城明渡し、遠州においては天龍川の大洪水、治水工事、領主松平家安堵の運動のための明善の上洛、洪水後の天龍川の復旧工事などと、引続く大事件と政治状勢の急変などによって、明善は公用のため多忙をきわめたので、いつまでも私怒にこだわっている暇はなくなり、宗兵衛との事件は立ち消えになってしまった。が、明善が徹夜の坐込み作戦を取ってまでして、自分の潔白を証明しようとした強硬な態度と、初志貫徹の決意の固さは、明善の人柄をよく現わしているといえよう。

この遠江屋の事件は、明善が三十三歳から三十六歳の間という、わずか四年間たらずの短期間の間に、設立、破産というあわただしい動きがあったのである。遠江屋の経営責任者は明善であったので、明善が生れてはじめてその経済的手腕を対外的に振わねばならなかった事件で、とにかく損害を最小限度にくい止めて、明善は無事事件を収拾したのだった。

第五章　松平家の安泰運動

明善がこのように慶応三年九月、三十六歳のとき、横浜遠江屋の整理を終えて帰国し、整理をめぐっての宗兵衛との対立、紛争に明け暮れている頃、天下の情勢は急速に変わりつつあった。

慶応三年十月十四日には徳川慶喜の大政奉還があり、十二月九日には朝廷から王政復古の大号令が発せられた。

明けて慶応四年（明治元年）一月三日、鳥羽・伏見の戦いに幕軍は敗走し、一月十四日にははやくも討幕令が発せられた。こうして幕府と朝廷との間の勢力バランスが一気に崩れ去り、徳川幕府は終末期へと突入していった。

そうした政治情勢の中で、遠州地方は表面は平静を保っていた。遠州地方の諸藩は、形勢を静観して動かず、中泉代官所も表面はそれまでと変った様子は見られなかった。戦国時代以来、遠州地方は徳川家の政治的地盤であり、江戸時代を通じて、直轄領、譜代大名領、旗本知行所をもって固められていたので、遠州地方の人々は徳川幕府政権の安定を信じていたのである。

しかし明治元年も二月に入ると、遠州地方の形勢もにわかに騒がしくなってきた。

二月十五日に、東征大総督の有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王が、薩長をはじめとする諸藩兵をひきいて、征途についた。そして二月二十四日には遠州に入り、その日は浜松に一泊した。

その宿泊の御用をつとめるために、松平家の知行所からは、安間佐市と大村竜左衛門の二人が、上組の村から集めた人足二十余名をつれて、前日から浜松宿に詰めていた。明善の父の久平も、松平家の代官をつとめているので、当然これに参加しなくてはならなかったが、病気のため参加することができなかった。

翌日（明治元年二月二十五日）には東征軍は浜松を発って、安間村を通過した。が東征軍が安間村に入ると、突然、総督から金原家において休息する旨の命令が出された。そこで金原家において休息が行われた。これから天龍川を渡るのであるが、その前に軍勢の休息が必要である。しかし浜松から天龍川までの沿道には、金原家以外に適当な邸宅がなかったからであった。金原家で休息をとった軍勢は、天龍川も無事渡って、江戸への行進をつづけた。

すると翌日（明治元年二月二十六日）、浜松藩主の井上河内守が、朝臣としての誓約を終えて、京都から無事帰ってきた。すなわち井上家の存続が、朝廷によって認められたのである。

そのような現象が間近かな所で起っていては、安間村を知行する松平家としても安閑としてはいられなかった。松平家の存続をはかるのは、松平家の知行所代官をつとめている金原家の当主久平の任務である。しかし久平は病身で動けない。そのため三十七歳の明善が父に代って、松平家の存続のための運動に奔走しはじめたのである。

松平家七千石の知行地は、関東に三千石（安房、上総、上野）と、西部に四千石（三河、遠州）と、東西に分散していた。この知行地を今後どのようにして安泰にするかなのであるが、関東の三千石は、当主の松平正孝が江

戸に在住するのであるから、一応は安泰と考えてよいであろう。問題は西部（三河、遠州）の四千石であった。三河、遠州は、金原久平などの地元の名主を代官として使うのみで、松平家の陣屋もなく、松平家の支配度が薄いといわざるをえなかった。だから今後の安泰が不安なのだった。

そこで明善は、

（遠州に松平家の二男が住みつくようにすれば、安堵されるのではないか）

と考えたのである。すなわち、松平家の親族を遠州に定住させることによって、松平家の領土安堵を図ろうとしたのである。

しかし松平家の二男の豊吉は、この時まだわずか七歳の少年であった。そんな少年を遠州に連れてきたぐらいで、どの程度の力を発揮できるであろうか疑問であったが、とにかく明善は、

（江戸へ定住しなければならない旗本が、子供の一人をはやくも江戸から遠州へ定住させることは、朝廷に対する恭順の意を表明することになる）

と考えたのである。こうすれば新政府の心証がよくなり、松平家の領土安泰作戦が有利に展開できるにちがいないからである。

もちろん明善も、松平家の存続のための運動が、決して容易なものではないことを十分に覚悟していた。だから松平家を存続させるのには、松平家も、浜松藩の井上河内守と同じように、勤王請書を提出して、朝臣の誓約をする必要があると考えた。

そこで、明善の父の金原久平と、そして大村竜左衛門、安間佐市の三人の地行所代官が連名して、明治元年二月に、

（領主の松平筑後守正孝は、朝廷に対してはいかなる存意も抱いていない）

という証書を作り、浜松藩を経由して、尾州藩参与役所へ提出した。

併行して明善も江戸の松平邸へ行って、松平筑後守正孝の『勤王御請御直書』を書いてもらい、それを持ち帰って、浜松藩を経由して、尾州藩へ提出した。

このようなことは他の大名家ではすでに済んでおり、松平家の提出の遅れは心配されたが、しかし無事に受理されて、ほっとした。

遠州の方での松平家安泰運動は、こうして明善を中心に行われていたが、一方、本元の江戸の方ではどうであったであろうか。江戸においては松平筑後守正孝は勤王請書の提出はしたものの、明治元年三月四日に正孝は病気を理由に、隠居届を提出し、長男の内藏之助正當に家督を譲ってしまった。正當はまだ十三歳であったが家督を相続して、松平家七代目の当主となった。正孝は隠居することによって、朝廷への恭順の意を表したのであろう。

そのような準備態勢がととのうと、明善は明治元年三月十一日に、松平家安泰の運動を進めるため、松平家の用人格として、京都へ上った。明善が三十七歳のときである。

しかし明治元年三月というこの時点では、まだ明治新政府もスタートしたばかりで、新政府の行政組織も変更、改正がはげしくて、はっきりしておらず、まだ、どこの部署が何を担当するのか権限も明確でなく、また、権力、処理能力、財政力もなかった。したがって、まだ旗本の領知を左右できる権力さえ安定していない新政府にとっては、せっかくの明善の陳情にも、明確な行政処理は不可能であって、ただ大官の政治的考慮に委ねるほかはなかった。すなわち、明善が期待するような返事を、すぐに受取ることはできなかったのである。

しかし、こうした松平家の安泰運動と並行して、大変な大事態が遠州を襲い、たちまち明善はその渦に巻きこまれてしまった。

それが天竜川の大洪水であった。そして、これが明善の一生を『天龍川の治水』と決定する、大事件になるのであった。

第六章　天龍川の洪水

（一）

明善は二十四歳の若さで安間村の名主となって村を治め、また、父の久平といっしょに家業にはげみながら、松平家の家政整理を行うなどして、人生経験を積むうちに、明善は明善なりの人生哲学、世界観を持つようになった。それは一口に言えば、

（国家社会などの公共への奉仕）

であった。

明善はつねづね自分のことを

『わしは宗教にたとえるならば国家宗だよ』

と言っていた。その意味は、

（一向宗は一心に仏を念ずればいい。百姓は一向に精出して、働けばいい。わしは国家宗だから、一向に国家のためにつくすことを考えている）

ということであった。

明善はどのようにして、この境地に達したのであろうか。それは、

（人は何のために生れたのかということは、どんな学問を修めた人といえども、おそらく答えは出せないであろう。しかし、人間が人としてこの世に生れてきた以上、

『何をなすべきか、あるいはなさざるべきか』という問題は、常識のあの人間であれば、必ず心の中に湧いてくる問題である。この問題の提起によって、人間はこれを解決し、それによって自己を知り、自己の本分を考え、ここに立脚地を立てて自分を主張し、ここから人生の行路にむかって出立するのである)

と、思い定めたのである。その出立の起点を明善は、

(修身　斉家　治国　平天下)

の確信に置いた。この点について明善は、

(漢字の教える『誠意正心』から『修身斉家治国』にいたる秩序は、西洋の教えでも同じであると思う。したがって、まずその意を誠にし、誠意をもって自分の国家に尽すべき道を考究したのである)

と言っている。そしてその実践は、

(その人の境遇と能力に応じて、出来るところからやればよい)

と悟ったのである。だから明善は自分の出発点を、(修身、斉家、治国)でなく、

(修身　斉家　済民)

としたのである。「治国」をあえて「済民」と主張したのは、

(自分の境遇、能力に立脚したとき、自分の国につく す道は、一挙に治国に飛ぶのではなくて、済民によって治国に通ずることが、自分にとっては最善であると確信して、済民に徹することにしたのである)

と、自分の考えを述べている。

すなわち明善は、生活の基礎を『家』に置いたのである。すなわち、修身あって家斉い、家斉ってはじめて生活の安定が生まれる。この生活の安定こそが、国家社会の公共につくすための源泉である、というのであった。

すなわち生活の安定は、精神的には自主自律して他の模範になると同時に、物質的には余力を生むことである。そしてこの物質的余力こそが、社会公共への貢献の源泉となるのである。

すると、ここで何よりも肝心なことは、

(倹約の実行である)

と、自分を戒めている。なぜかといえば、いかに生活が安定していても、倹約しなくては、余力が生まれてこないからである。

『余力』なくしては、社会貢献も夢にすぎない。倹約によって生れた余力こそが、自分自身の誠意によって社会へ貢献できる力である。余力こそが、その人自身の境遇と能力に応じて社会貢献できる最高の力なのである。

そして、この「修身、斉家、済民」の信念が、天龍川の治水という公共事業へと、明善の人生を駆りたてていくのであった。

(二)

天龍川は日本の屋根といわれる中部山岳地帯に源を発し、ほとんど一直線に南下して遠州地方(静岡県西部)を縦断し、遠州灘に注いでいる大河である。

主要水源である長野県の諏訪湖をスタートすると、十にあまる支流を統合しながら、木曽山脈と赤石山脈との間の地溝帯である伊那谷を貫流して、一路南下する。そこは急峻な山々が複雑に重畳している峡谷で、有名な天龍峡はここにある。

やがて長野県を流れ出ると、愛知県、静岡県の県境を通り、やがて静岡県に入ると深い谷間を縫って南下をつづける。そして三方ケ原と磐田台地の間にひろがる平野部に入ると、大天龍の雄姿を示して、一直線に太平洋に達し、掛塚で遠州灘に注いでいる。

その幹線流路の延長は二百十五キロメートルで、山形県の最上川とほぼ等しく、わが国で八位にランクされている。

天龍川に注ぐ支流は上流の三峰川をはじめ、十以上を数えるが、その水源地の多くは、標高千二百メートルから千八百メートルの高い地域にあり、したがって支流はすべて、山間を激流として流れている。

とくに中流部を流れる気田川をはじめとする六つの支流が、日本屈指の多雨地帯を水源地にもっている急流なので、下流の平野部の洪水へ大きな影響を及ぼしていた。

これに加えて天龍川流域一帯は土質が脆弱なので、降雨による地すべりや、決壊が起こりやすく、つねに多量の土砂を下流へ押し流した。したがって、洪水のときには多量の土砂や石礫が押し流されて、下流地方の水害をいっそう大きくした。

そのため天龍川は『あばれ天龍』の異名をとるほど、一朝豪雨になると、濁流増水して堤防決壊し、大洪水となりやすかった。その度に天龍川沿岸の村々は洪水におそわれて、田畑、人家は甚大な被害を受け、難渋していた。

天龍川の古い時代の水害を見てみると、磐田郡誌は「慶長元年(一五九六)から慶応三年(一八六七)までに洪水が百三十回、大飢饉は二十一回を数え、農民は種モミさえ食べつくした」と書いている。

人々は、水の恐怖から逃れるために必死に輪中堤を築き、あるときは川沿に水神さまを建てて、神の加護にすがった。

輪中堤とは、江戸時代に水防のために、川沿いの一つの集落や、また広く一帯を堤防で囲み、水防協同体を形成したもので、岐阜県の木曽川流域に作られたのが有名である。

天竜川の場合は堤防の高さがいずれも一メートル前

後しかなかったので、ちょっとの増水にも耐えられず、水をかぶった。

復旧工事も機械力がなかったので、難事業だった。延宝三年（一六七五）、思いあまった引佐郡龝玉村（現浜松市）の杉野彦助は、

（生きながら土中に埋められて、ここに堤防を築かば、千載の後といえども崩壊の憂いなし）

と天竜川に身を投じて、人柱になった。村人は、彦助の死をかけた行動に発奮し、復旧作業に立ち上ったという。

戦国時代に、天然の要害となった天俣城のある二俣川も、庶民からは怨念の的だった。それは二俣川が当時は城の南側を流れ、天竜川の増水があれば逆流して、たびたび大洪水に見舞われ、水との苦しい闘いを強いられたからである。

明和二年（一七六五）四月の氾濫で、二俣村全村が被災したのを機に、名主の袴田甚右衛門喜長は、鳥羽山を掘削して、川の流れを変えることを思い立った。翌三年二月、独力で工事に着手した。

だが途中で幕府から中止命令が出されたり、全村大火の悲運もあって、一時中断した。明和五年には工事を再開したが、五か月間にわずか八メートルしか進まない岩盤に手こずった。しかし、ついに安永三年（一七七四）、着工以来十年目にして、鳥羽山が貫通した。

明善の生まれ育った安間村も天龍川の西岸にあって、もちろんこうした被害の中心にあり、明善も幼い頃からしばしばこの惨禍に見舞われていた。

天龍川堤防大沢潰の洪水は、嘉永三年（一八五〇）から明治元年（一八六八）までの十九年間、すなわち明善が十九歳から三十七歳までの間に、五回の大洪水を記録している。

が、特に明善の記憶に焼きついているのは嘉永三年の、十九歳のときの大洪水であった。それは明善が十四歳から病んでいた長期間の重病がやっと十九歳になって回復した時点であったことと、その前年、すなわち嘉永二年に母の志賀が三十七歳の若さで死亡し、さらに祖父の久右衛門までもが急逝（六十八歳）するという不幸に打ちひしがれていた時であっただけに、洪水の災難もとくに強烈なものだったのである。

明善は安政二年（一八五五）五月、二十四歳のとき、父の久平が安間村の名主を辞任したので、その後を継いで、安間村の名主となった。したがって、天龍川の洪水も、名主という立場上、明善の責任は重くなった。

万延元年（一八六〇）の五月も豪雨のため、天龍川が出水し、あちこちの堤防が決潰し、天龍川沿いの村々に水害が起った。明善が二十九歳のときであった。そのため名主の明善は十一月に、安間村地方三役の連署をもって、中泉代官所から郡中助成金として四百両を借り受

け、水害復興資金に充てた。

さらに一年おいた文久二年（一八六二）にも、大風雨のため天龍川は氾濫し、流域の村々は大きな被害を受け、その翌年の文久三年の七月にも、大風雨による天龍川の洪水で、方々の堤防が決潰し、村々は大水害を受けた。

このように天龍川の水害がつづいたので、慶応元年（一八六五）十二月に、天龍川流域百十カ村の連名で、

（天龍川の堤防のうち、浜松藩自普請の所を、弘化元年（一八四四）前の幕府直轄工事に戻してほしい）

と、勘定奉行に歎願書を提出した。すなわち、こう天龍川の洪水がひどくては、とても地元の浜松藩の力ではどうにもならないから、幕府の大きな力でやってほしいというわけであった。

しかし、この頃になると徳川幕府の方も、権勢もゆらぎ、また財政的にも困窮していたから、歎願書を受取っても、具体的にどうすることもできなかった。

明善はこのように、たび重なる天龍川の水害に見舞われながらも、名主という立場にありながら、何の対策も打てずにいることに、苦悩していた。

その苦しい心境を、明善は、後日、明治になってから、

（幕府時代においては、天龍川の治水は、沿岸の住民にとっては利害が切実であったけれども、残念ながらたやすく村民が手を下せるようなものではなかった）

と述べている。

長い間、洪水の災害から脱れることができず苦しんでいる天龍川沿岸の住民の姿と、これを救う方法もなく切歯扼腕している名主としての明善の姿が、彷彿と浮かんでくるようである。

明善が三十七歳になった明治元年も、春から雨が多くて、大洪水になる心配があった。

（ひょっとして今年も、三年前と同じような大洪水になるかもしれぬな）

という予感が明善の中を走り抜けた。

明善は降りつづく雨の空を、じっと見上げていた。空は果てしなく隅々までうす暗く、その中から滲み出るように、しとしとと雨が降り注ぐ。このような静かな長雨が危険なのである。

これまでの明善は、

（天龍川の洪水は天災で、どうすることもできないのだ）

と切歯扼腕していたのであるが、この空から滲み出るように降る雨を見ていると、明善の中に、

（よし、天龍川の洪水をなんとかして治めやろう）

という決意のようなものが湧いてきたのであった。

その決意は、時代の変化が明善の背中を後押ししているからでもあった。

これまでの世の中は徳川幕府の政権下にあったので、自由にいろいろな事業が出来なかった。しかし今は明治と世が変わって、明治新政府による新しい動きが出てきたからだった。とくにこの年（明治元年）三月に発表になったばかりの五カ条の御誓文には、

（広く会議を興し万機公論に決すべし）

と、新しい国の方針がうたわれていた。

「これこそ、日本の国の黎明だ。幕府によって制約されることはない。天龍川の治水だってやれば出来るのだ」

と、明善は欣喜雀躍した。

（そうだ、治水の宿願を貫徹するのは今しかない）

そうふるい立ち、強く意思を固めた折りしも、前述した三月十一日に、松平家安泰の運動のために、京都へ上ることになったのだった。

（そうだ、このチャンスを生かすべきだ）

ただ松平家安泰のためだけの上洛ではもったいない。ついでに天龍川の洪水についても新政府に訴え、渦害を永久に根絶する策を建てるよう請願しようと考えたのである。

三十七歳の明善は、明治元年三月十一日に京都へ上ると、松平家の安泰を請願するとともに、天龍川の治水についても太政官民政局へ陳情した。

（三）

天龍川の治水問題は、会計局という管轄官庁が取扱っていた。

しかし、まだ権力と財政の基礎が確立していない新政府としては、

（一応、聞きおく）

という程度の処理しか出来ず、明善が期待するような答えをすぐ引き出すことはできなかった。

この時、明善が面会できた大官は、岩倉具視であるといわれている。岩倉具視は、当時、三条実美と並ぶ新政府の実力者であり、また陳情と最も関係の深い会計局事務総督の職にあったから、当然ありうることだった。

が、とにかく、いずれの役所へ出頭しても、また誰に面会しても、不要領でうちが明かず、事はそう簡単には運ばなかった。たしかに新政府になってから、新しい風は吹きはじめてはいたが、まだそれは緒についたばかりで、制度の朝令暮改、士農間の階級意識、古い時代の取扱いにこだわる役人との交渉などと、すんなりと事が運ばなかったのは当然であろう。

この時の明善に一つのエピソードがある。

明善は当局の人へ近づくために、いろいろな人々に交りを求め、次から次へと手を廻した。すると、たまたま、ある官吏と親しくなったので、天龍川の治水についての

協力を求めた。すると、その役人は、

「うん、力になろう」

と、すぐ承知してくれたが、

「それでは、これから祇園へ行こう」

と、誘われたのである。はたと困った明善は、

「わたしのような田舎者が、どうして祇園などへお伴できましょうか。どうか、ひらにお許しのほどを…」

と、再三ことわったのだが、役人は、聞き入れない。そして、ついに、

「なに、君にはちっとも迷惑はかけないよ。官費遊興を試みようとするだけだ。もし君が、わしの言葉に従わないのなら、わしも天龍川の話には協力せぬぞ」

そこまで言われては明善も進退きわまり、

（目的を達成するためには仕方がない）

と、ついに駕籠に乗せられ、祇園に行った。

宴がはじまり、酒を飲むうちに、次第に役人は泥酔し、前後不覚となってしまった。

明善が困っていると、遊女は明善を自分の部屋に案内した。明善は、居たたまれなくなって、そっと遊女に金を渡して、

「わたしはこれから、どうしても行かなくてはならない所があるから、どうか、あの友人に内緒にして、帰してくれ」

そう拝むようにして頼んで、あやうくその場を逃れ、ひた走りに走って、宿まで帰ったということであった。

そうこうするうちに、一つのアクシデントが起った。それは国元の遠州から急使が来て、

（父の久平が重病）

だと知らせてきたのである。

明善は取るものも取りあえず、安間村へと急いで帰った。

久平の病気は卒中風とあるから、いわゆる脳出血であった。久平は慶応二年以来、中風気味で病床にあり、一時小康を得ていたが、急に悪化したのであった。

しかし折角明善が帰宅しても、気丈な父の久平はこれを喜ばず、

「公用で出張して、まだその目的も果していないのに、私用で勝手に帰ってくるとは何事か。無責任きわまる。すぐ京都へ戻れ」

と、明善を叱責した。

しかし明善は家にとどまって父の看病に当った。その代わり、叔父の金原市之進が代理として京都に上り、役所の交渉に当った。

しかし父の病気か小康を得ると、明善は初志を貫徹するために、翌月、すなわち明治元年四月に、ふたたび京都へ上った。

前回の上洛は、松平家の安泰を図るのが目的で、その

序に天龍川の治水陳情という感があったが、今回四月の上洛は、天龍川治水が主目的であった。それはこの年の春雨が、予想していたように長雨で、また天龍川が氾濫し、水害の危機が出てきたからだった。

京都に着くと、明善は直ちに会計局に出頭して、天龍川治水のための堤防工事の陳情書を提出した。

この陳情を受けた会計局からは、

「天龍川は三河裁判所の管轄であるから、その方へ願い出よ」

との申し渡しがあった。

この頃の新政府は、まだ江戸城を接収したばかりで、政治体制も整っておらず、財政局にも、まだ天龍川地域という地方の土木建設費を支出できる余裕などなかったので、そのような申し渡しで、体裁よく態をかわしたのかもしれなかった。

また松平家の安泰の問題の方も、旧幕臣に対する新政府の処置がまだ決っていない時であった。したがって、松平家の当主自らが上洛して帰順の意を表すのならともかくとして、明善のごとき者が代理で陳情した程度では問題にされず、要領を得ないままに返答が引きのばされているのだった。

そこで明善は急いで遠州へ帰国し、吉田の三河裁判所に出頭して、刻々危機が迫っている天龍川の氾濫に対し、急速に水防策を講ずるように願い出た。

しかしその裁判所もまだ設置されたばかりであった。そして担当する役人はいるものの、まだ財政力がなかったから、天龍川の水防費を支出できる余裕などなかった。そこで、

(天龍川の沿岸は、公領と私領とが入り組んでおり、とくに浜松藩の領分が多いから、浜松藩とも協議する必要がある)

として、浜松藩郡奉行の佐々木四郎兵衛に三河裁判所へ出頭するように命じた。そして協議の結果、浜松藩と明善の両者に、

(天龍川水防掛り)

を命じたのである。

この結果、浜松藩では呼出しを受けた佐々木四郎兵衛が水防掛りを担当することになり、以後、明善がこの佐々木と共同して、天龍川の水防の任を行うようになるのだった。

しかしこの場合、天龍川沿岸といっても、その両沿ではなく、浜松藩と安間村のある西岸のみであった。

また水防掛りを命ぜられたといっても、すでに天保二年(一八三一)に、幕府の普請役の犬塚裕市によって組織された天保議定水防組が存在したから、ただこれを指揮督励すればよいわけであって、佐々木と明善の二人が新たに水防組織を作るために奔走する必要はなかった。

しかし天保議定水防組があるといっても、それは三十

八年も前のことであり(明善が生れた前の年)、実質的な活動をする力など、すでに失っていたのではあるまいか。活動していないからこそ、明善が京都へまで行って陳情しているのであり、したがって活動していない組織を指揮督励して、どれほどの効果があるというであろうか。中味のない、役所の形式的な措置でしかなかった。だからこそ、これ以後、明善の独自のすさまじい天龍川治水活動が展開されるのであった。

なお、前述の「裁判所」という名称には、一言補足説明する必要がある。

明治新政府は明治元年に政体書を公布して官制を改正し、政府の権力機構を整備強化した。そして地方行政の方も、各地に鎮台を置いた。が、まもなく鎮台は裁判所と改称された。そして幕府直轄領の接収の進行にともなって、裁判所が要所要所に設置されて、新政府の権力が次第に地方にも浸透していった。

そうした中で、駿河、遠州、三河の三ケ国を支配する三河裁判所は明治元年四月二十九日に、三州吉田に設置されたのである。したがって裁判所といっても、現代の裁判を行う司法裁判所ではなく、行政的色彩の強い地方行政官庁だったのである。

(四)

このように明善は松平家の安泰運動に並行して、天龍川の治水済民運動に東奔西走していたが、明治元年の春からつづいていた雨は、明善が心配していたようについに大洪水となり、これまでの大洪水に劣らぬ大水害を及ぼしたのである。

すなわち明治元年五月十九日、降りつづく豪雨のため天龍川は氾濫し、遠州平野一帯に大水害を及した。

まず天龍川の西岸は、もっとも弱点とされている上流の、上小島、中潮などの大囲堤が最初に破れ、つづいてその下流の高薗、中善地付近の堤が破れ、西側一帯は浜松までも浸水した。この中に明善の住む安間村が入っていたことはもちろんである。この中でも、上小島村付近は、田畑数百町歩が水びたしになり、家屋も二十戸ほど流失するという甚大な被害であった。また中善地村でも十戸ほどの家屋が流失した。

また東岸を見れば、とくに下流地域の被害が大きく、藤木堤防より南の堤防はすべて決潰し、各所が池や川になり、田畑のほとんどは荒地となった。河口の掛塚港も同様の水害を被った。また上流では、三つ家、松の木島などの村々の被害が大きかった。

こうして水害は天龍川両岸一帯の広い地域に及び、決潰した堤防の長さは、西岸では二八七〇間(五一六六メ

ートル）、東岸では一二六四間（二二七五メートル）の長さに及んだ。そしてその広さは、西側では、長上全郡の八十パーセント、天龍川以西にある豊田郡の全部、および敷知郡の西南郡、東側では、天龍川以東の豊田郡全部と、山名郡東部の大半に及んだのである。

ほとんど遠州平野一円が水浸しになったといってよかった。

浜松と天龍川の間の往復は舟によるという状態であり、田畑や家屋は水没し、多くの人々が食糧難のため乞食となって、さまよう悲惨な状態がつづいた。もちろん安間村も水害を受け、金原家へも浸水した。

明善の父の久平は病気で寝ていたが、父の看病は家族にまかせて、明善は文字通り不眠不休の防水、難民救助活動をつづけた。

浜松藩からは難民のための救助米を放出させたり、裁判所に対しては、旧幕府の所有林であった磐田郡井戸ケ谷の山林から治水工事用木材の切り出しを許可させたりした。また明善自身としても、堤防の応急工事を必要とする所に資金を寄付するなどして、率先身を挺して、治水作業に奔走した。

（五）

明治政府がやっと重い腰を上げて、天龍川の復旧工事を開始したのは、明治元年の八月に入ってからであった。

明治元年八月十四日に大政官政府から、会計官権判事の岡本健三郎と、営繕司権判事の高石幸治の二人が、天龍川水防御用掛りとして、遠州へ派遣されてきた。

彼らは直ちに水害の現状を調査したり、浜松藩や三河藩管下の水害地の代表を呼んで、意見を聴取した。この現状調査のとき、彼らは金原家に立ち寄って、明善に今後の協力を要請した。そして、調査の結果を中央政府に報告したり、復旧計画を協議するために、岡本健三郎はいったん京都へ帰った。

そして岡本健三郎は京都から戻ると、明善を、（惣場所見廻下同附）という、工事現場の幹部に任命した。

同時に浜松藩の坂下繁三郎も、同じ役に任命された。

浜松藩の坂下繁三郎が任命されたのは、浜松藩は五月十六日（明治元年）に、三河裁判所から、天龍川の治水工事を行うように命令を受けており、またその後七月に、更めて大政官から、天龍川の治水工事を委任されていたからであった。

したがって治水工事は、浜松藩と、他の旗本知行所や、寺領などの連合団体の間で、分担して行れたものと思われる。

明善は連合団体の現場代表者の立場を、坂下繁三郎は

浜松藩の代表者の立場を、それぞれ担当したものと思われる。しかしこの役職は、いわゆる現場監督のようなものであって、治水工事の組織全体からみれば、それほど高い地位のものではなかった。

しかし治水工事が始ったといっても、洪水が起ったのは五月であり、三カ月も経っている。その間急場普請もろくに行われなかったのに、八月になってから太政官政府が急に役人を派遣して復旧工事に着手したのは何故であろうか。

それにはある理由があったからである。

それは明治天皇の行幸であった。

この年の八月から十月にかけての政局の動きを眺めてみると、昨年（慶応三年）に徳川慶喜が大政を奉還して以来、幕府から新政府への政治情勢の移行はスムーズに進んでいた。その情勢好転に新政府は意を強くして、本年（慶応四年）七月十七日には江戸を東京と改称すると、八月二十七日には明治天皇の即位式を行い、引きつづき九月八日は年号を慶応から明治へと改元した。そして明治天皇は九月二十日に京都を発って東京へ行幸され、十月十三日には東京に着かれたのである。

すなわち、この九月から十月にかけての明治天皇の京都から東京への行幸が八月に計画された。すると九月末には天龍川を通過することになる。とすると、行幸の道筋に当る東海道が水害地のままでは、天龍川を渡ることが万が一にも出来ないような事が起れば大変なことになる。そこで明治天皇の行幸に間に合うように、急に天龍川の復旧工事に取りかかったというわけであった。

さて、いよいよ政府役人が乗出してきて復旧工事に取りかかろうとしたのであるが、しかし県にも政府にも、工事費を支出できる財政力があるわけではなかった。

そこで明善の献策によって、遠州三河在住の元旗本からの上納金と、神社、仏閣、豪農、富裕商人からの寄付や借上金によって、八万両を集めることが出来た。明善もこの時、八百両を寄付した。

もちろんこれも明善一人の力で出来たのではなくて、三河裁判所の岡本健三郎と高石幸治と協力した、三人の献身的努力がしったからこそ、出来たのであった。この三人はこれから後、生涯知己として交りをつづけた。ともあれこの復旧工事は、岡本健三郎、高石幸治、明善の三人が中心となって資金調達をして工事を推進したのであるが、その根底には、遠州一円に培われた勤王思想と、明善を敬慕する住民の協力があってこそ、結実したものであった。

八月二十四日になると、第一回の工事資金の百両が渡されたが、それを機に破壊された堤防の修復工事が始った。

明善も工事現場の幹部として衆に先んじて献身的に

活動した。明善は資金調達に努力するだけでなく、自ら進んで人夫の中に身を投じて、杭を打ち、石を運んだ。それと同時に、工事成績優良者を表彰したり、褒美酒や手拭を与えたり、工事の進行成績によって割増金を出したり、また人夫への即日現金支払いを徹底したりして督励した。

そうした夜を日についでの突貫工事をつづけた甲斐があって、工事は意外に進捗し、九月の末になると、東海道はもとより、天龍川両岸の堤防も、復旧工事はほぼ出来上った。

天龍川には一万両の費用で百二十八間の船橋が架けられ、ただ明治天皇の行幸を待つばかりとなった。

明治元年十月一日に明治天皇の行列は三州吉田を発ち、遠州路に入った。そして、その夜は新居に泊った。

十月二日には浜松に入り、浜松に泊った。

この時明善は浜松行在所において、その抜群の功労が認められて、

（名字帯刀を許される）

という栄誉に輝いた。

行幸は十月三日には浜松を午前七時に発って、安間村を通り、天龍川の舟橋を渡った。見付に着くとお昼休みをとり、午後三時には掛川に到着した。

かくして無事に、天龍川の復旧工事と、明治天皇の行幸は終了したが、明善の父の久平は、明善の大役終了と、栄誉のよろこびに、張りつめていた気力も弛んだのか、この年（明治元年）十月二十二日に、六十一歳で死去した。久平は長い間病床にあり、明善が京都へ出張中に危篤状態におちいったこともあったが、その後なお半年ばかり、生き永らえることができたのであった。

復旧工事が終っても明善にはまだ残務整理が残っており、引きつづき工事の監督に従事していた。久平は死の近いのを知りながらも、

「仆に言っておくような遺言などはない。要は相続人明善の了見次第である」

と語り、明善は父久平の臨終に間にあわなかったのである。

明治元年五月のこの天龍川の大洪水と、その復旧工事は、明善の生涯に大きな転機を与えた。すなわち、明善の生涯を貫く、治水、治山の公共的大活動が、この明治元年を原点としてスタートするのだった。

（つづく）

挿絵界の春秋

―明治期新聞小説の切り抜き聚珍本四冊の挿話として―

大和禎人

藤村「春」　明治四一年四月七日より連載一三五回
漱石「三四郎」明治四一年九月一日より連載一一六回
草平「煤烟」　明治四二年一月一日より連載一二七回
節　「土」　明治四三年六月一三日より連載一五一回

右四冊の体裁は前三冊は和装、題簽鑑源とあり、「土」のみ一九一〇年、紺地レザークロスの洋装。

各作品すべて朝日新聞連載で森田草平の「煤煙」は初出題名は煙が烟とあり、漱石の破格の推輓により「三四郎」に続く掲載、「土」は同様に「門」に続く掲載であった。いずれの作品も明治末年の話題作であり、それぞれが当時の一エポックをなす作品でもあり、掲載紙切り抜き製本である点が貴重なのだ。わが家の家宝である。

近ごろ甲府市湯村に宿り、翌日、同市西南の南アルプス市に至り、嘯月美術館を訪ねた。同地出身の実業家河西豊太郎氏（故人）俊夫氏二代にわたる蒐集を展示し、古くは室町、江戸期から明治、大正期に活躍した南画家を主とし、一〇〇〇点余点を蒐集、二代俊夫氏はとくに橋本雅邦の作品を愛されるなど、地方にあって貴重な鑑賞の場を与えられている奇特の美術館なのである。

さて、ここでは往時これら掲記小説を飾った挿絵画家のことに少しく触れてみたいのである。というのは、はからずも同じ南アルプス市には市立春仙人美術館があることをたまたま現地に至って知り、嘯月を辞してから期待の足を向けていたからである。つとに名取春仙の名は承知しており、好ましい牧歌的画風が印象を刻んでいた。春仙は同市小笠原の出身なのであった。

この画家は多く明治期の新聞小説の挿絵を描いているのだ。私は大いに期待をもって春仙美術館を訪れた。

歌舞伎浮世絵最後の巨匠
名取春仙の世界

同美術館のあつかいはこのようで、地元の画家らの作品の展示に多くスペースを裂き、春仙の挿絵画稿などの展示はなく失望したが、ともあれ地味に生きたこの画家の美術館が存在していたことにせめてもの満足を覚え、暫しの時を過ごし、七世沢村宗十郎の「小磯ヶ原」の業平礼三、初世中村雁治郎の紙屋治兵衛という二点の大判ポスターを乞うて土産とするなどのことがあり館を辞したのであった。

帰来、書架から首記の四冊を取り出して見る成り行きを辿った。はたして間違いなく春仙はこれら小説の挿絵に達者な腕を奮っている。だが、この時期の挿絵画家は作家と並ぶ立場を与えられておらず、かろうじてサインに春仙とあるのも稀で単に春の一字が大方である。画家は市民権を与えられていなかったのである。今日では考えられない遇し方である。

「大菩薩峠」の挿絵を描いた石井鶴三さんが独自の挿絵画集を世に問うことがあった際、気難しい作家中里介山が激しい抗議を寄せた話はまさに挿絵画家軽侮の有名な事件として語り種を残している。中里の説は挿絵は画家のものではない。あくまでも小説あって成立し、著作権は小説家にあると主張、鶴三は画家の絵心のはたらきによる創造制作であるから、当然、著作権は画家にあるとし、自分だけの問題ではなく、挿絵の芸術性や画家の人格尊重のためにもと強く主張、介山は告訴までに及んだが、後に取り下げざるえなくなった。社会的に大きな反響を呼び、挿絵画家の著作権を初めて正しく認められる端緒となった。

昭和十年六月、平凡社は「名作挿画全集」第一巻を刊行し、同十一年に第十二巻を完結している。企画出版として、この種の出版は絶後、画家個人の「挿絵集」は前記の石井鶴三氏ほかの数人があるが、全集は空前にしてまさに絶後の企画をもって世に問うものであった。月報形式の「さしえ」という読者向けサービスもぬかりなく読者の作品を募るという内容も盛られていたものだ。その第一号では中村岳陵さんの「挿絵制作の妙諦」など一家言が寄せられている。本格画家として中村さんなぞ大いに人気を呼んでいて、貴重な家言をよせているのであった。

中村さんばかりでなく、晴れて本格画家と呼ばれる人々が腰を据えての活躍がようやく認められる時代が訪れを迎えている。一方、岩田専太郎、小田富弥といった挿絵を専業とする人々も妍を競い、挿絵界は往年に異なり百花繚乱の時代を迎えているのである。

さて冒頭の切り抜き聚珍の四冊に話を戻すと、藤村の

「春」は日露戦争後の青春彷徨の群衆を描き、漱石の「三四郎」にはこんなくだりがある。

「然し是からは日本も段々発展するでせう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、

「亡びるね」と云った。一明治四十一年九月八日連載第八回の一節一

この一節を私が初めて讀んだのはかなり昔だが、ドキリとした覚えがある。漱石先生は（かの男）に託して思いきった発言をしているのである。藤村が日露戦後の青春彷徨を「春」のテーマとしているのと同様に、漱石は「三四郎」をストレイシープとして描き、三四郎自らの独語としてそれをつぶやかせ末尾を結んでいる。森田草平の「煤煙」は筆者自らの平塚雷鳥との塩原尾花峠への情死行を企てた明治四十一年三月、追手に捕えられ未遂に終った事件で、スキャンダルとして騒がれ、社会的に葬られるところを漱石のはからいで救われて、四十二年、事件を作品化した作品であった。長塚節の「土」は漱石の依頼により書かれた。克明精緻を極めた作品で、後年の農民文学隆昌の先駆的な作品であった。戦時下小杉勇、原節子というキャストで映画化も見ている。どうやら国民の士気高揚をねらいとした趣の映画であったが原作そのものは発表の往時、漱石先生の激賞の作品となっていた。

さて四冊の挿絵について見ると、藤村の「春」、漱石の「三四郎」の挿絵は間違いなく名取春仙であり、また森田草平の「煤烟」、長塚節の「土」もどうやら同時期の朝日新聞連載でもあり、当時同社に親しい春仙がやはり担当したものと、筆致から判断できるのだが、この二編については残念ながら確言を遠慮しておこう。

昭和一ケタの時代に入ると、挿絵の世界は飛躍的に豪華を極める、例示しておこう。いずれも朝日新聞連載の小説と担当さしえ画家の組み合わせである。豪華な顔ぶれである。画料幾許かは知らないが、大新聞は奮発して、妍を競わせ、春仙の時代のさしえ画家処遇は霞の彼方の語り種になり了せる。

直木三十五「明暗三世相」中村岳陵　夕刊　昭七
邦枝完二　「おせん」　小村雪岱　夕刊　昭八
大仏次郎　「霧笛」　木村荘八　夕刊　昭八
久米正雄　「沈丁花」　堂本印象　朝刊　昭八

いずれも朝日新聞の連載で、夕刊は時代小説、朝刊は現代小説というおのずから分野を分ける不文律が成立し、矢野橋村、石井鶴三、宮本三郎、河野通勢、鴨下晁湖。鈴木朱雀、山川秀峰、佐野繁次郎、川端龍子、中川一政、山村耕花といった諸家の活躍が見られる。製版効果まで計算、技巧を凝らす挿絵を専業とする画家を軽視するつもりはないが、掲記しておこう。

（一八・六・三）

伊豆の歯科医業の祖

堀内永代

一

伊豆の国は、日本列島のほぼ中原に位置し（静岡県東部）、太平洋岸の一つの突起として、地形上異彩を放つ半島である。ここを伊豆半島と呼び、南北の長さが五〇キロメートル、東西の幅が丁度中ほどの天城峠辺りで三〇キロメートル、相模湾と駿河湾の間に舌を突き出したような形をなしている。

今から百万年前頃、南方洋上に突起したラグビーボール型の熱泥のかたまりが本州の真中に激突してできた半島である。

伊豆半島ができた頃は、氷河期と間氷期が繰り返されて、次第に現在の日本列島が形をなした。大陸から北海道へマンモスが渡ってきたのもこの頃である。秀麗な円錐型の日本一の富士山もこの頃から形をなしてきた。

伊豆の地名は「湯出」より転訛したもので、いたるところから温泉が湧出している。

この半島は、全体に山が高くて平地が少なく、低地から巨木の間を通して見え隠れに聳え立つ伊豆連山は、「天にもとどく城」のように見えたことから「天城」と呼ばれるようになったといわれている。また、峻険な海岸線には、海から吹き付ける潮風を頑なに拒み通す断崖絶壁が聳え立ち、打ち寄せる太平洋の荒波によって俗化が遅れた。

伊豆半島は、男性的な景観を持つ東海岸に対して、西海岸は女性的な風景が多い。しかも入り江が多く、台風を避難する漁船や廻漕船のための港が栄えた。

日本地図を見れば誰でも気付くことであるが、この半島は古来より関東・関西の分界地となっており、日本列島太平洋岸の中央部という地の利を得て、文明開化の足音を聞きながら開けていった。

近代の西欧文明は伊豆半島の南端下田港より開かれ、明治維新外交史の第一ページを飾る栄誉を得ている。

この物語の舞台である松崎は、伊豆西海岸の中で第一に商業の盛んな港であり、風景の美しいことでも知られている。海岸はその名の如く、松の林が列になって連なり、松林の蔭に細長く廻船問屋が軒を連ねて殷賑を極めていた。

この小説は、松崎を中心に伊豆一円で歯科を開業し、今は伝説的人物となった「伊豆の歯科医業の祖・諸井建司」の物語である。

二

会津若松藩家老西郷頼母（知行千七百石）は、戊辰戦争に破れて囚われ、一時館林藩（群馬県館林市）に幽閉されたが、掛川藩主（旧館林藩主）太田資美に助けられて松崎に匿われた。明治四年晩秋、四一歳になった頼母は松崎に落着き、慶應四年に起った鳥羽伏見の戦い、戊辰の役、函館五稜郭の戦い、次いで官軍の捕囚、館林藩に幽閉と続いた波乱の人生にようやく終止符をうつことができた。

当時松崎村周辺の道部、江奈、岩科など那賀郡八ヵ村、及び賀茂郡二一ヵ村（領民一万二千八百人、石高七千六百石）は、掛川藩（静岡県掛川市）の領地（飛地）であったことから、頼母は太田資美の好意で、道部村一番地の廻船問屋諸井家に身を寄せることになった。それから村人たちは、この廻船問屋を「会津屋」と呼ぶようになった。

戊辰の役で嗣子有鄰を失った頼母が柔道家西郷四郎を養子にしたのはそれから十五年後のことである。四郎は大東流柔道指南の養父頼母から指導を受け、さらに講道館柔道で技に磨きをかけ、警視庁武術大会で宿敵楊心流の柔術家照島太郎を大技・山嵐で倒し、日本柔道界に勇名を馳せた豪快な人物である。後年、四郎は富田常雄原作の柔道小説『姿三四郎』のモデルにもなった人物で、この小説の主人公諸井建司と深く関わりをもった。

西郷頼母が松崎に匿われた明治初期、掛川藩から松崎に派遣された遠州国小笠郡西郷村（掛川市）の御典医堀内俊斎は、掛川藩江奈陣屋の大目付、代官以下二十数名の藩士と領民の診療に従事していた。

若き医師俊斎は、廻船問屋会津屋に投宿しているうち、生地西郷村と同じ姓の西郷頼母と肝胆相照らす仲となり、頼母の薦めがあって、末弟の建司を、諸井家会津屋の養子にすることにした。この時建司は七歳、蘭方医を目指して、医師である父堀内孝と母ふくの薫陶を受けていた。

諸井家は掛川藩から苗字帯刀を許された家柄であったが、五〇歳の当主清一郎は持病の喘息に加えて腰痛に悩まされ、家業は殆ど妻女のふじに任せていた。

四七歳のふじは、松崎から婆娑羅峠を越えて五里程離

れた下田から一七歳の時に嫁いで三〇年、病身の清一郎をたすけて家業の廻船問屋を支えてきた。ふじは目元の涼やかな賢妻で、四〇歳を過ぎた今日でも、子供を産まなかった身体は何時までも若々しさを保っていた。

諸井夫妻は、ふじの縁者で孤児の佳代を養女とし、建司と夫婦にして諸井家を継がせたいとひそかに話し合っていた。

三

諸井家の養子と決まった建司は、父である蘭方医堀内孝の下で研鑽していたが、十七歳の秋に松崎の会津屋へ養子入りした。

会津屋の当主藤一郎は、建司が養子に入る二年前に六〇歳で死亡した。その後は妻女のふじが一人で廻船問屋を切り盛りしていたが、西洋の文明は僻地の奥伊豆にも少しずつ影響を見せ、蒸気船の発達と共に大手海運業者が進出し、奥伊豆の廻船問屋も次第に客を奪われ昔の勢いを失いつつあった。

翌年三月節句の日、建司は養母ふじに、

「母様、昨今は廻船業も和式帆船から大きくて速い蒸気船に替わりつつあります。これに対抗するには大きな資本もいるし、東京や大阪の資金の豊富な大商人に対抗していくことは容易ではありません。また、商売は利を求めるあまり、取引先に対する思いやりに欠けるところがあります。思いやりを欠くようなことでは、商売が長続きしません。私は廻船業を営むのではなく、もう少し志を大きくもって、新生日本の舵取りのできるような人間になりたいと思っています」

「……」

「まだ、諸井家（会津屋）に来て日が浅いですが、東京の大学に入って政治や経済を学びたいのです。西郷村の父孝は口ぐせのように、カネは使えば無くなるが、学問は一度身に付けば決して身を離れない。学問は使えば使うほど深まると言っていました。わがままを言って申し訳ありませんが、五年間東京で勉強させて下さい。五年後には必ず帰ってきて諸井家のため、伊豆のために働きます」

と熱心に頼んだ。ふじは突然の話に驚き、すぐには返事ができなかった。しばらく顔を伏せて思案していたが、

「建司さん、お前さまにはお前さまの大きな野望があってのことでしょう。将来のことを思えば若いうちに東京に出て修業することもよいかもしれません。まだ私もなんとか会津屋を守っていくことができそうです。お前さまがそうしたいなら東京の大学へ行きなされ。そうして立派な人になって世のお役に立ちなされ」

女ではあるがふじは、永年病身の夫清一郎に替わって大店の会津屋を仕切ってきただけに決断も早かった。

建司は、善は急げとその日のうちに旅立ちの支度を整え、翌日の早朝には養父清一郎の墓前に上京の旨を報告し、併せてつつがなく学業を終えて帰国できるよう加護を祈った。

六歳になった養女佳代は、折角会津屋の同じ屋根の下で建司と生活し、学問を教えてもらえることを期待していたので、子供心にも建司の上京は寂しかった。

翌朝建司は、道部から婆娑羅峠を越えて下田に出て、下田港から東京行きの廻船に乗って東京に向った。三日かかって上京した建司は、会津屋の取引先の伝手を頼り、本郷の根津宮永町に下宿した。この下宿屋は、日本橋の薬種問屋の別邸を改築し、地方から上京する取引先の子弟を預っていた。

根津宮永町の近くには、江戸町民の墓や参勤交代で出府してきた地方武士とその家族の墓がたくさんあり、広大な墓地は、建司の柔道の一人稽古に大いに役立った。

下宿に落着いた建司は、早速大学に出向いて入学願書を提出し、入学試験を無事済ませ、その年の九月後期から東京大学法律学科に通学することになった。

建司は掛川の親元で学んだことが、大学の授業に役立ったと同時に、自身の人間形成にも役立っていた。

翌々年の明治一八年三月、二十歳になった建司は、東京大学に通学するかたわら嘉納治五郎の講道館に入門した。講道館には実兄堀内俊斉が既知を得ていた西郷頼母の嗣子西郷四郎が、嘉納館長の師範代役を務めていた。

同じ歳の建司と四郎は、出自を名乗りあって因縁浅からぬ間柄を知り、奇遇に驚きの声をあげた。四郎はすでに柔道の大技「山嵐」を極めており、豪放磊落な性格と相まって講道館の第一人者としての地位を築いていた。四郎は翌明治一九年一月五段に昇段、同年六月十一日の警視庁武術大会において、宿敵古流柔術楊心流の遣い手照島太郎を大技山嵐で倒し、講道館に西郷四郎ありと勇名を轟かせた。

武術大会には弟子である建司も参加して、四郎の死闘を目撃した。建司は後年、折に触れて四郎の大勝負を人に語った。

明治二一年四月、西郷四郎が東京大学の柔道師範に招かれてからは、建司はさらに柔道の稽古に励み、谷中の広大な墓地のなかで、独り身体を鍛え、四郎が会津で習得した「猫の三寸返り」もひそかに修行した。建司は講道館に入門して四年目には四段となり、四郎から大技「山嵐」を伝授された。山嵐を伝授されたのは、後にも先にも建司一人だけであった。

山嵐の大技は、相手の押してくる力を利用して身体を引きつけて、屈みながら自分の尻を相手の下腹部に密着させ、左脚で相手の左脚を払い上げると同時に、右手は相手の左袖下を取って強く引き、左手は相手の襟を深く

掴んで肘を曲げ、相手のあご下に左腕を入れて引き上げながら投げ飛ばす。この技は右脚を軸として軸脚のバネと尻の跳ね上げ、両手左脚の五つの動作を同時に行い、加えて相手の体重と押す力を利用するため、相手を遠くまで豪快に投げ飛ばすことができる。山嵐は背負投げの変形であるが、左脚で相手の左脚を払い上げる動作が加わるため、背負い投げよりもはるかに大技となり、相手を遠くまで投げ飛ばすことができて、見る者を驚嘆させずにはおかない柔道ならではの技であった。山に吹く嵐のような切れ技、肉体と精神の総合力が一瞬に爆発した成果である。

こうして建司は、昼は大学で法律や政治学を学び、放課後以後は、四郎から柔道の稽古を厳しく受けて大成していった。

四

建司が四郎から山嵐の大技を伝授された二年後の明治二三年七月一日に、大日本帝国議会議員の第一回選挙が行なわれた。建司は青年活動家の一人として、奥伊豆の選挙運動に加わっていた。

そんなある日、松崎の料亭「花善」で選挙運動の会合があった後、伝馬船で那賀川べりの会津屋に帰る途中、納涼船で賑わう屋形船の間を縫うようにして一隻の伝馬船が近寄ってきた。船頭がこれを避ける間もなく建司の乗っている小さな伝馬船に、がつーんと衝突してきた。すかさず船頭は、

「なにしやアがるんだ。大事なお客様が乗っているんだ。気を付けろ……」

と大声で怒鳴りつけた。相手の舟からは、

「よし、舟を寄せろ……」

とドスの利いた声がしたと思う間もなく、白い鳥打帽子を被り、格子柄のアルパカ背広を来た壮士風の男が、建司の舟にとび移ってきた。鼻下にカイゼル髭を生やし、左手にステッキを持っている。仕込み杖であろうか。続いて顔中髭だらけの土方風の頑健な中年男がとび移つり、最後に浴衣を着た相撲取り風の大男が乗り移ってきた。三人の男が飛び乗ったので小さな舟は大きく揺れたが、艫に乗っていた建司は微動だにもしなかった。土方風の男と相撲取りのような男は、カネででも雇われた刺客なのか殺気立っていた。

とっさに建司は左膝を建てて半身に構えた。

「若旦那、逃げてください」

船頭が声を掛ける間もなく、

「この野郎くたばれ……」

土方風の男が匕首(あいくち)を右手に持ち、舟板を蹴って斬りかかって来た。建司は左手で相手の利き腕を、右手で半纏の前襟を掴んで、

「エイ……」

気合もろとも、相手の突進する力を利用して右肩で反動をつけながら左後ろに投げ飛ばした。

「うわァ……」

男は半纏をひらめかして、ズボッと那賀川に叩き込まれてしまった。

「ぬしゃア生意気な、捻り潰してやらァ……」

今度は相撲取り風の大男が野太い唸り声をあげて建司に躍りかかってきた。小さな舟は大きく揺れたが、建司は腰を落とし、自然体に身構えて大男が襲ってくるのを待った。大男は右拳を振り上げて建司の頭めがけて振り下ろした。その刹那、左手で大男の右手首を掴んで引き寄せながら、右手で大男の浴衣の左襟を掴み、腰を相手の下腹部の下に入れて右足で相手の右足を下から強烈に跳ね上げた。両手両足腰の動作が同時に行なわれ、大男の力と体重を利用しての得意技山嵐が決まり、大男は左舷の川面に派手な音と飛沫を上げて飛び込んだ。

投げ終った建司は素早く向きを変え、首謀者と見られる壮士風の男の攻撃を待った。

男は仕込み杖からぎらりと白刃を抜いて切りかかってきた。建司は船底に横たえてあった櫂を素早く右手に掴んで白刃を跳ね除けた。はずみで白刃は空(くう)を飛んで水中に落下した。一瞬男は怯んだが、仕込み杖の鞘を両手に持って力いっぱい突き出した。

狭い舟の中とて動きを制限されてがらも、さっと杖の突きをかわし、両手で相手の袖口を掴んで右に引き、左足を相手の膝の後ろに掛けて男を吊り上げ気味に跳ね上げた。見事に山嵐と大外車の併せ技が決まった。

「うわァ……」

壮士風の男はアルパカの白い上着をひらめかせて川面に叩き込まれた。暴漢たちが乗ってきた舟は、恐れをなしたか川に落ちた仲間をそのままに、暗闇に消えてしまった。

建司を送ってきた船頭は、

「若旦那、危なかったですねぇ……お怪我はございませんでしたか……それにしても若旦那は強うございますねぇ……さすが伊豆の三四郎と言われるだけあって本当に強うございますねぇ」

建司の見事な戦い振りに、船頭は驚嘆した。

「親方、驚かせてすまなかった。でも奥伊豆の田舎でこんなに政争が激しくなっては油断できません」

建司は気を引き締めた。やがて大きな会津屋の店が夜霧の中に見えてきた。舟から見上げる会津屋は、なまこ壁の堅牢な母屋が城郭のようであった。

つづく

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生

松下魏三

四、高山樗牛の名言に魅せられて

四郎が小学校の五年生になった五月、学校の遠足で静岡市の久能山に登り、帰りは東側に出て清水港の西南にある竜華寺に参詣した。この寺には高山樗牛（ちょぎゅう）の墓があり、大きな蘇鉄の古木があることで有名であった。

樗牛は明治初年に生れ、三十二歳で夭折した思想家であり評論家であった。学生時代に書いたといわれる小説「滝口入道」は明治の文壇に名を残した処女作で当時の学生には相当強い感化を与えたといわれている。不幸にして胸を病み、竜華寺で静養し、この寺が大変気に入り、自分の墓をこの寺に作るように遺言したといわれている。この墓は石が横に置かれており、その上に「吾人は須（すべ）らく現代を超越せざるべからず」と刻まれている。

この遠足の時引率された先生から教えられた樗牛の墓であったが、小学生の四郎には碑文の意味を理解することは困難であった。しかし子供心に「現代を超越する」という言葉は何となく難しい意味をもっているように思ったが、何かしらとても深い意味があるような感じがして終生忘れることができなかった。その後上京して中学校の上級生になった頃小説「滝口入道」を読んで強い感銘を受けた。この小説は美文調で近代恋愛小説の先駆といわれるもので、後に東北帝国大学（現東北大学）理学部化学科に進学した時、樗牛が仙台の旧制第二高等学校の教師であったことを思い出し、樗牛との不思議な巡り合いに感心した。

四郎は東北帝大（現東北大学）を卒業後十年近く仙台に住んでいたので、休日等を利用して友人と市内を散策した。その頃新緑の青葉城や広瀬川の流れは特に懐かしい光景であった。また市の北の方に一本の松があり、東北帝大の学生たちは“樗牛の瞑想の松”と呼んでいた。これは短い期間であったが、樗牛が旧制第二高等学校の教師をしていたので、当時の学生が創作したものではないかとも言われている。

後に大学教授として生化学界の世界的なリーダーとなった赤堀四郎先生はいかにも科学者らしく「〃現代を超越せざるべからず〃という意味は人間の生きがいは物欲を離れて悠久の真理を探究することであると解釈し、自分に対する励ましの言葉であると受け止めている。」と語っている。

五、郷土の偉人に啓発されて

赤堀家では家族揃って団欒するとき、常に話題の中心になるのは新しい科学の話と郷土の偉人の生い立ちなどであった。父秀雄の時代には近代日本の文化の発展に先駆けて活躍したスケールの大きい人物が特に南遠地域から傑出していたことについて、四郎は何時も感心して聞き入っていた。

まず最初に話題になるのは同郷の土方（ひじかた）村（現掛川市土方）出身で中国人日本留学生の教育に生涯を捧げ、周恩来や魯迅を教えた松本亀次郎と日本の女子医学教育の先駆者として東京女子医科大学を創立した吉岡彌生の生い立ちと活躍であった。そして土方村から十五キロメートルほど北にある倉眞（くらみ）村（現掛川市倉眞）からは大正五年に文部大臣に就任し、昭和二年に辞任するまで四回文部大臣を歴任した岡田良平とその弟であり、宮内大臣と枢密院議長をつとめた一木喜徳郎の兄弟の少年時代や業績であった。

また遠州灘海岸沿いで四郎の家から四キロメートルほど東の池新田村（現御前崎市池新田）からは旧制第一高等学校（現東京大学）の学生時代に全寮の委員長として記念祭（現在の駒場祭）を発案、実行し、後に京城帝国大学（現ソウル大学）総長と李王職長官を歴任し、法学博士で国際法の権威であった篠田治策とその弟で第三師団の参謀長に就任し、後に陸軍中将となり退役後は軍人会館の理事長として活躍した篠田治助の兄弟の立志伝であった。この篠田兄弟の家から約三キロメートル東にある堀野新田村（現牧之原市堀野新田）には篠田兄弟の従兄弟に当たる鈴木梅太郎博士がいた。鈴木梅太郎先生は日本の近代生化学、農芸化学の元祖ともいわれた人で、米糠に含まれるオリザニンの発見者であり、生命を維持するために不可欠のビタミンB1の発見者として日本はもとより世界の学会に多大な業績を残し、後に文化勲章を受賞された郷土の誇る偉人である。

そして隣の朝比奈野村（現御前崎市朝比奈）には日本人女性でわが国最初の国際的なプリマドンナとして活躍した三浦環がいた。彼女は東京で生れたが、父は朝比奈村の酒造家であったが、上京して法律家となった柴田猛甫であり、母登波は河城村（現菊川市小沢）の出身であった。

このように東南遠州からは日本を代表する逸材が数多く輩出決し、近代文化の発展に寄与したばかりでなく国際的な舞台でも素晴しい活躍をしている。これらの人々は明治中葉に遠州の寒村に生れ育ったが、志を高くもって働きながら私塾で学び、少年同志が互いに励まし合い助け合って勉学に勤しんだのである。

当時は近代国家の建設に向って国家主義が高まっていた時代であったにもかかわらず、政治や軍事の中心となる権力者はほとんどいないのである。特に掛川市倉真出身の岡田、一木兄弟は文部大臣や枢密院議長という栄職についたが、学者肌の官僚であった。また篠田兄弟と鈴木梅太郎の従兄弟はわが国を代表する学者であり、世界的にその名を知られている人物である。そのほかの人々は教育、科学、芸術などの発展のために尽力した郷土の誇る逸材であり、四郎少年の夢と希望を一層大きく啓発したのである。

（つづく）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

空風（からっかぜ）（三）

太田精一

（九）

吉雄が帰ってきた。三回目の招集を受け、新潟県の三条市で、本土防衛の準備をしていたのである。

吉雄の復員後、木本一家は、白羽の定吉の家の一室で二週間ほど暮らしていた。だが、働き手の吉雄が加わった以上、いつまでも間借りしているわけにはいかない。

白羽の家では、吉雄の家族の他にもう一家族、菅原に嫁いだみずえと二人の子供が同居していた。木本家と同様、六月十八日の空襲で罹災したのである。

いたずら盛りの男の子ばかりが五人。家の中はまるで蜂の巣を突いたような騒々しさであった。会話は、筒抜けで、わずかな言葉の行き違いが感情のもつれとなることも少なくなかった。

九月の初め、吉雄は、妻のさきと子供たちを連れ白羽の家を出た。大工町の焼跡に家を建てることにしたのだ。家の建つ間、空襲を受けた時に避難した杉本家の横穴（防空壕）が仮住いとなった。

横穴の中は暗く、じめじめとして蒸し暑い。ところどころ水溜りができている。水溜りに横木を渡し、その上に板を張って、ゴザを敷き、寝床を確保した。苔の生えた天井の土から滲み出た水が、水滴となってぽたり、ぽたりと落ちて来る。

伸一は、体中疥癬（かいせん）ができ、夜になると痒がった。頭には大きな出来物が三つ。それが化膿して、冬になるまで治らなかった。化膿の跡が深く頭骨にまで達し、貯水池形の禿となって残った。

厳次郎は、飾職人の腕を生かし、中田島海岸の砂防林の中で、仲間の藤田藤作とともに鋳掛け屋の看板を出した。鍋、釜の修理や焼夷弾の薬莢を加工し、フライパンに作り替え売っていた。白羽の大庭家では、七十歳にもなっている厳次郎に横穴暮らしをさせるのは気の毒であると思ったのであろう。

「おじいちゃんは、家が建つまでもう少しここにいたらいい。近所では、鍋や釜の修理をしてもらいたい家もたんとあるから、いてくれたら助かるずら」

と言って引き止めた。

十一月になって、やっと二間・三間のバラックが建った。廃材を使い、畳の代わりに太蒲ゴザを敷いた粗末な家であったが、横穴に比べれば、はるかに快適である。何よりも電気があるのが有難かった。

厳次郎も新しい家に移った。再び大工町での家族五人の暮らしが始まったのである。

伸一は、大工町から広沢小学校に通うことになった。元城小学校が戦災で焼失してしまったため、生徒はすべて広沢小学校に移されることになったのだ。

学校までは徒歩で四十分。仲一は、普済寺と西来院の間を抜ける寺坂を通学路に選んだ。帰りに寺の境内の森の中で、道草をして遊びたいからである。

普済寺は、順徳天皇の第三皇子寒厳義尹禅師によって応永年間（一三九四～一四二八）に開かれたと伝えられている。最初は、敷智郡寺島村（現市内寺島町）に草庵が構えられ、随録寺と言った。後に、広沢に移され、広沢山普済寺となった。

信玄と家康の三方原合戦の時に、何者かに放火され焼失し、天正十年（一五八〇）に再建された。明治になって再び焼失したが、本堂は再建された。その本堂も空襲で跡形もなくなり、森だけが残っていた。

一方、西来院は、正長元年（一四二八）開創された曹洞宗の寺で、開山は、日窓義連和尚である。

徳川家康の正室築山御前の廟堂があったが、戦災によって焼失し、墓碑が風雨に晒されていた。廟堂は、その後、昭和五十五年に再建されている。

築山御前は、今川氏の一族関口氏の娘で、家康と結婚。長男信康を産んだ。だが、武田方に寝返ったと嫌疑をかけられ、家康は、築山御前を処断せざるを得なくなった。築山殿は、佐鳴湖の小藪で殺害され、この西来院に葬られたのである。

西来院は、境内が広く、森が深い。野鳥が囀り、いつも森閑としていた。椎の木が密生していて、十月末には実がなる。

「皆んな石を投げて椎の実を落そう。一列に並んで石をぶつけ、ぼくがよしと言ったら、椎の実を拾いに行くんだぜ。皆んなバラバラに石をぶつけたら危いからな」

伸一は、仲間の子供たちを一列に並ばせ、実が落ちたところで、拾うようにさせた。いつも空腹を抱えていた子どもたちにとって椎の実は貴重な食料である。〝よし〟という合図とともに一斉に飛び出し、先を争い用意した袋に実を入れた。その袋から一粒一粒取り出し、殻を歯で割って生のまま食べるのである。

生徒の中に、父親が進駐軍関係の仕事をしている子供

がいた。ときどきチューインガムやチョコレートを持って来る。

「チューインガムを皆んなに一枚ずつくれよ」

伸一は、その子にチューインガムを分配することを強要した。目立たない存在であった伸一が、終戦の苦境を乗り越えることによって逞しくなっていた。いつの間にか同学年の生徒たちの餓鬼大将となっていたのである。

（十）

昭和二十年から二十一年にかけての冬は、ひときわ寒さが厳しかった。

教室のガラス窓は、あちこち割れていて紙が貼ってある。その紙もところどころ破れ、隙間から空風が吹き込んで来る。ストーブはない。手が、かじかんで鉛筆も持てないほどである。

担任の瀬戸先生が入室した。女の先生である。

「起立、礼、着席」

級長が号令をかける。

「皆さん、授業を始める前にまず手をこすりましょう。時間は三分間。席に着いたままでいいです」

冬の授業は、まずこの手をこすることから始まる。

教科書を開くと、ところどころ墨が塗ってある。その塗ってある部分を飛ばすと意味が分からない。修身、国史、地理の授業が停止された。伸一には、何故国史や地理の授業が停止されたのか分からなかった。

半年ほど前まで、もてはやされた兵隊さんが〝傷痍軍人〟となって街頭に立っている。その姿は伸一のような子どもにも哀れを誘った。戦争の傷跡は、いたる処に散乱していた。

衛生状態は、きわめて悪い。露天の食品には蠅がたかり、家の中では蚤やシラミに悩まされた。

「痒いよ。痒いよ」

強司は、毎晩目を覚し、体を掻きむしった。

母親のさきは、眠い目をこすりながら、寝間着を脱がせ、縫い目に隠れているシラミを指の爪で潰す。

伸一も目を覚まし、肌着を脱ぎ、薄暗い電燈の下で、ノミやシラミを取った。時々市役所の衛生員が回ってきて体中にDDTをかけて行く。

伸一も強司も頭からDDTをかけられ、眉毛まで真白になった。副作用の強い薬剤であるのに、ずいぶん乱暴なことをしたものである。

昭和二十一年の七月、恒三が生まれた。食糧難の時代でありながら、病気らしい病気はしたことがない。

その年の夏休みには、爆弾によって穴の開いた水溜りで子供たちは泳いだ。五社神社の裏手の空地に落ちた爆弾の跡は、子供たちにとっては恰好の遊び場である。

粘土質の土の上に落ちた爆弾の穴には、雨水が溜まりやすく、円形のプールを形造っている。伸一は、そこで水遊びをしているうちに泳ぎを覚えた。

伸一はよく恒三の守りをさせられた。それが遊び盛りの伸一にとっては、苦痛である。

木の根に紐を巻きつけ、その先に恒三を縛り付けてビー玉遊びに興じたり、背負って草野球をすることもあった。子供たちは、高価な革のグローブは買えなかったので、皆んな布製のグローブを使っていた。

「伸ちゃん。赤ん坊がいるからすべり込みはできないね。危いから見ているだけにしたら」

「うん。だけど皆んなと一緒にやりたいなあ。赤ん坊を背負っても走れるよ」

球を打って走る。恒三の頭が伸一の背中で揺れる。恒三は大きな声で泣く。

「やっぱり無理かな。背中から下ろそう。打つ時と守りにつく時だけ誰れか恒三を見ていてくれないかなあ」

伸一は、近所の子どもたちに、子守りを手伝って貰った。そのお蔭で、草野球をして遊ぶこともできた。

魚釣りも伸一は大好きであった。しゃぐじ川で魚釣りの面白さを覚えた彼は、大工町に帰って来ても近くの池や川に釣りに行った。

伊場のチンチン踏切りの脇の蓮田は、その一つであった。踏切りは無人で、汽車が通る時、チンチンチンと警報が鳴る。そのため地元では、チンチン踏切と呼んでいた。

蓮田は、東海道線浜松駅の二キロほど西の線路沿いに広がっていた。その蓮田で鮒やどじょうが釣れる。

伸一は、強司を連れて、その蓮田によく釣に行った。

木本家の玄関の前に井戸がある。井戸端は、いつも湿っていて、周りの土の中には、ミミズがいた。そのミミズを掘って餌にし、魚を釣る。

「強司、もっとたくさんミミズを掘れ」

深く掘らないとミミズはなかなか見付からない。ミミズ堀りは強司の役目だ。その間に伸一は、釣具の準備をするのである。

二人は手を繋ぎ、踏切の近くの蓮田に出た。時々汽車が煙を吐き、警笛を鳴らしながら通り過ぎる。

「もう帰ろうよ」

幼い強司は、一時間で飽きてしまう。釣竿を蓮田の水面にぴしゃぴしゃと叩き突けている。

「もう少こしだ。あと一時間くらい。釣った鮒を晩ご飯のおかずにするんだから」

伸一は、粘り強く浮子を見ている。

「パシャ！」

強司が蓮田の中に落ちた。足をとられてなかなか上って来ることができない。

「今行くからじっとしていろ」

伸一は、竿を放り投げて、強司の手を取り引き上げた。

二人は泥だらけになった。真黒に日焼けした顔についた泥が渇いて、ところどころ白くなっている。

お互いに顔を見合わせ、指で突突き合って笑った。

陽は西に傾き、夕闇が迫っている。二人は釣った魚の入ったバケツを持って、竿を担ぎ、家路についた。

強司の竿には、夕日を浴びた塩辛とんぼが止まっていた。

（十一）

終戦後三年が経ち、昭和二十三年の夏を迎えた。焼跡にもバラックが建ち、街らしくなって来た。

二十二年頃までは、配給品は乏しく、多くの品物は闇市でしか手に入れることはできなかった。それでもこの頃になると、広小路、鍛冶町、有楽街、肴町、田町、伝馬町などの商店街には、少こしずつ衣料や食料品が店頭に並ぶようになった。

元城小学校の新校舎が建設され、四月に開校となった。伸一は、元城学区であったため、この時から元城小学校に通うことになったのである。

この年の十月、木本家に初めて女の子が誕生した。父親の吉雄は、美しい子に育つようにと願って美子と名付けた。

「木本さん。自転車の配給切符がありますが必要ですか。前納金を払えば、優先的に切符が手に入りますから手配して差し上げましょう」

浜松市役所に勤め、栄町に住んでいる加藤勉が訪ねて来て言った。二十一才になる青年である。

厳次郎は、ややためらった。だが、当時自転車は、簡単に手に入らない。話が旨すぎると感じたが、思い切って金を払った。

ところが、一ヶ月経っても切符を持って来る様子はない。騙されたと気付いたのは、三ヶ月も経ってからのことである。

「今日こそあいつの家に行って話をつけて来る。年寄を騙すなんて飛んでもない野郎だ。日曜日だから家にいるに違いない」

厳次郎は、怒りを露にして家を飛び出し、勉の家の戸を激しく叩いた。朝八時頃である。勉は、まだ寝ていた。

「朝っぱらから何事だね。騒々しいねえ。今開けます」

勉の母親が出て来て戸を開けた

「朝早くからごめんなさいよ。今日はどうしても預けた自転車の金を返して貰いに来た。息子さんはいるだろう。あんたは聞いているかどうか知らないが、お宅の息子が自転車を配給してくれると言うので前納金を渡した。だが、自転車は、一向に届かないし、金も返して貰えない。一体あの金はどうしたんだ」

「お前この人からお金を受け取ったのかい。そのお金をどうしたのさ。まさか猫ばばしたんじゃあるまいね」

母親は、厳しい口調で勉を詰問した。しばらく勉は、だまって俯いていたが、やがて顔を上げ、開き直ったような表情で厳次郎を見た。

「あの金は、始めから市役所に納めるつもりはなかった。大体配給切符を自由にできるほどの力はない。そんなことも知らず金を渡す爺さんも爺さんだ。ちょっと入用の金があって借用したが、きっと返すから待って欲しい」

「いつになったら返すのだ。俺には言い逃れとしか思えない。今すぐ返さなければ、警察に行く。お前の口車に乗せられたのは、俺も甘かった。始めから騙そうとしていたならその根性が憎い。お前のような若造に騙されて引っ込んだとあっては、この背中の彫物が泣くよ」

厳次郎は、双肌を脱いで昇り竜と下り竜が目を剥いて睨合っている背中の入墨を見せた。

勉は、その彫物を見て縮み上がった。竜の目が爛々と輝き、今にも勉に襲いかかって来るのではないかと思えるほどである。

「分かりました。今、ここに手持はありませんが、明日には何んとか工面して返します」

勉と母親の目を見た厳次郎は、その場の言い逃れではないと確信した。翌日、勉は金を持って木本の家に来た。

さきが嫁に来てしばらくの間、厳次郎は夏でもめったに裸になることはなかった。ましてさきの前では、一度も裸を見せなかった。

夏の暑い日のことである。

さきは、何の気なしに厳次郎の部屋の障子を開けた。彼女は一瞬息を飲んだ。厳次郎が背中を向け、手拭で汗を拭いている。首の付け根から尻にかけて、真青な竜が二匹、今にも掴みかからんばかりに睨合っている。

さきは、驚いて障子を閉め、その場に蹲った。震えが止まらない。

「さきか。とうとう裸を見られてしまったな」

「おじいちゃんが裸になるのを嫌がったのは、このことだったのですね」

胸の動悸を押さえながら、さきは言った。

「そうだ。息子の嫁のお前に見られたくなかった。身体に彫り物を入れていることで、俺がやくざ者のように思われるのが嫌だったのだ。彫物のことは吉雄から何も聞いていないのだな」

「はい。何も聞いていません。おばあちゃんも何も言ってくれませんでした」

さきは、木本の家が急に恐ろしく感じられ、実家に帰ろうと思った。だが、伸一は、長男で一緒に連れて木本家を出ることはできない。戦前の家族制度のもとでは、離婚する場合、跡取り息子である長男は、婚家に残すのが通例なのだ。

さきの気持は揺れていた。

（続く）

古い物・遠い夢

第十一章　茶道具三昧

（六）香　合

忠内正之

香合は主要な茶道具の一つである。今回は私所蔵の二点を紹介したい。

香合を考える場合、関連する香、香炉を併せて見なければならない。

「香」焚くと芳香を発する香料である。日本では産出せず、古代より南方から到来した貴重なもの。

「香合」香を入れる蓋つきの容器のこと。木地・漆器・螺鈿・陶磁器などがある。

「香炉」香をたく器。金属・陶磁器、玉などで作る。用法と形状によって多種類となる。

香炉は香と共にその歴史は古く、仏教の伝来に従って儀式としての焚香の礼が発生し、香炉は必須の道具となった。仏前を象る床飾りで、三具足、五具足の一つとして欠かすことが出来ない。

中世以降の茶道では、香炉は必要な道具でなくなった。作品の完成度、芸術性の高い物もあるが（国宝・重文級も数多くある）、脇役となるので詳しくは省略する。

一、「香」について

日本人は古代、はるか南の国々から到来した香料に出会い、その香りに魅了されてきた。不思議な香りをかもし出す多様な素材を知り日常生活の中に精神的な豊かさを育んできた。

香という不可思議なものが、その原料を生産することが出来ない日本で、洗練された教養文化として独自の開花をなし得たのである。

◎　日本の香料の起源

日本における香料の起源はいつ頃であろうか。『日本書紀』によると、五九五年（推古天皇三年）の四月「沈水、淡路島に漂着」したという。

沈水とは、沈香と呼ばれ日本人が特に好む木質の香りの中でも最高位の香木。

ひと抱えほどもあるこの香木が島に流れついた時、島人たちは、ただの流木と思い、かまどに薪と一緒に投げこんでしまった。ところが、大変かぐわしい香りのする煙がたちのぼった。驚いた人々はこの木片を朝廷に献上した。

その木片を見たのが聖徳太子で、博識な彼は、ただちにこの木片が沈水だと理解したという。佛教の普及につとめた聖徳太子が沈香を知っていたのは不思議ではない。

神道では普通香は用いない。奈良朝は、政治の中心を佛教が占めたので、天皇自らが焚香を行なう等、香の使用が、普及化していった。

仏への祈願、報告の際に焚かれるのを供香といい、その場所をきよめ、穢れをとり、清浄を保つためを空香といって、儀式に欠かせないものとなった。

◎　「空薫物」の発生

仏教と無関係に当時の上流社会一般で香を楽しむ様になったのは、奈良時代の後半から平安時代にかけてである。趣味として自由に香りを楽しむ香を空薫物といった。

「源氏物語」にはこの空薫物の香りについての記述が非常に多い。香をたきしめた源氏の君の着物の袖からにおいたつかぐわしい香りが周囲の人を楽しませている様子が書かれている。

ところで、空薫物の薫物とは香木自体をたくのではなく、各種の香料を練りあわせたものを指している。

この薫物の調合を日本に伝えたといわれるのは、佛教の戒律を教えるため、苦難を超えて来日した、あの有名な唐の鑑眞和上であったと言われる。

◎　香道は室町時代に成立した。

香木を焚いて、その香りを鑑賞することを香道では聞香という。（香道では香りを嗅ぐとはいわず聞くという）。これが一定のルールのもとに行われるようになったのは室町時代である。

香道は東山文化のなかで、茶道や、生花、能などの諸芸がこの戦乱の世に花が開く様に成立を見たのである。

香の分野で活躍したのが、三條西実隆と志野宗信である。

御家流香道の祖とされる実隆は、書や古典理解の第一人者であり、宮中の御香所与も担当したといわれる学者であった。

また実隆に香を学び、今日の志野流香道の祖といわれるのが志野宗信である。

両者が活躍するための強力なバックは足利義政であった。

宗信は義政の命を受けて前世紀から残された膨大な沈香のコレクションを吟味し、今日に伝わる「六十一種名香」を選定した。さらに多種多様な沈香の鑑定を進めるなかで「六国五味」という分類の基準を定め香道の発展に寄与した。

◎　「蘭奢待」

日本にある沈香のなかで、もっとも有名なのは、奈良・東大寺正倉院に伝わる〝蘭奢待〟である。

聖武天皇の遺品を収蔵するために建てられたこの建物には、奈良時代の文化を知る重要な資料が多く収納されている。日本に伝えられた香の資料の宝庫でもあり、仏教とともに伝わった香木、香炉、香をおさめておく香嚢などの目録や実物が多数保存されているという。

蘭奢待という銘をもつこの香木は極めて貴重なもので、歴代の天皇や将軍たちが、手柄のあった者に切りとって与えたため目減りしたという。

この名香をもらった人のなかには、足利義政、織田信長、そして明治天皇もいた。

室町時代から桃山、江戸時代に至って、文化と町人経済の発展によって香の効用も多元化して来た。将軍から大名、武士、宗教家、町人に至るまで楽しむ様になったのである。

香は形状や製法によって、香木、線香、練香、印香、塗香、抹香、焼香、匂い香に大きく分けられる。夫々用途に従って活用された。

香木とは沈香と白檀を指す。これらを小さく割ったり削ったりして、炭火などで温めて香らせる。茶席では風炉の時期に用いられる。（風炉とは平たく言えば、コンロのことである）。

練香は各種の香木や香料を粉末状に刻み、蜂蜜や梅肉などで練り合せた丸薬状の香で、茶席では炉の季節に用いられる。（炉とは囲炉裏に同じ）。

◎　茶道の香

茶の湯の席では炭手前のなかで香を焚くしきたりがある。

炭手前とは、茶をたてる前に湯を沸かす炉や風炉に炭をつぐ所作である。

茶道で香が焚かれるのは、心身を清め、室内の空気を浄化するためと、炭の臭気を消すためとされる。

茶の湯も香も東山文化で同時に開花した。そのころは禅宗が武士を中心に広まった。茶も禅宗が武士を中心に広めたのである。茶は禅宗のひとつ臨済宗の開祖「栄西」が宋からもたらして普及させ、村田珠光によって茶道として成立した。

香も仏教とともにわが国に伝わり、当初は仏への供養として焚かれていたのであるから、禅を介して茶の湯と香は深い繋がりがあるのである。

二、茶道具としての香合

◎　香合の歴史

香を焚く香炉は仏前に飾る三具足の一つとして花形であったのに対し、香の入物である香合は陰の道具であった。既に炭手前が行われたとされる室町末期にあっても目立つ存在ではなかった。香木を保存する容器は、伽羅箱といわれるもので、これがそのまま茶室の中に運び込まれ、香合として取扱われたことが、古い茶会記に希にのっている程度である。それも殊に小型のものに限られた様である。恐らくこれが塗香合の原型であろう。

室町時代末期から桃山時代にかけての茶会記録によれば、文禄二年（一五九三年）正月十九日に「炭斗　瓢箪　堆朱の香合彫物あり　炭の上に置きて」という記載がみられる。これはまぎれもなく香合が、現代の形で炭道具として扱われていることを示す最初の記録である。

更に四年後の慶長二年正月二十四日には、秀吉が催した茶会の様子が詳細に記されているそのなかに「勝手より炭斗を持ち出され、炭をついだのち、炉の中をつくづく眺めながら〃巧者〃と自賛した」場面が描写されている。

時の権力者、太閤秀吉までもが、炭手前をおこない、得意満面になっている様子を考えても、炭手前を〃見せる〃いう要素が徐々に濃くなって来たことがよく窺える。

この記録の後には、炭斗に火箸・羽箒に加えて香合が通例として現われて来ることとなり、種類も蒔絵、貝、今焼、備前、びいどろの香箱、瀬戸香合、今焼白、青貝香入、染付四方香入、ぐり香合などと材質や作行についても、より明確に書き留められるようになり、使用が増している。

このように考えていくと、現代の形式に近い炭手前が略、確立したのは、文禄から慶長のはじめといってよいのであろう。そしてその時点で、それまでの香道具の一

具であった香合も炭道具に組み込まれ、表道具の一つとなりより一層のの関心をもって茶事の流れのなかで取合わされ、鑑賞されるに至ったのであろう。

◎　香合の鑑賞

茶の湯の席で、香合が真価を発揮するのは、炭手前においてであることは既に述べた。香合がいちばん席中の注目を集め、また鑑賞される機会である。

炭手前は比較的動作が少ない。亭主は炭手前の際、香合を持出して、手順に従って炭をつぎ終わり、香を炉中に焚くや香合を残して置き下がる。ここで香合の拝見という段取りとなる。

正客から順に従って連客一同が拝見を終り、拝見の感想を語りつつ正客の手許にかえして、各人が品定めをし、印象を語るのである。稍あって亭主が席中に入り、正客の質問に答える。品名、由緒、伝来から心入まで語る亭主、ここで主として客との対話は、連客を佳境に誘うのである。茶の面白味の一つは、香合を中心とし、客に〃火相と湯合〃を知らす手前にあるといわれる所以はそこにある。

「註」

火相とは、加減の程合いを計って炭をつぐこと。湯合とは、火のおこりにより湯のたぎりを計ること。

◎　漆香合と陶磁器の香合

香には前に述べた通り香木と練香の二種がある。香木は漆器の香合に入れ、風炉の際に用い、練香は陶磁器の香合を使って、炉の際に使用することが約束となっている。

さかのぼって、紹鷗や利休の初期にはすべて風炉の茶であった。また香炉を使って香を焚くのを通例とした。自然、塗物香合を用いたのである。ところが炉が切られるようになり湿し灰を灰器に盛って使うようになって来ると、ここで練香を用いるようになったのである。練香を塗物の香合に入れては、香合を壊す恐れもある。そこで焼物の陶磁器を香合にとり入れるようになったのである。

炉の方が寒い時期の茶にふさわしく、また炭手前にも意義をもたせ、侘びの風情を一段と味わい深くするものと思われ、侘び茶の趣向が強調されるに従って陶磁器の香合がさかんに求められるようになった。

「註」

湿し灰とは、灰のあくを抜いて丁字などで染めて、半乾きで篩にかけたもの。炉中の美しさと火勢を整える。

桃山時代から江戸初期にかけ茶道の形式は完成され、時代と共に茶道文化の発展は今日の盛況に至っている。

この間香合も重要な茶道具の一つとなり、需要が盛んとなった。殊に炉の普及によって陶磁器の香合が盛んに求められるようになる。

だが当時の日本では陶磁器の製造技術は未熟であった。従って直ちに日本産(和物)に求めることは不可能なので、当然のことながら既に中国から渡来したもの、或いは中国にあるものに関心が向けられ、更に主として中国に発注して輸入するに至るのである。また後には国内各地の窯において和物香合造りを始めさせるのである。

一方漆の香合の歴史は古く、中国より舶来されて来ており、化粧道具、薬品入れ、貴重品入れ等の小箱が見立てとして転用されて来た。漆香合についても後には、国の内外に新規発注したのである。当初は転用見立てからスタートし、小型で愛らしいものが珍重され、それをもとに新規製作がなされた。

香合の種別大要

唐物
- 漆器　堆朱・青貝・存星　その他
- 陶磁器　青磁・染付・交趾・宋胡録
- 祥瑞・呉須・御本　その他

和物
- 漆器　蒔絵・鎌倉彫・根来　その他
- 陶磁器　楽・黄瀬戸・唐津・志野・織部・伊賀・信楽・仁清・乾山　その他

この様に多種類、多量の香合が現われ茶道人口に膾炙することとなった。

形物香合番付

大名たちの収集茶器のなかで、香合は相当高く重要視されて来た。また一般の茶人たちの香合への関心度が高まり、相撲の番付に似せて形物香合の番付まで生れた。(形物香合とは型で作った焼物香合)

この「形物香合相撲番付」というのは、安政二年(一八五五年)に全国の茶道具商と、当時の茶道具の目利きによって作られた名物香合の格付表である。

番付の明細は省略する

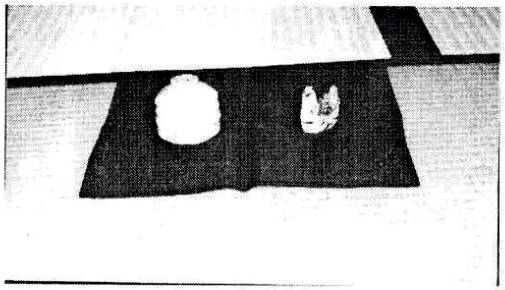
三、香合二点
—都鳥と藁つづみ—

いよいよ自分所蔵の香合を披露する順番が来た。自慢

出来る程の名品ではないが、愛着する二点を紹介したい。いずれも焼物香合である。(残念ながら適当な漆香合は未だ入手出来ていないので、今回は容赦願います)

写真の右手が「古染付都鳥香合」左手が野々村仁清作「藁つづみ香合」である。

◎「古染付　都鳥香合」(写真右)



(右)古染付都鳥香合
(左)仁清作藁つづみ香合

平安初期の歌人、在原業平(八二五—八八〇)は貴族の出で美男の誉れ高い才人であった。歌人としても秀れており、ロマンスと共に数多くの名歌を遺している。

旅の途次隅田川のほとりで詠んだ歌「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」から取って、誰が名付けてか都鳥香合という。

古染付とは中国明末期の天啓、崇禎年間(一六二一—一六四四)に景徳鎮民窯で焼かれた、どちらかと言えば粗製の染付磁器である。虫喰いと称する口縁部の釉剝を特徴とし、かえってこれを日本人が好んで中国に注文した。現在作品は伝世品として日本にかなり残っている。水指・香合・鉢・向付等の茶道具は茶人に愛されて来た。これらの注文は他の舶来品の香合同様に、近世の茶道を完成させたと言われる小堀遠州等によって実現したものと考えられる。

この都鳥香合は頭部(とさか)のところに釉剝(虫喰い)があり雅味を添えている。小振りで愛らしく掌にのせると握り締めたくなる程である。都鳥は千鳥の一種で、冬鳥とも言う。炉の磁器に出番がありその都度、客人の注目を浴びている。

平成五年妻の還暦茶会の目玉として購入した。バブル後で下がったと言ってもかなり高価だったと思うが、何となく買ってしまった。すぐ気に入ったのと、ニーズが強くあったためだが、美術商の作戦にはまった。

美術商はその時もう一つの香合を見せた。それは香合番付一位の辻堂香合であった。辻堂香合は室町時代以前

の舶来品で、現在日本に五つあるかどうかの名品中の名品で到底私が所有できる品ではない。値段も一、二〇〇万ということだった。余談だが今なら倍額出しても手に入れる事は困難だという。

辻堂香合の余勢にあおられて思わず値切らずに都鳥香合を買ってしまったのが本音である。辻堂香合の十分の一程度であったと記憶している。こんなに楽しませてくれているのだがら決して後悔はしない。因みに最近辻堂香合も都鳥香合も良く出来たコピーが稽古道具として一、二万円で茶道具店で売られている。見るたび、「この都鳥の本歌を所有している」とのさゝやかなプライドをもって自己満足しているのである。

なお、都鳥香合は前述の番付の前頭三段目十六位に名を連ねており大関（首位）の辻堂に全く及ばない。

◎　仁清作「藁つづみ香合」（写真左）

骨董趣味から茶道具三昧と年々道楽と重ねて来たが遂に年金生活となり、金詰まりになった。

また一通りは茶道具も揃ったのでここ暫らくは新規購入を停めて来た。専ら美術館巡りとか美術展のウインド・ショップ、カルチャー・センターでの勉強等眼と耳で楽しむ方向で自重して来た。

しかし潜在する意欲は消えるものではない。欲しいものは欲しいのである。ある日旧知の美術商から秋の茶会にふさわしい香合が割安の値段であるという連絡が入った。かねて秋の茶会に使うピッタリとした香合を欲しいと思っていたところである。美術商によれば第一に品物の出来が良い、仁清の在銘がある。第二に出所は新潟方面の素封家からで、桃山時代の屏風等と一緒に抱き合せで求めた由、屏風他でかなり利益があるので香合はこなれた値段で譲れるという。こなれた値段とは業界用語で「割安」とか「買易い」という程の意味である。

一目見て気に入った。それは籾を収穫したあとの稲藁を束ねてつづみの様な形に積んで保存するが、その格好をちんまりと写した香合であった。

つづみ状の藁の山形が点在する初冬の田園風景は、私にとって懐かしい故郷の風物詩であった。つづみを背にした陽だまりで友だちと語らったり、果物等を喰べた楽しい情景が思い浮かぶ一品である。

仁清作ということで約束通り高台に「仁清」の刻印がある。土の色、白釉、ピリリとした造形等仁清に間違いなさそうである。何といっても気品がある。遠州流宗家の極めもある。

少し迷ったが、無理して買うことにした。色々な道楽で金を使う人がいる。こちらも道楽趣味で、引け目の感じは同じたが、物は残る道楽だからと自己辨護して踏み切った。

仁清は野々村仁清といい、生没年不詳。京焼の名工。京焼色絵の完成者、丹波国野々村の生れと伝えられる。名は清右衛門。京都粟田口で修行ののち瀬戸へ赴き茶器製作を修得正保年間（一六四四―一六四八）仁和寺門前に御室窯を開いた。金森宗和好みの茶陶を焼成。轆轤・技術・意匠に卓越した作品を残す。

国宝となっている「色絵藤花文茶壺」は仁清の代表的な名作で、熱海ＭＯＡ美術館に常設されているのでご存知の方も多い。この他茶壺、茶碗の数点が重要美術品に指定され伝承している。

仁清は二代目まで存在したと言う。印形は同一のものを使っていたというので、刻印だけでは初代か二代かの識別は不可能である。但し二代目の作品は初代に比べ不出来だったと言う。またこの位の大名題ともなれば贋物も横行する。そこはプロの目を信ずる以外にないが、簡素な風合の白色で落ちついた上品な造りで侘茶にもってこいの雰囲気がある。

平成十八年正月にこの香合は私の愛蔵する処となった。間もないので、まだ表舞台でのお目見得のチャンスは無い。来る炉の時期には既所有の道具類と調和して、否、主役となって活躍してくれるものと期待し楽しみにしている。

なお仁清香合は、形物香合番付では行司頭取に位している。

参考文献
日本の香　平凡社
香合　池田　巌著　平凡社
香合　茶道美術全集　淡交社
茶会記の研究　谷　晃著　淡交社
茶道大辞典　角川書店

（この稿終り）

清水武夫博士の自叙伝

吉田忠雄

清水武夫博士は名実ともに世界一の花火学者である。私は平成一八年四月に足利工業大学に通称「花火大学院」を開設した。これを決断したのは清水博士の存在に負うところが大きい。見習うべき先輩がいたからである。

平成一八年四月二九日、私は清水博士にお願いして花火大学院第一期生に特別講義をしていただいた。「花火大学院」としては意義深いものであった。お願いするに当たって私は川越の清水先生のお宅に連絡の電話を差し上げた。奥様が出られて先生は会社の実験室に居られるとのことであった。まずは九〇歳を過ぎた老先生が実験室にいると聞いたときは驚いた。会社に電話すると、先生は今実験に入っておられるとのことであった。無理を言って先生に電話に出ていただいた。お元気な声が聞こえてきた。驚きとともに一方では安心した。これなら足利に来ていただけると思った。

先生は昭和三一年に「菊花型花火（割物）の設計条件について」という論文を工業火薬協会誌に発表して日本の火薬学界に華々しくデビューした。不肖私が東大工学部を卒業して日本化薬（株）に入社し、ニトログリセリンの製造に従事した年であった。これが先生の学位論文となった。その後続々と花火弾道学、発光・色彩学の研究を発表され、花火の科学的研究の先駆者となられた。

先生は「花火」、「花火の話」および「FIREWORKS The Art, Science and Technique」の三編の著書を出版され、世界の熱心な花火師に大きな影響を与えた。現在世界一の花火生産国である中国の花火業者はこれらの本の中国語訳で勉強した。一九七〇年頃からは清水先生は英語やドイツ語で研究論文を発表するようになり、先生の令名は世界中に広まった。最近の有名な花火の本「FIREWORKS Principles and Practice」（二〇〇六）や「Pyrotechnic Chemistry」（二〇〇四）には清水先生は

連名で執筆している。先生は終生の著作を「A DREAM FOR BEAUTY」（二〇〇五）にまとめられた。これには六〇編を越す英文論文、三〇編を越す独文論文、数編のスエーデン語論文が含まれている。先生が如何に外国語に堪能であったかが伺われる。

清水先生と私は何回かの接点を持った。昭和四〇年代には救難ロケットの開発で接点があった。故疋田強教授がイギリスのロケットに倣ってコンポジット推進薬を使ったロケットを作ってみなさいといってきた。やってみたが問題がありうまくいかなかった。清水先生は当時興亜化工（株）におられたが、黒色火薬ですばらしいロケットを作られた。その公開打ち上げに立ち合わせていただいた。

次は、私が委員長で昭和五〇年代に隅田川花火大会の保安距離を決めるための大掛かりな実験をやったときである。その結果をまとめることに苦慮し、清水先生に相談した。親切に指導してくださった。

平成に入って私は火薬学会の火工品部会長をしていた。部会のレベルアップのために清水先生に火工学の講義をしていただいた。聴講者には非常に有益であったと思う。

平成九年一〇月につくばで第二三回国際火工品セミナーを開いた。私が組織委員長で清水先生には名誉委員長をお願いした。最終企画に土浦花火大会を当てた。おかげでこの國際シンポジウムは好評であった。

清水先生の一生については断片的に知っていた。しかし全体像は知りえなかった。アメリカの花火誌に先生の自伝が載っているのを知り読んだ。このたび清水先生が「花火大学院」で特別講義をしてくださることになった。学生に清水先生の偉大さを理解してもらうために、英文で書かれた清水先生の自叙伝を和訳した。

私の聞いた清水先生と先生の花火の恩師山本先生との間のエピソードをひとつ。清水先生は昭和二六年に山本先生から呼びだされた。「君は砲内弾道学を研究してきたからこれをまとめて博士論文としたらどうか」といわれた。早速まとめて提出した。その後なんの音沙汰もない。清水先生が「どうなりましたでしょうか」と山本先生に尋ねると、「見つからなくなった。ところで花火の研究をやったらどうかね」といわれた。このいきさつによって世界一の花火博士が誕生した。

清水先生は世界一の花火学者であるが、深い学識、外国語学者、詩人、哲学者、宗教学者、美学者でもある。私は先生と似たところがあると自負しているが、先生の上に挙げた資質には到底及ばないとあきらめている。先生は後輩に対して親切である。私も先生から多くの文献をいただいたりご指導を受けたり、その恩恵を受けているが、他にもその恩恵にあずかっている人を見ている。

最後に、これから読んでいただく「一花火師の自伝」

は“Autobiography of a Pyrotechnist”と題して、New Hampshire Pyrotechnic Association Inc., Newsletter, Volume 3, 1991 (March), p. 5 に英文で掲載されたものの日本語訳である。

一花火師の自伝

清水武夫

私は、一九一二年日本の西部にある山口県の小さな高俣村に生まれた。父の職業は農業であった。私は小学校を終えると萩の中学校で学んだ。萩は、吉田松陰、高杉晋作など多くの明治維新の志士を生んだ有名な町である。萩は日本海に面し、静かな夜には学校の寄宿舎で寝床に横になっていると、荒海の音を聞くことができた。

中学校では、私ははじめて英語を学んだ。私の教師、伊藤先生は英国紳士を大変尊敬していた。私が四年生のときに、私にとってはひとつの事件が起こった。私は彼にきついやけどをさせられた。そのために私は英語の予習をしなくなった。それから私の英語の進歩は遅くなった。

多くの生徒たちは、陸軍または海軍の士官になって国のために義務を果たすことを夢見ていた。私は頑丈ではなくむしろ繊細であったが、陸軍士官学校の難しい入学試験に合格した。士官学校は二つのコースに分かれていた。二年間の予科コースと一年一〇ヶ月の本科コースである。この二つのコースの間に六ヶ月の軍務があった。予科コースは教養コースであり、本科コースは軍事コースであった。学生たちは約三〇人の勉強クラスに分けられた。

私が士官学校予科に入学して間もなく、教師が私の作文を優れた例として読んだ。私は大変喜んだ。しかしそのようなことは私の陸士の在学中には再び起こらなかった。私は一度だけ友人の近藤君に柔道で勝った。彼は私よりづっと頑丈であった。私は他のすべての場合に競技またはゲームで勝ったことはなかった。したがって、現在でも私はゲームには情熱を持たない。

予科コースの後で私は長崎県佐世保の重砲連隊に行った。そこで江口大尉その他の若い士官たちと会った。彼らは非常に勤勉で馬上でも戦術の本を読もうとした。彼らは意味のない事柄に時間をとられることを好まなかった。私はきつい訓練の義務を終えた後私はより勤勉な若者となり、本科の軍事学をさらに学ぶために士官学校本科に戻った。カデットと呼ばれた全学生は、下士官の肩章と連隊番号入りの記章のついた軍服を着た。彼らは予備コースにおける怠惰な学生から変わったように見えた。私は本コースを好んだ。なぜなら、数学や物理学などによって悩まされなくなったからである。一九三三年七月に卒業証書をもらって市ヶ谷の陸軍士官学校を出た。

私は再び佐世保の重砲連隊に職を得、同年一一月に中

尉に任官した。連隊における若き士官たちは砲発射時の訓練を受けていた。砲弾の黒煙が的の手前に見えたときは、次に砲弾が的の後方に落ちるように次の砲弾の着弾距離を伸ばさなければならなかった。それは簡単に見えるかもしれない。しかし、私にはそれは非常に難しかった。なぜなら、私は黒煙の位置を突然忘れてしまうからであった。私は大いに失望し、戦場における指揮官としては適していないのではないかと思った。私は将来の人生の方向を変えることにし、余暇に数学、物理学および化学の勉強を始めた。

一九三四年一一月、私と同期の砲兵中尉たち全員が連隊から帰り、陸軍砲工学校に入った。私はここで、数学、物理学、化学、冶金学、電気工学、弾道学などを学んだ。多くの事柄が学校のつめこみシステムによって私たちの頭の中に詰め込まれた。一年間の正規コースと一年間の上級コースの後、私は東京大学でさらに学ぶことを選んだ。

一九三七年四月、私は東京大学の火薬学科に入学した。私のクラスには正規学生として他の五人がいた。当時製造火薬学の権威者であった西松教授が学科主任であった。海軍少将の山家教授が内部弾道学の講義をした。山本助教授が製造火薬学を講じた。彼らの講義は厳しいもので、学生たちはノートをとるのに苦労した。

火薬学科の講義は、私にとってはあまり興味を引くものではなかった。したがって、私はしばしば理学部の化学教室を訪れた。そこには森野博士がおり、ラーマン効果の研究をしていた。私は、東教授の助けを借りて量子力学を学んだ。彼は分子の化学構造の権威者であった。東博士は私に「冬の華」という一冊の本をくれた。これは英語では“Winter Flowers”を意味し、中谷教授（一九〇二―一九六二）が書いたものである。

私は、高価な装置を使わずに人の頭だけを使う実験を如何に行うかを知り、深い印象を受けた。私はそのような方法を「寺田スタイル」と名づけた。故寺田博士（一八七五―一九三五）は東京大学物理学科の有名教授であった。中谷博士は寺田博士の学生であり、もっとも忠実に寺田学派を受け継いだ。私は、中谷博士とも寺田博士とも個人的には面識はなかったが、私の将来の人生において寺田学派を継ぐことに決めた。したがって、私は今までそのような方向を私にあたえてくれた東博士に感謝している。

一九四〇年四月に私は東京大学を卒業して、東京第二陸軍造兵廠の王子火薬工場に職を得た。私はそこで、硝酸、硫酸製造の主任として働いた。そこには日産二〇トンの硝酸プラントが建っていた。当時一八―八ニッケル・クロム鋼の大きな吸収塔が用いられていた。その他にTNT、ピクリン酸、ニトロセルロースおよびテトリルを製造する職場があり、この工場では約一〇〇〇人が

所建設を計画していた。しかしながらこの計画は経済的な理由で実現しなかった。私は大変落胆した。山本教授は同じ年に亡くなった。私は最大の支えを失いながら花火にとどまった。私は多くの時間を持ち、ＮＨＫ放送から外国語を学んだ。私は外国に花火工場を立てるためにある外国に住むという秘密の願いを持った。私は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語を学び、本でイタリア語とアラビア語を学んだ。私は自宅からＰＬ花火事務所に向かって歩きながらアラビア語を覚えた。私はしばしば親切なPL教師の車で送るという申し出によってアラビア語の勉強が中断された。

一九六七年、私は興亜化工会社の工場に現在の職を得た。この工場は、私の旧い友人溝上氏が建てた物である。彼は又私の為に小さな実験室を建ててくれた。この工場は主として海上救難信号を生産していた。私は旧師山本博士の要請に従い、今日まで仕事の合間に時間を見つけて花火の研究を続けてきた。したがって、休日でも私は家でではなく、自宅から十五㎞離れた工場の実験室で仕事をした。

過去において、海外の何人かの友人は東京から三五㎞離れた川越市にある私の家にきて泊った。ドイツからはSigrid Wied女史、F.-W. Wasmann博士、W. Zink氏、フランスからはPierre-Alain Hubert氏、及び米国からはPettit夫人が来られた。最近私の妻は背骨を折り、私はこれ以上客を自宅に招くことができなくなった。私の仕事部屋は最近混乱している。書棚は本で一杯になり、残りの本は机の上や床に散乱している。棚の上には故西田博士及び田辺博士の哲学の全論文、故宮澤賢治の詩の全集、各国語の聖書、仏教書、技術書が置いてある。これらは塵をかぶっており、私が時間を持つまでは眠っているであろう。

奈良大仏の経済学

新井宏

お国自慢をする訳でもないが、現存するブロンズ像で、世界最大のものが奈良東大寺の廬舎那仏像であり、第二位が鎌倉の阿弥陀如来像である。奈良の大仏は、高さ約十五メートル（当初は約十六メートル）、重量が約四百トン、鎌倉の大仏は、高さが十二・四メートル、重量が百二十トンである。面白いことに、奈良の大仏が開眼したのが天平勝宝四年（七五二）、鎌倉の大仏の鋳造が建長四年（一二五二）なので、ちょうど五百年の差がある。その五百年間、日本では等身大以上のブロンズ像はまったく造られていない。まさに「国銅尽して」の世界最大の奈良の大仏であった。

もっとも、正確に言えば、大きさだけなら銅板張りのブロンズ像でこれを超えるものがある。ニューヨークの自由の女神像は実身長で四十メートルほどあり、奈良の大仏が立上っても及ばない。しかし四ミリ程度の銅板張りなので、銅重量では五十トン程度であり、奈良の大仏が圧倒的に勝る。

現存するブロンズ像だけでなく、世界の歴史をひも解いて見ても、おそらく奈良の大仏が最大である。ただし、対抗馬がふたつある。

ひとつは、世界の七不思議として知られる前四世紀のロードス島の太陽神ヘリオン像である。ロードス港の入口の狭まった両岸に仁王立ちして、その下を船が運行する様子が、江戸末期には、司馬江漢等によって銅版画や浮世絵で紹介されている。塩野七生の『ロードス島攻防記』よりもはるか前から、江戸の通人達はロードス島を知っていたわけだ。もし絵の通りであれば、世界最大のブロンズ像であったことは間違いない。

しかし、どんな小さな港でも、その入口を跨ぐとしたら途方もなく大きい像になる。自由の女神の股下を通る船を想像しても、小さなボートが精一杯で、とても信じ

がたい。

ところが、このヘリオン像が単なる空想上のものとも云えないのは、ローマのプリニウス『博物誌』に、紀元前三百六年のシリアによるロードス島攻撃の撃退記念として作られ、五十六年後に地震で倒壊したとあるからである。立像で三十四メートル程度と言うのが大方の見方なので、背丈では奈良の大仏よりもやや高い。

それでは、このヘリオス像は、奈良の大仏のような鋳造構造物だったのであろうか。そうであれば、ひとつの鉱山を空にしてしまったとの伝承もうなずけ、無条件に世界一のブロンズ像であったことになる。しかし、事実は芯像の上に銅張りしたハリボテ像だったようだ。

それは、これらのブロンズ原料が、シリア軍を撃退した際の戦利品を利用したものだと言うことによる。そうであれば、とても百トン以上とは考えられない。銅剣一万本を溶かしてもたかだか十トンだからである。その情報に加えて、西暦六五四年にサラセン帝国の将軍が、倒壊した巨像から青銅を剥ぎ取り、それを買い取った商人が九百頭のラクダに積んで運んだとの記録もある。このことから判断すると約百トンである。そもそも、フロンが紀元前三世紀に書いた「世界の七不思議」のビザンチン写本では、十二トン半と書いてある。奈良の大仏のイメージとは大分異なり、これでは三ミリ程度の銅板を巻きつけるのにさえ不足する。

すこし力み過ぎたが、ロードス島のヘリオス像の重量は、奈良の大仏や鎌倉の大仏より大分軽かったというのが確かなところであろう。

もうひとつの対抗馬は、唐の則天武后が作った白司馬坂の大像である。高千尺と称されているが、これでは三百メートルにもなってしまう。白髪三千丈式の表現であり、もちろん実高ではなく、完成したかどうかも疑われている。全国の僧尼に一日一銭宛の銅貨を課して造ろうとしたもので、十万人の僧尼が一年間毎日協力したとしても、約百四十トンである。

しかも、盛唐期の仏像は、石灰岩や大理石製が主流であり、ブロンズ製は既に下火になっていた。したがって、完成したとしても、鎌倉の大仏程度だったのではなかろうか。ただし、時期的に見て、奈良の大仏が白司馬坂の大像の影響を受けた可能性もある。そうであれば、白司馬坂像よりも大きな仏像を狙うのが新興国の心意気であり、この点からも奈良の大仏が勝ると見ることができよう。

その他、時代は下るが九七一年に造られた中国の龍興寺のブロンズ仏像高が、二十四メートルと伝えるが、穴を掘って造ったもので立像であり、奈良の大仏よりも小さい。

なお、近年になってもブロンズの仏像は造られている。富山県の高岡大仏は台座を含む総高が十六メートルで重量は六十五トン、つい最近造られた福岡県県篠東町の涅槃像は伸身長が四十一メートルで三百トンである。仏像ではないが、長崎の平和祈念像は座高が十メートルで三十トン。

一方、「世界的」が大好きな韓国でも大仏をつくる計画がある。大蔵八万経の木版を所蔵していることで「世界的」に知られている海印寺に高さ三十二メートルの青銅大仏を作ろうと云うのである。もちろん世界最大だと称し重量では二百トンくらいになるというが、反対意見も多く頓挫している。

巨大な仏像と言うだけであれば、バーミアンの大仏立像が五十五メートル、敦煌の北大仏と南大仏が、二十六、三十三メートル、雲崗石窟の北魏の仏立像が十六メートル、盛唐期の龍門石窟奉先寺の半座大仏が十三メートル、ボロンナルワの涅槃臥仏像が十五メートルなどある。しかし、いずれも伸身像であり、しかも磨崖仏などでブロンズ像ではない。だから、磨崖仏を除いてしまうと、相変わらず仏像としては、奈良の大仏が最大である。

ついでながら、現存の世界最大像として、しばしばロシアのボルゴグラード(スターリングラード)の「母なる祖国の像」が五十一メートルだと紹介されるが、これは振り上げた剣の先までの高さで、実身長は「自由の女神」に劣る。

このように、世界史上から見ても、おそらく最大と考えられる奈良の大仏が、銅産に恵まれた日本に生まれたのであれば納得が行く。ところが、日本が銅産国に飛躍したのは、室町時代以降であり、奈良時代は銅の国産化がやっと始まったばかりであり、生産量も国際的に見ても、かなり低水準であった。奈良時代の銅産はせいぜい年五十トン程度で、平安時代には二十トンにも満たない。その十年分を全て投入して、造ったのが奈良の大仏なのである。

なぜ、このようなバランスを欠いた事業が、推進されたのであろうか。その経過を簡単に辿ってみよう。

聖武天皇が紫香楽宮で、盧舎那仏の建立を「菩薩の大願を発して盧舎那仏の金剛像一軀を造り奉る。国銅を尽して象を鎔かし、大山を削りて以て堂を構へ、広く法界に及ぼして朕が知識と為す」と発願したのが、天平十五年(七四三)である。その二年前の天平十三年には、正式な国分寺建設の開始を告げる詔が出され、更にその前年には、藤原広継の乱があり、恭仁京への遷都が行われている。また発願の翌年の天平十六年には、難波京に遷都し、更に平城京に復している。混乱と激動の時代であ

った。そんな中で、そもそもは、紫香楽に造営するつもりであった大仏が、現在地の東大寺に設置されることになる。

聖武天皇に、大仏建立を働きかけた人物は行基であり、それを仲介したのが、天皇の側近の橘諸兄である。行基は長い間朝廷に認められず「小僧」とさえ呼ばれていたが、この時期に天皇と肝胆相照らす間柄になる。そして聖武天皇と行基が、国分僧寺・国分尼寺の総仕上げとしての総国分寺を造り、仏教的な慈悲で国を統治しようとしたのである。

このような説明が、おおよそ現在言われている大仏建立の事情である。それに加え、前述したように、則天武后の巨大ブロンズ像の計画があったことも知っていたであろう。しかし、なぜかくも巨大なブロンズ像が必要であったかについては、相変わらず釈然としない。

「国銅を尽して」造られた東大寺の大仏のため、それ以降、日本では、等身大以上の金銅仏が全く造られなくなり、それが復活するのが、五百年後の鎌倉大仏であることは既に述べた。この間、すなわち奈良時代後期から鎌倉時代の初期まで、鋳銭用の銅が確保できず皇朝十二銭の発行が中止されたとか、十世紀後半から十二世紀までの間、梵鐘の鋳造が完全に途絶えたとか、銅の欠乏時代は続くのである。

このように、「国銅を尽して」しまった東大寺大仏を、どう位置付けるか、納得行く説明が求められているように思う。

このことについての筆者の見方は、律令政府の経済政策だったとする点にある。すなわち、大仏建立に三十年ほど先立つ「和銅開珎」の発行が大仏建立をもたらした最大原因だというのである。もちろん、こんなことを主張する学者はどこにもいない。だから解説する。

和銅開珎は日本の通貨の始まりである。近年になってそれよりも古くから富本銭が存在したと言うが、厭勝銭(厄除け用)としての用途があり、流通量も限られていた。したがって和銅開珎は教科書通り実質的な通貨の始まりなのである。

それではどんな性格をもった通貨だったのであろうか。結論から言えば、最初から銅地金価値とは全くかけ離れた、いわば紙幣のような通貨として発行されたものであった。筆者の調査では当時の銀と銅の比価は百倍程度なのに、銀銭と銅銭の比は十倍で、律令政府は銅銭発行によって膨大な出益を得ることができたはずである。

打出の小槌を得た律令政府は、それを平城京造営の資金としてつぎ込む。さらには、通貨増発によってもたらされたバブル経済は二十年年後に天平文化の花を開かせる。

しかし同時に、地金価格と大きく乖離した銅銭は、私鋳銭の氾濫を生み、激しいインフレに見舞われる。大仏建立が発願された天平十五年は、和銅から約三十年目に当り、当初一石三十三文に設定した米価が約四百文に、すなわち物価が十倍に高騰した時期である。その一方では、銅銭発行によって景気が刺激されて、長門国の長登銅山などで銅産が活発になる。

しかもこの頃、律令政府は、やたらに恭仁京とか難波京とかに遷都をしている。通貨発行による出益を、もう一度蘇らせ、なんとか好景気(バブル)を継続したい。そんな思惑が、為政者の間に生まれたとしても、平成バブルを知る我々としては、直ちに納得が行くであろう。通貨発行による出益は、いわば隠れ国債である。赤字国債を発行してでも、公共事業投資は盛んにしなければならない。そんな声が満ちていたように思う。

しかし銅産が盛んになり、物価が上昇することで、実質的な銅銭の価値は下落するばかりで、通貨発行の出益は、この頃ほとんどゼロに近づきつつあった。銅を大量に市場から引上げなければ、銅貨発行による出益など、全く期待できない。いわば、買いオペを行って、市場から国債を引上げなければならない状況が出現したのである。

そして生まれた政策が、大仏建立である。壮大な公共投資を行いながら、市場から銅を引上げ、和銅の銅貨の価値を高めて物価を安定させ、出益を得る。まさに一石三鳥の経済政策である。

似たような状況が江戸時代にもあった。文化文政期、当時の幕府は「一分銀」という紙幣のような貨幣を出して、当時の幕府財政規模の年二百万両の十倍近い千八百万両の出益を得た。膨大な隠れ国債である。このため結局はペリーの開国によってその高いツケを払わされ、幕府は崩壊した。

常軌を逸するような大仏建立が、いくら聖武天皇の信仰心が厚いからと言って、簡単に成立つ訳がない。そこには、必ず政治的・経済的なニーズが含まれていたに違いない。そんなことから、大仏建立を観ると、歴史の裏が見える。事実、その後かなり物価が下がり、和銅開珎の価値があがって行くのである。

さて、それでは、東大寺の大仏造営事業とは、どの位の経済規模のプロジェクトであったのだろうか。幸いなことに、東大寺大仏建立に関しては、『東大寺要録』に、かなり詳細な記録があり、その経済規模を算出できる。それによれば、

熟銅　七三九五六〇斤(一一〇〇〇〇貫文)

白鑞（錫）　一二六一八斤（　五七〇〇貫文）
錬金　一〇四三六両（　九四〇〇貫文）
水銀　五八六二〇両（　四七〇貫文）
炭　一六六五六斛（　一五〇貫文）
使用人工数　二六〇三六三八人（　三〇二〇〇貫文）

とある。（　）内は、その当時の銭価に換算した値で、おおよその目安であり、その総合計金額は、一五・六万貫文になる。当時の労働工数に換算すれば一五六〇万労働日と言うところであろうか。ちなみに、現代の一労働日を一万円とすれば、一五六〇億円に相当する。

ところで、この国家プロジェクトを、古墳時代の巨大前方後円墳の製作費と比較して見よう。大仙山古墳（仁徳天皇陵）の体積は約百四十万立方メートルであり、一立方メートルあたりの工数を、四・五日として計算すれば、総工数は約五百万日になる。ＮＨＫの依頼により大林組が、古代工法で工数を見積もった時も、延べ六八〇万人と出ているから、おおよそ妥当なところであろう。

そうすると、東大寺の大仏の製作費は、巨大な前方後円墳の三倍程度ということになる。古墳時代の人口は、奈良時代の三分の一強であったから、人口比では同程度と言ったところであろうか。もっとも、大仏建立には、その他に伽藍造営の膨大なコストがかかっている。そう違和感のない数値といえるだろう。

歴史的に見ると古墳時代は本当に銅の乏しい時代であった。三百年間の古墳時代を通じて、各遺跡から発掘された銅の総量は、わずかに一トンに過ぎない。それに比べると中国では、漢代の地方政権である曾侯乙墓から一度に十トン以上も青銅器が出土していて比較にならない。

この状況が一変するのが飛鳥時代であり、そのトップを切ったのが、日本最初の寺院、飛鳥寺の丈六像すなわち飛鳥大仏である。『元興寺縁起』によれば、推古十三年（六〇五）、銅二三〇〇〇斤（約十四トン）、金七五九両（約十キロ）をもって、丈六像とその挟侍像が造られたとある。当初の鋳造部分は、頭部と右手指にしか残っていないが、それでも止利様式を良く伝えている。

同縁起によれば、金七五九両の内三二〇両は、高麗国の大興王が献上したものだとある。後世の潤色とする説が有力であるが、ここで注目すべきなのは、金については朝鮮半島からもたらされたことを伝えながら、銅については、その伝承が見られないことである。和銅に先立つこと、ちょうど百年である。素材の総価格から見ても、銅の方が負担だったはずである。したがって筆者は、もうこの頃には、銅の国産が始まっていたのではないかと考えている。

さて、飛鳥・白鳳期には、この他にも数多くの小金銅

仏が造られたが、その後の大型ブロンズ像を追いかけてみると、まず山田寺講堂にあった丈六像（六七八年）が挙げられる。後に、興福寺に奪われたが、そのおかげで現在は仏頭のみであるが興福寺に残っている。その残重量だけでも約一トンあり、仏体を丈六とすると、総体では十五トン程度の巨像であったと考えられる。

その後のブロンズ像で著名なのが、薬師寺の金堂の薬師三尊（薬師如来と日光菩薩、月光菩薩）や同じく講堂の薬師三尊である。前者については、本薬師寺から移設されたものか（それなら白鳳期）、現在地で造られたものか（それなら天平期）を巡って、喜田貞吉や関野貞などの間で、激しい論争が行われたことがある。当時は、法隆寺再建・非再建を巡って、両者の間で、論争が行われていた最中でもあり、国民的な関心を呼んだが、現在では三尊は移座、建物は新築されたとする説に落着いたようである。本尊の薬師如来像は三～四トンであり、三尊あわせて六～七トンと言うところであろうか。この薬師如来像は、外観から、ロストワックス法による一回鋳造と見られていたが、内部には型の継ぎ目が数十ヶ所もあり、当時の鋳造容量の限界を示唆している。なお、現在薬師寺の講堂に安置されている薬師三尊が、その後の天平期のものである。

そして、東大寺の大仏の鋳造が始まる。そこには、問違いなく技術的な飛躍がある。そのため、技術導入が図られたに違いないと考えるのが大方であるが、史書は何も伝えない。造東大寺次官の国中連公麻呂が、技術面の責任者を勤めたが、彼は百済の帰化人の後裔で、当初は正七位の低い位からスタートしており、唐への留学経験はない。どうも白鳳・天平の鋳造師であったようである。

平安末期の重源の大仏補修時には、宋から鋳物師の陳和卿を呼んでいる。もっともこの頃は、日本におけるブロンズの大型鋳造技術は、完全に途絶えており、鋳鉄の釜を作る技術者が動員される状況であって、天平期とは異なり、技術指導を受けることが不可欠になっていた。ちなみに、その時使用された原料は、『東大寺造立供養記』によれば、熟銅八三九五〇斤（約五十トン）、黄金千両、金薄十万枚、水銀一万両で、天平創建時のほぼ十分の一の規模である。ついでに言えば、江戸時代中期の大仏補修では、唐銅を六五七四貫（二十五トン）用いている。それにしても、三回とも使用された原料の詳細が残っているのは、日本ならではと言えるであろう。

奈良の大仏については、どうやって造ったかをめぐる論争がとても面白い。しかし、経済論議に続いて技術論議にまで、ひとり悦に入っていると、『まんじ』を首にされそうである。止める。

還暦からの考古学（七）

三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その1）

中山喬央

まえがき

どんな学説でも前提条件が変れば成立しなくなることがあります。学問でも教育でも時代の流れとか周辺諸国いや世界的な大きな動きと無関係でいることは出来ません。

一世を風靡した唯物史観も、それが史料として使えたのがモルガンの古代社会だけであった為、その後の様々な研究によって、考え方を変えなければならなくなったと思っています。

すなわちアメリカ合衆国北西海岸の狩猟採集民社会の研究により、そこでは農業社会でないにもかかわらず、すでに階級社会が成立していたことや、エジプトのピラミッド建設に従事したと思われる人達の住居址が見つかって、彼等が奴隷でなく一定水準に達した生活をしていたことが判ってきたからです。また考古学の発掘成果から当時の社会の復元を考える時、唯物史観をそのまま当てはめることの難しさも判ってまいりました。

といってマルクス・エンゲルスの残したこれらの業績の素晴らしさは少しもその値打ちを下げることはないと思います。むしろモルガンの古代社会だけを参考史料として、これだけの学説を展開してくれたからこそ、その後の学問の世界は大幅な進歩を遂げる事が出来たのだと考えます。

これを一番認識しているのが、唯物史観を否定する為に様々な新しい研究成果を、民俗学・考古学等の分野で発表した欧米の超一流学者です。

話は変りますが三角縁神獣鏡に対する小生の考え方の変化を述べさせていただきまして、皆様方のご批判をいただきたいと思います。

私が考古学の勉強を正式に始めたのは明治大学第二

文学部の考古学専攻生となった一九九五年のことですが、明治大学では土器の研究に終始し、鏡と直面したのは一九九九年、早稲田大学大学院修士課程考古学専攻受験の口頭試問で、初めて方格規矩鏡を見たときでした。後漢の鏡であるとまでは答えられたのですが、どうしてそう思うかとの質問に、たまたま銘文が入っておりましたので、その書体からそう思ったと苦しまぎれの答弁をしたところ、文様で見るのだと教授していただいたのが最初です。

ついで二〇〇〇年の五月に早稲田大学考古学研究室岡内ゼミで鏡について院生が交互に発表することになり、私は「中国鏡と三角縁神獣鏡」というタイトルで発表しました。

以下それについてのあらましを述べますが、これは当時の三角縁神獣鏡に対する自分の考えをまとめたものです。

三角縁神獣鏡とは

先ず三角縁神獣鏡の定義ですが、鏡背面の中央に鏡を持つための紐を通す穴である鈕があり、そのまわりの内区に様々な文様があります。その主な文様の一つに、伝説上の仙人で何時も並び称されている「東王父」と「西王母」などの神像と竜虎などの獣形があり、形とか数はそれぞれ異なっています。

「東王父」は陽気を治め、東方を支配する男仙（男性の仙人）の領袖（おさ。かしら）で、東王公、木公とも言われています。「西王母」は崑崙山に住む女仙（女性の仙人）の領袖で、不老不死の象徴です。東の東王父と対置されています。

それらの並び方は、主な文様の神像・獣形が鈕に向かって求心的に（中心に近づくように）配置されているものと、主な文様が同一方向に配列されている形式があり、後者には春秋時代の琴の名人で友人の死を悲しみ弦を断って再び弾かなかったという伝説のある、伯牙の弾琴像があります。文様は全て浮彫り式で立体感にあふれ鏡の縁は高く、その先端は尖って断面が三角形をしています。

それは中国鏡である平縁神獣鏡の内区と、三角縁画像鏡（画像鏡は、図文の表現が後漢で発達した画像石の表現に似ているので命名されました。その図文は竜虎を初め東王父・西王母の神像や車馬や禽獣「鳥と獣」歌舞「歌と舞」状態のものが多く見られます）の外区を合わせた合体鏡で、中国鏡です。

ここで三角縁神獣鏡研究者三人の見解を紹介します。

王仲殊説

同氏の考えは呉の工人が倭に渡来して作成したとす

るものです。

その理由は、三角縁神獣鏡は中国・朝鮮で出土していない、三角縁神獣鏡は大型で中国鏡とは異なるに始まり、一九九四年に京都府・大田南五号墳で青龍三（二三五）年銘方格規矩四神鏡（四神「四方の神、すなわち東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武」を主体とする写実的な動物文を主文とし、方格の鈕座とＴＬＶ形の規矩文を持ち、平縁の周縁を持つ鏡）が発見されたことから、魏王朝から卑弥呼へ下賜された鏡は、景初三（二三九）年よりも前に製作されたものであるとし、それらは特鋳された三角縁神獣鏡ではなく、方格規矩鏡（内区が方格とＴＬＶ形の規矩文によって分割されている鏡）・内行花文鏡（半円弧形の弧文を連ね巡らした文様を主体とする鏡）・獣首鏡（鈕を中心とした糸巻形の四葉文の間に一個ずつ獣首文を配した鏡。文様は平面的です）・夔鳳鏡（鈕を中心とした糸巻形の四葉文に相対向する双鳥または蝙蝠形などを配した鏡で、外縁に連弧文が十六あるのが普通です。本来「きほう」とは一疋の鳳の意味ですが、日本では双鳥を「きほう」と解釈してこの名をつけました）・双頭龍鳳文鏡・位至三公鏡（獣首鏡の一種。鈕の上下に位至三公の銘がある鏡）などであると考えました。

そして三角縁神獣鏡は中国の同時期の鏡よりは縁がかなり隆起し、その断面は鋭い二等辺三角形を呈し、内区と図文間の銘文帯文字の間に、しばしば多くの乳状突起が見られ、特に「笠松型」と呼ばれる図案化された旋の文様は、中国で出土した鏡には全く見られないものであることを指摘しました。

しかしその一方で、「笠松型」の文様を除く図文には中国鏡と共通するものが多く、なかでも「陳氏作竟」「張氏作竟」「王氏作竟」といった銘文は、実際に中国人の手によるものであることを示しているとしました。

更に大阪府・国分茶臼山古墳と、滋賀県・大岩山古墳出土の鏡にある「青銅を用い」「海東に至る」の銘文については、「海東に至る」の語句が中国で出土した銅鏡の銘文に全くないところから、この鏡は中国の工匠によって日本で作られたとする事が出来るとしました。

次いで中国における考古学的調査により、後漢から三国時代の平縁神獣鏡と三角縁画像鏡の出土地が、揚子江中下流域の江南地方に集中し、更に銘文により当時の江南地方の呉郡の呉県（江蘇省蘇州市）、会稽郡の山陰県（浙江省紹興市）、江夏郡の武昌県（湖北省鄂城）で生産されていることを明らかにしました。

その上中国の三国時代、江南の呉の地で仏像を器物の装飾に用いることが流行したのですが、銅鏡には画文帯仏獣鏡などが呉鏡として出土しており、倭の三角縁神獣鏡のなかにも、東王父・西王母の代わりに仏像を配置した三角縁仏像鏡があることからも、呉との関係があるも

のとしました。

最後に景初三年鏡と正始元年鏡の銘文「本是京師・絶地亡出」あるいは「本自州師・杜地命出」は、工匠の陳是が自分の経歴を述べたもので、京師と州師は呉の領域に属する揚州の京城（今の江蘇省・鎮江市）に住んでいた師匠を指し、絶地亡出、杜地命出は亡命して異国の地に行ったと解釈でき、中国では全く見られない銘文であるから、これらの鏡は何れも呉の工匠である同一人の陳氏によって倭で作られたものであると述べました。

また一九八六年に京都府福知山市・広峯十五号墳出土の景初四年銘の三角縁盤龍鏡（盤龍とは、輪状にかがまりまがっている龍のことで、この龍の文様を内区にしている鏡を盤龍鏡といいます）は、辰馬考古資料館の景初四年銘鏡と同笵鏡で、これらを作成した陳是（陳氏）と先に述べた景初三年鏡の作者である陳氏は①両者の姓が同じで共に「氏」を「是」としていること。②景初三年と景初四年は年次が連続していること。③作者の鏡銘の字体が大変良く似ていること。④鏡の銘文中に共に「吏人詔之、位至三公、母人詔之、保子宜孫、寿如金石兮」の字句があることから同一人であるとしました。

従って景初三年鏡・景初四年鏡・正始元年鏡の作者は全て同一人である陳是ということになります。

一方、景初三年正月一日に魏の明帝が死去し、斉王芳が即位しましたが、三年十二月に魏王朝は詔書を発布して、この年の十二月に更にもう一ヶ月を加えて「後十二月」と呼び、明帝の命日を正月一日から十二月一日に変更し、国家の元旦の行事と先帝の忌日との矛盾を解消しました。

しかし陳是は、呉から倭に渡来して魏王朝の改元のことを知らなかったので、景初四年の年号を記したものと思われるとして、呉の工匠による三角縁神獣鏡製作説を補強しました。

樋口隆康説

魏の年号を持っている鏡は魏鏡であり、魏の墓から出た鏡も魏鏡です。

呉の鏡は、魏の鏡と比べると紀年鏡（年号を記入した鏡）が圧倒的に多いけれど、その大部分は対置式神獣鏡です。

これに対し魏の紀年鏡では、同向式神獣鏡が最も多く見られます。

そして倭で出土している画文帯同向式神獣鏡は約五〇面ありますが、うち二五面は同型鏡で、魏との関連が強いと考えられます。

更に中国の四神鏡の「竟」（鏡）の銘文の書き方について、漢の鏡と椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡で相似しているものがあり、呉の鏡とは異なりますので、三

角縁神獣鏡は魏鏡であるとまとめています。

岡村秀典説

魏鏡説です。同氏は様々な中国鏡を分析して当時魏の方が呉よりも倭とは交流が深かったと、この説を裏付けしています。

先ず文様と銘文により前漢・後漢・三国時代の中国鏡を八期に分類し、その最後に三角縁神獣鏡を置いて魏の鏡であるとしました。

時期別の分類は次の通りです。

漢鏡1期―前二世紀前半・前漢前期。

漢鏡2期―前二世紀後半・前漢中期前半。

漢鏡3期―前一世紀前半から中頃・前漢中期後半から後期前半。

漢鏡4期―前一世紀後葉から一世紀初め・前漢末から王莽時代。

漢鏡5期―一世紀中頃から後半・後漢前期。

漢鏡6期―二世紀前半・後漢中期。

漢鏡7期―二世紀後半から三世紀初め・後漢後期。

これに三世紀の三角縁神獣鏡を初めとする魏鏡を加え、漢・三国時代の中国鏡は八期に大別されるとしました。

先ず前漢鏡につき四期の分類をどのように行ったのか、あらましを説明します。

漢鏡1期―戦国鏡の伝統を受継ぐ蟠螭(ばんち)文鏡(細長い帯状となった龍の体が、連鎖する渦状に表現された文様を主文とする鏡)が中心です。朝鮮半島では出土しますが、日本列島では今のところ見つかっていません。

漢鏡2期―植物文様である花弁文・花蕾文・草葉文を主文とする草葉文鏡が中心です。その他列島で出土したものとして、数個の乳状になった突起を曲線でつないだ主文を持つ星雲文鏡があります。

漢鏡3期―銘文が主たる文様となり、その字体が意匠化した特色のある鏡の異体字銘帯鏡があらわれ、それを主流とする時期です。銘帯鏡は銘文の中の字をとって「日光鏡」などと呼ばれる事もあります。更に銘帯の構成によって重圏銘帯鏡と単圏銘帯鏡にも分かれます。

漢鏡4期―写実的な動物文様を主体とする方格規矩四神鏡の出現が画期となります。その他、同心円状に鏡背面を分割し、主文の動物文が回転性をもって巡る獣帯鏡、細線表現による逆S字形の、龍と合体した神秘的な霊獣である虺龍の文様を四個の乳の間に配置する虺龍文鏡等があります。

次に三角縁神獣鏡が魏鏡である根拠の一つとして江南に多いとされる画像鏡や神獣鏡は華北にもあり、淇県から出土した三角縁画像鏡と、同じく淇県高村から出土した泰始九(二七三)年銘画文帯神獣鏡は、呉の神獣鏡よりも三角縁神獣鏡に類似した要素を持っているとしています。

すなわち泰始九年鏡の銘文「張氏作青同竟甚大工」の「青同」と「甚」は極めて特殊な用語で、漢鏡や呉鏡には例を見ないものですが、三角縁神獣鏡には「吾作明竟大工」(四神四獣鏡・三神五獣鏡)や「陳氏作鏡用青同」(神人車馬鏡)などの例があり、魏の方格規矩鏡にも「青同之鏡甚大工」(巌窟旧蔵)や「作同竟甚大工」(京都府椿井大塚山古墳)などと、共通する用例が少なくないと説明しました。

又泰始九年鏡を作った「張氏」は三角縁神獣鏡の「張氏(是)」と同族の鏡工人であり、正始二年銘弩機の銘文に見える製作者の「師陳耳」は、三角縁神獣鏡の「陳氏(是)」と同時期に活躍した、同族の青銅工人であった可能性が高いとしています。

更に泰始九年鏡の図像は、景初三年鏡や正始元年鏡など初期の三角縁神獣鏡と同じように、画文帯同向式神獣鏡を模倣したものであり、泰始九年鏡は、琴を弾く伯牙を倒置して頭を鈕に向け、黄帝を省略するなどの改変を行っていますが、弓形の天蓋の下に座る東王父や西王母、維剛(巨)を口に銜えた獣の表現などは、景初三年鏡や正始元年鏡と良く似ているとしています。

そして前漢代の中国では、径十六㎝前後の銘帯鏡が商業的に広く流通し、郡県の中級官人クラスの墓からも出土しますが、大型鏡は王侯クラスの墓からだけ見つかります。これは大型鏡が官営工房でのみ製作でき、それらが王侯クラスに特別に贈与されたことを意味するとしました。

次に日本列島で出土した中国鏡について時期別・遺跡別に分析します。

漢鏡2期～4期

先に述べた通り漢鏡1期の鏡はいまのところ列島では出土しておりませんので2期から4期の中国鏡について出土状況を説明します。

須玖岡本遺跡(奴国)

花弁文大型草葉文鏡三面(漢鏡2期、前二世紀第3四半期)。

星雲文鏡六面、重圏銘帯鏡六面、連弧文銘帯鏡六面、単圏銘帯鏡（日光鏡）五面（漢鏡3期、前一世紀第2四半期）。

三雲南小路遺跡（伊都国）

一号甕棺―大型重圏彩画鏡「鏡背面に朱・青・白色顔料で絵が描いてある鏡」一面（漢鏡2期・前二世紀後半）。大型四乳羽状地文（雷文）鏡「戦国時代の羽状地文鏡の流れを汲む鏡」一面（漢鏡2期・前二世紀第3四半期）。重圏銘帯鏡三面、連弧文銘帯鏡二六面（漢鏡3期、前一世紀前半）。

二号甕棺―星雲文鏡一面、連弧文銘帯鏡三面、単圏銘帯鏡「日光鏡」十八面（漢鏡3期・前一世紀中頃）。

立岩遺跡（不弥国？）

一〇号甕棺―重圏銘帯鏡三面、連弧文銘帯鏡三面（漢鏡3期）と中細銅矛一、鉄剣一、鉄ヤリガンナ一、砥石一が出土しました。

六面の鏡は何れも中型鏡で銅矛も出土しており、この地域の首長墓と思われます。

二八号甕棺―小型重圏銘帯鏡一面（漢鏡3期）と鉄小刀一本、五五〇個あまりの管玉、ガラス玉などの装身具類が出土し、武器のない副葬品の組み合わせから、人骨は見つかりませんでしたが女性墓と考えられます。

三四号甕棺―小型単圏銘帯鏡一面（漢鏡3期）と、十四個のゴホウラ製腕輪を右腕に着けた成年男性が埋葬されていました。

この男性は司祭者と考えられます。

三五号甕棺―連弧文銘帯鏡一面（漢鏡3期）と、鉄戈・鉄剣が一本ずつ副葬されていました。また甕棺の目張り粘土に埋めた状態で、ガラス管玉が三〇～四〇個出土しています。

鏡は中型鏡で、二本の武器が出土しています。

三九号甕棺―小型単圏銘帯鏡一面（漢鏡3期）と鉄剣一本が出土しました。

この墓地では鏡の大きさとか数に、鉄製の武器の数が相関しています。これは身分差を表しているものとすることが出来ます。

東小田峯遺跡（須玖岡本遺跡の東南方十五キロ、筑後川上流朝倉平野の夜須町にあります。）

一〇号甕棺―連弧文銘帯鏡一面、単圏銘帯鏡一面（漢鏡3期）とガラス璧を分割した有孔円盤二

点、鉄剣一本、鉄毛抜き一点が出土し、棺外から鉄戈一本が出土しました。

この遺跡は数百基の甕棺墓からなる共同墓地ですが、このなかに一辺が十六米ほどの墳丘があり、その上に弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓二八基と土坑墓六基が見つかっています。この一〇号甕棺墓はその中央に位置するものです。

そして漢鏡3期の鏡は、北部九州から東の方に広がって行きます。

稗田地蔵堂遺跡（山口県下関市）

弥生前期末の箱式石棺墓から連弧文銘帯鏡（漢鏡3期）一面と蓋弓帽「馬車の傘骨（蓋弓）の先端につけた飾り金具です。漢代の中国では、馬車が官人身分の表象で、その装飾品としての蓋弓帽は大変貴重なものでした。」が二個出土しました。

これは楽浪郡との直接交渉によって入手した可能性が高く、この遺跡は『漢書』地理志にいう「百余国」のなかの一つであったと思われます。

この他、漢鏡3期の鏡は、松山市・若草遺跡の小土坑から重圏銘帯鏡が、四世紀の高松市・石清尾山猫塚古墳から連弧文銘帯鏡が出土しています。また大阪湾沿岸の神戸市・森北町遺跡や大阪市・瓜破北遺跡、大和川を遡った奈良県田原本町・清水風遺跡などから銘帯鏡の破片が出土しています。

これに加えて大阪府・池上曽根遺跡で、弥生中期後葉の大型建物に使われた木材伐採の年輪年代が紀元前五二年と分析されましたので、漢鏡などと共に、北部九州と殆ど時間差がなく中国の影響が畿内にまで及んだと考えられるようになりました。

参考文献・資料

王仲殊・樋口隆康・西谷正『三角縁神獣鏡と耶馬台国』梓書院　一九九七年。

王仲殊『三角縁神獣鏡』学生社　一九九八年。

岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」『史林』六七・五　一九八四年。

岡村秀典「魏・西晋王朝と耶馬台国」『大黄河文明展』東京都江戸東京博物館　一九九八年。

岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館　一九九九年

斎藤忠『日本考古学用語辞典』学生社　一九九八年。

中山喬央「中国鏡と三角縁神獣鏡」早稲田大学大学院考古学研究室発表レジュメ　二〇〇〇年。

樋口隆康『椿井大塚山古墳発掘調査報告』京都府山城町　一九九八年

漢詩

潮騒錄（四十八）

鯨游海

孔子之一生(七)昭公亡命

平成十七年子月

寡徳魯君權勢衰
三桓叛亂六軍危
昭公亡命走齊國
下剋上風天地吹

押韻・衰危吹

〈孔子の一生(七)昭公亡命〉

寡徳の魯君　権勢衰え
三桓の叛乱　六軍危うし
昭公亡命して　斉国に走る
下剋上の風　天地に吹けり

〔注　解〕

三桓＝魯の権勢を壟断した孟孫氏、叔孫氏、季孫氏の三家。宰相等朝廷の高位を独占し、私兵を養ない君主の昭公をないがしろにし、機会あらば君位すら奪おうとしていた。そもそも魯の国の君主は、周公旦の息子の伯禽に始まり第十六代が桓公であった。現在の昭公は第二十四代目である。その桓公の子孫が孟、叔、季の孫氏で桓公から派生した家柄であるので三桓と呼ばれた。

各家は広大な私有地を持ち、経済力を貯えていたので私兵も養えたのである。

このように周の宗家に対する諸侯の下剋上に加え、各諸侯の国内に於ても下剋上の気風が蔓延していた。

六軍＝天子の近衛師団。七萬五千人から成る軍隊。

走る＝ここでは逃亡する意。子月＝十一月。黄鐘とも。

日頃から三桓の横暴を苦々しく思っていた昭公は、ある些細な事から口実を作り、六軍を季孫氏の私兵に向け戦った。

しかし叔孫氏と孟孫氏が季孫氏を助け、結束して対抗したので却って敗れて了い、昭公は斉に逃れる。為に魯の国には君主不在という異常な状態となった。

☆徳有らば無からざらまし下剋上
義と信有らば敗れじものを

孔子之一生(八)齋國外遊

平成十七年子月

追公擧塾赴齊州
實踐經綸請景侯
宰相晏嬰頑不肯
政治濁浪禮淸流

押　韻・州侯流

〈孔子の一生(八)斉国外遊〉

公を追い塾を挙げて　斉州に赴く
経綸を実践せんと　景侯に請う
宰相晏嬰　頑として肯んぜず
「政治は濁浪なり　礼は清流なり」と

〔注　解〕

追＝おいかける。経綸＝国を治める事。ここは高官に就き理想の政治を実践、実現する意味。景侯＝斉の君主。始祖は周の功臣呂尚。なお武王と血縁が無いので公とは呼ばず侯と呼ぶ。いわば外様大名であった。また呂尚は大公望の宛名で知られる。鈎をしている所を周の文王に認められ宰相として活躍した。以後鈎人を指す語となる。

昭公が亡命したうえ三桓の横暴に失望した孔子は、理想の政治を自から求め大国の斉でそれを実践せんと子路ら有力子弟を連れ昭公の後を追い、実力者の高昭子と逢う。彼は魯と親交があり昭公の亡命にも力を貸していた。

大国で文化も高い斉では礼に次かせない音楽を学んだ。韶という音楽に心酔し「美と善が備わっていて周の音楽より優れている」と食事も忘れる程感動し、好きな肉の味も忘れて了う程であった。孔子の教養は益々磨かれ名も挙がり、いよいよ国政を担当せんと高昭子の紹介で君主の景侯と面談合格したものの宰相晏嬰が孔子の登用を拒む。「仁礼楽の理想のみでは政治は出来ぬ」と。

☆経と緯と淸と濁とで織りなす世
丘なほ少し晏嬰の眼に

孔子之一生(九)教育専念

平成十七年子月

仕官未叶憮然歸
復有彈冠振衣機
四十垂垂而不惑
後生教育熱情揮

押韻・歸機揮

〈孔子の一生(九)教育専念〉

仕官未だ叶ず　憮然として帰る
復あらん　「弾冠振衣」の機も
四十になんなんとして　而も惑わず
後生の教育に　熱情揮う

〔注　解〕

憮然＝失望する。驚ろき呆れる。叶＝思のままになる
弾冠振衣＝冠を指で弾き衣服を振って塵を払い清め、出仕の用意を整える意。冠と衣服の塵を払い身を清め、お召しを待つ。漢書・王吉伝「王陽在位　貢公彈冠」。楚辞・漁父辞「新沐者必彈冠　新浴者必振衣」。

大国斉で経綸の理想を実践せんと景侯に拝謁、一旦は信認を得たものの、名宰相の晏嬰の拒絶に遭って叶わなかった孔子一行は、憮然として魯に帰って来た。

しかし斉の君主から一度得た信頼は魯の国にも伝わり孔子塾の評判は益々高まり、塾は門弟達で溢れていた。

「學而時習之　不亦説乎　有朋自遠方來　不亦樂乎　人不知不慍　不亦君子乎」と独り述懐する。「そうだ。私の天から与えられた使命とは、理想の政治を実践する他にもう一つあった。後生達への教育だ。周の伝統ある文化を後世に残す為に。吾四十而不惑」と自からに誓う。

☆経綸の理想儚なく帰り來ば
我れ待つ弟子堂に溢るる

孔子之一生(十)陽虎反亂

平成十七年子月

詩書禮樂令名周
陽虎贈豚加擔求
曾拒參堂季孫宴
焉乘宿敵逆臣謀

押韻・周求謀

〈孔子の一生(十)陽虎の反乱〉

詩書礼楽　令名あまねし
陽虎豚を贈るは　加担の求め
かつて　季孫の宴に参堂するを拒みたる
いずくんぞ乗ぜん宿敵　逆臣の謀に

〔注　解〕

詩書＝一般に「詩書」と塾せば「詩経」と「書経（尚書）」の意で、儒教の教典、四書五経を代表する語。また学問の象徴としても使われる。

四書五経は何れも孔子の編纂したものとされ、大學、中庸、論語、孟子および易経、書經（尚書）、詩經、禮記、春秋の各書をいう。教典としては五経が正統で上位。

禮樂＝教養と芸術を代表する六芸の内の二つ。禮は作法、儀礼に止まらず、法律、制度、社会規範等の概念も含む語。

この時代、最高の学問は詩と書（詩経と書経）、最高の芸術は詩と音楽、不可欠の教養は禮とされた。これを

象徴して「詩書礼楽」と呼んだ。

音楽の代表は韶と呼ばれ、これは舜帝が作曲したと伝えられる。孔子が斉国に外遊した際、この音楽を聴いて感動し、三ケ月もの間、大好きな肉の味を忘れて了う程であったと論語にも記されている。

論語・巻四、述而篇、第十三章「子在齊　聞韶樂　三月不知肉味　曰　不圖為樂之至於斯也」（子、斉に在して韶楽を聞く。三月、肉の味を知らず。曰く、図らざりき、楽を為すこと斯に至らんとは）。なお伊藤仁斉は「三ケ月間音楽を聞いた」と訳す（肉の味ではなく）。

令名＝良い評判。
周＝周ねし＝残す所なく広くゆきわたる。
焉＝いずくんぞ＝どうして。疑問、反語。ここは反語。
乘ず＝つけ入る。ある情況を巧く利用する。
下剋上は宗家の周に対しても、国内では君主に対しても起き、更に家中では主人に対しても起きた。魯では昭公が亡命先で客死し、異母弟の定公が即位したものの未だ若く相変わらず三桓が実権を握っていた。

その季孫家では家老の陽虎が次第に権力を得、主家を乗取ろうと企んでいた。かつて孔子を門前払いしたあの男である。令名高い孔子を自派に引込むべく豚を贈った。

☆小人の豚贈るこそ可笑しけれ
君読み給へ論語礼記を

孔子之一生(十一)公山叛逆

平成十七年子月

魯亂戎軒陽虎奔
奸雄使嗾執政言
欲參子路賭身諫
五十而知天命尊

押韻・奔言尊

〈孔子の一生(十一)公山の叛逆〉

魯戎軒に乱れ　陽虎は奔る
奸雄使嗾して　政を執らしむと言う
参ぜんと欲するも　子路身を賭して諫む
五十にして知んぬ　天命の尊きを

〔注　解〕

戎軒＝戦争。戎は武器。戦。軍隊。軒は車。兵車。魏徴・述懐「投筆事戎軒」（筆をすてて戦争に従事した）。
奸雄＝姦雄＝よこしまな、悪智恵ある英雄。
使嗾＝そそのかす。けしかける。指嗾とも表記する。
執政＝政治をとり行なう。政治をとり行なう人。政治のあり方。ここでは奸雄である公山弗擾が不遜にも魯の定公を無視して国中に号令しようとして孔子を使嗾した。
子路＝孔子の愛弟子。本名仲由。孔子より九歳若い。武勇を好み、粗野で任侠の世界に居たかの如き乱暴者。しかし孔子の巨体と精気、学識や人格に心服し、終生孔子を支え、忠誠を以て仕えた筆頭弟子。論語にも度々登

場するが、この直情径行のユーモリストは固苦しい章の多い論語の中でも異彩を放ち、一服の清涼剤となっている。なお短歌の「かにかくに」は「あれこれと」。

さて昭公亡きあと魯では定公が即位し八年が経過した年、陽虎は配下の公山弗擾と再びクーデターを起こして主家を乗取ろうとした。彼らの当主季孫家の桓子の若さに乗じ自分が当主の座に就こうとしたのである。結果は失敗し、陽虎は斉に逃亡、公山弗擾は費という城邑に立てこもる。ここで孔子を味方につけようと「私と一緒に魯の国を治めて欲しい」と今名高い孔子を勧誘する。

孔子は既に五十歳であったが「理想の政治」と「後生の教育」という二つの志は常に燃えたぎっていた。また元々君主をないがしろにする三桓の横暴を苦々しく思っていたので、今回の三桓から政権を奪取する企は望む所でもあった。（このチャンスを掴み、政界で理想の政治を行ってみよう）と思ったのも無理からぬ所であった。

驚ろいたのは高弟の子路であった。単純だが正義感溢るる彼は「所詮は国を乱す叛乱軍ではないか。それに魯の一隅に過ぎない費で国全体を動かす事は出来ない」と身体を張って反対、孔子を諫めた。孔子も冷静に考えてみると子路の判断の正しさを認めざるを得なかった。

☆かにかくに乱るるものか人の世は
　詩書礼楽を鬼神作せるや

參加國際二宮尊徳思想學會第三回学術大會詠詩三首連作其一　立大連港岸壁埠頭

丙戌酉月

大連港口獨逍遥
想起同胞歸思焦
渤海古來惟一水
尊翁爲遺日華橋

押韻・遙焦橋

〈国際二宮尊徳思想学会第三回学術大会に参加して詠める詩三首連作その（一）大連港岸壁埠頭に立ちて〉

大連港口　独り逍遥すれば
思い起こすは同胞の　帰思焦るるを
渤海古来　惟の一水
尊翁為に遺せり　日華の橋を

〔注　解〕

私も会員である標記学術大会が中国大連市大連民族大学を会場に日中韓英加等約二百名の参加の下に開催され、日本からも百余名が出席した。中国研究者らの熱烈歓迎を受け意義深い大会となった。大連は美しい都会だった。

一水＝一衣帯水（陳書）＝一筋の帯の如き幅の狭い海。

☆尊翁の架けにし橋を渡り来ば
　アカシアの城市人は弾めり

又・三首連作其二　登二百三高地

丙戌酉月

今登夏草爾靈山
默禱仰碑雙淚潺
眼下軍船寥不動
回望哀史一蟬閑

押韻・山潺閑

〈又、三首連作その（二）二百三高地に登りて〉

今登る夏草の　爾霊山
黙祷し碑を仰げば　双涙潺々たり
眼下の軍船　寥として動かず
哀史を回望すれば　一蟬閑なり

〔注　解〕

爾霊山＝二〇三高地。標高が二百三米ある所からこう呼ばれた小高い丘。日露戦後、乃木希典将軍が「爾の霊魂を慰むる二〇三米の山」の意で命名した。眼下に軍港があり、ロシアバルティック艦隊を制するには戦略的にどうしても占領したい丘であった。この攻防で日本軍は八千五百、ロシア軍は七千五百人が戦死したという。

潺＝涙や汗が溢れ流れ出る形容。この旅順港は今中国海軍の軍港であるが、艦は寥々として平和であった。

☆夏草の緑滴たる爾霊山
　蝉は鳴くなり誦経にも似て

又・三首連作其三　於水師營會見所

丙戌酉月

幾月干戈旅順城
講和禮砲水師營
古來聖戰無天道
一將功成葬萬兵

押韻・城營兵

〈又、三首連作その（三）水師営会見所にて〉

幾月の干戈ぞ　旅順城
講和の礼砲　水師営
古来聖戦に　天道なく
一将功成りて　万兵葬らる

〔注　解〕

干戈＝楯と矛。転じて戦争の意。

旅順城＝旅順の市街を指すのが一般的だが、ここでは特にロシア軍が構築した二〇二高地のトーチカ、砦をも指す。この攻防戦の勝利が日露戦勝利の端緒となった。

水師營會見所＝日本軍が当時の民家を接収し、救急医療所として利用していた質素な建物。昔の通り再建され史蹟として保存されている。観光の名所となっているが訪れる人は日本人が圧倒的に多い。童謡にも歌われた。

☆粛々と白馬の英姿進みゆく
　失せし生命に声もあらなく

《漢詩の流れ38》南宋の巨星たち③范成大

范成大（一一二六～一一九三）字は致能。平江呉郡（蘇州市）の人。貧しい家庭で育ち、進士及第後金国に使して名声を揚げた。四川制置使、参知政事と出世し、晩年は石湖に隠棲し石湖居士と号す。

南宋詩人の中では陸游と並ぶ巨星と称された。人柄は温雅で、どちらかといえば激越な性格の陸游とも親交厚く友情を結んだ。性格を反映してか厳しい時代に生きた割に温雅で判り易い詩が多い。

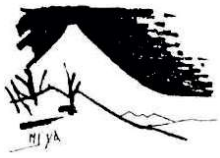
四時田園雑興　（しじでんえんざっきょう）

蝴蝶雙雙入菜花　蝴蝶双双（二つがいの蝶）菜花に入り
日長無客致田家　日長くして　客の田家に致ること無し
雞飛過籬犬吠竇　鶏は飛んで籬を過え　犬は穴に吠ゆ
知有行商來買茶　知んぬ行商の　来って茶を買うあるを

又　（また＝同じ題を続ける場合又で代用）

采菱辛苦廢犁鉏　菱を彩るに辛苦す犁鉏（鋤鍬）を廃て
血指流丹鬼質枯　血指（まめ）は丹を流し　鬼質枯る
無力買田聊種水　田を買うの力なく　聊か水に種えしに
近來湖面亦收租　近来　湖面も亦租を収むとは

承句の「丹」は朱色で、ここでは血。指の豆が破れて血が出た表現。鬼質とは幽霊の姿。質は性に対する語で「外容」「見かけ」の意。「枯る」は痩せさらばえた。



訪中記

伊治哲

さる五月の半ば、友人二人と私の三組の夫婦で、中国を訪れる機会を得た。中国といっても、華中沿海部の上海、蘇州、杭州の三都市である。広大な中国全体からみれば、わずかに一つの点にすぎない。しかもこの一点は、現代中国を代表する最も先進的で開放的な地域である。

急激な高度経済成長の頂点にあるこの一地域のみをもって中国全体を推論することは、〝木を見て森を見ざる〟のたぐいであろう。しかし、この一本の木の根っこは、いずれ森の中の多くの木の根っこに繋がっていくと思われる。

そんな勝手な仮説の上にたって、中国は今どのような状態におかれているのかを、この目で確かめてみたかった。

ひとつは、ここ十余年来混迷の度を深めてきたわが日本の政治、経済、社会に対して、中国のそれはどのように変化してきたのであろうか、両者の間に大きな違いがあるとすれば、その原動力は何であったのだろうか、ということである。

そしてもうひとつは、一昨年のアジアカップサッカーでの日中騒動、さらには、昨年北京、上海、杭州の主要都市で火を噴いた反日デモと破壊活動である。

これらの情景が未だ生々しく目に焼きついているだけに、その背景にいったいなにがあったのか、今の中国一般大衆の対日感情はどうなっているのだろうか、大いに興味をそそられるところであった。

中国の素顔の一端でも垣間見ることができれば願ってもない機会だと思ったのである。

実は、私は今から二十年前と十五年前の二度、中国を訪れている。二回目は研修旅行の帰途、香港から桂林に足を伸ばしただけの観光であったが、初回は金融機関が組成した友好訪中団の一員として、北京、上海、広州を

回り、中国側の要員と交歓したことがある。

その頃はまだ改革解放政策以前の段階であったが、中国全土が上昇指向に向かおうとする時期で、北京の中心では高層建築の力強い槌音が響いていた。会う要人は、ほとんどが若い青年幹部で、中でも女性の進出が目をひいた。

しかし、広い道路は洪水のような自転車の波が押し寄せるのに一驚し、また一方で表通りの高層ビルの一歩裏通りに隠れた不潔極まりない雑踏には正直顔をそむけた記憶がある。酒家とか飯店と称するホテルも、断続的な停電と断水は日常茶飯事で、給湯時でもバスタブに湯を満たすことはできなかった。細かいことをいえば、バスルームのタイルは、乱雑に貼り付けたというだけで、ところどころメジが剥がれて内部が露出していた。なかでも困惑したのは公衆トイレである。二回目に同行した妻は、二度と中国には行きたくないとこぼしていたほどである。生活習慣の違いとはいえ、この国には美的感覚がないのかと疑ったくらいであった。

あれから二十年の歳月を経て、中国は驚くばかりの変貌を遂げていた。

あらゆる業種に外資が参入したこともあり、ホテルをはじめ観光施設のほとんどは、内も外も欧米並みに清潔で細部にわたってきれいに整備されていた。

なかでも最初に目を見張ったのは、超高層のオフィスビル、マンション、ホテルの林立である。

例えば上海――。「外灘」と呼ばれる千八百年代からの旧租界地域には、「和平飯店」など二百年の歴史をもつ古色蒼然とした建物が昔日の威容をとどめている。それに対して、黄浦江を隔てた「浦東」地域には、何十を数える七、八十階建ての超高層ビルがひしめきあっている。十五年前までは田畑や荒地であったというから、それ以後の中国のめざましい発展ぶりを象徴しているといってよい。

東京といえども、高層ビル群の林立ということからいえば、その高さといい広さといい、上海には遠く及ばないだろう。もっとも日本のような地震国ではないことにもよる。ただ、そうだとしても鉄骨は用いず、数十本の細い鉄筋だけで何十階と階を積み上げていく工法にはいささか不安を感じざるをえない。例のアネハ元建築士も中国で仕事をしていたら、大成功を収めたのではないだろうかなどと余計なことを考えたりもした。

次に道路である。旧市内、新開発地域をとわず、広い道路網が碁盤の目のように整備され、その上に高速道路が縦横に張り巡らされている。しかも、新設された道路際や分離帯には花壇を配し、色とりどりの花が植えられて、常時多くの人たちが花の植え替えや路肩の清掃に働いている。

中国はすべての土地が国有である。今日道路の新設を決めれば明日にでも着工できる、とガイドが胸を張った。良いか悪いかは別にして、日本の国情との違いを痛感した。

限られた地域の表向きの美観を意識した政策的配慮があってのこととは思うが、美的感覚を疑ったかつての自らの不明を改めざるをえなかった。

また、二十年前の自転車の洪水は、おびただしい自動車の波に変わっていた。

それもフォルクスワーゲンなどの外車が大半で、日本車はたまに見かけるほどである。VWがいち早く中国に進出した結果らしい。

庶民の足は、二本の地下鉄を除いては圧倒的にバスである。乗用車の間を縫うように、バスの往き来が激しい。また、朝夕の通勤には電動自転車を利用する人が急増しているようだ。都市によって差はあるが、蘇州では50cc以下のバイクが禁止されたため、電動自転車が経済的だとの説明であった。

しかしこれらの変化の影に問題がないわけではない。眉をひそめたのは、歩行者の著しい交通ルールの無視である。交通信号はなきに等しく、横断歩道であろうとなかろうと、車の合間を縫って駆け抜けるのは常識らしい。それでも交通事故が頻発するほどではないというから、双方ともよほど熟練しているのであろう。しかしさすがに中国在住の外国人は、この地での車の運転を断念するというのはどうも本当のようである。

また、旧市街では、一歩裏通りに入るとそこには依然として昔ながらの庶民の生活臭がただよう家並みがひしめき合っている。アパートの軒先からは一斉に物干し竿が突き出て、洗濯ものがはためいている。街角の街路樹に渡した竿にも干し物が波打っている。新市街に比べてあまりの落差に驚くが、雑然とした生活の場が、なんとなく懐かしさを感じさせるから不思議である。

上海老街、豫園や杭州の霊隠寺など、観光客の集まるところには、空き缶を手にして恵みを乞う老婆が列をなし、偽ブランド品を売りつける男たちが客にまとわりついて離れない。

こうした光景を見るにつけ、この国の極端な貧富の格差と、華やかな表づらに対するあまりにもみじめな裏面の二重構造に大きな疑問を抱かざるをえなかった。もちろん日本でもホームレスのような恵まれない階層のあることは事実であるが、少なくとも大衆の日常生活の中に入り込んで混在しているというようなことはない。社会主義市場経済の歪みが、今後どのように是正されていくのであろうか、注目したいところである。

一方、中国の若者を見て感心したことがある。

二十年前のように男女一律にカーキ色の人民服一色という光景は姿を消し、替わってカラフルで個性的な服装にさま変わりしていた。女性の中には見ほれるほどの大胆なファッションを誇る姿も目についた。

しかし、日本で日常身近かに見る、破れジーンズにダブダブズボンやルーズソックス、果ては茶髪、長髪やどこの人種かとあきれるような奇異な風姿の若者の類いは全く見られなかった。個性的であってもスマートでシンプルな身づくろいに好感をもった。

もちろんケイタイに夢中の若者も皆無である。また、公私の場所もわきまえず、ところかまわず書きなぐられる意味不明のラク書きはどこにも見当らなかった。

二十年前もそうであったし、今もそのようであるが、中国の政治、経済、社会の中核になってリードしているのは、若者であり中堅層である。一定の枠の中にはめ込むという体制の締めつけがあるのかは知る由もないが、少なくとも、自ら先頭に立って社会をリードするという自覚が、若者の自己規律のマインドを育んでいるのではなかろうか。わが国の放恣極まりない多くの若者の覚醒を強く促したいものである。

社会主義をとりながら経済的には市場主義化を進める中国の急激な変革と発展のなかで、人心の統一と将来の目標を示す標語や看板がやたら多く目につくのは、至極当然のことなのかもしれない。

曰く、「公共」と「文明」である。

まず、国、省、市の「公共」がすべてに優先される。次いで〝文明語〟〝文明事〟〝文明人〟のように「文明」の字が踊る。ただ、一方で、「文化」という文字がどこにも見当らなかった。私が見落としたのであろうか。

蘇州で見た看板に次のようなものがあった。「四海一家・活力嘉興」「富民強市・文明健康」、さらに「浄化環境・緑化城市・美化家国」の如くである。また工場では「生産・能率・質量・第一」の大きな標語が掲げられていた。

ただし、〝白髪三千丈〟の国であるにしても、総じて〝第一、最大、最高、最速、最多、最盛〟などの文字が〝好きな〟国である。〝好き〟を通り越して、誇らしげに〝誇示〟しているようにさえ見える。例えば、昨年来中国の外貨準備高が日本を抜いて世界最大になったことを、なんども繰り返し吹聴するガイドの顔を改めて見つめ直したこともあった。これらの言動がさらに昂じて時に〝自信過剰〟〝尊大〟とまで映るのは、彼のためにあまり好ましいことではないと思うのだが。

余談だが、誇大表現でも次のような例は思わず笑いを誘う。石段際にこんな注意書きがあった。〝小心地滑〟……？「滑りやすいので要注意」ということらしい。さすが中国である。

余談は別として、好ましい場面に出くわしたこともあった。

ホテルでの朝食の折のことである。隣のテーブルで孫の誕生祝いを楽しむ中国人の家族があった。孫を中心に和気藹々、実に和やかな雰囲気に、私たちも見とれるほどであった。ケーキのロウソクを孫が吹き消した瞬間、私たちも思わず大きな拍手を送り、「オメデトウ」と日本語でお祝いを発した。父親が「謝々」となんども頭を下げていたが、そのうちにケーキのおすそ分けを私たちのテーブルに運んできた。思いがけない好意に恐縮して、今度はこちらから「謝々」を連発して互いに交歓しあった。

もう一度は、上海黄浦江ナイトクルーズでのこと。遊覧船のデッキの椅子席が満杯で、私たちは手すりに寄りかかり立ったまま夜の風景を眺めることになった。ほどなく椅子席の中年の中国婦人が、「ニーポン？」と話しかけて自分の席を空けてくれた。続いて隣の席もまたその隣の席も、私たちに譲ってくれると言う。私たちは、「謝々」と丁寧に礼を言って好意に甘えることにした。碇泊していた「上海→大阪」の大型客船を指差して、「大阪までは何日間くらいかかるのか？」と尋ねられたが、中国語で答える術をもたずマゴマゴしているところを、やっとガイドの助けを借りてホッとした。お互いにこぼれるような笑顔を交わしたことが大変嬉しかった。

日本に留学したことのある現地ガイドは、顔を合わせた最初の挨拶で、「わたしたち一般の中国人は、日中サッカー戦での中国人サポーターのいやがらせも、反日デモの暴動も全く知らなかった。またそのような報道もほとんどなかった」と釈明した。「いやまてよ。他ではない、この上海、杭州の地でデモ騒動があったではないか」と疑念をもったが、敢えて追求は控えた。よほど日本人客の関心に気を使っているのだろうと思ったからである。

また、滞在中できるだけ現地テレビを注意して見るようにしたが、日中関係に関しては、「美国高官促小泉停拝鬼」の字幕を見たくらいで、さしたる報道はなかったように思う。

中国の報道管制のゆえか、あるいは日本の過剰報道のゆえか。いずれにしても、過去の騒動は中国上層部と十三億人民の中のひとにぎりの活動家による仕業であったことは確かなようである。とはいえ、国家とか政治、外交の仮面をかぶると、どうしてこうも、こわもての鬼面に豹変するのであろうか。本音と建前を使い分ける〝中国人の本質〟に由来するのかもしれない。

移動の途中、車窓に流れる浙江省の広大な平野に点在する農家は、軒並み一戸建て二階の堂々とした建物であ

ったし、いかにも豊かで平和な生活を満喫しているかに見えた。もっともこの地域では、農業のかたわら日本の百円ショップ向け商品を作る中小メーカーに勤務する兼業農家が多く、中国の中でも最も富裕層の多い地域であるといわれるそうである。

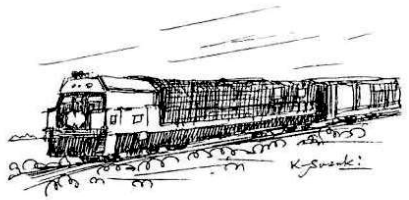
振り返ると、大多数の中国庶民は平穏であり、むしろ小市民的でさえあった。欲目かもしれないが極めて好意的であり友好的であることに、率直にいって好感をもった。

しかし一方で、あの雑踏のなかで地面から湧き出るような市民の熱気とエネルギーには、正直なところ脅威を感じざるをえなかった。過去十余年続いた日本社会の停滞と混迷ぶりにとって、中国はまさによき〝反面の鏡〟なのではあるまいか。

広大な中国のほんの一点を駆け足で巡った〝小さな旅〟ではあったが、最先端といわれる地域の最近の風物の一端に触れることができた。真実は未だ闇の中とはいえ、頭のなかで思い描くイメージと現実の世界との大きな隔たりを知ることができたのは、得がたい収獲であった。

〝訪中記〟というにはやや誇大表示の憾みなしとしないが、そこは中国の慣いに免じてお許し願うことにしよう。

（2006．6．27．記）



（司馬雑感　九）

司馬遼太郎の紀行文

山田嘉久

司馬遼太郎の後半生のライフワークというべき「街道をゆく」シリーズはいずれも優れた紀行文だが、そのなかでも特に昭和五八年に書かれた「南蛮のみち」（一）は紀行文の傑作といわれている。

現にこの作品は昭和五九年に第一回新潮文学大賞（学芸部門）を受賞している。

「司馬旅行記の大いなる開花」（選者高坂正堯の評）、「新しい紀行の世界を拓いた」（同じく選者柳田邦男の評）として司馬を除く（司馬も選者の一人だった）選者全員が一致した意見だった。

自作を推薦しなかった司馬だが、内心は自信作だったらしく後年に自作の紀行文の代表作の一つに挙げている。

因みに「南蛮のみち」のほか彼自身が挙げた代表作は、「街道をゆく」シリーズ以外では「人間の集団について」（昭和四八年）、「西安から北京へ」（昭和五十年）、「アメリカ素描」（昭和六一年）の四作品である。

一　「人間の集団について」（昭和四八年）

副題に「ベトナムから考える」と付いているようにベトナム戦争直後の「米軍がベトナムから撤退した翌日にハノイを訪れた」紀行文である。

少数民族の好きだった司馬は特に「坂の上の雲」を書き終えて以来、日本海に向かうバルチック艦隊が最後に寄港したベトナムのカムラン湾はどうしても見ておきたかった場所だったようだ。当時の日英同盟によって、ほとんどの港から拒否されたロシア随一の艦隊がようやく友好国フランスの植民地にたどり着いて、水炭食糧を補給できた港だった。

その日露戦争から七〇年近く経って勃発したベトナム戦争時には、この湾はアメリカ軍の大補給基地となっていたが、そのアメリカ軍も昭和四七年八月には南ベト

ナムから撤退する。まことにカムラン湾こそ近代ベトナムの一象徴なのである。

そしてベトナム戦争とはなんだったのか。強力な米軍を追いやった誇り高きベトナム人とはいかなる民族か。さらに国家とはなにかを考えている。

司馬はまずベトナム戦争を「戦争という定義からまったくはずれた別の」世にも奇妙な戦争だと捉えている。北のハノイにも南のサイゴンにも自前で兵器を作る工場を持っていないために、敵味方とも他国から無料でしかも際限なく送られてくる兵器で、負けることさえ出来ない「機械的運動をしている」戦争だというのである。

ベトナム戦争は二十世紀の米ソ二大国がお互いに国家イデオロギーを振りかざして対決した民族独立運動に違いないが、「日本でいえばせいぜい戦国時代か江戸初期の社会」でしかなかったベトナムにドミノ理論なる不可思議な理屈を立てて資本主義を押し付けたアメリカの横暴はどうだろうと。

ホ、チ、ミンの北ベトナムや南ベトナムの民族解放戦線が共産主義を建国のイデオロギーにしたのは後進国としてはやむをえない選択だったのではないかと司馬は考えている。

しかし一方で司馬は

「大国はたしかによくない。しかしそれ以上によくないのは、こういう環境に自分を追い込んでしまったベトナム人自身であるということを世界中の人類が、人類の名において鞭を打たねばどう仕様もない」とも記している。

米軍撤退後もベトナム人同士で戦争を止めようとしない実態はなんだろう。

「外から際限なく武器をくれる旦那衆を引き入れてしまった」ベトナム人こそ責任があり、また不幸であるというのである。

そうはいうものの、司馬は例により「葦のようにたおやかな」ベトナム人にたいして限りない愛情を示すことを忘れない。日本人に極めて近い性格、機械や道具にたちどころに習得する器用さ、笑顔の絶えない静かでやさしい風情。(日本の歌謡曲を理解できるのは日本人のほかは韓国人とベトナム人だけ。そこに共通するのは、いずれも情緒的文化の基礎に「稲作」があるとの司馬の主張は多少、我田引水的な匂いがあるが。)

そんなベトナムに急に「超重量級の国家」が出現して無理やり「国民」にされてしまったベトナム人は果たして幸せだろうか。いままで決して豊かとはいえないまでも生活に自活してきたベトナム人は突如として「国家」という重い荷物を背負わされただけではないかと司馬は見るのである。

司馬は常々人類にとって理想的な国家とは「軽い国家」であるといい続けてきた。「重い国家」は決して国民を幸せにしないというのが彼の持論のようである。それはこのベトナム紀行からも窺い知ることが出来る。

ベトナム戦争華やかな頃、一方では日本国内では学生運動がピークに達していた。このことを司馬は別のエッセイで次のように論じているのは示唆的ではある。

「東京大学の構内で数多くの小団体が入り乱れてなぐりあっている。国家がそれをながめている。日本史上、これほど軽い国家をもったのはいまがはじめてだし、傍観している国家の物うげな、とまどったような表情は、歴史にのこりうるほどのすばらしさである」(司馬遼太郎の考えたこと⑭「軽い国家」)

一方、この本ではベトナムについて「その国が、とめどもない内戦のなかにある。(中略)ベトナムでの問題は人間の集団を考える上で、きりのない怖ろしさをもっているようである。」

また「ベトナムは懐かしい。一度そこに滞在した人はだれもがいう。それは丁度、野末で自分の知らなかった親類の家を見つけたような気持ちに似ている」

この本の最後の文章である。

二「長安から北京へ」(昭和五十年)

昭和五十年、司馬は日本作家代表団(団長井上靖)の一員として始めて中国を訪ねた。

しかしあとで旅行記を書こうなどといった気持ちもなかったようだ。帰国後いつまでも疲れがとれず、中国の夢ばかりみていたという。そこで大分経ってから「中央公論」に連載されたのが「長安から北京へ」である。驚くことに雑誌社から頼まれたわけではなく、大作家司馬の方から連載を頼んだというのである。

このあと司馬は「街道をゆく」で長江下流域の「江南のみち」(昭和五六年)、翌五七年には中国奥地の「蜀と雲南のみち」、さらに南の「閩のみち」(昭和五八年)と俄に中国づいた。

司馬が中国を始めて訪ねた頃は、まだ毛沢東が存命で紅衛兵がうろちょろしていた時代だが、それからの中国は大きく変わっている。例えば司馬が西安で泊まったホテルはロシア製の暗いホテルだった。当時の中国の技術では自前のホテルが作れない時代だったのである。それから二五年、私が泊まった西安のホテルは5つ星の超豪華ホテル。これだけみても中国の急速な進展を見ることが出来る。

なお私が旅行した平成十一年は中国建国五十年ということで西安、北京は建築ラッシュ。東京都庁なみの超高層ビルが林立していたのには驚かせられたが、一方で高層ビルの足元の道路は凸凹で水溜りが目立ち、社会資本の整備はいまひとつ。この極端なアンバランスに首を

傾げざるをえなかった。

「長安から北京へ」では北京空港の印象を記している。「機能美を感じさせないが一質朴で頑丈そうで、藍色木綿の人民服によく映っている」と。また司馬は空港の屋上に掲げられた「北京」という大きな漢字に注目している。

よく見ると毛沢東の書体である。毛氏の書風は中国伝統のなかでは極めて特殊だそうで「日本でいえば日蓮の書いた南無妙法蓮華経のお題目の書体とその特異性において共通している」と書かれているのは可笑しかった。

北京の郊外に明の十三陵がある。文字通り明代の十三皇帝の陵墓だが、なかでも万暦帝の定陵は新中国が革命後二年の歳月をかけて発掘した最大のもの。（私が訪れたときには「発掘四十年」の横断幕が掲げられていた。）

司馬はその途方もないスケールと豪華さをみて、中国歴代王朝のすさまじい収奪とその下で苦しむ人民の姿を思っている。日本では到底考えられない支配者と農民の関係だというのである。「もし（日本で）それをしようとする将軍がでたとすれば、徳川幕府はその時期において、簡単に倒されていたに相違ない」と。

中国の長い歴史は四捨五入すれば「飢餓と流民の歴史」だったと司馬は規定する。中国では常に大量の流民が発生する。その流民に食を与えるものが「英雄」であり、その大なるものが新しい王朝を開いてきたというのが司馬独特の中国感である。この考えは彼の代表的小説「項羽と劉邦」（原題「漢の風　楚の雨」昭和五五年刊）でも貫かれているが、現在の毛政権が最初に全人民を食わせることができた国家であるというのである。

それにひきかえ日本の「将軍という為政者は、鎌倉、室町、江戸を通じ、大名対策をおこなう存在ではあったが、人民をなんとか幸福にさせたいなどという思想は本来、絶無にちかいものであった」

西安はむかし長安と呼ばれ唐代にはシルクロードを通じてインド、東ローマなどと通商関係を持ち、青い目赤い髪の行き交う世界の中心都市であったと司馬は書いている。その西安では郊外にある唐の玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスで知られる景勝地華清池を訪れ、司馬はここで入浴までしている。昭和十一年、蒋介石が張学良によって監禁された西安事件の現場も訪ねている。

司馬によるとこのとき蒋は慌てて寝巻きのまま窓から飛び降りたので腰の骨を折り、また入れ歯も忘れたという。

ともかくこの事件により所謂「国共合作」がなり、蒋は共産党と協力して日本軍に抵抗、翌年シナ事変が勃発することになる。

我々もこれらの史跡を回った後、有名な秦の始皇帝の兵馬俑坑を見学したが、司馬がまったく触れていないのは、当時、兵馬俑坑はまだ発見されていないからか。

西安のシンボルである大雁塔は慈恩院の境内にあるが、この寺は七世紀に唐の高宗が建立、インドから高僧玄奘（三蔵法師）が持ち帰った佛典が収蔵されている。司馬はこの塔に登りながら一千年前に此処に来た空海（弘法大師）をしきりに思ったと書いている。この頃、彼は中央公論に「空海の風景」を連載中であった。（なお同書は翌年、日本芸術院恩賜賞を受賞している。）

後年、「人類には酒を飲める人と飲めない人の二種類がある。そのため飲めない人に無理やり飲ましてはならない。この場合、「酒」を「宗教」または「思想」と置き換えることもできる」と考える（「司馬遼太郎が考えたこと」）司馬だが、この本ではあまり露骨には批判はしていない。文化大革命末期の異常な管理下の中国に多少遠慮したのか。それから二十年後に書いた「台湾紀行」では「毛沢東の権力が私でなければ、プロレタリア文化大革命のような私的ヒステリーを展開できるわけはない」と極論する司馬ではあるが。

ただ中国全土に毛思想が行き渡っていることについて「なぜこのように思想的であることが必要であるかと呆れるほどのものである」と素直に疑問を投げかけるにとどめている。

そして帰国後、ある碩学の学者にこのことを問うと、その人の答えがふるっていたとどこかに書いてあった。「なにしろ二千年も飽かずに論語を読んできた国民ですからね」

私も西安での夕食時の雑談の際、西安外国語大学（日本語学科）出の若い女性ガイドに「貴女も毛語録を読んでいますか」と問うてみたが「ハイ」との答えが小声でどことなく自信なさそうだった。

不思議なことに毛沢東のバカでかい写真が飾れている天安門広場については司馬は全く触れていない。司馬が訪れた翌年（一九七六年）周恩来、朱徳そして毛沢東が相次いで世を去り、四人組は追放される。このあと一九八九年の天安門事件まで建国路線を巡る混乱が続くのである。

三「南蛮のみち」（昭和五十八年）

「街道をゆく」シリーズのなかの傑作「南蛮のみち」については既に書いたことがあるので（「司馬雑感七」）、ここではその補足として同じ南蛮国であるポルトガルとスペインの関係を考えて見たい。

ポルトガルは隣国スペインに比べて国土も人口も五分の一程度の小国である。またその民族性もスペイン人

が「どの顔も張りがあって、頑質なほど自信にみちている」のに対してポルトガル人は「内気で、シャイなところ」があり「好ましい含羞」があると司馬も書いている。

そのせいかポルトガル独特の哀愁を帯びた民謡「ファド」の店がいたるところにある。

そんな小国のポルトガルが大航海時代のトップバッターとしてスペインに先駆けて海外に雄飛したのはなぜだろうか。

司馬はレコンキスタ（国土回復運動）の完了に両国では二五〇年の差があることに注目している。スペインでは一五世紀末（グラナダ陥落）までかかったが、ポルトガルでは既に一三世紀にはそれまで四百年にわたってイベリア半島を支配していたイスラム勢力を追っ払ってキリスト教統一国家が出現したためである。

もう一つの理由は一三八五年、ジョアンが優勢なカステリア軍に快勝してポルトガルの独立を守るとともにアビス王朝を開いたことを挙げている。そのジョアン一世の王子が航海王子と呼称されたエンリケであった。司馬はこの終生独身を貫き、若くして華やかな王室を離れ、大西洋を望むサグレス岬に隠棲した修道院のような生涯を送ったエンリケを高く評価している。

「（ポルトガルの）大膨張をただ一人に象徴させるとすれば、エンリケ以外にない。彼の死後、艦隊をひきいてインド洋に出ていったバスコ、ダ、ガマはエンリケの結果にすぎない」と。

エンリケの養成した船団はインドに進出、さらにアジアに展開したが、後発のスペインは大西洋を西に進んだため、当面、両国の利害が衝突することはなかった。

両国はともに新領土を得ることを「征服」（コンキスタ）とよんだが、両国の衝突を避けるために結んだのが有名な「トルデリシャス条約」である。

「地球を一個のリンゴでもあるかのように（なんと壮大で無法なことか）二つに割って、その一つづつを「領有」することにした」この条約は、ローマ法王によって承認されたので、その境界線は「神聖境界（デマルカシオン）と呼ばれた。

それはベルデ岬諸島の西（西緯四六度三七分）の大西洋上に、北極から南極まで引かれた架空の境界線だが、一方ではなぜか「東西の終わり」に定めがなかった。

このことが東西の境界にあたる日本において両国が激しく衝突することになる。すなわちイエズス会（ポルトガル）対フランシスコ会（スペイン）の確執である。のちに幕府がキリスト教を禁じ鎖国に踏み切ったのは、この両会派の確執が原因の一つとされている。

神の教えを地球上にあまねく広めようとした「神聖境界」はその最終目的地であるジパングで皮肉な結果をまねいてしまったことになる。

大航海時代の終焉である。

四「アメリカ素描」（昭和六一年）

司馬は還暦を迎えてはじめて「相当の決意を持って」アメリカを訪問した。司馬はかねがね「わたしにとって分かる気がするのは、古い時期に中国文明の影響を受けた国々」だけであり「わけのわからない国（アメリカ）にやにくもにでかけるべきではない」と云っていた。

しかし次第に日本を理解するには幾筋からの照明光線（比較分析）が必要でありその一つが存外、「欧米」（特に米）ではないかと考えるようになったようである。

そして前後四〇日間をかけて西海岸、次に東海岸を旅して新しい「アメリカ文明」を探ったのがこの本である。

皮肉なことに「長安から北京へ」では帰国後、疲れだけが残って旅行記などを書く気にもならなかったことは前述の通りだが、今回のアメリカ旅行では「なにやらアメリカへは何十年も行ったような錯覚」で「快い疲れだけが今も残っている」と記している。

（文明と文化）

司馬自身が代表的な紀行文として挙げた以上の四作品はいずれも「文明と文化」について考えたと記しているが、なかでもこの「アメリカ素描」はこのことを前面に出した紀行文学―いや文明評論となっている。

文明とはなにか、文化とはなにかについて

司馬は「ここで定義を設けておきたい。文明はだれにも参加できる普遍的なもの、合理的なもの、機能的なものをさすのに対して、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもの」と規定している。

その例として司馬がよく引き合いにだすのが、日本女性が障子を開ける作法として両膝を床に着いて両手でもって開けるのは、日本古来の「文化」（現代では大分廃れてきているが）であり、効率万能のアメリカ人には全く理解できないであろう。アメリカ人なら時には足で蹴ってドアーを開けるのが一番効率的でさえあると考える。

これに反して例えば「信号の文明」に参加しようとしたら、青はＧＯ、赤はＳＴＯＰさえ知っていれば誰でも「文明」に浴することが出来る。このことは世界中のどんな人種でも容易に参加できる普遍的なものである。

つまりこの紀行文は「日本という世界でも珍しい重文化国」の一作家による「現在世界で最も普遍性の高いアメリカ文明」の見聞記といっていいかもしれない。

したがって示唆に富んだ文明評論が随所にみられる。

1　（ロスの寿司屋で）　「日本のわざと偏屈ばった寿司屋は日本文化だろうが、ロスのきびきびした接客

する寿司屋は立派なアメリカ文明のなかの職人だろう。」

2　（ゲイの街で）　「ゲイやカルトに集ういまのアメリカ人たちは、文明に飽きて、共通の文化をもつ少数民族を構成したがっているのではないか」

3　（フィラデルフィア市にて）　「アメリカにきて驚いたことのひとつが、機能を失った都市を、平然と廃品同然にしていることだった。」

4　（メイフラワー号記念館を訪ねて）　建国以来、法と議論の国であったアメリカに関連して「日本は（察する）ことに長じていたために沈黙し、アメリカ人はこの世に（察する）などは存在せぬはず。（中略）そういう両国が一八五三年（嘉永六）以来、摩擦を続けてきたのである」

5　（英雄を待望するアメリカ社会に対して）　「私たち日本人はそれら（英雄）を出さない文化に属している。わたしはそれはそれで、日本の幸福の一つだと思っている。」

また「一文明は多民族地帯におこりやすい」とも書いている。

その前提として文明が興る大地が多様な諸民族を収容して食わせるだけの農業的豊かさを持っている必要があるが、その坩堝の中で多様な文化群がすれあい、圭角を摩滅させついには誰でも参加できる普遍性（文明）が出来上がる。その典型がアメリカだというのである。

さらにはnationとstatesの違いにも及ぶが、これは司馬独自の考え方であろう。

中国のように「文化」の累積で出来上がった国（nation）に対してアメリカは「文明」という人工で出来上がった国（states）だと規定するのである。いわば「自然国家」と「人工国家」の違いといっていい。

では日本はどうか。日本はnationとしてスタートしたが明治維新後statesを指向した。しかし「明治以降のstatesと呼ぶべき、法による国家ができたときにも、日本はnationを引きずっていた。」（随筆「東と西」）

そのため、それが戦前の日本にはびこり「統帥権という形で国家そのものを扼殺したこともある」「いつ日本に自然国家がよみがえるか、すくなくともアジアは用心ぶかくみつめています」（随筆「春灯雑記」）

そして大国の中国、アメリカと日本の関わりを次のように総括している。

「日本はかって中国文明から受益した。（注、詩文や仏教そして朱子学や禅など）しかしその多くは書物を通じての接触で、中国そのものになったり、追従したことは一度もない。

（中略）アメリカに対しても、一見追従にみえるかもしれないが、この態度を文明への固有の尊敬心として解釈してもらえないか」

そしてともすれば文明人というものは「文明」という目の粗い大きな物差しをいつも持っていて、他民族の文化を計ろうとするという。

「文明の尺度で文化を計ろうとするのは、体重計で身長を計ろうとするに似ている」（「韃靼疾風録」あとがき）とも書いている。

またアメリカについては次のようにいうことも忘れてはいない。

「アメリカには抜きがたい悪弊がある。他の何一つアメリカ的条件を持たない国々に（アメリカのようになれ）と本気で勧めてまわることである。」（「ニューヨーク散歩」）

十数年後のイラク戦争を予見したような警句である。

著名なアメリカ学者の亀井俊介東大教授が本書を「日本人によるアメリカ論の古典」と絶賛したのも頷ける力作となっている。

司馬の代表的紀行文としては以上の四作品のほか、その後上梓した「ロシアについて―北方の原形」（昭和六一年読売文学賞受賞）も厳密な紀行文とは言いがたいが、これに加えることもできよう。

また晩年に二度目のモンゴルへの旅（一回目は昭和四九年「街道をゆく」モンゴル紀行）を綴った「草原の記」（平成三年）も代表的な紀行文と私は考える。

（注）「文明と文化」について、人類文化学者梅棹忠夫は前者を「制度、装置、機構、組織などのシステム」、後者を「それら文明を支える人間の価値観」と定義している。

編集後記

大和さんから『ひとこと抄』を送っていただきました。お陰様で同氏が戦前『文芸首都』に入選されたのを皮切りに『浮標』の同人に参加され、『まんじ』の源流となる『作家群』を昭和二七年に創設された流れと、その水準の高さが良く判りました。一方文中に二・二六事件の関連記事がいくつかあり大和さん自身もご著書『大正っ子青春篇』の冒頭でこの事件を取り上げておられます。そして当一〇二号に寄せられた「挿絵界の春秋」の中で、長塚節の『土』についてふれておられますが、貧農が娘を女郎に百五十円で売却する話が出てくるこの小説は小生も愛読しており、当時の農民の生活は悲惨で、それが二・二六事件の発生要因の一つであるとも思っています。

何と言っても平和で安定した生活は最も大切なものですが、それを強く希求する曽根さんの「わが愛誦歌・戦後の歌壇逍遥」と石黒さんの「私的短歌考」の連載が始まりました。今後も大いに楽しみです。

又新たに参加していただいた亜木さんからは「技」という散文風の短篇小説をお寄せいただきました。選び抜かれた文章と、あっと驚く顛末に同氏の才能を感じます。引き続きのご寄稿を期待します。

巻末には鯨さんの「漢詩・潮騒録」、伊治さんの「訪中記」、山田さんの「司馬雑感」と、最近の中国に関係した作品を置きました。

編集子も今夏十七年振りに大連を訪問し、外資の導入で大きく発展しつつある現地の状況と共に、二百三高地・水師営での反日キャンペーンを見てまいりました。現在『坂の上の雲』を書いた司馬遼がこれを見たらどういう感想を述べるだろうかと考えています。

（T・N）

まんじ 第102号

平成18年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
世の人すべて皆わが師

田寺怜葦　画